死神少女

初花水色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神少女

【Ｎコード】
Ｎ９７９９Ｎ

【作者名】
初花水色

【あらすじ】
唇に触れた相手に死をもたらす“死神のキス”により人をキスで殺す事が出来る少女。死神少女と呼ばれ、人々に恐れられ蔑まれ人目をはばかりながら生きてきた。そんな少女の前に“死神のキス”が通じない男が現われる。たった一人でもそんな人間はいなかったというのに、もう一人現われた。ずっと放っておかれた少女を中心に巻き起こる愛と友情の物語。暗黒街道まっしぐら少女の、異世界シリアス逆ハー恋愛ダークファンタジー。

～登場人物紹介～（前書き）

最新話までのネタバレを含みます。
本編を未読の方は、次の第一話からどうぞ。
（１１／０５／０９更新）

～登場人物紹介～

★シュガーローゼ（１４）
死神と呼ばれる少女。
唇で触れた相手を死にいたらしめる事が出来る“死神のキス”の持ち主。
当然好かれるはずのない“死神のキス”を持つために流浪の旅をする身。
アクアマリンの瞳に、ピンクゴールドのツインテール。小柄で、不機嫌そうな顔をしている。

★アストリュク（２９）
シュガーローゼが物語の冒頭で出会った暗黒男。
黒髪、闇色の瞳。腹が真っ黒そうな顔をしているが顔はいいらしい。
シュガーローゼが一番最初に出会った、“死神のキス”が通用しない相手。

★ケイス・ルブラン（２２）
生真面目なシェーン王国騎士団員の青年。一応貴族の端くれ、伯爵の息子。
ゴールデンオリーブの髪に、エメラルドの瞳。
シュガーローゼが二番目に出会った、“死神のキス”が通用しない相手。

★カルツ・ヴァルディー（２６）
無表情な旅人の青年。シュガーローゼに旅の同行を求める。
マンダリンガーネットの瞳に、藍色の短い髪。
シュガーローゼが三番目に出会った、“死神のキス”が通用しな

い相手。

★レフ・シーヴァ（１５）
　シュガーローゼを自分の目的のために利用しようとする少年。オスティオ王国のチェルヴォの町の不良少年グループのリーダーのような存在。
　顔を半分近く覆う焦げ茶色の髪、琥珀の瞳。

～シェーン王国～

★ハウスト・レーネヴァル（２２）
　ケイスの友人、シェーン王国騎士団員。

★イレーヌ・フォン・ヴェーネン（１８）
　ケイスの婚約者。公爵令嬢。

★セイディオ・ロート（２３）
　ケイスの友人、シェーン城下町警備隊員。

★ベネディクト・カール・ルブラン（５７）
　ケイスの父親。伯爵。

★キース・ベンダー（３８）
　王国騎士団の団長。

★ヴィードル・フォーフ・アイネム（３１）
　城下町警備隊の隊長。アストリュクの友人。

～オスティオ王国～

★フランベ
カイネ村の人が良いおばさま。シュガーローゼを看護。

★マルセル
チェルヴォの町にいるケイスの同僚。リーダー格。

★カルロ
チェルヴォの町にいるケイスの同僚。一番若い、妙に表情を消した青年。

★ロドリゴ
チェルヴォの町にいるケイスの同僚。ごつい。

★サムソン
チェルヴォの町にいるケイスの同僚。ケイスを即拒否。

★アル
チェルヴォの町の不良少年。レフの友人。
友人は他に、マッテオとベンとヨブとキオスクがいる。

～ケイス過去編・シェーン王国～

☆ルネ
ゾンネの町のケイスの妹。

☆エルザ
　ルブラン邸にてケイスの世話係になるが、後に結婚退職する若い侍女。

☆フランツ・シルト
　ルブラン邸のナンバー2である老執事。

☆リイナ
　ケイスが城下町で出会った黒髪の少女。

※話が進むにつれ随時更新していきます。

～登場人物紹介～（後書き）

ブログに世界地図をアップしました。よろしければどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｈａｔｓｕｈａｎａ．ｈｙａｋｕｎｉｎ－ｉｓｓｈｕ．ｎｅｔ／Ｅｎｔｒｙ／１６／

1　死神少女（前書き）

シリアスなダークファンタジーです。
この話は、暗い話ではありますが、少しでも楽しんでいただければ
という趣味の世界をご理解いただければ幸いです。

第一部の、はじまり。

1　死神少女

化け物
ばけもの
バケモノ

どうして
どうして　どうして
どうしてわたしばっかり
どうして

†　†　†

その夜、空は濃い藍色に塗りたくられていた。雲の多い夜で、月もなく星もほとんど見えなかった。

シェーン王国の東。規模の大きい街には暗い通り（ストリート）があるものだ。

夜には文字通りほとんど光のささない路地裏。

ほとんど薄暗い中から姿を現わすのは、闇の中を生きてきたもの

ばかり。
女は身を売り男は薬を売る。
薄汚いと身分の高いものは寄りつかない場所だ。
ところどころで客引きの水商売の女や怪しげな占い師がストリートをふらつく者の手を引く。
「……んんっ！！」
接吻に無理強いや強姦など物珍しくもない風景、しかしこの場所において見慣れた行為だとしても彼女にとっては全く有り得ない光景が目前に広がっていた。
壁を背に追いつめられて少女は唇を塞がれた。もちろん、相手の唇で。近すぎて相手の顔がよく見えないくらいだが、男の底冷えするような眼差しだけは覚えている。
どうしてこうなってしまったかは今は問題ではない。何故なら少女と唇を重ね合わせて相手が生きているという光景は未だかつて見た事がなかったからだ。有り得ないと少女は思った。
「んむっ？！」
少女は口の中に流れ込む異物に奇声を上げた。それが舌だったとその時の少女には分からない。
人を見下すような瞳を持つ男は少女に欲情していたようには全く見えないのに、あろうことか男の舌は少女の口内に侵入した。
常に男女問わず自分と唇を重ねた者は、こんな風にする事は出来ない。出来るはずがない。
それなのに、何故。
自分の舌に絡まる舌が気持ちが悪いと少女ははっきり思った。息が出来ずに苦しい。何もかも吸い尽くすように深いキスに気が遠くなりそうだ。
「……っ！」
舌を噛みきってやろうとして、やっと相手は少女から身体を離した。
男の口から血が一筋流れている。噛みきる事は出来なかったもの

のざまあみろと少女は鋭く勝利の笑みでもって睨み付けた。
かなり背が高いその男は、出会った時と変わらず人を侮蔑するような笑みでそれを受けた。芯から冷えきったような鋭利な闇色の瞳。その中に映る少女の事を人とも思っていないように見下す。
顎のあたりを手の甲でぬぐうと少女は口を開こうとした。
「大したことないな――」
冷え冷えとした低い声に遮られる。臆病な者が聞けばそれだけで震え上がってしまいそうな声音。
少女は微塵も恐怖を覚えなかったが、その人を嘲笑するような瞳が気に食わなかった。
「――“死神のキス”も。必ず死ぬんじゃなかったのか？」
滑稽なものを見る目で、失笑をもらした。
少女は、目をみはった。
そうだ。
何故、この男は生きている。自分とキスをして生きていられるはずがない。
少女は真っ白になった頭でそろそろと男を見上げた。
前髪が少し長い黒い髪に人を見下す闇色の瞳。整った顔立ちかもしれないが見るものをも冷やすような凍った眼差しが近寄り難い印象を与える。とかくその口角を上げるのみの笑みは嘲笑や嫌味が飛び出しそうに歪んで見える。
性格が悪いだろうと少女にははっきり言える男だが、普通の人間に見えた。身なりはよく衣服は黒い騎士団服だったから騎士か何かなのだろうが、何も一般人と変わらないようにしか見えない。
「あんた……一体……」
信じられなかった。
自分とキスをして死なない人間がいる、なんて。
今までの経験から言ってはっきりとそんな事は百パーセント有り得なかった。そう彼女は断言出来る。
こんな事は、今までなかった。

――わたしのキスは、死神のキス、なのに
ぱさぱさと顔の両脇を髪がくすぐる。少女のピンクゴールドの髪色が視界にはためいてやっと風が吹いてきたのだと分かる。
「どうして……死なない……？」
眼球が溢れて外に飛び出すんじゃないかと思うほどに少女は目を見開いた。まだ、信じる事が出来ない。
死神と呼ばれ、人を何人も死に追いやってきた少女にはもう驚く事も恐れるものも何もなかったはずなのに。
死はよく慣れた現象だったのに、この男には一体何故訪れない。
少女の唇から“死神のキス”を受けた者は必ず死ぬ。必ず、だ。
少女は自分が死神だと思ってはいないがもう人間ではない事ぐらい分かっている。神でもないのに人に死を運ぶもの。人であるはずがない。
ただの殺人鬼とは違う。殺意がなくとも力がなくとも相手をキス一つで殺す事が出来るのだ。
「お前こそ、本当に死神娘か？」
“死神娘”とは、ここの一帯での少女の渾名なのだろう。ただ死神と呼ばれてる事もあるが死神少女や死の少女と呼ばれる事もある。こんなにあちこちに名前を広めるつもりは本人にはなかった。
少なくとも訪れたばかりの地にまで知られていたなんて少女にとって面倒以外の何でもない。
「残念だけど、わたしがその死神娘、よ。信じられないけど、貴方は神のご加護でも一身に受けているっていうの？」
娘というからにはまだ年若いだろうと、その男は見当をつけていたが、むしろ幼い。まだ十代半ばという年頃。上等な布を使っているのに薄汚れた衣服。ピンクゴールドのツインテールは遠くのほのかな明かりを跳ね返している。
睨み上げる瞳はアクアマリン。恨みや憎しみを凝縮したような負のこもった暗い世捨て人のような眼差しであるのに、つり上がった眉毛はどこかエネルギーに満ちている。

「にわかには信じられんが……本人が言うならそうなのだろう」
少女と初対面の男にしてみればなるほどそうだろう。キスで相手を殺すという少女と唇を合わせるどころか舌までつっこんだのに死ぬ事はなかったのだ。
しかしこの他人を信用していない印象を与えるような男が、あっさりと信じるというので少女は小さく驚いた。しかし男は前言を撤回した。
「と、言いたいところだが、私は自分の目で見たものしか信じない」
いつの間に拾い上げたのかその手に灰色に汚れた野良犬を携えていた。何が何なのだと、未だに絶対に死を運ぶ“死神のキス”が通用しない男の存在に頭を悩ませていた少女は話についていけない。
「動物でも効くんだろう？“死神のキス”を見せてみろ」
底意地の悪そうな残酷な笑みは確かにこの状況を楽しんでいた。少女にしてみれば、死神のキスが通じない相手だけでも理解不能なのに、この男は一体何のつもりだと眉を寄せる。
実験台だとばかりに野良犬を押しつける男により、痩せ細った犬はかすれそうな吐息をもらしている。目と鼻の先にその息も絶え絶えな生き物の呼吸を浴びて、少女は顔をしかめた。
動物は好きではない。動物にキスを落とすのも。殺すのがかわいそうなどという殊勝な考えは持ち合わせていないが、人間の次に動物は嫌いであった。
殺すのが忍びないなどと思わない。むしろこの野良犬はストリートと同じように汚れきって飢えにあえいで死にかけている。いっそ眠らせてやった方が良いのかもしれない。しかし少女はまたそんな間違った優しさも念頭に抱かない。
嫌なものは嫌なのだ。まして他人に試されるように自分の能力を見せるのも。
「いやだよ」
うなるように低く、まるでチンピラのようにドスをきかせて少女は犬の鼻面を叩き飛ばした。

「それにわたしは誰にも従うつもりはない」
命令をされる。少女が最も嫌うもののうちの一つだ。従うくらいなら殺してくれる。この“死神のキス”で。
――この男には効かないが。
もう一度試すつもりはなかった。二度目なら死ぬ、という可能性も考えられないわけではないがもし彼がそれでもなお生き延びてしまったらなんて、考えたくもない。ましてあんな深いキスは二度としたくはない。こんな男と。
キスなんて少女にとって最早挨拶の一つのようなものだった。それに伴う誰かの死も。
“死神のキス”で奪えないのは、自分の命だけ。
何故キス一つで相手を殺す事が出来るのか、仕組みは知らない。しかし知らずとも老若男女誰も彼も動物も植物でさえも、生あるものは皆“死神のキス”により等しく魂を奪われてしまう。必ず。
それだけは分かっていたから、少女は尚更この男の存在が理解出来ない。
睨みつけても変わらぬ冷えきった眼差し。
「ふん、まあいい」
ぐいと腕を強く掴まれ引かれるままに足を動かしそうになり、少女は抗議の声を上げる。
「ちょっと！　離してよ！」
嫌悪感さえあらわにわめいても、男は嫌な人間っぷりを披露し続ける。聞く耳持たず。
「てめえいい加減にしろよ！　どこ行く気だよっ」
何か目的地をもって男は歩いているのは分かっている。まさか答えるとは思っていなかったので少女は驚いた。
「お前は何かと使えそうだ。死神の証明は後でも良い」
「はあ？」
結果的に無意味終わっている抵抗を続けつつも少女は脳内を整理しようとした。

……つまりは、“死神のキス”を利用して誰かを殺そうというのか。今までにそういった輩に会った事がないわけではない。暗殺者代わりに丁度いいとすりよって来た者もいた。誰かに従うなんてくそ食らえと少女はその者にも結局“死神のキス”を与えたが。

「はん、あんたも殺したいほど憎い相手がいるってわけね」

全くもって意外でもなんでもないが。この男、自身人一人くらい殺していそうな威圧感を常に放っている。むしろ自身の手で屠る事を進んでやりそうだ。他人などに手は出させないというような。

「そんな事は他人の手を借りるまでもない」

――……やっぱりか。こんな予想、当たってもうれしくない。

「私はこれでも知識の探求で忙しい。お前の身体をさばけば何が出てくるか、見ものじゃないか」

くくく、と笑い声が聞こえないのが不思議なくらいに昏く口を歪めた。

ざっと総毛立つのが少女には分かる。カエルを前にした外法医者の探求心ゆえの狂った笑みが見えた気がする。つまりはそういう事だ。少女は男にとって解剖の対象でしかない。

「他の使い道もまだあるだろうが」

まるで心の声を読んだように低い声は続ける。

――冗談じゃない。

生まれてこのかた、生きていていい事なんて彼女には一つもなかった。しかしその最たるものはこの男と出会ってしまった事なのではないか。いや、そうなのだと断定していい。誰かに屈服するなど“死神のキス”を持つ少女には縁遠い存在であったというのに全身で拒否する存在でもあった。

殺されそうになる前に、犯されそうになる前に、唇をつけてやればよいのだ、相手に。

しかし、この男には“死神のキス”が効かない。それは想像を絶する恐怖を少女にもたらした。

頭の端にのせただけで、心臓が一気に縮んで小さくしおれた。

殺せない。
“死神のキス”が通用しない相手。
そんな存在と、向き直っていた今までですら信じられなかった。からからと喉が干からびていく。
ほとんど、本能的に自分の腕を動かしていた。
「ありえないッ！！」
バヂリ、大きく電光のようなものが閃いたかと思うと、衝撃により男は少女の腕を手放していた。
薄暗いストリートに、光が一瞬でも溢れたとあってのたれ死んでいたような浮浪者すら顔を上げてざわめいた。
一瞬で少女の姿を見失った男は、魔術を彼女が使って逃げたのだと知る。
さわさわと人の驚きが溢れ出すストリートに、一人の男が立っていた。先ほどまで少女が居たはずの、何もない空間に闇色の瞳を据えながら。

2　二人目の男

一般的な子どもと同じように、彼女は父と母に囲まれて育った。初めてのキスは、もちろん実の親と交わした。

何度も父母が少女にふらせた親愛のキスは、幼い少女を笑顔にした。

自分もまた、両親に笑顔をあげたいと無意識に思ったのだろう。自分がうれしかった行為を返した。

最初は父親に、だった。

少女がキスを頬に。たったそれだけで、父親はもがき苦しむように胸をかきむしった。崩れ落ちるように倒れた父親に、少女は何も理解出来なかった。

少女の母親も、まさか少女のキスが原因など微塵も疑わずに真っ青になって夫に駆け寄った。寝台に運ばれた父親は間もなく危篤状態になる。

最期に愛娘の顔が見たいと切々にもらす父親に、少女は小さな身体を枕元に寄せた。少女には言葉では分からなくとも愛情を示すものとしてキスがあるのだとは知っていた。死に際の父に、なんとかこの気持ちが伝わらないか、いなくなってしまわないようにしなくてはと、唇を寄せた。

一瞬だったが、彼女の母親は見てしまった。

少女がキスを落とした瞬間に不自然なくらいに突然に夫は息を止めた。そして脈を確かめるまでもなく死んでいた。

母親はまさかと思った。

しかし…夫が倒れる寸前にも、この子は……

†　†　†

王都シェーン。シェーン王国と同じ都市の名前を持つ、シェーンの首都だ。

城下町をぐるりと囲む城壁のほぼ中央に、王城がある。尖塔がいくつもそびえる城下町最大の建築物だ。南東に進むと、シェーンの二つ目の象徴である巨大な時計塔もある。尖塔のシェーンと呼ばれるほどに、王都には天を目指すほど高い塔がいくつもそびえ立つ。

シェーン王国は城下町を中心に栄えており、大国のうちの一つである。夜の街でも、明かりがたえない。まだ宵の口ではあるからだが、騒がしい裏の町や大通りには人の影がまばらに点在している。

大通りからはずっと離れ、明かりの届かないその場所に店を構えた人間がいる。

「シュガーローゼ、アンタも落ちたもんだね」

小馬鹿にするように、実に愉快げな声が落ちてやっと意識を持ち上げる。

「うるさい、くそばばあ」

この世の不満を一身に集めたような顔をして、少女はピンクゴールドの髪を翻した。彼女の予想通りローブを羽織った老婆がそこには居た。

「アタシを頼るようじゃさ。二度と寄るかって言ってたのはいつだったかねえ。結構最近だったから、なんだ元々アンタ落ちたもんだったか」

かかかと笑う老婆の容姿はかなりの高齢だが、少女にはあと十年は生きてそうなどころか殺しても死なないと思わせる。
王都にも後ろ暗い路地裏の通りはある。この城下町に老女は店を構えている。
“死神のキス”が効かない男と会った街を出て首都にたどり着くにはそう時間はかからない。少なくとも魔術が使える少女にとっては。
あんな街には一秒だって長く居たくなかったが、気が動転していたせいもあってか次の目的地である街には行けなかった。
シェーン城下町に住む老婆の知恵を借りたいわけではなかったが、都市の多い人口の中に紛れたかったのかも知れない。まさかあの男が自分を追いかけてくるとは考えたくもなかったが万一の事があっては困る。
「なあ、くそばばあ。“死神のキス”が効かない相手なんて、居ると思う？」
実際に存在したのだが、疑問形にしてしまうのは認めたくなかったのかも知れない。いろんな意味で、あんな人間。
「知らないよ、アタシゃそんもん」
嫌そうに老婆は身をよじる。不思議な事に、この老女は少女の存在自身を厭う事はないのに“死神のキス”だけは拒絶している。“死神のキス”が受け入れてもらえないのは当然だろう、それを受ければ死ぬのだ。自殺志願者でなければそんなもの一生関わりたくないだろう。そしてそんな死をもたらす少女自身とも。
普通の人間ならば死神のキスとそれをもたらす少女は同義語だろう。キスも少女も忌避すべき存在だ。当たり前だろう、少女が居なければ死神のキスも存在出来ない。
それなのに老婆は、少女の存在をそっくりそのまま受け入れるわけではないが、厭わしいといった態度を見せた事はない。反対に“死神のキス”にだけはいい顔をしない。むしろ嫌っているようだ。
キスと少女、分離して考えているという稀有な存在だ。

相変わらずだと、何度も会ったわけではないのに少女は小さな息をつく。読めない相手だというのに、少女は老婆が嫌いにはなれなかった。積極的に関わろうとは思わないが。

「まぁいいよ。あんたに聞いたわたしがバカだった」

この老婆に欲しい答えをもらった事などなかった。一度だけ世話になっただけだが、恩を感じてもいない。今日は宿代わりに寄っただけだ。

「ちょっと出てくる」

扉を開いて夜の街に繰り出す旨を伝えると、老婆は不快そうに顔のしわを増やした。

「なんだ、そのまた戻ってきますって言いたげな物言いは」

その通り、戻ってくるからだよと、にやりと顔で伝えると少女は扉を閉めた。

シュガーローゼ。

少女が自身につけた名前だ。生まれた村での名前は、化け物と同意だったので捨て去った。しかし“シュガーローゼ”すら呼ぶものはごくわずかだ。先ほど老婆に呼ばれてやっと思い出した。

『死神』
『死神の娘』
『化け物』
『魔女』
『悪魔』

自分は実にたくさんの名前を持つ。

死神。

――本当にそうだろうか？

今までに、自分を疑った事はなかった。疑う余地もないほどに“死神のキス”の効果は絶大だった。正に百発百中、シュガーローゼが唇を奪えば命も同時に奪う事は最早疑いようのない事実。

その死は誰にも平等に訪れるはずだった。

“あの男”が現れるまでは。

未だにもって信じられない。

シュガーローゼは、あの男と同じ事をするようで癪だったが街へと繰り出したのには、確認作業のためだった。

己の唇に“死神のキス”はもう宿っていないなどという甘い考えは抱いていない。そんな望みとうに捨てた。

だがもし、あの男が例外だとしたら、そうでなくとも、どうしても確認しなければ気が済まなかった。

この“死神のキス”を憎んだ事もあった。しかし今は望んでいなくとも上手く付き合うくらいにはやっている。それなのに今、異変が起きているのだ。

何かをせずにはいられなかった。

「こ、困りますよ」

ふっと飛び込んできた声に何の気なしに視線をやると、色町の通りに呼び込みのお姉さんと慌てる青年が押し問答をしていた。露出させた身なりでうぶな男にしなだれかかる女の姿、などといつもの光景だったが少女には生真面目な青年の様子が勘に障った。

「私は今、職務中ですから」

警邏（けいら）中なのだろう、かっちりと着こんだ王国騎士団の制服を着た青年は女の誘いを断っている。

「やぁだお堅い。いいじゃないの、どうせお仲間だって仕事中にうちに来てるわよォ」

「そ、そんな……そうなんですか？」

真剣そのもので青年は身内の職務怠慢を問い詰める。

「うちの店じゃないかもしれないけど、仕事サボって一発しけこむ、

なんて別に誰でもやってるわよぉ～～」
けらけらと女はあまりに頭の堅い青年を笑う。それを受けて戸惑うように青年は眉を寄せる。
「誰でも、とは大抵の職業の者は誰でも、という事ですか？　それとも我が騎士団の者は誰でも、と？　それと目に見えて頻繁にそういった者の出入りがあるのですか？」
真面目な彼にしてみれば疑問点をはっきりさせておきたいとか、職務怠慢はいけないから上司に報告するために事細かに詳細を、という気持ちだったのだろう。
しかしからかいに勧誘も含め場の空気を和らげようとした女の意図に全く反した青年の発言は、うれしくもなんともないものだった。
「……あー、うん。もういいよ。あたしももう店じまいにするわ」
呼び込みはもういいやと青年の問いかけを打ち切ろうとする。
「いや、しかし聞かせてもらえないだろうか」
「あーもう、野暮過ぎるよアンタ！！　ここは騎士団宿舎じゃないってのよ！　続きがやりたきゃ帰ってお仲間としな！」
わめくように言うと女は乱暴に扉を閉めると青年の言を遮断した。
「……」
訝しげな表情で、青年はしばらく立ちすくんでいた。何故女が機嫌を悪くしたか分からないほどに野暮なのだろうか。
しかし警邏中だった事を思い出したのだろうか、取り直したように毅然と歩き出した。
――そもそもがなんでこんなところに騎士団が居るわけ？
シェーンの騎士団は気高き王家の守り手、裏社会のような色町にまで警邏でも来る事はほとんどない。城下町の治安は警備隊が守っていると、名目上はそうなっている。まともな人間の住む地域ならまだしも最下層のここの一帯には騎士団は寄りつこうとしないはずなのだ。
シュガーローゼにはあのお堅い青年が気に食わなかった。国のためと言いながら異端を排除するのはいつも彼のような生真面目な存

在だ。守るべきものがあるのだからとはみ出し者を殺すのを苦にもしない。

何度もああいった出合いに命を奪われそうになった。もちろん返り討ちにしたが、それでも気にくわない気持ちに変わりはない。彼女の最も嫌うもののうちの一つだ。

視線だけで殺してしまえそうな瞳で青年の居たあたりを見ていれば、青年はまたも他の客引きに捕まっていた。距離もあってよくは見えないが、胸を寄せる女の媚びるような眼差しから青年の顔がいいのは確かだろう。

「いやっ、職務中ですし」

「じゃあ何、終わったら来てくれるの？」

「それもちょっと……」

「いいじゃない夜まで働いてたらぶっ倒れるわよお？　どうせ疲れるならもっと違う事しましょうよ」

「しかし……」

しかも、あの青年は優柔不断だ。はっきりと拒絶するなり店に入るなりすれば良いのに、どちらもしない。

「なぁに？　あたしなんかじゃダメだっていうの？　娼婦ふぜいがって？」

駆け引き半分本音半分だろうか、女が拗ねたようにもらせば青年は慌てる。

「そ、そういうつもりではなく……」

しかし二の句が告げられない。相手を傷つける事がしたくないのだろうか。

「お優しいこと」

吐き捨てる。シュガーローゼの声はあそこまで届かないだろうが口にせずにはいられない。

自分は万人に優しい聖人だとでもいいたいのか？

――決めた。

“確認作業”はあいつでしよう。

結局のところ女と別れた青年が丁度よく一人になってくれたので助かった。シュガーローゼは軽く駆けると青年の元へと向かった。

娼婦を見下してなどいない。しかし娼婦のような行為はあまり好きではなく、今までに自分から誘って誰かにキスをした事はなかった。

背後から青年の手を奪うと狭い路地に駆け込んだ。

「ちょっ……きみ？」

青年の抗議を唇で遮る。先日みたいな深いキスではなく触れる程度。確認作業にはこれだけで充分だ。

充分な、はずだった。

「え、えっと……？」

顔を離した後には相手は必ず倒れこむ。だからこんな風にきょとんとしたもの問いたげな顔を真正面にするなんて、夢にも思わなかった。

「今……わたし、貴方とキスしたよね……？」

問うてしまうのは何故だろうか。

青年は、少しだけ恥ずかしそうに視線を外した。仮にも騎士が子どものような少女に唇を奪われたのだ。武人としてあるまじきかも知れないが今のシュガーローゼにはそんな事関係がない。

逡巡の後だろう青年は困ったように頷いた。

「ありえない……まさか……二人、目……？」

少女は、叫びたくなった。

3　ザッハヒカリテ

騎士にしては少しのびたゴールデンオリーブの髪は、丁寧に梳(くしけず)られていた。顔立ちが整っているというのとはジャンルが違うが、青年は確かに顔がいい。二十代であるのは間違いないのだが、どこか少年のような幼さの残る顔。それでいて精悍な顔つきは彼自身の気質から来るのだろうか。真面目そうだというのも見た目でよく分かった。青年のエメラルドの瞳は困惑していた。

「えっと、君は……この辺の子、かな？」

子ども相手だろうと青年は口調を和らげた。しかしシュガーローゼには逆効果であり、彼女は今気が立っていた。

「はあ？」

怒気をたっぷりと含ませた低い声で返せば、青年はまさか幼い子どもからそんな返事が来るとは思ってもみなかったのだろう、びくりと小さく身を動かした。

「そ、その……」

一体自分の何が相手の気分を害したのか見当もついてないような顔で取り繕うように微笑む。

「気を悪くしたのなら謝るよ、ごめん。それから、もしかして迷子かなと思ったから聞いたんだ。他意はないよ」

お人好しそうな発言をしている青年がうっとおしい。しかし少女にはそれだけでは済まない事がある。

「あんた、人間？」

半眼で睨み付けるとまずその視線に気後れしたのか、一拍置いての反応だった。

「ええ？！」

正直、先日の男はまとう空気が悪い意味で人間離れしていた。“死神のキス”がきかない男だ。鬼畜と呼ばれていかにも嫌われそうな態度。そしてマッドな発言。同じ“死神のキス”が効かない相手

でもこの人間くさい青年とは大違いだ。
それでも問わずにはいられない。
どうして“死神のキス”が効かないのか。自分以外で、そんな存在はこの間の男一人のみだと思っていたのだが。
「えっと…人間だと思うけれど」
そんな事未だかつて問われた事などないだろう、青年は戸惑いながらはっきりと返す。
ふと、先日の男とのキスを思い出した。舌と舌を絡めるキス。所謂ディープキスと呼ばれるものを彼女も知らなかったわけではないが、初めての事だった。まさかとは思うがディープキスが鍵なのでは。いや、今この青年とは普通のキスで死ななかったではないか。
――頭、混乱してきた……
「……大丈夫？」
表情を曇らせたシュガーローゼに気づいた青年は心配するように声かける。そのしぐさが妙に腹立たしい。悩みなんて一つもないように見えてしまう。
ある種最大の悩みである“死神のキス”を良くも悪くも乗り越えてしまったシュガーローゼに、悩みらしい悩みなどなかったのに。その悩みの種は眼前に居る。
見も知らぬ少女を心配する青年の瞳は彼の人生が充実して、まともな道を歩んできた事を物語っている。どれだけ望んでもシュガーローゼが手に入れられなかったものだ。望まない方が幸いだと気づけてからは、手に入らないがゆえに憎んだ。厭わしい、純真な存在。羨望は容易く嫉妬に、そして憎悪へと取って変わる事が出来る。
もう、いい。関わらない方がいいだろう。
もし今ここで死神の少女だと知られたら、青年はシュガーローゼを捕らえようとするだろう。
それでなくともこの青年とは関わっていたくない。先だっての男とは違う意味で、関わりたくない。
稀に居るのだ、こういう青年のような存在が。“死神のキス”を

知らないうちには少女を歓迎し、気づかいさえする。その笑顔をつきつけられる度にシュガーローゼは虚をつかれる。ずっと殺してきた心が、浮かび上がる。間違えてはいけないと、自制していれば相手はすぐに“死神のキス”を知ってしまう。そうなれば手の平は返る。そして間違えなくてよかったと、小さく安堵すると同時にまたこんな事がないようにと戒める。

だからこそ、嫌いなのだ。このような青年の存在は。自分を揺るがすきっかけを与える。

こんなところには、いられない。

「あ、ちょっと待って」

何も言わずにその身を翻した少女に青年は追ってくる。

「帰るなら一人じゃ危ない、途中まで付き合うよ」

気の良い人間はいる。それは分かるが、その裏に何があるか。少女の正体を知れば何をするか。

簡単に想像はつく。だからこそ、嫌いだ。最も嫌うもののうちの、一つ。

答えないシュガーローゼに困ったようにしていたが、どうあっても彼は彼女についてくるつもりだった。

――自己満足の正義感。嫌いだ。

そして、シュガーローゼにとって危ない事などはほとんどない。“死神のキス”という最強の武器があるのだ。武芸の達人に護衛をつけるようなものだと、シュガーローゼは笑った。

「ついて来るな」

嘲るように吐き捨てられ、青年はあまりにも重い声に目をみはった。まだ幼い少女……その口からまるでこの世界を恨むような感情が見えてしまい、とても彼女には似合わなかったからだ。

青年にとって女子どもは守るべき存在で、彼らは守られているなどと気にしないで幸せにいて欲しいと、常日頃から願っているのだ。

だから、その後とった行動は当然の事であった。

ひゅっと風がうなり、「危ない」という青年の声でシュガーロー

ゼは気がついた。何度か訪れている王都だからと油断した。いくら慣れた地でもここは裏社会。いつ人に襲われるとも限らない。

「これはこれは……お仕事じゃなくデートの真っ最中でしたか、騎士団員どの？」

大柄の男性二人に通りの前後を塞がれた。チンピラあたりが誰彼かまわずあたり散らすのよくある事だが、やけにつっかかる態度に少女は怪訝に思う。

「デートって、ロリコンなのかよ騎士団員どのっ！」

嘲笑を浮かべる男は柄が悪いが、ただのチンピラには見えない。暴力だけに頼った人間ではなく、何かを為し遂げようとしているかに見える。

「やはり、警備強化の原因は貴方たちでしたか、≪ザッハヒカリテ≫」

ぴくりと、シュガーローゼから見て前の男が反応を示した。青年がシュガーローゼをかばい、背後の男にも目を配りつつ前方の男の反応を横目で確認する。

――≪ザッハヒカリテ≫？

聞いた事がないわけではないが、少女には何の名前だったか思い出せない。

「そうそう、おれたちが騎士団に仕事与えてるってわけだよ」

「そして今日こそはお前を見逃す事は出来ないなあ……団員どの？」

青年は、苦々しげに眉を寄せた。≪ザッハヒカリテ≫は何だったか思い出せずにシュガーローゼが目をすがめると、青年からその答えが出た。

「レジスタンスめ……」

レジスタンスの名前だった、≪ザッハヒカリテ≫は。今の王都（シェーン）には強力なレジスタンスである≪ザッハヒカリテ≫という組織がある事くらいはシュガーローゼも知っている。裏通りを隠れ蓑に、今の政権をよく思わぬ連中が出入りしているとかそういった話だった、彼女が知っているのは。

しかし騎士団である青年がわざわざこの路地裏まで足を運んだのは、≪ザッハヒカリテ≫の会談を阻止するためであった。近々訪れるという他国の権力者との会談だ。その情報が騎士団にまでもれて、警備を強化したのだ。城下町警備隊は、裏通りとの癒着があるためかあまり協力的ではなく騎士団も警邏にいそしむ事になったのだ。

ゆえに、この裏通りにはまだ何人かの騎士団員が警戒して見回っているはずだ。助けはすぐに来るだろう。

「今日が会談の日、なんですね……？」

会談を未然に防ぐのが騎士団の役目だったが、ほとんど足を踏み入れない裏町に騎士団員はまず地形を知る事から始めた。が、始めたその先からこれだった。情報が騎士団までもれた事は幸いだったが少し遅かったようだ。すぐに増援を呼ばなければこの広い裏町を抑える事は出来ない。

「ま、毎日騎士団員なんか見逃しゃしねえけどよ」

剣を振り上げるレジスタンスに、シュガーローゼはうんざりとした。今までに組織的な相手と対峙した事はあまりないが、組織だっているだけあって面倒な展開になるのは確実だった。

シュガーローゼは魔術を発動させかけて、がきりと図上に敵の剣を妨げるものがあって驚いた。

見ると、今まで彼女が存在を忘れかけていた青年の姿がそこにある。彼は騎士だったから当然剣を携えている。レジスタンスの凶刃からまるで少女をかばうように立ちはだかる。

「ちょっと、」

「この子は関係がない。この子だけは見逃してください」

騎士の鑑を地で行く青年は決然とレジスタンスの男に言い放った。仕方なさそうに首をふったレジスタンスは、陽気に笑った。

「だめ。女の子って高く売れるんだぞ？　別におれにそういう趣味はないが、将来有望なその顔ならどこの店でも高く――」

最後まで言い終わる事はなかった。素手で青年が殴り飛ばしたからだ。

剣使えとだけ少女は思った。
潔癖な騎士には、人身売買のような行為は許さない事だったのだろう。顔を怒りでいっぱいにし、親の敵でも見るように殴った相手を睨み付けている。意外な事に、相手は一発でのびてしまった。
「おいおい……ちょっとやり過ぎじゃねえか、騎士団員さんよ」
幾人かの足音がこちらへ寄ってきた。問うまでもなく、レジスタンスの仲間だろう。群れる生き物が大嫌いな少女は、顔にしわを寄せる。
「大人しくしときな、命までは奪わねえから」
右も左も塞がれて、青年は焦ったように目をしかめる。さすがにこの人数はシュガーローゼにとっても好ましくないが、“死神のキス”は少しでも相手に唇を触れられればそれがどこでも相手に苦しみを与える事が出来る。加えて、少しではあるがシュガーローゼは魔術を使う事が出来る。
面倒ではあるが仕方がないと人数の少ない左側の通りに目をやる。すると青年も同じ考えだったのか、右を見てから左を見て、そのまま駆け出した。
シュガーローゼの腕を引いて。
「へっ？」
一瞬、わけが分からなかった。その後の青年の行為も。左側のレジスタンスを蹴散らすと、対峙するでもなく走り続けた。戦うんじゃないのかと、青年を見上げる。視線に気づいた青年は微笑んだ。
「大丈夫だよ」
何が。思わず返したくなる。しかし少女の歩幅と成人男子の歩幅は合わない。手を引かれて走るのには無理がある。
後ろから数人のレジスタンスが追いかけて来てはいるが、シュガーローゼは“死神のキス”があるから大丈夫なのだ。青年が居るから大丈夫などと戯言をと思う。
あまりに足のコンパスが合わないのに青年もやっと気づいたのか、またはレジスタンスがすぐそこまで迫っていたからか。青年はひょ

いとシュガーローゼの身体を持ち上げた。
小柄であるとはいえ、十歳をとっくの昔に超えた少女を担ぐのは難しい。横抱きにしてシュガーローゼは運ばれた。
「ちょっと?!　降ろしてよ!!」
「悪いけどそれは出来ない」
「何言ってんのわたしなら大丈夫だっての！　わたしは死に――」
「残念、行き止まり」
背後からの声は優越感に満ちていた。
しまったと言わんばかりの青年の瞳の先には、壁が立ちふさがっていた。

3　ザッハヒカリテ（後書き）

ゴールデンオリーブは明るい茶色のつもりです。
変な色ですいません（笑）

4　死神のキス

横抱きからは下ろされたが背中にかばわれて、シュガーローゼは嫌悪感を顔面に並べる。その善人ぶったところが、嫌いだ。

「彼女には手を出さないでください」

はっきりと左手でかばって騎士はレジスタンスに立ち向かう。

「あー無理むり。おれら結構リアリストっていうか、宝があったら即換金っていうか」

ぎり、と歯を噛み砕かんばかりに鳴らす。この青年はよっぽど人身売買がお嫌いのようだ。

くだらない光景だ。

方や正義感あふれる騎士、方や道徳心を失った悪漢。そんな分かりやすい二極化した構図。ばかげている。どちらも。

そんなものは死を前に無に等しい。くだらない。

さてここで自分が「死神だ」と名乗りを上げたら皆、どうするか。青年は守るべき存在が排除すべき存在だと知り剣をこちらに向けるだろう。レジスタンスはどうか。今目の前にいる彼らはどう見ても組織の中では下位の人間だ。もし上に立つ者がいたらもしかしたら“死神のキス”を己が野望に利用しようとするかも知れない。どちらも面倒な事だ。

だが、キスを送ってやればいい。どいつにも。死神の、キスを。

進み出るように身体を前にした少女に、青年は左手でもっておさえる。

「危ないから、下がっていて」

「別に、危なくないから」

どかした二の腕に、赤いものがある事に気がついた。傷跡だ。乾いてきてはいるがごく最近のものだ。

『危ない』

最初にレジスタンスに襲われそうになった時のものだろう。

――いるいる、こういう自己犠牲的正義をふりかざす人
有難いとは欠片も思わない。少女はむしろ嫌味にうつった。その守ってきたものが化け物で、死神だと知ったら――
その顔を見てみたいと思った。出来ればそれを見た後で“死神のキス”で眠らせてやりたいが、この青年には効かないのだろう。
どうせ殺すんだ。まあいいだろう。
そっと青年の左手を取ったのは無意識に近かった。どうしても認めたくなかったのかも知れない。
“死神のキス”は唇に落とせば即死、それ以外の肌であれば相当な苦痛を相手に与える事が出来る。身体の弱い者なら失神するかそのままショック死もあり得る。
「――――……やっぱり、か……」
左手の甲に、柔らかなものが触れたかと思うとそれが落とされたキスだと分かり青年はエメラルドの目をみはる。
――どうしても死なないんだな、この人は…
いくら鍛えている人間でも、苦痛を必ず訴える“死神のキス”を肌に受けて身動ぎ一つしない。
この青年には“死神のキス”は通用しないのだ。
「なにあいつらイチャついてんだ……」
「最期の会瀬ってヤツだよ」
驚いたままの青年が手を伸ばしてこないのでシュガーローゼはそのままレジスタンスたちに向かって歩く。
「ちょ、ちょっと」
「よく聞きな。わたしは死神。生あるものに死をもたらす力を持つものよ。聞いた事ぐらい、あるでしょ」
シェーン王都には頻繁ではないが何度か訪れた。知らぬものはいないだろう。
ざっと、レジスタンスたちの顔が青ざめたのが見てとれた。一様に、自己の死を想像したかのような表情が滑稽だ。はなから疑っているのか信用していない者もいるが。

くす、と少女は嘲笑った。
「死に急ぐ者ならおいで。わたしが生を、止めてあげる」
少女の瞳の奥のアクアマリンには、死が映っている。それが死神の瞳。高い天空から人々の営みを小さいとばかりに見下ろす、超越したものの眼差し――。
ほとんどレジスタンスたちを向いていた少女だから、青年からは表情がよくは見えなかったが、彼は状況を今一つ理解していなかった。
（死神？　死神って言ったのか、今あの子）
一体どういう事か、何かの比喩かはたまた真実死神が現れ出でたのか。全く頭が理解してくれない。
しかしレジスタンスたちは、必ずしも少女の言を鵜呑みにしたわけではなかった。確かに“死神の少女”の噂は名高い。一瞬まさかと疑っただろう。だからこそ偽者も現れるし、ましてこんな小娘ともいえぬ年端のいかない子どもが“死神”だなんて誰が考えようか。
「嬢ちゃん……正直あんま笑えないなー、そのギャグ」
それを聞くなり左眉を上げ、シュガーローゼは何も言わずに一番近い男の元へと足をやる。
背が足りないので、相手の手を取れば当然のようにキスをする。
「へ？　う……ぐ……っ？！」
胸をおさえてうずくまるレジスタンスの男。
これだ。
これがシュガーローゼを前にした正しい人間のあり方なのだ。そう、これだ。これが欲しかった。
どうしてあの騎士の青年はこうならないのか不思議でならないが――本来、“死神のキス”とはこういうものだ。
「ふふ……」
恍惚にも近いものが吐息となりこぼれる。見たものが信じられないのだろうレジスタンスたちは怪訝そうにしながらわずか後退る。
「苦しまずに死にたいなら、言って？」

狂った、笑みをのせ、少女はうたうように告げた。
死の宣告を。

一人、もう一人と唇を寄せる度に生気を吸われたかのように倒れゆく男たち。
これが“死神のキス”。
誰にも妨げる事は出来ない。そう、誰にも。
あの男と、背後の青年だけが例外だったのだ。ならばもう彼らとは関わらないでいけばよい。こうして“死神のキス”の不調は二人にしか働かないと分かったのだから。
「もうやめろ!!」
絞り出すような叫びに、絶望的な色が見えた。それはシュガーローゼの後ろから飛び出した。そこには、一人しかいない。
青年はひどく顔を歪めて、様々な感情を内包させていた。エメラルドの瞳は、揺れている。恐れ、悲しみ、戸惑い、拒絶、苦しみ、そんなところだろう。少なくともシュガーローゼには慣れたものだ。
そんなもの、いつも見ている。
「もう……やめてくれ……」
懇願するように騎士が言うものだからおかしかった。レジスタンスは国家に仇をなす異端の存在だろうに。騎士団はそれを王家のためひいては王国のためと銘打ち排除する。
敵をかばいたくなるほど、わたしが恐ろしいのだろう。
いくら“死神のキス”が効かない相手でも、反応はいつもものものだった。
安心した。

いつもの光景が一番良い。
と、青年を振り返っているうちにレジスタンスの生き残りは逃げ出してしまっていた。別にシュガーローゼは彼らの殲滅を狙っていたわけではないからどうだっていいが、苦しみ悶える者を置き去りにしても　我が身かわいさに逃げた人間たちがいつも通りでほっとした。
まあ、相手が逃げ腰で良かった。面倒事に積極的にたずさわりたいはずがない。これでもう帰れるだろう。
屍だか死にかけだか知らないが横たわる男たちの累々とした屍を避けながら袋小路の路地を後にする。
シュガーローゼは怪我も少なくすんだ上に“死神のキス”健在に幾分気をよくして帰路につこうとしていたのだが、それを害する声がかかる。
「待ってくれ……」
どこかか細いそれは、誰のものかというとそこに立っているのは少女以外にあの騎士しかいないのだった。
シュガーローゼは振り返らない。待つ必要もないのだが、足場がなくこの男踏んでいくかと逡巡していた。
「君は、本当に“死神”なのか……？」
そこではじめて自分の意思で足を止める。どこまでおめでたいのだ、彼は。今正に目の前で見たのではないか。死神の殺戮を。
かわいそうに、頭が弱いのだ。シュガーローゼは失礼にあたる言葉でもって片付けた。そしてもう彼とは金輪際関わらないと決別の意をもって、二度と足を止めずに前へと進んだ。
「待って……名前、名前はなんていうんだ？！」
愚かな事を。耳にも入れるのも煩わしい。
それを知ってなんになる。
それを知ってどうしようというのだ。
名前に、意味などない。死神、これで充分だ。シュガーローゼを表すには。

確かに人間の腹から生まれたはずなのに、“死神のキス”を持って生まれた存在。
それは本家大元の死神とは同一のものではないかも知れないが、人間ではなかった。
人間ではないものの、名前を知ってどうする。
馬鹿はそうでもないが、愚か者はシュガーローゼの最も嫌うものの一つだ。
「僕は……」
遠くなった青年の声が聞こえなくなっていった。
死神の少女の、足を止めるものはなし。

5　国境沿いの街へ

彼女が店に足を踏み入れた時には、もう雨が降っていた。
王都シェーンの町はずれに、店を構える老婆がいる。何の店かは周囲の住人も知らない。ただ怪しげな薬や骨董品のある店内は薄暗く、人々は気味が悪いと噂する。魔女の店だと。
偏屈な老婆の下へ、一筋縄ではいかない少女が再び、現われた。
少女は雨にうたれて濡れねずみという格好。どこかを怪我しているのか、両腕と片足から血の筋を流して立っている。
「ばばあ、わたしもう出るわ王都。こんなとこもういられない」
そう言いながらもシュガーローゼの瞳は笑っていた。
突然、戻ってきた娘が何を言うのかと待っていればそんな台詞で、老婆は小さく眉を上げた。
「……そうかい。それは良かった」
そうは言うものの、老婆は心配だった。少女が笑っている時にはろくな事が起きない。前後してでも屍がどこかに転がっていそうなのだ。
「じゃあもう、今度こそ二度と来ないから」
今生の別れとし少女は街へと再び飛び出す。
雨は止まないというのに。
もう、あの男ともあの青年とも会わないように遠くへ行こう。そう決めて。
外と代わらぬ薄暗い部屋の中、老婆はぼんやりと少女の消えたドアを見続けていた。

北西に大国であるミリヤール帝国をひかえてシェーン王国は存在する。

単純に国土の広さなら、ミリヤール帝国、南西のカロゼッロ共和国についで広大な地を統治している。だが帝国とのある程度の距離があるカロゼッロと比べて隣国にミリヤールのあるシェーンは、帝国の影響を受けやすい。

ミリヤール帝国は現在、現皇帝の正統性を認めようとしない勢力によって、二分されているという。内紛の火が吹くのはそう遠くない未来だと、きな臭いのが現状だ。レジスタンスなどという存在がシェーンに目立ち始めたのも、その影響を受けていないとは言い難い。

帝国に飛び込んで行くのは必ずしも危険とはいえないが、平和な旅行をしたいのなら帝国はやめておけ、というのが周囲の国の見解だ。ミリヤールはその広大な領地の全てに皇帝の善政が行き渡っているとは言いがたい。ゆえに、かつては独立していた国の反乱の火種も常にくすぶっている。

シュガーローゼがシェーンを出て行くと決めた時に、次に向かう先に帝国という選択肢はなかった。

ならば、という訳ではないが北の帝国の正反対の方角へと決めた。南西カロゼッロへ向かおう。特にこれといった理由はないのだが、ウィディト大陸の南の端だ。目指す先は世界の端がよかった。

迫害を受け、人々に嫌われ、人の行ける場所ならどこへでも行ったシュガーローゼだが、カロゼッロ共和国にはまだ訪れた事がない。まだ見ぬ地に期待を抱いたり好奇心にかられたりはしないが、どういうところなのだろうと思いをはせる。

聖都があるという程度にか、共和国の事は知らない。

ただ、死神少女の名前が行き届いていないといいと思う。

隣国をはさんでの国だ、まさかそこまで遠くに悪名が知れているなどと思いたくもないが、シュガーローゼは不安になる。

自分を知る者が誰もいない新天地で、心機一転新しい生活。とはとても思えない。

常にシュガーローゼは流浪の身。一度“死神少女”だと知られてしまえばもうその地には居られない。

目指すカロゼッロも、一時的に身を寄せるにすぎないのだ。

そう思えば、目的地への思いもかすんでゆく。

どうせ、どこに行ったって人はみな同じなのだ。悪魔、化け物、死神は排除すべき存在。当たり前だ、シュガーローゼが普通の人間であっても、死をもたらす唇の持ち主などお帰り願いたい。

期待などしない。

ただ、南へ向かうだけだと決める。

そうだ。自分は人間ではないのだから、旅行なんていうものはしない。

出来れば命を奪わないように、ただ漂うだけ。

広い大陸も、少女にとっては意味のないものだ。

希望は抱かない。

大丈夫だ、シュガーローゼはまだ歩ける。

†　†　†

シュガーローゼが国境沿いの街へとたどり着く間に続いた雨が、街に着いたところで止んだ。

もっと早くに止んでくれればよかったのだが、自然の事象に文句を言っても仕方がない。だがシュガーローゼは雨が嫌いだ。毎日のように忌々しく思いながらの旅路が、足を止めた途端にこれとは天に唾でも吐きたくなる。

ともあれ、ひとまずの目的地である国境沿いの街・ブリューケンにたどり着く事が出来た。

ブリューケンは国境沿いである事が強みの栄えた街だ。隣国の影響を受けやすく、また隣国との交易で潤ってもいた。広い街で、一つの都市のようになっているところは王都シェーンに迫る勢いだ。

ブリューケンにたどり着いたところで、まだ国境は遠い。隣国のオスティオ王国とは川を挟んで国境となっている。ゆえに、ブリューケンは巨大な橋でも有名だ。橋を南に渡っていけば、終点は他国であるという風になっている。橋の手前がシェーン、渡りきるとオスティオだ。

しかし、その国境手前の橋までが遠い。

シュガーローゼは三日の行軍の疲れをとる事にした。

ブリューケンは国境沿いの街、自然人の行き来はたえない。大勢の人間が常に二国間を行き交う。そのためであろう、宿の値段は他所よりいくらか安いと聞く。

まずは宿をとってからだ。関所を通るにも、時間がかかるだろうから今のうちに体の疲れをほぐしておかねばならない。

決めると、シュガーローゼは手ごろな宿を目指して歩き出した。

「橋が壊れた？」
予想外の事態になったと知れたのは、翌日になってからだった。
一晩休んで、朝もしばらくぼんやりとしていたシュガーローゼは、荷物をまとめると宿を出た。
そこから半日をかけてブリューケンを歩くと、人のかたまりが騒いでいるのに出会う。
国境をまたぐ橋に近づくにつれ、旅人や商人の口にのぼるようになったそれは、あまり好ましいものではなかった。
街の人間も、弁明というのか、原因を口にしている。
ブリューケンのほこる巨大な橋が、壊れてしまったというのだ。
「おう。この間の大雨でな。元々そろそろガタがきてるなって話をしていたところなんだ。うちの街じゃオスティオに向かうマトモな道はこの橋しかないから、急ピッチで修復中なんだが」
「どのくらいかかります？」
「うーん……一週間はかかるだろうなあ」
「えええ～……」
街の者と旅人だろう、そんなやり取りを脇で聞いて少女も眉根にしわを刻む。
その中の一人が、よっぽどの用があるのだろう、仕方がないと引き返すのではなくブリューケン民の元へと食い下がった。
「困りますよ～、なんとか他の道はないんですか？」
そうだそうだ、とシュガーローゼはこっそりと心の中でだけ同意した。
「山ん中しかないがな。お勧めしないな……」
「あるんじゃないですか！　それはどこです？」
「危険だから行かない方がいいぞ、あんちゃん。急ぐ旅なのかい？」
「まあ……あんまりゆっくりはしてられないのは確かですけど」
さて、このまま“山ん中の他の道”を男が話すまで立ち聞きするのもよいが、街の者は話すだろうか。
お勧めしないと言っている通りに旅人を危険にさらすまいと、口

をつぐみ続けるかもしれない。
旅人も特に焦って問いかけてもいない。
そっとその場を離れるとシュガーローゼはよく晴れた空を睨むように見上げた。
危険というのがどの程度のものかは知らないが、ある程度の空間転移の魔術が使えるシュガーローゼならば問題はないかもしれない。空間転移で壊れた橋の向こう――オスティオまで行ければ良いのだが、一度訪れた場所にしか行けないのが欠点だ。彼女はよくは知らないがもっと実力をつけ高度に昇華させれば一度も訪れた事のない場所にも行けるような魔術なのかもしれないが、シュガーローゼはその方法を知らなかった。
危険な山道というのなら、危ない目に遭っても空間転移で元の場所に戻ってこればいい。
こちらの案しかないなと、シュガーローゼは決めた。もたもたしてはいられない。追手などかかっていないが、あんなに人の多いところで“死神のキス”を多くの人間に与えたのは初めてだ。ましてやここはまだシェーン王国領内だ、万一の事もあるかもしれないし、妙な検問などかけられても困る。
早くこの国(シェーン)を出るにこした事はない。元々一ところに留まる事は少なかった。死神の噂が流れれば街を出る。そういう暮らしを続けてきた。王都は少しばかり長居し過ぎた。あの周辺の街でも王都でも、変なヤツらに会うし、長くいるべきではなかったのだ。だから早く。早く逃げ出したいのだ。
「やっぱり、山の道を聞かないとな……」
ルートを知っていなければならない。そもそもまだどこの山だかすら聞いていない。ブリューケンは国境沿いの街だから、南西側の山さえ越えれば隣国に行けそうな気がするが、さすがにそんな無謀な事はしない。
人にものを聞く――……。
「面倒くさ……っ」

苦虫をつぶすように吐き出すと、少女はそれからしばらくはその場所から離れなかった。

5　国境沿いの街へ（後書き）

なんだか一気に国名が出てきてややこしーですが、シュガーローゼの居たのがシェーン王国で、そこを出ようとしているという理解度で大丈夫です（笑）

でもでっかい帝国があるよー程度の知識があると、いいのかもしれません（何が）

6　ケイス・ルブラン

待って……名前、名前はなんていうんだ?!

僕は……

僕は……ケイス……

ケイス・ルブラン。

名を問うて、何をしようとしたのだろう。

それを知って、何になるというのだろう。

聞こえていないのに、口をついた自分の名前は……

知らせて、どうだと……いうのだ……

†　†　†

「……聞いてらっしゃるの?」

ケイスは婚約者からの一声で目を覚ますように身動ぎをした。

一瞬、自分がどこに居るのだかさっぱり分からなくなる。

ここはどこで、自分は誰か。目の前に居るのは？

失礼な事を考えている自分をかき消したくて、急いで返事をする事にする。

「あ、いえ……すいません……」

そこには、ブロンドの髪をきれいにまとめた令嬢がこちらを見ていた。彼女の灰色の瞳には間抜けな顔をしたケイスの顔が映っている。

互いの家が決めた婚約だった。とはいえ彼女の家柄の方が位が上だ。ケイスの家にとっては願ってもない申し出だ。

とはいうものの特に当人たちに恋愛感情はなく、せいぜいいい関係が築けたらと言っている程度だ。まだ何回かしか会ってはいないが、ケイスは婚約者であるイレーヌ・フォン・ヴェーネンは控えめだがはっきりした物言いをする女性と見ている。特に気が強いわけでもなく、容姿もきっと美しいとうたわれるくらいだろう。ケイスはあまり他人の容姿に頓着しないからそう思うのだが。

とにかく、婚約者として申し分ない相手だ。円満な家庭生活が約束されるかどうかは別として、第一印象もその後も悪くはなかった。イレーヌ嬢が特にケイスに熱を上げているような様子はなく、むしろ素っ気なくすら見える事もあるが父親越しの反応は悪くないという事だ。

しかし今、彼女は不満げとも取れる瞳をケイスに向けていた。彼女は美しいが、どこか感情の変化が少ない。そんな彼女が珍しく感情をあらわにしたのが不満とは、自分のしでかした事に気づき青年は慌てる。

「本当に、すみません。上の空だった訳ではなく、少し疲れていて……」

仮にも婚約者を前に、二人の会瀬の間に“疲れている”と口にするなど無粋でしかない。『あたしと一緒にいるのがそんなに退屈なの』と感情的になる女性がいないとも限らない。

しばらくの後にケイスがその事に気づいて慌てる。

「いえ、別に貴女といるのが疲れる訳では……」
必死に訂正する姿が逆に疑わしい。別段そう思っていなかった相手でもその可能性に気づけてしまい、余計な事を言ったともいえる。
「……ええ、分かっております」
取り澄ましたイレーヌの様子からは不満そうな様子は窺えるが、さほど感情的になって怒っているようには見えない。とはいえ彼女は普段からこうなので本心からの言葉とは受け取りにくいが。
ケイスは確かに、疲れてはいた。職場で些細なミスをして普段より幾分しごかれたのだ。その時に考えていた事がこの間衝撃的な出会いをした少女の事だった。
今でも尚、彼女には複雑な気持ちを抱く。死神というのは本当だろうか。どこからどう見ても一人の人間、小さな少女にしか見えなかった。名も知らぬ少女。
しかしケイスは見た。ただの子どもにしか見えないあの少女が――。
「今日はどうにも星の巡り合わせが悪いようですね」
はっきりと言い放つと立ち上がったイレーヌに、ケイスは視線を戻す。しまった、またやってしまったと焦る。
「ご気分が優れないのでしたら、また今度お会いする事にしましょう」
やんわりとデート打ち切りの言を淑女に言わせてしまったケイスはひどく後悔した。
「そんな、イレーヌさん。私の方こそ気分を悪くさせてしまったのなら謝ります――」
くすり、と彼女は笑った。
感情の変化に乏しいイレーヌ嬢が、困った人と言いたげな苦笑を込めた笑みを浮かべた。
「わたくしたち、まだ始まったばかりです。ゆっくりやっていきましょう」
まるでリードするように告げられて。「それではごきげんよう」

と退室される。
あざやかな退室だった。
冷や汗をかきながら、追いかけた方がいいのだろうかと考えたケイスだったが無理を強いた方が彼女を不機嫌にさせてしまうのではないかと思いいたって――……。
「はああ……」
情けない自分に肩を落とした。

窓ガラスに映った二十代の青年は、エメラルドの瞳を曇らせている。眉を寄せた自分の姿に、ケイスは情けなくなる。
翌日、ケイスは眉間のしわが取れない事に悩んでいるような表情で、騎士団宿舎を歩いていた。
幸いにも、失敗デートのお叱りを伯爵から受ける事はなかった。イレーヌはケイスの事を自分の父親やルブラン伯爵に伝える事はなかったのだろう。
伯爵の耳に入れば叱責を受けるのは避けられなかったから、喜ばしいとはいえるがまさかイレーヌ嬢はそこまで自分に興味がないのではないかと勘ぐってしまう。
政略結婚だ、この結婚がご破算になるようでは困る。彼女の事はまだ知り合ったばかりだから愛しているとはいえないが、上手くやっていきたいと思っている。これは、次のデートではちゃんと謝罪しなくてはいけない。
「よう、ケイスまた何か下らん事考えてる顔してんな」
「ハウスト。下らん事考えてる顔、ってなんだよ？」
悪友に避難を込めた視線をやると彼は笑みを深めた。

「お前は真面目過ぎる！　お前が悩むべきではない事で散々頭を悩ませやがって、結局いつもやらんくていい事をして俺がその手伝いや尻拭いを……」

むっとしてケイスは最後まで言わせるのを許さなかった。

「今日はちゃんと僕自身が悩むべき事で悩んでいる。最も、お前が言うようにいつも下らない悩むべきでない事で頭を悩ませているわけでもないけれど……」

ハウストははいはいとばかりに肩をすくめるだけだ。しかし興味深そうにケイスのいつも真剣な眼差しに窺うような視線をやる。

「で、なんだお前自身が悩むべき事って」

「イレーヌ嬢との事だよ……」

絶対にからかわれるだろうと分かっていたのだから、口にしなければ良かった。にんまりと笑った悪友の顔はいかにも楽しそうだった。人の不幸は蜜の味とはこの事か。

「そうかそうか！　愛想つかされたか！」

何故断定するのだとケイスは片目をすがめる。確かにそう取られてもおかしくない別れ方はしたが、まだ婚約破談にまでは至っていない。

「そうじゃない。ただちょっと上手くいってないだけだ」

「おっ、恋の悩みか！　お前もそんな年頃に……」

成人を迎えて何年もたった男に言うような台詞ではない。ハウストはケイスよりも背が高かったが年は一緒だったはずだ。訳知り顔の悪友がちょっと憎たらしい。というか何故、破談でも恋の悩みでもうれしそうなんだ。

「そんなんじゃない」

「いや、でも俺はお前があまりにストイック過ぎるから女のコに興味持ってくれて嬉しいよ。一時期男が好きなんだと噂が流れたくらいだからな、心配してたんだ」

「な、なんでそんな事に……」

そもそもイレーヌ嬢とは恋の相手というより両家が取り決めた婚

約者、興味を持つ持たない以前の問題だ。そして今まで女性に興味がなかったわけではない。ただ仕事が忙しかったのと、知り合うきっかけが少なかっただけだ。

「まあそんな事よりも……まだ例の裏町の犯人は見つかっていないのか？」

何気なく自分の婚約者の事を“そんな事”呼ばわりしていたが大雑把なハウストも気がつく事なく変えた話題にのってくる。

「ああ……あの不審死事件のか……。進展なんて、全然聞かないぞ」

あの事件とは、自らを死神だと名乗った少女が引き起こした裏町での事件だった。

表向きには、レジスタンスの内輪もめが原因だと公表してある。しかし謎の事件として城下の者にも噂が知れ渡っており、騎士団でも問題視されていた。

ただ、あんな事件があった後だ、レジスタンス≪ザッハヒカリテ≫と他国の要人との会合がなくなったであろうという点が騎士団にしてみれば唯一の救いかもしれない。しっかりと言質を取れてはいないが、これもまた噂として多くの人間の口にのった。

ケイスは、あの日の事を誰にも言ってはいなかった。自分の目で見たものを信じられなかったし、言っても信じてもらえなかっただろう。死神の少女の噂も、王都シェーンには知れ渡っている。しかしそれはほとんど都市伝説に近く、噂だけがただ一人歩きしているだけだった。もちろんケイスもその目で見るまでは逆立ちで追いかけてくるという逆立ち男と同じ存在だと見なしていた。要は、怪談やなにかと一緒であったのだが――。

「第一発見者のお前は、本当に何か知らないのか」

疑うようではないが、何か手がかりを知りたがるようなハウストの視線に、真面目なケイスは耐えきれなくなりそっと窓の外に目線を投げた。

「見てないな……」

あの日の事は、自分が来た時にはこうなっていたと仲間に告げて

ある。
死因の分からぬ死体が九体――。
“死神のキス”は死因が判別されないのだと分かったが、何故自分はあの少女の事を黙っていたのか分からない。
たぶん、まだ頭が混乱しているのだろう。あんな、あんな光景――。
ただ、現場には血を流した死体はなかったにも関わらず、いくつか血痕が残っていたのが気になった。ケイスのものかと思えば彼が立っていなかったところにもそれはあった。必死に記憶を手繰れば、少女がレジスタンスたちに立ち向かっていた時にレジスタンスたちは刃物を持っていたが、少女は何一つ凶器は身につけていなかった事をおぼろげながら思い出せる。その身に宿す“凶器”一つを除いて。
そして、血痕は少女の身体を傷つけたから出たのではないか。そう推測出来てしまうから、ケイスは混乱するのだ。
死神なのに傷を負う――。
イメージとはあまりにちぐはぐな存在は、彼の口を閉ざすのだ。
と、ケイスの茶髪を叩く男が居る。
「はいはい、また考えこまないっ！　あれは発見が遅れたお前のせいじゃないから、な？　ケイス」
「あ、ああ……」
ハウストはケイスがもっと早くに現場に駆けつけていれば何か分かったかも知れない、犯罪を防げたかもしれないと悔やんでいると思っているのだ。論点は少し違うが、確かにあの時自分がもっと違う行動をとっていれば、少女の行為を止められたのではないかと思ってはいる。
悪友に慰められたところで、贖罪（しょくざい）の気持ちはなくならないがケイスはもっと違うところに思いを馳せていた。
「そろそろ時間だぞ」
詰め所に向かう時間、仕事だ。

「ああ」

ケイスは騎士である自分を思い出し、表情を引き締める。

――もう二度と会う事はないだろうが……

再び会いたいのか、そうではないのかすら彼は分からない。しかし感情をなくしたよう少女の顔を未だにまぶたの裏から消せないでいた。

7　王国騎士団と城下町警備隊

中天にのぼった太陽が傾いてきた頃。
ケイスはシェーン城下町の大通りの真ん中に居た。昼間の大通りは市場がたっており、騒がしい事この上ない。
レジスタンスが死因不明で死んだ事件から、さすがに城下町警備隊も治安の悪化を憂いたようで騎士団が毎日のように歩哨に歩くのをすんなり受け入れ、彼らもまた警備強化を買って出た。だが城下町は自分たちの庭だとする警備隊員たちからは騎士団員は良くは思われず、対立意識が芽生えていた。
元来、庶民の味方として活動してきた警備隊と、王家の盾とする騎士団は守るべきものの違いからか対立しがちであった。同じ場所で職務を共にするなどほとんど前例がなく、よっぽどの事がなければ隊員たちは仕事中に顔を合わせる事はない。
ゆえに、城下町で騎士団が快く迎え入れられないのも仕方がない事だ。
「しかし私は、もっと歩み寄る事は出来ないものかと思いますが」
すっかり仕事の顔になったケイスは真面目くさった顔で言う。
騎士団の同僚たちなら、ああお前はそういうヤツだよ言うと思ったとばかりに苦笑するだろうが、今日の前にいる相手ではそうはいかなかった。
「どの口が言ってやがる、ああ？　ズカズカおれたちの街に踏み込んで来たのはそっちだろ？」
凄みをきかせて顔をしかめるは、城下町警備隊の制服を着る一人の男だ。警備隊員とは仲良くやってはいなかったが、まさかケンカを売るような態度を取られるとはケイスも思っていなかった。
とはいうものの、警備隊員の彼にしてみれば正当な理由がいくつもあった。まずはケイスがえばりくさった騎士団だという事と、先だっての事件の第一発見者だという事だ。騎士団員はケイスも含め

て貴族の出が多く、貴族は騎士団、庶民は警備隊というどこか暗黙の了解がある。騎士団員全ての人間が貴族ではないが、いかんせん実力より家柄がものを言うのも確かだ。

そして死因不明の死体が多く出た不審死事件は、城下町の人間をひどく怯えさせた。むごたらしい死体ではなかったものの、あまりの奇妙さと不可解さに皆疑心暗鬼になっている。死神が現れたとか、誰かがそれを街へ手引きしたのだと。街にとっての異端者――少なくとも、この警備隊員の男にとっての異端――騎士団員のケイスが第一発見者というのも疑惑の的だった。発見者だと言っておいて、実はあいつが犯人を引き入れたのでは、と。

最後に、警備隊員の男はケイスが城下町で、裏町でも人気があるのを知っていた。騎士で貴族でもあるのに気取ったところがなく紳士的だと、酒場のジュリア姉さんも言っていた――。

――くそ、ジュリア姉さんめ見た目に騙されやがってちょっと好きだったのに――……。

後半はケイスの人柄の良さと容姿に嫉妬が混じっていたのだが、とにかく騎士団は気に入らないとばかりに、

「我が物顔で歩いてるんじゃねェよ、騎士団がよぉ？」

吐き捨てた。

「……」

ケイスはどうしたものかと黙った。

昼間の街だ、人目は少なくない。城下の者は騎士団に抱いていたイメージがケイスによって良いものに変わっていったものだからケイスを応援したいが、相手が我が町の警備隊となるとこちらを裏切るわけにもいかないし……と複雑そうな顔をして見守る者も少なくない。もちろん騎士団を未だに良く思っていない者は多く、また血の気の多い者は囃し立てる。

「なんとか言えよ、騎士団員さまよォ？　群れてないと何も出来ないのか、高貴な方々は！」

挑発するような警備隊員の物言いにケイスは眉を寄せたが簡単に

乗る彼ではない。
「私はただ歩哨をしたいだけです。そこを退いていただけませんか」
安いケンカなど買うつもりはないと伝える。だが怯えた様子を見せるわけにはいかない。事実怯えてはいないが、そうと取られる台詞でも吐こうものなら騎士団全体の沽券に関わる。
「ビビってんじゃねーよ、腰抜けが！」
しかし警備隊員の彼は挑発にも乗らないケイスにしびれをきらして飛びかかってきた。憂さ晴らしの場所を求めていたのかもしれない。
すかさず避けるケイスだが、腰の剣は抜かない。騎士団員と警備隊員の間でケンカはない事ではないが、根が真面目なケイスは出来うる限り諍い（いさか）はなくしたいと考える。
ここは耐えるしかない。いっそ隙を見て人混みに紛れるか。――いや、騎士団が本当に腰抜けなどと人に振れ回っては困る。
「おらおらっ、腰のそれは飾りか、あァ？」
警備隊員が剣を振り上げる、ケイスが避けるの防戦一方だ。
「何故、暴力以外で解決しようと思わないんですか？」
「お前は何年この世に生きてんだ？　人が二人もいりゃあ争うのは必然ってもんだ、歴史が語ってるだろ？」
好戦的なだけと見るには、あまりにも悟ったような言い分。会ったばかりだが、彼からそんな言葉が出るとはケイスも思っていなかった。
長い人類の歴史、それは戦争の歴史でもある。比較的平和な世に生まれたケイスだが、父親の代になるとそれは戦国時代だったという。歴史書を紐解けば何度も人間は大戦を引き起こしては繰り返す。
「しかし、人は言葉で解決が出来る事も――」
そうだ、あの少女にも何か伝えられる事があったのかもしれないというのに。ケイスは殺人犯であるのに――また彼女を思い出していた。
「そりゃ、キレイ事だな騎士団員さんよ――」

思案していたために油断したケイスは警備隊員に隙を見せてしまった。にやりと笑った男が見えた。
騎士のエメラルドの瞳が見開かれる。
「やりゃあ出来るじゃねぇか」
彼の一撃を防いだのはケイスの抜くまいとしていた剣だった。
しまった。
これでは、なんにもならない。力で解決してしまっては。騎士団に所属しながらケイスは武力に頼るのを好まない。
一度、均衡した力を放つように合わせた刃を弾いて二人は飛びすさった。
真剣味を増したやり合いに、街の者もざわめきを減らして見守っている。
「ははっ！」
こらえきれずといった風に、男は再びケイスに飛びかかってくる。がちりがちゃりと、刃をかち鳴らすと、男はやけに嬉しそうに笑った。
ここでケイスが負けたら騎士団の負けになる、もう後には引けない。だがこのままケイスが勝てば警備隊員との関係は悪化するだろう――。葛藤をかかえながらの戦いだったにも関わらず、何故だかケイスは先ほどよりもこの男を悪くは思えなかった。
実力は伯仲、身体を動かすのは久しぶりではないのに、何故か。
大振りではあるが隙のない素振りで剣が振り下ろされ、ケイスは反射神経を研ぎ澄ますように飛びのいた。
びっとケイスの左腕に赤いものが走ったと思えば、警備隊員の男の剣を持つ右手が叩き落とされる。あわや警備隊員が武器を失うかと思いきや、彼は器用に足を動かし剣を自分に向けて蹴り上げた。
再び、男は剣を手中に収める。
崩れかけた均衡は再び元通り。
こんな男、気を抜いたらすぐに蹴倒されてしまうかもしれない。
もうケイスは騎士団の沽券がどうとか、平和的解決などと考えて

いる暇はなかった。
また、口角を上げた男が迫ってくる。ものを考えている隙などない。ギリギリのところで剣を止めると、バランスを失ってケイスは蹴躓く。
しまった。そうなればいいとも思ったが、バランスを崩した拍子に、偶然後ろ足で男の手を蹴り上げる事になる。
騎士と警備隊員、二人の男は手の中の武器を失っていた。
それでも、どちらにも一歩も引かないという意思が誰の目にも明らかだった。
見守る者の、唾を飲むのが辺りへと広がってゆく。
警備隊員が拳を握った。ケイスは視線を離さずにゆっくりと立ち上がる。
たとえ剣が折れても、拳がある。肉弾戦が始まろうとしていた。
ケイスの瞳と、警備隊員の瞳が重なり合う。
微動だにしなかった男たちの足が宙に浮いた、その時。
「そこまでだ」
よく通る声。まるで銃声でも上がったかのように人々の視線を一気に集めた。
「た、隊長……っ！！」
青ざめる警備隊員。
その名称に少なからずケイスは驚いた。城下町警備隊を束ねる長のものだったからだ。騎士団でいえば騎士団長にあたる。あまり下位の団員に顔を見せる事のない団長だ、城下町警備隊も隊長クラスとは街にも出ず隊員に顔を知られていないものだと思っていた。
「セイディオ、またお前か？」
警備隊隊長はまだ三十代だろう、ケイスが思っていたよりも若い。オールバックにした栗毛の髪、鋭い眼差し。威圧感のある姿はただ者ではない雰囲気を放っている。
ところで、先の隊長の言葉からするとなるほどセイディオという名前らしいこの目の前の男は問題をよく起こすタイプのようだ。ケ

イスとしては警備隊員が全員このようなケンカっ早い男でいては困る。
「隊長、これはその、こいつがですね、」
先にケンカをふっかけて来たのはそっちだろうにと、むっとして相手を見やっても彼は自己の弁護で忙しい。
「無駄な弁明はやめておけ。お前が悪い」
「え〝っ」
まだほとんど何も言っていないのにと絶句するセイディオ。しかし彼が先に手を出したのは確かだ。
「処罰はいつものでいいか？　それとも――」
「いっいえっ！　いつものでっ！」
心底怯えるようではないが慌てるセイディオ、よっぽどの事が待っているのだろうか。しかしいつもの事だと日常茶飯事のようにも聞こえるから心配はないのかもしれない。
「あの、今回の事は私にも責任があります。簡単に挑発にのってしまい…」
気がつくとケイスはかばうような言葉を口にしていた。セイディオも白目を増やしておおいに驚いている。彼はケイスが簡単に挑発にはのらなかった事を知っている。案の定警備隊隊長もどこか疑わしげな視線をよこして来る。
「ほう？」
「それで……どちらにも非があったという事で……その、」
その後どうしようと考えてはいなかった。ケンカ両成敗だからと自分がセイディオの処罰を半分請け負うのも違うような気がする。いや、むしろ余計な波風立てない方が良かったのかもしれない。
名案が浮かばないため次の台詞を続けられずにいるケイスだが、隊長の値踏みするような視線を真っ向から返していた。
若いエメラルドの瞳に何を見たのか警備隊隊長は人の悪そうな顔で笑った。
「そうか。なら良い案がある」

あ、ぜってー良い案なんかじゃねー。嫌そうなセイディオの顔がそう語っていたのを知らず騎士団の青年は身を引き締めた。
「そこの馬鹿には騎士団団長どのに謝罪に行くという赤っ恥をかいてもらおう」
「はいィ?!」
我が耳を疑いセイディオは叫ぶ。
「そこの騎士団員には付き合ってもらおう。丁度、今後の警備の事で話があったしな」
「そ、それは…」
なんと二の句を告げればよいのやら。困惑したケイスを楽しげに見る隊長は更に続けた。
「喧嘩両成敗というのなら、そうだな…騎士団員どのには警備隊隊舎に後で付き合ってもらおうか?」
語尾を上げて疑問形にしておきながら、それは有無を言わせぬ響きがあった。そして得体の知れない何か。
強はただ騎士団員が一人で歩哨するだけだったはずが、事態思わぬ方向へ向かってしまい――ケイスは一体どうなってしまうんだと空を仰いだ。
広く晴れた空は、みずみずしく明るくあたたかい空気で満ちていた――。

8　前進

みずみずしく透き通り、雲一つない晴れた空を見れば少女は腹立たしくなっていく。先の大雨で洗い流されたような空はまぶしいほどだ。

腹立たしいが、こんなにも旅行日和の天気だ。登山日和でもあるのかもしれない。

シュガーローゼは、山中に居た。国境をまたぐブリューケンの巨大な橋が大雨で大破、一週間は修理にかかると聞いてわき道へ飛び出したが、早まったかもしれない。彼女は後悔していた。

山登りは初めてではない。だが、どうにも普通の道を行くよりは疲労が溜まりやすい。その上、この間まで続いた雨が地面をぬかるみに変えてしまっている。歩きにくい事この上ない。足をとられて上手く進めないのが、疲れを増殖させている。

国境を山を通って越える方法は、ない訳ではないのだが、遠まわりで大変だとブリューケン民には聞いていたが、確かにその通りだった。

少女の体力などたかが知れている。それでも、歩かなければならない時に比べれば、ここまで体に鞭打つ必要はないのだとシュガーローゼは知っている。休み休み歩いていた。

ただ少し心配なのが、目的地がしっかりあって山登りをした事が過去にはない事だ。コンパスは持っているのだが、何せ道しるべとなるものがほとんどない山の中だ。迷子になっていてもおかしくはない。方角は分かるのだから、心配ないと思いたいのだが、体の疲れが脳にまで達して不安をかき消せないでいた。

やはり、からりと晴れた空がにくらしい。

雨が原因で立ち往生、晴れでも気に食わない。

しかしシュガーローゼは前に進まなければならない。空の具合など見ている暇はない。

はっきりとした何かに負われている訳でもないのに、どうしても彼女は足を緩める気にはなれなかった。

ふう、と大きく息を吐くと、シュガーローゼは休憩を切り上げてまた歩き始めた。

それからは、うっすらとしか覚えていない。

疲れていたのもあるが、その後起こった出来事の方が衝撃だったからだ。

大雨のために、ブリューケンの橋は壊れてしまった。それだけの威力を持つ雨だ、山の斜面などどうなってもおかしくない。

現に足場はゆるく、雨で流されてしまった地面の名残が見つけられた。

普通の道であっても、山の中というのは警戒をゆるめてはいけない。だが、先を急いでしまったためにシュガーローゼは油断してしまった。

何度目かも分からない休憩の間、荷物を木の枝にかけていた。地面は水気を含んでいたからだ。

荷物はさほどの重さもなく、すぐに取り上げられるはずだった。休憩を終え、立ち上がって木にひっかけた鞄を取ろうとした。足場の悪いところだったと気づいた時に、場所をうつればよかったのだ。

鞄が、枝に引っかかって引っぱっても取れない。一度力をゆるめて、すくうようにしても、どこをどう引っ掛けたのか、なかなか取れない。やけになって、シュガーローゼは勢いよく荷物を引っぱる事にした。力をこめたその時、足場が崩れた。

背後には植物のしげみ、ちくちくと刺さるであろうその上に倒れ

こむはずだった。
奇妙な浮遊感に襲われるまでは、そう思っていた。
「え？」
上空に流れていく背景、気がつかなかった。しげみの奥は崖だったのだ！
少女は背中から地面のない場所へと倒れこんでいた。先ほどまで居た場所があっという間に上方に流れていくのに、鞄だけは失わずにすんだ頭の端では冷静に考えていた。
落ちる。このままだと地面に体を打ちつけられてしまうだろう。シュガーローゼは崖の斜面から生える植物に手を伸ばすが、人間に加えられたスピードと重力が相手ではか細い草木は折れてしまう。
落ちてゆく。もう、地面はすぐそこだろう。
死ぬかも。それもいいかも、と思ったのに、少女の小さな体は水しぶきに包まれていた。
突如の冷たい感触。全身が水の中に飛び込んだのだと分かる。
高所から落下したという衝撃は弱くはなかったが、水の中に飛び込んだ事で怪我の心配はなかった。
だが、流されている。池や沼ではなく川の中に落ちてしまったのだ。シュガーローゼは内陸のシェーン王国育ちだ。シェーンには大きな湖が有名だが、泳げるような水場でシュガーローゼは育っていない。
川の流れが激しいのと、泳ぎが得意ではないのとで、少女の体はあっという間に水の中に呑みこまれていった。

† † †

がっしりとした体躯の四十代の男、いかにもな腕力（パワー）タイプの騎士といった姿。

彼の前には横一列に並んだ男が三人。

「で、コイツがうちのバカにケンカ売ったバカか？」

シェーンの王城の端に騎士団の宿舎はある。そこには訓練所もあり実質、騎士団本部であった。

「はい。すいませんでした、うちの馬鹿が」

無闇やたらと“ばか”の飛び交う空間は、騎士団団長の執務室だった。執務室など一度も入った事のないケイスは緊張を極めて歩を進めたのだが、妙な会話の運びに心の中で面食らっていた。

騎士団団長、警備隊隊長両名から馬鹿を連呼されたセイディィオは心痛ながらなんでおればっかりと不満げな表情だ。

「で？　どっちが勝ったんだ」

「生憎と決着がなかなかつかなかったので私（わたくし）が仲裁を入れた次第でして、どちらが、とは……」

どうせ決着がつくのなんか待つ気なかったくせにとセイディィオは心の中で一人ごちる。

「そうか、実力伯仲か……。やるな、お前のとこも」

にやっと、悪戯小僧のように笑う団長に対し、涼しい顔をしながらも口角を上げて応じる隊長。

なにやら親しげな二人の長のやり取りに、下っぱ二人は顔を見合わせる。

「……隊長ー、騎士団長とお知り合いなんですか？」

「馬鹿ですか。騎士団団長と警備隊隊長は代々、代替わりの度に顔を合わせるしきたりがあるでしょうが」

半眼で睨まれ、ひるんだセイディオだったが今聞きたいのはそういう事ではない。
「いや、そうじゃなくってですね、以前からのお知り合いなのかと」
「残念ながら頷かねばなりませんね」
微笑に本当にどこか残念そうなものをのせて隊長は告げる。
「おいっ、残念ながらってなんだ残念ながらって」
憤慨して鼻息の荒くなった団長に対し、隊長は悪どい笑みを深めた。
「お前は本当に相変わらずだな、キース」
「お前もだろ、ヴィードル」
にやにやと、悪友同士の笑みだ。要は、そういう事だ。
それぞれの部下たちは、一瞬顔を見合わせて、自分の上司を見た後に、その隣りで笑う男の顔を見る。
がっくりと、何かに悄然とするようにセイディオは肩を落とす。
安堵したからだろうが、目を丸くしている。
「なんだ、もっと険悪かと思ってました」
「お前のその思った事全て口にする癖やめた方がいいと思うぞ」
いつの間にやら敬語はどこに、ヴィードル隊長は部下をねめつける。
確かにケイスも騎士団員と警備隊員の仲が悪いので、当然長たちも悪いものだと思ってしまっていた。だが実際は十年来の親友もかくや、というほどに笑い合っているではないか。元々の知り合いが対立するような立場に立っていただけなのだろう。
「で、いつからそんななんですか？」
上司のお叱りもなんのその、思った事をそっくりそのまま口にするセイディオは問うた。
「ふっ、びっくりするぞお前ら。こいつはなあ以前は騎士団にいたんだ」
太い指で警備隊長（ヴィードル）を指して言えば、彼はその人差し指を嫌そうに手で叩き落とした。否定はしない。

「嬉しそうに言うのやめてもらえません？」
非難をこめた敬語だったが、騎士団長には今更だった。
「え……っ」
驚きの声を上げたのはそれまで口をはさまずにいたケイスだった。心のどこかでやはり騎士団から警備隊に入るというのは、隊長という地位（ポスト）が待っていても昇進には思えないという思いがあったからだろう。騎士団の思い上がりだとは思うものの、驚きだった。
「そんなに驚くか、騎士の方の馬鹿」
これで両名から等しく馬鹿呼ばわりのケイスにこっそりとセイディオはほくそ笑む。一方ケイスはそんな事はつゆ知らず、真っ直ぐゆえに失言に近い己の言葉に、またやってしまったと青くなる。
「いえっ、そういう訳ではなく……っ」
じゃあなんだと自身が問うてきて、いつぞやのように二の句が出てこない。
「ただ、その…本当に騎士団と警備隊は齟齬（そご）が多いので意外というか予想してなかったというかなんといいますか」
うろたえながらもなんとか繋げようと口走るケイスを見て当人たちは今にも吹き出しそうになるほど笑いをこらえている。
「お前は真面目バカだなあ、騎士団（うち）のバカよ！」
ばしばしと広い手で叩かれれば前に倒れそうになる。こらえながらケイスはざっくばらんな団長の顔色を窺う。特に怒ってはいないどころか笑っている。隊長の方も同じく。彼らは気にしていないのだろうか。
「騎士団ではどんな教育してるんですかねえ？　警備隊は敵と思え！　と？」
「別に俺（おりゃ）あ何も言っちゃいねえよ。ただ昔からの雰囲気にアイツらは流されてるだけだ」
さほど疑ってもいない隊長の問いかけに、あっけらかんと答える団長の言葉に、ケイスははっとさせられる。
昔からの雰囲気に流されている、とは自分の事だ。別段警備隊を

疎んではいなかったが、やはり心のどこかで自分たち騎士団とは違う存在だと見なしていた。軽んじていなかったといえば嘘になるかもしれない。

「私も……流されていたのかもしれません」

黙っときゃいいのに、とセイディオは呆れた。だが思った事をすぐに口にする自分と似てるなと思っていた。自分よりずっと頭が堅そうで、真面目一直線なところは全く異なるが。自然顔がほころんでしまう。

「おれもだなー」

「なんだお前らなんの暴露合戦だ」

続けたセイディオに、眉を上げて妙なものを見た顔でキース。

「では俺は何を暴露しようか」

「対抗しなくていいっつうの」

ツッコミ役はどうやら団長（キース）の方らしい。一見冷静なツッコミタイプの隊長が適任かと思っていたのに。セイディオは場違いな考えで頭を満たしていた。

「凝り固まった考えを、改めなければいけませんね……」

ほとんど一人言としてつぶやかれた堅物ケイスの言葉は、真面目きった性格ではない三人をわかせた。

「ちょー真面目くん！」

「貴方は他の事でも頭かったいと思いますよ？」

「言えてらー」

ははははと場の空気を非常に和やかにさせたにも関わらず、笑われたケイスは楽しくない。

「どうせ自分は堅物ですよ……」

初恋の相手には「頭かたいんじゃボケーー！！」と言われてついでにそれが初恋だったと気づけたのはずっと後の事だった。

それからしばらくは談笑が続いたが団長が話を切り上げるように声がける。

「ま、なんだな。今回の事でなんだかんだ言って分かっただろ？

警備隊も大した事ないって」
「失礼ですね」
嫌味や不満を言う時は隊長の敬語は発動するようだ。
「お前らが呼びかけろとは言わんが、あんま互いにぎゃあぎゃあ言い合うのはやめろな？　疲れるから。おれが。」
「そうだな。俺も迷惑だ」
「はい、国を思う気持ちは同じはずです、これからはもっと歩み寄るよう心がけます」
至って至極、彼にしてみれば当然の言葉だったのだが、生憎とその場の三人は真面目とは対極の位置にいる三人。何かが笑いのツボにでも入ったのだろう、再びケイスを取り残して笑い出した。
やはり不満げなケイスは団長が用事を思い出すまで彼らの微笑みに堪えなければならなかった。

8　前進（後書き）

かっこいいサブタイトルが思いつきません…（苦笑）

9　山中の邂逅

苦しい
くるしい
苦しいよ、――

喉の奥が、空気を求めてあえいでいる。
そんな事をしたら更に体内から空気と力が抜けていくだけ。
気が遠くなりそうになる。
苦しい。
苦しい――。

†　†　†

意識を取り戻すと同時に、喉からせり上がるものを咳き込みながら吐き出した。
水だ。雨水かもしれない。
体中の水を吐き出そうとするかのごとくシュガーローゼは何もか

もを戻した。
いくらか楽になると周りに気を配る余裕も出来、何者かがすぐそこに居る事が分かる。勢いよく振り返るとやはり人間がそこに座していた。
周囲には木々が生い茂っている。大自然のど真ん中、緑と茶色と黒ばかりが視界を彩る。すぐそこには、若い男がいた。
上半身をぐったりと傾げているシュガーローゼの様子を窺うようにこちらを向いている男。上背のある二十代の男で、髪の色は珍しい藍色。マンダリンガーネットの瞳にはあまり心配そうな色は見えない。
「大丈夫か？」
どこかとぼけたような表情で言われても、シュガーローゼには心配されているとは思えない。
もっとも彼女に心配などという事は疎ましい相手でしかなかったが。
「あんた、誰……。それにここ……」
言いかけて気がついた。山の中だ。そうだ、自分は国境を越えるために山を登ったのだ。そこで――。
「……っ痛……っ」
頭が思考停止を望むかのように痛んだ。
「まだ無理はしない方がいい」
男は咎める色も心配ものぞかせずにシュガーローゼに声をかける。感情がないのではないだろう、元々の性質のようだがシュガーローゼには相手の目的が見えないために警戒をとく事が出来ない。
魔術は体力が疲弊している今は使わない方がいいだろう。相手が今すぐにでも自分を殺そうとしていないのは幸いだが、いつどうなるとは分からない。まして男が相手では、女よりも“死神のキス”を使う確率が高くなる。やつらはこんな小さな少女にも欲情するのだ。この目の前の男がそうではないと言いきれない。
「……そう睨む事はない。そうだな……オレはカルツ。カルツ・ヴ

ァルディー。お前は？」
まだ重力に逆らう元気のない頭でシュガーローゼは考えをめぐらせる。
――この男、なんの目的があって、わたしを助けた？
シュガーローゼは、誤って増水した川に落ちてしまった。それを助けたのがこのカルツとかいう男だ。彼の口からそう聞いたのではないが、状況からいってそうだろう。
身分――名前を明らかにする事でシュガーローゼの緊張を和らげようとしているのだろうが彼女には意味がない。
「何が目的……？」
彼の身なりは麓の町（ブリューケン）の人間には見えない。旅人の服装、一体なんのために山にいたのだ。加えてブリューケンでは近所の手を借りてでも町中大雨被害に逢った家屋を直していた。忙しくて山になどむかってられないだろう。
「何をしに山まで……？」
まさかとは思うが、追手がかかって、もしくはシュガーローゼを死神と知る者が利用しようと生きたまま捕らえようとしているのではないか。警戒どころか睨むを増すアクアマリンの瞳に、カルツは何を考えているのか分からないオレンジの瞳で迎えた。
目の前の彼は、得体が知れずに不気味だという意味で何を考えているか分からなかった“あの男”とはまた違う意味で、読めない。
もしかしたら、何も考えてはいのいのではないかと思わされるのだ。前後の話や態度から何か分からなくとも良からぬ事が飛び出すぞというあの男とは違い、本当に何が出てくるか分からないような瞳だ。
「……山が好きなだけだ」
「……」
本当かよ。ずっと疑いの眼差しで睨みつけていたが更にそれを深めていくシュガーローゼ。
「それで、名前は」
問うでもなくぽんと投げられた言葉。本当に、読めない。読心術

を心得ている訳でもないのにこんなにも何が脳につまっているのか分からない相手は初めてだった。

大抵の人間には目の前の欲望がつまっている。己が名声、財産、地位や権力。食欲や性欲。利己的な意識。

“死神のキス”がで死なない一人目は、得体が知れないが知識欲や好奇心などが見て取れた。とりあえず良からぬ事も。二人目は、正義感やお人好しで溢れていた。最後には感情をいっぱいのせた顔でこちらを見ていた。

しかしこの男は――……今まで出会った誰とも違う。

夕焼け空のようなマンダリンガーネットの瞳は、深くも浅くも見えて不思議な色をしている。

その時、静かな山の中に――小さく、少女の腹部が奇声を上げた。空腹を訴えているのがすぐに分かるような音で。

「何か食うか」

カルツが立ち上がった。恥ずかしいなんていう感情は、とっくの昔に消え去ったと思っていたが、あまりに場違いな音とタイミングの悪さにシュガーローゼはわずかに頬を染めた。

そして自分が気を張ってカルツを睨みつけていたのが馬鹿みたいではないか。こんな弱い面を見せる人間が相手を圧倒させようと気張っていた、なんて。

唇を噛んだ。まだ、相手の狙いが分かっていないのに、どうしてこんな失態を演じてしまうのだ。

早く、上手く動けるようになってこんなところにはさよならをしなくてはいけない。大きく息を吸って、呼吸を整える。

雷を生む魔術を発動させようとする。“あの男”の前から逃げ出した時に使ったものだ。

しかし望むようなものは生まれない。疲労しているからだろう。

「くそ……」

これでは何のために魔術を覚えたのか分からないではないか。こんなに衰弱していては、“死神のキス”がなければどうなっていた

か――。

精神はこんなにもしっかりとしているのに、か弱い子どものような身体が憎らしかった。なんとか半身を起こしていても大丈夫なくらいにはなったが、まだ立てそうにはない。葉のかすれる音と人の気配で、無理矢理にでも足を動かそうとするが意識が通っていないかのように動いてはくれない。

「起きていて大丈夫なのか」

カルツが荷物を持って現れただけだったが、シュガーローゼは不満を存分に顔にのせて応じた。

「もちろん」

立って歩かねばならないのに、それすら出来ない自分への嫌味かとすら思っている。

「……そうか」

納得したのかカルツは座り込み、料理道具を広げはじめた。訝しく思ったシュガーローゼの視線に気付いたのだろう、彼は文句でもあるのかというように見返してきた。

「腹が減っているんだろう？　これから作るから待っていろ」

――食べるわけない

こんな正体の分からぬ相手の手料理などと、信用していないのだからシュガーローゼは口をつけない。絶対に。

小さな鍋に仕止めてあったのだろう鳥や野菜を煮込むと、辺りに食欲を刺激する香りがただよう。

胃の辺りもうならせ、唾液すら分泌させそうな肉の香り。

そういえば、山道の情報収集ために寄った酒場でつまんだもの以来何も食べていない。シュガーローゼは空腹を感じる事が少ないが、空腹になる事はなるのだ。酒場以前には大雨でこもっていたために何も口にしていない。思えば、今シュガーローゼの身体は空っぽで、一体何を燃料として生きているのかが不思議なくらい――何も食べていない。

「出来た」

旅の道具の一つなのか木製の茶碗二つに汁をよそい始めるカルツ。
ごくり。喉が鳴る。
――いやいや、無理だから。
今見ていただけでも毒をもっていた様子もないし、そんな隙もなかった。しかし汁に入っている肉も野菜も、仕止める瞬間も畑から引っこ抜く瞬間ももしくは誰かから買い上げる瞬間もシュガーローゼは見ていない。いつどこでどんな事があるのか分からないのだ、こんな身体をしていると。
被害妄想かもしれないが、何度も疑わなかった事でひどい目に遭った事がある。
「食べないのか」
自分はさっさと食べながらおかわりに顔を上げては杓子も取らないシュガーローゼに目を向ける。
貴方が作ったのではなければね、食べたかも。
そうとは言わずにシュガーローゼは視線を遠い山の稜線に投げた。素敵に湯気をたてるお汁椀を見ないように。
「……食欲……、ない」
ないはずがない。何も胃に入っていないのだから。多分、その先の臓器にも。
「……それも、そうか。随分と水を飲んでいた」
だから、気分が悪くて食欲もわかないのは分かると言いたいのか。
「わたし、どの辺にいたの」
今彼らが居るのは川の下流域の川原、しかしシュガーローゼは上流滝の中に飛び込む形になってしまった。随分と流されたものだ。不本意ながらも助け出された時の状況が知りたくなったのだ。
とりあえず、今すぐに身の危険はないだろうから、これくらいは問いただしてやらねばなるまい。
そもそも下流という事は山も同時に下りてしまった事になる。これは国境（オスティオ）の向こう側か元いた国（シェーン）かの問題で二度手間になるかがかかっているが。

「もう少しばかり上流の方だ」
とカルツは木々に邪魔になって見えない場所を指した。
「お前を引き上げようと川に飛び込んだら、流れが急で一緒に流されてしまったから」
指をシュガーローゼの背後にやってから続けた。
「そこで岸に上がれた」
「……そ。わたし、どのくらい目を覚まさなかった？」
川にのまれてからずっと意識はなかったから、この男に見つかってからはどのくらい気を失っていたのか知りたかった。
鍋の中身を空にして、カルツは茶碗と鍋を手にして立ち上がって答えた。
「……そうだな。人工呼吸してもなかなか目覚めないから死んだと思ったくらいだが……三十分もたっていないんじゃないか」
果たして水を大量に飲んだ人間が三十分も気を失っていて大丈夫なものだろうか。これだけ身体が気だるいのも頷ける。よく助かったものだ。
――いや、いっそ助からない方が……
「……え？」
ぎしぎしと身体が軋むのが分かった。心もだ。
今聞いたのは空耳か？　もしくは違う意味を持った他の単語？
カルツは川の水で茶碗を洗っている。ちなみにシュガーローゼに与えられた汁椀は中身をそのままに地面に置いたままである。ああ、美味しそう――――ではなくて。
「今、なんて……？」
「三十分もたってないんじゃないか？」
「もうちょい前」
「死んだかと？」
「違うっ」
「人工呼吸か？　……ああ、悪い。年頃？　の娘には悪いとは思うが命がかかっていたからな」

なんで“年頃？”で疑問符がつく？！　いや、違う。現実逃避している場合ではない。
「貴方、わたしに、人工呼吸、したの？」
一語一語区切っているのは動揺のあまり。カルツは彼女が怒ったからだと思ったのか少し申し訳なさそうにこちらを向いた。
「すまない……」
「わたしの、唇に？」
「でなければどこに？　口の中に息を吹き込むというのに」
「――――ッ」
気が遠くなりそうだった。
こんな、こんな事。
――本当に？
目の端にしょっぱいものがたまりそうだった。

10　カルツ・ヴァルディー

――ありえない！

人工呼吸というキスと同義語の行為を、死神（シュガーローゼ）にしたという事が何を示すのか。

今、ここに死神にキスをした男性は立って歩いている。生きている。

それはつまり――。

二度ある事は三度ある、とはよく言ったものだ。今のシュガーローゼには皮肉どころか嫌味でしかないが。

もはや、動揺するどころか言葉もないくらいだ。

小さく怪訝な感情を見せるカルツに理由を答えてやる義理はないが、彼の視線も今は痛かった。

もはや、確認をする気にもならない。正義感たっぷりのあの青年のように二度もあの光景を目撃なんて――。

三人目の登場で、合計四回も“死神のキス”の無効化を見てしまった。

それを見るという事が、一体どういう事かは計り知れない感情が彼女に押し寄せる。一言ではとうてい言い表す事の出来ないものが。

「……どうした」

きっと睨み上げると平然とした態度を崩さない男がいて、親の敵を見るような目のシュガーローゼに気がついてないのではとさえ思えてくる。シュガーローゼが“死神少女”だと知らないからこそのこの態度だろうが、どこ吹く風のカルツが憎らしい。

「いつまでもその恰好じゃ寒いだろう。そろそろ麓へ下りるか」

気がついてみれば、シュガーローゼはびしょ濡れの恰好に、毛布だか外套（コート）だかを巻かれていた。ずっと自分の衣服を掴んでいたと思っていたのは毛布類だった。助けたカルツが寒かろうと巻きつけたのだろう。しかしそれを言うならもっと早くに実行しないか。もし

くは着替えを促すとか。冬ではないとはいえもう秋だ、さっきから寒いと思っていたのは男への警戒と嫌悪のあまり震えていただけじゃなかったのか。

気がついたとたんに一気に押し寄せた寒気にシュガーローゼは身震いした。乾いた服に着替えたいという欲が溢れて出そうになる前にそれを抑えこんだ。

今、自分は戦えるような状況じゃない。それなのに見も知らぬ男にほいほいとついて行く訳にはいかないのだ、絶対に。

「……立てないのか？」

まだ試していないが、さっきはその通りだった。だがそれを口にしてはいけない。

「……あなた、旅人？」

「まあ……今はそういう事になるかな」

“今は”という含みを持った言葉にはいささかどころかかなり怪しいところがあるが、“今は”まだ信用していいだろう。彼はまだ何もしてこないし、いい加減にこの場を離れたい。

そうだ、現実的にいこう。

このカルツという男はシュガーローゼの身の上を知らない。正体が知られるまでに上手く利用出来るだろう。

シュガーローゼが他人を信用する時。それは金がからんだ時だけ。だから、提案する。

「貴方を雇うわ。近くの町まで連れて行ってくれない？」

背に腹は変えられない。とはいうもののお金の事はどうでもよかった。今掲げた布の財布の中を全部カルツにくれてやってもいい。

金が関わる時だけ、他人（ひと）は忠実になる。今掲げた財布の中身ははした金ではない。金貨ばかりではないが、かなりの額がある。目の前に金貨を積まれさえすれば、人はどこまでも浅ましくなれる。シュガーローゼのような子どもの話でも信用し、命令を聞くようになる。

「結構だ。元より連れて行くつもりでいた。わざわざそんなもの貰

うつもりはない」
　変わらぬ読めない顔で、断られたのだと気づけたのは一拍後だった。
「え」
　思わずカルツの顔を見直した。表情に変化はない。
　まじまじと彼を見れば思いあたる事がある。
――そうか、金を至上としない偽善者ってワケ
　この世には金で動く人間と動かない人間がいる。その後者だっただけだ。
　しかし当てが外れてシュガーローゼは戸惑った。これではこの男がいつ手の平を返すか分からない。金に惹かれる人間なら金を渡した瞬間か、もしくはもっと多く手に入れられそうなところまでと相場は決まっている。これ以上相手が読めないのはごめんだ。
「じゃあ別にすぐ捨ててもいいから、貰うだけもらって」
　そうしないと不安だった。何故かは分からないが。
　押しつけるようにカルツの胸に財布をやると彼はしばらく黙って返さない。何をしているのかと見上げれば少女をじっと見つめている。マンダリンオレンジの瞳は、少女を映し出しているようで、そうではないようにも見える。
「……」
　嫌そうな顔を微塵も隠さず迎え撃つと、カルツは手に財布を受け取った。
「じゃあ、行くか」
　くしゃりとシュガーローゼの髪を乱して、彼は言った。
　少女は濡れたままのピンクゴールドをくしゃくしゃにされた事ではなく、他人（ひと）に触れられた事でひどく嫌そうに――苦痛そうにも見える顔で、髪の乱れを直した。

町が見えた頃には日は傾いていた。とはいえ町は遠く離れていた訳ではなく、下山した頃には元々昼下がりも過ぎていたのだ。山を下りて麓に町はすぐにあった。

広い湖のある町だった。湖面がきらめいて、夕日を反射している。

「湖……？」

来る時に、湖など見ただろうか。

「ああ、来る時に通らなかったか？　翡翠産出地としても有名なジェードという町だ」

そんな話は聞いていない。シュガーローゼが登山する前いた町は、ブリューケン。名前も違うから当たり前だろうが、ブリューケンは国境沿いだからと隣国の影響が濃い街だったが、ここは違う。

もしかすると、川にのまれてたどり着いた地が既に隣国オスティオだったのではと、カルツに問う。

「もしかして、ここはもうオスティオ？」

「いや、シェーン王国領内だ。お前はここに寄らなかったのか」

その可能性もあると少女の様子からカルツは判断する。ジェードには寄らずともブリューケンの町に向かう事は出来る。最短距離をゆくならジェードには寄る必要がないのだ。

「ってそういえば、早くおろして」

今シュガーローゼはカルツの背におぶわれていた。絶対に嫌だったが少女の疲弊した足は言う事を聞かなかった。動かない足でどうしたらと焦るシュガーローゼに、提案もせず軽々と持ち上げたのはカルツだ。何食わぬ顔でいるが人一人背負って下山するのは面倒だろうに。シュガーローゼは嫌悪感むき出しにしながらも身体が疲れているのだから仕方なしに背負われた。上手く体が動かせないのだから、仕方がない。

「それにもう町に着いた。あんたの雇用期間は終了」

形だけでもカルツを“雇った”と思わないとやってられない。
「いや、宿をとってからにしよう」
「ちょっとー！！　何なの？！」
この男、下山中にいくらか情報収集をはかったがいくら問いを重ねても、反応を見るための台詞を用意しても、「興味ない」「どうでもいい」ばかりを口にする。シュガーローゼの素性にも一切の興味を抱いていないようなのに、何故ここまでシュガーローゼと関わろうとするのか。
前に出会った“お人好し青年騎士”ならまだ分かる。彼はどう見ても困った人間を放っておけないタイプだ。根掘り葉堀り相手の事を聞いたりはしないかもしれないが、少女の名前くらいは聞くだろう。現にケイスは名を問うていた。しかしシュガーローゼは最初に問われた以外に名前はと聞かれる事はなかった。
――本当に、わけが分からない
「だから、おろしてって言ってんだろ！」
おんぶなんて子どものようで恥ずかしいではないか。消えたはずの羞恥心がまた舞い戻って来そうで嫌だ。心なしか人の目が集まっている気さえする。もちろん勘違いなのだが、気にするあまりに人々は嘲笑してさえ見える。
「わかった」
あっさりとカルツは少女の身体を地上へと戻した。
突然の事にずるりと足をもつれさせシュガーローゼは膝から地面に倒れこんだ。顔を打ちそうになり両手でかばうが結局は全身を大地にゆだねるように横たわってしまった。
「……にゃろう……」
「だから言っただろう」
馬鹿にするわけでも、呆れた様子もなくただ淡白に事実を伝えるだけの声。
――お前何か言ったかーーー？！　宿とってからとしか言ってないだろうが！！

しかしながらシュガーローゼの両足は回復を見せていた。立ち上がろうと力を入れればそれに応じる。ふらふらと怪しい足つきで立ち上がったシュガーローゼは、二度足を鳴らして久しぶりに地面を踏む感覚を確かめる。

これならもう歩く事が出来る。これでもう“足”に用はない。カルツとはおさらばだ。

「じゃ、雇われ運び屋お疲れさま」

応じる声も聞かないように気のない挨拶をすまして踵を返す。

現実的に生きてみるために利用した相手――カルツは“三人目”だ、これ以上関わりたくない。

「待て」

強く腕を引かれてはまだ動きのたどたどしい両足は萎えてしまう。踏ん張る事で再びの転倒はなんとか逃れたがまんまとカルツの足止めを食らってしまった。

「宿はどうするんだ」

「その辺で勝手にするからほっといて。それにあんた、得意の『興味ない』はどうしたの？」

この男ほど他人や世間に興味がない人間はいないと思うほどたくさんの「興味ない」を聞いた。

それなのに今更シュガーローゼに関わろうとするのはどうしてなのだ。何故――その先に行き着くのは大抵――“死神である自分”。

やはり最初から、素性を知っていたからわざわざ問う必要もなかったのか。

「別に得意じゃない」

「じゃあわたしが言おうか？　わたし、貴方に興味がないからとっとと消えて」

にっこりと笑った顔には悪意がこってりのっている。

「……そうか」

傷ついたようにも憤慨したようにも見えないカルツ。感情がないのではなく、表に出にくいタイプなのだろう。

シュガーローゼは相手が手を放したのをいい事に、自分が先にその場を立ち去った。

カルツはその姿を見えなくなるまで凝視し続けていた。瞳と同じ色をした夕日の光をその身に受けて。

11　動き出す三者

シェーン王城、騎士団訓練所。訓練の休憩時間に、いつものように友人と他愛ない会話をはじめようとしていた時、ケイスの友人は思いもしない言葉を口にした。

「武道大会？」

「ああ、最近どうにもしけてやがるから、ここいらで一発派手な騒ぎでも起こしてガス抜きっていう話だ」

ハウストの言葉に小さく生真面目堅物青年は眉を寄せた。何故“武道大会”なのだろう。国民の祝日は他にもある。聖人の聖誕祭や救世主の復活祭や聖母の被昇天記念日。加えて近々救世主聖誕祭があるではないか。

「最近治安悪化してるんだぞ？　だから武道大会みたいな血なまぐさいのがいい。そういうの見るだけでもたまったもん吐き出せるってもんだろ」

祭りでも危ないものほど次の日の町民の顔はすっきりしているものだが、何もケンカを目的にしなくても良いとケイスは思うのだが。

「まあ……そうかも知れないけど」

「なんだ、何が不満なんだケイスくんよ」

悪友がどつく。腕でいなしながら口にする。

「さあ……」

自分で自分が分からない。最近、そんな事ばかりだ。

「あー例の婚約者と上手くいってないんだ？」

「ち、違う」

断じて違うと否定しきれないのは確かだ。あれ以来イレーヌ嬢に直接会ってはいない。先だってのデートでの無礼を詫びる手紙を送ってからは、ずっと手紙のみのやり取りが続いている。返事はきちんと返ってくるのだし、順風満帆とはいえなくとも上手くいっていないともいえはしないだろう。

「まぁまぁ、女心と秋の空。頑張りたまえ青少年よ」
結局のところは他人事だ。分かってはいるし、イレーヌ嬢との事で悩んではいない。
どうしても頭から離れないのは、あの少女の浮かべた――……。
『やっぱり、か』
見る者をひどく悲しくさせる表情。笑っていたようでもあるが、泣きそうだったようにも思える。
今となっては過去の事でおぼろげな記憶は確かではないが、どうしてもケイスの胸をつく表情をしていたはずなのだ。
不安だった。何がとはいえないが、何かが。それは彼女の事を考えるとであって――もしかしたらあの少女は今も一人でいるのかもしれないから、自分は心配に思っているのかもしれない。
ケイスは彼女の存在を口にしてはいないが、彼女は人を殺している。それは彼にとって許されない事だ。
それなのに、何故。
「……から、おれらも引き締めてかないとな」
「なにが？」
「武道大会だよ。騎士団員は全員出ろってさ、冗談きついよな」
「……聞いてないよ？！」

† † †

空が落ちてこればいい。
そうして皆さっぱりなくなって、何もかも無に帰せばいい。全部。全部。
今日も昨日も明後日も、無意味なのだから。
着替えてからしばらくどこかの壁に体重を預けていた時だ。
「嬢ちゃん悪いけどそこどいてくれないかね」
翡翠（ジェード）の街は観光業で潤っている。ほぼ貧しいものの通りなどない。
居心地が悪い。
無言でその場を立ち去ると、さっさとこの街を出ようと決める。
妙な音を発する腹に、何かを食べてからと加えた。

安そうな酒場に向かう。それからいつものように好奇と詮索、うっとおしげな視線をかいくぐってカウンターに座る。
「とりあえず、何か胃が満たされるもの」
殊更声を冷やして注文すれば、シュガーローゼが“何かワケあり”と見なした店主は窺うような表情を端にのせたまま頷いた。
ゴロツキのような者も訪れる酒場は男ばかりの空間で、妙齢の女ならばともかくシュガーローゼのような小さな少女は場違いにも程があった。ほとんどこんな年の子どもなど訪れた事がないのだろう、男たちは妙に下世話な目付きでシュガーローゼを見やる。
男たちの視線を集めるシュガーローゼはため息をつきたい気持ちをおさえている。これだから酒場には来たくなかったのだ。しかしこの辺りにはスラム街らしきものはなく、安く何かを食べるならこ

ういった場所しかない。
苛々としながら料理を待つと、どうやら若い男たちが笑いながらシュガーローゼの話をしているのが分かった。精神年齢が低いのか、訳ありな様子を面白がっているようだ。
むっつりと眉を寄せながらもう何も目の中に入れないという表われか瞼を閉じた少女の耳にも、「おいお前行けよ」「お前が行け」という若者たちの声が入ってくる。
おいまさかわたしのところに来るつもりじゃあるまいな、とシュガーローゼはどうしたらこれ以上顔のしわを増やさずにすむか頭痛のしそうな頭で考えていた。
若者の一人が立ち上がった時に、少女の姿を視界におさめた者がいた。
「ここに泊まるのか」
店の奥の階段から降りてきてカルツにはすぐに分かった。小さな体躯の淡いピンクのツインテール。
先ほど別れたばかりの少女だった。カルツはもう一度会いたいと思っていた。必要のない金の返金のために。
対するシュガーローゼは三人目の男、カルツになどもう二度と会いたくもなかった。さっさと街を出るのだったと今更ながらに後悔する。今もまた気安く声をかけてほしくなかった。だから、返事もしない。ちなみにシュガーローゼはこの店の二階にある宿には泊まらない。
当然のようにシュガーローゼの隣りの席に座るカルツ。
「サルーニを一杯」
とりあえず酒。酒場なのだから飲酒をしないでどうするとは思うが酒の美味しさが理解出来ないシュガーローゼには眉のしわを増やす要因にしかならなかった。酒は人を愚かにする。酔っぱらいにからまれた事がどれだけあるか。
酒は百薬の長とはいうが、過ぎると何事も上手くいかないものだ。だから適度な飲酒ならまだ問題ないはずなのだがどうしても―

―好きにはなれない。

「……オレはここの宿に泊まる事にしてあるが、お前は？」

馴れ馴れしくお前などと呼ばれたくはなかった。かといって名前を教えるつもりはない。

「別に」

反抗期の男の子かっていう要領を得ないかつ突き放したような返事に、カルツは特に気にした様子はない。気に障ってどこかへ行ってくれた方が良かったというのに。

「そうか」

「おまちどうさま」

ぶっきらぼうに言うと店主は少女には主食ののったプレートを、その隣りにはグラスを置いた。

「どうも」

律儀にもカルツは応じていたが、シュガーローゼは視線すら返す事はなかった。店主はいかにも訳ありな二人組をさっと見ると小さく肩をすくめ、仕事に戻って行った。

シュガーローゼに出されたものはパンとサラダと肉料理ののった大きめの皿だった。黙々と咀嚼する少女の横にはカラコロと氷を鳴らすカルツの姿。会話を交わさない曰くありげな二人組は、静かに店内の視線を集めていたが本人たちは知らない――というより気にもとめない。

シュガーローゼは席を変わるほどには大人気なくなかったが、早く食べて出ようと考えていた。

本当は酒場で情報収集もしようと思っていたのだが、なんとなく会話の減っていく店内の客にも居心地を悪くしていた。

喉につまらせてはいけないので、よく噛んでラディッシュを飲み下す。しかしこの作業は“食べる楽しみ”を失ってしまったシュガーローゼには面倒な作業以外の何でもなくなってしまっていた。だから空腹も嫌いだし、何も食べずにいられたら良いのにと思っている。

隣りにいる男はいろいろと謎だし、さっさと帰ろう。

「ごちそうさん」

いつの間に飲みほしたのかカルツが席を立つのが分かる。しかし顔も上げずにいたシュガーローゼは、カルツに問うような店主の視線にも、それに目配せしたカルツにも気がつけなかった。

「じゃあ、またどこかで」

再会を望んでいるにはあまりにその感情をのせていない声をシュガーローゼに降らせて、カルツは店を出て行った。この宿に泊まるとは言っていたがどこかで買い物か何かの用があるのだろう。

瞼を伏せたままに咀嚼行為を続けていたシュガーローゼは、なかなか噛みきれない肉に手間取っていた。そしてうっかり塊を嚥下してしまい喉をつまらせた。咳き込む彼女はが水でももらうためむせながら顔を上げると、口を開く前に店主に水の入ったグラスを差し出される。さすがに礼を言おうとは思ったがいち早く喉の通りをよくしたかったので、一気にグラスをあおった。その後何度かむせながらも食道の通りを通常のものに戻す事に成功した。

「……どーも」

幼い少女に気だるく言われれば、心配になるもので店主もわずかに気づかうものをのせた表情で問う。

「大丈夫かい……？」

まさか声をかけられるとは思ってもみなかったシュガーローゼは小さく身動ぎすると、頷いた。

ほんのわずかに首を引いただけのようなものだったために「大丈夫」と付け足した。余計な注目を引きたくはない。心配されても困る。

まだ何か言いたげな店主にうっとおしく思い、残りの食事をかきこむと席を立つ。ふと、ついた左手の隣りに何か見たことのあるような物体を見つけた。

布袋、それはつい数時間前にはシュガーローゼのカバンの中にあったもの。

カルツに渡した財布だ。
記憶を巻き戻すと隣りの席には先ほどまでカルツが座っていたから、いつの間にか置いて行ったのだろう。あくまで雇われたつもりはなく賃金は要らないとつっ返してきたのだ。それならば正面からつき返せばいいものを何故こうも間接的に返すのかが分からなかった。
正面からこられても、シュガーローゼは受け取るつもりはなかった。もしかしたら数時間しかつきあっていないのにカルツはそんな彼女の性質を見抜いていたのかもしれない。だとすれば直接は手渡せないからと、こういう行為に出たのか。そこまでしてシュガーローゼに金を返したかったのか。訳が分からない。
逡巡しているのが分かったのだろう、店主が声をかける。
「さっきの兄さんだよ、それを置いて行ったのは。どうも君に渡したかったように見受けられたが」
少し前、彼はカルツが自分のお勘定の他に置いた財布に視線をやった。するとカルツは黙ってくれとでもいうように店主に視線を投げ、それから一瞬少女を見たのだ。それで店主は何かあるのだなとは思ったが、君に渡したかったの下りは店主自身の推測だ。
ふと何か犯罪に関わる物品の受け渡しだったのではというような可能性に気がつき、少女を窺うように盗み見た。しかし少女は布の袋を急いで隠す訳でもなく、何か危ないものでも入っているのではという店主の疑いは晴れそうだった。
しかしそのまましばらくシュガーローゼが財布を手にしないのが気にかかった。適当に食器磨きをしながら横目で窺う店主。
ふう……と長い息を吐き出したシュガーローゼは不満そうな表情で布の財布を手の中に入れた。その財布の中から食事代をカウンターにのせて店を出た。
財布が返ってきたのはもうどうでも良かった。とりあえずカルツにはやっぱりもう会いたくないという思いは増していった。

†　†　†

王都をぐるりと囲った城壁の端、淡く霞む遠くの山々より手前には王都の象徴のような巨大時計台の尖塔が見える。

この景色をもう一度見る日が来るとは彼の脳内には入れていなかった考えだ。

「久しぶり、になるか」

「何がだお前。ちっとも顔を見せないでいたのはどこのどいつだ？」

「もう二度とこの地に足を踏み入れるつもりはなかったんだがな」

黙りこむ相手に、別に自分は王都を避けていた訳ではないと告げようとしたが、結果的にはそうなっているのだから関係はないかと思い直す。

王都を避けていたのではない、王都が彼を避けていたのだ。シェーンが彼を追い出したのだから、本来ならば二度と足を踏み入れてほしくなかっただろう、王城の人間は。

特に用もなかったから訪れる事のなかったこの地に、今こうして立っていても何の感慨もわかない。要は口で言っているほど彼は王都には何も感じていないのだ。

ただ今は、面白い事がありそうだから、またここに訪れた。

そう、例えば死神が居るとか。

自分のある基準を満たせば、過去に捨てた場所でもなんでも行こう。例えそれが地獄でも。

声もなく、静かに口角を上げた彼に、相手は相変わらずだなと言いながら呆れた視線を投げてやる。気にする事もない彼に、はあと一つだけ息をつく。

「行くか、アスト」

さわ、と黒い髪が風に揺れた。

「ああ」

闇を閉じこめた瞳が、ひどく怪しく光って、企み顔に一層の凶悪さをもたらす。

二人の男が、関所からの道を王都に向かい歩いて行った。

11　動き出す三者（後書き）

なんだか他視点ばかりで読みづらいことになってて、
すいません；；

12　ルブラン家

王都シェーンの郊外に、貴族の住む館が密集する地区がある。城下町の庶民には、貴族街（きぞくがい）と呼ばれているが正式にはデュッセル地区という。貴族たちの文化交流は王城をのぞけばここから始まる。

地位でいえば下級にあたるが歴史ある家柄のルブラン家も、デュッセル地区の隅に居をかまえている。

騎士団員になる者は全て宿舎住まいになる訳ではないが、ケイスは実家から王城に通ってはいなかった。距離的には少し遠いからというものが表向きの理由だったが、その本当の理由は友人であるハウストすら、知らない。

貴族街の古い館、その一つのルブラン家に、ケイスは呼び戻されていた。ルブラン家の屋敷の中で最も重要な部屋、屋敷の主の書斎の中に居る。昼間だというのに、この重厚な印象の部屋には暗い色調の調度品や家具ばかりでどこか薄暗く感じられる。窓の外の明るい日差しとは隔絶されたような世界。

目の前に座る男から発せられた言葉が瞬時には信じられなくて、ケイスは繰り返すように問い返してしまう。

「イレーヌさんが、武道大会を見たいとおっしゃっている？！」

表情もなく首を傾けるだけで是と表わす伯爵を前に、改めてケイスは彼を見る。

頭に白いものが混じる六十前の男。ルブラン家当主、ベネディクト・カール・ルブラン。角ばった顔に、眉間のしわは何十年も前からのびないまま。蒼い瞳は海底のように冷たげだ。

厳かとか謹厳実直というのはこのルブラン伯爵のためにあるのではないかとケイスは思う。

質実剛健で、真面目な性格の伯爵は自分にも他人にも厳しい人間で、引退したが元は王国騎士団員だった。彼の前に立つ時には常に緊張を強いられる。ケイスには、どこか恐ろしくすらある。

しかし今は彼と話している議題も問題だった。
婚約者でもあり伯爵が懇意にしているヴェーネン公爵の愛娘でもある、イレーヌが武道大会を観戦したいという発言には素直に首を縦には下ろせない。
「開催するのは下町で、正直あまり安全とはいえない場所なのですよ……？　そんな事、公爵はお許しになられたのですか」
貴族の前で見せ物のように試合を騎士団が行う事もあるそうだが、今回のように庶民のために彼らの住む場所で行う武道大会などは初めての試みだ。それは貴族のためではないため当然貴賤を問わず観戦を可能にする。つまりは武道大会場外でもひと暴れしてやろうという輩がいないとも限らない事もさす。要は貴族令嬢が行くには危険――。
「問題はない」
六十になろうというのに低い声はやけによく通る。小さな子どもなら普段の彼の声でも背筋を伸ばしてしまいそうな、威厳ある声。そして小さな子どもでもないのに姿勢を正して、そして耳を一度疑ってしまうケイス。
「……は？」
「私と、公爵とが同行する。構わないだろう」
手を組みなおし、六十年生きようとも錆び付かない鋭利な視線でケイスを見やる。
会場が城下町、庶民の街だからといって貴族が行って悪い訳はないだろうという問いだった。あまり貴族は来たがらないだろうが、もちろんそれは構わなかった。
しかし何故、何故……伯爵まで同行する必要があるのだろうか。
「なっ、何故、イレーヌさんだけではないのですか」
「護衛が必要だろう」
「い、いえそれは別としまして……」
「私が行って何か問題でもあるのか」
「ありません！！」

とりあえず全身が脊髄反応でそれだけは否定しとけというので従う。しかしその後に一体なんと続ければいいのやら。嫌ではないのだ。ルブラン伯爵には一言では表わせない感情を抱いているとはいえ、日ごろから尊敬し、感謝している。

だが、どうにも今回のようなシェーン王都はじめての試みの中で、更に緊張を強いられるようなことはあまり歓迎したくない。

「ですが……わざわざ、お手を煩わせるのは……その、」

「ちょうどお前の腕を見てみたかったところだ」

腕とはもちろん、ケイスの二の腕などではない、念のため。剣の腕だ。

やっぱりかと、ケイスは心中のみでうめく。伯爵に見られて困るようなものは特にないが——剣の達人で、騎士団の副騎士団長までおさめた彼に剣術の成果を見せるというのは、未熟者を自覚しているケイスには酷なものがある。

ある程度の年齢まで剣の師匠でもあったのがこの目の前に居る男だ。そして彼はケイスに厳しい。剣の稽古も過酷だった。

それはつまり、かなりの真剣勝負を要求されており、初戦敗退などもっての他。授業参観のようなものとすら思えない、全く手の抜けない試合が必要だという事だ。手練れの者ならまだしも、ぱっと出のひ弱そうな人間に負けた時には——……。

——晩ご飯抜きになるッ…！！

戦慄が背中を駆け抜けた後、ふと自分は今騎士団宿舎に住んでいるために家を閉め出されるとか食事抜きにされる心配はないのだと気づく。

ケイスは幼き頃の苦い思い出から抜け出せない自分に、今はもう大人になったのだからと思い直す。

そして、結局ケイスは伯爵（ベネディクト）には逆らえない。心の中でだけ大きくため息をつくと、拳を握るような気持ちで伯爵に向き直った。

「入場規制はかけないという事でしたから、問題ないと思います」

頷く伯爵。立ち上がって話はもう終わりだとばかりに机に向かう。

椅子を引いた後に思い出したでもなくつけ加える。
「失態を演じる事のないように」
一瞥の瞳には失敗を許さない光があった。どんな言葉よりもケイスの身を引き締める鋭い視線。
「もちろんです」
伯爵は自他共に厳しく接する人間だが、情がないわけではない。自分にも他人にも高い技量を求め過ぎるきらいがあるだけなのだ。無論それは伯爵に才能があるがゆえではあるが。そのため才なき者には手厳しいとは思われがちで、非情な人間と見られやすい。そんな事はないのだが、特に身内に厳しさは増すためにケイスは心のどこかで恐れている。
失敗は許されない。
彼の前で何度も心に刻んだ思いを、再び強く刻みこむ。拳の中にそれを閉じこめるようにして、真っ直ぐ前を見る。
伯爵はケイスの存在を気にする事なく執務にむかっていた。いつもの事なので短く退室の旨を口にすると、伯爵は何も言わずに頷いた。
重厚な扉を閉じてやっと、ケイスははりつめていた気を緩めた。
「……はあ……」
廊下を歩けばため息が出て、我ながら情けなく思う。ただの授業参観だと思えば何ともないはずなのだが。どうにも伯爵には身構えてしまう。加えて忘れてはいけないが公爵父娘の存在だ。婚約者本人と婚約者の父親というある意味最強タッグだ。
――……なんで、こんな事に……
もっと気楽な、庶民の娯楽のための催しのはずが何故ケイスにとっては試練か何かのようなイベントになってしまうのか。
決して嫌ではない、むしろ婚約者へ勇姿を見せるいい機会なのかもしれない。だがしかし、もっと違うものを求めていたはずで――
ケイスはもう一つ息を長く吐き出した。

13　悩める青年とその友人

シェーン王国は、城下町を中心に栄えている。城下町が今、にわかに浮き立っているのを町の者はみな知っていた。普段は王城にこもっているはずの騎士団員が城下を徘徊し、城下を守る警備隊員が王城へと駆ける姿が見られるという、常にない光景も町民の興味をそそっていた。

武道大会間近にもなれば、騎士団員は誰もが忙しく走り回っていた。まず、主催が騎士団だということと、城下町警備隊との連帯の行事であるために相互協力が必要だという点が問題だった。ほとんどない事なので騎士団と警備隊の行き来だけでもスムーズには行かない。軋轢のあった二つの組織だからいざこざも起こる。それは問題の一つでもあったが、普段肉体労働しかしていない下位の団員も事務仕事をしなくてはならないという点でも騎士団員たちは手間取っていた。

警備隊との連携をとらないといけないために事務仕事が多くなってしまうのだ。ケイスもまた、単純作業には違いないが事務仕事を与えられて忙しく立ち回っていた。

「ケイス！　これ、西南部詰め所に持ってってくれ」

「はい」

机の上の書類を片付けて、ばたばたと部屋を出ていく青年。彼は、数日後に待ち受けるのがあまりうれしくないメンバーによる歓迎ありの行事だとしても、今はこの忙しく走り回る状態を好ましく感じていた。

普段の体力強化や稽古のような身体を動かす作業も良いが慣れてしまっているためか、考え事が出来てしまう。今の事務仕事は不慣れなために、こなすのが精一杯。考え事なんて、している暇がない。

城下町に出てしばらくすると、警備隊員に声をかけられる。

「ケイス！」

濃いこげ茶色の短髪の、どこか強面（こわもて）な男だ。しかし人懐っこそうな表情が少し彼を気安く見せている。

ケイスに半分八つ当たりでケンカを売ってきた警備隊員、セイディオだった。

「セイディオ」

よっ元気か、とでもいうように左手を軽く上げる青年は、初対面の感じの悪さを払拭した笑顔で寄ってくる。

ケイスは警備隊員との親交を強制的に深めさせられる出来事があってから、セイディオとは特に親しくしている。警備隊宿舎に連れていかされ、一体何をさせられるのかとそわそわしていたケイスを待っていたのはリンチでもなんでもなく、数人の警備隊員との談笑の機会だった。それからセイディオは騎士団員への偏見を改めた――といえたらよいのだが、ケイスのようなお人好しばかりではない騎士団、そうはいかなかった。だが拳で語り合ったといえば聞こえがいいが、ケンカを売って八つ当たりした相手であるケイスにはやはりセイディオは気を許していた。

それからケイスの親友でもあるハウストとも、セイディオは気が合ったようで一度三人で会っただけだというのに、何度かセイディオはハウストと会っているらしい。歩哨に城下町まで来て、城下町を庭と豪語するセイディオに偶然会って話をする程度だが。共通の知り合いであるケイスがいるからか会話ははずんだらしい。

ケイスにしてみれば、時々からかいを含んだものをもらえる眼差しが二つ増えたという事でたまにうれしくない。もちろん、友人関係が広がるのはよろこばしい事だが。

ハウストもセイディオも似たところがある。人当たりよく大雑把であっけらかんとした話し方。

豪快だったりおおらかだったりと、共通点が多い。反面、セイディオの方がケンカっ早く、怠け癖があるが、ハウストは見た目に反して面倒見が良いところもあるし、鳥の観察が好きだ。

たわいもない考えがつらつらと脳内を流れていったのだが、いつ

の間にかセイディオのケイスに語る物語も流していってしまったようだ。
「お前っ、聞いてねーだろ」
不満げな表情は、まるで反抗期の青少年かのようだ。少し凶悪な顔になるのは仕方が無いが、彼はケイスと年もそう変わらないはずなのだが、そういった表情がよく似合う。
「はっ、ごめん何?!」
「だから、お前も武道大会出るんだろ? 決勝で会おうなっ」
「ああ、セイディオも出るんだったっけ」
「そ。だからお前、初戦敗退とかしょっぼい事すんなよ!」
「いや、さすがにそれは……」
伯爵が許してくれない。そんな情けない事を口にするわけにはいかず、また自分自身初戦で負けるような腕ではないはずだと信じている。
「ハウストも出るしな。楽しみだ」
ケンカっ早さを誇るセイディオはにやりと笑う。戦闘狂の欠片を見せる彼にケイスはやや気圧されたように眉を寄せた。
「つか、なんで騎士団は全員出場なんだ?」
「ああそれは……はじめての試みだろう、万一、一般募集者がいなかったら困るからって事で」
「なるほど。警備隊もなるべくは参加しろって言われてはいたが、騎士団員の方が人数少ないし……そっち全員出りゃ問題なしか」
「幸い、騎士団全員が参加しなくても問題ないくらいには参加者は集まったから意味がなかったかな」
「ま、いいんじゃねえの。でもそんな長々とやるのか武道大会」
「いや、騎士団員の方で人数調整をする事になっている。僕は出ないといけないけれど」
「お。やる気だな。つか出ないといけないのか? 何かあんのか」
「い、いやそんな事より。最近何かなかったか、変わった事とか」
裏町死因不明大量殺人事件の犯人の手がかりとか。死神と名乗っ

た少女の手がかりがほしかったのもあるが、主に話題転換を狙っての事。

「ん……？　別に何もない。あ、そういやあの隊長に客人が来るという珍事ならあったな」

「珍事……」

何故、警備隊隊長に客が来ると“珍事”なのだ。眉を寄せるケイスに、愉快そうにセイディオは説明してやる。

「隊長に仕事関係以外の友人なんていねーんだよ。性格悪いからさ」

からからと笑って言うが、それは果たして断定してしまっていいのだろうか。平隊員であるセイディオとさえ気さくに話す隊長だが、そこまで知りきった相手ではなかった気がするのだが。

「そんなにか？」

「ま、よく知らねえけど」

威張りくさったセイディオに、そういえばこの男は謂れのないけちをつけて自分に喧嘩を売ってきたなあと思い出す。よく知らない相手にも、勝手な思想を抱くゆえのあの行為だ。隊長をよく知らなくとも普段の行動から決めつけているのだろう。

「お前な……」

相手を知らずに決めつける。それは偏見というものだろう。偏見というのは相手を知ってからも出来るものだが、まず知らないと何とも判断を下せない。判断してはいけないのではないか。まず、相手を知ってから決めるべきなのだ、相手がどういう人間かを。

セイディオがいい例だ。ケイス自身も警備隊とは極力関わりたくないと考えていた。よく知りもしないで。しかし実際ケイスをはじめとする警備隊の隊員や隊長などに接してみて、分かったのが知り合う前の自分の愚かさだ。

何も知らないから、人は未知のものを恐る。それは仕方がない事ではあるが、知る事は出来る。

生身の人間が、生きている限り相手の事を知る事は出来る。それは相手を理解する第一歩になる。

だから――知りたいのかもしれない。あの、少女の事が。

「んで、武道大会に意気込んでる理由はなんだぁ～？　お前、けっこう争い事嫌いのくせに」

げ、その話に戻るのかとケイスは苦い顔になる。そんなものは掘り返してくれなくて良いとばかりに職務に戻ろうとする。そもそもケイスは元々、仕事で出ていた。

「仕事中だから」

「はっはっは、騙されないぞ。オレはハウストにお前が無駄に口をすぼめる時は、家がらみと女がらみとだけだって聞いてんだ」

にやり、実に楽しげに笑うセイディオの笑みは何故かケイスをからかうハウストの顔にそっくりだった。白目を向きそうなくらいに遠い目であさっての方向をさまようケイスの瞳も見ずに、セイディオは続ける。

「家はよく知らんが……女がらみだろ！　どーせ彼女とか見に来んだろ！　どーだ薄情しろッ」

ハウストめ、余計な事を……と恨みをこめた目で王城あたりを睨みつける。

そして実は家も女も関わっているのでダブルビンゴだ。何故ばれているのだと、分かり易い自分自身にげんなりするケイス。

「じゃあ、武道大会で」

無難にノーコメントですませると、足早に去った事で事態を解決させるのに成功した。そもそもが仕事中で、こんなところでセイディオと話している場合ではないのだ。彼も追いかけて食い下がるほど暇ではなかったらしく、上手くまけた事にこっそりと安心する。

別に、伯爵と公爵父娘が観戦に来る事ぐらい誰に知られようと構わないし、どうせ当日には分かってしまうのだ。だが、それまでにハウストとセイディオに知られれば、からかわれるのは目に見えている。それは避けたい。

なんだか最近、ケイスは情けない事ばかりを考えているような気がしてならない。

「……はあ」

ため息まで、増えた。悩める十代かという自分のため息にすら、残念に思う。

14　ふたたび会う

生地（せいち）であるシェーン王国を抜け出そうと少女が決めてから、もう二週間がたっていた。

しかし彼女は未だにシェーンを脱出できていなかった。

ジェードの町から、隣り町でもあるブリューケンにたどり着くのにそう時間はかからなかった。とはいえ疲労した少女の足では三日もかかり、これまでにあった出来事が彼女を悩ませていた。

「だる……」

財布は戻ってきたが、特にシュガーローゼの気を安らかにはしなかった。むしろ先行きを思うとこの財布の重みすら疎ましい。

何が原因だか知らないが、彼女にはよくある事で――何もかもやる気がしなかった。

“死神のキス”のきかない相手が三人目とか、どうでもいい。

未来の事なんか考えたくない。何一つ良い事なんて待ってはいないから。何故ここに自分が立っているのか分からない。その足を動かすようなものは何もないのに。

「はやく死にたい」

国境沿いのブリューケンについて、久しぶりに宿をとっても寝台から身体を起こす事が億劫でならなかった。

頭が重い。

ここ最近は比較的平和だった。彼女が真面目騎士と出会って以来、誰にも“死神のキス”をあげてはいない。

そのせいかもしれなかった。彼女の足を無意識に動かすのは、危険からの逃避。自らキスを送る事は少ない。我が身に降りかかる危機から逃れるために、シュガーローゼは走る。何も考えずに。

本能的な行為。

危険が迫らなければ必要のないもので――足を動かしてきた。

だからだろう、立ち止まったら何もない自分に気づくのは。それ

を否定したくて死を望む。そんな事は自分には許されないのに――。

一日後には、シュガーローゼは宿屋を出た。

宿を出たその日。ブリューケンの巨大な橋、大雨で決壊した橋が直り橋を渡れるようになったと知った。

国境をまたぐ橋の前にはにわかに人混みが出来ていた。野次馬である町民と足止めをくらった旅人たちの塊だ。

それを見て、人混みが嫌いなシュガーローゼはゴキブリを見た主婦のようにうんざりと顔をしかめる。

「もう通れますよ！」

最終確認をしていた町民の声に、急ぐ訳ではないが常よりは濃い密度で橋を行く者たち。

人気が引いたら後に続こうとシュガーローゼは少し離れたところからその様子をぼんやりと視界に入れていた。ふと、何かあまり目にしたくないようなものを見た気がして、瞳を瞬いた。見慣れてはいないが、ここ最近何度か見たもの。濃い藍色の短い髪。

それは人の頭で、その脳みその中身は透過不可能。

そしてあの頭は、シュガーローゼに突き返したものがある。思い出して突然、何だか対抗したくなる。腰のポケットに入れたままのそれを頭目掛けて投擲（とうてき）した。

命中。

カルツは頭に投げつけられた財布の衝撃で顔を左右に回した。

――ざまあみろ。

返されたから返し返す、もはやいたちごっこにハマりかけていた

がシュガーローゼは非常にすっきりした。頭痛の八つ当たりだったのかもしれない。

絶対に財布を突き返してやろうと決めこんでいた訳ではない。ただそこに頭があって投げたくなったから。

そして財布を拾い上げて持ち主を探していたカルツは探していたものを見つけた。近づいてくる影は分かってはいたがシュガーローゼは踵を返しはしなかった。

「奇遇だな」

また会った事、そしてこれも。と言わんばかりに財布を掲げた。もうどちらの手に渡ってもなんでもよくなってはいたが、シュガーローゼはどうしたものかと思案する。

「ドーモ」

軽く憎しみをこめての財布投擲だったが、カルツ自身には特に感慨は抱いていない。彼は余計な詮索をしないし今のところ害をなすような存在ではない。

会いたくはなかったが、かといって逃げ出したくなるほどではなかった。もはや、カルツの存在は――なんか、もう（どうでも）いいや。と思わせるようなものになっていた。

表情のほとんどない彼は人畜無害そうでもないのだが、どこか独特の雰囲気が人の警戒を解く。

「国境越えか？」

この場所に居るという事は当然そういう事だろうと分かっているのだろう、ほとんど確信してのカルツの言葉だった。彼は手の中の元シュガーローゼの財布を小さく空中に投げては受け取りジャグリングもどきをして遊んでいるかのようだ。

相変わらず、表情は読めない。ぼけらっとして何も考えていないようにさえ見えて、あながちそれは間違っていないのではとシュガーローゼが思うほどだ。かといって脳みそが筋肉やプリンで出来てそうな印象は受けない。理知的に見える事もあるのだが、まるで脳ある鷹が爪を隠すようにも思える。

「……まーね」
ジャグリングもどきが止まらないので答えてみる。なんだかうっとおしかったのだ。それが止まりそうな気がして答えただけだ。
「それで、連れはいないのか？」
また答えが分かっているだろうに、カルツ。
“死神”のシュガーローゼに同行する人間なんて居るはずがなく、愚問どころか彼女を不機嫌にさせる。
「居るように見えます？」
目が悪いのかと言わんばかりのすがめた目を投げれば、何故かカルツは眉を上げる。どういう反応だと思い――彼の感情は読みにくい――上目づかいに睨む。対するカルツは顎に右手をそえて思案顔。
「……雇わないか、オレを」
耳を疑ったし、爽やかな風にのせて、その言葉をどこか遠方の地に流してしまおうかな、とシュガーローゼは思った。ゆえに反応が遅れた。
「……は？」
彼は透き通った瞳の向こうに何にも隠していないような眼差しで、補うように言葉を重ねた。
「これで、国境越えた街あたりまで」
元シュガーローゼの財布をぽんと空に浮かせばせて手の中にキャッチ。
「用心棒か何かとして」
こみ上げる笑いは歓喜からのものではなく、嘲笑に近かった。小馬鹿にした眼差しで、シュガーローゼはねめつける。
「はあぁ？」
街のヤンキーだってそんな風にはケンカ売らないよっていう低い声で、少女はくだらない事を口にする男にメンチきった。

15　ミファク族

やっと国境を越えられると思ったのだが、シュガーローゼに新たなる問題がふりかかった。

「断る！！」

ダン、と強く拳を机に叩きつけて、少女は不満を主張した。

立ち話もなんだし、と酒場に来るのも嫌だったが、また空が曇ってきたので雨に濡れたくない一心で屋根の下に来た。しかしシュガーローゼがカルツに付き合っているのではなく、カルツが勝手についてきたのだ。

本日の議題は『カルツをシュガーローゼの護衛に雇うか否か』。

酒片手（サルーニ）にカルツは護衛をさせろと、シュガーローゼは拳を振り下げて断固拒否している。

「第一、あなたにわたしを護衛する理由も益もないはず！　怪しさ満点だっつうの」

「……それもそうか」

「そうだよッ！　意味がないし意味が分からない！」

「ふむ……」

着々と刻まれていくしわの中に、苛立ちを隠すものはない。今だって、こんないろんな意味で面倒くさいヤツと関わりたくないのだ、シュガーローゼは。やっぱりさっさと逃げよう、と席を立ち上がる。

「そっちが先に財布を投げてきた。それは雇ってほしいととれる」

「とるなッ！　わたしはあんたに物が投げたくて、近くにあったものを投げたらたまたま財布だっただけだよ！」

「オレに益ならある」

「……？」

そっと声をひそめるカルツ。

「関所を通るには、怪しまれたくない。男の一人旅より、兄妹二人だと思われた方が好都合なんだ」

「はぁ？　似てない兄妹が二人で旅の方が怪しいでしょ！」
「……あまり、言いたくはないんだがな」
常人なら、困った表情や嫌そうにしながら口にしそうな言葉も、この男にかかれば明日の天気が晴れるかどうかとでもいうようないたって平坦な口調になる。
「警戒されているんだ、この容姿は」
「は？」
言われて見れば、カルツの短髪は藍色。瞳はオレンジだ。他人の容姿にあまり頓着しないシュガーローゼだが、改めて言われてふと思いつく事がある。
カルツは、北の島国の出身だ。ミファク族という、藍色の髪とオレンジの瞳を持つ北の島国の人間でもある。
北の島国には長い迫害の歴史があり、狭い北の島を抜け出してきたミファク族はどの地でも受け入れてもらえずに流浪の民となっている。また、ミリヤール帝国の支配を受けた過去があり、何度も帝国と戦禍を交えた末に形だけの独立を果たした。帝国との関係は友好ではなく、ウィディト大陸の人間としては北の島国の人間というだけで扱いにくい者と見なしている。帝国に睨まれたくないために北の島国の人間を、迫害する地域すらある。
つまりは、我が身かわいい一般人には関わりたくない人間なのだ、北の島国の者は。更にミファク族は北の島国でも特に大陸の人間との容姿の乖離が見られ、北の島国の人口の多くがミファク族であるために、藍の髪、オレンジの瞳というだけで忌避される。
「……あ、そう」
だからといって、シュガーローゼにはカルツがミファク族だろうが大陸の人間だろうが関係のない事だ。どちらにせよ自分と関わらないでほしいと思う。
「シェーンを中心に活動しているレジスタンスの一人が、ミファク族なんだそうだ。更にそのミファク族は男で、旅人を装って大陸を放浪しながら各地の情報収集をしているという」

「……」

少女の瞳には、ソレあんたなんじゃとカルツを疑う気持ちがあった。他人事のように言っておいて、自分自身の事を平気で語る人間はいるのだ。とはいえ、何故だかカルツにはレジスタンスなどという職業は似合っていないように思えたが。

「ミファク族は迫害の結果、定住が出来ない。そのためミファク族の旅人は少なくはない。余計な疑いをかけられていて困る」

普段から普通の旅人として過ごしていても、ミファクだからと面倒事になるのはカルツの過去に実際あったのだろう。なるほど筋の通った話だ。カルツの言いたい事はよく分かる。

「それがどぉしてわたしの護衛になる訳っ？　第一、自分にやましいトコロがないなら、堂々としてればいい話でしょ」

ほんのわずか、カルツの眉にしわが寄ったような気がする。黙り込んで二の句がないが、それでも顔の上に感情らしきものが見当たる事はない。少女の言葉をどのように受け止めているのか、量りかねる。

シュガーローゼは彼の沈黙を自分の都合が良いように解釈する。

「交渉は決裂ね」

話は終わりとばかりに、立ち去ろうとシュガーローゼは机に手をついた。

「一度、あらぬ疑いをかけられて……役人を怪我させた事がある」

はあ。とどうでもよさそうに顔をしかめたシュガーローゼ。彼は意外にケンカっ早いようだ。

「関所を抜けるまでいい、余計な事は起こしたくはない」

シュガーローゼだって、面倒事には関わりたくない。ミファク族が厄介な事に必ずつながるなどと彼女は思ってもいなかったが、全人類と関わる事は、シュガーローゼにとって“面倒事”なのだ。

あの二人を含めて、“死神のキス”がきかない相手なんかは特筆すべき関わりたくない相手だ。

ましてやカルツもその筆頭。

仮にカルツがミファク族でも“三人目”でもなかったとしても、シュガーローゼがシュガーローゼである限り、誰とだって同行などと関わりあいになりたくない。

「なるほど、あなたにはとぉっても益があるようね！　でも、わたしには何もない」

見返りが護衛、なんてお笑い草だ。そんなものは要らないのだ。

「オレが護衛では満足出来ないか」

「わたしに、護衛なんて必要ないの」

シュガーローゼの容姿からは、とてもそうは見えないとカルツは考えているのだろう。まじまじと少女を見る眼差しには表情は読めなかったが、そう思っていてもおかしくはない。

「オスティオ王国に、訪れた事は？」

一見関係のない話の運びだとは思えるが、これから向かう地の事だ。何か関係があるのだろうと渋々ながらシュガーローゼは口にする。

「ないけど」

「それならば、関所の厳しさも知らないのも頷ける」

「え？」

オスティオの関所は、一人旅に特に厳しいというのだ。元々そういうきらいがあったものの、レジスタンスを警戒して通行審査を強化しているらしく、怪しい人物には問答無用でとりあえず拘束だという噂があるとか。ありそうではあるが、真偽のほどは定かではない。

「それ、本気で言ってんの？」

誰かれ構わず疑ってかかるのはシュガーローゼの癖になってしまっている。過剰な自己防衛のためだ。

「この町（ブリューケン）を抜けるのは容易い。それは、オスティオの関所が厳しいためにそちらに任せきっているきらいもある」

と、またカルツのもっともらしい話が続く。彼は詐欺師のようににこやかに嘘をつくでもなく、平然と言ってのける。嘘をつく事に

罪悪感を抱かずに虚偽を口にする者はいる。しかし、カルツはどうにもそのどちらにも見えないのだ。裏があるゆえに微笑む訳でも、きれいに嘘を消し去った表情でもなく、本当に何事もなさそうに淡々と。

「女子どもが一人で、関所を通るには時間がかかるに決まっている」

シュガーローゼは、ウィディト大陸の間を飛び回っているつもりでもその実、シェーン王国の領地ばかりで一国を出た事がない。はじめて関所を通るのだ、彼女が知らぬ事がある。

面倒事は、御免だ。

関所を順調に越えられれば、一日もかからないだろう。

そう、長い話ではない――。

頷きそうになる、自分に気づく。それを諫めるように首を振る。

「誰かと行動を共にするなんて、まっぴらごめんよ」

さすがに、カルツも考えこむようにわずか眉を寄せた。

ここまでシュガーローゼを追いこむものは何か。

そんな事を考えているのだろうと容易に推測出来て、シュガーローゼは今度こそ立ち上がった。

その場を後にする。

無言で立ち去るシュガーローゼに、遅れてカルツが後を追う。

「お互いのためだ」

説得する熱を全く感じさせない声音で、カルツ。

彼の申し出には、確かに偽善ぶったものはない。むしろ自身の利益をも口にして、相手を警戒させない響きすらもたらしている。シュガーローゼが嫌いな、貴方のためにしているんだというものは微塵もない。少しは信用に足りるかもしれない。

「……いらないよ、そういうの」

誰かのためとか、自分のためとか。シュガーローゼのためになる事なんて、なくていい。どんな些細な事も。

関所で拘束されるのはもちろん避けたい。それでも、やはり誰かの同行を許す気持ちにはなれないのだ。

マンダリンガーネットの瞳が、じっとこちらを見ているのが分かったが、もう何も言ってこないのでシュガーローゼも口をつぐんだ。

16　偽りの兄妹

オスティオ王国は、元々シェーンの属国だった歴史を持つ。その上今のオスティオ国王はシェーン現国王と同じ家系であるという。二国間の国交は友好であろうというのに、オスティオの関所の厳重ぶりは何故なのだろうか。

シェーンのブリューケン町を出て、国境をまたぐとオスティオのティパストという町に着く。橋の向こう側の町だ。ティパストはオレンジとブドウが名産の町で、ブリューケンと同じように国境沿いの町であるために異国文化の入り混じった町だという。その町の中に入るまでには、関所を通らなければいけない。出身地の役所で手に入れた通行手形を見せてから、いくらか書類に記入をする。最近付け加えられたのは持ち物検査だけでなく身体検査だ。

ティパストの関所には、人の行列が出来ていた。あまり広くはなさそうな建物を前に入るのがためらわれるような人数。

室内へと足を運ぶとやや騒がしいものの、役人と思しき人間たちが案内をかって出ていた。

いかにも多くの人間に接する事に慣れた役人の顔と口調で、二人組の旅人を男は見つめた。

「二人連れか」

「そうです」

この世の不満を顔中に集めたような不機嫌さを前面に押し出すシュガーローゼを、隠すようにカルツは立っていた。

もはやシュガーローゼは何も言いたくはなかった。今ここで、否定すれば更に面倒な事になるために。

「兄と妹です」

カルツはさらりと言ってのけるが、ミファク族の特徴である髪や瞳の色が、シュガーローゼにはない。役人が訝しむのは当然で、固い声音を疑うようなものに変える。

「全く似ていないな」
「妹は後妻の子で」
今晩の夕食でも尋ねるようななんて事のない顔で、カルツはとんでもない事を口にする。一瞬、シュガーローゼは吹き出しそうになった。驚きのためだ。
なんだかんだと言いながら、カルツは引き下がる事はなかった。シュガーローゼが無視しようとも一方的について来て――目的地が同じであるから当然といえば当然なのだが――気がつけば二人でティパストの関所まで来てしまっていた。口喧嘩中の兄妹に見えなくもない、そんな態度の二人をただの旅人と見なして役人が声がけるのも無理からぬ事。
仕方がなしにシュガーローゼは口をつぐむ事によってこの場をやり過ごす事にした。
認めたくはないが、カルツの言い分にはシュガーローゼの益もあるのだ。黙っていれば、このまま何の問題もなしに関所を通れるだろう。不愉快ではあるが、こうなってしまったのだからもう、更なる面倒は避けたい。このままカルツと偽の兄妹を演じるしかないのだ。
しかし、カルツの発言には目を丸くさせられた。うっかり、カルツが兄である事を想像してしまい――非常に残念な気分になる。いろんな意味で、とっても嫌だ。こんな人の話を聞かない、何を考えているか分からない、ある意味胡散臭い男が兄だったら、などと。
シュガーローゼには兄弟はいない。上の兄弟がいないために、下の兄弟を期待していた時期もあったのかもしれないが――それが叶う前に両親を死にいたらしめた。
「……旅の目的は」
「巡礼です。妹の母が、身体が弱いので健康祈願に聖都に」
すらすらと嘘が口をつくカルツを、静かにシュガーローゼは見上げる。常と変わらぬ、涼しい顔。
感情も考えも読めない顔。

確かにこの先に聖地である聖都ウェラギオネがあり、そこにたどり着くまでにも巡礼地として有名な場所はいくつもある。旅の理由にしてみれば珍しくもない。

「ほう……」

じろり、と分かりやすく値踏みをする役人の瞳にさらされて、シュガーローゼはうっとおしげに顔をそらす。

マントを羽織った長いツインテールの少女。十代前半。やや薄汚れた身なりだが旅人ならば頷ける。

そして二十代半ばの男は、かなり背が高く帽子を目深にかぶっているが、オレンジがかった瞳がミファク族のように見えなくもない。片や表情が無い、片や不機嫌顔。どちらも好意的な笑顔を見せてはくれそうにない点だけは、似てはいる。兄妹にはとても見えないが、後妻の娘だというのなら確かに頷ける。

「規則であるため、持ち物と身体の検査をさせてもらう。これは、ここを通る誰もが受ける検査だ。終わればすぐに手形を返そう」

特に怪しまれた様子はないようだ。知らず緊張していたシュガーローゼは、ほっと心で息をつく。

ちらとカルツに視線を投げれば、緊張など生まれてこのかたした事がないとでも言わんばかりの表情。役人に飄々と虚偽を口にするカルツだ、それくらい容易い事だろう。とはいえカルツが表情を大きく変えるなどともはや想像出来なくなるくらいには、彼の表情のなさに慣れてしまっている。

しかし、カルツは確かに嘘をついた。彼は顔色一つ変えずに嘘をつける人間だ。シュガーローゼの中で、疑いの念が少しずつ膨らんでゆく。

関所を越えたら、是非お別れしよう。そう決めて。

「では、妹さんはこちらに」

役人に連れられ、カルツとは別れ別れになって、いっそこのままもう顔を合わせずに済めばいいと考えながら、別室へと向かった。

シュガーローゼの荷物は少ない。基本的に生きるのに本当に必要最低限のものしか持ち歩いていない。ゆえに持ち物検査はすぐに済んだ。

しかし身体検査の際、女性の役人に衣服の上から触れられて、ひどく不愉快になった。

いつ、相手がシュガーローゼの唇に触れてしまうか分からない。口元を押さえていれば怪しまれると、唇を口の中に折り込むようにしてやり過ごした。

「もう良いです」

そう言われて、やっと安心して肩を下ろした。

しばらく、女性役人とシュガーローゼしかいない狭い部屋は沈黙に支配される。気まずくはなかったが、一体いつまでこの部屋にいればいいのかと女性役人を振り仰ぐ。視線を受けて、役人はただ仕事をこなすのみに精神をつぎこんでいるような硬い表情で応じた。

「お連れの方が、まだのようですので、今しばらくお待ち下さい」

カルツは大きな鞄を背負っていた。検査するのに時間がかかるのだろう。

役人無表情と役人ボイスで女性は答えて、そのままずっとその場所で待機している。見張りの意味合いもあるのだろう。そう思えば居心地が悪くなり、早くカルツの検査が終わるのを待った。

座ってもいいと促され、椅子に腰掛けてカルツの検査が終わるのを待っていた。あまりに手持ち無沙汰すぎて、少女がうとうとし始めた頃だ。

扉の外が、どこか騒がしくなった。こちらにまで波及するようにドアノブががちゃりと鳴った。

シュガーローゼは元より、役人の女性も開かれる扉に視線を向ける。

「少し面倒な事になった」

先ほどの男ではないが、やはり役人が苦味をあらわにした表情で女性役人に告げる。二人は扉の向こうで話こむと、すぐに二人共に部屋に入ってきた。

「すまないが、君の連れにはレジスタンスの疑いがかかった」

「――――……！」

かっと目を見開いて、シュガーローゼは役人を見上げた。

「何も≪ザッハヒカリテ≫と決まった訳ではないが、何分手配が出ている」

≪ザッハヒカリテ≫。それは偶然にもシュガーローゼが王都で出くわしたレジスタンスの名前。シェーン王国を中心に活動しているという、全容の知れない組織。このティパストの役所が警戒を強めるにいたった理由の一つ。

男は、ゆっくりと歩いてきた。まるで逃げ場はないというように少女に迫り、捕まえることは容易いとばかりに、急ぐ様子も見せず。ただ事実だけを告げた。

「完全に嫌疑が晴れるまで、一時的に収容所に搬送させてもらう」

なんて事だと、何を言うのだと言ってやりたかった。だが、シュガーローゼに言葉をつむぐ事は出来なかった。

役人二人の無機質で事務的な瞳だけが、わずらわしかった。

17　疑いをかけられた者たち

荷馬車は北へ向かっているという。関所を抜けて、オスティオ王国を進むには本来ならば南西へと進まねばならない。北には海、および収容所しかないという。

腰を下ろしているとはいえ、馬車の中はゆれがひどくて快適とは言いがたい。こんな粗末な馬車ではそれはいや増す。

幌の隙間から覗く空は、どんよりと雲っていた。

「なんでこんな事になるのよ」

「すまない」

「有り得ない。あんた何したのよ」

最早何度も繰り返した言葉。最初に口にした時より口調に荒さはないが、不満さを見てとれないものはいないくらいに少女は不機嫌だった。

この不愉快な空間から、一度は逃げ出そうと考えたシュガーローゼだったが、魔術を使いでもしたら後々面倒だ。転移魔術は、行き先を指定出来ても過去に訪れた場所に限定されるし、一度に歩いて半日かかる場所くらいにしか行けなかった。関所はいずれ通らなくてはならない。空間転移をするのはやめる事にした。

「不審な態度はしていなかったはずだが」

「もう最悪」

今、彼らはレジスタンスの一員であるという嫌疑をかけられた一団の中にいた。要は、レジスタンス容疑がかかっているのは何人もいたのだ。シュガーローゼに、カルツ、他にはあと五人の若い男性。一人だけ女性もいた。

彼ら全員にレジスタンス容疑がかかり、荷馬車で収容所に収容される事になった。一時的というので、完全に逮捕された訳ではないらしいが、しばらくの間軟禁されるのは間違いない。馬車の荷台に居る八人の人間の中で、口を動かしていたのはシュガーローゼとカ

ルツのみだった。あとの人物はみな意気消沈しているのか、黙りこくったまま。

一瞬だけそれを見やると、静かにカルツは息を吐く。

「オレがミファク族だからだろう。巻き込んでしまって本当にすまない」

どの辺に詫びていると思えばいいのか、そんな顔をしてはいるもののカルツの声はいつになく誠実だった。ミファク族特有の、藍色の髪にオレンジの瞳を持つカルツ。「ミファクゆえ」と出生を理由に諦めたような物言いは彼にはひどく似合わなかった。彼も迫害を受けてきたのだろうか、声にも顔にもその片鱗は見られないが、どこか諦観めいたものがカルツの横顔をよぎった。

「ミファクとかは、関係ないんじゃない」

はあ、とため息で不満を虚空に散らす。実際、ミファク族ではない若者も捕まっている。彼らの隣りに。

おそらくは検問をかけるかのように、少しでもレジスタンスの疑いがありそうな人間はもれなく捕まえろという達しでも出たのだろう。話によれば、レジスタンスの主力は若者ばかり、特に各地を回っているのは少なくとも三十代より下だという。それゆえこの荷馬車には三十代になるかならないか、それ以下という年齢の者しかいない。さすがに十代はシュガーローゼしかいないようだが。

随分と警戒したものだと思う。

そして、もしかしたらシュガーローゼの人相書きも出回っているかもしれない。シェーン王都では小さくない事件を起こしたシュガーローゼだ。いつ王都の事件とつながらないとも限らない。

出来れば逃げ出したかった。しかし、怪しい動きをしてしまえば面倒な事になる。

――それとも、このまま捕まるのが……

世のためかもしれない。そう思えば、シュガーローゼには最早カルツを責める気持ちすらなくなった。

いわば、シュガーローゼは殺人犯だ。

“死神のキス”で、その唇で何人の人間を殺してきたか。
そこまで彼女を追いつめたのは世間だったが、しかしその世間のルールで言えばシュガーローゼは人殺し。犯罪者だ。
――そうか、これは……当然の運び
ただ生きのびたい一心で、キスを送ってきたシュガーローゼ。しかしその行為はただの人殺しに過ぎない。だから、牢にぶちこまれるのは当たり前。こうあってしかるべきなのだ。
むしろ、今までに自首をしなかった事にすら疑問を覚える。“死神のキス”など誰にだって信じられない話ではあるが、殺人犯がのうのうと生きていていいはずがない。
どうして、今まで生きのびたのだ。
思いいたれば、強く深く、のしかかる重い咎。心臓が、圧迫される錯覚におちいる。
自分は、生きていてはいけなかったのに――……。
「大丈夫よ、きっと。すぐ解放されるわ」
涼やかな、場にそぐわないとも思わせるような声がかかる。きれいなソプラノ。そっと寄せられたあたたかいものに、びくりと身をよじれば優しげな女性の顔があった。
シュガーローゼの右手を包むように女性の手の平がある。他人に触れられていると分かって、素早く右手を抜け出す。
「大丈夫、何もしないわ。安心して」
微笑みに慈愛を見てもいいくらいだ。二十代になるかならないかくらいの年頃の女性は気が優しい人間のようだった。しかしそれで安心するようなシュガーローゼではない。出来れば近づかないでほしかった。
こんな気分の時は特に。わずか、手が震えた。
「あ……なれなれしかったかしら。ごめんなさいね」
女性の注意が、カルツに向かうのを見てシュガーローゼは安心した。そっと身をよじって女性から距離をとる。
「貴方たち、二人連れだったの？」

「はい」
ほんの数時間一緒にいただけだとカルツにツッコミを入れる元気はなかった。
「そう……でも、離ればなれにならなくて良かったわね……。あたしなんて、連れと引き離されてしまって……」
ちらりと視線をシュガーローゼに投げて、受け答えが出来る状態じゃないと見て、カルツは仕方なしに無い表情で問う。女性の申し出てきたその内容に、興味はないが。
「何かあったんですか」
「連れは体が悪いの。倒れそうになったから、一晩休ませてから判断するって……関所にとめられて。あたしだけこんなところにいるの」
はあ、と同情を誘うように女性は息をつく。その実悲しい出来事なのだろうが、彼女は誰かに話を聞いてもらいたいだけのようにも見えた。
「それは大変でしたね」
どの辺に慰めの気持ちを見てとればいいのか、という声音のカルツ。義務的な役人にも匹敵する興味のなさそうな様子の男に、しかし女性は満足しているようだった。今度はしっかりとカルツの方向へ体を向けると本格的にターゲットを定めたようだ。
「そうなの。あっちは体弱いから心配で。はあ……」
シュガーローゼはシュガーローゼで、陰鬱そうに顔を伏せているし、やけに語りたがりの女性は対応が面倒だ。何よりカルツは目の前の女性に興味がない。シュガーローゼが何に悩んでいるのかも、興味がないが――気分を悪くしてはいないかだけは気にかかった。
ふと小さな音に気づけば、幌の隙間から雨だれが見える。雨だ。
カルツは小さい変化のみで、眉をよせた。

18　雨と馬車とおしゃべり女

雨は本格的に降ってきた。ぼつぼつと雨音がうるさいくらいに荷馬車の幌を叩く。

――うるさい

いつもはそう思う。それから今も。しかし何故かその雨音はシュガーローゼの思考を阻むように脳に飛び込んでくるものだから、少しだけ厭わしい気持ちが減る。雨音は余計な雑念を追い払ってくれるのに、少しばかり力を貸してくれるのか。少女ははじめて知った。

彼女の脇には、カルツの前で話し込む女性がいた。話は長く、間髪いれずに次の話題へと転換していく。そのほとんどがシュガーローゼには意味のないものとして耳の中にも入ってこない。

「それでね、彼ったら……」

どうやら女性の連れとは恋人だったようで、話はこの状況の不満をぶちまけるものからただのノロケへと変わっていった。それを受け取るのはカルツの仕事のようになっていたが、ごくたまに「ああ」「そうか」といかにも生返事な相槌をうつのみに済ましている。それでも女性は不満がないようで、おしゃべり好きを代表するかのように、絶え間なく口を開いている。

「でもね、あたしはやっぱり心配で……」

しゃべっていないと不安なのかもしれなかった。その点、他の男性たちは黙りこくっているものの女性とカルツの会話にどこか聞き入るような姿勢をとっており――気をまぎらわすものを探しているかのようだった。

対して、自分の殻にこもるようにアクションをとらないシュガーローゼに、静かにカルツは視線を寄せる。長旅でほこりっぽくくすんだピンクゴールドの頭を伏せて、山折にした足に押し付けている。

今、彼女が何を思って、何を感じているのか。気になった。

カルツは他人に関する興味関心が薄い。またそうとられやすい態

度をとっている。たまには薄情と呼ばれるが、仮にも仲間のようなものがいて、目的があるカルツは、そこまで他人に興味がない訳ではない。ただ、相手が語ろうとしないなら聞くべきではないと心得ているだけだ。聞かれたくない事柄を、わざわざこちらから聞くまでもない。興味がないと言っておけばいい。

だから、最初こそはまるでシュガーローゼに興味はなかったのだ。ただ、人を助けた手前町までは送った方が良いのだろうと、仕事を最後までこなす気分でシュガーローゼと下山した。

それから、自分が勝手にやった事に金をもらうのは道理に合わない気がしたために、シュガーローゼの財布を返す事にした。出来れば宿を出る前に財布を置いて先に出ようと考えていたのだが、同じ宿をとる事を拒否される。考えたが、まだ同じ町にいるようだったのでもう一度会えたら財布を返そうと思った。それは意外にもすぐに訪れ、上手い事財布を彼女に返す事に成功した。

これで貸し借りなしだと、何かの調整が上手くいった気分でいた。しかし、更に意外な事に少女へと返した財布はまたもカルツに返ってくる事になる。

頭にあたった財布を拾い上げで、目が合った時のシュガーローゼの顔。

それを見た時に、頭は勝手に生み出した考えを、口から流し出していた。

『……雇わないか、オレを』

金をはさんでしか、他人を信用出来ない少女のようで、金銭がからめば頷くのではないかと思ったのだ。結局ごり押しして、護衛うんぬんという話はどこかへと行ってしまったようだが。

何故だか今は、同じ馬車で輸送されている。

――そういえば名前も知らなかった

カルツは名乗ったが、少女は教えてはくれなかった。一度興味を持てば全てを知りたいと思うようなカルツではなかったが、名前くらいは聞いておきたくなった。

「……名前は」
「あ、あたしチェスカってさっき言ったじゃない」
おしゃべりな女性の自己紹介など、聞いていなかった。そして、貴女じゃない。カルツは小さくうずくまる少女に触れる。
火でもついたようにびくりと身体を縮こませ、勢いよく顔を上げる少女の瞳には、どこか怯えが見える。
「名前は、なんだ」
彼女は他人(ひと)に触れられるのが嫌いのようだから、すぐに手は離す。
「……、」
怯え、驚き、不安、戸惑い――いくらかの感情をアクアマリンの瞳にのせて、シュガーローゼはカルツを見上げていた。
拒む元気はなかった。
「……シュガー…ローゼ」
か細く、消えそうな声。それは死神と呼ばれるにはあまりに弱々しいものだった。
「……そうか」
珍しくカルツの声に感情が混じる。穏やかなものは、何が含まれているのか。少なくとも今のシュガーローゼには分からなかった。

雨は止まず、空気は冷えてゆく。雨音が静かになったりうるさくなったりと、勢いに強弱はあるものの天から雨が飛び降りるのを止めるものはないようだった。
馬車も止まることを知らず、収容所は遠いようだった。一時的に拘束をするための収容所なら、近場にあっても良いものを、どうやら関所から随分と遠くに来た様子。退屈が彼らの感じる時間を長い

ものだと感じさせているのかもしれないが。
「まだ着かないのかしら」
一時間はたったかもしれないが、不本意な状況下というのは長く感じるものだ。チェスカとなのった女性は、会話の種もつきたのか収容所に着かない事を不満に思っていた。どうせ捕まったまま逃げられないのなら、お尻の痛くなるような馬車の中に居るより、地面の上に立っている方がまだましだ。それはこの荷馬車の中の全員が思っていることだろう。
また雨の勢いが強くなってきた。今度ばかりはひどい雨音で、馬車の中はやかましくなる。
「雨もひどくなってるようだな」
チェスカの隣りにいた若い男性は、少しずつだがチェスカとカルツの会話に混じるようになってきていた。
「そうよね……。なんだか嫌だわ」
この状況が嫌ではない人間はいないだろうが、更なる不安をあおるような強い雨音に怯える気持ちも分からないでもない。
沈黙。雨音だけが騒がしくなり、とたんに不安を強く感じたチェスカは顔を上げて場の雰囲気を明るくするため口を開く。
「そういえば……、あたしは」
「うわあっ！！」
馬車の外から、声が上がる。チェスカの言葉を遮るような声は、必死なものがこもっていた。
と、大きく荷台が傾いだ。いや、傾いだというような優しいものではない。縦線を横に九十度曲げられたような――勢いのある奇妙な浮遊感と、強い衝撃が加わる。
「！？」
荷台の誰もが目前に起こっている事を、理解出来なかった。ただカルツだけが――まさか、と可能性の一つを頭に描いていた。
その思考も、更なる衝撃により遮断される。
「きゃあああぁぁっ！！」

チェスカの悲鳴、男性すら叫び出していた。荷馬車はまっ逆さまに奈落の底へと飛び込んでいった。

雨雲で暗くなっていた空の下、ひどい雨も加わって、一瞬前までその場所に馬車があったなどと分からないだろう。崖の下に落ちていったなどと、その場に居た誰もが考える時間はなかった。

19　武道大会1

天気は晴れ、というには少しばかり雲の多い空模様。しかし元より急激な天候の変化の少ないシェーン王都だ、雨が降ることはなさそうだと予想される。

乾いた音を立てて、数度花火が上げられた。それは日の下の花火ゆえに音と煙のみをもたらす。

武道大会の開会が告げられたのだ。開会式のようなものはなく、簡略な開催を祝う騎士団団長の言葉で武道大会ははじまった。

シェーン王国の王城下で、王国騎士団主催の武道大会の当日は、順調な滑り出しを見せていた。国王は元より、王族や貴族などは出席することなどない民草のためだけの催しではあったが、城下町は武道大会にかこつけて大いに盛り上がっているようだ。

花火の上がる前から、会場には人が集まっていた。明らかに遠足気分で観戦するつもりの者や、商魂たくましい観戦の際の軽食を売り出そうとしている者もいる。

未だ、大会運営のために騎士たちはあちこち忙しくしている者もいるが、ケイスは大会出場者でもあるために当日の仕事からはほとんど解放されていた。

会場は、シェーン城下の広場の中で最も広い面積を持つデアデス広場を利用。普段は市場がたったり大道芸人が騒いでいるような場所で、祭りの際にも使用される事が多い。

今、デアデス広場には正方形の木組みの舞台が組み立てられており、武道大会の戦いの場にふさわしくなっていた。この舞台の上で大会選手が一対一で戦うのだが、ルールは簡単。どちらかがまいったと言うか、舞台の上から降りてしまったら試合終了だ。使用する武器に制限はないが、あまりに観客に被害を与えるようなものであれば審判から待ったがかかる。また、魔術の使用も禁止されてはいないが、このシェーン王国には魔術師が数えるほどしか居ない。ル

ールブックには記載されようと、魔術師の参加はまずないであろうというのが皆の当たり前の感覚だった。ケイスも主催者側だ、詳しくは知らないが魔術師がこの武道大会に参加するという話は聞いていない。そもそもが、“武道”大会なのだから魔術の使用を認めるというのもおかしな話だが、一つの魔術に限るとあるし、シェーンには魔術師は居ないようなものだ。蛇足的に考えたルールだろう。

町民たちが囲みはじめた舞台の脇、少し離れた場所に大会本部が設置されており、更に離れた場所ではサポート役員でもある騎士団員の臨時詰め所が出来ている。そこには騎士団員の選手たちの集まる場所となっている。ちなみに一般の参加選手は各自好きな場所に待機していればよく、名を呼ばれたら舞台に上がるという決まりになっている。

城下の人間の反応は、悪くはない。飲み物やパンの売り買いする姿を見れば、むしろ経済効果をおよぼしたような気分になれる。木製の舞台も高さがある分立派に見えて、デアデス広場はどこか壮観として見えた。

ここまでこぎつけるのに、裏方であるケイスは様々な仕事をしてきた。ついに大会当日を迎えて、感極まったというほどではないが、やはり努力がむくわれたような気がする。精力を傾けた甲斐があった。

それにしても、ケイスが想像していたより観客が集まっている。午前とはいえまだ朝でもある。やはり、娯楽は必要なのだ。

戦いに参加するケイスにしてみれば、特定の観客の存在が小さく胃を痛めるのだが。

思い出してしまうと、仕事に対する達成感も波を引くように去っていってしまう。少しだけ、胸がもやもやとする。

「はあ……」

また、ため息。

この日の天気は晴れというには雲が多すぎるが、時たま青空が多く顔を見せる時もあるという、曖昧なものだった。やや灰色がかっ

た雲、陰鬱な気分になるのはそのせいだろう。
武道大会まで、忙しく走り回ったが問題なく開催までこぎつけられた。大きな事件もなく、なんの妨害もなく。ある意味王都は、今日も平和だった。
裏町の事件の犯人も見つかる事なく。
レジスタンス≪ザッハヒカリテ≫の活動もない。
まるで、嵐の前の静けさのよう――。
「ケッイスーー！」
強い衝撃を背中に受けて、ケイスは前のめりに倒れそうになる。飛び出るかと思った目玉を伴い首を横に回せば、ハウストとセイディオが立っていた。
「何とぼけたツラしてんだ～？」
「また下らん事考えてんだろ」
友人二人に口々に言われて、ケイスは途端に嫌いな食べ物を前にした子どものような表情になる。この二人が、一人でもケイスをからかうのには辟易するというのに、二人も揃ってしまえば上手く立ち回れる気がしない。
城下町警備隊の男が、いたずらを思いついた子どもみたいな顔をして、にやりと笑う。
「記念すべき第一戦は、おれだぜ？　ちゃんと勇姿を見ておけよ！」
指をつきつけセイディオは溌剌とした様子を見せる。対照的に、ハウストはどこか窺うように黙ってケイスに視線を投げていた。そんな友人たちの様子にしっかりと気を配れる気分になれないケイスは、セイディオの言葉に初めて知った事実だと口にする。
「あ、そうなんだ」
「なんでお前騎士団のくせに知らないんだよ。……あっ、おれちょっと抜ける」
またいつものように何かを言ってくるばかりかと思いきや、セイディオは忙しくどこかへと立ち去る。知り合いでも見つけたのだろうか、人混みに紛れて見えなくなった。

しばらく、まばらではあるが大きく形作られている人ごみをハウストと二人、眺めていた。一度だけ、ハウストは友人を目だけで見ると視線を戻す。

「……なんかお前、最近悩んでないか」

ぼそりとさりげなく落とされたのは、何の気なしにつぶやかれた言葉なのか。しかしハウストは本当に見た目よりもよく気がつく男で、見た目より面倒見がいい。

「……まあ、今日はそれどころじゃないしね」

曖昧でつかみどころのない表現をするとケイスはお茶をにごした。確かに悩みはあるが、それは今考えていてもしょうがない事なのだ。まして、ケイスは試合観戦をただぼんやりとしていていい身分ではない。雑念を払って戦いの場に出なければならないのだ。

ルブラン伯爵にケイスの試合が正午少し前からだと告げると、その時間までには会場に向かうと応じていた。

ケイスを応援に来る人びとは、まだ会場にはいないだろうが、今日は何かに悩んでいる暇はないのだ。

気をひきしめなければならない。

「ま、何か知らんが頑張れよ」

真面目ゆえに悩みやすい友人を持つハウストは、弟を見守る兄のようにケイスの肩を叩いた。

「ああ……」

ラッパのような音がして、第一回戦の開始を告げる声が上がった。大会の司会進行役は、騎士団員の中でもお調子者で有名な男性らしいが、ケイスはまだ直接お目にかかった事はない。

「みなさん、お待たせいたしましたッ！　第一試合をはじめます！」

見たところもう四十代くらいの男性だが、顔にはりついた溌剌とした様子や陽気そうな表情から、精神的な若さがうかがえた。

それから、しばらく会場を眺めているとセイディオの対戦相手とおぼしき男性が現れた。対するセイディオは遅刻だろうか。第一戦なのに気合いが足りないと、ケイスがぼんやり思っていれば、思わ

ぬ声がかかる。
「あれっ……。あれって……伯爵じゃないか？」
ハウストの指の先を追えば、確かにそこには伯爵が。そして当然その横には――
「おぉ？！　あれって――もしや、例の婚約者か？！」
伯爵の同行者は公爵父娘。しかしハウストの興味は女性に集まる。自慢のブロンドを隠すつばの広い帽子をかぶって、顔に影を作っているがあの無表情は間違いない。イレーヌ・フォン・ヴェーネン。ヴェーネン公爵の麗しき娘だ。
「！」
振り返らなくても分かる。自分の隣りにいる人間はきっと口の端をにまにまと持ち上げて笑っているのだろう。これからの、ハウストの対応が容易に想像出来て、ケイスはその場を逃げ出したくなった。

20　武道大会2

武道大会はつつがなく進行していった。

昼を過ぎても、騎士団が勘弁してくれと嘆くような事件も起こらず、頭に血ののぼった荒くれ者観戦者の頭を冷やしてやる事にも手馴れていった。

ケイス・ルブラン選手の試合も、大怪我など負うことなく進んでいき、未だ敗退の憂き目には出会っていなかった。

その友人、ハウストとセイディオもまた負けを知ることなく笑みを浮かべていた。今、彼らがにやにやとしているのには友人をからかうという愉快な仕事が出来るからではあったが。

「良かったなーー！　ケイス！　お嬢さんの前でいいところ見せられて！」

「ガチガチだったのもろ分かりだったけどなー」

セイディオ、ハウストと続く茶化した態度に、ケイスは苦笑を浮かべる。

ケイスの初戦までに、既に二人には散々笑いものにされたので今更だ。まだ伯爵や公爵父娘と話してはいないが、目礼などすればにまにまという笑みが注がれた。

「ほら行って来いよー恋人の元にっ！」

「いや、婚約者だから」

セイディオに叩かれ、何故かハウストに訂正される。

ケイスの初戦の相手は一般募集の人間だったようだが、なんなく――とはいえないがなんとか、という程ではない――勝利する事が出来た。息はあがっているが、高揚はしていない。妙に緊張ばかりが先走り、上手く動けなかった。

「見つからないから……今はいいや」

人混みは、伯爵一行の影を隠してしまっていた。これから一度、午前の作業終了という事で一部の騎士団員は集まりがあるためでも

ある。
　ケイスで遊びたい二人だったが、本人の嫌がっているのもあり、また三人共大会参加選手であったために会話は自然と武道大会についてと移る。
　誰それの選手が腕がいいとか、自分の方が強いだとか。剣の使い手が多いとか、魔術師などはやはり居ないなというようなものだ。次第に、お互いの試合の危うさや相手へのアドバイスなどへ変わってゆく。戦場の戦士が参謀とする会議のように真剣に意見交換をしていた。
　ふと、常と同じように定刻になったと告げる鐘の音が鐘楼から響いてくる。先に顔を上げたのはハウストだ。
「そろそろ時間だな」
　大会の運営を行なっている騎士団員である彼は、ちらとケイスを見た。彼は頷いて、もう一人の友人に申し開きをする。
「悪いけど、ちょっと集まりがあるんだ」
　鐘の音が鳴り終わる前には騎士団本部へ戻らなくてはならない。そう伝えると、選手でもあるのに大変だなとセイディオは苦笑して彼らを見送った。軽く手を上げて、二人の騎士は駆け足で本部へと向かった。

　正午から少し経過した時間、試合は一時的に休みに入った。観客たちも昼食を食べる時間がほしいだろうし、選手たちも人数が減るにあたって休憩が必要になる。区切りの良いところで騎士団員たちも今一度集まることになる。
　団員全員が集まっているわけではないが、大会選手共々、大会運

営の中心をになう人物ばかりが集まった空間は少しばかり狭苦しいものとなった。

団長のキースが、実行委員長に午前の大会についてや注意事項を述べさせた後にやっと口を開いた。ぐるっと団員たちを眺め、真摯な顔をしている。

「午前は無事に終わったな」

団長が話しているのを視界の端に入れるだけ。ケイスはぼんやりと空を眼球だけで見上げる。空はまた雲を追い出していた。透き通ったような空色が、青年のエメラルドの瞳に重なる。平和そのものの空だと、武道大会の最中に思うにはわずか不似合いであろう言葉を頭に置いた。

忙しかった大会までの数週間、それから、午前に行なってきたケイス自身の試合。反芻するわけではないのだが、今よみがえってくるのはそういった事項のみ。

妙に脳みそがすっきりしている。余計な情報は入ってこない。団長の演説は耳の右から入って左から速やかに出てゆく。

雲がまた移動していた。ゆっくりと、しかし普段よりいくらかは速度を速めて動き出す雲。少し首を上げれば、西の空が殊更曇りはじめていた。

「今回は勝ち負けは問題ではない。もちろん、騎士団員が優勝でもすればうれしい。しかし、目的はあくまで娯楽。そして警備をゆめ忘れる事のないように」

会場の警備は主に人数の多い城下町警備隊が請け負ってはいるが、騎士団がそれをしなくていいのではない。

もっともな台詞を言う団長に、しっかり聞き入っていたはずのハウストだが、ふっと隣りの青年に視線を投げた。特に理由はなかったが、もしかしたら彼もまた団長の演説に飽きを感じていたのかもしれない。

視線の先には誰が見てもぼけっとして気の抜けた表情のケイスが居た。目を軽く見開き、眉を跳ね上げるハウスト。何をしているん

だか、と苦笑する。

「事故などはもっての他だ。町民だけじゃなく、お前らも含めてな。警備隊たちとも連携を忘れるな」

今回の催しは騎士団員と警備隊員の協力作業という、相互の関係を良好なものにする目的もあった。

それをよく知っているケイスは改めて聞かされるまでもないと思いつつ、すぐに霧散していく思考に頓着しなかった。

伯爵とか、イレーヌ嬢とか、婚約者の父親とか、裏町事件の犯人とか、レジスタンスとか。頭を悩ませるものはたくさんあった。

しかし今は何故かそのどれもが頭の中に居座ったりしない。身体を動かしたせいかとも思うがよくは分からない。

ただぼんやりと、雲の集まる西の空を向いていれば――

「おい、そこの真面目バカ！　聞いてんのかお前ー！」

目ざとい団長の叱咤が飛ぶ。

びくりと体を震わせては、真面目バカは恥じ入るように身を縮めた。

それ以上何も言われないのをこれ幸いと、ケイスは再び自分の世界に没頭する。彼は選手であって、午後からの大会運営には携わらないので団長のありがたいお言葉は聞かなくてもよいのだが、真面目なケイスにしては本当に珍しい。ハウストは横目で見るのをやめて、平素と異なる様子の友人がとりあえずは悩んだ様子ではないのだからと気にしない事にした。

西の雲が、どこか黒く濁りはじめていた。

21　武道大会3

切り下げられた太刀筋は、悪くないものだった。
試合は、次で準々決勝というところまで迫っている。
ケイスは、観客のどこかに紛れているだろう伯爵一行を探していた。そんな場合ではないのに。
しかし両目は勝手に探してしまう。彼にとっては特別な人たちを。
「おいおいよそ見かぁ？　余裕だねぇ」
対戦相手は、ここまで勝ち上ってきたからには強いのだろう。実際剣の腕はケイスと互角かそれ以上。しかし柄の悪さが下町のチンピラ並みだった。試合の最中に、気になる人物の姿を捜してしまえるほどには、ケイスの敵ではなかった。
鍔迫り合いから一端離れ、お互いに距離をとる。気を抜くわけにはいかないと、青年が自身の剣の柄を握り締めた時だ。男が身体をずらして現れた観客の塊の中には、伯爵と、イレーヌ嬢が見えた。
瞬間、ケイスは意識をそらしてしまった。
「もらった！」
きん、と乾いた音が響いたのが分かって、手の中に剣がないのをケイスは知る。
――しまった……！
武道大会は武器の有無にルールはない。この辺り一帯の名のある武人は、剣術使いが多いため剣術大会にはなっているが、槍使いも魔術師も参加可能。徒手空拳対剣術もありだったのだ。
誰の目にもケイスのピンチに見えたが、ケイスは無手でも戦う術を知っている。エメラルドの瞳が焦りから起死回生への閃きに光る。振りかぶった男の剣を避け様に肘を伸ばす。
「がッ？！」
勝利の予感に浸る暇もなく、裏拳でのされた男は白目をむいて倒れた。

「勝者、ケイス・ルブラン選手――！！」
歓声がわく。あがった息を、整えながら勝利者が辺りを見回すと、祝福を送る観客の中に伯爵の姿はなかった。
イレーヌだけは、いつもの無表情ではなく穏やかに微笑みを浮かべていた。そのことにどこか安心して、しかしそわそわと落ち着かない顔を隠すために、彼女からは顔をそむけていた。

決勝まであと少しだというのに、セイディオはあまり緊張していない様子だった。次の試合の観客になりきるような素振りで、耳をほじってみせる。
「ハウストとおれの対決かー、やべえな」
「その前に準々決勝に勝ってからだろ」
「いや、おれも勝つし、ハウストも勝つっしょ」
今回の武道大会、主催の騎士団のトップである団長も警備隊隊長のどちらも参加していない。一般参加者が思っていたよりは殺到したので主催者側は裏手に回ったのだ。ゆえに若手ホープの三人が残るのも、他に手練れがいないからという理由もあった。
次はハウストの試合、準々決勝である。
「あれ、あんなヤツ居たか」
「ダークホースってやつか」
「いや、そういうんじゃなくて……」
周囲からそんな会話が耳に飛び込んできて、舞台の上のハウストの対戦相手を見る。
濃い灰色のフードつきローブを着ているために顔が見えない。どころか、着ている服も定かではない。中肉中背、どこか性別すらは

っきりしないが、この武道大会は男性のみ参加が可能だ。得物は――剣。

「そういえば、見た事ないかな……」

ケイスも騎士団として裏方仕事があったため、参加選手にはいくらか面識があったが、あんな人物が参加者の中にいただろうか。

「寒くなって着こんだだけじゃねえの？」

確かにそうとれる。しかし、参加者名簿をたどると――

「栄えある準々決勝まで勝ち抜いたのは、レッジオ・ブース！」

わっと歓声が上がる。

準々決勝に勝ち上ってくるまでに見た、レッジオ・ブースという人物の特徴を思い描こうとしたが思い出せない。

「そして対戦相手は、我らが王国騎士団の、ハウスト・レーネヴァル！」

再び、歓声。こちらは近頃の騎士団人気を反映するかのように、一際大きい声援。

「準々決勝、第一ブロック――試合開始ッ！！」

試合がはじまった。

剣術使い二人の試合だが準々決勝ともなると、盛り上がるはず。しかし何故か両者は微動だにしなかった。盛り上がっていた観客の間でも、その緊張感を読み取ったように静かになってゆく。

レッジオ・ブースが動かないのでハウストは、相手の様子を見てから判断しようとしているのだが、いかんせん顔が見えないので表情も視線も見えない。相手から放たれる気でただ者ではないのが分かるだけに、うかつに動けなかった。

するとフードの下からわずかに覗く口元がにやりと歪み、レッジオ・ブースは動いた。

剣撃（けんげき）が鳴る。それははじめこそ互角か、ハウストの有利に進んでいるように見えたが、徐々にハウストは押されていった。会場は歓声で沸いてゆく。

「くっそ」

おかしい。対戦相手はあまり剣の手練れではない。荒すぎる太刀筋でそれは分かる。しかし何故かこんなにも圧倒されている。ハウストは焦った。扱いにくい相手と戦うはめになったものだと。

じりじりと追いつめられての気合いの一発か、背水の陣か――ハウストの剣が、フードの男の剣を弾き飛ばす。

「！」

レッジオ・ブースは一度自分の手の中から飛んで行った得物を認めると、なんて事はないように無手でハウストに向かいあった。隙ありとばかりに迫るハウストに――

「邪魔だったから、良い」

右手をかざした。

どんっ！

「？！」

鋭い先端の巨大な氷の柱――つららのようなものが一瞬にして、降ってわいた。

間一髪で避けても、かすった左腕が血しぶきをあげる。ハウストは瞬時に理解した。

レッジオ・ブースは、魔術師だ。

剣を持っているから剣術使いかと思えば、魔術師だったのだ。道理で剣檄が荒かった。

しかしそれが分かっても問題の解決にはならない。シェーンは魔術の王国ではない。ほとんど剣の相手のみと対戦してきたハウストは、魔術師に対する戦い方を知らない。とはいえそう言っていては、無様な敗北が待っているのみ、黙ってやられるつもりはないが。

氷の柱は次々にハウストを襲う。魔術の使用は禁止されてはいないが、やりにくい事この上ない。

ハウストはなんとかつららを避けながら、魔術師を倒す術を考えていた。

だが、その思考は強制的に終了させられる。

焼けるように熱い、しかし冷え切った不可避の力によって。腹に

異物感を覚えた時にはもう、遅かった。
「ハウストッ！！」
ハウストの腹部から生える剣は氷のように透き通っていた。血の赤がしたたるようにそれを覆う。
フードの下でレッジオ・ブースは頬の端を上げた。
「終わりだ」
爆発音が上がる。観客は逃げ出しはなかったが、突然の事に悲鳴を上げて怯えた。
転がるハウストの身体、それは火傷をしているように焦げている。腹部からとめどなく流れる血。
それらは審判の目を厳しくした。
「レッジオ・ブース！　武器と魔術の同時使用は禁止されている！加えて一つ以上の魔術使用は禁止、本大会は相手を致命的なダメージを加える事は禁――ぐあっ！！」
審判の体から、血しぶきが上がる。逆袈裟に切り上げられたのに得物は見えなかった。魔術を使ったのだ。
「きゃあぁぁっ！？」
審判が倒れた事により、会場は一気に混乱に陥った。
武道大会は、あくまで娯楽。血みどろの殺し合いなどでは決してない事を知っていた観客たちは、繰り広げられた血の雨に恐怖する。
騒乱。われ先にと競って観客たちはその場から逃げ出した！
「って、ケイスっ！？」
もはやケイスは何も考えてはいなかった。ただハウストの安否のために試合の舞台に上がる。魔術師は、舞台上にやって来た青年に目を止めたが、自身に向かってこないのを知り興味をなくした。
「ハハハ！　何が武道大会だ、くだらねぇ！！」
手を高く空にかざす。魔術によって雷が広域に降り注ぐ。
「うわあぁぁっ」
逃げ惑う観客、愉快そうにそれを見る魔術師。ケイスは言い様のない義憤にかられた。ハウストに声をかけると、彼が息をしている

事に安堵する。それから魔術師に向かおうとするが、魔術によって近づく事すら出来ない。

不可視の魔術に弾かれて、舞台の端まで背中から転がったケイスは、今一度レッジオ・ブースの顔を見上げた。顔のほとんどはフードの下に隠れているが、笑っているのだろう。

「何が目的なんだ……」

愉快犯にしか見えない魔術師。騎士団員に魔術に通じる者はほぼ居らず、王都がいかに魔術に慣れていないかを思い知る。これでは誰も手を出せない。

「お母さんっ！」

子どもの声は、ケイスの耳にいち早く届く。急ぎエメラルドの瞳をひらめかせる。混乱を極める会場に、転んで立てない幼い子どもが居た。

両親とははぐれたのだろう。それを魔術師は狙っていた訳ではなかった。しかし、立て続けに落ちる氷の柱が――子どもを狙う。

「やめろッ！！」

ケイスの伸ばした手は、届かない。

「ぐあっ！！」

しかし、子どもに氷柱が刺さる事はなかった。術者が意識をそらしたからだ。ケイスが見上げると、苦しそうに体を折る魔術師。

降ってきた影に、やっと気づいて視線をずらす。

舞台には、魔術師と対峙するように一人の男が立っていた。黒い髪に、闇色の瞳。背が高く、外套（マント）をまとっているために服装は判然としない。

一体誰だ、と問おうとして上手く声が出なかった。ケイスが見た事のない人物であるのは確かだ。

ただ、男の異様な雰囲気だけはよく分かった。相手を萎縮させる、強い力を持つ者が放つ気を持っている。ただ立っているだけで、それが伝わる。

男は、くっと口角を上げた。まるで悪意をこめた歪んだ笑み。

「三流が」
その男の手に炎が生まれて、魔術師を覆った。
「ぎやあああああぁっ！！」
生き物のようにうねる、炎。まるでレッジオ・ブースを喰らいつくそうとするかのごとく、彼からまとわりついて離れなかった。魔術師の悲鳴は奇妙に歪んでゆき、不協和音となる。
自身の心臓がざわつくのがケイスには分かった。
「おいおいっ、殺してくれるなよ！」
もがき苦しみのたうち回る魔術師の姿を見て、声がかかる。舞台の下、城下町警備隊の隊長がそこには居た。魔術師を打ち倒した男と知り合いなのだろうか、苦い顔をしている。隊長を一瞥すると、男はわずかに眉を寄せた。
「ちっ」
「何が？！　舌打ちするな！」
「まあいい。殺さず生かさずは得意中の得意だ」
言いながら、男はその手を振って炎の塊をレッジオ・ブースから立ち退かせた。皮肉げな笑みが口の端には浮かんでいる。
「隊長（ヴィードル）！　その男は任せた！　騎士団員は観客の救護と誘導へ向かえ！　全員だ！」
騎士団団長の発令を受けて、団員たちは我に返り動き出す。団長も自ら町へと繰り出す。団員は彼に従い散らばって、逃げ遅れた者や倒れている者などに駆け寄る。
「警備隊員もだ！　騎士団と協力して作業へ迎え！」
続けて隊長。会場には秩序が必要だった。
セイディオもすぐに仕事に取り掛かろうとしたのだが、ハウストが気にかかってケイスを一瞥する。それに気がつかないケイスに加え、隊長に早く行けと睨まれセイディオはその場を後にする。
全てがあっという間の事で、ケイスはまるでお芝居の一幕を客席で見ているような感覚だった。ほとんど呆然としているケイスにかかる声があった。

「治療所に連れて行け。西の大通りの詰め所が一番近い。医師も居る詰め所だ。早くしろ」

警備隊長にハウストがこの場で一番の救護対象だと告げられ、やっとケイスは自分を取り戻す。

ハウストは、火傷に広く覆われているがそのお陰かあまり出血は止まりかけていた。だが安心していい怪我ではない。一刻も早く治療をしなければならない。

慌てて重たいハウストを肩に担ぎ、自分よりいくらか高い身長の意識のない人間を背負う事によっておぼつかない足で詰め所へ向かう。

途中、同期の騎士団員に手伝われハウストを二人で運んで、詰め所を目指した。

肩が軽くなって気持ちに余裕が生まれたからだろうか、ふと途中で現れた謎の魔術師の事が気にかかって振り向いた。遠くに黒い頭が見えて、もっとよく見たい気分になったがずり落ちたハウストを支えなければならない事を思い出し、すぐさまハウスト運びに従事した。

シェーン王都ではじめての武道大会は、騒乱の下に終わった。

22　騒乱のその後に1

シェーン王都城下町で初めての試みであった、武道大会は決勝まで進めず騒乱の最中に終了させられてしまった。騒ぎの原因を作ったのは一人の魔術師の男だ。

城下町を混乱に陥れ破壊と、騎士に一人怪我を負わせ、審判を重傷に陥らせた事、それが彼の犯した罪である。今は王城の地下牢に収容されている。レッジオ・ブースは偽名であった。

捕まった男は、身もとがはっきりとしていないが、シェーンの人間ではないといわれている。どこか焦点の合わない目で要領の得ないことばかりを口にしていた。恫喝や拷問のたぐいを受けてもまともな答えが得られなかったそうだ。

ケイスは、それを聞いて奇妙なものだと思えた。あの魔術師には何か目的があったのではなかったのだろうか。それとも、頭のおかしな人間がやらかした椿事（ちんじ）だったのだろうか。

それを問うても、魔術師は答えないというので真実は未だに解明されていない。

聞かされてからも胸の中にもやもやとしたものが広がったが、ケイスに出来ることはない。

王城の上級犯罪者用の牢に入れられて、王都裁判にかけられるという。魔術師に対する判断は王都倫理委員会の手にゆだねられた。彼らが合法すれすれの手を使う事は有名だが、シェーンでは拷問が自白の一つとして認められている。理由は様々だが、拷問で真犯人のあがった事が少なくないのが理由の一つだ。とはいえ、法律では“自白のために”拷問を許可しているのであって、相手を瀕死や死にいたらしめるような行為は禁じている。痛みで自白を促すための拷問なら良いというものだ。

武道大会の後始末は、普通に終えていたのではここまで大変ではなかっただろうというひどいものだった。戦いの場として容易した

木組みの舞台は、壊れてしまっていたし、ごく一部ではあるが会場であった広場にも損傷が見られた。観戦に来た客への対応も必要だったが、こちらは主に城下町警備隊が担当していたようだ。

しかし武道大会が危険な形で終わった事で、主催者側の王国騎士団は苦情の処理に追われていた。剣を振り回すことしか出来ないような脳みそ筋肉騎士ですら、謝るのに慣れた。

大会終了後、一週間たった頃にはなんとか町民の不安は薄れてきたようではあるが、人が二人揃えば「武道大会の開催は間違いだった」と言われる始末。気に留めていない町民もいるにはいたが、子どもが居る家では悪影響だったのだと不満が出ている。

始めこそはケイスも武道大会の開催に疑問を感じていたものだったが、こうも町民の支持を得られない結果に終わったとなると、もう少し何とかならなかったのかと思ってしまう。

失敗の原因を作ったのは、魔術師の男だから、考えても仕方がない事なのだろう。

最近の王都はどうも物騒でいけない。

今回の事件にも、レジスタンスの≪ザッハヒカリテ≫が関わっているのだろうか。そうではないと言い切れないが、武道大会を最悪な形で中止させて≪ザッハヒカリテ≫に何のメリットがあるのだろうか。少なくともケイスには分からない。

そして、今のケイスの一番のため息の原因はハウストの負傷だ。

怪我自体は命に関わるような大きなものではないが、近しい間柄の人間が床に伏せっているのだ、気もそぞろになってしまう。

見舞いに行けば、

「お前、暇なのか？」

というハウストの呆れとからかいと苦笑のまじった言葉が返ってくるのだが、まだ現場復帰は無理だそうだ。

また、ずっと気にかかっていたレッジオ・ブースと対峙した男の姿も見られる事がなかった。一体どこへ行ってしまったのか、ケイスに知る術はなく、あの混乱の中では派手に魔術を使った男を見た

者も少なかった。城下町警備隊の隊長と知り合いのようだったが、彼には気軽に問えるような仲でもないし、そんな時間はなかった。

王都の現在は波乱の兆しを含んでいるように見えて仕方がない。また何か事件でも起こりそうで、晴れている空なのにケイスは胸騒ぎが隠せなかった。

何も起こらなければ、よいのだが。

†　†　†

地下牢には門番や見張りの兵が何人も配置されていた。そのすべてが、今宵は気を失っている。誰か駆けつけでもすれば目をむく光景だ。

「本当はまずいんだからな、こんな事がばれたら」

「先に頼んできたのはそっちだろうが」

「頼んではいない。お前が勝手な解釈をしただけだ」

シェーン城下町には大きく二つの犯罪者収容所がある。一つが軽犯罪を犯した人間を収容する下級犯罪者牢、もう一つが殺人や王侯貴族に危害を与えたり殺害したりした上級犯罪者牢だ。

下級犯罪者牢は、王城から離れた場所にあり、城下町を北東に進んだ場所にある。対する上級犯罪者牢は王城内北の地下に存在する。

よっぽど凶暴で暴れまわるような犯罪者であれば脱獄した際にすぐさま王や貴族たちに出会ってしまうので、王城外の牢に収容されるが、重犯罪者は王城につめている王都倫理委員会と王都裁判所の判決が下されればすぐにでも処罰できるようにと、王城の中にある。

武道大会で暴れた魔術師は人を殺してはいないので、本来ならば城内に収容される事はなかったはずなのだが、街を混乱させた事とレジスタンスではないかとう嫌疑があるために王城の地下に捕まっていた。

倫理委員会は拷問をしてまで魔術師の口を割ろうとしたのだが、何も益になる事はしゃべらなかった。

正直、魔術師の扱いをはかりかねていた。このまま拷問を続けてしまうと殺してしまうが、国王がそれを許すはずがなく、なんとしてでも魔術師の背後には組織だったものがあるのかどうか知りたがっていたのだ。

シェーンが魔術に詳しくない国だというのは誰もが知っていた。魔術師そのものの絶対数が少ないのだ、知識も乏しい。魔術を使って相手を誘導尋問させる術があるというのは、聞いた事がある人間も居るが、数少ないシェーンの魔術師はそんな魔術は使えないと首を振るばかりだった。

何も進展がないまま、魔術師の身柄は拘束されていた。

そんな中、警備隊の隊長ヴィードルがふと思いついたのは、悪魔との契約のような賭けに近い危ない橋だった。

ヴィードルは原因究明のためにはどんな手も惜しまず使うというつもりはなかった。しかしうっかり口にしたそれが問題の種になってしまう。

“彼”は魔術師ではないのかもしれないが、魔術に対する知識の量が半端ではないというのを隊長は知っている。

自白させる魔術はないのか、という簡単な問いかけだった。その返事の如何ではと先を考えていないわけではなかったが、まさか本当に実行するとは。

「嫌ならついて来なければいいだろう」
「俺がお前を止めなかったら、誰が安全弁になるんだ」
王都では、ほとんど犯罪者級の扱いをしてもらえる男が、なんと王城に忍び込むというのだ。見つかれば捕まりこそしなくても、厄介な事になるのは間違いない人間なのだ。
「自分の尻は自分で拭えるのだがな。というか、足手まといは要らない」
「別に俺だって手前のケツぐらい手前で拭ける。お前が何かやらかさないか心配なんだ」
ヴィードルは巻き込まれた周りの人間の事が心配なのだ。
こうして夜陰に紛れての不法侵入だというのに、相手はいかにも愉快そうだった。隊長は呆れを通り越して嫌になる。
「それで、その魔術師の男の特徴は」
「お前、自分でのしといて覚えてないのか。まあいい。髪はのび放題の、目のぎょろっとした顔色の悪い男だ。上背はあるんだが、どうにも不健康そうな印象が拭えない」
警備隊隊長として、ヴィードルも一度捕まった後の魔術師を見に行った事があるが、あの格好は牢に入る前からそうだったのではないかというくらいに板についている。
確認するように閉じ込められた犯罪者たちを彼は見てゆく。一つの独房の前で、彼は足を止めた。
「……お前か」
独房の中に一人、粗末なぼろを着せられた男がうずくまっていた。拷問の跡がたくさん分かるが、なるほど、獄中生活がもたらしたであろう不健康以外にも、男は普段から健康ではなかったと思わせるものがある。
実験動物を観察するような目で、彼は牢の中の魔術師を見ている。周囲に意識を配りながら——何しろヴィードルたちは正規の手続きを取らずに牢に来ているどころか、見張りを気絶させている——隊長は横目で友人を見た。また、よからぬ事を考えているのが一目で

分かる。
　捕まった魔術師は、人の気配にやっと反応して顔を上げるものの、さまよわせた視線は二人の男を視界には入れていないようだ。へらへらと笑っており、口の端に涎を光らせている。
「自白を促す、というのではなく正気を失わせるような魔術もあるのだが、こいつの場合は既にまともではないようだな」
　お前にそう言われたらおしまいだよ、という台詞をヴィードルは飲み込んだ。確かに、この魔術師はどうにも正気を失っているようではあるが。
「しかも、死にかけだ。安全な術はあまりない。精神の支障が肉体に現れるほどだと死ぬぞ、こいつ」
「……じゃあ、勘弁してくれるか。俺がここまでお前を引き入れた事、そしてみすみす殺してしまったとなればお役御免どころか五体満足じゃすまされん刑を与えられるだろうよ」
「失敗する前提で言われると、試したくなるな。自分の腕を」
　ああまたロクでもない事を言い出した。世の「ロクでもない」などという言葉はこの男を前にすればかわいいものだ、大した事でもない。ヴィードル隊長は天を仰いだ。無理と分かっていながら、救世主をつかわしてくれる事を望んで。
　だが彼をここで止められるようなら、最初から王城まで来させたりはしない。出来るなら、被害は最小限でいくしかない。
「いいか、一回だけだ。それ以上は許さん」
　相手の腕を掴むと、痛みを与えるように強く訴えた。ヴィードルはこれで聞かないようなら殴ってでも止めるしかないと思っていた。
　しかし彼は、嘲るような不敵な笑みでもって答えた。どう贔屓目に見ても、良い表情とは言いがたい歪んだものだったが。
「誰にものを言っている」
　これだよ。ヴィードルは腕を下ろした。
“彼”は、魔術を使って犯罪者の口を割らせようとしていた。
呪文は口の中で小さくつぶやかれるのみ。右手を魔術師の頭の近

くへと差し出す。
ぼんやりとした青い光が、男の手の中から生まれた。と、魔術師の体が一瞬淡い光に包まれる。消えた後に、一拍を置いてから魔術師は苦しみはじめた。
「うぐ、ぬぐうぅぅ……！！」
首をかきむしるようにして、白目をむいている。尋常じゃないもがき方に、隊長は男を仰ぐ。彼もまた、何か抗し難い力に抵抗しているかのように眉間に深いしわを刻んでいる。
「ぐがああ、あああああ！！」
あまりにけたたましい声に、ヴィードルは誰かに聞こえてしまわないか周囲を見回す。
男の闇色の瞳が一段と細められると、どさりと音をたてて魔術師は倒れこんでいた。牢の向こうで、身動き一つしない罪人。まさか殺してしまったのではと、友人を見るが彼は何も答えない。ヴィードルは焦れたようにこの場を後にしようとするが、男は「見ろ」と言った。
魔術師は、うつ伏せになって倒れているが、しばし眺めていればぴくりとわずか体を動かしていた。
「生きている」
と言うのに彼は失笑したような声でいた。
安堵した隊長だったが、しかし長居はまずいと決意する。この場を離れるまで安心出来ないと、踵を返そうとする。
「面白い事がわかった」
男の言に、自白に成功したのだと察知したが、あの犯罪者は何も言っていないではないかとヴィードルは疑問に思った。が、問う暇も惜しいと地下牢を出る旨を視線のみで訴える。
男はすぐには牢を出ず、倒れて眠り込んでいた見張り番の男に向かい何事かをつぶやいていた。
「何をした？」
「王城の人間にも知らせた方がいいな」

問いただしたい事はたくさんあったが、隊長は今はここを逃げ出すのが先決だと口をつぐんだ。

今度こそ、二人の男は地下牢を後にした。

23　騒乱のその後に2

城下町にあるヴィードルの自宅に戻る。夜も遅いために手元のロウソクをつけるだけに留めて、男たちは二人静かに身をひそめた。今夜起きた――あるいは起こした――出来事を考えると眠る事は出来ない。

兵士に何をしていたのかと問えば、男は王城側にも魔術師の情報を与えた方がいいと判断したために、あの兵士が自白させた事にして記憶を操作したのだという。彼を敵に回さなくてよかったと心から思える瞬間である。

「あれは≪ザッハヒカリテ≫だ。それも、洗脳された」

ヴィードルは眉を寄せた。レジスタンス。人々が心配していた事が真実となった。

「魔術によって洗脳されていた。あの男も魔術師のようだが、もっと高位の魔術師に操られていたようだな」

「あの男も魔術師なのにか」

「そうだ。あいつが何か特異な能力を持っていたというわけでもあったのかは知らんが、あの男を操る事には何かメリットがあったのだろう」

「武道大会を混乱のうちに終わらせる事がか？」

確かに、目の前にいるこの男が居なければ事態の収拾は難しかったかもしれない。だが彼は武道大会に興味を示した。人相を隠すと約束させ、見張りをかねた隊長が付き添って。それがあんな事になり、暴れた魔術師を止めたのはこの男。

「そこは知らんが」

心底どうでもよさそうな口調で彼は応じた。

「帝国の人間だ、あいつは」

ミリヤール帝国の出身。レジスタンスは、シェーンの人間ばかりで構成されていないとは知っていたが、まさか帝国の人間までもが

関わっているとは。しかも相手は魔術師で、洗脳されていて、廃人寸前だ。牢に入っているから、あの魔術師がこれ以上何かを犯す事はないだろうが――それでも、ヴィードルの頭の中は瞬間様々な思考に占拠される。

どうにも、シェーンに反旗を翻すレジスタンスの≪ザッハヒカリテ≫が、ただそれだけだとは思えなくなってきた。以前からそうと薄々感じていたが、今回の事で明白となった。

≪ザッハヒカリテ≫の活動はただのシェーン反乱軍の活動の域を越えている。彼らの活動が目立つようになったのは近年だが、現国王打倒を目指しているだけじゃないと気づけたのも、またもっと最近になってからだ。水面下で革命を起こそうかというような動きばかりだったレジスタンスは、何かもっと他の事をしでかそうとしているのではないか。

「シェーンだけに巣食う病巣じゃないな、≪ザッハヒカリテ≫は」

「らしいな。帝国も帝国で問題が山積みのようだが、何かが帝国で起ころうとしている」

「シェーンじゃなくてか」

レジスタンスは帝国にも居るそうだが、それは≪ザッハヒカリテ≫じゃない。≪ザッハヒカリテ≫はシェーンを中心に活動をしている。何か起こるのならば、シェーン王国、それも王都がその中心だと思うのが普通だろう。

「ミリヤールは広い。その分くすぶっている火も多く、大きい。何かが起こって楽しいのはシェーンよりはミリヤールだろう」

滑稽な芝居でも見るように、彼は頬を上げた。嫌な笑みだ、ものすごく。ヴィードルは正視をしたくなくて目を逸らす。

このまま彼がミリヤール帝国に興味を持って、帝国に行くと言い出せばいいのかもしれないが、それはそれで問題がありそうな気がしてくるのは長年の付き合いのあるヴィードルだからそう感じるのだろう。さすがに帝国までに付き合う気はないが、何かを彼が起こすならそれもまた帝国である気がする。そこまで考えて、よくない

予言はよそうと小さく首を振った。
「近々、≪ザッハヒカリテ（レジスタンス）≫どもにはメスを入れないといかんな」
「城下町警備隊はレジスタンスとの癒着があると聞いたが、いいのか」
警備隊とレジスタンスのつながり。城下では当然のように噂されていた。警備隊がレジスタンスに買収されているとか、レジスタンスが警備隊員として潜入しているとかいったもので、その真偽は定かではないが、癒着の内容には事欠かなかった。
「あれは私（わたくし）の関与せぬところで行なわれております。仮にも私は、王国騎士団であった身でありますから、忠誠は王家のために」
まるで騎士が王の御前で誓うような内容だったが、警備隊長の口調には熱意が見られなかった。何度か繰り返してきたような物言い。かつて御前で弁明をした事でもあるのだろうか、どこかうんざりしてさえ見える。それが楽しくて“彼”は黒い瞳を光らせた。
「警備隊員は、阿呆ほど居る。相対的に阿呆は増える。俺は知らん」
「仮にも隊長がそんな態度でいいのか」
「レジスタンスどもとのつながりがあるヤツらを誰かが葬ってくれればよいのだが……」
「手伝おう」
「黙れ」
先に葬りたいなどと物騒な事を言ったのはヴィードルであるのに、便乗したら問答無用の一喝をもらえる。男は納得いかなかったが、彼らの間でのこういった軽口はいつもの事。
「陛下は≪ザッハヒカリテ≫を軽視している。だから癒着が起こる。だから表立ってヤツらを退治出来ない」
警備隊長ヴィードルのそもそもの地位が不安定だった。元騎士団員。仮にも貴族だ。過去の事件が原因とはいえ彼を城下町警備隊へと“降格”させてしまい、貴族間では問題視されていた。そんなヴィードルを国王陛下が煙たがっているのは多くの人間の知るところとなっている。シェーン国王がヴィードルを扱いかねているといっ

ていい。
「今回の事が、ヨハネス二世の尻を叩く鞭にでもなればいい」
そのために男は城の人間に、魔術でもって捕らえた魔術師について教えたのだ。それにしても、シェーンに住みながらその頂点であるシェーン国王を馬か何かのように言うのは彼ぐらいだろう。こんな事では呆れはしないが、ヴィードルは小さく眉を持ち上げた。
「とにかく、≪ザッハヒカリテ≫どもの活動がシェーンだけで終わらないのは確かで、シェーンをひっくり返すだけが目的ではないのもよく分かった」
問題は、山積みだ。何かが起こった時にしわ寄せを食らうのは常に下々の民だ。それを守るために組織されている城下町警備隊。トップに座る人間には胃の痛い話だ。
「楽しくなってきたな」
「殺すぞ」
ヴィードルが自分の家に宿泊している友人を本気で追い出そうと思った瞬間だった。

† † †

「そうか……。おれの方でも陛下に言っておく」

面会に来た人間が、頷いてからしばらくお互いに談笑しあって、相手は退室した。

部屋の主は今出ていったばかりの人間が消えたドアの向こうを凝視するように見ていた。

彼には子飼いの私兵がある。それを知るのはごく一部の人間だけ。彼の家が代々続けてきた風習のようなものだったが、彼らを今は隣国のオスティオに潜伏させている。私兵が上手く機能してくれるのであれば、使うのは今かもしれなかった。

レジスタンスの出入りが激しいのがオスティオ王国であるのを、彼は知っている。ゆえに人員をオスティオに配置した。しかし、物理的な距離は人の心を離れさせるようで、主であるはずの彼に私兵は連絡を寄こさなくなってきている。

彼を悩ませる問題はたくさんあったが、これが一番の悩みかもしれなかった。飼い犬に噛まれるような事にはならなければいいが、近々自分の私兵をどうにかしなければならない。レジスタンスにでもなってしまう前に。そう思えば行動を速やかに開始せなばならないと気づく。

「どいつかに、なんとかしてもらおう」

上に立つ人間というのは、適所に適する人物を派遣するのも仕事である。何も自分に向いていない仕事をする必要はない。采配をする場所に立っているのだから、仕事に見合う人間を捜し出すのが役目だ。

彼は机に向かうと紙を取り出して考えこむ事にした。

室内には昼の空がゆるやかに光を差し込ませていた。

24　カイネ村

ぴちょん。
滴の、水溜まりに落ちる音が一つ。
小さく、空から降る。
ぴちょん。
「……う……」
まず頬に、冷たさを覚えた。それから、自分に意識がある事を感じる。生きて、いる。
そして――痛み。
うんざりだ。死にそうな目にあったなら、そのまま死ねばよかったのに。また生き延びてしまった。
「……うう……」
腹が、痛い。腹痛なんて生やさしいものじゃない。激痛を集めに集めて、意識があるのもうんざりするくらい。
何かが刺さった怪我があるのだ。
シュガーローゼは、常人よりいくらか怪我の治りが早い。“死神のキス”と同時に得意な体質だ。だが“死神のキス”とは違い、人より少しだけ傷の治癒が早いという程度だ。痛みはある。いっそ超人的な力があるなら痛みもなければよいのに、それは確かにある。
こんな体にした、神様を恨む。いるのなら、出てきて罵倒してやりたい。それから死をくれないか。あなたの元へ行くから。
段々と、痛みが鈍くなるのが分かる。少し、ほんの少しだが痛みがひいてきた。
雨がさあさあと降り注いでいた。肌に冷たい感覚でよく分かる。いつか雨が降り出していたのは覚えているが、それがいつだったかは覚えていない。そもそもがあまりに突然の事で今の彼女にはこの状況に至るまでの記憶を思い出す余裕がない。
瞼を開くと、荒れ地の土の肌ばかりが目に入る。それから、人間。

いや、死体だった。
小雨を肌に感じながら辺りを見回せば――なんと名乗っていたかシュガーローゼは覚えていないが――チェスカが死んでいた。
おしゃべり女は一目で分かる致死量の血を流し、腹から太い木の枝を生やして死んでいた。突然の事故が元だ、ああなっていたのはシュガーローゼでもおかしくなかったが、そうなれば良かったのだ。
他に死体はなかった。生きている者もいなかった。
視線をさまよわせ、ふとカルツの姿を探している自分に気づく。状況把握のために、人を探してはいたが、具体的にカルツの顔が出てきた事に顔をしかめる。
他にまともな知り合いなどいなかったからだ。ここ最近、妙に顔を合わせる事が多かったせいだ。他に理由はない。だから少しの違和感を抱いたに過ぎない。自分に言い聞かせるように瞼を閉じる。
シュガーローゼは誰の顔も脳裏に描く事なく生きてきたはずだ。だからもう、きっと二度と会わない――生きているかも分からない――カルツを思い描いても意味がない。このわけの分からぬ状況下でも、もう誰の姿も探さない。
「……要らない……」
小雨がやや強くなる。一身に雨滴を受け、目を閉じる。
雨が全て洗い流してくれればいいと思う。全て。自分という存在も――。

乗っていた馬車が墜落事故にあったという可能性に気づいたのは、次に意識を浮上させた後だった。
幾分睡眠したせいか意識がはっきりしている。人の気配も読める

ほどに。幾人か、一人ではない人間が居るのが分かる。
彼女は体を起こそうとするも力が入らない。
「無理するな！　大丈夫か、おい」
「こりゃ大丈夫じゃないだろ」
何者かが駆け寄る気配。反射的に瞼を上げると、男が二人シュガーローゼを心配そうに見ている。
近寄らないでほしかった。こんな怪我をしている時だからこそ。
襲われでもしたら、唇が届かない事もある。
「今、手当てするからな、大丈夫だ」
「ああ……このくらいならまだ大丈夫だ」
シュガーローゼを安心させるように「大丈夫」を繰り返す男たち。
身なりからはどこかの村人や木こりにも見えるが油断出来ない。
「さ……わらないで……」
意思に反して弱々しく遮る手は、男たちに何の影響も与えなかった。シュガーローゼの反応に、男は逆に不安げに眉を寄せる。
「よっぽどひどい目にあったのか――」
「大丈夫、おれたちはこう見えて怪我の治療には慣れてるから」
「村も近くにあるし、もう大丈夫だ」
あくまでも「大丈夫」を繰り返す男たちに苛立ちを覚えながらも、シュガーローゼに対抗する手だてはない。“死神のキス”は最悪の場合まで使う気はない。切札でもあるが、別に無闇やたらと人を殺したいわけではない。こんなところに居たくはないが、彼をどうにも出来ないようだ、どうしたらいいのか分からない。頭の中が一つの考えをもとどめておけない。
そんなものだから――再び少女は、意識を手放した。彼女の意思とは裏腹に、深く沈みこんで――。

†　†　†

――大丈夫だ

――なに、大丈夫だよ

――人はいなくなっても、何かを残せる。

――だから、お前も、一人ではない。

――そばに、私がいるよ――

嘘つき。

あんたは死んだ。

死んで何も残らなかった。

わたしに何も残さなかった。

何一つ。

そばになんか、いないじゃないか――――

†　†　†

夢見は悪く、すこぶる機嫌が悪かった。全身が重い。

シュガーローゼは目をさましてすぐに最悪だと思った。

それはとんだ嘘つきの夢を見たからで、気を失っていた間に誰かに運ばれた事が分かったからでもあった。

見た事もない天井が目に入った。そこには簡素な造りの梁が見える。

身体の痛みは、薄い。体はだるく重いままだったが、傷は少し癒えてきているようだ。半身を起こすと、狭い部屋の寝台に横たわっていた事が分かる。腹には包帯が巻かれ、誰かに運びこまれ手当てをされた事の表われがある。

気を失う前に見た男たちの仕業だろうか。村が近くにあるとか言っていたから、その村なのかもしれない。

ぼんやりとした頭が上手く働いてくれないが、足が動くので足に従うままにふらふらと部屋を出る。人が先ほどまで居たような形跡のある部屋を抜けて、外に出た。それからのろのろと歩いて行った。

山が見渡せる土地のようだ。山に囲まれている村なのかもしれない。

西日が黄金に注ぐ、夕暮れ時。遠くに子どもの遊ぶ声が聞こえ、鳥のさえずりもほんのわずか、時おり思い出したように聞こえる程度。

心地よいとも取れる、ほどよい静けさ。

のどかだった。

そこは確かに村で、のどかに村人が暮らす土地だった。

このような景色は、見た事がある。シュガーローゼの故郷にそっくりだった。故郷はもっと寒い土地柄だったし、おぼろげな記憶の中にもここの村とは違うと分かる。

しかし、シュガーローゼを捨てた村を思い起こさせるこの光景は——居心地をよくはさせなかった。寒くもないのに、寒気を感じる。両腕で自らを抱きしめるように腕をそえる。

——ここは、あの村じゃない……

そう言い聞かせても、何故だか胸にはむかつきのようなものが残る。消えない苛立ち。漠然とした不安。出ていってほしいのに、まるでそれらを抱えこむように腕を強く抱きしめシュガーローゼは震えた。

「あら、もう起きて大丈夫なの？」

顔を上げると、中年のふくよかな女性がいた。少し心配そうにしているが、どこか芯の強さを思わせる表情でにこやかに立っている。

「あ……」

警戒すべきなのに、なんと告げればいいのか分からない。戸惑うシュガーローゼに、女性は寄ってきて肩を抱く。

「まずは部屋へ戻りましょうね。話は、それから」

女性のかさついた手つきが、あまりにも優しいのでシュガーローゼはついうっかり従ってしまった。支えるような女性を伴って、シュガーローゼは眠っていた寝台のある部屋へと戻る。横になるよう言われ、そのまま従う。女性は少女の容態を心配しているようではあるが、安心させるようにほほ笑んだ。

「さて、何から話しましょうかねえ」

「あの、ここはどこですか？　オスティオですか？」
「ええそうよ。カイネ村というの。あら、そうだわ。あなたお名前は？」
　名を問われ、ふとカルツには出会ってからしばらく時間がたっての名乗りになったなと思い出す。一度など偽者の兄妹のふりまでしたというのに、カルツはシュガーローゼの名前を知らなかった。偽とはいえ、妹の名前を知らない兄がいるだろうか。
　元より隠し通すつもりはなかったが、カルツの時よりも容易に名のることが出来た。
「……シュガーローゼ」
「あらかわいらしい。ローゼちゃんと呼んでも？」
　刹那、少女はその身を硬くした。心臓がぶるぶると震えているのがよく分かる。
――落ち着け。
　首を小さく振ろうとして、頭が重いので少し難しく、諦めるように首をうつむけた。
「――呼び捨てで、いいです」
「そう？　あたしは、フランベ。呼び捨てでいいわよ」
　にっこりとフランベは笑う。昔、これと同じ笑顔を見た事がある。大嘘つきだったが。ここ最近「大丈夫」を連呼されたせいだろうか。あの大嘘つきの存在がかすめるのは。
　フランベは、シュガーローゼが丸五日眠っていたと話した。他にもカイネ村の話や、村人が偶然シュガーローゼを見つけた時についてなどを話した。馬車の墜落事故があったようで、馬と車はもう一つあった崖の下に落ち、他の乗客は遠くに落ちていたそうだ。
「何人は亡くなっていたけど……あなたの他にも助かった人もいるわ」
　それを聞いて、カルツの事が頭をかすめた。生きていてほしいとは思わなかった。ただ、他にも乗客がいた事を思い出していた。そしてあのおしゃべり女（チェスカ）は助からなかった方に入るだろうというよう

な事をぼんやりと思った。
シュガーローゼたちを捕まえた側になるオスティオ王国の役人が御者と荷台見張りに二人はいたはずだが、どうなっただろう。
死んでいればいいとは思わないが、ただ生きていればまた面倒な事にはなるだろうなと思う。
「女の子はあなただけしか……いなかったから、ここに運んだの。男の子たちは別の家に居るわ。知り合いが、いたかしら？」
チェスカの死体を思い出し、フランベが「“生きて”いなかった」と言おうとしたのを察した。
よみがえるは、無残な死に方をした女性の遺体。死体に恐れおののくようなシュガーローゼではなかったが、今はあまり思い出したくない光景だった。
「……いいえ……」
カルツは知り合いでもなんでもない。生きていようといまいとどうでもよかった。シュガーローゼの脳裏に入りこんでくれなければ、どちらでも。
それから頭がひどく重く、考え事を出来なくさせるので瞼を閉じる。
「ごめんなさい、話が長かったわね。少し休むといいわ。大丈夫、あたしがついているから」
また「大丈夫」を聞いてあの大嘘つきの夢を見そうな気がして嫌だったが――今はフランベの言葉に従う事にした。
閉じた瞼の下に、様々なものが映りこんできたが、それもすべて消えてなくなるようにシュガーローゼは眠りについた。

25　村の夜と昼

次に目を覚ました時には、夜だった。

夢は見なかった。覚えていなかっただけだろうが、それなのについこの間見た大嘘つきの事を思い出していた。封印してきたはずなのに、よみがえってきたのは何故だろう。頭の中からそれを追い出すように首を振ると、頭に痛みが襲ってきた。まだシュガーローゼの体はこんな些細な無理をするのにも難しいようだ。

空腹をこらえるのには慣れていたが、怪我の痛みだけではなく腹に力が入らないのを感じていた。腹部には何もないような、ぽっかりと穴の開いた感覚があるのに、どうしてか腹を中心に何かが脈打つ感覚も同居していた。

理由もなく上半身を起こし、ぼうっとしているとフランベがまた現われた。燭台を手にして部屋へ入ってきた彼女は、シュガーローゼの座る寝台の脇にあるロウソクに火をあげた。フランベが持ってきていた燭台も部屋の反対側へ置かれ、室内はにわかに明るさを手に入れた。昼間の明かりと比べれば、ささやかなものではあるが。

今回は一日眠っていたようで、お粥を持ってきたフランベにそれを告げられる。

「食欲、ないです」

半身を起こしただけの怪我人は小さな声で、だがはっきりと言った。

これだけ親切にしてもらったが、どうしてもその食事を食べる気にならなかった。実際食欲はなかったし、彼女は以前に毒を食事に盛られて以来、普通の飲食店以外では食事をする気になれないでいた。

「あら……でも、こういう時は少しでも食べないと。回復するものもしないわ」

実際、シュガーローゼの怪我はもう半分くらいは治っているよう

な痛みしかなかった。怪我の程度は確認してはいないが、常人よりは早い治りに訝しく思われる事は必至だった。それを知られるわけにはいかなかったが、食事をとる気にもなれなかった。

「置いてといてください……後で、食べます……」

何やら物言いたげな表情のフランベだったが、寝台脇の台にお粥の皿を置くとしばしシュガーローゼの顔をうかがった。まだ眠る様子がないと見てとったのだろう、話し出す。

「ローゼちゃんの他にも、目を覚ました男の子がいるの。会いに行ってみる？　知り合いがいなくとも、何か話せると分かる事もあるんじゃないかしら」

それはもっともだ。だがそんな気分にはなれない。

「……何人、いるんですか」

「四人よ」

四人。シュガーローゼとカルツの他に、荷馬車には八人の人間が乗っていたから、半分以下の生存率になる。いったい誰が生き残ったのか。気になるところではある。

「この村は……見知らぬ人を助けている余裕があるんですか」

シュガーローゼの知る村は、村人たちだけで世界が完結していた。余所者になど興味がないどころか排除すべきと考えていた。それは、未知なる存在のもたらす未来が不明だからであり、損害をこうむる前に関わりをたとうとする――まるで、今のシュガーローゼのようであった。そして、村は貧しかった。土地柄か、農作物は毎年満足にとれず農作業をするか内職をするかで村人は皆忙しかった。

シュガーローゼの知る村なら、大の男を四人も村に受け入れるような食事も寝台も村人たちの精神的な余裕もなかった。

人に施しを与えるという徳の高い行為を、貧しさが忘れさせている村。小さな世界を守るために、危険を回避するために、道徳というものを軽んじる村。土地も、人の心もまずしい村。

「大丈夫、そんな事ローゼちゃんは気にしなくていいの。ゆっくり怪我を治していって」

微笑みながら、フランベはそっとシュガーローゼの頭に手をのばした。びくりと体を縮こませる少女に、はっとなってフランベは一瞬手を止めた。しかしそのまま一撫ですると、そっと手を離した。

「お粥、ちゃんと食べるのよ」

去り際のフランベの笑顔には、わずかに悲しみがにじんでいた。それが一体何を示すのか考えもせずに、瞼を閉じる。

――早く、この村から出なくては

この村はシュガーローゼに非常に居心地を悪くする。

生まれた場所に似ているのに、まったく似ていない場所。

怪我が治る前に、出て行こう。

その次もまた、夜中に目を覚ました。

暗闇の中で一瞬、何がなんだか分からなくなる。ここはどこで、自分は誰なのかを思いだすと、夜なのかとだけ思った。

何の気はなしに立ち上がると、空腹を訴えるのが全身でふらふらした。寝台脇の台にある粥の存在をすっかり忘れたシュガーローゼは無意識のうちに食べ物を求めて部屋を出た。

空はすっかり夜のものだった。虫の声が聞こえるものの、静かな夜だ。王都シェーンのように遠くから人の声が聞こえたりはしない。村の人間はみな揃って眠りについているのだろう。夜警もする必要ないくらいに、平和な村なのだ。

ふらふらと意味もなく歩き始めると、隣りの家の戸口へ向かう。理由はなかった。ただ、穏やかに眠る村人を見たかったのかもしれない。扉は夜だから当然閉められていた。どこの村も、町もそうだろう。窓も閉まっている。中の様子は見られない。

りーりーと虫が鳴く。
ひんやりとした空気。
穏やかな気持ちになってもよいものを、シュガーローゼは心が落ち着かなかった。
夜の帳（とばり）は好きだ。日中のように明るさで全てを攻撃する太陽がないのは、いい事だが。どうしてか、胸の辺りがざわめいている。何かが起こるような気がするが、なんとでもないのだろう。それに、毎日何かなら起こっている。シュガーローゼが死神であり続けるという何かが。
どうしてこんなところまで来てしまったのだろう。
ひどい怪我に、頭が回らなくなってきた。もう、寝台へ戻ろう。
シュガーローゼは帰りは素早く移動した。
眠るのがひどく億劫だが、今はもう夜の空の下には居たくなかった。

† † †

翌日、昼間になったら手持ち無沙汰ゆえにシュガーローゼはやはり自分の眠る家の付近をうろつく事にした。昨晩ドアの前まで行った家の前にも向かった。

中をのぞくような事はドアの閉まっていた事により不可能だったが、窓が開いていた。
どれ、と意味もなくのぞくと人間の横たわっているのが目に入る。
「あ」
あの男だ。あの藍色の髪には見覚えがある。閉じた瞼の下にはきっと、マンダリンガーネットの瞳が。
そうか、カルツも助かったのか。
ほっとした覚えはない。ただ、事実としてそう思っただけだ。
それでも、あのおしゃべりな女性が見せた最後の姿を思えば、まだ生きていてよかったのだと、カルツに対して思っていたかもしれない。シュガーローゼ本人は認めようとはしないが。
カルツは眠っているようだ。普段から感情の見えない男だが、こうして見ると不思議な事に眠った時の方が表情が穏やかに見えるのは何故だろうか。ほほ笑んでさえ見えて、そんなはずがないと少女は苦笑する。
それからは、もうカルツを見ないで部屋に戻る事にした。

部屋に戻ると、フランベが困ったような笑みを浮かべていた。怪我人の少女が寝台へと腰をおろすのを見守りながら待って、口を開いた。
「ローゼちゃん、本当に、食欲がなくても食べないと体によくないわ」
この、とても人の良さそうな女性を信用したわけではなかった。今までの事で、彼女がシュガーローゼを死神の少女だと知っている様子はない。また、この素朴な村の人間が死神の少女を利用して得

られるものはないかもしれない。わざわざ助けておいて、食事に何かを混ぜる必要があるなら最初から助けはしない。

何より、彼女は非常にお腹がへっていた。

返事もせずに、フランベの持ってきた出来立てのお粥を手にすると、差し出された匙でもって食べることにする。

久しぶりの食事は、あたたかいお粥だった。塩と菜っ葉の入っただけのもの。それがどうしてか体に染みた。美味しいという感動は忘れていたシュガーローゼ。それに近いものを感じていたなどと、本人は知らない。

お粥を差し出した女性の、わずか切なそうな瞳と笑顔の向けられた先も、少女は知らない。

26　町へ行く

冬が訪れていた。オスティオ王国の気候は冬でも雪が降る事のないものだった。とても冷えるが、天候も崩れる事の少ない場所だ。カイネ村もその例にもれず、曇り空の増えた冬を過ごしていた。

シュガーローゼがカイネ村に滞在して、眠っている間も含めて半月たった。

その間、馬車の墜落事故で助かった他の男性たちが目を覚ますことはあっても充分に歩き回れるまで容態が回復することはなかった。

シュガーローゼの回復が早すぎるのだ。カルツも目を覚ましたかどうか分からないが、そうなっても動き回るのは難しいのだろう。シュガーローゼが窓の外から見かけた日以来、カルツの姿も見てはいなかった。

フランベ以外にも村の者は顔を出したが、怪我人であるという点とシュガーローゼがひどく人見知りをするというようなので、フランベが村人の訪れを認めなかった。それは、少女にはとてもありがたいものだった。

怪我の治りが早いとはいえ、やはりシュガーローゼも怪我人だ。ゆっくりと療養できる時間が与えられる毎日に、安堵を覚えていた。カイネ村は静かで、村人たちは彼女に優しかった。フランベ以外は気を使って放っておいてくれる。穏やかな時間だともいえた。

その日の午後、フランベが隣り町に行くと言い出したので興味をもったのは、退屈でもあったからかもしれない。

チェルヴォの町。国境沿いの町ティパストと、オスティオの首都であるベルリーニへ向かう交通の要衝で、商業が盛んに行なわれている町だという。織物業でも成功した町は、町の規模こそ首都（ベルリーニ）ほどではないがかなりの富を得た町だそうな。

カイネ村の隣りにあるために、食料品などの買出しにはよく行く場所だそうだ。そして農業を営む村の農作物を売り出しに行く場所

もまた、チェルヴォである。
　シュガーローゼも行きたいなどと言ったところで、同行を許してもらえるだろうか。おそらくは世間一般の感覚でまだシュガーローゼの怪我は治ってはいないと思われているだろう。ほとんど痛みもなくなったのだが、シュガーローゼの特異体質を知られる訳にはいかない。だから同行を請うのは体質をわざわざ知らせる事になってしまう。
　危険な事は避けたいが、上手くいけば町ではぐれて逃げ出せるかもしれない。この村にいつまでも居るわけにはいかない。せめて、この先向かうオスティオの首都についてやその先の情報が知りたかった。今まで言われるまで考えるのを忘れていたが、やはりシュガーローゼはこのままカイネ村にはいられない。怪我が治れば出て行くつもりだった。これは一つの好機（チャンス）なのかもしれない。
　思いが顔に表れていたのか。フランベが口にしたのはまさにシュガーローゼが願っていた事だった。
「ローゼちゃんも、行く？」
　まさかとは思った。世間一般の感覚は分からないが、他の怪我人の具合からまだシュガーローゼは安静にしていなければならないと見なされているはずだ。だからまさか、死人に鞭打つとはいかなくても、怪我人を買い出しに連れていく事がまかり通るとは思ってもみなかった。
「ローゼちゃんの服も買いたいと思っていたところなの」
　村にシュガーローゼと同じ年頃の娘はいなかった。もっと年上か、本当に小さな子どもしか若い娘はいなかったのだ。今は自分より年上の娘の服をぶかぶかだが折って着ている状態。シュガーローゼは別に何を着ようとも構わなかったが、それはフランベが気にするような事だろうかとだけ思った。
「それに、ローゼちゃんの怪我はもうだいぶ良いようだし」
　はっとして顔を上げる。気づかないはずがない。シュガーローゼの包帯の取り替えは皆、フランベが行なっていた。怪我の具合など

既に知っている。青ざめるシュガーローゼに、フランベはいつか見せたような小さな悲しみをのせて、取り繕うように手を振る。
「やだ、気にしなくていいのよ。ごく稀にそういう体質の人、いるのよ。ローゼちゃんもそういう体質なのでしょう。おかしい事ではないわ」
シュガーローゼは、フランベの言葉に眉を寄せる。彼女が特異体質の少女を恐れているのではない事は分かるが、“ごく稀にそういう体質の人、いるのよ”という台詞が気にかかった。
「怪我の治りが早い人間が……他に、も……？」
「ええ、前に一度だけ見たわ。魔術師なのかと思ったけれど、違うみたいだったから……。他にそういう話を知る人もいたわ」
知らなかった。
シュガーローゼは、魔術もなしに怪我の治癒が早い人間が自身以外にも存在するなどと、知りもしなかった。自分の目で見たわけではないから、にわかには信じがたいが、フランベの対応から見ればそうと納得もいく。人は未知のものを恐れるものだから、彼女は本当にシュガーローゼのような怪我の治りの早い特異体質の人間を見たのかもしれない。
「いるんだ……」
これは、この体質はシュガーローゼにだけふりかかった呪いの一つだとずっと思っていた。不思議なものだった。
「だから、気にしなくていいのよ」
フランベの微笑みは、死神少女がこれまでに見てきた中で数少ない、邪気のない笑み。それはシュガーローゼには居心地が悪い。優し過ぎて——怖い。
「念のためにお医者さまもついてきてもらうわ」
だから、どう？　と買い出しを今度はこちらが誘われる形になる。そんな風に言われてしまえば断るつもりがなくなる。
元々、シュガーローゼは村を出るつもりで隣り町に行きたいと思っていたのだから。そんな事を知らないフランベに小さな罪悪感を

感じる。
「そちらが、いいのなら――」
はっきりとは言わない。どうしてか断るつもりもないのに承諾を正しく言えなかった。
「それじゃあ、万全に支度をして行きましょうか」
にっこり笑ってフランベは立ち上がった。
物事がスムーズに進んでいる事に、逆に不安に思いながら――もうほとんど痛まない腹に手をそえて少女も立ち上がった。

カイネ村から隣り町へは一本道で、長いものだった。フランベ以外の同行者はシュガーローゼを心配するように見ていたが、フランベが遮るように視線をやればそれらは止んだ。荷馬車を降り、諸々の手続きを他の者に任せたフランベはシュガーローゼと共に市場へと向かう。
チェルヴォの町は活気に満ちていた。話に聞いていたとおり、あちらこちらで繊細な織物の布が売り出されている。野菜や果物が、狭い店の敷地にところ狭しと並んでおり、今にも商品があふれ出そうだ。
「安いよ安いよ！」
「今日だけの値引きだよ！」
呼びかける声は威勢よく、明るいもの。雑然とした目抜通りの市場にシェーン王都で見たような清潔感はなかったが、かえってそれが町を生き生きとさせていた。人々の顔は商品を高く売ろうと、安く買おうと様々ではあったが、穏やかそのもの。
シェーン王国とは違う空気が、町（チェルヴォ）には流れているようだった。シ

ュガーローゼははじめての異国なのだと今更ながらに思った。カイネ村はただの農村で、ティパストの町には関所しか入れなかった。明るい日差しがまぶしくて、少女は目を細めた。

「まずは服ね」

フランベにつき従って、シュガーローゼは服売り場に向かう。

隣国というだけで色彩が違うのは不思議なものだが、まだ幾分国境に近いせいもありシェーン王国のなごりを残す服が並べられていた。

にこにこと実に楽しそうに、フランベは一着、服を取り上げる。目の前の少女の体に合わせるようにして、問いかける。

「これなんかどうかしら」

その服は、色こそは違うもののシュガーローゼが墜落事故に遭う前に着ていた服にどこか似ていた。

「それでいいです」

「サイズも合うか、着てみないとねえ」

うれしそうに、否、楽しそうにフランベは試着をシュガーローゼにさせる。似合うわ、とフランベは拍手までしてみせた。それから、でもこっちもかわいいんじゃないかと思うの、と続ける。

最初の服で良かったというのに、まだ着せ替え足りないフランベに何度か着せ替えをさせられた。最終的には最初に着た服に決まったのだから無意味な試着大会だったとシュガーローゼは思う。

ついさっきまで着ていた服はサイズが大きい借り物だったので、買った服をそのまま着て、他の買い物を続ける事になる。

「それじゃあ次は……靴を見ようかしら」

服の支払いを済ませたフランベに気づいて少女は眉を寄せる。村でずっと寝食の場を提供してもらっていて今更だが、シュガーローゼは服まで買ってもらい非常に多くのものを与えられている。なんの縁も所縁もない少女に施しを与えるフランベに、村人たちにシュガーローゼが出来る事などほとんどない。

この服をこのままもらって、着ていていいのだろうか。

「ローゼちゃん？」
「あの、わたし……」
なんと言おうか考えていなかった。無性に申し訳なくなってただ謝ろうとだけ、した。
言葉が見つからなくて、顔を上げた時。
顔を上げた視界の中に、雑然とした市場の人混みに、忘れたいはずの顔を見つけて目をみはる。
「！」
ほとんど同時にあちらも気づいたようだ。信じられないとでも言うように大きく目を見開いている。その様子をこれ以上見ている必要はない事に気づき、シュガーローゼは一目散に駆け出した。
フランベも買ってもらった服も謝罪も何もかも忘れて逃げ出した。
「ローゼちゃん？！」
フランベの声だけが耳に入ったが、知らないフリをした。

フランベは、突然駆け出したシュガーローゼにそれはもちろん驚いた。何があったのだろうと追いかけるつもりが、彼女を追うようにして現れたら青年に再び驚かされた。
青年は、一緒に居たフランベが人混みゆえにただ隣りを歩いていた者が同行者に見えたのか、それとも本当に同行者として少女と共に居たのか判断しかねていた。
そのためちらりと一瞥をくれた後に、少女を見失いそうになったのでフランベには何も問わず走り続けた。
小さくなってしまった少女の頭と、それを追う青年の明るい茶色の頭を人混みの中に見ながら、

「…ええっと……」

フランベはぼんやりと立っていた。

27　嫌いな人間

目抜通りを出れば、人混みも減っていった。
それなのに自分の後を追うような足音が一つ。もちろん気づいていた。会いたくもなかった“あの青年”のものだ。
最近、町に行きたいというような些細な願いはかなうが、本当に願っていた事は全くもって叶わない。
フランベとも、もうさよならだ。彼女は驚いていただろうか。顔を見る間もなく逃げ出したから分からないが、きっと突然の事に驚いているだろう。
シュガーローゼの中でケイスは、他のキスがきかない相手の中では、“嫌い”だった。一番最初に会った男が“拒絶”でカルツは“苦手”。
足音がどんどん近くなる。知らず知らずのうちにシュガーローゼは狭い路地を目指していたようで、そんな事が分かっても逃げる足は早まってくれない。治りかけているとはいえ彼女はまだ怪我人だった。
「待って」
あっという間に息が上がっていた。ケイスの声なんか聞きたくないのに、すぐそこまで迫っている。ちまちまして進まない足を叱咤して、逃げ続けるも――
手を掴まれる。
逞しい腕に捕まった。歩幅が違う、体力も違うのだ。息もきれてないケイスに腹がたつ。自分は非力な少女だと思い知る。ケイスの前では“死神のキス”はきかない。ただの子ども。なんの、力もない。恐ろしくなった。
「はなして」
振り払う手に、ケイスは困ったように瞳をむける。
「……君に、もう一度会いたかった」

まるで再会をよろこぶような台詞。これだから、ケイスは嫌いなのだ。死神の少女であるシュガーローゼに対して会いたいなどと。二度と会いたくないというのが普通の神経の人間だろうに。少女の胸の中に言い様のない苛立ちが立ち込める。

「用はなに」

彼とは明らかな身体差があり、逃げ出す事はかなわない。それならば早く済ますにかぎる。今までは、逃げるか早く済ます――ある時はキスで、済ましてきたがケイス相手ではそうはいかない。それもまたシュガーローゼの胸のむかつきを煽ってゆく。早く、この男の視界から消えたい。

「えっと……僕は……」

会話の機会が与えられたというのに、言葉が出てこない。ケイスは目の前の少女に言いたい事がたくさんあったはずなのだが、それが何だったかが思い出せない、分からない。

対するシュガーローゼも、目前の青年の意図が読めずに苛立ちながらも困惑していた。ケイスの魂胆が分からない。いったい何を思って死神少女を追いかける。何のために死神少女と対峙する。こんな風にシュガーローゼと向き合おうとする人間に、どう対応していいのか分からなかった。逃げ出す以外に思いつかず、胸にひっかかる思いが勝手な言葉を口にしていた。

「あんた、こんなところで何してんの？　騎士じゃなかったの」

今のケイスのかっこうは町の者か商人の息子のような簡素な衣服。皮肉げに笑うのはシュガーローゼ。嫌な笑顔だ。それは彼女のような年頃にはとても似合わない。少なくともケイスはそう思っているし、彼女にはそんな表情をしてほしくはなかった。

「あ、もしかして左遷？　騎士団クビになった？　お払い箱？」

「それとも殺人犯のわたしを探しに来た？　いいわよ別に捕まえれば？　ちょうどこないだも収容所に向かってたところだったし、大した変わりは……」

「違う！　確かに探してたけど、違う、そういう意味じゃない……

！」

耐え切れなくなったように、青年は声を上げる。

その目。エメラルドの、その目だ、シュガーローゼが気に入らないのは。同情か。そんなものはいらない。意識をこちらにむけないでほしい。無関心でいてくれ。誰も自分に興味をはらうな。少女はうつむいて、それを見ないようにした。胸の真ん中が、悔しさや苛立ちでいっぱいになる。

そんな少女の様子を、ケイスは何か痛みをこらえるようにして見ていた。ふと、これだけはしなくてはいけないと口を開く。

「そうだ……僕は、ケイスというんだ。ケイス・ルブラン」

突然に名乗られ、少しだけ怪訝に思う。唐突な会話の運び。もちろんシュガーローゼに名乗る気はない。フランベの時はあんなに簡単に口をついたものが、ケイスを前にすると事情が変わる。理由は分からないというのに、本名ではないとはいえ自分の名前を伝えたくない相手だった。

「……で？」

「君の名前が、知りたいんだ」

「あ、そう」

「教えてくれないか」

「いや」

実に端的で明確な答え。拒否されるとは思っていなかったケイスは、しばらく頭の機能が停止する。育ちの良さそうな彼の事だ、自分から名前を名乗り相手に応えてもらえない事などかつてなかったのだろう。シュガーローゼはほんの少しだけ気が晴れた。そして相手は二の句が告げられないまま。

やっとうるさいのが黙ったと、少女は青年を一瞥する。よし、ここを去ろう。

「ま、待って待って！」

慌てるケイスに、うるさいとばかりにシュガーローゼは顔をしかめる。

一睨みくれてやっても、困った少年のような瞳でこちらを見ている。シュガーローゼはなんだか彼が自分より年上だとは思えなくなってきた。

「……ローゼちゃん……って呼ばれてたね」

フランベが呼んでいただろうか覚えがないが、彼女が口にしていたのをケイスは聞いたのだろう。あまりうれしくない出来事だ。シュガーローゼはしかし答えない。ただ、本名に近かったから、呼ばれるのがちょっと嫌だった。そう、フランベに呼ばれた時から不安だった。ローゼ。それは昔呼ばれていた名前にほど近い。

「じゃあとりあえず、ローゼちゃん……」

「ちゃんはやめろ！」

「……ローゼ」

びくり、と少女の肩が震えたのがケイスにも分かった。その理由はシュガーローゼが本名で呼ばれたと勘違いしそうになったからだ。あまり良い思い出のない名前。耳にして気持ちのいいものではない。加えて、それを他者に知られるという事のえもいわれぬ——恐怖。

何故だか、本名で呼ばれる事がおそろしく感じた。本当の名自身を呼ばれても、知られてもいないのに。

名前を知られる——それは、相手に自分の一部を支配される事に近いのではないか。そんな事を思う。

「……君の事が知りたいんだ」

まるで口説き文句に近い。しかし硬質なケイスの声に甘いものは欠片もない。次に飛び出すものがこんな台詞だからだろう。

「“死神”、って……一体——」

ケイスも調べてみたのだ、彼なりに。元来もつ死神の意味や都市伝説の“死神の娘”の噂について。しかしそのどれもが——仮にローゼとした——少女という像へとはなからなか結びつかなかった。だからこそ本人に聞いてみたかった。あの光景を見てでは、残酷な事かもしれないが——。

「……その、まんまだよ」

シュガーローゼは、まるで超越者のような表情をする。何ものも彼女を支配する事も、影響を与える事も出来ない。そんなアクアマリンの瞳。

浮き世の喧騒をはなれ、山中に隠遁する聖人のような瞳。伝説の中の聖人などケイスはもちろん見た事はないが、そういう表現が似合ってしまう。何もかも諦め、遠いところからただ見下ろす。眼球の瞳孔部分を下に向けているだけのよう。

「死神って、ホンモノは口から魂を吸い出すんだっけ？　わたしは、それ」

本物の死神など、見た事はない。シュガーローゼにしてみれば見てみたいくらいだった。本物と出会って、命を持って行ってほしいような存在。だが、少女は今までにそれと出会ったことはなく、自分がほとんど死神に近いという事だけは知っていた。もちろん自分自身に死は与えられない。そういうものなのだ。

28　水難の相

人々にとっては死神とは悪魔にも等しい。死ぬ事は必ずしも不幸ではないとシェーン王国の国教が伝えてはいるが、やはり現世に生きる者は死が怖い。死神少女を怖がるのは道理だ。

未知は恐怖で、人の生を奪う存在など形になって現われれば恐怖の対象でしかない。

死は絶対で、悪である。

ゆえにシュガーローゼも悪だというのか。そう言われ続けたのか。

ケイスは頭の中が雑然として整理がつかなくなるが――ひどい不安に襲われた。

「ホンモノなら、仕事が魂持ってくものなのかもしれないけど、わたしはただ人を簡単に殺せる力を持ってるだけ。――誰にでも、キスは与えないよ」

レジスタンスを無差別に殺したのは自棄になっていたからでもあるが、あのまま黙って立っていれば殺されていた。だから我が身を守るために“死神のキス”を落としたのだ。

何も殺そうと思って殺しているわけではない。そう出来てはしまうのだが、“死神のキス”を落とすのは我が身を守るためだ。

そうは言っても、きっとケイスは理解しないだろうが――。

自分自身厭うその身を守るために、などと滑稽でしかないだろう。

死神と呼ばれる少女のその能力、特異体質、その思想も誰にも理解されるはずはない。理解など出来ないだろう。そう、分かるはずがないのだ。それは最早ケイスとの会話を意味のないものだと少女に思わせるには充分だった。

さよならも告げずに、踵を返す。この場所から、消え去ろうとする。誰の前からも、消えようと。

――それならば何故。

ケイスはさまよわせていた瞳をしっかりとシュガーローゼに照準

を合わせる。
「キスをもって死にいたらしめるなら――何故……」
都市伝説には眉唾ものもあったが、確かに真実もあった。死神の少女は、相手に唇を寄せるだけで死をもたらす。その目で見ている。レジスタンスが“死神のキス”で死んでゆくのを。唇が触れるだけでもがき苦しむ姿を。
それなのに、ケイスは一度、いや、二度も少女からキスをうけている。
「何故、僕は死んではいないんだ……」
そんな事は、シュガーローゼの方が聞きたかった。だからそのまま口にした。
「知らない。わたしの方が知りたいよ、そんなの」
皮肉げな笑み。笑いたくもないのに笑みを作る、そうでもしないとやってられない者の瞳。
「――……」
ケイスは驚きや悲しみ、戸惑いのようなものを顔に集めて、眉を寄せた。胸がつまり、喉に競りあがる思い。苦しいくらいだった。
「それは……、本当に、必ず死んでしまう、訳なのかい……？」
少女は小さく頷いた。
「本当に？　僕以外に誰も？」
「……あんたと、他に二人もいたけど」
何故こんな事をケイスを目の前にして口にしてるのか。自分でも訳がわからなかった。
今までどんな相手も最終的には“死神のキス”があるからと考えて対応していたからかもしれない。ケイスにはそれが叶わない。だから、どういった対応をすればいいのか分からないのだ。
もしかしたらと、ケイスが何か手がかりを知ってはいないかと期待しているのかも、しれない。
期待などするだけ無駄なのに。しかし、今まで“死神のキス”がきかない相手がいなかっただけに――何かがあると思ってしまうの

かもしれなかった。

「それじゃ、もし、その……、その体質は……むかし、から……？」

何かに途中で気づいたようにケイスは、後半部分をひどく言いにくそうに顔をしかめて問うた。

それに答えるのは、無理だった。過去についてシュガーローゼは口にしたくない。出来ない。無理だ、説明をするには生まれた故郷について語らねばならない。そんな事は出来ないほどに、シュガーローゼはまだあの因習の深い村に囚われていた。

「……っ、ごめん……」

また、やってしまった。ケイスはいつも、こうだ。お前は真っ直ぐ過ぎるから突っ込んだ事まで聞き過ぎると、友人から言われた事がある。その性格も考えものだと、告げられた事が。何度も自分を戒めるのだ。人は誰しも他人には触れられたくない部分がある。ケイス自身にだってあるではないか。それなのに、何故こうも言葉を選ぶ事が出来ずに口にしてしまうのだろう。一体いつになったらこの後悔をせずにすむのか。

「……なんで、あんたがそんな顔……」

自分より年上の青年が、自分よりひどく顔を歪めていた。何かに耐えるように、こらえるように強く。胸に腫瘍でもあるかのように辛そうに、ひきつったような表情。長い付き合いでもないのに彼に似合わないとシュガーローゼは感じた。

それでも、後ずさりする柔（やわ）な足一本。距離を置かなくてはと、少女は思う。

初めて会った時から、真っ直ぐで、人の感情を鏡のように映しこむ、碧（みどり）の瞳が怖かった。ただ、怖かった。

ケイスが顔を歪めると、ひどく不吉な未来が待っているように感じられた自分をおかしいと思いながら、手の平を握った。きっと彼は、幸福の象徴。シュガーローゼの嫌悪する対象。それなのに、ケイスがつらそうにするのを見るのは——嫌だ。

――……はあ？

思わず、内心で疑うような声をあげる。何故、自分がこんな事を思うのか分からない。どうしてそうなるのか理解出来ない。ただこの場所に居るのが長ければ長いほど、何かにまとわりつかれるような気がして、首を振った。

シュガーローゼは今度こそ、絶対に今生の別れだと決めた。

「じゃ」

留める声はかからない。彼が今どんな顔をしているのか分からないが、振り返るつもりはない。あちらにも追いかけるつもりはないようで、背後の気配は動かない。

これできっと、お互いこれっきり。もう会わない。そう思うだけでシュガーローゼは気が晴れると思っていたのに――

そうは、ならない。

町中のささやかな橋にさしかかった時。

「誰かぁっ！　そのガキ捕まえてくれっ、そいつぁスリだっ！！」

突如かかる声に反応したのは騎士団員であるケイス。シュガーローゼは我関せずと声を耳の右から左へ垂れ流していた。

風を起こして少女を通り過ぎたのはスリの少年。あっという間に駆けて行って、しばらくすると背後にケイスの気配。スリの子どもが捕まるのも時間の問題だろうと、ぼんやりと頭の隅で思う。

と、いきなりシュガーローゼの目の前に子ども。汚れた服の少し長い髪の少年で、焦った様子でシュガーローゼを睨んでいる。表情や前後のやり取りからおそらくはスリをして追われるばかりの少年だろう。何故引き返したのかと訝るが、行き止まりか直進不可能な事態に出会い来た道を引き返したのだろう。

「大人しくするんだ、君」

いつの間にか、背後にケイス、目の前にはスリ少年。何やら二人の間を阻むように立っている様になってしまったシュガーローゼ。何なんだこの構図、と少女は一瞬気が遠くなりそうになる。

しばし待ってみても、状況に変化は見られない。シュガーローゼ

が半端な場所に居るためか、スリの少年とケイスの均衡を崩せないでいるのだろうか。仕方がなしに心持ち後ろに向かって、少女は口を開いた。

「わたし、どいていい？」

「いや、そのままでいてくれないかな」

ひくり、嫌そうに引きつる頬。彼女が立っているためスリの行く手を阻んでおり、ケイスには都合がいいのだろうが、シュガーローゼは面倒事が嫌いだ。こんな目の前で捕り物帖を繰り広げないでほしい。正義感に燃えるのはよろしいが、どこか余所でやってくれと背後を振り返る。

「ちょっと、騎士団員、ふざけた事言わないで――」

「っ、危ない！」

いつかと同じ台詞。それがまた再び自分にかけられたという事はシュガーローゼの身に危険が迫っているという事。

「え」

空中に浮かぶ体。スリ少年に突き飛ばされたのだと知る頃には、少女はもう橋から足を離していた。

下は何だろう、固い地面か水だろうかと達観した考えをする暇さえ与えられずに、水音があがる。飛沫も一つ。橋の高さはそんなにないと知るには時間はさほど要らない。

29　ナイチンゲール

荒れた水面の中に少女の体はすっぽりとはまり込んだ。
「ローゼっ！！」
落下したシュガーローゼを橋の上から、驚いた顔で探す。橋の下、高さは建物一階分ほどしかなく、水があるために生死に関わる怪我は被らないだろうが、慌てるケイスは捜していたピンクゴールドの頭を見つけた。
「大丈夫？」
声をかけた相手は顔を下にして表情が見えないが、怪我をした様子はなさそうだ。目に見えて安心してみせるケイスは、ふとシュガーローゼを水路へ突き落とした存在を思い出した。少年は元々スリをしたというので追われていた。シュガーローゼを突き落とした事も含めてちゃんと言い諭さなくてはと、スリ少年を探すために首を回す。
しかしそこに、スリの少年は説教を待って待機しては――いなかった。もちろん、逃亡中の彼がのんびりケイスが捕まるのを待ってるはずがない。
「逃げた……っ？！」
「当たり前でしょ、気をそらすためにしたんだから。まんまとのせられやがって……」
橋の下からうめくような悪態、全て正しくは聞こえなかったケイスだがもはや逃げてしまったスリ少年に気を配る必要はないとシュガーローゼを見下ろす。まだ、彼女は水の中だ。胸のあたりまで水につかっている。小柄な彼女だからかなりつかっているように見えるがケイスがあの場所に立てば下半身がつかる程度の浅さだろう。
深くはない水深だろうが、いつまでも彼女をあの場所に居させる訳にはいかない。水路に行き来するルートはないかと辺りに視線をやる。

あった。遠回りにはなるがごく狭い階段があるのを見つける。水路には、人一人が歩けそうな足場が両脇にある。そこを指して声をかける。

「大丈夫？　早く上に上がりなよ！」

自分も、その場所へと向かって走る。シュガーローゼが怪我の治ったばかりとは知らないケイスだったが、心配のために足が急ぐ。

水路の両脇にある足場に身を乗り上げて、水の中から抜け出すシュガーローゼ。ぶるり、一つ震えて寒さを覚えると、それまで意識していなかったのに急激に寒気が襲う。病み上がり、というのは違うかもしれないが怪我が治ったばかりの身、体調は万全ではない。冬でもあるため体温がどんどん逃げて行く。

最近、シュガーローゼはやけに水の事故に遭う。川に落ちたり、雨の日に事故に遭ったり。またもや水の中に飛び込む形になった。

――しばらく、水とか見たくない……

不可能とは分かっていても、水難にばかり遭う自分にうんざりした。寒気が、心臓を握りつぶすように少女の全身を支配する。寒い。

我が身を抱きしめるように、体温を逃さないように両手を添える。

「大丈夫？　寒いでしょう」

心配性の母親のごときケイスの声が、近い。振り返る事すら今は億劫だ。

「ローゼ、顔色悪い……？」

元々体調が悪かったのだろうかと眉を寄せるケイス。当たり（ビンゴ）だったが今はなんの効果ももたらさない。

ばさ、と上着がかけられて、やっとケイスが寄り添うように側に居る事に気づく。近寄らないでほしかったが、身じろぎする前に肩に手が乗る。

「早く、どこか休めるところに……」

と、断りもなく持ち上げられるシュガーローゼ。回った視界に目を見開けば、またもやいつかの体勢で横抱きにされている。

「ちょっと？！」

やめろとばかりに暴れまわるシュガーローゼだがびくともしない。ケイスはどこかきょとんとしたような表情で、何て事のないように応じる。

「こっちの方が早いから」

「知るかッ、離せ!!」

無駄に叫んで頭がくらくらしてきたが、暴れ続ける。結局はケイスを阻止できないが。

どんどんと町中へ入っていくケイスにうんざりしながら、歩幅が違うなと少女は心の隅で思っていた。人ごみのある場所にさしかかった頃、声がかかる。

「あらぁ、どうしたの……ローゼちゃん?」

シュガーローゼを探していたのだろう素振りでいた中年の女性が振り返って驚きの顔を見せる。

ケイスに横抱きにされているシュガーローゼを最初に見つけた訳ではないが、改めてケイスに視線を投げるフランベ。彼らのまとう雰囲気が読めないミーハーな人間であれば、恋人?などとケイスに話しかけてしまったかもしれないが、フランベにはそんな様子は見られなかった。わずかばかり警戒もにじむ瞳で、目にかけている少女を抱き上げる青年を見やる。

「ローゼちゃん……こちらの方、どなた?」

「フランベさん……」

だるそうな声音のシュガーローゼに、眉を寄せるフランベ。すぐに少女の体調がよくない事を察する。

対するケイスは、フランベがシュガーローゼに害をなさない信用出来る人間だと心内で判断をしていた。

「早く休ませた方がいいわね。まだ完治には至ってないのだから……」

本人ではなくケイスに言うように見上げるフランベ。青年は言われなくともそのつもりだったが“完治してない”との言葉が気になった。そんな彼を誘導するようにフランベは歩き始める。

「知り合いの宿屋があるの、こっちへ」
ケイスは自分の泊まっている宿へと向かうつもりだったが、狭い一人部屋とフランベの顔のきく宿ならあちらの方がいいだろう。ついてゆくためにフランベを追っていて、腕の中が静かな事に気がづく。シュガーローゼは瞼を伏せて気だるそうだ。
少女は、寒くて濡れた衣服が気持ち悪く、ケイスの腕に抱き上げられている事が居心地悪いために、せめてこれ以上不快な情報を得ないように瞼を閉じているのだ。
風邪でもぶり返したのかと、眉を寄せるケイス。具合が悪かったなら、言ってくれればよかったのにと、心配ではあるがむくれたような気持ちのケイスは、自分のその思いには気づかない。
「大丈夫……？」
今日は何度この言葉を口にしただろう。その度に返る台詞はなかったが、今はまだ彼女はここに居る。こんなに手が、届くところに。腕の中に。
「あれ……」
頼りない感覚が自分の中にあるような気がした。何だこれは、と青年は理由もなくそわそわとする胸で無意識のうちに声を上げていた。
「……なに……」
ケイスが何かに気をとられたのを、何事かと問う腕の中の声は、まだ瞼の閉じられたまま。
少女の本当に具合が悪そうな様子に、ケイスのナイチンゲール的献身の心が蘇る。早く、休ませてやらねばと。
「いや……大丈夫、なんでもない。だから、安心して……眠っていて」
眠っていた訳ではないのは分かっているが、ケイスは答える。ちらりとわずかに瞼を上げたシュガーローゼには、微笑んだケイスの顔が見えた。
後光さえ伴いかねん聖人のごとき慈悲の笑みが、見たくはなくて

少女は目を閉じる。
次に目を開けた時には、この青年がいないといいと、思いながら。

29　ナイチンゲール（後書き）

サブタイトルがふざけていてすいません…（苦笑）
でもそろそろ本気でサブタイトルが思いつかなくなったので…；

３０　王都を出た騎士

事の起こりは、約一週間前とごく最近だった。
「は、異動、ですか……」
正直、ケイスの想定の範囲外だった。新入りと呼ばれるほどには騎士団歴は短くないが、まだ若いのに勤務地異動とは何か問題を起こした時以外にはほとんど考えられない事だ。
加えて、先の武道大会の事件によって騎士団は未だに事後処理や対応に追われている。忙しい時期のはずが、何故。
「そうだ。ちょっとした隠密行動をとってもらう。途中までは、単独での仕事だ」
二の句が告げられない青年に、騎士団のトップは思想を見抜いたのだろう。ケイスがどうして自分がそんな仕事に選ばれたのか理解していないと。
単純な性格に見える騎士団長キースは、腹の読めない笑みで応えた。
「お前、何かしでかしそうだしな」
お前みたいな真面目バカが現場を引っ掻き回してくれればそれでいいんだ。そう続いた団長の言葉に言語を忘れるケイス。
――一体、どういう事だろう。
現場を引っ掻き回す、とは。よく分からないながらも、それが目的ならば自分より喧嘩っ早い人間を遣ればよいのではと思ってしまう。セイディオとか。ケイスは喧嘩など好きではなく、現場を引っ掻き回す、が何を示すのかは分からないが輪を乱すつもりはないから適任とは思えない。
「お前は意外と行動が読めないしな、予想外に猪突猛進だし」
がははと笑う団長、なんだか軽んじられている気分になりケイスは心中でこっそりとしょぼくれる。
「ですが、団長……。まだ騎士団員は仕事が減らず人手不足になる

のは問題なのではないでしょうか」
　ケイスにもやりかけの仕事があるし、先輩に仕事を言いつけられてもいる。そして、まだ療養中のハウストの様子も心配だ。要は、ケイスは全くもって勤務地異動に乗り気ではなかった。
「ああ、別にあんなん誰とでも代わりはいる」
　すっと団長の目が真剣なものになる。この部屋にはケイスとキース二人しかいないというのに、声をひそめる。
「それに……レジスタンスどもが居るってえ話だ」
　ザッハヒカリテ。裏町の事件ではひどい被害に遭ったとはいえ、レジスタンスの彼らの存在はシェーン王国にとっては害虫にも等しい。彼らは排除すべき存在。
　ケイスの異動先にも、ザッハヒカリテが居るという。そして現場を引っ掻き回すという言葉。何か裏があるようだが、やはりよくは分からない。
「婚約者までいるお前を遣わすのは、正直悪いとは思うが……」
　そしてルブラン伯爵に恨まれそうだし……と続く言葉はキースの心の中にだけしまっておいた。独身で、腕のたつ男なら騎士団にまだまだいっぱい居るが、若輩過ぎるか中年すぎる。加えて性格的にもケイスのような存在は少ない。今回の任務はケイスにおあつらえむけの仕事なのだ。
「お前をかってるんだ、ケイス・ルブラン」
　名前を呼ばれて背筋がのびる。まして騎士団団長のような存在に能力をかわれていると言われては、浮き立つ気持ちもあれど不安になる。自分なんかで本当によいのだろうか。今までこの王都以外での仕事は研修一週間しかした事がなく、もはや過去の記憶。上手くやっていけるのだろうか。自分はそんなに期待されるほどに実力があるのだろうか。
　剣の師でもあるルブラン伯爵は、常々おごるな、と口にする。そのためか珍しく卑屈になりかけたケイスの思考を団長が無理矢理叩き落とす。文字通り、頭を叩いて。

「あんま気張んな。左遷だとでも思って気楽にやんな」
いや、左遷なら尚更気楽にやれるものではないだろうに。しかしケイスは二の句を告げられない。
ケイスがこうして訪れた隣国（オスティオ）の町で、まさかシュガーローゼに会うとは思ってもいなかった。

† † †

チェルヴォの町に不慣れなケイスは、すべてをフランベに任せた。彼女の案内で向かった宿にシュガーローゼを運んだ後、フランベは医者も呼んだ。医者はあたたかくして寝ていれば問題はないだろうが何かあったらすぐ呼ぶようにと言って帰っていった。要は安静にしていれば大丈夫だという事だ。
「眠ったみたいね」
寝台に横たわる少女を見下ろしていたらかかる声。フランベは穏やかな表情でシュガーローゼに眼差しを注いでいた。その視線がケイスへとやってきて、はじめて彼女はいたずらっぽく笑ってみせた。しわの入った中年の女性であるのに、噂話の好きそうな少女のように見えた。
「それで、あなたとローゼちゃんはどういう関係なのかしら？」

人好きのする笑みだが、意外とゴシップが好きそうな態度だ。しかしシュガーローゼとケイスの関係をどう表現したらよいのか。ただの知り合いとでも言えるだろうが、それでは何か違う気がする。

「なんてね。あんまり根掘り葉掘り聞くと、ローゼちゃん怒っちゃうかしら」

ふふ、と笑いながらも悲しみをにじませたような瞳。再びシュガーローゼをその瞳の中に入れて続けるフランベは、まるで彼女の母親のような顔をしていた。

「なんにも話してくれないのよ……、なんにも」

突き放された者の浮かべる表情。きっとシュガーローゼはフランベにすら気を許していないのだろう。先ほどのシュガーローゼのフランベに対する態度からは意外ではあった。しかしケイスが初めて会った時から、シュガーローゼは人を寄せつけまいとしていた。“死神のキス”なんてものがあるからには、それも仕方がない事なのかもしれないが。

こっそりと、フランベに気づかれないように息を吐き出す。ケイスは思い出したくもない事を浮上させてしまった。

“死神のキス”。それはまだケイスには未知数ではあるが、シュガーローゼの事を考える上で頭を悩ませる根元。

ふと、いい加減名乗っていない事に気づく。礼を重んじるケイスにしては失態だ。忸怩（じくじ）たる思いから少しだけ頬を赤くしてフランベに向き直る。

「申し遅れました、私はケイス・ルブランと言います。貿易商の父の下で商人の見習いをしています」

今回の任務は、極秘というほどではないが相手――ザッハヒカリテ――に騎士団員が町に居ると知られては困る仕事だ。ゆえにケイスは偽りの肩書きをもらった。裕福な商人の息子、気ままな商人見習いの放浪暮らし。見聞を広げるためと経済の動きを知るために、仕入れも兼ねて旅をしているという設定だ。

「あら、こちらこそごめんなさい。カイネ村のフランベ、と言いま

す」

カイネ村、という名前に脳内の地図を開く。ケイスはこの任務につくにあたってオスティオの地理をしっかりと頭に叩きこんできた。このチェルヴォの隣りにあるが不便な場所の村だ。

「ローゼちゃんは、半月ほど前に墜落事故に遭った馬車に乗っていたみたいで、怪我をしていたところをうちの村の者が見つけたの」

それからうちの村で療養中。そう続けるフランベに、ケイスは目を見開いた。それで、先ほどの“完治してない”や医者への怪我をしたばかりで、という台詞の説明がつく。

「それでは、軽傷ですんだのですね」

ひどい怪我をしたのに半月では治らないだろう。水路に落ちた時もシュガーローゼは傷が痛むような素振りはしていなかったし、完治には至っていたないという口振りにはほとんど治りかけているというのだろう。

「あ、えっと、まあそうね」

来ることはないだろうが、ケイスをカイネ村に招けないわねとフランベは心の中で思う。他の怪我人はまだ快癒（かいゆ）していない。村の者にも元々軽傷だったと告げてはあるが、シュガーローゼだけ治りの早い事に彼女たちを助け出した男たちは訝しんでいた。

まさか、シュガーローゼだけ妙に怪我の治りが早いとはこの青年にも言えない。彼は、軽傷だったのだろうと断定を交えて問うたのだ、きっとシュガーローゼの体質の事など知らないのだろう。

「それで、あなたは……」

なんのかんの言いながらもやはりケイスとシュガーローゼの間柄が気になるフランベ。見知らぬ相手がいきなり世話する少女を連れてきたのだ、心配にもなるのは道理だろう。母親のようにシュガーローゼをかわいがっているフランベなら尚更だ。

「……えっとですね……その、商売相手の、親戚という人の、子だと、一度シェーンで会った事がありまして……」

嘘は苦手だ。しかも任務に関係のないところでの嘘は特に、言葉

がつまってしまう。ケイスは我ながらその嘘にツッコミを入れたくて仕方がなかった。

「なんといいますか、王都では……偶然居合わせた時にちょっと紹介された程度で」

やたらに言葉につまる事以外は不自然なところはないだろう。商人見習いだという嘘を上手く利用できたのではないだろうか。

しかしシェーン王都を口にしたのはまずかったかもしれない。万一シェーンの騎士だと知れても困る。その前に、シュガーローゼに口止めをしなければならないと思い出す。彼女は吹聴して回る事はないだろうが、ケイスが騎士だと知っている。

――そういえば、さっき騎士団員と呼ばれたような。

はたと思い出せばスリの子どもに相対した時にシュガーローゼはケイスを名前では呼ばずに役職で呼んだ。あの場所には耳に届く範囲にシュガーローゼとスリ少年しかいなかったのが幸いだが。

「……ルブランさん？」

「あ、はい」

「どうしてローゼちゃんは水路に落ちたのかしら」

詰問するような口調ではないが、気になるフランベにかいつまんで説明する。

「スリの子どもに、ぶつかったんです。逃げていたところで焦っていたみたいで」

「それじゃ、ちょうどそこに居合わせたのですか、ルブランさんは」

「あ、ケイスで結構です。そうですね……彼女に声をかけていたところなので」

「やんちゃな子どももいたものねえ……。最近、どうもチェルヴォは物騒らしいわ。レジスタンスまで潜んでいるなんて噂があるっていうし。悪さをする子も増えてるとか」

フランベはシュガーローゼがいない間に彼女を探しがてら井戸端会議で情報収集の要領で町の噂も拾っていた。殺人事件もあったというし、平和に見えてなかなか物騒な町だ。

「そうなんですか……」
「あら、ご存知ない？」
「あ、私はつい先日この町に来たばかりなので」
これは嘘ではない。まずは一日、勤務地に慣れろと言われていたがあまり情報収集のような事はしてなかった。余所者のケイスに向ける不躾な視線には気づいていたが、きっと物騒な時期に見知らぬ者がいると不安なのだろう。
「それで、ケイスさんはいつまでいらっしゃるのかしら？」
問われて、言外に女性だけの部屋に男が一人というのは問題だから早く出ていけと、言われたような気がして焦る。ましてシュガーローゼとただの二回顔を合わせたような人間が長居するのはどうだろう。紳士らしくない行動だったろうかと、立ち上がる。
「すいません、いつまでも長居してしまって」
「あらやだ、そういう意味じゃないの。この町にいつまでもいるのって聞きたかったのよ」
ああ……とケイスは勘違いにまた恥ずかしくなるやら、なんだか気まずい思いになる。そんな青年の困惑も包み込むように、フランベはそっと目元を細めた。
「ローゼちゃんを助けてもらったお礼も改めてしたいし、王都や旅の話が聞きたいわ……なんて不躾かしら」
「い、いえそんな事は……」
問題がケイスはシェーンを出た事がとても少ない事だ。王都の話しかできない。旅の話なんて――このチェルヴォに来るまでの話しか――ない。
「それに、お礼なんて」
「あらまあ、遠慮なさらないで。カイネ村の名産を食べてもらいたいだけ」
にっこり微笑み、町には農作物を売りにきたためまだ何か渡せるとフランベは思っている。
対するケイスはチェルヴォにいる同僚と合流して仕事に取りかか

らないといけないので、忙しくはないがあまり暇ではない事を思い出す。

団長の話では、騎士団員である仲間が六人、チェルヴォに騎士以外の職業に就いて潜伏中との話だ。元々諜報員として働いている者と近年の世界情勢から派遣された者もいるらしい。

仮にも諜報員という任務についているからには、怪しまれる訳にはいかず特定の集会所などはないそうだ。仲間のうち一人と接触する事になっているのは、明日の昼前だ。それまでならもう一度シュガーローゼに会いに来られるだろう。

「ちょっと今後の事は決めかねているのでまだなんとも言えませんが、しばらくはこの町に居るつもりです」

やはり立ち上がってケイスは続けた。

「それでも今日はここでおいとまします。長居してしまってすいません」

「あら、そう？」

「時間があれば、明日の午前中にでも伺いたいんですが……」

さすがに怪我を治したばかりのシュガーローゼの具合が心配だ。あの時さっさとシュガーローゼに避けてもらえばよかったのだ、ケイスにも非がないとは言い難い。

「もちろん、いらしてくださいな。お待ちしていますわ」

微笑みをたたえるフランベに微笑み返すと、シュガーローゼに視線をやる。ぐっすり寝入っているようで具合が悪そうには見えない。

「起きたら彼女によろしく言っておいてください」

それから、挨拶をするとケイスは宿を後にした。

思わぬ再会は、しかし約束されていた事のように思えて、戸惑っていたはずの青年は明日に思いをはせていた。

３０　王都を出た騎士（後書き）

あ、二話続けてサブタイトルがケイスくんについてになってますね！
今気づいた。

31　狂気の黒騎士

天地をひっくり返したような騒ぎの中、彼だけは交渉人の瞳で城下町警備隊の長（トップ）を見ていた。

「条件がある」

と彼は言った。“彼”はただでは動かない。

ヴィードルそんな彼の性質は嫌というほどよく分かっている。だが諾（だく）と返事した。彼を動かすにはこれくらい当然の事。一体何を要求されるのか、分かったものじゃないため恐ろしくはあったが断っていられない状況下だった。

そして男が要求したのは――

†　†　†

今から半月ほど前、シェーンの上級犯罪者牢で騒ぎが起こった。城下に要らぬ不安を与えないようにと、箝口令（かんこうれい）がしかれたが、王城の地下にある牢屋に賊が侵入したという事実は王城に勤める者なら誰もが知っていた。ある夜、牢屋に侵入者が現われたのだが、消え

た人間もなくなった物もなかったという、ある意味不可解な事件だ。
見張りの人間たちは眠りについており、ただ一人起きていられた兵士は捕らえていた一人の犯罪者の自白を聞く事になる。
目的の分からぬ人間の侵入、加えて牢の中の魔術師の自白。とても看過出来ない騒ぎではあったが、事件を解明できる者はなかったため、うやむやになっていった。もちろん牢の警備は強化され、捕らえていたレッジオ・ブースという偽名を持つ犯罪者の自白の真偽を会議にかけるなどは行なわれていた。
まだ、シェーンの上層部がどう動くかは知らされていないが、ミリヤール帝国の人間を捕らえている事が今後の王国を明るくしないのは確かだと、彼は思っていた。
そして、ほとぼとりが冷めるのを待ってから、彼は動き出した。
豪奢な内装の部屋はとても広い。その天井を衝くかのように高い書架が張り巡らせられた、図書館。高い天井に、三階ぶち抜きの吹き抜け。
目的の図書が並べ書架の前に立っては大量に図書を引き抜く男がいた。彼に近づく影は、二つ。
そのうちに男に近い方の影が口を聞いた。
「信じられない光景が広がっているな。幽霊を見る事になるとは思わなかった。それも、恥知らずの亡霊だ」
かけられた声には気づいていたが、視認する必要性も応える理由もない。男は自らの作業を続けた。
「恥知らずめ、恐ろしくて口も聞けないか？」
ずばりそうだろうという口調には呆れる。存在を認めるのも面倒な男にとって、悪態をつかれたところで目障りなだけだ。
「図書館では、静かにしろ」
やっと返ってきた言葉が命令口調では、返された方も怒る。
「お前っ、何しに王都（シェーン）へ戻ってきた……！　狂気の黒騎士め！！」
背後に控えていた男が親の敵（かたき）でも見るような目で吠える。“狂気の黒騎士”と呼ばれた男は興味のなさそうな顔にわずか眉を寄せた。

「随分と昔の名前を引っ張り出したものだな」
加えて、片方の頬を持ち上げるのみの、失笑。二人組の男たちは揃って怒りのために顔を赤くする。
「お前は、自分がこの王都でした事を分かっているのか?!　よくも、おめおめと顔を出せるものだ!」
血走った瞳を向けられても、変わらぬすがめた目。男は充分に承知している、自分がしてきた事を。だがそれを今更ぐだぐだと言われる筋合いはない。そもそも名前も覚えていない相手に何故ここまでしてやらなければならないのだ。話し相手をしてやる、などという奉仕活動を。作業の邪魔だ。
「今、お前の相手をしてやるほど私は暇じゃない」
視線すら投げずに、男は二人組を無視して図書を開く。
「この、人殺しの大量殺人鬼!!　誰か、こいつをつまみ出――」
自分の邪魔をされた男が放ったのは心臓まで凍るような鋭い目つき。
漆黒の、凝(こご)った闇を閉じ込めたそれは悪意や殺意を超えた、超越したものの狂気――。
「……う、ぐ…この……」
ひるむ二人組。ここは王城内の図書館だ。男たちが叫べば誰かが訪れるだろう。男はあまり、人目につきたくはなかった。
すっと、両手を上げて二人組のそれぞれの頭に手の平をつき出す。
「な、なんだ……暴力にうったえるつもりか……そっちがその気なら……」
二人組はかつて男が武官に属していた事を知っている。文官である自分たちは適わないが、王城で問題を起こして困るのは相手の方だと知っている。
「いや、もう終わった」
にやりと実に底意地の悪そうな笑みを一つ。それを彼がすると本当に恐ろしい仕草。
二人は思い出していた。目の前にいる男は魔術を学んでいた事を。

「……な、何を――」

男は、すぐに分かってしまう事柄をわざわざ口にするような真似はしない。そして何をされたか全く分からない状況下に相手を突き落とす事がどんなに甘美か知っている。楽しみを半減させる必要はない。

もう一度、悪逆な笑みで応えると両手に図書を大量に携えて踵を翻した。

「な、なんなんだ……」

「そうだっ、誰か、あいつを追え!!」

折り悪く、人気が少ない図書館には誰も応える声はない。自分たちではあまりに恐ろしいので彼を止める事は出来ない。一体、彼は何をしたのだ。

“狂気の黒騎士”と呼ばれた男が何をしたのかは、彼らが家に帰ったら分かる事だった。

城下にあるその一軒家。扉の前に気配を感じ、開く扉の音。顔を上げれば見当をつけていた相手が現れたので、ヴィードルは席を立つ。

「どうだった、久しぶりの王宮は」

部屋の中に進んできた男が、両の手がふさがっているのでヴィードルは歩いていって扉を閉めた。きっと彼は何も持っていなくとも扉を閉めなかっただろうし、警備隊長の家に彼が出入りしているなど誰かに知られても困る。今閉めたのは家の入り口のドアではないのだから、そこまで過敏になる必要はないと知りつつ、妙なところで徹底する性質のヴィードルは扉の前に立って返事を待った。

「……うるさくてかなわん」
「げ、人に会ったのか」
手引きしたのが自分だと知れたらどうなる事か。隊長は額に手をあてる。
本来ならばシェーンの王城に居てはいけないはずの人間だ。ヴィードルは先だっての上級犯罪者牢への侵入すらも嫌々ながらの事だった。今回は図書館が目的とはいえ、やはり行かせるのではなかったと思ってしまう。王城の図書館は地下牢よりも王城内部から離れており、離宮のような位置にあるから大丈夫かもしれないと甘く見ていたかもしれない。
「アスト……大人しくしていてくれと言ったろう」
「もちろん、大人しくしていた。ただあちらが大人しくしてくれなくてな」
大きく、ため息。そんなヴィードルの様子にも構わず男は歩を進める。ヴィードルの書き物机に勝手に本を乗せる。
「アストリュク。何をしているんですか？」
ヴィードルが公の場以外で敬語を使う時は、嫌味を口にする時や相手を逃すつもりがない時に相当する。今は後者で、この友人がしている行為を許すつもりがないと言外にも訴えている。もちろん嫌味はたっぷりに言ってやりたいが。
「お前の部屋は殺風景過ぎる。ささやかなオブジェだと思え」
三十代の独身男にしてはヴィードル警備隊長はきれい好きであり、確かに部屋の中には雑然とするほどの量の物品は配置されていない。だがそれはいくら友人とはいえアストリュクに指摘されるような事柄ではない。
「お前の部屋と一緒にするな。お前まさか、」
「なんだ、宿屋でも紹介してくれるのか？」
「なんでそうなる。やめてくれ、町を出歩くのは」
ロクな事にならない。アストリュクという男を町に放せば問題が必ず起きるだろう。

しばらくはヴィードルの住まいに泊めておいたが、この書籍の山を見る限り、長期滞在も辞さない覚悟なのではと思える。アストリュクの長期滞在。皮肉な意味での“素敵な未来”しか描けないのは何故だろう。顔がひきつってゆく隊長に、友人は答えた。

「ならここが適当だろう。長い間ではない」

皮肉げな悪どい笑みには何故か信用出来ない力が宿っている。

「俺の部屋が……」

アストリュクにかかれば部屋などという閉鎖的空間はものの見事に物だらけになる。部屋が汚いなどというレベルではない。物品の海になる。しかしそれを本人はどこに何があるか分かっていると言う。本当なのだから手におえない。

こんな事なら、条件などのむのではなかったと今更な後悔をするヴィードル。意味のないとはいえ悔やまずにはいられない。

あの時は仕方がなかったのだ。武道大会で混乱の生じた時には。魔術に通じる者は王都にはごくわずか。魔術を扱う人間を捕らえるにはアストリュクの協力が不可欠だったのだ。今、王城に捕まっている魔術師の男は、アストリュクの手により戦闘不能になった。そのためにアストリュクが突き出した条件は二つ。近年起きた事件の書類を見せる事、王城の図書館に入れるよう手配する事。

明らかに、何かを探しに王都へ来たようだ。

――一体、何を企んでやがる

内心一人ごちると、苦みの走った顔を見咎めたのだろうアストリュクは殊更人を見下したような笑みを浮かべる。

「時に、死神の噂はないか？」

「あ？」

「人を無差別に殺す事の出来る死神のような人間の噂、だ」

まるで新しいオモチャが見つかった子どものように――それにしては悪意がよく見える笑み。

「ああ、まあ……聞いた事はあるが」

「詳しく教えろ」

話の向かう先が見えないヴィードルだったが、下町で出回っている“死神少女”の噂を話しはじめた。

32　サンシャが食べたい

心は、腐る。
ただれ、干からび、縮まる。汚れた膿に、できもののようなものすら生じる。
つぶれそうになるのに――そうはならない。
心は、必要ない。

道端の名もない花とか草とかに生まれたかった。石ころでもいい。
金属でも水蒸気でも風でも大気でもいい。
心の存在しないものになりたかった。

心は、気持ちが悪い。
心は、必要ない。

†　†　†

「あら、目覚めたのね」
「おはよう」

二つ声が聞こえた。柔らかなアルト、もう一つは穏やかなテノール。一人余計だった。

「……ここ、どこ」

「覚えてる？　ローゼちゃん、水路に落ちてケイスさんに運ばれてきたの。それから宿屋ですぐ眠っちゃったでしょう」

「ああ……」

そういえばそうだった。スリの少年に突き飛ばされた感覚を思い出す。嫌な子供（ガキ）も居たものだと頭の端でぼやく。それから、ケイスと再び見（まみ）える事になったのも思い出していて、気が重くなる。

彼に、抱き上げられ、フランベさんに物問いたげな瞳を向けられたんだっけ？　シュガーローゼは思い出したくもない様々な事象を頭に浮かべていた。

今もだるいが、意識を手放す前よりは体は軽いようだ。ただの寝不足だったのかもしれない。冬が寒いのは当然だから、水に飛び込んだとなれば気だるくなるのも当然だ。

覗きこんで来るのはケイス。そんな光景は少女には必要ない。

寝起きで早速機嫌の悪いシュガーローゼに、顔を曇らせるケイス。

「具合はどうですか？」

いきなりの敬語に、奇妙なものを見た目で少女は応じる。あまり知らぬ相手――フランベがいるからだろうかとシュガーローゼは考えた。

「……ふつう」

ケイスが、質問に答えないとこの場所から一歩も動かないような顔をしていたので仕方がなしに答える。

良好との返事ではない事に手放しで喜べないが、ケイスはささやかに微笑む。

「それはよかった」

ケイスは少しシュガーローゼと二人で話したいと思っている。主にケイスの身分についてだ。だがフランベには大した知り合いではないと言ってある。実際そうだが対応の仕方からしてケイスが突然

二人だけにさせてくれと申し出るのは不自然だろう。
どうしたものかと思案するケイスに救いの手がのべられる。
「フランベさん、わたしちょっと……サンシヤが食べたい」
サンシヤは、今の時期もはや店で手に入れるのが難しい果実の名前だ。遠回しに席を外してくれとのシュガーローゼの台詞。察したフランベは一つ頷く。
「分かったわ。少し時間がかかると思うから……ケイスさん、ローゼちゃんの事をお願いしますね」
にっこりとしてフランベは、さした支度もなしに部屋を出て行く。自分の荷物は別室にあるのだろう。
幸運にも訪れた機会。しかしその場所は沈黙に支配された。シュガーローゼは黙って窓の外を見ている。ケイスは言いたい事があり過ぎて何から言えばいいのか分からなくなっていた。またか、と自分にうんざりする。
「言わないでね」
何を、と問う前に少女は続きを口にした。
「“死神のキス”の事。面倒事は、ご免だから」
「――――……」
ケイスにもちろんそんなつもりはない。
「ああ、約束する」
真摯に頷いた。そんな様子を見る訳でもなく、シュガーローゼは続ける。
「もう顔見せないでね」
二度と会いたくないから。複雑な顔になるケイス。困惑と悲しみと諦め、不安。
「……何故……」
「“例外”だから。あんたみたいな例外が他に何人も居るんじゃないかって――」
事実、あと二人は居るが、更にもっと“死神のキス”をものともしない相手が増えるのではないかと――期待してしまう。もう、呪

縛はないのだと錯覚してしまうのではないか。シュガーローゼにはそれが恐ろしい。

「わたし、もう……ほんとに……隠者のように暮らすから。構わないで」

カイネ村すら出て、誰も足を踏み入れる事のない山奥へ向かおう。シュガーローゼはもっと早くにこうすればよかったのだ。

死にたいのに、死ねない自分。生きていく事に意味などない。それならば何故生きているかといえば、死が怖いからだ。

“死神のキス”で何人もの人を殺しておきながら、随分と甘えた考えだと思う。苦しんで死ぬべきだと思う。

しかし正義の鉄槌はくだされない。それならばせめて、もう二度と人を殺めないように、人里に出るべきではないのだ。故郷を逃げるようにして旅に出て、何度も人を殺してきた。自身が生きるためにと言い訳して。しかし、人間の間に行きさえしなければ人を殺す事もなかった。最初から間違えていたのだ、シュガーローゼは。

選択の道はいくつもあった。見ないようにしていただけだ。

きっと、一人になったら狂ってしまうだろうから。街に居続けるのには自分の気分をそらしてくれるものが溢れているからだった。大嫌いな人間の居る場所でも、自分の気を他へやってくれるならよろこんで行こう。一番嫌いなのは、自分なのだから。

一人になったら、飲み込まれる。闇に。その時の事を考えたくがないために人を殺す事になっても人里に居た。我が身かわいさに、人を殺し続けてきたのだ。その上、ケイスのような存在に三人も会って。本来ならばよろこぶべきなのかもしれない、“死神のキス”がきかない相手が居る事は。しかしシュガーローゼにとってはもはやなんの意味もなさない。それどころか無意味な期待をほのめかす、嫌味な存在だ。

もう、どんな存在にも会いたくなかった。きっとおかしくなってしまうけれど、もう——……。

「ダメだ。ダメだよ、ローゼ」

固い声、何かを恐れるような表情に言い諭すような台詞は似合わなかった。ケイスは眼下の少女を見ていながら、その他のものを見ているんだろうという自身が分かっていた。

ケイスは知っている。一人でいると、ロクな事を考えない。彼の過去にもあったじゃないか。一人で考えこみ、この世の疑惑と恐怖と絶望を全て集めて、後に友人が痛々しい目で語った、自暴自棄の時が。ある程度前向きなケイスですら、あの時は物事のマイナス面しか見る事が出来なかった。

何故か。一人でいたからだ。

あんな思い、少女にはさせたくない。初めて会ってからずっと、彼女が幸せに過ごしたのではない事ぐらいその素振りで分かる。きっとずっと一人で、あの時のケイスのように生きてきたのかもしれない。だから今更かもしれないが、それでも駄目だった。

「……あんたは何がしたいのさ」

あんたには関係ないと返ってくるかと思いきや、ケイス自身にも分からない事を問われる。

何がしたいのか？

それを知っていたら、こんなにも言葉に困る事はない。たとえ上手く表現できなくとも、口を開く事は出来る。今までの沈黙こそが自分の答えかと、ケイスはわずかに自嘲する。

それでも。

ただ一つ、彼が分かっている事は、

「君を一人にしたくないんだ」

という事。

もはやそこには自分を笑う気持ちはない。死神の少女が気になる。放ってはおけないと、まるで口にはせずに語る瞳。

ケイスのそれは、ただの博愛主義だ。シュガーローゼは分かっていながら——顔を伏せずにはいられなかった。自分が今どんな顔をしているかなんて分からない。ただケイスに見せてはいけない気がした。

「……ばかじゃないの、あんた」
絞り出すような声に、悪意も強気な様子も見られなかっただろう。
ケイスのような存在は居る。フランベもまた同じようにシュガーローゼに接する。
彼らは、強く、優しい。
他人を受け止めるという勇気を持っている。
しかし、自分や他の者をシュガーローゼが傷つけたなら話は別だ。
何人も過去にそういった存在を見てきた。
そして、そうでなくとも、彼らはシュガーローゼにはもったいない。恐れ多いともいってもいい。
罪人に、優しく接する必要はないのだ。そう教えてやらなくては。
「あんたのしている事は、無駄だ」
殊更冷え切ったような声でシュガーローゼ。ひるんだようなケイスは、何とか言葉を探した。
「なんで――」
言葉で、埋めなくては。この空間を。どこかさびしい、この部屋を。
ひゅっと、青年の喉が鳴った。
「ごめんなさいねぇ、なかったわサンシヤ」
扉の開く音にフランベの声。
驚いて、思わず背筋を伸ばすケイス。心臓が止まるかと思いながら、扉を振り向いた。少し申し訳なさそうだが、朗らかな様子の女性がやってくる。
フランベにしてみればどうも訳ありの二人を、短い間だけ二人きりにするつもりはなかった。話したい事が二人にはあっただろうから。しかしシュガーローゼの体調を考えた時に、あまり長い間起きていてはよくないだろうと考えたのだ。立ち聞きなどしてはいなかったが、自分も手持ち無沙汰になってしまいそろそろ頃合いかと部屋に入った。
フランベの登場に、シュガーローゼはどこか安心したように、対

するケイスはどこか困惑したように対応する。
一体何を話していたのか気になるところだが、それを聞くような無粋な真似をするフランベではない。
「もうお昼よ、ケイスさんご飯は済ませたのかしら」
「あっ、時間……！！」
焦るケイス。仕事仲間と会うのは昼前。やってしまったと考える暇もなく挨拶も短くその場を飛び出す。
「すいません、急ぐので今日はこれで……！　出来れば、また！」
慌ただしく出て行ったケイスにあらまあとフランベ。シュガーローゼは面倒くさそうに「また」ってなんだと顔にしわを寄せていた。

33　ケイスの新しい職場1

シュガーローゼの居る宿から、仕事場に直行したケイス――。結論から言うと、ケイスは仕事仲間と出会う事が出来た。

だが、生来の気質が真面目一直線の青年にとって、その仕事仲間の態度が好ましいものだったとは、とてもいえないのだった。

一人の男が咎めるような口調でケイスに対峙していた。

「お前はこの任務を何だと思ってるんだ?」

ケイスは、オスティオに一市民として潜伏している騎士団員の仲間が居ると、団長（キース）に教えられていた。だから彼も騎士だと思っていたのだが、どうも柄が悪い。

「申し訳ありません」

何を言っても言い訳になると思ったケイスは遅れた理由を述べるつもりはなかった。そもそもが、シュガーローゼの見舞いに行って遅くなったのだ、ああいった私的な理由で仕事に遅れるなどという事は仕事人間のケイスにとって好ましくないもののはずだった。だがシュガーローゼの事が心配だったのも事実。だからこそ口をつぐんだ。

初対面というのもあって、相手はケイスを値踏みするように眺めまわした。

誰だってもらって嬉しくない視線だ、本当ならケイスも苦虫を噛み潰した顔で不満を訴えたかったが、そんな事は仕事の場には似つかわしくない。

せいぜいケイスも同じように相手を眺める事だけ。無精ヒゲのせいで年はかなり上に見えるのだが、鋭い瞳が若さを失わせていない。三十代後半から四十代、という年齢だろう。浅黒い肌に鍛えられた体。身なりは中流階級が着るには少し見劣りする、しかし貧しい出とは見えない簡素な服。人混みに紛れるにはちょうど良い服といえばいいだろうか。

「まあ、いい」
男は目を逸らした。
「おれたちの仕事なんて、王都（シェーン）の人間からしたらその程度のものだろうよ」
「いいえ、そんな事は！」
どこか投げやりな言葉にケイスは慌てて否定をする。
ケイスを送り出したシェーンの騎士団の長の顔が頭をよぎる。ただの仕事仲間とは思っていないような表情で、オスティオに潜伏する仲間の事を語っていた。しっかり頼むぞ、と団長が言った時にはケイスに向けての信頼だけではなく、オスティオの仲間への信頼も見えた。
「キース団長は、忙しくてオスティオの仲間に時間をさいてやれない事を悔やんでました」
もっと時間があれば、自分で見に行くんだがなあ……遠方を見る目で彼（キース）はそう口にしていた。本当は彼自ら行動を起こしたいに違いない。それが不可能だから、仕方がなしにこうやってケイスを派遣してきたのだ。
「結果は同じだ」
にべもなく返されて、青年は返す言葉もない。
シェーンから遠い、物理的な距離がシェーンの人間とオスティオの人間のつながりを希薄なものにしているのではとケイスが思いいたるのに時間は要らなかった。それとも、王都（シェーン）の騎士団と警備隊のように、元々お互いを敬遠しあっているのだろうか。
ケイスには分かっていない事が多すぎる。まずはそれを知るべきだ。
「ですが、こうして私はオスティオに派遣されてきました。これからは違うものになると思います」
相手は、鼻白んだようだった。うんざりしたように目をすがめると、自身の肩を揉むように右手を伸ばして、ふう、と息を吐き出した。ケイスにしてみれば「やってられないぜ、やれやれ」としか見

えないのだが彼は人の善性を信じる人間だ。初対面相手にどうしていいのか分からないのだろうと良い方へ解釈する。自分でそう思いながら、無理があるなとは感じていたが。新しい職場の仲間は、ケイスを心から歓迎してはいないようだ。

「……まあいい。おれはマルセル」

ケイスは既に遅刻の非礼を詫びる前に名のっている。まず自分の身分を明かす事が先決だと思ったからだ。だから、男の――マルセルの自己紹介は、いささか遅いものだと感じられたが、やっと同僚の名前を知る事が出来たのだ。若いシェーンの騎士は、すぐに手を差し出すと握手を求めた。

マルセルは、その手を一瞥すると目を細めてから顔を背けた。

「来い」

かつて無碍に扱われた事がないケイスではなかったが、なんとはなしにつれない対応でシュガーローゼの事を思い出していた。彼女と一緒にされていると知ったら、目の前のマルセルは嫌な顔をしただろうし、シュガーローゼにいたってはケイスを罵倒しそうだ、こんな年上の人間と同一視されたら。想像しただけなのに、ケイスの口元には笑みが浮かんでいた。

ひどく混みあった場所に来た。目抜き通りだから当たり前だろう。マルセルの後をついて行くしかないケイスは疑問を口にしたかったが、答えてくれそうにもない。この通りに用があるのだと思いきや、マルセルはそのまま通り過ぎた。

町の庁舎に向かっているのだと気づけた頃には、マルセルはその建物の中に入っていた。目抜き通りのどん詰まりにある、大きな建

物の一つである庁舎。要はチェルヴォの役所だ。チェルヴォの町の行政の中心地。そんな場所に、マルセルは用があるというのか。訝しく思いながらもケイスは後を追った。

「カルロに会わせる。だが話はするなよ、顔見せ程度だ」

言われて、ケイスは眉をひそめた。どういう事か、考えなければすぐには分からなかったからだ。推測の域を出ないが、マルセルは隠密行動をとっているというのだから、他の仲間にしてもそうなのかもしれない。つまり、警戒のしすぎかもしれないが、マルセルとそのカルロという人物の間につながりがあると一目で分かるようでは困る、と思っているのかもしれない。それは新参者のケイスにも言える事で、お互いに会話をしては親しい間柄だと思われるから、そうはしないというのだろうか。

とにかく、マルセルはもう庁舎の奥に進んでしまっているので、今はもう質問出来そうにはない。ケイスは問答は後だと何気ない様子を装って、マルセルの後を追った。

庁舎の中は思っていたよりは人気がある場所で、役所で働く者以外の姿も見受けられた。一階の一部のエリアは、机が多く置かれ、何人かの人間が机を挟んで向かい合い話をしている。町の相談所か、町で起きた事件や問題について役所に訴えているのかもしれない。ケイスもシェーン王国の王城の窓口で見た光景だ。瑣末な事象は、そういった役人の窓口へ。もっと大きな出来事であれば、役人か貴族の口伝えで国王へ陳述する。

部屋の奥の方では役人が書き物をして働いている。

「やあ、ジョット。景気はどうだい」

ケイスが庁舎の様子を眺めている間に、マルセルは窓口の一人の男に話しかけていた。先ほどまでケイスに取っていた、シュガーローゼもかくやというつれない態度はどこかへ身を潜め、気の良い町の男のように振舞っている。その変貌に少なからず驚きながら、ケイスは成り行きを見守った。話をするなと言われていたのを、律儀にも守っているせいでもあった。マルセルから三歩ほど離れたまま

で、彼を追う事はしなかった。
「おお、マルセル。少し久しぶりじゃないか。そっちこそ元気にやってたか」
「まあな。おれの方は懐事情が寂しいが、なんとかやってるさ」
ジョットと呼ばれた男性は、横に長いふっくらとした体型のせいか年齢がはっきりとしないが、四十代程度の男。彼がジョットという名前ならば、マルセルが会わせたいのは他の男性だろう。怪しまれない程度に辺りに視線を巡らす。それらしい人は――たくさんいた。何せ、この部屋は一般公開されているために町民が多いのだ。役人も机の向こうとこちら側を行き来して、雑然としている。
「そうだ、コッポラのばあさまに用事言いつけられてな、それで来たんだった」
言いながら、マルセルはポケットからくしゃくしゃになった紙片を取り出した。二つに折りたたまれた小さな紙片を、ジョットの座る机の上に載せる。
「はは、また用事を言いつけられたのか。まあ、コッポラさんは気が強いのに足を弱くしたからなあ。言いたい事はたくさんあれど、外出が難しい。お前という良い隣人に恵まれたな」
マルセルは肩をすくめた。迷惑そうではない、そういった仕草で。
「陳情書くらい、持ってきてやるさ。大した距離でもない。だが内容が傾く鐘楼の修理についてじゃ、ちょっとやり甲斐がない」
「それはこの間の陳述書にあったな。今日は何だろうか……ま、カルロに渡しておくよ」
その固有名詞に、ケイスは反応した。目当ての人物が、ついに出てくるのだろうか。目を皿にしてケイスはジョットの手の中の紙片がたどり着く先を探した。その先に、若い男性が居た。ケイスよりいくらか年上くらいだろう。少し地味な顔立ちの、真面目そうな青年だった。
ケイスの居る場所からは聞こえない音量でジョットが青年に何か言うと、カルロと思しき青年は一度だけマルセルの方を見た。その

帰り道、一度も目を止めずにケイスを通り過ぎるように視線は流れた。青年は、ケイスに注意を払っていないように見えたが、視界の端で意識に留めたようにも見えた。

これが一瞬の邂逅なのか、ケイスが判断しかねるほどにそれは刹那の出来事だった。まるで解答を求めるようにケイスがマルセルに目をやると、彼はもうジョットに背を向けていた。

「行こう」

気安い友人にするように、マルセルはケイスに先に行くよう促した。戸惑いながらもケイスが歩き出すと、マルセルは後に続いた。

言葉を発する事は許されないような気がして、ケイスは無言のまま庁舎を出た。さすがに、もういいだろうと思い口を開く。

「で、カルロさんはあの手紙を渡された人でいいんですか？　まだ若い……ジョットと呼ばれた方の後ろの方にいらっしゃった」

「ああ」

態度ががらりと変貌した、というほどの劇的な変化ではなかったが、途端にマルセルは無愛想になる。先ほども、気のよさそうな男を演じてはいたが、感情表現豊かになっていたわけではない。だが、様子が明らかに違うのは言わずもがなだろう。これは問いかけていいものか迷ったが、ケイスはつい、思っていたことをそのまま口にしてしまう。

「普段はああなんですか？」

「あ？」

声が一段と低くなり、不機嫌そうにマルセルはシェーンの若い騎士をねめつけた。やはり聞いてはいけなかったのかとケイスは若干の後悔をしながらも後に引く事はしなかった。

「いえ、ジョットさんとは気さくに話していらっしゃったので……その……」

私には気さくに話してくれませんよね、とはさすがに言えなかった。まだ会ったばかりなのだから仕方がないといえば仕方がないのだ。案の定、マルセルからはどうでもよさそうなものを見る目で見

られた。ケイスはごく最近、こういった視線をもらった事があるなと、またもやシュガーローゼの事を思い出していた。

「何がおかしいんだ、ああ？」

思い出し笑いに近いものをもよおしていたからだろう、すぎにマルセルに見咎められてケイスは慌てて口元を引き結ぶ。

「い、いえ、その。思い出し笑いです」

またもや頭の中身をそっくりそのままぶちまけてしまい、言ったそばからケイスは恥ずかしくなる。仮にも勤務中に何を口走っているのだと、自分を蹴飛ばしたくなった。そんな青年をニャーとしか言わなくなった王様でも見るかのような目でマルセルは見ていた。普段でも思い出し笑いは怪しい行動の類かもしれないのだから、無理もない。

「……まあ、いい。おれは少し人見知りするタイプで町では通っている。だが親しくなれば気さくなおっさん、という訳だ」

一応は、演技なのだと答えがもらえる。ケイスは意外な答えだと思った。そのどちらかがマルセルの本質に近いのではないかと思いながらも、それは口に出来ないなと賢明な判断をした。

「カルロには暗号でお前の事を伝えておいた」

「……もしかして、あの……何とかっていう老婦人からの手紙がそうだったんですか」

「ああ。あれはコッポラさんからの陳述書なんかじゃない。たまには、本物を渡す事もあるがな」

マルセルは右手を自分の左の肩に伸ばすと、揉みほぐして言った。

「今日はもう一人に会ってもらう。先ほど言い忘れたが――」

彼が右手を反対側の肩に回すのを、ケイスはなんとはなしにぼんやりと見つめていた。

「誰もお前を歓迎していない。他の隊員の対応にむきになるなという方が難しいだろうが、先にそれだけは言っておく」

声音は平坦なものだったが、マルセルの瞳こそがケイスを喜んで迎えるつもりがないと告げている。マルセルの黒い瞳孔が、拒絶を

はっきりと示している。初めて顔を合わせた時から変わらない、よそ者を受け入れようとしない者特有のにおいだ。ケイスも二十年以上生きている。困難に陥った事がないはずがない。だが、仲間が居る場所だと思っていたところで、敵意に近いものをもらえるとは、思ってもいなかった。

３４　ケイスの新しい職場２

二人目の同僚とは、直接話を交わす事が出来た。喫茶店にて、マルセルに紹介される。

相手は新聞記者という“副業”を持っているので、その取材だと周りには思わせる事が出来るからだ。

「ふん、こんな若造が突き出されるとはな。問題を起こしての左遷じゃないだろうな」

ロドリゴと名のったこの男性は、マルセルよりも年上の五十代ほどの男性だ。そろそろ引退を考えてもいい頃だろうに、浅黒い肌とがっちりとしたがたいの良さがただ者じゃないと言わしめている。とても新聞記者には見えないが、ただの力持ちの記者という風に町民には思わせているそうだ。それが成功しているかどうかはケイスには分からなかったが、かえってそういう隠密行動の似合わない人間が居る事によって、怪しまれないのではないかとケイス自身もよく分からない結論に達した。

「いえ、私はまだ若輩者ではありますが、正式にこちらへの異動を言い渡されました」

不躾さでいえばマルセルよりもあからさまにロドリゴはシェーンから来た騎士を眺めまわした。負けじとケイスも相手を見返す――チェルヴォに来てから癖になってしまいそうだ。

ロドリゴは、見た目からして力仕事をしてきた、あるいは今もしているという体格の良さを誇っている。上背もあってほどよいどころかたくさんの筋肉が付着している姿からは、誰も彼がデスクワークをするような人間だと想像は出来ないだろう。実際、新聞記者の仕事は机に向かうだけではないはずだが、それにしてもその肩書きは似合わない。短く刈られた髪も、動きやすいようにという意図が見えるし、顔つきもお世辞にも優しいとは言いがたい。いかつい岩のような面差しをしている。マルセルの瞳には鋭さがあったが、ロ

ドリゴの眼差しには重みがあった。ずしんと腹にくるような強い重力が働いている気がしてならない。

「小僧。早くチェルヴォ（ここ）のルールを覚えるのだな」

言いながらロドリゴはペンを走らせた。シェーンの公用語のような、そうでないような謎の文字が並んでいく。ケイスが眉を寄せてものを問おうとすると、ロドリゴは手の平を上げて制止した。

ペンがインクで文字を形作るのを見ているはずなのだが、ケイスにはどうもそれが読めないのだ。オスティオの公用語はシェーンと同じだったはずだ。以前からシェーンの属州のようなオスティオであるから、二国間で言語に不自由はしない。となると、他の大国でも使用される文字自体は一緒のはずなのだから、発音は異なっても読めない事はないはずなのだ。東にある、文化にかなりの違いが見られる諸外国の言語を綴っているのだろうか、ケイスは頭を悩ませた。

「暗号だ」

ロドリゴは一度しか言わなかったが、それでやっと理解出来た。

「大げさに言っているが大した事はない。簡単なものだ、覚えろ」

端的に言ってのけられ、ケイスはしばし言葉を失った。彼は暗号のたぐいが得意ではない。理由は思いつかないのだが、昔から暗号の出てくる推理ものの物語を聞くのも、特に好きでも嫌いでもなかった。

「がんばります……」

それが限界だった。

「大丈夫かよ、若いの。わしらなんかよりも頭はしっかりしてるはずだろう」

「その“わしら”におれは入っていないでしょうね……」

返事を期待していないようなマルセルの言葉は無視された。

「いいか、若いの、この町ではでしゃばるなよ」

ぐっとロドリゴが身を乗り出してきて、ケイスに顔を寄せた。それは威厳ある姿で、どこかケイスのよく知るルブラン伯爵を思わせ

たために、小さく体が萎縮した。自らの恐れを悟られまいと青年は精一杯の険しい表情でもってそれを迎えた。低音で男は言いつけた。

「シェーンでどうだったかは知らないが、ここではここのルールがある。郷に入っては郷に従えというだろう、それを忘れない事だ」

まさに蛇に睨まれたカエル状態で、ケイスは返事をするのに時間がかかった。それもはいともいいえとも答えにくいものだった。でしゃばるなというのが、彼自身の気質を遮るほどのものなのかどうかまだ判断できていなかったし、何より自分がそんなに目立ちたがりなでしゃばりだと思われたのかと疑問にも思っていたからでもあった。

このロドリゴの威圧感たっぷりの対応も、まだ優しいものだったのだとケイスが感じるには少し時間がかかる。

† † †

翌朝、ケイスは指定されていた場所へと向かった。仕事仲間に会いに行くためだが、今回はマルセルは同行しない。昨日の方が特例だったのか、マルセルと接点があると困る相手なのかは知らないが、少しばかり道に迷いながら

三人目の仲間にはまっすぐ敵意を向けられた。ケイスが我知らず、

わずかひるんでしまったほどに強い眼光。まるで親の敵でも見るかのようなものだった。

「とっとと王都（シェーン）に帰りな、モヤシ小僧」

男の名前はマルセルからサムソンだと聞いていた。マルセルと同じ年代か少し若いくらいの男。

マルセルは彼とつき合いがないという“設定”だからとケイス一人で直接会いに来た途端の敵意だった。歓迎してくれないマルセル相手に何度も口をすべらせたケイスも、さすがに閉口させられた。

「シェーンがおれらに何をしてくれた？　ああ？　こんな小僧っこ一人寄越すだけで、何もかも片付けられるつもりなのか」

あり得ない、とサムソンは鼻で笑った。ケイスに自身を貶されたという自覚はあれど、あまりの剣幕にそれを表現出来なかった。

「帰って上司に言いな。お前自身が来いってな」

サムソンは立ち去ろうとした。放心しかけていたケイスは彼の背中が見えた事でやっと我に返る。

「待ってください！」

男は足を止めない。ケイスはすかさずサムソンの前に走り、立ちはだかった。

こちらを向こうともしないサムソンに、ケイスの胸に焦る気持ちが競り上がってきた。

「何も聞かずにシェーンや私の事を決めつけるのは止めてください」

ちっ、とサムソンは舌打ちをした。足を止め、いまいましいと言わんばかりに顎をしゃくる。

「小僧、口のきき方には気をつけろ」

若い騎士は、強風に立ち向かうようにサムソンの強固な敵意と真っ向から向き合わねばならなかった。彼には彼の事情が、彼らの理由があるのだろうがケイスとて何も物見遊山に隣国まで来たのではない。何かを為しに来たのだ。団長には期待をかけられて、力なろうとしてここまで来た。こんなところで引き下がるわけにはいかなかった。

出来るならば、このシェーンに対する険悪な意識の理由を教えてほしかった。そして、これからはその考えが改まるようなきっかけをケイスは作りたいと思っていた。

威圧的なサムソンは、次の瞬間に片方の頬を持ち上げて、見下すようにして言った。

「お前にゃ用はないよ、小僧」

ケイスなど眼中にない。彼は先ほども、上司を出せと言っていた。最初からサムソンは下っぱ騎士になど用はないのだ。気がつけば羞恥で顔が赤くなりそうだった。ケイス自身も未熟さを感じてはいたが、サムソンの言葉は侮辱に近かった。

青年は、上下の奥歯を噛み合わせる事で、拳にこめたい力を堪えた。

「私が若輩だから問題なのですか」

まだ二十代、青二才と罵られる事もある。そんな事は分かっている。だが、ケイスを信頼してくれた団長の思いを裏切るわけにはいかない。ケイスをここへ送り出した、彼のためにケイスは怒りたかった。

「そうではないんでしょう。私以外の誰が来てもあなたは変わらない」

青年の若いエメラルドの瞳が光った。

「あなたたちは私にどうしてほしいんです?」

サムソンの眉間がぐっと寄った。彼の不機嫌が深まるのが分かっていながら、ケイスは自分の口を止められなかった。普段はこんな風に相手を無理矢理に決めつけるような乱暴な物言いはしない。元よりケイスはそういったタイプではない。しかし、今は団長の存在を思い出していた。これ以上のケイスへの侮辱は、団長への侮辱にもなると言いたかった。

口を開いて、力をこめる場所がなくなったケイスは両の手の平を固く握りしめていた。関節が白く浮き出るほどに、爪が皮膚に食い込むほどに、固く。

「言うじゃねェか……モヤシ小僧」
声はわずか面白がっているかのようだが、サムソンの不機嫌ははっきりとした形となって険悪な顔つきを深ませていった。圧迫感を与えるような、強烈なまでの苛立ち。
「一体何をしたらシェーンを信用してくれるんです」
「小僧、お前が帰って上司に来いと言ったらだ」
「それは出来ません。彼が来られないから私が来たのです」
「いいか、お前に出来る事は何も、ない」
一言一言区切るようにしてサムソンはうなりを上げた。シェーンの騎士は目の下をひくひくと動かした。
「そちらが嫌でも認めてもらいます。私が、この町の仕事の仲間だと、いう事をね」
彼はほとんど怒っていた。心底からの憤怒を忘れていたケイスだったからか、もう一人の自分が侮蔑をこめた声で苦々しく吐き捨てるのを遠目から眺めていた。
サムソンは物を言うのも嫌なようだ。人一人殺せそうなくらいの鋭すぎる瞳は、門前に立った番犬のようにぎらぎらとしていた。
しばらくして、男は低く吠えるように言った。
「こっちが引かなきゃ、そっちも引かないってか」
ケイスは唇を湿らせもせず黙って待っていた。目前の男は表情も変えずに言葉を継いだ。
「……いいだろう。お前には何も出来ないという事を証明させてやろう」

35　指輪探し

天気は曇り、薄い褐色の雲が空に敷き詰められていた。ケイスは朝から水路の中にいた。水深の浅い水路のために、膝のあたりまでしか水につかっていないが、水温は冬にふさわしく低い。

ケイスは今、文字通り川底を洗うようにして水路の端から端までを木の棒や手で探り出していた。チェルヴォの水路は場所にもよるがきれいではない。にごった水の下には何があるか分からず、靴の裏にはぬるぬるした感覚がつきまとう。

昨日、サムソンが出した条件は一つだった。彼が水路に落とした指輪を探してこい、というものだ。ケイスはもっと困難な事を命じられるのかと思ったのだが、意外にも体力勝負の条件で少しだけ拍子抜けした。

しかし、はじめてみるとこれは体力もそうではあるが精神も消耗する作業なのだと理解した。水中を覗き込むため腰はかがめるしかなく、慣れない姿勢に体が痛み、何を探しているのか分からなくなるほど広範囲な水路をさまようのは、頭まで働きを鈍くさせた。加えて、冬であるために外気の気温の低さと、靴を履いてはいるが、水路に足を突っ込んでいる事により体温が低下していた。足先の感覚など、もはや存在しない。

人々の目を集めるというほどの注目は浴びていないが、奇妙な行動に通りすがりの人間はぎょっと目をむいた。変人がいるとささやかれる事はまだなかったが、そうされるのは時間の問題のように感じられ、羞恥心も抱いた。

水中が光ったかと思えばガラスの破片で、手の中には緑の藻のようなものばかりが集まった。

二日をかけて、ケイスは新しい職場について学ばされた。

まず第一に、シェーン王国から来た騎士は、歓迎されていないという事。それどころか、帰れと思われている。これは任務に関して

いえば、ケイス個人に関わる事のような気がしないでもない。ケイス以外の人間が来てもこうなっていただろうと思われるので、個人の問題ではないと判断出来るかもしれないが、まだケイスはチェルヴォに来たばかりだ。これから変わるかもしれないので、瑣末な事だと思う事にする。

そして、オスティオ王国に諜報員として潜むシェーンの仲間たちは、どういう仕事をしているかについても粗方理解出来た。王都（シェーン）に居るキースはなかなかに先見の明があるようで、自国以外で自分の使える駒が必要だと知っていたようだ。シェーンにしろオスティオにせよ有事の際には、自国以外に居る手駒が有効だと判じて、オスティオにマルセルたち精鋭の部隊を前もって派遣してあった。レジスタンス≪ザッハヒカリテ≫の活動が目立ち始める前からだというから、キースは先読みをしていたのだろう。これからのシェーン、ひいてはオスティオ――あるいはミリヤール帝国において何かが起こると。

とにかく、そんな早くからキースの部隊はオスティオに潜伏する任務を受けていた。その中心地がチェルヴォだ。一年以上も前からマルセルはこのチェルヴォの町で働いているために、今ではすっかりという程ではないにせよ、かなりチェルヴォの町と町民に受け入れられている。この、周りに溶け込むという事が諜報活動には重要なのだ。オスティオの動向を探り、ひそかにシェーンに情報を送り届ける。それが彼らの仕事だという。彼らに部隊の名前はない。隠密行動が基本であるために、余計な名前はない方がいいと考えたのだろう。

マルセルたちが町に来たばかりの頃は、町に馴染む事が仕事のうちであった。町民のように過ごして、一般人と変わらないようになるまでは他と比べれば目立つ。そんな時に他国のスパイだと知られてしまえば事だ。まずは潜伏先の人間になりきる事。それからは、任務は順調だった。レジスタンスの活動や、オスティオを介して伝わる、ミリヤールの情勢やチェルヴォの反対側の隣国カロゼッロ共

和国についてなどを自国（シェーン）に届けるのみ。仕事は主に情報収集と、それを本国に伝える事だ。諜報員としての活動の妨げになるので、シェーンが問題視しているレジスタンスと関わりを持つ事はまず有り得ない。それが、レジスタンスの横暴を見過ごすという形であっても。仄めかされたそれに、ケイスは頷く事は出来なかった。

最後に彼らの本職に対する意識が、非常に軽いという事も感じ取れた。軽いというより、シェーンに対する物理的、心理的距離感がひらけてきているように見えるのだ。

オスティオに来て、シェーンの騎士団や団長と直接会う事も少なかったのだろう。そうなれば相手方――王都（シェーン）の考えが分からなくなるのも、頷ける。ケイスに帰れと言いたくなるのも、頷けはしないが理解に苦しむほどではない。だからケイスはこうやって、水路を歩き続けるのだ。

日が中天に昇る頃になると、マルセルが姿を見せた。

「何やってんだ?!　なんつう目立つ事を！　早く上がれ！」

言われて、ケイスははたと気がついた。一応この町での仕事は目立たないように行動する、という項目もあったのだと。どう反応したらいいものかと苦笑いのようなものを浮かべ、青年はマルセルの近くへ進んだ。

「サムソンさんに言われたんです」

全てを言い終わらないうちにマルセルはかぶっていた帽子をぐしゃりと掴み、ずるずると頭の上から下ろした。

「ああもう、あのバカ！　お前もだ、何で言われたからって水路で踊ってんだ」

彼はリーダーらしく仲間のしでかした事に処置なしと顔をしかめた。マルセルをはじめて好ましく感じられた一瞬で、ケイスは作り笑いを自然な微笑へと変えた。それすら見ていなかったマルセルは表情を真摯にしたケイスの次の言葉に目を丸くするはめになる。

「言われたんです。『お前に出来る事は何もない』と。私はそれを否定しなければならない」

マルセルは大食の肥満体型の人間がおかわりを繰り返すのを見るような、胸やけした瞳に眉を寄せた。

「だから止めるわけにはいきません」

ケイス自身のためにも、チェルヴォの仲間のためにも、団長、シェーンの仲間たちのためにも、ケイスは歩みを止める事は出来ない。そんなつもりはなかった。ケイス一人で何が変わる？　変わらないとしても、決めつけだけはほしくなかった。彼らの期待を得られる結果が待ってなくとも、彼は彼自身のために足を動かし続けなければならなかった。

自分一人で世界を変えられるはずがないのはよく分かっている。過去の体験から、ケイスはそれが嫌というほど思い知っていた。それでも、そういった経験があるからこそ、挑み続ける事を忘れてはならないのだった。

今目を閉じたら瞼に浮かぶであろう、かつて助けられなかった人。それから、力になりたいと思わせる人。ケイスを信頼して送り出してくれた人たち。彼らに証明したくてケイスはこの場所に居るのかもしれないと感じていた。自分に出来ない事がどれだけたくさんあっても、人の力になりたい。これだけは曲げない、曲げられないものなのだと彼らに知ってほしい。これから仲間になるかもしれないマルセルたちチェルヴォの人間にも――。

下らない意地かもしれない。少しだけそう思うと、忘れかけていたマルセルを思い出した。彼を見ると脱いだ帽子で顔を隠し、処置なしとばかりに黙りこんでしまった。

また馬鹿な事を言ってしまっただろうかと、少しだけ皮肉った冷静な自分がいて、ケイスは視線をマルセルから外した。

「……どいつもこいつも……」

マルセルは帽子の下で小さくぼやいた。一拍おいて、彼は顔から帽子を離すと、苛立ちと呆れと辟易の顔をして、長い息を吐き出した。

「サムソンと話をつけてくるから大人しくしてろと言っても、聞か

ないんだろうな」
　帽子を持った手で、マルセルは自身の肩をもむ。ケイスは頷いて返事をしようとしたが、マルセルが自分を向いていないのが分かると諦めた。
「分かった、オーケイ。お前らにはうんざりだ。お前はやるならもっと目立たぬようにしろ。それが無理なら今の格好と違うなりをしろ。別人にでもなりすますんだな」
　意外な言葉に、ケイスは思わずマルセルの顔をまじまじと眺めてしまう。こちらを見ないくせに彼はその視線を嫌そうにして手の平を振った。
「ただしおれは本当にサムソンの野郎をどつきに行く。それから帰ったら止めてもらうからな」
　ケイスを突き飛ばしたいとでもいうような目をして、帽子を被るとマルセルはその場所を去って行った。
　二人が少し声をあらげていたので、数人の通りすがりの人間の目がケイスに集まっていたが、伺うような瞳を向けられて観客はそそくさと他所へ向かった。王都（シェーン）の青年は、わずかばかりの居心地の悪さを感じながらも、なんとか怪しまれずに水路を行き来する方法はないものかと思案をめぐらした。

36　頑固者たち1

深夜、ケイスはチェルヴォの町のひっそりとした住宅街から外へと出た。彼は今、チェルヴォの短期契約の格安集合住宅の一室に住んでいた。宿にずっと泊まるよりずっと安くあがるのだ。

カンテラを手に向かう先は、昼間見て回れなかったところにある水路だ。

あれから、結局サムソンはマルセルに連れてこられたのだが、何も言わずに不満げに眉をひそめていた。二人の間を取り持とうというのではないが、マルセルがなんとかケイスに止めるよう言ってくれとサムソンに頼んでも彼は表情を変えずにじっとしていた。

そのうちに少しずつ人が集まってきたので、ケイスは水路から上がった。問題は解決したとばかりにサムソンは早々にその場を去ったが、マルセルの文句がケイスを待っていた。「問題を起こすくらいなら帰れ」というお言葉に、ケイスは目立つ行為はしないと口にした。

それゆえ、夜間に指輪探しをする事にしたのだ。

暗闇の中に明かりはというとケイス自身が持ってきたカンテラの中の火しかない。夜の町にはほとんど明かりはなくひっそりとしている。当たり前だ、ともし火のための油がもったいない。さすがに商人で栄える町だけあって、一部の大きな家の窓からは明かりがもれている場所もあるが。こんな暗い中では捜し物が見つかるはずがない。しかしケイスはそれを自分に忘れさせて、ただ水路の中を洗うようにじゃぶじゃぶと移動し続けていた。

†　†　†

ケイスが深夜の捜索をはじめてから二日目、早速マルセルに見つかってしまった。

「夜に水路に居る方がもっと怪しい、常識で考えろ」

怒りたいのだが、呆れとやりきれなさが勝ったというような顔をしてマルセルは自身の肩に手をやった。水路の一歩手前に来て、広い幅を持つ溝の水に浸かるケイスを見下ろしている。

「勘弁してくれ。冬の夜、水路に足をつっこむなんて、お前気は確かか？」

「今日は耐水性の強い長靴を買ったので、寒さはそうでもないですよ」

チェルヴォの水路は場所によって水深がまちまちで、今ケイスが居る水路の深さはシュガーローゼが落っこちた水路と比べればとても浅いものだった。足もたくさん浸からずに済んでいる。

「そうじゃない、そうじゃねえよ」

マルセルは苛々としたように頬をひくつかせて、目を閉じた。眉間のしわをのばそうとするかのように目頭に手をあてる。瞳を閉じている間に自分を落ち着かせようとしたのだが、失敗したために苦りきった顔で目を開けた。

「サムソンはお前に無理難題を押し付けているだけなんだ。お前を認めるつもりなんて、ない」

ケイスは作業を止めはしなかった。サムソンの思惑にはもちろん気がついていた。そもそもこの指輪探しは、ケイスを認めるつもり

はないという事をサムソンが証明するために彼が提案したのだ。不可能を可能にしてみろと、ケイスを黙らせたかっただけなのだろう。そのくらいは、いくらお人好しのケイスでも分かっている。

「でも、一度言った事を曲げるわけにはいきません」

「馬鹿かお前は。サムソンは絶対に、考えを改めたりはしないぞ」

「ではどちらが先に折れるかの忍耐勝負になるんでしょうね」

「――……わ……いや、上司に報告させてもらうぞ」

どうぞご自由に、というように瞳を向けてケイスは苦笑した。

「本当にするからな。お前、シェーンでは一般的じゃないかも知れないから教えておくが、魔術でシェーンとの通信も可能なんだからな」

「そんな便利な方法があるんですか」

魔術に疎いシェーン育ちの青年は、通信手段は馬を駆けさせての手紙のみだと思いこんでいた。それならば何故彼らは、こんなにもシェーンとの間に軋轢があるような顔をしているのだろう。魔術を使っての交信が可能ならば、今のようにはなっていなかったのではないか。

「今すぐってわけにはいかないがな」

あのバカ女居るかな……ぶつぶつとマルセル。

と、人の声に二人は身を固くした。周囲にさっと視線を投げると手元のカンテラの火をケイスは吹き消した。彼の立っていた水路の奥の橋の下、人が隠れられる場所があった。マルセルも少し離れた場所で身をひそめていた。

彼らの頭上を数人の足音が通り過ぎた。がちがちと金属のかち合う音は帯剣した者が相手だと教えてくれた。町の警備隊あたりであろう。彼らは無駄口を叩きながらも、どこか神妙に夜の町を徘徊していた。徐々にその足音が遠ざかってゆく。

警備隊員たちが去って、充分に時間がたった頃。ようやく静かな暗闇の中に言葉が生まれた。

「……最近のチェルヴォは物騒だ。警備隊が夜間パトロールをする

くらいにな」

ケイスも地元シェーンでよくない事件が起こると城下まで見回りに足を運んだ事がある。警備隊のやっている事はむしろケイス本来の仕事に近く、彼らの事がよく分かるような気がしてきた。

「やつらに目をつけられる前に、シェーンへ帰りな」

指輪探しをやめろとは言われ続けていたが、マルセルにまでこうもはっきり帰れと言われると思っていなかった。ケイスは一瞬耳を疑う。しかし、マルセルが黙り込んだので真実と受け取る事にした。

目の前の男もそう言ったし、ケイス自身、自分が歓迎されていない事は同僚たちに会ってから嫌というほど思い知っていたはずだが、マルセルにまで言葉にされるとは。指輪捜索をはじめた日に問題を起こすぐらいなら帰れとは言われたが、あれは帰れと言いたいがために言ったのではなくて問題を起こすなという点こそが重要だった。

マルセルは、ケイスを受け入れるつもりがないというオーラを発してはいたが、拒絶するほどの強い感情を向けられてはいなかったと思ったが、やはりケイスはやりすぎていたらしい。この水路捜索が最たるものなのだろう。

低い気温に、カンテラを握る手に感覚がなくなってきた。ケイスは視線を冬の夜空へと向けた。冷えた空気、星の輝く空。故郷と変わらない景色なのに、上手くいかない。

彼も分かっていた。意地をはっている自分自身を。ケイスには目的があってこの町に来たはずなのに、いつの間にか躍起になって水路の中を歩き回っていた。今更後に引けないというのもあったが、「水路に行かなくては」という奇妙な感覚に陥っているだけかもしれなかった。チェルヴォの仲間に、認めてほしいという思いはしっかりとある。シェーンの仲間のためにも、ケイスは何事かをやってのけなければならない。シェーンの騎士団がチェルヴォの仲間を忘れていないという事を証明するのはケイスしかいないのだから、立ち止まってはいられないのだ。

だが、不思議な事にこうして水路に立っているとそれら思考のす

べてがあまり関係なくなってしまっていた。指輪探しに夢中になっているのではない。ひたすら意固地になっているわけでもないのだが、必死になってもいないのに、こうまでして夜に指輪捜索をする必要性も感じていなかった。ならば何故ここに立っているのだろう。ただ本当に意地になっている訳ではないはずが――他に答えを見つけられなかった。

「……変える事は出来ないのか……」

ケイスのような人間がただ一人何かをしたところで、しょせん世界は変わらない。いつも思ってきた事で、だからこそ物事を少しでも良くしようと何かと率先して動いてきた。それは、ここでも変わらないのか。ケイスが無駄な努力をしても、何一つ変わることはないと、どこへ行っても思い知らされるだけなのか。

それほどまでに、自分は無力なのか。

過去の決意と、シュガーローゼの顔が思い浮かぶ。

何かをしたいと思っている。誰かに少しでも、よろこんでもらえるように。気持ちが軽く、明るくなってもらえるように。物事が円滑に進むように。たとえ本人が気がついていなくても、ほんの少しでもケイスが他人のためになる事があるのなら、それをしたいと思っていた。叶わぬ思いなのだろうか。

胸が突かれたように空虚に感じる。むなしくなった。誰に否定されようと構わないと思っていたのだが、ケイスはいつの間にか自分自身の行為を意味のないもののように感じはじめていた。こんな夜更けに、太陽もない空の下で小さな指輪が見つかるはずもないのだ。昼間でも途方のない作業だというのに、効率が悪いに決まっている。

「……お前が悪いと言いたいわけじゃない」

存在を忘れかけていたマルセルがぽつりと声を落とした。視線だけで声の主を追うと、ケイスはカンテラを持つ手を換えて続きを待った。

「お前にここの水は合わねえよ」

チェルヴォに、この町の同僚にケイスの波長は合わないと言いた

いのだろうか。それで済まされる問題なのだろうか。まだ町に来て、一ヶ月もたっていないのに、結論づけるのは早すぎるというもの。しかしケイスは反論しようという気にはなれなかった。

「年食うと、鋼みたいになっちまって、な……」

その時のマルセルの言葉は、小さかったためと吹いた一陣の風によってかすれて聞こえた。ケイスが聞き返そうと顔を向けると、闇の向こうで男が口角を上げていた。笑ってはいないのに、口の端を上げているだけのような表情。どこかやるせない、詮ない思いを隠すようにしてマルセルはゆっくりと体を動かした。

「寒いな。お前も早く宿に帰れ」

振り向きもせずにそれだけ言うと、マルセルは水路から遠ざかって行った。

ケイスはしばらく水面を蹴るように足を動かしていたが、最後にはこの日の捜索を打ち切る事に決めた。

† † †

指輪探しをされてなるものか、と思ったのだろう。マルセルが町を案内すると言ってきた。気になったので、昨夜彼が口にしていた魔術を扱う人間について尋ねてみた。

「やつはよく姿をくらますんだ」
マルセルはどうやらその魔術師にまだ出会えていないようだ。どうやらすぐに会える人物ではないらしい。加えてマルセルはその魔術師の話を続けたくはないようで、その話はそこで終いになった。
町の案内はいたって平穏に終わった。商店街や高い鐘楼のある教会、町の名物である広いパレルモ階段を案内された。丘の上に立つとチェルヴォのほぼ全景が見られるらしいがマルセルはその話をしておきながら面倒くさがってそこへは行かなかった。
昼下がりになるといい加減に彼も道案内に疲れたようで、一つの飲食店に入って昼食をとることになった。
チェルヴォを知れるのはケイスにとってもよろこばしい事ではあったが、昨夜の事でマルセルと二人で食事というのはいかにも気まずいものであった。食事中はお互いに自分の目の前の皿を空にする事だけに従事し、それでよかったのだが食事を済ませてしまうと殊更無言が目立った。
何を言ったらよいのか、何か会話をした方がいい気がしていたケイスだが何も話題を思いつけないでいた。店のささやかな喧騒だけが今は彼らの間に横たわっている。
しばらく無意味な沈黙を貫いていた二人だったが、マルセルが前振りもなく口を利いた。
「お前がこのまま大人しくしてくれるんなら、職探しも手伝ってやるんだが……」
マルセルはあまりのり気ではないような様子だった。無理だろうと思っているのがよく分かる。
「“副業”のことですか」
チェルヴォに自然に溶け込むには何か仕事に就く必要がある。今のケイスの仮の身分は「勉強のために旅する商人の息子」というものだ。旅人のはしくれなら、いつまでもこの町にいるのはおかしい。定職に就くべきだとマルセルは言っているのだが、ここ最近のケイスの行動は少しばかり目立つ。少なくとも怪しまれる行為はしない

と決めている彼らのルールからしてみれば逸脱しているといえる。
そんなケイスをどこかの職場につれて行くのは不安だとでも言いたげなマルセルの様子に、ケイスも感づいていた。
「ああ。ま、こっちでいくらか考えておくから……大人しくしてろよ。王都に連絡は入れてあるからな。手紙ではあるが」
釘をしっかり刺されて、ケイスは神妙に頷いた。内心を気取られないように。

その夜、まさか昨日の今日でケイスが町へと繰り出すとは思わないだろうと決め込んだマルセル――というのを想定して、ケイスはまたも夜中の水路に足を運んだ。
嘘をついたという後ろめたさを感じながらも、一方（サムソン）はしろということを一方（マルセル）がするなと言っているのだから、どちらかは裏切ることになる、と言い訳て作業に取り掛かった。
成果のあがらない深夜の捜索を、ケイスはひたすら黙々と続けた。自分自身疑念を抱きながら。
手にするのは、小石や藻のようなものばかり。ため息をつかないようにするのが少し難しくなってきていた。
ケイスの腰をかがめる場所から見て、距離にすればそう離れてはいないところに水路を見つめる一人の青年がいた。水路の中でその水面を乱すものを、考えの読みにくい瞳が凝視していた――。
「本当にやっている……」
声には呆れも、侮蔑も、感嘆も、何も感じとれなかった。ただ事実を述べているだけのようなもの。彼はまるで分かりきっていることを確認にしにきただけのような声音でいたが、まさかという思い

も抱いていた。
　青年はしばらく水路のケイスを夜目に捕捉していたものの、一陣の風が吹いて身が震えたのをきっかけに、その場を後にして家路に着いた。

37　頑固者たち2

「自分の考えを変えようと思う時って、どんな事が原因になったりする？」

シュガーローゼは安静にしろといわれて不服そうにベッドに収まっている。そうしていると病人のようにも見えるのだが、いかんせんケイスの一言によって形作られた表情が凶悪犯のように険しい。

「はあ？」

この表情をごつい成人男性がやろうものなら、凄んだだけなのに犯罪者扱いされてしまうかもしれないが、背も小柄な幼い少女がやると不機嫌そのもの程度にしか見えない。とはいえ、腹の底から面倒くさそうなシュガーローゼの顔は見ていてうれしいものではない。そんなに変な事を言ってしまっただろうか、とケイスは内心困りながらも言葉を続けた。

「もう少し何とかならないかと、思う事があるんだけど……」

意味が分からずシュガーローゼは鼻白んだ。顔をそむけて、もうケイスの存在はいないものと見なすことにする。そもそも、朝から現われたこの青年のことをシュガーローゼは最初から歓迎していなかった。例によってフランベが仲介役となってケイスを部屋に迎え入れ、気をきかせて出て行ってしまったのだ。

ケイスは、シュガーローゼとチェルヴォの同僚たちの頑なな様子にどこか似通うところがあると感じていたため、彼女に何かを聞けば、同僚たちとのわだかまりが解消されるきっかけになるのではないか、と無意識の内に思いこんでいたようだ。気がついたら、相談するかのように先ほどの言葉を口にしていた。さすがに言葉が足りなかったかと脳内で苦笑しつつも、多くを明かす気にもなれなかった。彼は仮にも少しは機密性を含んだ任務に従事しているのであり、またケイスはいつか友人のハウストに言われた「女性の前で職場の話ばかりするもんじゃねえぞ」というアドバイスを律儀にも守って

いたからだ。
　その代わり彼の口からこぼれたのは、悩める若者のため息だった。思わず、という様子ではあるが、いかにも「私、今とても悩んでいます」と言葉以外で説明するにはもってこいの動作であった。
　ケイスがわざとらしい演技やかまってほしさを前面に押し出した行動をするような人間ではないと、短いつきあいながらシュガーローゼは分かっているのだが、どうにも気に入らない嘆息であった。苛立ちながらも、辛気臭い人間にそこに存在してほしくなくて、苛立った感情を隠しもせずに若き騎士を睨みつけた。
「疲れたんなら、帰れば」
　ため息なんかつきやがってうっとおしい、という彼女の言外の感情が伝わったのか、ケイスはあっと申し訳なさそうな顔をした。失敗をしたのに気がついた子どものような、困惑した表情でもある。
「ごめん、何ていうか、疲れてはいないよ」
　ケイスはいつか、婚約者とのデートがご破算になった時の話をハウストにした時の彼の反応を思い出していた。「女性と会ってる時に疲れた様子や嘆息など断固してはいけない」と教わった。それはそうだろう。相手が女性でなくとも失礼であるし、ましてその時にいたっては自分の婚約者を前にしていたのだから――。呆れきった友人の顔を思い出したら落ち込んでしまった。ケイスは以前言われたこともすぐに忘れてしまうような人間である自分を恥じていた。たとえそれがくだらないことであっても、ケイスはいたって真面目に物事をとらえる。
「じゃあ、人生相談なら他所でやって。易者（えきしゃ）にでも言え」
　もしケイスの目の前に居るのがシュガーローゼでなければ、気にすることないとケイスをむしろなぐさめてくれたのかもしれないが、彼の眼前に居るのは間違いなく水色の瞳をすがめた少女だけだった。
「う……ごめん」
　何を謝るのか、シュガーローゼは青年をうっとおしそうに見ておきながら、不満に思った。ケイスに謝罪してほしくて言葉をつむい

でいるのではない。この部屋を、あわよくばこの町を出て行ってほしいだけなのだ、彼女は。シュガーローゼの方がため息をつきたかった。勝手に押しかけてきて、悩んでいますオーラを撒き散らされたのでは、普段のケイスより二十倍くらい面倒くさい、と彼女は感じていた。

落ち込んだように、それとも自身の悩みに没頭しているのかケイスは首を折って床を一心に見つめていた。彼が今見ているのは床などではないのだろう。それくらいはシュガーローゼにも分かる。舌打ちをしたいくらい、面倒な男だ。

「あんたはさ、何がしたいわけ」

ゆるゆると首を少し持ち上げて、ケイスは問いかけてきた少女の顔を見ずにつぶやいた。

「何が、したい……？」

目が悪い者が遠くをよく見ようとするかのようにぎゅっと目を細めてケイスは「何を…」と険しい顔をした。

彼は自身が何をしたいのか、分からなくなることが多々ある。自分自身でもよく分かっている、ケイスの欠点の一つだ。今回もそうだ。夜な夜な町を徘徊するように水路に向かって、見つかるはずもないだろう小さな指輪を一つ、捜している。そもそもどうしてそうなったのだろう。サムソンが、シェーンから来た騎士に向かって帰れと言ったからだった。それを承諾しない代わりにケイスは指輪捜しという形で、自分自身がこのチェルヴォで有益な存在であると証明したかったのだ。シェーンの騎士団代表として、騎士団の名誉のために、自分自身のために。仕事仲間と同じ仕事をする人間として、ケイスが仲間だと認めてもらえるように。

自分のしたいことを思い出していた。それでも、ケイスと彼らの溝は埋まらない。その方法が分からない。もうこの時点でケイスは指輪を見つけられる自信がなくなってきていた。そうすると、他の方法を探さねばならないが、サムソンの様子では難しいだろう。ならば帰れと言われるのがオチだ。

それでも、どうにかしたくて――堂々巡りだった。
「よく分かんないけど、仕事なら割り切れば」
シュガーローゼは事情を詳しく知らないが、ケイスはおそらく騎士としての仕事のうちでオスティオまで来たのではないかと見当づけていた。そしてそれはいかにも突き放した物言いだった。身も蓋もないといえばそのもので、その発言に悩める青年に対する親身な様子は見つけられなかった。
しかし、ケイスにはある種の天啓のような、新しい考えだと目を見張らせるものがあった。
「……そう、そうかも……」
声をはりあげもせず、どこか呆然としながらも青年は立ち上がった。ぱっとシュガーローゼに視線を投げると、苦笑まじりの笑顔になった。
「ちょっと、行ってくる」
「いや、そのまた来る的な発言はやめろ……」
しかしシュガーローゼの抗議は最後まで彼に聞かれることはなく、ドアの向こうに青年は消えていた。何が彼に起こったのか、シュガーローゼにはさっぱり訳が分からない。言葉だけなら今までで一番口数が少なかったような気がするし、行動も妙だった。やはり、こちらがため息をつきたい気分だと、少女は布団の中に身をひそませた。
何はともあれ、意味不明な挙動の男は去った、これで彼女の平安は再び訪れたのだ。小さな小さな心の靄（もや）には気がつかずにいられたし、シュガーローゼは眠ることにした。

その日は夕方に、わざわざ人通りの多い場所でケイスが水路に足をつけていた。サムソンの言いつけた指輪探しを続けるつもりはあったが、人目につきやすい場所を選んだのには理由があった。

「おいおい、お前さん頭は大丈夫か」

今日は一番にロドリゴがうんざりした様子でやってきた。珍しい、というよりケイスは初対面で一回会った以来、彼にお目にかかってはいなかった。

「どうも、ロドリゴさん。仕事帰りですか」

それを聞くなり、ロドリゴは頭をかかえて駄目だこりゃ、とばかりに言葉をつむぐことが出来なくなった。そうしている間も、いくらか衆人の中に「あの人何やってるの」「寒そう」などとケイスに注目する人の声が聞こえてくる。

「分かった、お前さんのやる気は充分よーく分かったよ。だから上がれ、な」

肩を叩かれ、力強いロドリゴの一撃にケイスは思わず頷きそうになったが、そうはいかないのだ。今日はロドリゴではなくマルセルでもなく、サムソンにこそやって来てほしかったのだ。そして、ロドリゴがケイスのやる気を分かっても、サムソンに理解してもらわねばならない。一番彼を拒絶していたのはサムソンなのだから。

「意固地になってるだけなのは分かる。お前さんたち似てるんじゃないのか、頑固者たちめ」

ぐっとかなりの強い力で腕を引っぱられる。痛いほどの力に、ケイスはロドリゴをわずか非難の目でもって見上げる。そこには年長者らしい、歴史を思わせる目があった。一年一年、経験を重ねたものが過ごした日々を思うような、長い間人として生きてきた者しか持てない強い意思。達観したものが帯びる光――。

「本当は分かってるんだ、あいつも。もういい加減に話をつけようじゃないか」

無理だと分かっていながらもケイスを、サムソンを説得しようとするかのごとくひたむきな瞳に出会っては、ケイスも何も言えなか

った。ただ一つ分かったのは、この三十以上も年上のロドリゴはケイスを理解しようとしてくれている、ということだった。

思うと、胸が静かにきゅっと引き締まった。笑いたいような、泣きたいような感覚だ。ケイスは何も言わずに水路から足を上げた。

ロドリゴといくらも歩かないうちに、衆人環視の中に彼らの捜していた人物が見つかった。

「サムソン……」

暮れかかった空の色がサムソンの顔に陰影を投げかけ、その表情を非常に険しいものに見せていた。ロドリゴは黙って歩き出すと、彼らについて来るようにとも言わずにそのうち一つの店に入った。

三人は少なからず注意を引いていたが、すぐに町の者は自分たちの問題について考えるのに戻った。ある者は自宅へ帰ってするべきことに思いを馳せ、またある者は恋人との愛の語らいに戻った。そして、感情の見えない瞳で水路にいた二人と合流した一人の人物を見つめていた青年は、誰もいなくなった水路を眺め続けていた。

その店に人気はなく、三人の男たちだけが客となっていた。寂れた酒場といった様子で、店主の男にも商売をする気概が感じられなかった。お客の彼らに言葉はなく、半分船をこいでまんじりとしていた店主は、店内の気詰まりな様子に気がつき眉を寄せた。

はじめに声をあげたのはケイスだった。

「一つ思うんですけど」

二人の男は彼に視線を合わせもしなかった。

「シェーンから来た騎士に不満があるのは分かりますが……仕事なんですから、割り切ることは出来ないんですか」

自分でも随分と思い切った発言だと分かっていた。言いながら、何か反抗期の子どものような言いがかりにも近いのでは？　と疑問に思ったほどだ。しかし、結局のところ割り切れないのはサムソンの方のはずだ。それは間違いない。彼らには彼らの、サムソンの事情があって、思うところもたくさんあるのだろう。しかしそれをケイスにすべてぶつけるのは間違っているのではと、彼は言うのだ。ケイスはサムソンやチェルヴォの同僚の不満をそっくりそのまま受け取るつもりでいた。しかしそうする必要はないのではないか？そう思うに至った。ケイスにも問題がないとは言い切れないだろう。だからといって彼らの問題を全て受け入れる必要はないのだ。

随分と時間がたってから、ロドリゴの失笑が聞こえた。

「若いの、言うな」

それは面白がるような響きが含まれていた。目が合うと、ロドリゴは駄々をこねる我が子を見るかのような、呆れ半分諦観半分の顔をしている。ふとロドリゴとは親子くらいの年齢の開きがあることにやっと気がついた。彼には自分くらいの年の子どもがいてもおかしくないのだ。他の者よりかはいくらか同情的になってくれるのもそのせいかもしれない。そうだと今、やっと気がついた。ケイスも何かに囚われていたのだろうか。歓迎されない自分という像に。

「もちろん、私をちゃんと受け入れてくれるのであれば有り難いですが、そうはいかないのでしょう。それでも、組織で働くものならばある程度不満にも目をつむるべきではないでしょうか」

ロドリゴがはじめて会った時のように不服そうにしていないのに勇気付けられてか、ケイスの舌は滑らかになっていった。自分も言うようになったな、ともう一人のケイスがどこか冷静に見つめているのが分かる。

青年が見つめる先のサムソンは眉をひそめてむっつりと黙りこんでいる。

「私は指輪探しをやめるつもりはありません」

「おいおい、それじゃあなんのための話し合いだよ」

話し合いをするほどサムソンは話をしていないのだが、それに言及するものは誰もいなかった。しばしの沈黙が訪れ、ロドリゴはごとりと音を立てた店主に視線をやった。彼は気まずそうにしており、この場に店の主がいることなどを忘れきっていた自分と、完全に外界を遮断し続けているケイスとサムソンに視線を戻した。店主は当惑しながらも客にちらちらと視線を送っていたが、それを受け取るものはなくなってしまったためにただ食器を磨くのに専念した。

「お前は何気取りだ？　あァ？」

やっとのことで口を開いたサムソンは低い声で威圧的に言い放った。その鋭い眼光はあやまたず若い青年を射抜いており、彼の不満が爆発したのを物語っていた。

「割り切れと言っておきながら、指輪探しは続けるだあ？　何がしたいんだ、モヤシ小僧」

ケイスは一日に二度も「何がしたいのか」と問われたことにどこかおかしみを覚えた。その心の内が表に出たのだろう、サムソンの眉間のしわが二割増しで深められた。

「サムソンさんも、何がしたいんですか」

「なんだと……」

男の形相が一層凄んだのが分かった。ケイスは今、自分が馬鹿なことを言っていると充分に承知していた。しかし不思議なことに普段はあまり上手く機能しない舌が上手く立ち回っていた。

「指輪は見つからない。私は役立たずで王都に帰るべき存在だ。どうしてそう決めつけるんですか」

はじめて会った時にも言った言葉だった。ケイスは自分を決めつけてほしくなかった。今でも変わらない。

「不満なら吐き出してください。すべては受け入れられなくとも、聞きますから」

会った瞬間から帰れと言ったサムソン。何が彼をそうさせるのか、ケイスは今まで聞こうとはしなかった。ただ帰れという言葉を取り消してほしくてサムソンのいう指輪探しも承諾した。それがたとえ

必要でもそうでなくとも、最初から聞くべきだったのだ。彼の不満の元を。

若者のエメラルドの瞳を真正面から受けとめ取れなかったのは、サムソンだった。苦りきった顔で、瞼を下ろす。目を閉じていてなお険しいままの顔からは色よい返事が読み取れそうにはなかった。ケイスは彼の返事を待っていた。自分の言ったことは間違いだったのではないかと思いながら。

「お前は……何なんだ……？」

うなるような声には、一体何が含まれているのだろうか。サムソンはうつむいて組んだ両手に額をのせた。店主がいささか心配そうに彼ら三人を見ていた。ロドリゴも険しいままの表情だ。

「ねえよ」

「は？」

「ねえんだよ、最初っから。指輪なんて」

「お前、それ――」

ロドリゴが口をはさもうとしたのをサムソンは目で遮って、続けた。

「小僧、お前はどうしようもない阿呆だな」

ケイスには、彼の言葉が何を示すのか見えてこなかった。サムソンの額に集まったしわは消えてはいないし、声からも好意的な感情は読み取りにくい。それでも何かを伝えようとしているのは分かるので、つきあいの長いであろうロドリゴに通訳を求めるように視線をやるが、彼は考えこむように顔をしかめていた。

「そうだな……お前は悪くない」

と、おもむろにサムソンは立ち上がった。

「もういい。指輪捜しはやめろ。ないものを捜そうとするんじゃない」

「それはどういう――」

困惑しきりのケイスの胸倉を掴んで、サムソンは低く一息に言った。

「いいな。普段通りの仕事でもしていろ」
それきり、突きとばすように手を放すと何も言わずに店を後にした。
何が起こったのかまったく理解していない顔でサムソンの出て行った扉を青年は見つめていた。サムソンの表情が和らぐことはなかった。いくらなんでも破顔しろというのは無理だと分かっていたが、あまりにも平素と変わった様子がない。その台詞も意図が汲み取りにくく、ケイスの額には疑問による渓谷が出来ていた。
「あいつもなあ……」
やれやれといった様子でロドリゴが息を吐き出した。彼なら事情が分かるのだろう、ケイスは詰め寄るように問いかけた。
「どういう事ですか」
「普段通りの仕事さ。ま、お前さんはまだこの町での仕事には就いてないようだが――分かるだろう」
「……と、いいますと……？」
「気の回らん男だな。要は、ここで仕事していいって事だよ」
聞くなり、ケイスは瞳をかっと見開いた。それはつまり、かなりの遠まわしではあるが、チェルヴォに居てもいいということだ。シェーンに帰れという前言を撤回するに等しい――ケイスはこの町にいてもいいのだ。言葉は明瞭じゃなく、すぐに帰ってしまったサムソン。あまりにも呆気なく、実感がわかないのだがケイスは――……。
「なんだ、その……飲むか」
提案しておいて、ケイスの返事も聞かずにロドリゴは店主に声をかけた。接客をするはずの店主はすっかり店の隅に身を縮こませていたが、透明人間だったというのにいきなり人間に戻った自分に驚きながら、注文を受けた。店内に彼らが来てからの一部始終を見守っていた店主は、どこかほほ笑ましそうにしていたのだが、誰も彼に注意を払うものはいなかった。
酒の杯が訪れると、彼らはまずは一杯とそれをあおった。ケイス

はアルコールがあまり得意ではなかったが、職場ではアルコールの力が必要になる時があるとよく知っている。加えて今はどこか呆然として現実の世界から少し遠ざかっているので、おそらく蹴飛ばされてもそうと気づくのに十秒くらい時間がかかるだろう。

「お前さんはもしかすると知らんのかな……。おれと、マルセル、それからあいつ……サムソンは、元々王都の騎士だったわけではない」

杯の中、自分の顔が写った液体を見つめていたケイスは緩慢な動作でロドリゴへ瞳を向けた。彼もまたケイスと同じように自身の手にある酒の中を見つめるようにして、杯をゆらした。ケイスはてっきり、チェルヴォにいる自分の仲間は自分と同じく騎士団の一員だと思い込んでいたのだが、違うのか。

「若(わか)……キース・ベンダーはベンダー家の当主だ。わしらは元来、ベンダー家につかえる私兵のようなものだった。何年かは騎士団に所属していた時期もあったが、わしらの主はベンダーの当主」

シェーン王国騎士団の団長キースは貴族だ。私兵がいるくらいはおかしくないが、ケイスはそれを知らなかった。何故自分に伝えられなかったのだろうか、そんなこと考えもしなかった。ただ瞬きを繰り返すケイスを、見もせずにロドリゴは酒を一口喉に運んでから続けた。

「サムソンなんかは、わしより年も近く……若ととりわけ友人のように接していた。だからだろう、こんな事を言ったらあいつは怒るだろうがな、オスティオへ追いやられたとずっとこの任務を不満に思ってた」

『帰って上司に言いな。お前自身が来いってな』

「あ……」

会うなり突きつけられた言葉を思い出した。サムソンの言う上司とはつまり彼にとっての主であるキースのことに他ならず、彼の不機嫌の源はキースに向かっていたのだ。それで、あんなに――。ケイスの中で何かが一つつながった気がした。

ロドリゴの口ぶりから、キースとその私兵でもあり友人でもあり、家族でもある男たちの姿が思い浮かぶような気がした。まだキースが若い時分から、もしかすると幼い頃から彼らは苦楽を共にしてきたのではないか――。

「あいつの気持ちも分かる。だがな、お前には降参だよ」

にやっと笑ったロドリゴは、お酒でわずか顔が赤らんでいた。陽気になっているから、アルコールの力が彼にそう言わせているのではないかと思わせるような怪しい笑みだ。何を応えたらいいのか、青年は言葉をなくした。素直によろこんでいいのだろうか。

「他のやつらは知らんがな、少なくともわしたち二人はもう、お前さんを小僧っ子とは言わないだろうよ」

それはケイスが何よりもほしがった言葉ではなかったが、かなりそれに近いものだった。脳内にはかなりの量の情報が行きかっていたが、ケイスは言語能力を失ったかのように口をつぐんだままだった。アルコールが頭をぼんやりとさせているのかもしれない。そうとは気づかず、青年は杯をあおった。

店の店主が、サービスでもう一杯用意しようと作業しているのを、二人はまだ知らない。

38　スリの少年

チェルヴォの町を歩いていたら、少年に話しかけられた。
「なあ、お前。こないだのヤツだろ」
「はあァ？」
彼女は今、すこぶる機嫌が悪かった。追い出せたとばかり思っていたお節介な騎士が、時間は短いものの毎日のように顔を出してくるのだ。フランベがケイスの好青年であるところを気に入り、出入りを許しているのだからうっとうしい事この上ない。
ケイスは今、どうやら新しい仕事場に居るようで忙しくしているらしいのだが、時間が出来るとふらっとシュガーローゼの元にやって来る。長い時にはフランベがお茶を出すくらいには居着くが、短い時は二三言葉を残して去ってゆく。会話を交わしたりはしない。常にケイスの一方的な話ばかりだからだ。一時は何か考え事をしている時もあったが、それもしばらくすればさっぱりとした表情に戻っていた。
やっとシュガーローゼは体のだるさが抜けて、こうして外出出来るようになったのだが、まさか誰かに話かけられるとは。嫌な世の中になったものだ。
「なんだお前、機嫌悪いな」
笑いながら少年はシュガーローゼに近づいてくる。わずらわしいぐいと、少年が目の前に迫った時、彼女は何かの違和感に気づいた。
伸び放題の髪はぼさぼさで、顔の半分近くを覆っているようだ。身なりはあまりよくはなく、薄汚れて土煙をかぶったような色をしている。長い髪の間からのぞく瞳は、つり上がり気味だが、半眼に伏せられていた。
何だろう、この目は。琥珀色の瞳はシュガーローゼを映していたが、違う何かを見ているような気がする。

まさか、死神少女だとばれた？　シュガーローゼが思わず身をかばうようにして後退ると、少年は追うように迫ってきた。追いかけっこをはじめようとした少年少女に、第三者の声がかかったのはその時だ。

「あ、お前！　この間の！」

どうやらこの間会った人間に再会したのは、シュガーローゼだけではないようだ。二人の数メートル先には、男が一人立っていた。少年の方を見て、怒りに顔を赤くしている。少年は、あの男に何かをしでかしたに違いない。

「やべっ」

と、少年はシュガーローゼの腕を掴んで走りだしたではないか。

「ちょっと、何すんだよ」

いつか見たような光景だ。腕を引く相手はこの少年ではなかったが。振り払おうにも、背後に男が追いかけてきて、何だか立ち止まるのは問題のようだった。

「こっちだ」

少年は無理矢理に少女を連れ去ると、追いかけてくる男を鮮やかに撒いていた。

息を整えると、シュガーローゼはしっかりと問いただす事にした。

「どういうつもりでわたしを引き回したの」

少年を改めて観察する。年はシュガーローゼと同じか少し上くらいだろう。背はもちろん小柄なシュガーローゼより少し高いが、ケイスの肩ぐらいまでしかないだろう。まだまだ幼さの目立つ顔立ちだが、どこか世の中の苦味を味わった事のある眼差しをしている。

つり目の瞳は琥珀色。焦げ茶色の髪は手入れの行き届いていないぼさぼさした頭で、跳ね回る毛先は肩につきそうなくらいに長い。
「あんた、この間のスリ……！　人を突き飛ばしておいて、よく声がかけられるわね？」
シュガーローゼは今更思い出していた。声をかけられてもすぐには分からなかったが、似たシチュエーションに思い出したのだ。そういえば、あのスリの少年も焦げ茶の髪が長かった。
そして、この少年はスリだっただけではなく、シュガーローゼを水路へと突き飛ばした張本人でもある。恨みがむくむくと蘇り、この少年のせいで何もかもが台無しにされた気分が一気に高まる。恨み節を投げつけるように睨みつける。
「お前、町の子じゃないだろ。見ない顔だ」
少年は質問に答えない。問いに答えられないのは気持ちのいいものじゃない。シュガーローゼはひくりと顔をひきつらせる。
「シェーンから来た騎士と一緒にいたな。お前、あの騎士と知り合いなのか？」
「何でそんな事聞くのよ」
切り返され、少年はきょとんとしたようだ。だって興味があったんだと言わんばかりに続ける。
「そりゃ、シェーンの騎士団員だぜ？　いくら他国だからってその高名がここまで来ないわけないじゃん。かっこいいって」
力説するような台詞だが、シュガーローゼはどうでもいいと思っていた。その上ケイスがかっこよかったら、世界中の人間はみなかっこいい事になるだろうくらいの認識だ。
だが、ふとシュガーローゼの頭に疑問がよぎる。
「……あいつ、騎士団の服なんて着てなかったよ」
それなのに何故、ケイスが騎士だと分かったのか。
「あの兄さんの事、“騎士団員”って呼んだでしょ、お前が」
お前お前と腹のたつ呼び方をするやつだ。シュガーローゼは名のるつもりはないが苛立っていた。

「でも、シェーンの騎士がいるって事は、やっぱり最近やばいって事だよな」

にやり、少年は笑った。物騒な事になりそうだというのに笑うのだ。シュガーローゼとしては、物騒の行き着く先の戦争を笑って歓迎する気にはなれない。戦争の体験はまだないが、どうせロクな事にはならない。

「だったら何」

「オレも急がないとなと思って」

ほとんどつぶやきに近かった。少年の考えなど知らないが、何が言いたいのかと訝しく思う。

「レフーー！」

突然、近くない場所から声がした。まだ子どもの声だ。誰を呼んでいたかはすぐに分かる。シュガーローゼの隣りに居る少年の元に、彼らはやって来たのだから。

十代半ばか後半くらいの少年が四人。皆慌てたような、困惑したような、怒っているような顔を並べている。

「レフ、やべえよ。アルが捕まった」

「何だって?!」

飛び上がるように現われた少年たちに詰め寄る少年――レフ。長い髪の間から、ぎらつくような琥珀の瞳を光らせた。

「あれ、誰だこの子」

少年たちの一人が、シュガーローゼに注意を払ったがすぐにレフの言葉でかき消される。

「誰にだよ?」

「メルカトーレだ！　例のあれ、盗みに行こうって言ってだろ、アルが一人で行っちまったんだ。あのごうつくばりのメルカトーレ、役人でもねぇのにアルを捕まえて行った」

「……やべえな」

金持ちの商人メルカトーレは、悪い噂のたえない男だった。特に、私刑（リンチ）の噂には真実味があった。捕まったレフの仲間も、もしかした

ら拷問のような私刑を受けるかもしれない。
すっかり彼らだけの世界に入っているスリ（レフ）の少年を見て、シュガーローゼは何も言わずに帰ろうという気になった。彼らには何の世話にもなっていないし、むしろレフには迷惑をこうむった。激怒して賠償金を要求しないだけ有り難く思えと黙って踵を返そうと、した。
「待ちなよ」
腕はがっしりと捕まれた。しまった。最悪だ。こちらに巻き込まれる意思がなくとも、あちらにはシュガーローゼを巻き込むつもりがあったのか。今までにもそんな事はあったが、今回ばかりは本当に面倒事のようだから、すみやかに退場したいシュガーローゼなのだが。
「お前、町の人間じゃないよな」
少しだけ顔を知っているレフ以外にも、見知らぬ少年たちの顔が一斉にこちらを向き、シュガーローゼはわずかたじろいだ。これは、もう、本当にロクな事にならない。
「……違うって、言ったら？」
意味がないと知りながらも、言葉遊びのようなものをしてしまう。彼が言いたいのはそんな事ではないだろう。
「オレたちは町の事なら全部知ってんだぜ？　嘘は見苦しいぞ」
レフの企みが分かったのか、にやつく周りの少年。分からない顔をする者も中には居るが。
「ちょっと……そうだな。アルバイトしないか？」
微笑んでいるはずのレフの琥珀の瞳はどこか据わっていた。

39　不良少年たち

冬の季節には、町を歩く人間は減るものだ。もっと北部の地域と比べればまだ過ごしやすいオスティオの冬でも、町の人気をなくすのに手をかしていた。朝市に盛んになるチェルヴォも、昼も過ぎて大通りから道を逸れれば人の姿は減っていくものだ。

誰かに助けてもらおうとは思っていなかったが、シュガーローゼはどんどんと人気のないところへと向かう少年たちにうんざりしていた。

少年たちと歩きながら、少女は自分の行動に苛立ってもいた。“死神のキス”を使うつもりはなかった。シュガーローゼは無差別殺人犯ではない。自分の命が危うくなったら、唇を寄せるだけだ。今回の事は、どうも命の危険まではなさそうだ。そう、思いたい。

「せめて殴る。せめて叩く……」

ぶつぶつと口の中で呪詛を吐きつつ、シュガーローゼは少年たちにつき合っていた。アルという少年の救出作戦だ。

ネコ一匹通らない、ほとんど町の隅のような場所に来て、作戦会議が始まった。

彼女が作戦に参加するにあたって、少年たちの名前をレフも含め紹介されたものだが、さすがに第一印象も再会した時もインパクト大の最悪な出会いをしたレフは覚えているが、後はてんで覚えていなかった。

リーダー格のレフ、捕まったアル、ベン、マッテオにキオスク、ヨブ。一気に言われても困る。シュガーローゼは元々他人と長くともに過ごすつもりがない。短いつき合いに名前は不要。覚えようともしなかったし、おそらく一日では覚えられなかっただろう。

ベンという少年がシュガーローゼが作戦に加わる事を気にしていたが、他の少年たちは彼女が仲間の救出に助力するのは当然と見なしていた。仲間を前にしては、その他の人間などサポート役でしか

ないのだろう。これだから、群れというやつは嫌いだ。だが、この五人の少年たちに囲まれては無理矢理にでも逃げられない。彼らはただシュガーローゼに一つ作戦に参加してほしいだけで、殺そうとしているのではない。だからシュガーローゼは強く出られなかった。今までにあまりない事だからだ。シュガーローゼに詰め寄る人間は、己が欲か、シュガーローゼを殺すためだけに向かってくる。

死神である彼女に、頼み事をする人間なんて、数えるほどしかいなかったのだ。

「それじゃ、作戦の通りにしろよな」

指をさしてくるのはやはりレフだ。押しつけるような物言いが気に入らないが、ここまで来てしまったものは仕方がない。少年たちとは途中で別々に行動するとはいえ、彼らはシュガーローゼの事をあてにしている。少年たちの消えた後に逃げ出す真似はしたくない。

――いや、逃げてもいいかな

どうしても無理だと逃げる事も出来たはずだ。何がシュガーローゼを動かすのだろう。慌てた少年たちの様子か、アルという少年がリンチされるからか。

分からない。

迷ったままのシュガーローゼだから、これから演じる役は大根役者も笑ってしまうものになるだろう。

そうしているうちに、彼らはまた移動を始める。

半分うなだれかけていたシュガーローゼだが、作戦はどんどんと進みはじめていた。

商人メルカトーレの偵察に行っていた少年（マッテオ）が「大丈夫だ、アイツは店に居る」と報告する。よし、とリーダーは頷いた。

「頼むぜ、バイト」

何故かここでのシュガーローゼの呼び名は“バイト”で定着してしまった。レフは建前上シュガーローゼに報酬を出すから作戦に協力してくれ、と言ってある。アルバイトみたいなものだと。名前を問うてもシュガーローゼが答えないものだから、レフは“バイト”

と呼ぶ事にしたのだ。不本意だったがもはや訂正もめんどくさい、とシュガーローゼは諦めていた。

「やっぱり後で殴らせてね」

嫌味な瞳で片頬を上げると、シュガーローゼは少年たちから離れて行った。

彼女に与えられた任務はただ一つ。商人のメルカトーレを呼び出す客になるだけだった。あまりに本人が出てこないのであれば、かなりの演技時間を必要とするが、最初だけは台詞が用意してあるが後はアドリブだという。レフたち少年団も無茶振りをしてくれる。

メルカトーレの店まで歩くと、背後にはすっかり少年たちの気配がなくなった。遠ざかったためでもあるが、彼らも動き出したのだろう。

店の前に立つと、今更ながらにげんなりした。

さあ、シュガーローゼのミッションが始まる。

40　ミッション

何も、奇妙な事はしなくていいのだそう。ただ金持ちであり良き取り引き相手となると分かれば、彼は安心する。

「……ごめんください」

声が小さなものでも、店員はすぐさまシュガーローゼの元へと飛んできた。

「何かお探しで？」

レフたちから伝えられた人相から、彼はメルカトーレではないと判断する。

「あ、えっと」

なにしろこんな事は初めてだ。こほんとシュガーローゼは咳をする。

「わたし、この店で一番高価なものを見たいの。持って来てくれる？」

そう言えと言われていた。自分が金持ちである事を主張出来るし、店の高額な品物を店主の許可なしには運び出せないだろうから、シュガーローゼの前にメルカトーレが現われない訳にはいかない。

「少々お待ちください」

にっこりと営業スマイルをはりつけて男は引っ込んだ。代わりに他の若い店員が現われる。お客さまをお待たせする間に退屈させないようにという気づかいかもしれないが、お目付け役といったところだろう。

「お客さまお連れの方はどちらで？」

「いつも使用人が一緒なのは肩がこるから、後から来るよ」

これもレフの指示だ。高額商品を要求しておいて、子ども一人の客というのはおかしいだろう。幸いにもシュガーローゼの着ている服は、貴賤を問わずに着られる素材のもの。身なりからすぐに怪しまれる事はなかったようだ。

これで、商品が即出てきて早くお買い上げください、なんて事になったらどうしたらいいのか。撤退の合図は決めてあるが、早くそれを耳にしたい。

「これはこれは。新規のお客さまでよろしいですね？」

頭の中にぼんやり描いたメルカトーレの人相書きと、照合する。店主を呼んでこいと言ったようなものだから、間違いはないだろう。

「店主さんですか、こんにちは。わたし、この町（チェルヴォ）に来るのは初めてだけど、ここがいいお店って聞いたから」

メルカトーレは、横にも縦にも伸びた身長をしている。太った人物特有の年齢不詳さをかもし出しているが、もう中年なのは間違いない。笑いじわが商人ゆえと思わせるような、わざとらしい笑顔はまさに営業用だ。

「それはそれは。ありがとうございます。それで、何をお探しですかな」

「この店で一番高いもの」

シュガーローゼに許された言葉は、この一点ばりだ。まだメルカトーレは何も手にしていないが、早く商品を持ってきてほしいような、ほしくないような矛盾した気持ちになる。

今頃レフたちはどうしているだろうか。万一の時に備えて、少年（ヨブ）が一人彼らのアジトで待機しているらしい。レフはもちろん率先して救出すべき少年の元へ行く。見張りに一人、お供に一人（キオスク）をつけて。残りの一人（ベン）の役割も見張りに近いが、アルが助け出されたと分かればすぐさまシュガーローゼに合図する係になっている。

願わくば、アルという少年が無事に救出されるといい。そして早く自分をここから飛び出させてくれ。シュガーローゼはひたすら作戦の成功を願った。

「ですがお客さま、一見さんがいきなり高級品をご所望とは、こちらといたしましてはどうして初めて訪れた場所で……と思ってしまうのですが」

「ここがとても良い店と聞いたからです」

何故そんな事を聞くのか、シュガーローゼは内心汗をかきまくりだった。冷静に考えてみれば、彼の言い分ももっともだが、今は冷静になどならずにもっと目先の利益に我を失ってほしかった。

「それは、どちらの方ですか？」

メルカトーレの脂肪に埋まった小さな目が怪しく光った気がした。疑われているのだろうか。シュガーローゼは焦る。こんな事はレフの台本にはなかった。どうしたらいい。

「お、王都です。シェーンの友人に聞きました」

オスティオで、若者が憧れるといったらカロゼッロかシェーンだという。シュガーローゼの念頭にそんなものはなかった。ただ出てきた国の名前が大国に入るから、小さな国の名よりはましだろうと思ったのだ。

「シェーンの。ええ、王都には買い付けによく行きますねぇ。この間はちょうど復活祭の時でした」

上手い具合にメルカトーレの気持ちは思い出の日々に向かっていた。シュガーローゼはやはり心の中で安堵のため息をつく。何とかなる、かもしれない。

「それで、お嬢さんはシェーンからはるばる？」

「は……はい。旅行で」

これはレフに言われた通りだ。金持ちしか旅行はしない訳ではないが、貧乏であれば旅行などする余裕はない。これもメルカトーレにシュガーローゼが裕福な家の娘と思わせるための大事な設定の一つだった。ただ、これ以上はもう設定は覚えきれない気はするが。

「おやおや。それはいいですねえ。これからはどちらに？」

「……あ、聖都に向かおうかと」

つい、カルツのついた嘘が口を出る。巡礼地にも旅行者は足を運ぶ。たとえ巡礼のためではなくとも。なくはない嘘だ。これもアドリブになってしまったが、上手く交わせただろう。

どん、と小さくない物音がしたのはその時だ。シュガーローゼの心臓はかつてないほど飛び上がった。店の奥からの音だ。

「何だ？」
レフたちが、暴れているのではないか。失敗して誰かに見つかったのでは。
「見てきます」
店員が一人、出て行こうとしたのでシュガーローゼは何故か引き止めなくては、という気になった。
「あ、やっぱり、その高い商品って二人がかりで運ばないと持てなかったりするかな？　ねえ？」
店員を、捕まえるように瞳を向ける。あまりにも不自然。しかし、都合がいい事に店主は彼を呼び止めた。
「あんた、お客さまに質問されたらちゃんと答えなさい」
「はい。失礼しました。うちで扱う商品は、ほとんどが一人で持ち運び出来るものばかりですよ」
物音はもうしてこなかった。作戦は成功したのだと思っていいのだろうか。合図にまでまだ時間がかかるだろう。
「そ、うなんですか。なんだか高価なものって見た目も大きい気がして」
はは、とシュガーローゼは柄にもなく笑い声を上げた。ただし乾いた笑いでとても楽しそうには聞こえなかったが。
「何をおっしゃりますか。高価なものほど小さいものですよ。例えば宝石なんかは、そりゃあ大きさに値段が比例しますけれどね、やはり小さいでしょう」
「はあ……」
いつの間にやら、メルカトーレの商売話が始まっていたようだ。いかにもこれからまだまだ話は続きますよといった口ぶりに、少女は困惑しつつも首をただ振る。
もしかしたら、足止めに成功しているのかもしれない。この商人の話は、長い。上手くいっているのかも。
シュガーローゼがほとんど聞き流しているのにも構わず、メルカトーレはいかに小さなものに価値を凝縮させる事が素晴らしいかを

力説していた。
突如、ごがん、ぎゃごん、と大きな金属製の物が衝突したような音が、辺りに響きわたった。
何事かと思うような音は、普段はもっとおしとやかな音で聞き慣れている、時を告げる鐘の音だった。あまりに乱暴な鳴らし方だ、これでは鐘が壊れてしまうのではと心配になる。
「あ、ああーっ！　あたくし、時間になったら帰らなくちゃならないのだわ！」
まったくもって棒読みの台詞に、店の者たちがどんな顔をしたか。確認する暇もなくシュガーローゼは店を飛び出した。「お客さま？！」と叫び声が聞こえたが気にしない。今は早く、どこかへと逃げ出すのが先決。出来れば人気のない場所へと。
このままフランベの待つ宿へ行くべきか。考えておいて、それはまずいと首を振る。今すぐ行く先というのはシュガーローゼの身元が知られやすい事になるだろう。あまり面倒事に彼女を巻き込むたくはない。
路地に入って行き先を決めかねていると、周囲に気を回しながらの少年が一人、離れた場所から顔を出す。
「こっち」
場所も離れているというのに小さな声で手招きすると、少年（ベン）は壁の向こうに消えた。彼を追う義理はないのだが、最後までつき合おうとシュガーローゼは後を追った。

41　アジト

たどり着いた場所は、ひどく狭い廃墟と化した劇場跡の舞台裏部分だった。かつてはもっと広い場所まで陣どって、半円形の劇場をほこっていた場所だが、今は見る影もなくそのほとんどがとり壊され一部は他所の家、一部は瓦礫の山となっていた。

その隙間をぬってたどり着く事の出来る屋根の下に、レフたち少年団は待機していた。

アル少年は、結果的にはひどい怪我は受けていなかった。あちこちにアザをつけられて、笑うのも大変そうだが、彼は助けに来てくれた仲間たちに向かって感謝の意を表していた。

「みんな、悪かった。ありがとう」

目当てのものもちゃんと手に入れた。あいつ、全然気がついていなかったよ。

本当に無事でよかった。

心配したぞ、本気で。

――繰り広げられるほほ笑ましい、友情の輪。

良かったね、はいはいおめでとう。シュガーローゼは内心面白くない。あんなに冷や汗かいたというのに、大した事がなさそうな事件だったではないか。元より報酬など期待していないし、救出対象が無事と分かればもうシュガーローゼがここにとどまる意味はない。

そもそもシュガーローゼの行動に意味はなかったのではないか。命の危険もなかったようだし、自分は何故ここまでやってしまったのか。おそらく、敵意のない人間数人にこんなに接近されたのは久しぶりの事で、それも年も近いというので、どういう行動を取ったらいいのか分からなくなってしまったのだろう。だが今は分かる。今度こそ、沈黙のままに消えよう。冷えた気持ちでシュガーローゼは足を動かすが――目の前に落ちた影に動けなくなる。

「君も、ありがとう。レフから聞いた。協力してくれたって」

助け出されたアル少年の笑みは、とても真摯なものであたたかみがあった。優しくさえある。口の周りは切れているしアザも青いものがあっても、元々の顔が悪くないものだとよく分かる。背も高いし、アザだらけでも女の子にもてそうな顔立ちがよく分かる。朗らかに自覚のないまま相手を魅了するような表情で、握手まで差し出してくる。

それを受け取る気にはなれないが、少年の感謝の気持ちはほんの少しだけ、シュガーローゼにも分かった。

「……大した事してない」

「ヒュー、バイト謙虚～～」

そっぽを向くと、何故か野次のようなものが飛ぶ。謙遜したわけじゃなく、ただ単にそう思っただけだったのだが。ともかくこれで、挨拶もすんだろうしもうシュガーローゼのやる事はない。今度こそこの居心地の悪い場所から帰らせてもらおう。

いつまでも所在のないアルの右手は、相手がいないと分かるとやっとおろされる。ただ言葉でシュガーローゼをつなぎ止めるのに変更したようだが。

「君、名前は何ていうの？　レフたちに聞いても“バイト”ってしか言ってくれないし」

気になるんだ、なんて続けられてしまえばちょっと夢見がちな少女は胸をときめかせたりするのかもしれない。何せ相手は怪我を負いながらもかっこよさを失わない、モテる男子だ（推定）。勘違いしたくなる乙女がいても仕方がないがシュガーローゼには関係ない。

「……えっと」

素直に名のる気になれないのはいつもの事だ。だが、今回ばかりはこのまま黙って去るのは難しいのではないだろうか。シュガーローゼも、たまには空気くらい読む。読まなくていいとは思うのだが、どうも帰るタイミングを失ったようで、名のって消えるのが一番いいのではないかと思えた。シュガーローゼの名前はいつか自分でつけたもので、出し惜しみしてまで隠す大事なものではない。

「アル＝バイトです」
レフがどこか遠い異国の名前風に言わなかったら、シュガーローゼは口を開いていたのだが。
「なんだそれ、レフはほんとの名前知ってんのか？」
少女が目をすがめたので、嘘と分かっていながらもレフをからかうようにアルは笑う。
「そういえば、アルも“アル”だね」
アル少年の“アル”は“アルバート”の愛称だが、異国のとある言語では定冠詞に“アル”がつくという話だ。音が同じだと仲間の一人（キオスクあたり）がにやりとする。
「お揃いだね」
微笑まれても、
「いや、レフの嘘だから」
と否定せざるを得ない。もちろん分かって言っているのだろう、いたずらっぽいアルの瞳とかち合う。
「でも、何か嬉しいな。ぼくらの周りの女の子って、あんまりこういう事好きじゃないみたいだから」
「はあ」
商人メルカトーレの要領を得ない演説を聞いている時のような声が出てしまった。あの時のように聞き流すつもりはないが、アルは何が言いたいのか。
「勇敢な女の子って、かっこいいって言いたいんだよ」
それでもシュガーローゼにはまだ分からない。というより話が飛んでいるような気がするのだが。
一瞬だけ、アルの瞳が獲物を狙う猛禽の目にも、我が子を慈しむ親のような目にも見えた。あっという間に近づいた、それ。
頬に、かすめた感覚。
シュガーローゼは戦慄した。
今、アルはシュガーローゼにキスをした。頬に軽く、ほんの少し触れる程度。家族や友人の間でもやる、友愛のキス。ただの挨拶。

アクアマリンの瞳はゆらぎながら大きく見開いた。
「アルお前〜〜」
半ば呆れながらもからかいの声。ヨブだったりするが、シュガーローゼの目には入らない。
――今、何をしたの。こいつ。
「挨拶じゃん」
アルはどうって事のない素振りをしている。
信じられなかった。かつて死神少女（シュガーローゼ）に自らキスをした人は片手で足りるほどしかおらず、両親を除けばたった二人しかいない。
今ではもう、他人と極力関わらないようにしていたから、それももうかなりの昔の話だ。初めて“死神のキス”が通じない一人目の男に出会った時もほとんど彼からだったが、あの時はそれどころじゃなかった。そして今はそんな過去の事は関係がない。
人がシュガーローゼに触れるなんて。頬をくっつけるようにして。そんな事って、あるのだろうか。あまりに瞬間的過ぎて分からなくなる。これは夢か、幻か。
震えそうになるのをこらえながら、ただ唇に触れようとしたのでなくて良かったと、死神は思った。
危なかったのだ。
商人の私刑対象にされるくらいだ、素行はどうだか知らないが罪のない人間を殺すところだった。シュガーローゼを殺そうとなどしていない、エゴのために利用しようとも考えていないはずのアルを、危うく死なせるところだった！
あと数センチ離れていたら……。
思うだけでも身の毛がよだつ。
何て存在だ。自分は。今までシュガーローゼに下心もなしに好意を寄せてくる者などものの数もいなかった。ケイスは置いておく。彼はキスがきかないのだから。
ただの親切だけでは、あまり頬のキスもしない。かつて出会った博愛主義者たちは、それでもシュガーローゼの迷惑そうな顔にキス

をしようとは思わなかったのだ。
なんて、危ない。なんて存在なのだろう、自分は。
なんて――……。
「……おい、バイト？」
アルのキスに動揺したにしては様子のおかしいシュガーローゼに、レフが訝しく思った。その肩に触れようとして、少年が手を上げた時だ。
「おい、お前たち！　またこんなところで集まってやがんのか！」
厳しく取り締まるような男の声。
少年たちは顔を見合わせるとぱっと駆けて行った。銘々別の場所に散って、シュガーローゼは近くに居たレフに手をひかれる形になる。
またか。ほんの少しだけ受容しようとしている自分に気づき、苛々としながらも、駆けていた。

少年たちのアジトにはよく、ああやって町の警備隊の人間が顔を出すのだという。頻繁ではないが初めてではない。そんなような事を走りながらもレフは言った。
シュガーローゼはほとんど右の耳から聞いた言葉を左の耳からそのまま吐き出していた。この日は慣れない事をやらされた。大人数の中にも混じり、緊張の連続だった。走るのも疲労の蓄積になってゆく。
「……まだ、走るの？」
息がきれてきた。レフはまったく頓着していなかったが、シュガーローゼは疲れているのだ。辺りに視線を走らせ、そろそろ休んで

も大丈夫だろうと口にしようとしたが、少し遅かった。
音をたてて、シュガーローゼが転んだ。足がもつれたのだ。
その拍子に、野良猫にぶつかった少女は、今まで猫が視界に入らなかった事をひどく後悔する事になる。
ふぎゃっと悲鳴を上げて猫は倒れた。
一体どんな運命のいたずらか。いずれ分かる事だとしても、こんなに早くとは。
一匹の野良猫に、シュガーローゼが触れたのは唇。手や頬でもよかったのに、唇だ。唇を持たない猫だったが、触れたのもまた、幸か不幸か、口。
四肢を天に上げて、猫はうめいて果てた。
死神が何をしたか、明白だった。
息をしなくなった猫を、静かにレフは見下ろしていた。その気配だけは分かる。彼がどんな顔をしているか見たくなんかなくて、シュガーローゼは地面にうずくまったままだった。
どうしてこんなタイミングで野良猫は通りがかったのだ。あと一歩遅ければ、こんな事には。
“死神のキス”を与えているところを人に見られてしまった。それはこの場所からの離脱の必要性を意味する。早く、早く逃げなければ。
石を投げられる前に。悪魔と罵られる前に。
野良猫が偶然倒れたなんて思うおめでたいやつは、どこにも居ない。
顔は上げないまま、ゆっくりと半身を起こすとシュガーローゼは踵を上げる。レフがショックを受けて動かないうちに、早く！
「お前……まさか」
少女の体がびくりと反応する。これじゃあ正体を言っているようなものだ。這うようにせり上がる悪寒は、シュガーローゼの足を動かした。
立ち上がって、駆ける。勢いはつけたはずだ。こんなところ一秒

だって長く居たくなかったから。それなのに、いつかのように腕は背後に引っ張られる。

――嘘でしょ

その手は震えていた。

「まさか、本当にそうなのか……？」

声からだけじゃ、感情は読めない。どうして彼は、シュガーローゼを逃がしてくれないのか。振り払うつもりで体をひねれば、ほんの刹那、少年の顔が見えた。

すっと胸の奥が冷えていくような空気。琥珀の瞳は、まったくもって感情が分からないものだった。

「……死神少女」

それでいて、まるで深淵のように深く暗い闇が広がっていた。

震える手をした少年は、長い前髪の下、頬を歪めて笑っていた。

42　探し者

少年は聞いた事があった。さまざまな噂のうちの一つ。それでも彼が聞くに足りると判断したのは、『生けるものに死を与える存在』だったからだ――。

王都には、死神のような存在が居るという。人間の子どもと変わらない見た目をしておきながら、その唇に宿るは死神の力。生命を奪う死のかおり。

死神少女の話は、ただ唇が触れただけで相手を死なせる事が出来るという。

少年の眼前で繰り広げられた光景は、ただの偶然では済まされないものだった。たとえそれが天文学的数字のはじき出した偶然だったとしても、もう焼きついたそれは忘れられるはずもなかった。

たとえどんな小さな可能性でもすがりつくつもりだ。少年は決めていたのだ。もう、可能性は現実のものとなった。瑣末な事はなにも見えない。

「ずっと探してた」

まるで運命の人を見つけたとでもいうような言葉だが、レフの瞳にはシュガーローゼが見えてはいなかった。

彼は、死神を見ている。

レフに感じていた違和感。シュガーローゼは気づいた。この少年は心の底から笑ってなんかいなかった。ここに立っているのに、何も見ていない。もっと遠くの、何か目的のために瞳を開いている。

ぐっと掴まれた腕が痛い。

「……あんたもか」

少年は、“死神の少女”を探していたのだ。唇をつけた相手に必ず死をもたらす娘だ。誰かを脅したり殺したりしたい時には、最適だ。その存在を知って利用しようとする者はこれまでもたくさん居た。そのうちの一人だったのだ、レフは。普段あまり若い――この

場合幼いうちに入るかもしれないが――人物にその“死神のキス”を貸してくれと言われた事はなかったから、油断してしまった。
人間なんて。子どもだったとしても、関わるべきではなかったのに。
体の真ん中がわずかに熱くなった。シュガーローゼは掴む少年の腕を弾き飛ばした。
「……最悪」
このレフも、自分も。どうしてずっと部屋にこもっていなかったんだろう。どうして。
「あんたたち、みんな、最悪」
一番最悪なのは自分だ。なんで、どうして、シュガーローゼは生きているのだろう。
「うるせえ」
何故かレフはしわを深く刻んだ顔で少女を睨みつけている。何故、シュガーローゼが責められるような瞳で見られなきゃならないのだろうか。あの琥珀の瞳には、どこか暗いものがあったけれど、含むものなどないと思っていたのに。
「オレには、お前が必要なんだよ」
死神の少女の、必殺の力が。
そんな言葉はシュガーローゼがこの世で最も嫌うもの。何度そう言われて、彼女自身を軽んじられてきただろう。そこにシュガーローゼ自身は居ない。どこにも。
居心地は悪く、既に出来上がったコミュニティの中で、羊の群れに迷いこんだ猿のような気持ちだった。それでも、レフと、その仲間たちを心の底から拒絶する事は出来なかったのに。
『ダメだよ』
あの時。ほんの一瞬、かすかに感じたものを、一瞬よぎった気がしたから。つき合ったのに。
――また、選択を間違えた
何度間違えれば気がすむんだろう。どうしようもない自分。今度

こそ間違えないようにとしていたのに。何もかも、間違えた。
決別だ。この世界のすべてと。
アクアマリンの瞳に波打つ感情が見えて、少年は小さく目を見開いた。
今まで彼女はあまり感情をゆらがす事がなかったから。それでも、レフには彼女を睨みつけ続けなければならない理由がある。どうしても、彼女を捕まえて、その能力を借りなければ。
琥珀の瞳が、濃くなったように見えた。血ぬられた色。少年の目には過去がよみがえる。
「たった一人だ。アイツだけは殺さないといけない」
この年若い少年が、ここまで追いつめられるほどの余程の事があったのだろう。
たとえそれが同情に足りるとしても、どうしてシュガーローゼがつき合わなければならない？
「……自分でやりな。それとも今、ここであんたに“キス”をくれてやろうか？」
恫喝（どうかつ）は、確かに少年を怯ませた。アクアマリンの瞳が固く、琥珀を睥睨する。お互いにお互いが相手をこの場所に縛りつけようとするかのようにして、一歩も動かない。
――こいつ、どうしてくれよう
死神の少女は喉の奥で低くうなった。
もう、彼はシュガーローゼの中で他の有象無象と代わらなくなった。死んでも構わない、その他大勢の中に埋没してゆく。彼自身も、彼の友人たちも。灰色のかたまりの中に溶けてゆく。
きゅっと両の拳を握る。この拳で、少年の頭をつぶしてやりたい。何なのだ、この子どもは。消えてしまえ。
真っ黒な炎が胸に満ちる。
こんな、人間。
「レフ！」
ぶつり、と緊迫の糸をたち切ったのは少年を呼ぶ声。

「もう大丈夫みたいだ……って、何してんの二人とも」
顔を出したのはアルとキオスクだった。
「別に」
表情をかたくした二人の少年と少女を見て、やってきた少年二人は顔を見合わせた。何かがあったのは明白だ。どちらの顔つきもとりつくしまのないのがよく分かるが、仲間であるレフの考えは分かりそうな気がした。深い事情は知らないが、レフが危険な事に自ら足をつっこむのには明確な理由があるのだと、アルもキオスクも知っている。
気まずい空気に、キオスクは困惑していたが、アルは考えこむようにレフを凝視していた。
もうシュガーローゼは迷わなかった。沈黙の最中、何も言わずに飛び出した。
「あっ、ちょっと……！」
アルの声も彼女には届かない。角を曲がったところで、シュガーローゼ得意の空間転位魔術を使う。あっという間に場所を移動した。少年たちは誰も彼女に追いつけないだろう。誰も。

短い間でたどり着いた先は、フランベのとった宿だった。折り悪く、フランベが居る目の前にシュガーローゼは現われてしまう。
だがもう、どうでもよかった。こんな町、こんなところには居たくない。カイネ村に戻るというつもりはなかったが、町から逃げ出したかった。
目を丸くしたフランベは、しかしシュガーローゼの様子がおかしいのに気がついていた。何かがあったのだとすぐに察する。寄りそ

うように近づくと、うつむいたままの少女が身動ぎ一つしないのでそっと肩に手をのせる。

「ローゼちゃん」

問うようではなく、安心させるように。フランベはゆっくりと小柄な少女の体を包みこんだ。

ぎゅっと、あたたかい感覚がシュガーローゼを襲う。それはとても怖いものだった。いつか離れてゆくものだ。いつか冷えてゆくのだ。怖い。このぬくもりが、恐ろしい。

今すぐ離れなければならなかったのだが、シュガーローゼにはそんな気力もなかった。こらえきれずに座りこみたかった。泣いてわめいて、世界のすべてに呪いの言葉を吐き、暴れ回って誰彼かまわず罵りたかった。拳が壊れるまで、何かを叩いて、それから自分の頭に鈍器を振り下ろしたい。

こわい。

少年の琥珀の瞳。夜道を這ってでも進もうとする人間の歪んだ決意。負のエネルギーで形作られた彼の世界が垣間見えた気がした。

シュガーローゼに向けられたものが、自身の許せないもののために利用しようという、眼差し。

あんな、自分と代わらない年頃の子どもが、だ。あんなに強く人を憎めるとは。そのために少女を利用しても構わないと言う。

その事実も、標的が自分である事も、もううんざりだ。最悪以外の何でもない。

こわい。

こうして逃げこんだ先にフランベが居た事が。何故、この人は何も言わないのだろう。何故、こうもあたたかいのだろう。

すぐに失われるものをつきつけてくるなんて。

体が、バラバラになりそうだ。

でも、ただ一つこれだけは言える。

「ここを出たい……町を出たい」

少女は、優しく抱きこむ女性からすっと離れて言った。

43　レフ・シーヴァ

普通、貴族でない一般庶民や農民は名字を持たない。名のる時には自身の出身地を付属させる事がある。レフの生まれた村は、もうない。だから、名のる時にはただの“レフ”で済ましている。

だがもし、あの男を殺す事が出来たなら、また村のあった場所に戻って、村の名前を名のれる日が来るのではないか。そう思っている。

もうレフの記憶の中にしかない、無二の故郷、シーヴァ。シーヴァ村のレフ。レフ・シーヴァ。名のる事のない名前。名のる事の出来ない故郷。

考えるだけで胸が燃えるように熱く、苦しい。息が出来ないくらいに。

故郷に花を。いつか、いつの日か、そのために。

あいつを、殺さなければならない。あいつが今も息をしているというだけで我慢ならない。早く、息の根を止めなくては。

殺してやる、殺してやる、殺してやる――!!

何年たっても途絶える事はない、この思い。

やっと、確実にあいつを殺せる術を見つけた。やっとだ。オスティオに来るまでにもかなりの時間がかかったし、シェーンのレジスタンスに加わって帝国に行くという遠回りも計画してきた。帝国は遠く、簡単にあいつの居る場所までたどり着けない。シェーンのレジスタンスになれば、帝国行きはまだ易しいものとなると聞いて、他に選ぶ道はなかった。

遠かった。まだ先は長いだろうが、やっと帝国への道と、確実にあいつを殺す手段を見つけた。だから、彼女を逃すつもりは、ない。

誰を利用しようと、たとえそれが肉親だろうと、どんな汚い手を使おうと、あいつだけは絶対に、殺してやる。

彼女の力を使うとなると、この手であの世に送ってやれないのが

問題だが、それより何より、あいつが確実に死ぬ方を選ぶ。
あの野良猫は死んだ。
自分は幸運の鍵を手に入れようとしているのだ。
こみあげるのが喜びの感情でなかったら、他に何があるだろうか。何もない。あの娘を手に入れて、復讐のはじまりだ。

†　†　†

朝から走り回るレフを、友人たちが訝しんでいるのは分かっていた。だが、彼らにはレフの事情を話してはいない。この町（チェルヴォ）に来たのは半年前。突然、浮浪児然として現われたレフに町の下層の子どもたちはいい顔をしなかった。よそ者が警戒されるのはどこででも一緒だ。だが、レフが今の現状を甘んじて受けていてはいけない、シェーンのレジスタンスに加わって貴族や役人連中に一発食らわしてやろうと言ったら、彼らは目からうろこが出たような顔をしていた。
オスティオ国王はシェーン国王ヨハネス二世と同じ家系の出身で、シェーンの影響を受けやすいといわれている。狙うなら、地元オスティオよりもシェーンだ。オスティオは独立しているように見えて、シェーンの属州と代わらないところがある。かつでシェーン傘下であった歴史がそうさせているのだ。根源はシェーンにある。

幸い若者たちはレジスタンスに憧れに近いものを抱いていた。オスティオにて活動するレジスタンスは、シェーンより行動が目立っていたそうで、レフはそこを利用する事にした。

仲良くなった友人たちに、レジスタンスに入れてもらおうとけしかけた。彼らはのった。レフは、気のいい仲間たちを本当に良いやつらだと思っている。自分の目的のために、利用するのは申し訳ないとは思うが、仕方がない。

「レフ、何があったんだよ、昨日」

死神の少女が帰ってしまった昨日、レフは今日はもうお開きだと言った。彼らには帰る家があったりなかったりしたが、とにかく解散とさせた。それから、名前も知らない少女の居場所を探した。どこに居るのかまだ分かっていないが、とにかく彼女が町を出る前に探し出さなければならない。

アルは、あの少女の事を気に入っていたようだから、事情を知りたいのだろう。死神だという事を言うつもりはないが、彼ならもしかしてあの少女の捜索を手伝ってくれるかもしれない。

「ちょっと、な。そんであの子探してんだけど、知らないか？」

「いや、見てないけど……。お前、何かしたのか？」

アルはうかがうような瞳の奥に、レフがした行為の如何によっては怒るつもりだという光をたたえている自分を、知っているのだろうか。

「してないよ。ただ、ちょっと……、言葉間違えたかなって」

嘘は言っていない。やっと見つけた復讐の道具に、あまりにもそのままの言葉を使ってしまった。レフには興味ない事だが、彼女が憤るのも道理だ。

ただ、アルの前ではただ謝りたくて、といった態度をとる事にする。いつか、あの男を殺した後になら少女に謝ってもいいかもしれないが。

「そんな必死になって探すほどひどい事言ったのか？」

苦笑しつつも、レフの申し訳なさそうな素振りが通じたのだろう。

アルは仕方ないといった風に首を振った。
「ぼくも探すよ」
案の定、彼は自ら手伝いを申し出てくれた。簡単に礼を言うと、すぐに二手に別れた。これで少しは彼女の元へ近づけるといいのだが。

そもそも、フランベが言い出さなかったから村に戻らなかったのだが、どうやらフランベはケイスが気に入り、シュガーローゼが知り合いと長く居たいだろうと気をきかせたらしかった。確かに村での仕事も大事だが、フランベはさほど重要な仕事をしている訳でもない。村を数十日あけても大丈夫だそうだ。アクシデントがあったとはいえ、もう一週間も町に滞在していた。切り上げるにはいい頃合いだとフランベも言った。
「さて、荷物はこれで全部かしらね」
シュガーローゼは、昨日から顔をひどくうつむかせたままだが、小さく頷いた。フランベは彼女をずっと抱きしめていてあげたいが、そうもいかない。あんなにどこにも寄りつかない素振りを見せていたシュガーローゼが、カイネ村には戻ると知って、村でゆっくりさせるのが一番だと感じられた。
一つ気になるのが、ケイスの存在だ。フランベはケイスとシュガーローゼの関係性を、最初こそは臆面通りに浅い知り合いと受け取っていたが、どうもケイスの様子からそうではないと分かってきた。シュガーローゼの方は歓迎していないが、ケイスの存在は彼女には必要なのではと思いはじめていた。だから、フランベはケイスに何も言わずに町を出るつもりにはなれない。

「少し、宿の主と話をしてくるわね」
ささやかな嘘をつき、フランベはシュガーローゼを部屋に残して宿を出た。ケイスがどこに居るのかは聞いていなかったが、旅行者である彼は宿をとっているはずだ。付近の宿でケイスを探すつもりだった。
うつむいていても、ぼんやりと魂の抜けたようなシュガーローゼの姿が儚くて、今にも消えてしまいそうだったから、フランベはなるべく早く戻ってこようとは思っていた。

フランベが不在になってから、アルが現われるのにそう時間はかからなかった。
最初は、アルだけだったのだ。だから、シュガーローゼはわずか警戒をゆるめてしまったのかもしれない。こうしてわざわざ死神の少女の前に来るという事は、レフから聞いていないのだろう。シュガーローゼが死神のような存在である事を。
窓ガラス越しにノックをされて、少年が一人手を振っていた。
「やあ」
アルはどこかうかがうように挨拶する。
「ちょっと出てこない？」
やわらかな水色の瞳は、少年を見てはいなかったが、首をゆるく横に振った。
元よりしゃべるつもりのない少女と、困った少年の作り出す沈黙がしばし続く。それをやぶったのは宿の女将だった。
「あんた、今日出てくって人だね。そんならもう出てくれよ。掃除するから」

ずけずけとした物言いで押しきられ、シュガーローゼは惰性のように動き出した。女将の有無をいわせぬ態度にはアルは眉根を寄せたが、目当ての少女が出てきてくれたので結果的にはよかったのだとする。

「町を出るの？」

目抜通りからは一本外れたこの場所は、酒場や狭い商店の並ぶ広くない道で、朝の市場ほどではないが騒がしかった。

宿の外壁に背中を合わせ、少年と少女は並んで話していた。口を開くのはアルだけだったが。

否定はないのでとりあえずは「はい」と見なしてアルは続けた。

「名前は、結局教えてもらえないのかな」

黙りこくったまま、シュガーローゼはぼんやりとした頭で思っていた。どうせ偽名だ。そう執着する意味が分からない。

「……レフが探してたよ。何か、悪い事言っちゃったみたいで後悔してた」

ぴくり、と少女は反応を見せた。あの、レフという少年。

そうだ、彼はレフの友人だ。彼とここにいて、レフが目ざとく見つけないとも限らない。

こんなところにはいられない。フランベを探して町を今すぐ出なくては。いや、もうフランベなど探さずに、どこか遠い場所へ。

「どうしたの？　あいつ、ひどい事言った？」

気づかうような少年の声も耳に入らない。フランベはどこに居るのか。違う、彼女とはここで別れてしまおう。ためらいがあったためだろう、その場を後にするのが遅れた。

「アル、その子捕まえて」

遅れたから、レフの到着にも気がつかなかった。

言いながら、シュガーローゼの腕を捕らえたのはレフの方だった。不審がる友人を無視して、まるで握りつぶすかのように少女の両腕を掴んだ。

アクアマリンの瞳は、嫌悪の炎に燃えていた。

「……あんたって……」

本当に最低だ。言うつもりだったのに、腹に受けた衝撃が、それを呑みこんでしまった。

「レフ？！」

青ざめたアルの叫び声も、あまりそうと思っていないような「悪い……」というつぶやきも、シュガーローゼにはもはや届く事はなかった。

44　魔導の書

かつて劇場だった跡地のアジトにシュガーローゼを担いで連れて来た。レフとアルと、二人の仲間がその場に集まっていた。

「どういうつもりだよ！」

床に寝かせたシュガーローゼの真横で、レフはしゃがみこんでいた。決して彼女に触れようとしないのに、まるで触れたいかのように視線を注いでいた。意識のない少女が横たわっている姿はレフという少年に対する不信感を抱かせるには充分な光景だった。アルは元より、マッテオとベンはどういう顔をしていいのか分からないでいた。彼らにも不穏な空気は読めてはいたが。

決して顔をあわせようとしない仲間の突き飛ばしたい衝動にかられながらも、アルは声を荒げるだけにとどめておいた。

「なあ！」

アルのレフへの不信感が爆発した。彼ら少年団のリーダーのような存在のレフだが、普段から単独行動が多かった。ずっと訝しく思っていたのだ。

「その子に、何するつもりだ？」

ベンもマッテオも、レフとアルとの間に何があったのかを知らない。しかし運びこまれた少女が原因の一つとなっているのは明らかだった。

「レジスタンスになるのに必要なんだよ」

「本当か？　最近のお前、おかしいよ」

アルは今、憤っていた。仲間相手だから怒りをこらえているような様子で、体の脇で拳を握る。

他の二人もアルには同感だった。だが、熱くなっているアルを止めるには少し仲裁に入った方がいいだろう。

「アル、落ち着けよ」

「なんだよお前ら、レジスタンスに入りたくねえのか？」

しゃがみこんだままのレフは顔を見せようともしない。
「それとこれとは話が別だろ！　何で気絶させてまでその子を連れてくる必要があるんだ」
ふう、とレフは息を吐いた。気の抜けた様子が、かえってアルの激情をあおる。
「逃げられちゃ困るんだよ」
緩慢な動作で、レフは立ち上がった。首は下へ傾けたまま、長い髪で顔半分が隠れてしまっている。それなのに笑っているように見えるのは何故か。
「お前らこの娘の価値を何にも分かってねえんだな。こいつがいれば一国の主にもなれるかもしれない。この間の“魔導の書”なんか目じゃねえ」
“魔導の書”、それはアルがつい昨日危険を犯して盗み出したいわくつきの本だ。それを、この少年は大したものではないと言う。アルは未だに持っていた“魔導の書”を汚らわしいとばかりにレフへ叩きつけた。
「いって……」
アルは、もう顔中に不満や怒りの感情をのせてはいなかった。静かな、冷えきった眼差しでレフを軽蔑していた。
「乱暴に扱うなよ、“魔導の書”を」
言いながら、レフは床に転がった書物を拾う。“魔導の書”はレジスタンスたちが探しているという噂があって手に入れようとした代物だ。これを手柄に、明日にでも≪ザッハヒカリテ≫に入門させてもらうつもりだったのだ。
挨拶もせずに、アルが立ち去っていたのにレフも気がついていた。マッテオだけは、彼に言葉を落として行く。
「見損なったよ、レフ」
瓦礫とゴミだらけのアジトには、少年と横たわる少女だけになった。
静まり返った空間。さすがにやり過ぎたかとは思っている。

だがあの男を前にした時、人情の何が役に立つだろうか。心を殺して、あいつを殺す。レフはそう決めていた。

焦るあまり、少し前後不覚になってたのは認めよう。気を失った少女は、まだ目を開かない。

手の中の“魔導の書”に注意をやる。手の平を広げたくらいのサイズで、さほど大きくはない。古い本で、金属の鍵がかけられており錆びついている。

手遊びをするように、鍵の部分をいじってみる。壊れて中が開けないかと。何度もつつくたびに、きしんだ音をたてて錆びた鍵は壊れた。これで本が開けるようになったと、レフはどこか楽しみながら表紙を開く。

本当に“魔導の書”なのかどうか、わずかながらに期待しながら――。

――突如、本が爆発した。

熱いと思った時には脊髄がレフに書物を手放させていた。何かが起こった。

目を見開いて、素早く視線を周りにやると、驚くべき光景がそこには広がっていた。

黒に近い茶色の化け物。まさに怪物だった。筋骨隆々な男性とイノシシをかけあわせて失敗した奇っ怪な存在。

それは、吠えた。

大気が震えた。

レフは我が目と我が耳を疑った。これは何だ？　何が起こっている！？

「……う……」

少年ははっとした。少女がうめき声を上げて存在を教えている。

レフにとって、彼女はなくてはならないもの。化け物から目を離さずに少女の元へ寄りそう。

まだ、目を覚ましてはいないがあの怪物の大声でまどろみから覚めそうなのだろう。あの生き物が何だか知らないが、彼女を連れて

早く逃げなければ！
「起きろ、やばい、逃げるぞ！」
「……う……、な…に…？」
上半身を起こしながら、少女は額に手をやる。
まだ怪物はこちらをうかがうように見ているが、いつ襲いかかってくるか分からない。ぐるるとうなる口からは、太い牙が見えた。
広くない室内に怪物は窮屈そうだ。
「何あれ……」
呆然と、少女はこぼした。完全に目を覚ましたようだ。
「いいから逃げるぞ！」
その前に、あの“魔導の書”を持っていかねばならない。レフは、自分の位置と怪物との間にある“魔導の書”に苦虫を噛む。レジスタンスに入るための道具ではあったが、復讐の相手にも使えるかもしれないと思っていた。みすみす逃すつもりはない。
「誰かいるのか？！」
出入り口付近で、声が上がる。こんな時に誰が、とレフの頭はパンクしそうだ。
怪物はついにしびれを切らして飛びかかってきた。
「うわあっ！」
シュガーローゼが叫んで、数少ない遮蔽物の元へと逃げてゆく。
レフの反射神経もそれに習っていた。
元は壁だった瓦礫は、しかし怪物の腕にはやわらかくなかったようだ。怯んだ怪物は、わずか飛びのく。
「何だ、これは……」
見知らぬ人の声はさっきより近くなっていた。顔を上げると、レフもいつか見た顔がそこにはあった。
「……シェーンの騎士…？」
すぐ傍の少女が何故ここにといった顔で見ているから間違いない。
彼女と目の合った青年が、同じような顔をしている。
「どういう事、これは……」

「危ない！」
叫んだのはシュガーローゼだったかレフだったか分からない。騎士の元へと化け物が飛んでいた。
ケイスは商人の息子を演じるにあたって、帯剣をしていなかった。腰に手をやって空を切った時の間抜けさといったら、ない。素早く腰をかがめると、ひとまず防戦に徹する。
「何なの、あの化け物」
わずかに震えるような声で、少女はケイスと化け物の対峙する様を見ていた。その両手は何かを求めるようにさまよっている。
「わかんねえ……。ただオレが、“魔導の書”を開いたらいつの間にかあいつが」
言いながら、レフは気づく。まさか、あの“魔導の書”の中からあの化け物が飛び出してきたのか？
「……そんなまさか」
「っあ！」
意識せず、シュガーローゼは立ち上がっていた。ケイスが怪物に投げ飛ばされた。
「やべえ、あの人、死ぬぞ」
意味もなく口にした言葉だったが、シュガーローゼを動かすには充分だった。それも、無意識下のものではあったが。
手近なものから、硬いと判断したものを少女は化け物に向かって投げていた。
壁に打ち付けられたケイスは、それを見ていた。
怪物は、シュガーローゼに注意を払う事にしたようだ。くるりと首もないような太さの顔と体で振り向いた。
「……逃げろ！」
こんな化け物を、町に放つ訳にはいかないが、シュガーローゼを殺させるつもりはケイスにはなかった。彼女は“死神少女”かもしれないが、怪我をすれば血が出る生身の人間なのだ。
ケイスは瓦礫の中から剣に近い棒状のものを探す。あった。パイ

プのようだが、持った感触は悪くない。投げ飛ばされた時の怪物の力からすればあまり硬いとはいい難いかもしれないが、ないよりはましだ。

「こっちだ、化け物！」

こちらも石のようなものを投げて、怪物の注意をケイスに戻させる。人外の生物はまた、ケイスに飛びかかっていった。それを見て、レフはほとんど這うようにしながら手を伸ばす。

「今のうちに本を……」

怪物退治には“魔導の書”が鍵かもしれないのだ。自分でもばかげてると思うのだが、あの怪物は“魔導の書”に封印されていたのではないか？

魔術に詳しい者がここに居たら頷いたかもしれないが、シュガーローゼはほんのわずかかじった程度、レフはこれまでに魔術と関わった事などなかった。

だが“魔導の書”を開いた途端に怪物（アレ）が現われたのは確かだ。どうしたらまた書物の中に戻ってくれるのかは分からないが、本を叩きつけでもして、何とかやってみるしかない。

“魔導の書”を手にして、レフは一度閉じた。

こんな状況下に何故そんな書籍を優先するのだと、咎めるような疑問の瞳が少女から飛んできて、聞かれてもないのにレフは素早く説明した。

「もしかしたら、これが原因かもしれない。開いたらあの化け物が出てきた」

一瞬の事だったから、多分としか言い様がないが。他に考えられない。

「じゃあまた本の中に戻せば？」

「ああ。だが、どうしたら戻るかなんて分かんねえ」

どっと、また硬いものに何かがぶつかる音がする。シュガーローゼの目にはケイスが肩から血を流してうずくまっているのが見えた。

「……！！」

叫びたいのに、叫べない。駆け寄りたいのに、駆け寄りたくない。矛盾した気持ちを内包したまま、少女は怪物がこちらへと向かってくるのを感じていた。

喉がひどく乾く。唾を無理矢理飲み込むと、名案が思い浮かんだ。

「……わたしが、“死神のキス”をあげれば」

そうだ。どうして今まで気がつかなかったのだろう。相手が生き物である限り、どんなおぞましい恰好をしていても“死神のキス”は相手に死を与えるはずだ。

「そんな危ない事させられるか！」

レフが叫ぶ。怪物は、じっとしている時にはそう見えなかったが、重量のある見た目に反して意外と素早い。彼女がキスを与える前に、その太い腕を伸ばしてくるだろう。キスが成功しても、シュガーローゼが死んだのではレフにとっては元も子もない。

「“死神”の心配するの？」

シュガーローゼが“死神”だと分かってからは、その肉体も傷つかないものだと思いこむ者が多い。その実普通のように赤い血が出るのだ。あれだけシュガーローゼを自分の目的のための道具としていたレフが、彼女の怪我を心配するなんて、奇妙だ。おかしかったから、口元がゆるんだ。

琥珀の瞳が純粋な驚きに見開かれ、すぐに恐怖のために歪められる。

「ローゼッ！！」

叫んだのはケイスで、シュガーローゼに迫っていたのは化け物の鋭い爪だった。

「……っぐあ…！！」

油断したつもりはないが、わずか翻した身にはまともに攻撃を受けてしまった。

「…う……ぐ…、」

少女は、怪物に比べたらあまりにも細い両腕で怪物の腕を掴もうとしていた。

「…わ…たしが生を……止めて、あげる」
“死神のキス”を、落とそうとしていたのだ。怪物は察した訳でもないだろうに、少女のか細い手を振り払うとそのまま振り下げた。
「ああっ！！」
離れた地面に叩きつけられ、シュガーローゼは沈黙した。
あと一歩だったのに！　レフは青ざめながらも手の中の“魔導の書”を強く握りしめた。
どうしたらこの化け物を倒せるんだ。
こんな本が役に立つのか？
「くそっ、この化け物……！」
無謀にも無手で飛びかかろうとしたレフは、怪物の動きが止まったのを知る。
棒状のパイプを、ケイスが怪物の背に突き刺していた。何故だか信じられない気持ちでレフはそれを見ていた。しかし怪物は、うっとおしげに身動ぎする。
「早く、ローゼを連れて……、逃げろ！」
血まみれになりながら、シェーンの騎士は嘆願した。
何故。レフは、瞬時に体の中を様々な感情が行き交うのを感じていた。瀕死みたいな二人の人物、自分が巻き起こした出来事、それから無傷の自分。恥や怒りや恐怖や不安や焦燥や、すべて感じたそれらを振り払うように、少年は強く吠えた。
「うおおおぉぉぉ！！」
理由などない。両腕で突き出した“魔導の書”は、怪物に振り下ろして叩きつけるつもりだった。
体をかしがせたケイスがその時見たものは、少年の手にした書物が怪物を呑みこんでいたというものだった。その目で見ていながら、にわかには信じ難い光景。
耳障りな不協和音が、怪物の悲鳴となって辺りに響く。少年が強く前進するたびに、怪物はみるみる本の中へと吸いこまれてゆき、
「うあああっ！！」

少年がわめくと尻の先まで怪物は本の中にすべて消えてしまった。
レフは前方に進むように力を加えていたから、怪物が消えた事によりバランスを失い倒れこむ。
ばさりと少年の倒れた時におこした音の後には、世界から音が消えた。
茶色の体躯で、あちこちがこぶのような筋肉のような、イノシシのような半分人間のような体をした化け物は、つい数秒前には確かに存在していた。それが、もうどこにも居ない。文字どおり消えてしまった。
レフは自失しながらも、“魔導の書”を二度と開くまいと腕の中にきつく閉じ込めていた。
膝をついて呆気にとられていたケイスは、慌てて起き上がろうとした。怪物から受けた傷が身動きを難しくさせたが、倒れてしまうほどではないと自分に言い聞かせる。
少年たちのアジトは、元から半壊していたものの、もっとひどい有り様になっていた。それでも、この場の誰もが息をしていた。怪我をしている者ばかりだが、生きている。
だがシュガーローゼがまだ目を覚まさないのがケイスには気にかかる。早く、その傍らに行かなくては。よろよろとおぼつかない足どりで、茫然自失の少年を通りこし、少女の元へとたどり着いた。
気配を感じたからだろうか、シュガーローゼはうめきながらもゆっくりと瞼を上げた。
「良かった……」
知らず、こぼしていた自分の思い。ケイスはあのアクアマリンの瞳が見られるのを待っていた。
シュガーローゼは、半分まどろんだような瞳にケイスが映るのが分かり、
（生きてる）
とだけ思った。
あと一歩、シュガーローゼに近づく手前でケイスはくずれ落ちる。

その騎士は肩から血を流し、口の中も切っていた。あばら骨あたりが支障をきたしている気配もする。しかし、ひどく安堵していた。

ケイスは瞼を閉じる。このまま眠ってしまいそうだ。両手を床について、長い息を吐く。

「……さすがに、疲れた」

予告なしに未知の怪物との遭遇。相手は有無をいわさず襲ってきたのだ。疲れたなんてもんじゃない、とレフは思ったが自分よりひどい怪我をした人間を前に何も言えなかった。

シュガーローゼも、ケイスの物言いに異議があったのだろう。眉を皮肉げに持ち上げると、ゆるやかに瞳を細めてゆき、閉じた。

怪奇的な怒濤の時間は終わった。

誰もが安堵していた。危機は去ったと。

「さっきの物音は何だ、誰だ、ここには誰がいる！」

自己の存在を主張するかのような大声。どかどかと、複数人の足音もする。

「最悪だ……」

口の中で少年はうめいた。

現われたるは、武装した警備隊員たち。倒れこむ三人の人間を見て、目を丸くするが、レフを見て顔色を変える。警備隊はレフのような小生意気でスリをする子どもたちを嫌っていた。仕事が増える、頭痛の種にしかならない乞食同然の不良少年たちを。目の敵にするというほどではないが、普段からこの警備隊員たちとレフのような孤児の少年たちが出会うと、必ずといっていいほど警備隊は彼らを責める。今回もそれは変わらず、睨みつける視線が三人の若者たちに注がれた。

「またお前らか……一体、何をしていた？」

警備隊員は少年たちが何かよからぬ事をしでかしたと決め付けた瞳でいる。まずいなと、レフは起き上がろうとした。“魔導の書”は盗品だ。これが見つかったらロクな事にはならない。どう切り抜けたものか。

思案する時間は少年に与えられなかった。
「怪我人も含めて、全員連れて来い！」
警備隊員は、部下に命じると踵を返した。
レフ以外の二人は怪我人、抵抗する気力もなく、連れて行かれる先がどこになるかなど考えてもいなかった。問答無用の連行に、彼らはどうすることも出来なかった。
ただレフの最悪のパターンの一つに合致した場所に連れられる事になる。

45　囚われの身

怪我を手当てされた後、シュガーローゼは薄暗く狭い空間に連れてこられた。滴が落ちる音がどこからかする以外は静かな場所だ。闇が音まで吸収してしまったみたいに。この場所は地下なのだろう。地下の牢屋だ。

更に狭い部屋に入れられて、一面に格子の広がる壁の中に閉じこめられる。がちゃりと無機質な音が無情にも出入り口を封印をしてしまう。

シュガーローゼをここまで連れてきた人間は、何も言わずに去っていったようだ。その足音がなくなると、再び沈黙がこの空間を支配する。

騒ぐ人間はおらず、まるでこの暗い空間にはシュガーローゼしかいないかのようだ。

まず、ずっと立っているのも何だとシュガーローゼは腰をおろす事にした。

あれから、化け物をなんとかした三人は疲労していたためと、何がこうさせたかを上手く説明出来ないとふんでいたために黙って警備隊についていった。何があったかを問われる前に、レフが盗みの前科がある町の不良少年だという事が早々に判明し、シュガーローゼも仲間だと見なされてしまった。少年と少女の今後をどうするかを決めるのにしばらく牢屋に入れておくのが自然だと思うほどには彼らはレフを町の悪童だと信じきっていた。実刑がくだされるかもしれないが、とにかく拘束という話である。

ケイスとは、違う場所で手当てをされたようで顔を合わせる事はなかった。彼はシュガーローゼよりも重傷だったから、このような場所には連れてこられないかもしれない。そうなればいいと思うわけではないが、怪我が悪化しない状況にいればいいのではと、他人行儀に思っていた。

近いような遠いような場所から、また一つ水滴の落ちる音がする。
シュガーローゼの目もそろそろ薄暗い闇に慣れてきた。
「おい……居るんだろ」
その声は、聞き覚えがあったというのに頭にすんなりとは入っていかなかった。
床につけたお尻が冷たい。そこをはじめに体中が冷えてゆくのではないかと思えるくらいだ。
「おい、お前……えーっと…名前……」
聞いてねえじゃん……少年はまるでしょぼくれるように小さくぼやいた。
「シュガーローゼ」
だから答えた。今までかたくなに黙っていたわけじゃない。ただタイミングを失っただけだ。名のると、相手は動いたような物音がかすかにする。
「はあ……。なんでこんな事に」
深刻になり過ぎないような声で、レフは言った。
この牢屋全体の構造は分からないが、どうやらレフはシュガーローゼの隣りの牢に居るようだ。右隣から声がする。
「わたし、牢屋に入ったのははじめてだよ……」
死神少女の正体が知れると、人々はまず殺そうとしてくる。恐ろしい存在は一時的にでも閉じこめたりせず殺すべきだと考える者が少なくない。
「オレなんか三回目だし」
乾いた笑いは、自嘲めいてはいなかった。レフは一体何をする人なのか。頭の端で少女は思った。
シュガーローゼの方にはなかったが、レフは彼女に言いたい事がいっぱいあった。出会ってからこれまでの事、化け物と対峙した時の話、それから彼女についてや自分について。そのどれもが場に不釣り合いのように思えて、本懐からは離れた場所の話を口にする事になる。

「アレ、何だったんだろうな。本、取り上げられたけど」
「……うん」
うんって何だよとレフは言いたかったが、シュガーローゼの返事が快調に返ってくるので舌がなめらかになってゆくのが分かる。
「あれさ、“魔導の書”とかいう本なんだけど、話じゃ古代の魔術が使えるようになるってだけだったんだ。それなのにあんなのが出てきて、おかしいよな」
返事はないが、少年は続けた。
「本じゃないのかな。あの怪物捕まえておくための箱みたいなものなのかな、あれって」
だとすれば封印を解いたのは他ならぬレフだ。知らなかったとはいえ、我ながらバカな事をしたものだ。小さく自嘲する。
シュガーローゼの怪我の具合はしっかりとは分からないが、シェーンの騎士はひどい怪我だった。他人にあんなに怪我をさせる原因を作ったのは自分だ。レフは、彼に対しても申し訳なく思っている。
「……悪かったな……」
様々な意味を含めて。怪物の件も、ケイスに向けたものも含み、それからシュガーローゼを利用したいと言ってはばからなかった事。
「でもオレ、お前が“死神少女”なら自分のために利用したいって思ってる」
わざわざ口にされなくとも、シュガーローゼにはよく分かっていた。
「でも、悪かった。……いろいろ……」
形だけの謝罪などいらないと、言おうかと思ったが、やめた。悪いと思うなら、そうやってシュガーローゼを利用しようとしないでほしい。
「オレには、生きているだけで許せないヤツがいるんだ……」
また一つ、水の音。
「殺すためなら手段を選ぶつもりもない」
シュガーローゼは、山折りにした足に顔を伏せていた。

「お前には居るか、そんなヤツ……居ないだろうから分からないだろうけど……」

少年の声はどこか淡々としていた。

シュガーローゼが生きているだけで許せない人間は、自分以外には居ない。それでも生き延びているのだから、滑稽な事この上ない。

「自分の手で殺せない相手なの」

突き放したような少女の言い方だが、感情は読みとれなかった。

レフがそうしたいのは山々だが、相手が悪過ぎる。それでも息をひきとってほしい相手。

「そうできたらいいけど、そうもいかねえんだろうな。オレは……」

弱い。

口にはとても、出来なかった。真実になってしまうのを恐れて。

レフは、あのシェーンの騎士に嫉妬を抱いていた。憧れから来る、嫉妬。武力は、ちからだ。人に言う事をきかせる、人を従えさせる、人を支配する、ちから。他人を殺す、ちから。

あれがずっとほしかった。仲間たちと稽古などといってチャンバラごっこをしていたが、本当なら警備隊か騎士団に入りたかった。

オスティオ王国には騎士団はないが、ほとんど似たような王家直属部隊がある。シェーンの騎士団と同じように、貴賤を区別する部隊には入れない。

しかし、オスティオの警備隊なら話は別だった。ただし、オスティオ王国に二年以上住んでいるという証拠が必要だという。レフはまだ、オスティオに来て一年たってもない。他の仲間も警備隊員になりたがっていたが、家の事情やひどく貧困である事などが不可能とさせていた。

だからレジスタンスだった。彼らは貴賤も区別せず、決まりなど持たなかった。レジスタンスに入りたいのも本音だった。訓練らしきものはあまりないと聞いていたが、望めば潜入捜査という形で騎士団に入りこめるとも噂されていた。

すべて、武力のため。すべて自分のためだったけれど、

「……他に道なんかねえんだよ……」
選んできた道ではなかった。どんどんと誰かに突き飛ばされ続けた先に、レフは立っていた。ギリギリのところで、先に進むにはそこしかなかった。
まともな道ですらないというのに、もう後戻りも出来ない。
望んじゃいない。
「それは……分かる」
シュガーローゼも同じだ。
何も他にはなかった。これしか行く先はなく、嫌だと拒否しても連れてこられたような場所。
おかしくなりそうなくらいの、選択肢のなさ。まともな道は一つとしてない。道ですらない。歩いてきてもないだろう、シュガーローゼは。這うようにして、前進も後退も出来ずにうごめいているような存在。早く消えてしまえばいいのに。
「ただ、復讐なんて意味がないと思うけど」
また、相手が身動きしたのが分かる。シュガーローゼは続けた。
「相手を殺したって、それだけだよ。そのうち自分も死ぬ。死んだら、何も残らない……何も」
死の前にすべては無だ。無意味だ。理不尽な死は万人に等しい。どんな感情も、死ぬ事を前にすれば、あってないようなもの。
意味がないのだ。この世のすべては、無意味である。
死がすべてを呑みこむ。それが世界の理（ことわり）だと、シュガーローゼは知っている。
「お前に何が分かるんだよ……村を滅ぼされた者の気持ちが」
それがレフの理由か。シュガーローゼはふにおちた気分になるが、その内容までには興味がない。何事にだって原因となる理由がある。ただ、理由がないのはシュガーローゼだけだ。なにゆえシュガーローゼは“死神”にならねばならなかったのか。理由はない。
「あなたにこの唇があげられたら良いんだけど」
“死神のキス”を有する唇を、そっくりそのまま、武器を貸すみ

たいに。
言っていて、名案だと感じた。レフにしてみれば全身で拒絶したいところだろう。
しかし、少年は心臓を一つ跳ねさせた後、止まらない動悸を覚える中でそれも悪くないと思っていた。
自分の手で仇敵を殺せる。なんて甘美な響きなんだ。
だが、復讐がない彼女は？
彼女は一体、どうやって生きてきたんだ――“死神のキス”なんてものを抱えながら。
「ばかな事言うな、そりゃお前、そんな……なんていうかその……」
口をすべったのは、言うつもりなんて微塵もなかった単語。違う。レフはシュガーローゼを馬鹿にしたいのではない。そうじゃない。
――受け入れてくるしか、なかったのか……？
今の彼女の言葉は、“死神のキス”を受け入れてきたからの言葉に思えた。背負ってきたものの重さを知って、他人に渡すのは無理だと分かって、レフを責めるでもなく、静かに――。
腹に拳を食らったように感じた。
レフにはレフの事情がある。殺すべき相手がいる。
でも、シュガーローゼには、シュガーローゼの事情がある。もしかしたら、レフなんかよりももっと、ひどく、重く――つらい。
考えてはいけなかった。レフは首を振って、思考を切り替えようとした。
“死神少女”が、同情すべき存在に変わった時、それは――。
考えてはいけない事だ。
目の奥がツンとする。ああまずい、考える事を変えなくては。
「お腹すいた。ご飯、出るかな」
「……知らないけど、出ても大したもんは出てこねえだろうな」
話を変えてくれたのはシュガーローゼで、意外だった。レフの思惑を知っていたわけでもないだろうに。彼女もまた、気まずい思いをしていたのだろうか。

ぴちょん。暗闇のどこかで、小さく水滴が跳ねていた。

† † †

ケイス・ルブランが目を覚ますのには半日かかった。出血しすぎたのだ。

目を覚まして、簡素だがそれなりに広い部屋の中、寝台に寝かされている自分がいて、ぼんやりとした頭は思考停止をしていた。

ここはどこだ。気を失う前の記憶が曖昧だ。ケイスは、再び瞼を下ろしてから脳みそを動かした。

ここは、おそらくはシェーン王国ではない。新たな任地であるオスティオ王国のはずだ。シェーンに強制送還されたのでなければ、だが。新しい職場は、一筋縄じゃいかなく、ケイスはそこにたどり着く前にシュガーローゼと再会する事が出来た。しばらくは職場につめていたのだが、ある日シュガーローゼの知り合いであるフランベがやって来た。偶然会ったのではなく、町を徘徊していたマルセルがお前を探している人物がいると言ってきたので、探し出したのだ。

フランベがケイスに伝えたかったのは、もうチェルヴォを出るので最後にシュガーローゼに会ってくれないかというもの。すぐに彼

女の元へ向かったら、シュガーローゼは居なかった。
　困ったフランベに、共に探しましょうと声がける。なかなか見つからない少女に、あまり仕事を離れるわけにはいかないと思っていたのだが、町をよく知るロドリゴにより町の素行の悪い子どもたちがよくたむろしている場所を教えられた。もしかしたらシュガーローゼも彼らと行動を共にしているかもしれない。ものは試しと、彼らのおもむきそうな場所に向かうと、妙な奇声が聞こえた。
「……そうだ。それで、僕は怪物を見た……」
　ケイスはまだ、パイプを怪物に突き刺した時の感覚を覚えている。楽しい経験とはいえない。現に、ケイスは怪我をしていて左の肩口が心臓になったみたいにどくどくと脈打っている。あちこち手当てをされているが、口の中は鉄っぽい味がするし、腹部の左下に違和感がある。右足の脛にも痛みがある。満身創痍とはいえないが、立派すぎる勲章を手に入れたものだ。
　しかし、化け物と戦ったまでを思い出したはいいが、何故このような部屋に一人寝かされていたのか。
　シュガーローゼは、彼女に同行していた少年は、どこへ行ったのか。まるで犯罪者でも引っ捕らえる様相だったと思い出す。ケイス自身はどこかの室内に連れられ、怪我の手当てのために横になれといわれた後にはもう意識を手放していた。
　シュガーローゼは怪我をしていたはずだ。彼女にもちゃんと手当てがほどこされたのだろうか。青年は気もそぞろになる。不安だ。彼女がどうしているか、知りたい。
　全身が鉛になったみたいに重たいが、ケイスは寝台から足を下ろした。立ち上げると貧血をおこしそうな頭がぐらぐらと回っていたが、しばらくこらえると何とかなった。
　誰かに事情を聞くか本人に会わせてもらいたい。そう決めると、青年は部屋の扉に手をかけた。

46　脱獄

シュガーローゼが何もこんな牢屋の中にずっと居る必要はないのだと気づいたのは一晩を牢屋で過ごした後だった。彼女は、転位魔術を使える。行った事のある場所にしか行けないが、こんな牢から出るのは至極簡単な事だ。

それをレフに告げて、何を言ってるんだとばかにされたため実践する事にした。壁ですらない金属製の格子戸を開けもせずに瞬間的に移動すると、隣りのレフの牢の前に顔を出す。

「あんた、本の中から出てきた魔物を見たわりには魔術を信用しないのね」

はじめ、レフは何の変鉄もない光景だとばかりに顔を上げてシュガーローゼを見た。わずか遅れて、琥珀の瞳を丸くする。口まで大きく開いて、開けて閉める。暗闇にうっすらとピンクゴールドの髪が浮かび上がる場所を指さし、つぶやいた。

「……お、お前、魔術師?!」

「ちょっと使えるだけだよ」

純粋な驚愕以外に、恐れなどの感情はレフから見られないが、指をさされて彼女はいい気がしなかった。

「じゃ」

「待て待てっ！　お前っ、オレを置いていくのか?!」

「……当たり前でしょ、あんたわたしに何してきたか分かる?」

言われなくとも、レフがシュガーローゼにしてきた事は紳士的という言葉からはほど遠い行為ばかりだろう。それを出されると、少年は反論出来なくなる。

「あ、そうだ」

シュガーローゼは何かに気づいたように足を止めた。

「へ?」

シュガーローゼの姿が一瞬で目の前に現れたと思ったら、レフの

体は牢の外に出ていた。
「え、あ、あれ？」
シュガーローゼに手を掴まれ、魔術で牢から抜け出したのだと知ると同時に――頬への衝撃で体のバランスを崩していた。
殴られたのだと分かるには時間がかかった。しかも、牢から脱出させてくれたはずの少女の手によって。握りしめた拳は女の力とはいえかなりの力がこもっていた。
油断したままのレフに、シュガーローゼは追い討ちをかける。急所を狙った渾身の力による蹴りあげだ。
「ぐあッ？！」
あまりの痛みに倒れこみ、身もだえてごろごろと転がり出す少年。
「これでよし」
シュガーローゼは両手を腰にあてた。彼女にしてみれば、まだ足りないぐらいだ。“死神のキス”をくれてやるほどではないが。
レフに会ってから無理矢理連行され、アルの救出劇に無理矢理参加させられるはめになった時から一発殴らないと気が済まないと思っていたのだ。シュガーローゼは満足げに、静まり返った少年を見下ろしていた。
魔術を使える少女が牢を逃げ出す前に、レフは立ち上がって引き止める必要があった。まだ寝転がったままだが、せめて声だけでもかけなければならない。
「なあ、取り引きしないか」
「は？」
シュガーローゼの瞳が小馬鹿にしたようなものだったのでレフは頬をひきつらせた。そんな自分を抑えるように一度瞼を閉じると、ゆるく首を振ってまた目を開いた。
「お前はこの町の人間じゃない。慣れない道をウロウロしているうちにまた捕まるぞ」
「魔術があるから、すぐに逃げられるし」
またもや嘲りに近いものを水色の瞳に浮かべて少女は鼻で笑った。

態度の悪さにレフは苛立ったが、彼女の言う事はもっともだった。空間を魔術で移動出来る彼女には、追っ手をまくのは簡単な事だろう。だがここで引き下がってはレフにとって不都合だ。食い下がるしかない。

少年は意を決したように立ち上がった。緩慢な動作は、どこかもったいつけたようにも見える。不敵そうに琥珀の目を閃かせ、少女に向かう。

「お前が逃げるって今すぐ叫ぶぞ」

さすがにそれは避けたいのだろう、少女の顔が分かりやすく歪む。この場所では警備隊もすぐにかけつけることが出来るだろう。

オレが手を掴むのより早く、シュガーローゼの魔術は発動するだろうか。言っておきながらレフはそんな事を考えていた。

「それより早く逃げてあげる」

「お前が魔術を使うって言いふらす。オスティオもシェーンと同じで魔術師には耐性がない国だ。魔女扱いされて、指名手配の一つでもされて、すぐに捕まるぞ」

思っていた事を口にされてレフは苦々しく思ったが、すぐに相手に条件をのませるための妙案を思いついた。案の定シュガーローゼは更に険しい表情になる。視線で目前の少年を殺そうとするかのような顔だ。

実際に、魔術を扱う者についてはもっと閉鎖的な村や田舎の人間の方が恐れを抱いていたものだが、今日(こんにち)の王国は物騒だ。シェーンも、オスティオも。オスティオは国境での検査を強化するほどに、警戒を強めている。不慣れな魔術師相手にも、強く出るだろう。既に牢に居るシュガーローゼではあるが、また捕らえるには他に理由はいらない。魔術師という不審人物だからだ。

「……そっちの望みは、何」

聞くだけは聞いてやる。そういった感情が現れるように努めて少女は言った。のってきた相手に、小さな優越感を覚えながら少年は応じる。

「オレも連れてけ。その魔術、二人くらい逃げられるだろ」
最初は、嫌そうにしかめられたシュガーローゼの顔も、ふっと不安げなものになる。まるでやってみた事のない曲芸を今すぐしてみせろと言われた子どもみたいに。
「そうしたら黙っていてやるし、いい潜伏場所を教えてやるよ」
少女の様子を訝しく思いレフは問いかけた。
「……聞いてんのか？」
「やったこと、ない」
は？　とレフは今一度シュガーローゼの顔を凝視した。彼女はとても言いにくそうに、どこか拗ねたように言葉を続けた。
「転移の魔術なんて、自分一人に対してしか使った事ない。二人でなんか……」
レフは唇を引き結んだ。彼にも覚えがあったからだ。この町に来るまでの間、一人で行動をしていた事を。困る事はあれど、復讐を胸に歩き続けた。それでも時々、ひどく虚しさを覚えた。
シュガーローゼは“死神”だ。同行する人間など……。
「やる前から、出来ないってか」
わざと、挑発するように少年は口をきいた。シュガーローゼにもプライドというものがあるだろうから。彼女は世をはかなんでいるかのように見えて、意外にも気が強いところがあるとレフは感じていた。彼の狙い通り、腹を立てたような瞳でシュガーローゼはレフを見やった。
「……あんた、唯一の逃亡手段にずいぶんと偉そうな口聞くね」
こんな少年にあなどられるのは嫌だった。シュガーローゼは自分でも馬鹿な事をしようとしていると、分かっていた。こんな少年見捨ててしまえばいい、ともう一人の自分が鼻白んでいるのが分かる。でも、自分の意思とは裏腹に口が勝手に動くのだ。
「わたしがここを出たら一人じゃ逃げられないくせに」
「いや？　オレにはアルたちがいるからな。そのうち助けに来てくれる。で、オレはお前が逃げたのは魔術師で魔術を使ったからって

言う。それで、そうだな。レジスタンスだと言ってもいいな。死神少女だとも――」

瞬間、少女の瞳が暗く、しかし強い力の光で閃いた。レフは息をのんで、目を逸らさなくてはと感じた。覗きこんだら最後、その底なしの力に引き込まれる深淵のように力を持った瞳。暗く、闇色の、負の力を持つ恐ろしいもの。

突然レフは自分にかかった力に目眩がした。

その次の瞬間には、地面に倒れこんでいた。草の先が頬に突き刺さる。ちくちくする感覚に、ぼんやりとしかけた頭が違和感を教えてくれた。レフは顔を上げて、あたりを見回した。草の生えたむき出しの地面。土の上に横たわっていた。冷たい牢屋の石の床ではなく。

「――ここ、どこだ?!」

家屋の壁がすぐそこにあるから、まだ町のどこかに居るのだというのは分かったが。

「知らない。あんたのせいで飛ぶ先ちょっとずれちゃったから」

投げやりに言うシュガーローゼの声で、レフは一つしかない可能性に目を見開く。

「お前、まさか……」

「自分から言っといてその言いぐさ?」

シュガーローゼはうんざりしたようだ。レフは構わずに立ち上がって、ここが町のどこになるのか確認をしようとした。何歩か進んだところで気がついた。ここはレフの仲間と過ごしたアジトだ。誰もいないが、思えば、レフはアルとケンカをしていたから彼らが助けに来てくれるはずがなかった。シュガーローゼはケンカの時には気絶をしていたのだから、気がつかれなかったわけだが。

「……お前、ついこないだここで捕まってばっかだろ、よりによって何で……」

うるさいと言うのも嫌だった。シュガーローゼは人気のない場所をこの町では他に思いつかなかったのだ。

「あ、魔導の書」

ぽつりと言って、レフはすぐに慌てた様子で自分の身体検査をした。牢屋に入れられた時に有用なものはすべて取り上げられていたのだから、当然ポケットの中から埃以外の何かが出てくるはずもなかった。剣などの武器もあったらよかったが、今、レフはあの魔導の書が手元にほしかった。武器ならば折れてしまえばそこで終わり、そしてレフは上手く扱えない。だが、魔導の書なら――あの化け物を従えさせる事が出来たなら、武器以上の力になる。

思いながら少年は、それはレフが剣の達人になるのと変わらないくらいに難しいと分かっていた。だが、今はどんな可能性にもゼロではない限りすがりつきたかった。

レフは死神の少女と魔導の書を天秤にかけた。シュガーローゼは人間だ、自分でものを考えて動く。彼女を放っておけばすぐにどこかに行ってしまう。しかし魔導の書も捨ておくわけにはいかない。役人たちにあれの力を知られて、二度とレフの手に戻らないようになってもらっては困る。そちらの方も早く取り戻す必要がある。

復讐の道具は一つで良いのかもしれない。だが、一度二つを手にしたレフにはどちらも手放したくないものだった。

ひとまずシュガーローゼを逃がさないようにと、顔を上げた時だ。彼ら以外の声が聞こえた。

「おい、起きろ。交代だ」

「……あ、ああ……おれ今、寝てたか」

「ああ。まあ、退屈だろうしな、仕方ない。誰か来たか？」

「来ねえよ。ガキとはいえレジスタンスのはしくれだろ？　まさか仲間が捕まった場所には来ねえだろうってのに」

「しゃあねぇよ、やつら頭硬いんだ」

町の役人に遣わされただろう、警備隊の人間のようだった。

壁一枚を隔てたその先に、警備隊が二人も居るようだ。シュガーローゼもレフも気配を消す事に努めた。先ほどレフがアジトの中を見た時には死角になっていた場所にでも、警備隊員は見張りに立っ

ているのだろう。
「じゃあな、がんばれよ」
「ああ。お疲れ」
一人は去ったようだ。そこで透明人間になりきっていた二人はやっと顔を見合わせる。レフと話し合いなどしたくはなかったが、今はそんな事を言っている暇はない。何とか警備隊員に見つからずにこの場を脱出しなければならない。だが、いくらか距離があるとはいえ声を出したら見つかるかもしれない。先ほど二人が話をしていたのがあちらに伝わらなかったのは、見張りが寝ていたからだと判明したから、尚更口を開くのにためらわれた。
レフも同じ様に考えているのがその沈黙で分かった。
しかしいつまでもこうしてはいられない。先にしびれをきらしたのはレフの方だった。小声で、どこか窺うようにささやいた。
「……魔術、使え」
あんたを置いて、そうしようかな。思った言葉は口にはしなかった。無駄口はたたいていられないからだ。しかしシュガーローゼは迷っていた。このまま、この腹の煮えくりかえる少年と行動を共にするのは我慢ならない。さっきは怒りで衝動的に魔術でレフと牢屋を逃げ出したが、今となっては後悔していた。こんな少年(ガキ)放っておけばよかったと。
しかし、彼は言っていたようにシュガーローゼがどんな存在かを役人たちに知らせるかもしれない。今の状況でもそれは同じだ。すぐそこに居る警備隊員に告げ口をするだろう。逃げられなかった腹いせにもなるだろうし。
シュガーローゼは、気が遠くなりそうだった。脅しに屈する気はないのに、それが最善の策だなんて。悪夢を見ると知りながら眠りにつこうとするかのようだ。起きていても不眠に悩まされるだけ、しかし眠ったその先には幸福な夢は待っていない。
これしかないのかと、いっそむなしくなる。怒りや恨みの気持ちではなく、締観にも似た虚しさがシュガーローゼに押し寄せてきた。

道はいつも、一つしか用意されていなかった。それも、獣道とも呼べないロクでもない道。

大きな音をたてないように、シュガーローゼはため息を吐いた。それがすべて流れ出るのを待ってから、前触れもなくレフの手をとった。手をつなぐようなものではなく、まるでドアノブでも掴むような乱雑さで握ると、シュガーローゼは魔術を発動させた。

二度目の感覚に、今度は魔術を使われたのだとレフにも分かった。まばたき一つした間に、突然別の場所に引き連れられたのだと知る。

「やっぱり、二人はやりにくい……」

失敗した、とシュガーローゼは思わずこぼしてしまった。それは、魔術で次に訪れた場所が問題だったからだ。人通りの多い場所ではないが、こちらへと歩いてくる人間がいる。やや狭い路地裏のようだから、角を曲がってきたばかりのその人は、二人の少年少女が突然何もないところから魔法のように現れたのを知らない。その瞬間を見られていたら騒ぎになっていただろう。

だが、二人の子どもたちは一度拘留された身。本人たちは知らないが、役人たちにはレジスタンスを誘き寄せる餌と見なされており、大勢の人間に姿を見られるのは困る事以外の何でもなかった。

「こっちだ」

道が分かるレフは、掴まれた腕を逆に掴むとシュガーローゼを率いて歩き出した。

「ちょっと、いつまで掴んでるつもりよ。離して」

「見つかると困るのはお前もだろうが」

それはそうかもしれない。しかしシュガーローゼは町で犯罪を犯してはいない。レジスタンスの仲間かと疑われているだけで、何もしていない。そう言うつもりだったが、シュガーローゼに常につきまとう“死神のキス”がそれを阻んだ。

慣れた行為だ。どこかへ逃げる。身を隠す。人を避ける。いつもと変わらない。

言いたい事はあったかもしれないが、シュガーローゼは考える事

を放棄した。どうせ無駄だ。
　また逃げなきゃいけない。それならば今は、この少年を利用したっていいだろう。もっと安全な場所に行ってから離れてしまえばいいのだ。
　強く力をこめられた腕がうっとおしくて、振り払おうとするが少年の力にはかなわない。苛立った声でシュガーローゼは抗議した。
「離して」
　それがレフには同行の拒否に聞こえたのだろう、振り向きもしなかった。ため息を長々と吐き出したいのをこらえて、シュガーローゼはもう一度抗議した。いくらか言葉をつけ加えて。
「痛い。離して。逃げないから」
　レフの歩みが、ゆるやかになった。それでも顔をこちらに見せないし、シュガーローゼの腕を離しもしないが。
　どんどんとシュガーローゼの苛立ちは募る。やっぱりここから逃げ出してやろうかと思うほどに。ただ拘束された腕が痛かった。
「痛い」
　強い声音で不満をこめたが、ついにはレフがシュガーローゼの手を離す事はなかった。

47　地下水路

連れていかれた先は地下水路だった。町の地下を流れる水路。シュガーローゼが落ちた先にもあったように、家の下にある水路と町の間を道のように走る水路があるというが、中でも地下部分は広く入り組んでいるそうだ。身を潜めるのにはもってこいで、レフは以前にも来た事があると告げられた。

頭上には家屋があるであろう暗い地下の水路で、目が慣れるのには時間がかかった。その頃にはもう鼻が麻痺してきて、汚泥やら排泄物やらのにおいに慣れかけていた。鼻をふさいでも防げない悪臭に順応してきている自分の鼻が嫌だった。シュガーローゼは、地下水路に入ってやっと手を離された。

これで、今度こそレフとはおさらばだ。

腹立たしい事この上ない相手だが、シュガーローゼは他人を頭からしめ出すのが得意だった。もう今後関わる事ないだろう相手だ、せいせいする。

これでやっと楽になる。

暗いので壁に手をつきながら地下水路の足場を進む。

「……そっちは行き止まりだぞ」

シュガーローゼは足を止めた。

踵を返して来た道を引き返す。右に進むと、暗闇の中にぼんやりと行く手に十字路が見える。

この地下水路に入る時にどこの道を通ったか、覚えていない。

「あ、そうだ」

シュガーローゼは自分の魔術を忘れかけていたようだ。彼女は空間転移の魔術と、相手に電気の攻撃を加える魔術、火打石などの媒体なしで火を起こす魔術だ。最近は火を起こすような必要はなく、また普段は火打石を持っているために火の魔術を使っていなかったが、この空間では明かりが必要だから火の魔術がかなり有効だ。意

識を集中させて、常と同じように小さな火の玉を脳内に描く。それにだけ神経を研ぎ澄ませて、魔術を発動させようとしたのだが、シュガーローゼは違和感を覚えて中断した。わずか、頭が重い。目眩のようなものが一瞬、彼女の意識を白くする。

首を振って頭の靄を振り払おうとするかのように、シュガーローゼは目をぎゅっとつむった。右手を額に当てると、気のせい程度の熱を感じる。人は皆、熱を持っているのだから、これは微熱程度にしかならないと自分に言い聞かせ、シュガーローゼは我知らず震える息を吐き出した。

二度も慣れない行為――二人で空間移動――をしたせいだろう、一日に何度も魔術を使えるわけではない。魔術は今日はもう使えそうになかった。シュガーローゼはある人物に魔術を習ったが、魔術というのは非常にシンプルなものだ、とその者は何度も口にしていた。術者の体力か魔力が減れば使えなくなるというもの、魔術の多用はあまり良い事ではない。魔術に頼りきるのは良い事ではない。シュガーローゼに魔術を教えておきながら、使い過ぎるなと言ったのは何故なのだろう。今更ながらにぼんやりと思った。

なんとはなしに気だるい気分だからだろうか、シュガーローゼはいつも思い出して嫌な気分になる人物を思い出しても、怒る気にもなれなかった。いつもなら思い出してしまった自分自身を、あの嘘つきを、憤って不機嫌になるのだが、そんな元気すらなかった。

「おい、どうかしたのか？」

暗闇の向こうから、わずかためらい気味の声が飛んでくる。表情を視認するには暗すぎるが、相手の居る場所が分かるくらいには目が闇に慣れている。レフがそこに居るのだろうと、シュガーローゼは当たり前の事を思った。こんな地下水路に、他に誰が居るわけでもない。何かおかしくなったので、口の端が勝手に笑いそうになった。

「なんでもない」

「何だよ……」

シュガーローゼが疲れたようなため息を吐いた後に、笑ったのが不思議だったのだろう。レフの声には不満というより、怪訝な感情がはさまれていた。

「なんでもないって言ってるじゃん。それより、あんた何か明かりになるもの持ってないの」

「持ってねえよ。あの牢に入れられた時に身包みはがされただろ」

「ああ……」

シュガーローゼ自身普段から手持ちの荷物が少ない方であるせいか、手ぶらで行動しているのに気がつかなかった。この身ひとつで生きてきたせいか、手に何もなくとも違和感はないのだ。今はランプか何か明かりがほしかったが。

「“魔導の書”！！」

突然、レフが薄い闇の向こうで叫び出すのが分かって、シュガーローゼは小さく身を震わせた。小さくはない声は地下水路の向こうに響いたのだろうか、それとも闇の中に吸い込まれただろうか。シュガーローゼには聞き覚えのない単語を口にしていたが、耳になじんだ言葉でもあまり聞く気はなく、何を声をあらげているんだと少年の居る方向を白けた瞳で見ていた。

「あれは、本物だ、くそっ。手放すつもりなんかなかったのに……！」

ぶつぶつと何かをつぶやくレフに興味はなかったが、シュガーローゼはあいにくと道が分からない。自分一人で歩いてもいいのだが、魔術も使えない今、この地下水路に迷子になる可能性だって低くはない。非常に不本意だが、レフという少年の出方を見てから今後どうするかを決めるつもりでいた。

「取りに……いや、でも…」

少年の声は闇に溶けていった。シュガーローゼは、こんなはずではなかったのにと思う。誰かと行動を共にするつもりはなかった。ここ最近は、常に傍らに誰かがいる。しかも、今は相手の出方をうかがって待機中。

壁に背をあずける少女の腹が小さく空腹をうったえてきた。腹の虫の鳴く声はとても小さく、闇の向こうのレフは自分の考えで頭がいっぱいで聞こえなかったようだ。シュガーローゼ自身、頭では空腹だと感じていなかったが、どうにも腹部がぐるぐると渦巻いているような感覚だけは知っていた。あまりの空腹感に、何も入っていないはずの腹に何かエネルギーが生まれるような感覚だ。その力は外に向かっており、食事を与えられない事を怒っているかのように、腹の外に何かを伝えてくる。

空腹と、少しの疲労と、ほんのわずかな眠気が、シュガーローゼの動きを鈍いものにしていた。

今しばらく、少しだけ。少女は瞼を閉じて首を上にのばし、こつんと壁に頭をつけた。

48　盗み聞き

シュガーローゼとレフが牢を脱し、地下水路に落ち着いてから、時刻は少しだけ遡る。

静かな午後だった。ケイスは人に会う事なく建物の中を進む事が出来た。誰かに会いたくなかったわけではない。むしろ、人にこれまでの経緯を説明してほしかったが、誰一人廊下の扉から、あるいはケイスの背後から姿を見せようとはしなかった。廊下はそう長くもなく、五つの扉を開けずに通り過ぎたら、突き当たりに一際大きいドアがあった。わずか隙間のあいたドアの向こうには人の気配があり、近づくにつれ声がもれ聞こえた。

「……から、簡単だ……」

「しかし……町の治安が……」

何人かの男たちが公の場で使うような声音で話あっているようだ。柔らかな絨毯が足音が消してくれるのをいい事に――ケイスは仮にも武人の端くれ、気配を消す事も可能だ――ゆっくりとドアの手前で身をひそませた。どうして盗み聞きをするような真似をしようと思ったのか分からない。ケイス自身に何もやましい事はないはずが、自然と体がそうしていた。怪我が痛むために完全にではないだろうが、息をひそめてドアの向こうの人間にこちらの存在を気づかれないように声を聞き取った。

「……処刑なりなんなりすればいい。いい見せしめになる」

「それは軽挙妄動というものだ」

「全てはレジスタンスどもをおびき寄せるためですよ」

「相手はまだ子どもだろう」

「親もない浮浪児だ、問題ないだろうよ」

「しかしな、そうなると……」

話の議題がすぐには分からなかったが、ケイスはある一つの仮説にたどり着いた。彼らが誰であるかはまだ分からないが、おそらく

このチェルヴォの街の重役たちだろう。警備隊や街の役人たち。彼らが今話し合っているのは、もしかしたら――。

胸騒ぎがしたせいだろうか、左肩の傷がひどく痛み、ケイスはそれを抑えこむかのように右手で包んだ。ただの推測であってくれと、ケイスは心拍数が増えるのを感じながらまだ耳をすませていた。

「何か罪状をでっちあげて、火刑に処すとでも噂を流させるのでもいい。レジスタンスの尻尾を掴めるのならな」

「何もそこまでやらずとも……」

「いや、あのクソガキどもには一度灸をすえてやらねばなりませんよ。私など何度泥棒に入られたか」

「確かに、私もあの少年の方は見覚えがある。よく同僚がぼやいていたのも彼だった。しかし、女の子は方は見かけない顔だったが」

「あの少女はやつらレジスタンスのガキの仲間です！　私の店にあの少女が顔を見せた時間、捕まえ……いえ、ガキどもが悪さをしに来ていたんです。陽動のつもりだったのでしょう、あの少女にはまんまと騙されましたよ」

少年と少女。それだけでは分からない。しかし、昨日の今日だ。ケイスの頭にあるのはそればかりだからだろうか、彼らは今、シュガーローゼと、ケイスは名前を知らない少年について話をしているのではないか？

もしそうだとして、彼らはとんでもない事を話しているのだと分かると、どっと焦りがケイスを襲った。火刑に処す？　レジスタンスをおびき寄せる？　ケイスの知らないあの少年は、レジスタンスだったのか？

少なくともシュガーローゼは違うはずだ。レジスタンスなどに属しているはずがない。ここしばらく、彼女は少し体調を崩してはいたが、フランベという優しい女性に守られて暮らしていたはずだ。勘違いをしているのだろうか、それとも本当にあの少年がレジスタンスの仲間で、シュガーローゼも誘われたのではないか。可能性がないとは言い切れないが、もしそうだとしたら言い逃れは出来ない

だろう。
　別人であってくれと、ケイスは願うばかりだ。ドアの向こうで話されている誰かの存在が、シュガーローゼではないと思いたい。彼らは、シュガーローゼを害そうとばかりしているのだから。
　動揺があったためだろう、体中の痛みをこらえるために一度体を動かしたら、つい物音を立ててしまった。しまったとケイスが目を見開いても、もう遅い。
「誰だ？」
　ドアの向こう、ケイスが盗み聞きをしていた相手から声が上がる。彼は何もしていないはずなのだが、まずいという思いが警鐘のように頭の中を駆け巡った。青年はこの場を去るべきか、逡巡した。肩の傷が、逃げろというのか、それともこの場に留まれというつもりか、強く拍動した。
「おい、誰か居るのか？」
　人の立ち上がる気配がする。ケイスは傷口の痛みに我知らず目をつぶってしまっていた。
　逃げるべきだと思う頃には、もう足音がすぐそこまでに迫っていた。今ケイスが身を動かしたら、相手にも伝わってしまうだろうか。平素ならばもっと身軽に動けるが、今の状態では分からない。
　物音を立ててしまっても、この場にケイスはいない方がいいのだ、そう決めたその時だ。
「私です。皆さんお疲れでしょう、お茶をお持ちしました」
　ケイスは目を丸くした。いつの間にか、目の前には青年が立っていた。彼はゆっくりと右手でドアを手前に開く。扉に押されるようにして、ケイスはドアの向こうからは完全な死角になる場所へと導かれていった。
　青年はケイスを一度も見ずにドアの向こうへと消えた。まるで彼には何も見えてはいないかのように。ドアは閉まり、誰もケイスの存在に気づいた様子はないようでもう隙間のないドアが開く事はなかった。

助かった、という事なのだろうかと考えて、何もケイスは身の危険にさらされていた訳ではないというところからして間違っているのだと自分の考えを改める。ケイスをかばうような形で見て見ぬ振りをしてくれた青年は何者なのだろうか。どこかで見た事のあるような顔だったが、思い出せない。

このままこの場所に居るのはあまりよろしくないだろうとケイスは判断し、名残惜しく一度ドアを振り返ってから元来た廊下に引き返した。長くない廊下だったが、ケイスはやはりまた誰ともすれ違う事なく歩き続けた。いくつかの扉を通り過ぎたところで、自分が出てきた部屋はどこだったかと眉を寄せた。立ち止まった場所からは、同じデザインの四つの扉が見える。その反対側は窓で、窓もいくつも広がっているためにこれといった特徴のなかったケイスの部屋を思い出せなかった。片っ端からドアを開けるのは不躾というものだし、ケイスはちゃんとどこから来たのかを覚えておくべきだったと後悔した。

癖になってしまった、左肩を抑える動作をしながら、どうしたものかとケイスは思案する。

「何をなさっているんですか」

感情が抑えられたような声は平坦だったが、ケイスはびくりと身を震わせた。そのままの勢いで振り返ると、そこには先ほどケイスの存在に気づいておきながら、黙ってドアの向こうに消えた青年が居た。

「その、ここのどこかの部屋に居たんですが……」

言葉はまだ続くはずだったのだが、ケイスの横と通り過ぎて、青年は一つの扉を開いた。

「どうぞ」

冷たいという訳ではないがどこか温度の感じられない声で青年はケイスを見ていた。道案内をしてくれたのだろうか。ケイスはいささかの戸惑いを覚えながらも青年の促しに従った。部屋の中に入ると、確かにケイスが少し前まで眠っていた場所に見えた。ケイスが

かけ布団を跳ね除けたまま出てしまった事を気にしていた布団の形がそっくりだ。人がさっきまで眠っていた事がよく分かる形になっている。

ドアの閉まる音がして、やっとケイスは青年までもが部屋の中に入ってきている事に気がつけた。

何も言わずに青年はケイスを見つめていた。黙りこくっているせいか、青年の顔に感情は見つからない。

目鼻立ちは地味なものだったが、その青年には黙っていられると相手をたじろがせるような空気があった。威圧感というものとはまた違う、なんとはなしに相手に何かを言わなくては、と思わせるようなものだ。

「……どうも、ありがとうございます」

ケイスはまず、道案内をしてくれた事に対して礼を言った。青年の表情に変化はなかったが、口を開いた。

「カルロです。こうしてちゃんと話をするのは初めてですが、私たちはお互いの顔を知っています」

唐突に言われ、ケイスは小さく眉を寄せた。何を言っているんだと首をかしげたくなり、青年をしばし見つめた後、カルロという名前で思い出していた。

「あ、一度、マルセルさんと……！」

会った、というのは間違っているかもしれないが、街の庁舎でマルセルが遠目に会わせようとしたのは、カルロという名前の男だった。記憶を掘り起こしてみれば、確かにこの青年は庁舎に居たカルロと呼ばれた男と一致する。

「一つ聞きます。あなたは、あのレジスタンスの少女と関わりがあるのですね？」

問いかけておきながら、カルロの中ではそうだと決まっているかのような口ぶりだった。ケイスはむっとしながらも答えた。

「もし僕の知っている少女の事を言っているのなら、それは違います。彼女はレジスタンスではありません」

「世間はそう見ていないようですが」
何もレジスタンスが悪だと、ケイスは思っていない。だが、シュガーローゼがレジスタンスだと認めてしまえば、処刑されるとまではいかなくとも、必ず良くない事が彼女の身にふりかかるだろう。まだ完全に認められていないのはケイスも気づいているが、仮にも仕事仲間を相手に、ケイスはどうしても警戒を解けなかった。
「だとしたら、どうだと言うんです」
「あなたにはもっと身の振り方を考えてもらいたい」
言葉の意味を量るようにケイスは目を細めた。
「私はあなたを歓迎していません。仕事仲間などとは」
思ってもいない。声は淡々としたものだが、カルロは小さく皮肉な笑みを浮かべた。
ケイスの心が小さくしおれた。まだ歓迎されていないのか、と。しかし、今は彼の言葉に打ちひしがれている場合ではない。エメラルドの瞳を毅然と輝かせて、カルロに対応する。カルロの表情はもう歪んではいなかった。
「水路でのことも見ました。目立つ真似を……」
「……あれは、そうですね。でも、今回の事は、いろいろと事情があって…」
レジスタンス疑惑のかかっているシュガーローゼとの関係性を問われているのだというところで、ケイスはやっと彼女の安否を心配していた事を思い出した。さっきまでは、彼女の今後が危ぶまれているというのでやきもきしていたのだが、では今現在の彼女はどうしているのかという問題にぶつかったのだ。
「そうだ！　彼女……ローゼはどこに、僕と一緒に居た少女と少年は、今どこに居るんですか？」
じっと、冷静なカルロの瞳にぶつかって、ケイスはいささか声を小さくしながら、もう一度問う。
「私と一緒に運ばれてきた少女が居るはずです。居場所をご存知ないですか？」

カルロは急に背を向けると、窓際に身を寄せた。そこに小さなテーブルがあり、水差しとコップが置いてあった。
「……あなたは一人でここに運ばれてきました」
「そんなはずは……！　この部屋にはそうかもしれませんが、二人の子どもが居たはずです」
窓から差し込む午後のゆるやかな光を浴びながら、カルロは静かな動作で水差しからコップへと、水を注ぎ込んだ。ケイスは彼に詰め寄りたい気持ちだったが、そうはせずにただその動きを見つめていた。小さく拳を握りながら。
ほんのわずかの間、カルロは透明な水を眺めていたように感じられたが、コップをケイスに突き出してきた。
「喉が渇いたでしょう」
落ち着いてくださいとは言わなかったが、カルロが言いたいのはそれなのではないかとケイスは感じていた。困惑と、小さな疑いが隠せなかったが、ケイスは礼を言うとコップを受け取って喉を潤した。
コップの水が半分ほど減るのを見守った後、カルロは言葉を続けた。
「ですから、彼女たちは別の場所に居ます。あなたは、私がこちらへと運ばせました。あなたの不始末は私たちにも及びますから」
「それはどういう……？」
「あなたのお探しの人物は今、牢屋に居ます。あなたまでそこに入れるわけにはいかなかった」
ケイスは息を飲んだ。ずきんと一番大きな傷口が痛み、肩を抑えた。
「何故、牢なんかに……！」
シュガーローゼに関しては無辜（むこ）とは言いがたいだろうが、彼女は今回何もしていないはずだ。“死神”である事も隠しているようだったし、一体彼女がこの街で何をしたのか？　少なくともチェルヴォではシュガーローゼが“死神のキス”を使っていないというケイ

スの推測が間違っているのだろうか。
「疑わしきは罰せよ、という風潮ですからね、今は」
オスティオの危機感は、表立っては目立たないものの、役人たちや権力者は不穏な空気をしっかり感じ取っていたのだ。だから、何か起こる前に手立てをと関所の検査を厳しくしたり、レジスタンスの疑いのあるものはひとまず捕らえていたのだ。
「でも、まだ子どもですよ」
「少年の方は街では有名でして、小さなものですが何度も騒ぎを起こしています」
そのせいで一緒に居たシュガーローゼも疑われているというのか。少年には悪いが、ケイスはあまり良い気がしなかった。いや、少年の方にも何か理由があるのかもしれないと考え直すと、そもそもの問題に立ち返った。
「……彼女たちに、会う事は出来ますか？」
「やめておいた方がいいでしょう。これ以上怪しい動きはなさらないでください。それから――」
遠くで、ドアを乱暴に開く音がした。ケイスたちの居る部屋に向かって足音が聞こえ、それは通り過ぎた。ずいぶんと急いでいる様子で、どかどかと足音の持ち主は音を立てて行った。
カルロがそっと、音もなく部屋の出入り口であるドアの方へと向かった。
「大変です！　牢が空です！　ガキどもが逃げました！！」
大声は、カルロが開けていたドアの隙間がなくともここまで聞こえたかもしれない。ケイスは、これ以上ないというくらいに目を見開かせ、ドアの元へと駆け寄った。不満そうにカルロが顔をしかめたのも目に入らない。
シュガーローゼたちが脱獄した、という事なのだろうか。ケイスは喜んでいいのか分からなかった。
「すぐに探せ！　おい、警備隊どもに町中を探させろ！」
建物の中は、にわかに騒然とし始めた。

「それでは、私はこれで……」
「なんてガキだ」
廊下には足音が響き渡り、身を乗り出そうとしたケイスが誰かと目が合う前に、カルロによって遮られ、扉は閉じられた。
「様子を見てきます。あなたはここで大人しくしていてください」
疑うような目をしておきながら、カルロは約束を促すかのようにしばしケイスを睨みつけた。どうせ顔は納得いっていないものになっているのだろうと、自覚はしていたが、唇を噛んでケイスは頷いた。
「それから、あなたは怪我人だという事もお忘れなく」
そう言って、カルロは部屋を出て行った。

49　ケイスの理由

扉の向こうに気配が消えて、ケイスは小さく息を吐いた。
カルロは他のチェルヴォの仕事仲間と違って、また一味違う人間のようだ。今では少しずつ認めてもらえてはいるが、最初に出会ったばかりのマルセルやサムソンのように、ケイスの存在を迷惑がっている。
あの若い青年ともう少し話をしたかったが、そう時間はない。考えるべき事はたくさんあったが、事態は急を要する。
ケイスはどうしたらいいだろう。どうしたいかなら、もう分かっている。
ただ、ここでケイスが一個人としての行動がどういう影響を起こすかを彼は知っている。彼の行動が何に被害を与えるか。分からないはずがなかった。
任地であるチェルヴォ、ケイスにとっての異国であるオスティオで、彼が軽々しい行動を取れば――しわ寄せはいずれ王都シェーンへとたどり着く。ケイス・ルブランを信頼し、一人で送り出してくれた人間を、ケイスを大切にしてくれた人を、裏切る事になるだろう。そう思えば、肩の傷よりも強く胸は痛んだ。
だが、理性は感情に抑えつけられていた。体は勝手に動いていた。
椅子にかけられていたケイスの上着を手に取ると、肩に気を使いながらゆっくりと着た。腰に寂しさを覚え手をやると、剣は存在しなかった。部屋を見回しても武器になりそうなものは何一つない。
それでも、ケイスは身なりを整えて、歩き出していた。
ドアの先へ。

†　†　†

ケイスはルブラン家の養子である。幼い頃に当主であるベネディクトに引き取られた。元々貴族ではなかったためか、ケイスという少年の違和感を、周りの子どもたちはすぐに感じ取った。

まず入った学校で、よそ者は去れと言わんばかりのいじめを受けた。

子どもだったケイスは素直に悲しんだ。そして、これまでに通ってきた道から、抵抗というものを考えなかった。いじめっ子たちを避け、なるべく息をひそめるようにして学校生活を暮らした。

ある日、養父であるベネディクトが「剣術を習わないか」と言った。幼いケイスには新しいものに楽しいという感覚は付随しないと思っていたので、頷く気持ちにはなれなかった。しかし、ルブラン伯爵は嫌だと駄々をこねるでもない義理の息子をどう受け取ったのか、稽古場へと連れていった。これまでケイスを使用人の手に任せてきたルブラン伯爵が、この時ばかりは御自ら稽古をつけたのが、この時からだった。

最初、ケイスはただ伯爵の言われるままに稽古を受けていたが、いつしか無心で木剣を振るうようになっていた。彼はこうも気づいていたのだ。剣の稽古をしている間だけは、養い親が自分だけを見てくれている事を。

いつの間にか、いじめっ子たちはケイスを構わなくなっていた。彼の雰囲気が変わったのが分かったのだろう。

最初にケイスに手を差し伸べてくれたのは、ベネディクト・フォン・ルブランだった。

上級学年になって、進路を考える必要に迫られた頃、ケイスはハウストに出会った。ハウストは気のいい人間で、またケイスとも馬が合ったのだろう、最初こそは今のような仲になるとは思ってもいなかったが、いつの間にか一緒に居るのが当たり前になっていた。ケイスの通っていた学校は、庶民の少ない学校だったためか貴族でない友人は初めてで、ハウストのものの考え方の方が元々貴族でもなんでもなかったケイスとは合っていたのかもしれない。何より、ハウストも武道をたしなんでいたのが、彼らを仲良くさせたのだろう。

いつしか彼を通して、騎士になるという考え方を知ったケイスは、一つの可能性に気づいて騎士団に入る事を決めた。

騎士団に入って、騎士見習いに慣れてしばらくした頃、ケイスの身に不幸が襲い掛かった。心身ともにぼろぼろになっていた。その時に、手を差し出してくれたのはハウストだった。それから、後になって気がついたのだが、他の騎士団員も彼を気遣ってくれていたという。

シェーン王国騎士団は、ケイスにとってはもう一つの“家”になっていた。いつからかわずかなぎこちなさを覚えはじめたルブラン伯爵邸よりも、あたたかなホームだった。王都に帰るという事は、騎士団に帰るという事と同じなのだ。

だから、ケイスの足を鈍らせるのは、騎士団のみんなを裏切るという行為を働いてしまうのではという心配からだ。

団長であるキースの信頼にも泥をかける事になる。

頼りないはずの若い騎士を、仲間が待つとはいえ一人で送り出した団長は、ケイスを信頼していたから、そうしたのだ。

きしる心は、足を止めろと叫んでいた。

だが、もう、触れてしまった。

ケイスは、いつか助ける事の出来なかったそれに近いものに、手

で触れた。
たとえその身にどんな事が降りかかろうとも、白いそれだ。
迷わせるシェーンのしがらみを思えば、苦しいほどだが、ケイスがチェルヴォ（ここ）に居る理由を考えたら、偶然ではないのだとしたら、居ても立ってもいられなかった。偶然でもよかった。
シュガーローゼに危険が迫っていなくても、上手くどこかへ逃げていたとしても、たった数日前にはすぐ手の届くところに居た彼女を、知らぬ振りをして見捨てる訳にはいかなかった。
キスはした事があっても、腕の中に抱きとめた事があっても、彼女を何も知らない。まだ何も知らない。
まだ、何も、だ。

† † †

騒ぎ、というほどのものではなかったが、ケイスがうろつき回っても咎められる事はなかった。堂々としていればまず怪しまれる事はないと、いつかマルセルが言っていた。それを実践しながらも、ケイスは焦ってもいたのだが、どうやら建物の中にはあまり人が居なくなってしまったようだ。
まずは現場を見たいと思い、ケイスはシュガーローゼが閉じ込め

られていただろう牢屋を探していた。この建物の中にはないのかと思いはじめていた頃、ケイスの肩に手がのった。

「――……！」

その痛み、一通りではなかった。という程ではないのだが、怪我をした左の肩に手が触れたために、ケイスは痛みをこらえる必要があった。

「ああ、失礼。そちらは怪我をした方でしたね」

分かっていてやったのでは、と思うには感情のこもっていない声で、わずか恨めしく振り返ったその先にはケイスが予想した通りの人間が居た。カルロ、チェルヴォで潜伏調査を行いシェーンに伝える仕事をする人間のうちの一人だ。

「それで、何をなさっておいでで？　安静にしていてくださいと言ったはずです」

有無を言わさぬ口調、カルロはやはり怒っているのだろうか。ケイスはもう二度と誰にも左肩を触らせるものかと言うように、肩を右手でかばってカルロの瞳を受け止めた。

「申し訳ありません。私は、今回の任務を続けられません」

案の定カルロは眉をひそめて不快そうな様子をあらわにした。彼にしてみればそうだろう。突然シェーン王国からやって来て、目立つ行動ばかりをとる青年が今度は仕事をおりると言い出したのだ、身勝手にもほどがある。だが、ケイスはこれ以上自分の身分を持ちながら動き回るのは危険だと思ったのだ。騎士団から除隊する覚悟でいた。ひいてはこのオスティオ王国での任務も、これ以上騎士団員として参加する事は出来ない。

これからする事は、一個人の、ケイスという――ルブランの名も持たない――一人の人間がやらかした事だ。

もしこれが道を踏み外すという事なのだとしたら、騎士の名前は要らなかった。彼らに迷惑をかけたくはなかった。

そうまでする必要があるのか？　ケイスの中の誰かが言った。分からない。彼はずっと、ちゃんとした答えを出さずにきていた。

それは今も出ていない。
だがそれが何だというのだろう。
何か理由が必要か？
それは分かる。要らない。
何事も感情に従うのが良い事だと、ケイスは思っていない。
ただ、魂に従うのは間違ってはいない。そう知っている。そう信じている。
彼は過去のあやまちを正したかっただけなのかもしれない。それもあるだろう。いつか、救えなかった彼女に重ね、シュガーローゼを助けるのだと、思い上がって、勘違いで、傲岸不遜になっているのだろうか？
そう、ささやきはいくつもたくさんある。
しがらみもたくさんある。
だから、たった一つ、信じてみようと思う。
自身の真ん中にあるものを。ケイスという人間を成す核になるもの。
それは今、彼のエメラルドの瞳の中に燦然と輝いているものでもあった。
「騎士団を辞めると、団長にお伝えください」
いつしか、カルロは顎を引いてうつむきがちになっていた。ケイスの処遇を考えてでもいるのだろうか。彼にどう思われようと、何を言われようと、ひるむつもりはなかった。もう一歩も引き返すつもりはない。
カルロは、音もなく息を吐いたようだった。ゆるゆると、首を振る。
「そんな事だろうと思いましたよ……」
突き放したような、呆れたような、どこか哀愁を帯びたような声。
ケイスは思わずカルロをまじまじと見つめてしまった。目の前の彼は、いままでで一番人間らしい顔をしていた。駄々をこねる幼い子どもを見るような、怒りたいのを我慢しているような、わずか悄然

としているような――小さな笑みだった。
目の高さにまで持っていたものを持ち上げて、ケイスに受け取るように促した。見覚えがあるような、ないような、そんな小さな鞄と書物が一冊。カルロは一体何を押し付けようとしているのか、目線で問いかけた。
「牢に閉じ込められていた者の持ち物です」
それが誰を指すのか、分からないケイスではない。目を見張って荷物を受け取った。
「何で――……」
「私はあなたに早く街を出て行ってもらいたいのです。言いましたでしょう、歓迎していないと」
またしれっとした表情に戻ったカルロだが、その目だけがどこかいたずらっ子のように光っていた。それもすぐに引っ込むと、彼はもう一つ荷物をケイスに手渡した。
「長剣は目立ちます。こんなものしかありませんが」
短剣を一振り、ケイスの手の平にのせていた。更にケイスは目を見開くと、この男には一体どれだけ驚かされればいいのかと感じていた。
「早く行ってください。騒ぎが収まれば、あなたの事も問い詰められます」
「なんというか……何から何まで、ありがとうございます」
すっかりカルロは窓口対応モードの役人無表情に戻っていたが、ケイスは礼を言わずにはいられなかった。
そろそろ行った方がいいと分かっていたが、ケイスは歩き出す前にもう一度何かを言いたかった。カルロはもう、こちらには背を向けていたが、もらった短剣を握ると、口を開いていた。
「皆さんに、よろしく……いえ、すみませんと……」
迷惑をかけどおしだった。今更何の弁解が出来るだろう。そして、これからももしかしたら、ケイスの取った行動のせいで彼らが被害をこうむるかもしれないのだ。声は尻すぼみになり、何を言ったと

してもケイスはやはり、彼らには認められない存在になるのだろうと分かった。

馬鹿な事を言ったと、ケイスは少しうつむきながら、もう口を閉じていようと決めた。カルロはもうこちらを向いてはいないのだ。踵を返そうとした時、カルロが振り返った。

「お元気で」

眉は八の字に近く寄せられていたのだが、悲しんでいるようには見えなかった。口は笑っていたからだろう。どこかニヒルな笑み。仕方がないさ、とでも言うような、問題ないさ、とでも伝えるような、そんな表情をしていた。ケイスが王都でいつか見た、とある俳優のする笑みに似ていた。あの俳優の名前はなんだっただろうと思った頃には、カルロはもうケイスを向いてはいなかった。

彼らの道はここで分かれたのだ。

そうと気づくと、ケイスはぐっと拳を握り、歩き出した。建物の外へ。

50　地下を突き進む

レフはしばらく自分自身の考えに没頭していたが、何かを諦めたようにして歩き出した。

少年の後について行く気になったのは、何故だろう理由が思いつかない。ただ、さすがのシュガーローゼもこんな真っ暗闇で迷子になるつもりはなく、地下水路から出た際にレフと別れればいいと決めていた。それまでの我慢だ。

シュガーローゼは胸の辺りに奇妙な吐き気に近いものを抱いていた。慣れてしまった地下水路のにおいや空気が吐き気につながっているのだろうと分かる。いささか頭も痛いが、気にしなければ何でもなかった。彼女は暗闇の中に体のわずかな不調を隠して、歩き続けていた。

会話もないままの二人が、ふとその沈黙を途切らせたのはレフの目的地についての話がきっかけだった。

「カロゼッロ共和国に行く？」

「そう、海路で」

シュガーローゼも共和国行く事にしていた、レフと行く先が一緒だというのは――彼女にとっては非常にやる気を削がれるものであった。たとえ道が同じでも同行などはしたくない、というのがシュガーローゼの考えだから、自分もそこへ行くつもりだなどという余計な事は口にしないつもりだった。万一、カルツのように同行する事になっては困る。

何しろ、レフはシュガーローゼを復讐の道具に使おうとしているのだ。今のレフの態度こそ、気安いものがあるとはいえシュガーローゼは油断するするつもりはなかった。

「そういえば、船には乗った事ないな……」

ふっと、少年が笑った気がしてシュガーローゼは顔をしかめた。何を笑ったのか、とレフを問いつめるように睨んだのが見えたわけ

でもないだろうが、暗闇の向こう彼は口に出して応えてくれた。
「船、乗った事ないんだ」
自分が、意識せずに心の内を言葉にしていたと気がつけたのはこの時で、シュガーローゼはより一層顔を苦いものにした。
失敗した、とシュガーローゼは思っていたが、口にするつもりのなかった言葉だと訂正するつもりもなかった。
ただ、何故か勝ちほこったかのようなレフの瞳が苛立たしかった。
「オレはあるよ。お前はきっと船酔いしそうだな」
「知らないよ。別に乗るつもりないし」
「これから乗るだろ」
「はァ？　なんでそうなるわけ？」
「オレたちの進んでる地下水路は、港町のファーロに続いている。さすがにオレたち程度を追うために港封鎖まではしないだろうから、船旅が一番安全だ」
レフの言葉の意味をとりかねて、シュガーローゼは小さな困惑を瞳に浮かべた。
「陸路だと、どこかで捕まるだろうし役人たちの介入がたやすい。船は、一度乗ってしまうと役人たちの手も届かないから目的地までは安全なんだ」
「……そう…？　てゆうか、それがわたしに何の関係があるわけ」
「大アリだろ。お前もこの地下水路を引き返すわけにはいかないし、たどり着く先が港しかないなら、そこにずっと居るわけにもいかない。まだ逃亡を続けるなら、オスティオを出るべきだ」
逃亡生活をしていたわけではない、と否定しようとしてシュガーローゼはほとんど代わらない生活をしていたのだと気がつく。というよりむしろ否定など出来ないではないか。焦るように、急いた旅はしてこなかったが、確かに彼女は逃げていた。王都から、死神少女の噂の届かない場所へ。ここではない、どこかへ。今居る場所から逃げるようにしてやってきた。それは逃亡生活と同じ事。何しろ人を殺してきたのだし、逃亡生活は続ける必要がある。

「ファーロは、貿易で栄えているために国際色豊か、外国人とかいろんな人と接触する。人を選んで商売する事が少ない、懐が広い寛容な人間が多いらしい。言ってしまえば犯罪者であろうと、門戸を開いてくれるらしい」
「……あんた、妙に他所の町に詳しいね」
レフは、目頭をぴくりとかすかに動かした。一拍おいて、ちらとシュガーローゼが少年を見た時には当然だろ、という平然とした表情になっていた。
「普通だろ。とにかく、よっぽどの非情な人間が乗組員じゃない限り、船に一度乗ってしまえば海に放り出される事はないはずだ」
「立派なプランだこと」
皮肉った笑みで、我関せずという表情をしてみせる。シュガーローゼには他人事。レフがこれからの逃亡ルートの話をしても彼女には全く関係ないのだ。
「むしろ海に放り出されちゃえばいいのに」
「……」
口の端をひくひくさせて、レフは怒りを無理矢理に抑えこんだ努力の見える笑みを浮かべた。
「お前もな」
「乗らないし」
「じゃあどうやってファーロから出るんだよ」
「あんたに関係ないでしょ。それにわたし、魔術が使えるの。あんたには船旅が唯一安全な道でも、わたしは違う」
シュガーローゼの魔術を忘れかけていたレフはそうだったと一度目を見開いたが、苦虫を噛んだように顔をゆがめた。
「そうですか」

†　†　†

実際は一日以上は移動に時間がかかっていたが、ずっと闇の中に居るものだから彼女たちに時間の感覚はなかった。

だらだらと休みながら歩き続けると、シュガーローゼが思っていたよりも早くに出口にたどり着いたようだ。空気が静かに変化してきた。冷たい風は、こもった地下の生ぬるい空気に徐々に混ざっていた。新鮮な風が肌に感じられる頃になると、レフが「出口だ」と小さなつぶやきをもらした。

突然終わった道は、階段につながっていた。そこには明かりが差し込んでいて、すっかり闇に慣れた目には痛いほどまぶしかった。

暗い道を歩いていた時には目が暗闇に慣れても先が見えず不便だと感じていたのだが、今度は慣れない日の下に目が混乱する。シュガーローゼは目眩を感じ、一瞬で終わらない事に戸惑った。天地の違いが分からなくなる。ここはどこだ？

「……おい？」

逆光の中、人の影が黒く浮かび上がって、白と黒のコントラストにまた目が回った。日差しを遮ってもらえても、シュガーローゼの頭はまだ正常に働けなかったのだ。

「おい、お前すげぇ顔色悪いぞ？！」

遠くから焦ったような声が聞こえて、シュガーローゼは自分がどこに居るのか分からないのにしゃがみこんでしまっている事だけは理解した。脛が階段の角にでもあたっているのだろう。固い感覚が

足に当たる。それでも視界ははっきりしない。
「とりあえず、ここ出て……！」
誰かが何かをわめいている。シュガーローゼの意識は消えないままでも、ぼんやりと輪郭を伴わないものへと変わっていた。
「町へ……」
何度か意識を失いかけたが、少女は港町を訪れるまでにレフの声と、彼に背負われているという実感があった。まるで夢のようなものだと感じてはいたが、船に乗ってゆられているとも思っていた。

51　潜伏調査中

裏道に逸れて、身をひそめるようにして青年が辺りに気を配っていた。ケイスの事は誰も躍起になって探してはいない。しかし、ケイスをしょっぴいた警備隊員にでも見つかれば怪しまれる事間違いない。何せ形だけでも一度逮捕したような相手だ。ケイスはあまりおおっぴらに動けない。しかし、彼が頼れる人は誰もいない。チェルヴォの同僚たちに迷惑はかけられないので、彼らに見つかっても困る。何とか自分の力でシュガーローゼを見つけ、場合によっては助けなければならない。

あちこちと移動してみても、ケイスは警備隊員を警戒するあまりに何の手がかりを見つけられていない。

一度、シュガーローゼに同行していたはずのフランベを捜しに行ったのだが、彼女は見つからなかった。一体どうしているのか、知る手立ては彼にはなかった。

探す人物の足取りを見つけられない。突然大都会に放り出され、小さな蟻（あり）を見つけてこいと言われたようなものだ。望洋とした世界を前に、ふと自分が小さく見える。視界の端から端まで、三百六十度広がる真っ白な空間に、ぽつりと落ちた黒いインクの染みみたいに。

一瞬、脳裏に王都の仲間がよぎって、こんな事ではいけないとケイスは知る。自分の立ち位置を考えれば、しでかした事を考えれば、無駄な時間を過ごす訳にはいかないのだ。

新たな気持ちに切り替えて、角を曲がる。数歩歩くうちに人の声がして、足音を忍ばせてゆっくりと相手が誰を確認しにかかる。まだ若い――というより、子どもだった。三人の女の子どもたちがささやきながら歩いているだけ。彼女たちも町の異変を感じとっているのだろう、楽しげにはしていないが、警備隊員との関係が全くない事は確かだ。

何事もなくやり過ごすつもりでいたケイスだが、ふとシュガーローゼの傍らに居た少年を思い出す。顔をはっきりと覚えてはいないが、今の少女たちと年は代わらなかった気がする。ケイスは正確なシュガーローゼの年は知らないが、彼女とも年は近いだろう。今までずっと成人男性ばかりを警戒し、それ以外の人間には怪しまれないようにとやり過ごしてきた。子ども相手なら、警戒する事もない。そして、年が近いならあのチェルヴォの少年とも知り合いかもしれない。シュガーローゼにつながる少年がどこに居るかを知っているかもしれない。一縷の望みかもしれないが、この機会を失ったらもう二度とシュガーローゼにつながる手がかりは手に入れられないように思えて、ケイスは口を開いていた。

「あの、ちょっと君たち」

少女たちは、瞬間顔を見合わせたが自分たちの事だと思わなかったのか、無視しようとしたのか返事をしなかった。立ち止まりはしなかったものの、彼女たちは足をゆるめたのでケイスは近づいて行った。

「この辺りで、君たちくらいの年の女の子と男の子、見なかった？」

今度こそ無視しきれないと悟ったのだろうが、少女たちは目をケイスと合わせようとはせず、困惑してみせた。

「し、知りません！」

と、一人が言うと掛け声もなしに三人の少女たちはぱっと駆けて行った。怪しまれてしまったかとケイスは小さく苦笑する。

しかも何も知らないと言われてしまった。これで話は振り出しに戻った。あちらこちらへと聞き込みをする訳にはいかないが、今回の案はいいかもしれないと思っていた。子どもに聞くのは、すぐ通報される可能性が低いし、子どもの目線でならケイスの見つけられないものが見つかるかもしれない。手がかりは、町の子どもから得られるかもしれない。

「よし」

指標のなかったさっきまでと比べれば、まだ時間が有意義に使え

る気がしてきた。とはいえ悠長にはしていられないし、このままあちこちをうろついていれば一度決めた事がゆらいでしまいそうだ。

やはりケイスには時間があまり残されてはいないだろう。あまり時間がたつと、シュガーローゼたちも遠くへと行ってしまう。それからケイスの決意もどこかへ――それはないと信じたいが、全くシュガーローゼの手がかりがない場合は、彼女たちはもう近場にいないと見なし、考えを改める必要性が生じてくるだろう。

とにかく誰か子どもに話を聞きたくて、ケイスは再び歩き出した。いくらか歩くうちに、身なりが少し汚れている五歳程の子どもに出会った。目が合った瞬間、ケイスは相手を安心させるようににっこりと微笑んだのだが、子どもの反応は非常に薄かった。ただ近づいても身動ぎせずに、じっとケイスを見つめている。怪しまれてはいないと判断し、ケイスはしゃがみこんで幼い子どもに問いかけた。

「こんにちは。髪を二つに結んだ女の子と……男の子、見なかった？」

ケイスはレフの容姿を明確に覚えてはいなかった。はじめて会った時にはそれどころではなかったし、ケイスは人の身なりに頓着しないからでもあった。

五歳児は黙して語らず、ただひたすらにケイスの顔を見上げていた。まるでそこに答えが書いてあるかとでもいうように。あまりにも長い間返答がないので、ケイスはまた苦笑をしていた。さすがに小さな子ども相手までは、聞き込みの範囲を広げすぎただろうか。

と、子どもは弾かれたように走り出した。先ほどの少女たちのように、不振に思われてしまったのかと気落ちしそうになるが、ふとあの小さな子どもは心当たりがあって、ものも言わずにそこへ案内をしようと駆け出したのではないかという思いにとらわれた。

「待って…！」

小さな影が町の角に消えてしまい、慌ててそれを追う。咄嗟の行動だったが、ケイスはいつの間にか五歳児に希望に近いものを見出だしていた。

ケイスの身長の半分もない小さな小さな子どもはすばしっこく走り続け、周囲に気を配りながらのケイスはなかなか追いつく事が出来ない。流れる景色に一瞬、警備隊員の制服が見えて、ケイスは足を早めた。子どもにも追いつくかと思いはじめた頃、ケイスの前方には人がはだかっていた。警備隊員ではない事が分かったので、踵を返すつもりはなかったが、彼らとぶつかる前に足を止める。

「ジョルジュ」

子どもは名前を呼んだ人物の元へと駆け、彼の足にぎゅっとしがみついた。何やらおびきだされたようにも思える光景だが、ケイスはむやみやたらに人を疑う人間ではない。相手がまだ子どもといえるほど若い少年たちなら尚更だ。

ケイスに一番近く、彼から見て手前に立っている少年が訝った様子でケイスを見ている。

「……誰？」

警戒はしていないが、少年たちは明らかに見知らぬ顔のケイスが町に住む人間ではないと知っているようだった。

52　少年たちとケイス1

ケイスは後々、それがかなりの幸運であった事を知る。ただの偶然でもあった。ジョルジュという名前の五歳児は、ケイスの捜し人を知ってはいなかった。ただ、ケイスに興味を持ったが飽きてしまい、自分の兄の元へと帰ろうとした。ケイスは勝手についてきて、ジョルジュの兄がレフを知っている人間で、少なからずシュガーローゼにも会った人間だった、という訳だ。

話をするうちに、仲間の前に立ちはだかるようにしてケイスと一番に対峙していた少年の名はアルというのだと分かった。

それから、小さなジョルジュの兄がマッテオ。彼は弟が見かけない顔に何かされたのではと最初からケイスを睨むように警戒していた。何もしていないと言うと、少しは視線がやわらいだものの、マッテオは弟にケイスをあまり近づけないようにしていた。

「ケイスさん」

「ケイスでいいよ」

シュガーローゼと同じくらいの少年たちだ。何だかこそばゆい。ケイスは訂正させた。

「レフと、そのローゼっていう女の子が牢から逃げたのは、確かなんですね？」

「間違いない。この目で見たよ。誰もいない牢屋を」

アルという少年は、ケイスから見て彼らのリーダーのように見えた。集団が出来るとリーダーが生まれるものだ。リーダーは仲間と視線を交わす。

「……やばくないか」

「でも、まだ見つかってない」

少年たちが深刻に話す内容は、ケイスにも関わりのあるはずのもの。仲間内で話したいのだろうが、口をはさまずにはいられない。

「やばいって、何かあるのかな」

彼らの口調には少年と少女が脱獄をした事以上の何かが含まれていた。キオスクと呼ばていた少年が、何かを言いたそうに口をもごもごさせたが、仲間に目をやった後に結局黙りこんでしまった。その代わり、やはりリーダー格のアルが説明した。

「警備隊のやつら、レジスタンスをあぶり出すためにわざとレフたちを逃がしたって話を聞いたんです」

ケイスの脳裏に、立ち聞きをしたあの時の会話がよみがえる。

『レジスタンスをおびきよせるため……』

『レジスタンスどもの尻尾をつかめるならな』

シュガーローゼがレジスタンスと思われている事と、レジスタンスを誘き寄せる餌にしようとするかの言葉。あれは、本当だったのか。

「レフはレジスタンスに入ろうとしていたけど、レジスタンスじゃないのに」

キオスクは憤りを見せていたが、あまり勢いのある声ではなかった。何か理由があって、憤然と怒るのにはそれが邪魔をしているかのよう。

「それから…ぼくらの知ってる女の子が本当にローゼっていうケイスの知り合いかどうかは分からないけど、あの子はチェルヴォの子ですらなかった。レジスタンスなんて、あり得ない」

「でも“彼ら”はそう信じている」

言いながら、ケイスは気がついていた。自分はこんなところで二の足を踏んでいる場合ではないと。立ち聞きした会話が、パズルのピースのようにぴったりとはまり合い、今度こそ現実のものとしてシュガーローゼの危機を感じる事が出来たのだ。

シュガーローゼとレフは、真実がどうあれ捕らえるべき存在として見なされ、捕まったら最後どうなるか分からない状況に陥っているのだ。

「その、レフって子の行きそうな場所に心当たりはない？」

「……もしかしたら……。おれたちもレジスタンスの仲間って思わ

れてる。ジョルジュを探して隠れるつもりだったんです。ついて来てください」

アルは必死なケイスの瞳を真正面から受け取ると、わずかな焦りを瞳ににじませて同行を促した。他に道はない。ケイスは頷いた。

夕暮れの薄い闇に隠れながら、ケイスと少年たちは警備隊員たちの目から逃れながら、町を移動していた。

道すがら、ケイスはアルたち少年団が一体何の集まりなのかを聞く事が出来た。彼らは元々、ただ何とはなしに集まった友人同士だったそうだ。貧しい家に居るか、孤児であるために空腹をまぎらわすためには盗み、それ以上の事もした。ただの馬鹿げた行為や、警備隊に追いかけられるような事まで。その延長にも近い“レジスタンスへの入団”も彼らの間の共通認識だった。レジスタンスについては比較的最近町に住むようになったレフが言い出した事だ。

このレフという――シュガーローゼと同行している可能性の高い――少年は彼らの仲間であるはずが何らかの事情によりアルたちに複雑な感情を与えた、とケイスに感じさせた。何かトラブルでもあって、上手くいっていなかったのかもしれない。ただ仲間が捕まっているからというだけでなく、心配したいのにしきれない、というようなものが少年たちには見えた。

ほんのわずか、レフという少年がどんな人物なのか気になった。シュガーローゼと同行しているはずの人物。ケイスが一度だけ会った時は少なくともシュガーローゼを危険な目に合わせるような少年には見えなかった――気がする。今はそんな事を考えていても詮ないと、ケイスはその考えを頭からしめ出した。

「それじゃあ、レジスタンスと関わりがあったのは確かなんだね」
「二回話をしただけです。しかも、一回は……レフが言ってただけで、ぼくは詳しくは知りません」
アル以外の少年たちにも異論はないようで、口をはさむ者はなかった。
「ローゼの事はもっと知りません。でも、彼女は何も悪い事はしてない。ぼくらに……関わったから、彼女は……」
アルはシュガーローゼの名前も知らなかった。ケイスの口にした“ローゼ”という名前を聞いてはじめて彼女の名前の一端を知れたのだ。それでも、ただ少し会話しただけではない感情をシュガーローゼには抱いているように見える。申し訳なさそうなアルの顔を見て、ケイスはどうしてか急に心もとない感覚に陥った。それから、ほんの小さな——焦燥。
「こっちです」
少年の声ですぐにそれらは霧散して、ケイスは眼前に広がる光景に意識を集中させる。
ほとんど暮れかかった空の下に、小さな入り口がある。幅が細くなった水路のために作られた、壁の穴。人一人がかがんでやっと通れるような、アーチのある入り口に、少年たちは入って行った。紫色の空の下、その入り口は真っ黒な闇につながっていた。暗闇が怖いなどという年頃ではないが、ケイスも人並みに闇に対する警戒心がある。何がひそんでいるか分からないから怖いなどとは思わないが、敵対する相手がいないとも限らない。気を引き締めて、より一層辺りへの気を配りながら水路の上を通って壁の中へと進んだ。
アル少年の話によると、チェルヴォの地下には地下水路が広がっており、入り口は町に五ヶ所あるが、そのうち人目につくのは二ヶ所のみで、後は誰にも顧みられる事なくひっそりと忘れられているそうだ。普段、広い水路は地上にも目に見えて存在するため、ともすると地下の水路は忘れられがちである。ましてその地下水路は暗く臭い場所、誰も近寄ろうとはしない。我が町を庭とばかりに行き

来し、町の者にとってさえ穴場というような場所も知る子どもたちだが、隠れ家として使おうと言い出したのはレフだったそうだ。地下水路の事は知ってはいるが、立ち寄るつもりの子どもはいない。だからこそ、誰も使わないからこそ隠れ家にはもってこいだとレフは言っていたそうだ。

幾度かアルやマッテオも地下水路の奥にまで進んだ事があるそうだが、さすがにその全貌までは知らない。彼らは入り口から少し歩いたところで足を止めた。

「水路は基本的に溝を流れていて、その両端に足場があります。でも狭いので気をつけてください」

頷いた後に、ケイスはこの暗さじゃ相手に見えないと思い直し「分かった」と返答した。慎重に歩くケイスの通り過ぎた場所をなんとはなしに見ていたアルは視界に光るものを見つけた。かがみこんで拾い上げると指輪のようで、今は見分する暇はないのでとりあえずポケットにしまった。

「やっぱりこっちの入り口じゃないみたいだ」

マッテオが少し奥まで様子を見に行っていたが、収穫なしと戻ってきた。地下水路は暗いためもあるだろうが、複雑な作りで何の準備もなしに進める場所ではないという。

ケイスはレフとシュガーローゼを探しているのだ。もし地下水路にも彼らがいないのなら、この場所には用はないのだが――。

「もしかしたら、レフはもう戻ってこないかもな」

ぽつり、とこぼした声が誰のものか、ケイスには判断出来なかった。目は慣れてきたが、暗闇の効果と会ったばかりの相手という条件下では、言葉が続くまでマッテオのものだとは分からなかった。

「最近、変だった。おれらとは違う目的のために何かしてるんじゃないかって」

「違う目的って何だよ…」

笑いとばそうとして失敗した声で言ったのは、キオスクだろうか。ケイスは口をはさめなくて、ただ声のする方へ、人がいるであろう

黒い塊のある場所へと視線をすべらせる。
「知らねえよ。だけどあいつ、この地下水路はきっとファーロにつながってるって言ってた。もしかして……」
「ファーロ？」
「チェルヴォの隣りにある港町です」
頭の中の地図を開いて、ケイスは少しぼやけてきた記憶をたぐり寄せながらもファーロという名の港町がチェルヴォの西に存在する事を思い出していた。
「憶測ばっかで言うなよ」
たしなめるような声は、アルのものだ。
「だってあいつ、事あるごとに国を出るなら船旅だって、地下水路はきっとファーロの町につながってるって言ってたじゃねえかよ」
「言ってたっけ？」
「知らねえよ。おれはもう、あいつが分かんねえよ……」
レフの言動には、どこか仲間に対しても何かを隠すようなものがあった。地下水路についても、レフがどの程度地下水路を理解しているか全員には明かしていなかった。キオスクの知らない事をマッテオは知っていたが、それ以上の事をレフは隠していた。
少年たちの事情を知らないケイスには、話が少し分かりかねたが、彼らの間で認識の食い違い、レフに対する違和感が生まれていたのは理解出来た。それは彼らの問題で、この際ケイスには関係ない。
「……それで、レフって子は、ローゼを連れて逃げていると思う？」
少年たちは顔を見合わせようとする動きを見せた。互いにこの暗さでは額を突きつけ合う距離でなければそれは不可能だと気づき、各自で考える事にしたようだ。
「おれにはあいつはもうよく分かんないよ」
どこか投げやりになっているのはマッテオ。キオスクは黙りこんだまま、アルはしばしの沈黙の後答えた。
「……よく、分からないけど、レフは……ローゼには何か、すごいものがあるって言ってました。だから、彼女を連れて何かをするつ

もりだったのかもしれないです」
それが今も変わらないなら、ローゼから離れる事はないだろう。
アルはそう言っていた。
ケイスはどう思えばいいのか――当惑した。ただ一つ可能性としていえるのは、レフがシュガーローゼの“死神”としての力――“死神のキス”を知っているのではないか、という事だった。
死神だと知って、シュガーローゼを連れて歩くというのは、何か目的があっての事だろう。
それはあまり、芳しくない。
不安と焦りで、青年の拳がぎゅっと握られる。しわを寄せては虚空を睨む。少年たちが今のケイスの様相を見ていたら、わずかでもたじろいでいただろう。
暗闇ゆえにケイスの様子も知らず、少年たちは少年たちで自分の思考の闇に足をからめ取られていた。
一刻も早く二人の少年少女の後を追いたいケイスだが、その行き先が分からないのではレフの仲間に会った今でも、振り出し近くに戻ったのと同じだ。
これまでの少年たちの会話から、あり得そうな行き先は港町ファーロというものしかないが、それすらただの推測、唯一の望みと信じるには確信出来る要素が足りなかった。
だが道は他にないのかもしれない。ケイスがたどってきたのは、童話の兄妹が道しるべに落としたパンの欠片よりもうっすらとした不確かなもの。無謀ともいえる行為に、今更何をためらう？
「その港町には、どうやって行くんだ？　チェルヴォからなら、何時間くらいで行ける？」
「……ケイスさん……？　あの、まさか…」
呼び捨てで良いと言ったのに、アルがうっかりといった様子で敬称をつけて呼んだ。そろりと様子をうかがうような声には、どこか唖然とした響きがある。
「直前距離ならそう遠くはなかった気がするけど……」

半分以上は一人言としてケイスはつぶやく。
「馬車くらいなら半日もかかんなかったよな」
仲間に呼びかけようなキオスク、しかし返事は誰からももらえなかった。
「ファーロに行くんですね……？」
「他に手がかりはないみたいだから」
暗がりだから相手には見えないと知りつつも、ケイスはやはり首を縦にしていた。
「それなら…」
「なあ、そろそろここを出ないか？　暗いせいかジョルジュ寝ちゃったし、……重たい」
「いいよ、出ようか。町の様子も見たいし。少しは捜索もおさまってるだろうし」
リーダーの言葉で、少年たちは地下水路を出る事にしたようだ。

53　少年たちとケイス2

「でももう、あの劇場跡のアジトに行くのは無理だぜ？」
「だからバラバラに隠れてようって言っただろ」
キオスクとマッテオの会話を聞くともなしに彼らの後に続いていたケイスは、近くに寄ってきた気配に視線をくれる。
「手伝いますよ。ファーロに地下水路じゃなくても行けるし、馬か何かで行けばレフたちに追いつけるかもしれません」
ケイスに比較的協力的なアルが、そこにはいた。地下水路から出ると、日の光にあふれた世界が広がっているものと思っていたが、夜が相手ではそれはかなわない。しかし町の明かりがわずかに作り出す輪郭で、アルという少年の真摯な表情がよく見えた。整った顔立ちをしているのだなと、ケイスははじめて気づいた。それだけでなく、物事をやり通そうとする意思を秘めた瞳が、彼に他とない魅力を与えているのだろうと。
「…ありがとう」
手伝うという内容よりも、彼の気持ちがケイスには嬉しかった。思えば異国の町チェルヴォに来て、ここまでの短期間で相手に優しい申し出をしてもらえたのははじめてだ。
自分もまだ若者のうちではあるが、それよりももっと若く、子どもでもある存在が、こういった些細な事でも他人に手助けをしようとしている。当たり前かもしれないし、ケイスがこれまで子どもに優しくされなかった訳でもないのだが――こういう子どもがいるならば、これからの未来は明るいものになるのだろう。そんな場合ではないのに、ケイスはしみじみと思っていた。
「でも馬の調達は難しいかもしれません。それと――」
「あっ、マッテオ！　お前ら！　やべぇよ、早く逃げろ！」
突如、ひそめるべき声を大きくしてしまった、慌てた声が上がる。地下水路の入り口からは離れたケイスや少年たちの進む先は町の裏

道。そこから少年が一人走って来た。
「どうした?」
マッテオが一番の知り合いなのか、彼はキオスクに弟のおんぶを肩代わりしてもらい身軽になった体で少年に駆け寄る。
「何かよく分かんねぇけどよ、ベンと…ヨセフだっけかが、捕まったんだよ!」
「ヨブだ! ……本当か?」
「あっおい、お前ら?! ちょっと待て、動くな!」
マッテオが友人を問いつめる声が、厳しい一言によって遮られた。の太い成人男性の声だ。その場の者はケイスも含め青ざめた。ケイスはともかく、少年たちには前科があり過ぎた。人こそ殺していないものの、盗みは当たり前、警備隊員はからかう、様々な問題を起こしてきた。その上今は、レジスタンス嫌疑をかけられて——これは子どもたちの知らぬ事だが——逃げたレフたちの代わりにレジスタンスを釣る撒き餌にするため逮捕の対象になっている。
「ガキども、レジスタンスに入った疑いで逮捕する!」
「逃げろ!」
呼び子が不愉快な音を鳴らす。ぱっと蜘蛛の子を散らしたように少年たちは警備隊員の手から逃れる。
「大人しくしろ!」
「キオスク!!」
マッテオの弟を抱えたキオスクが、いち早く捕まってしまった。友人の弟が重たかったのかは分からないが、マッテオは血相を変えて弟の元へと身を翻す。ジョルジュは騒ぎに目を覚まし、状況が飲み込めていないのか叫びもしないのだが、顔をこわばらせて兄の姿を探す。
「てめぇ、離せよッ!」
キオスクがなんとかジョルジュだけでも逃がそうとしたのだが、警備隊員の長い手が伸び小さな子どもを抑えつけてしまう。
増えてきた警備隊員に、マッテオまでが拘束される。兄の暴れる

姿に刺激されてか、わっとジョルジュが泣き出した。火がついたように泣く子どもを、警備隊員は疎ましく思ったのだろう、「うるせえなあ」といかにもうっとおしげに眉間を寄せる。兄はそれを非常に危険だと感じ、身をよじりながらも叫んだ。

「触るな！　離せよ！　ジョルジュ！」

子どもの悲鳴は耐えきれない――ケイスが足を止めた。まだ捕まっていないのはケイスとアルだけだった。ここに来て危険を知らせてくれたマッテオの友人はもう姿が見えない。ぐっと腕を掴まれる。ケイスは顔を動かさずにアルの方へと注意を寄せた。

「逃げてください。きっとケイスさんもぼくらの仲間と思われてる」

そうでなくともケイスの身は、今や怪しいものだった。シェーンの騎士を辞める覚悟でオスティオの任務から外れた。チェルヴォの同僚からの手助けは望めない。まして一度は警備隊に捕まったようなもの。言われなくとも警備隊とは関わるつもりはないが、

「見過ごす事は出来ない」

というのが彼の性質だった。

「あいつらもそうだ！」

警備隊員のわめきを背景に、ケイスは少年の瞳を真っ向から受けていた。今度はアルの瞳に精彩はなく、困ってもいた。

「どうして……」

「性分みたいだ」

アルは、眉を寄せたまま、笑うしかないとでもいうように頬を上げた。我が侭を言う子どもを見るように。上司からの命令を仕方なしに聞こうとするかのように。

彼の背後には、あと数歩でアルを捕らえられる距離にいる警備隊員が迫っていた。

「お願いですから、行ってください」

肩のあたりに衝撃を受け、その手の持ち主は誰かと視線を順繰りに動かすと、アルの体は警備隊員に拘束されていて、ケイスもあと一息で他の警備隊員に捕まるところだった。かばわれたと知って、

王都の騎士はさっと顔色を変えた。彼が子どもたちを守ってやらねばならないのに！

「……！」

ケイスは近寄る警備隊員を肘で打った後に足払いをした。簡単に倒れこんだ男への配慮はなく、ただアルの事を助けなくてはと首を回す。

「ぼくらの事は気にしないでください」

アルもアルで、警備隊員の腕から逃れていた。じりじりと警備隊員と対峙する背で言った。まだ敵は戦闘可能な状態だ。ケイスも行って、助けるつもりだ。

「早く！　やつらの仲間が増える前に！」

「……しかし！」

煮え切らないケイスの答えに応じるつもりのアルは、警備隊員の拳を避けるのに精神を使いすぐにはそれが出来なかった。

「レフとローゼの事、よろしくお願いします」

本当はぼくも行きたかった。言葉にしないアルの気持ちが伝わり、思いを託された気がして、ケイスは決断した。

警備隊員たちはこの場所へと集まってきている。爆発しそうな感情を、ぐっとこらえるとケイスは少年たちに背をむけた。こらえきれずに感情を飛びよる警備隊員に向かって発散しながら走り出した。敵をかき分けてかき分けて、地を蹴る。

――どうしてこんな事に！

警備隊が子どもをなぶり殺すはずがないと知りながらも、あの逮捕劇は過激過ぎるとも分かっていた。何かがおかしい。歯車が軋んでいる。

それを知りながらもケイスは町を後にするのだ。

我が事のために。

闇が追いかけてくるような感覚に、ケイスは気が急いて一層強く地面を蹴り出した。

54　港町ファーロ

アクウァエ海に面したファーロはなかなかに栄えた港町である。湿気でよっぽどの不漁が続くか、嵐の後ではない限り町は常に活気に満ちあふれている。チェルヴォとは質の違う陽気さは、どこか平和さを思わせるチェルヴォの感覚とは違い、血気盛んな――少々物騒な空気に満ちていた。毎日、町のいたるところでケンカが見物できる。

最近のチェルヴォこそ、どこかきな臭い、レジスタンスがどうのという噂で物騒であると言われていたが、それとこの町の活気は違うのだ。力強さのある、海の男と船のかもし出すみなぎる活力が町のあちらこちらに感じられる。たとえば市場では大男がの太い声で客を叩きつけそうな勢いで魚を売るし、酒場に行けば酒ばかり飲む男が陽気に馬鹿笑いする姿が見られる。そしてそのどちらの場所でも日に何度か口論の末のケンカがはじまる姿が見受けられる。

また、女も強く、市場では隣りの大男に負けないようにとこれまた恰幅のいい女性が声をはって安売りを叫ぶし、たとえ痩せた女性でも舐めるなとばかりに値切る客を蹴散らす。女のうるさいよと叱咤する声や、母ちゃん勘弁、という情けない男の声があふれている。男も女も元気にうるさくわめいて生き生きとしている町、それがこのファーロの姿だ。

更に言えば、この港町はミリヤール帝国とカロゼッロ共和国を相手に貿易しているために外国人が多い。服装の気取った貴族らしき者もいれば、一般にあまり好かれないミファク族が他人の目を気にせず堂々と歩いていたりする。出身地も雑多な人間がこれだけいればおおらかで誰彼構わず迎え入れる気になるのだろう。そこがレフの狙いだった。

幸いな事にわざわざチェルヴォから“指名手配・脱獄犯の知らせ”などという迷惑なものはファーロに届いていないようだ。隣町の

事だ、噂なら入ってくるだろうがまだ大丈夫だろう。レフがシュガーローゼを担いで宿に来た時も訝しがられはしたものの、何も聞かずに泊めてくれた。ファーロの人間は旅人に慣れているんだろう、訳あり客はいつもの事のような対応であった。とはいえ子ども二人だけの客というのは珍しいかもしれない。

しかしレフは宿に泊まらずにはいられなかった。ファーロまでの道のりは短くはなかった。地下水路を通ったとはいえ、それがファーロの町の手前まで伸びていた訳ではない。むしろ、地下水路を出てからの方が長い距離だったかもしれない。何しろシュガーローゼという荷物を担いでいたのだから、体は重くなり、ちょっとの道のりも非常な長さになったのだから。

ともかく日が暮れる頃にはファーロの町に着けて、ひとまず宿にて倒れこんだのが昨日。朝になってもシュガーローゼは目を覚まさなかった。具合が悪いのは分かるが、レフにはどうしたらいいのか分からなかった。医者に見せればいいのだろうが、患者は“死神”シュガーローゼだ。レフもここに来るまで彼女の唇には気をつかったが、医者の前で死神証明をする事はない。

シュガーローゼの体調不良は、レフにとっては好都合でもあった。目を覚ましていれば彼女はレフとの同行を嫌がるだろう。そうなる前に船に乗ってしまうのだ。そして、シュガーローゼには嘘を言ったが、その船の行き先はミリヤール帝国。カロゼッロなどではなく、かの帝国に行くのだ。シュガーローゼを連れて。あの男の元へ。レフにしてみればお膳立てされたような厚遇。またとないチャンス。

だが、シュガーローゼが一度も目を開けないのでその体調不良が深刻なものなのではないかと危惧している。

宿は二人部屋、一つの部屋に寝台が二つあるだけの部屋しかとれなかった。よくよく考えたら婚約者同士でも夫婦でもない年頃の男女が同室というのは大問題なのだが、宿に着いた時はもの考える体力がレフには残されておらず、目を覚ました今では相手の意識がないのだから問題はないのではという結論に至った。

宿の女将が昨夜の死にかけた二人の子どもを心配して、連れの具合はどうだと尋ねてきた。レフは大丈夫だと答えたが、実際今は様子見をしていた。シュガーローゼはこのまましばらく目を覚まさないのか？　それならば早くに船に乗る手配をして、帝国へと旅立った方がいい。しかし、レフがしようとしている事には時間がかかる。シュガーローゼを置いて行くのはしのびないが、ちゃんと船に乗るならやるべき事はたくさんある。

一息に決めてしまうと、目覚めない少女を一人部屋に残し、レフは宿を後にした。

55　帝国行きの船を探して

シュガーローゼがチェルヴォ町から姿を消してから、三日。
ケイスは上手く馬を調達し、ファーロの町へと順調に足を進めていた。シュガーローゼがいる“かもしれない”町へ。確固たる根拠はない。だが他に道は残されていないようだった。
港町に着くと、非常に活気あふれる様に気圧されながらも、ケイスは宿もとらず厩に馬を預けるとすぐに町の人へ聞き込みに走った。
疲れてはいたが、仮にもケイスは騎士団員。体力はある方だ。シュガーローゼの消息を尋ねて、店や宿をいくつも回った。
何件目かで、シュガーローゼとレフらしき人物が泊まった宿に出会った。
女将は少し風変わりな二人の客をよく覚えていた。そうでなくとも彼らが宿を出たのは今朝の事だという。
「どこへ行くとは聞いていませんか？」
「そうね、帝国行きの船はどのくらいの頻度で発着しているか聞いてたから、帝国に行くのかも」
女将の言うことに確証はなかった。だが、この港町の主な交易相手はミリヤール帝国とカロゼッロ共和国だというから、確率的には帝国である可能性は低くはない。
ケイスはもう少し、聞き込みを続けるつもりだった。宿で女将がシュガーローゼたちの特徴を覚えていたのも、子どもだけの旅人が珍しいからに他ならない。目立つというほどでなくとも、少しは印象に残るのなら、他にも誰かがシュガーローゼたちの姿を見ていて、覚えているかもしれない。
女将はレフがミリヤール帝国へ行くと言っていた。彼らがそこに行くつもりなら、もちろん船に乗るだろう。もしかしたら、もう出航してしまったかもしれないが、船着場でも何か手がかりが得られるかもしれない。港の方へと向かいながら、町の者に話を尋ねるつ

もりだった。

港町ファーロの船着場は広く、長い桟橋の向こうに大型船が四隻も停泊してあった。小型のボートなどはいうまでもなくたくさん港にひっかけられており、中型の船も十近く存在した。それでもまだ船着場の桟橋には空白があり、他の船は出航しているかドックにあるのだろう。人の行き来が激しい時間ではなくなっていたが、それでも喧騒にまみれた場所だった。

ウィディト大陸を囲むのは大まかに分けて四つの海であり、そのうちミリヤールとオスティオ、カロゼッロが接している海の名前はアクウァエ海といった。大国が主に貿易に使う海はこのアクウァエ海が中心だ。

アクウァエ海は紺碧の色を冬の太陽の下、白い光に変えて反射させていた。港を行くものは少なからず日差しとそのはね返りを受けて目を細めながら歩く。その男も、ケイスに眩しそうにして見せた。

「もしかしたら見たかもしれねえな。ただ、その女の子の方は見なかったがなあ」

海に出てこの道一筋三十年くらいの上背のある船乗りが、やっとそれらしき答えをくれたのは、昼過ぎのことだった。

船乗りの言葉が本当ならシュガーローゼはレフに同行していなかった時のことなのだろうか。それとも、ファーロで彼らは別行動をとるようになって、分かれたのだろうか。判断出来ることではないが今すぐには関係ない。ケイスはもっと多くの情報を船乗りの男から引き出そうと質問を重ねた。

「どこへ行くかなど、聞いてはいませんか？」

「ああ、帝国行きの船はどれかとかなら聞いたがな……そういえば、妙だったな」

言いながら、男が考えこむように額にしわを寄せたので、ケイスも同じく怪訝そうにして考えこむ。妙というのは、レフのことだろうか。動向か、身なりか。

「安くていい船の船長を紹介してやろうか、と言ったんだがな、その坊主はいいって断ったんだ」

「はあ…」

いまひとつぴんとこなくてケイスは生返事のようなものをもらしてしまった。ぼんやりした坊ちゃんのように見えて、船乗りは不満そうな色を小さく顔にのせる。

「変だと思わねえのか、帝国行きの船を捜してるくせに船長への紹介を断るんだぜ」

「そう言われれば、そうですね…。でも、もしかしたら今すぐ乗りたいわけではなかったのかも…」

「そうか？　思えばあの坊主、あの後もここいら船着場の辺りをうろうろしてるのを見かけたなあ」

何かを探しているのだろうか。帝国行きの船を、ではなく。たとえば、シュガーローゼとはぐれてしまい、再会するためにあちらこちらを行き来していた、そういう可能性もなくはない。この際だとケイスはそれも尋ねてみる。

「さっき言った、二つに髪を結んだ女の子の方は、一人で居るところでも見ませんでしたか？」

「どうだったかな…いかにも町のもんじゃねえ子どもの一人歩きは目立つが、女の子は見なかったような気がするがな」

結局、その船乗りの男からはそれ以上の手がかりを得ることは出来なかった。とはいえ、ほとんどレフだと思われる少年がミリヤール帝国行きの船を捜していたというのは、彼が目指す場所はやはり帝国なのだという答えの確実性を高めていた。男に礼を言って分かれると、ケイスは他に帝国行きの船の乗組員に話を聞くことにした。

まずは一際目を引く、おそらくこの港で一番大きいであろう船へと向かう。ちょうどミリヤール帝国へ向かうための船だと知る。とある大富豪の私的な船だというが、まずその大きさに目を引かれる。話を聞いているうちに、途中からその大富豪の知人であろうか、関係者がやってきてどのような船であるかを語ってくれたので分かったことだった。しかしケイスはその自慢話をじっくりと聞いている暇はなかったので、話半ばで口を挟むのは悪いと思いながらも、その場を退場することにした。

港一大きな船の前でケイスは色よい答えをもらえなかった。むしろ先ほどの男の方がもっと有益な答えを持っていただろう。

隣りの船に行き先を尋ねたら、こちらはカロゼッロ共和国に向かう船だという。おそらくはケイスにほとんど関係のない船だと判断し、次へと向かった。

「うちはもうすぐ出航だよ」

その帆船はマストが風にひらめいていて、確かにそろそろ船出をするのであろう事が分かった。こちらの船もなかなかに大きな船であり、商船だという話だった。商いのための船ではあるが、ミリヤール帝国に行こうとする旅人なども乗せているという。

ここでもケイスはシュガーローゼとレフの特徴を口にして、見かけなかったかと問いかける。まだ若い船乗りは桟橋の手前で乗客が船に乗り込むのを確認しているところだそうだ。どこか人懐っこい、気安い印象を与える男だ。

「見てないなあ…ぼくは一応、人の顔を覚えるのには自信があるから、その子ども二人は見てないと断定してもいいと思うな」

それではかなりの確立の低さで彼らがこの船に乗ってないことになるだろう。

「で、お兄さんも乗るかい、うちの船は快適、安心、お手ごろ価格での船旅を提供してるよ」

いつの間にかミリヤール帝国行きの船舶旅行の営業がはじまっていたようだ。ケイスはしばし考える。

「船の中を少し見させてもらっても…？」
「だめだめ。だめだよそういうのは。ま、少しチップを弾んでくれるっていうんなら船長には黙っておくけど」
一度断った後に、袖の下を握らせてくれれば承諾もしよう、というのはいかにも人間くさく、あまり良いことだとは言えないと思いつつも、ケイスは苦笑してしまった。
どうしたものか。すぐには答えを出せなくて、財布はどこに行ったかな、などと思案するケイスの脇を、二人組みの男女が通り過ぎる。
「やあ、ローランドご夫妻。もうすぐ出航ですよ」
乗客なのだろう、若い船乗りは男女に挨拶をする。彼と彼女は会釈をしながら、桟橋と船をつなぐ橋を歩いていく。こうして、顔を覚えて乗客が乗り込むのを確認するのが、この目の前の若い男の仕事なら、やはり彼の言葉には間違いはないのかもしれない。つまりは、シュガーローゼとレフの特徴を備えた人間を見ていないというならば、やはりケイスの探している二人はこの船には乗っていないということになる。船に乗るまでに時間があれば、さっきの夫妻のように一度町へ引き返すことになるだろうが、レフがそうしていた可能性もないのかもしれない。
「どうすんで、お兄さん」
「いや、僕は…」
その時、船の中に小さな影を見つけた。髪を結んではいなかったが、シュガーローゼの髪の色をした少女が、船に居たのだ。こちらに背を向けているために、一目では分からなかったが、ピンクゴールドの髪が日差しに反射して光っていた。
「ちょっと、お兄さん！」
知らず、体が動いていたのを、若い男が引き止める。さすがに船乗りだけあってか、力が強く、ケイスは無意識のうちに駆け出して行きたいのを阻まれてしまう。自分の腕が掴まれたことによって、視線をそこに移していたが、もう一度船の中を見やるとピンクゴー

ルドの頭はすっと物陰に隠れてしまった。
　ケイスは慌てて財布の中から一枚の硬貨を取り出すと、その若い船乗りに手渡した。
「毎度〜」
　心づけ（チップ）に足りる値段だったようで、若い男はもうケイスを引きとめはしなかった。
　ケイスはシュガーローゼと思われるものの影を探して船に乗り上げた。甲板には、観光客だか旅人だかの商いに関係ない人間たちがちらほらとたむろしていた。幾人か船乗りもばたばたと甲板上を駆けている。本当にもうすぐ港を発つからだろう。急がなくては、船がファーロの町を、オスティオ王国を出てしまう。
　甲板には少女の姿はなく、どこか船室の中に入ってしまったのかもしれなかった。ケイスはわずか逡巡した後に、手近な場所にある船内への扉に手をかけた。ケイスがそれを開く寸前に、勢いよく扉が開く。一瞬判断が遅れていれば、正面からドアの熱烈な歓迎を一身に受けていただろうが、なんとか避けることが出来た。
　開いたドアから出てきたのは、これまた海の男である褐色の肌と屈強な体つきで大きな荷物を運ぶ船乗りで、「おお悪い」とケイスの姿を認めるなり謝って、その場を去って行った。どこか呆然とそれを見やり、気圧されかけた青年はそんな場合ではないのだったと首を振る。折角開けてもらったのだから、このドアの中に入ってみようではないかと身を乗り出す。
　ドアの中はあまり明るくはなく、窓のない通路のようなものが広がっていた。まず手当たり次第にドアを開けて船室一つ一つを確認したい衝動にかられたが、ケイスを紳士として育てた伯爵の教育が良すぎたためにそれをためらわせる結果となった。しかし他に手はないのだ。
　いざ、船内捜索を本格的にはじめようと決意を決めた時、ケイスに声をかける者があった。
「おいあんた、ここは乗客が入って楽しいようなもんは何もないぞ。

積荷だけだ」
　気軽な様子だが、声には「ここから先はご遠慮願いたい」といった感情が見え隠れしていた。船乗りたちが用のある倉庫があるだけなのだろうか。それならば人はいないはずだ。少しばかり惜しい気もしたが、ケイスはこの場を去ることにした。それから他に客室はないのかとその船乗りに問いかける。
「ああ、連れてってやるよ」
　客室に連れていかれ、ケイスはいざ本格的に船内捜索をはじめることが出来ると意気込んだ。その途端、小さくない揺れが船を襲った。たいしたものではなかったが、たたらを踏みそうになったケイスは一抹の違和感を抱き、船室捜索も忘れて甲板に出ることにした。
　風があった。潮風だ。シェーン王都に海岸線はなく、王都育ちのケイスにはなじみのない風だった。さわやかではあろうが、やはり冬の時期には寒さばかりを感じる。ぴりりと肌に当たる感触はケイスが海に歓迎されていないような錯覚を覚える。
　海。
　波の音に、ただゆれるだけではないものを感じとり、ケイスははっと目を見張った。帆が大きくはらんでいる。景色はゆるやかに、だが見ているうちに徐々に徐々にと素早く流れてゆく。
「まさか…！」
　甲板の端に寄るまでもない、首をぐるりと回せば遠ざかっていく、港町の風景。動き続ける景色。
　船が、出港してしまった！
　陸がゆるやかに小さくなってゆく。
「あっ！　やだあ～」
　風が強くなってきたために、甲板に居る乗客はざわめき始める。
「船内にいましょう」
　ささやく男女の方角へと視線を動かしたケイスは、その向こうに見えたものに愕然とした。
　貴族の娘だろうか、まだ幼いが非常に豪華な衣装を身にまとった

子どもがいた。その娘は背格好こそケイスの捜している人物に似ていたが、その髪色は濃い栗毛だった。その足元に落ちるは、人毛。ピンクゴールドの光を反射するかつらだった。

「お母さまあ～かつら取れちゃいましたあ～」

「あらまあしょうがない子ね。お部屋に入ってセットし直しましょうね」

「はあ～～い」

甲板にてオーシャンビューを楽しんでいたものは三々五々と寒空の下から去っていった。甲板に残ったものもいくらか居たが、そのどれもケイスを励ましはしなかった。

彼がシュガーローゼだと思っていた後姿は勘違いで、他人の後を追っていたのだ。栗毛の髪をした娘がかぶっていたかつらを、シュガーローゼの毛髪だと思い込んで船にまで乗ってしまった。その上船は港を出てしまった。

「おあ、お兄さん…しまった。忘れてた…」

ケイスは港を見やった。遠ざかる一方ではあるが…。

「今なら泳いで戻れる距離なんじゃない」

彼自身も一度考えたことではあるが、ケイスに融通をきかせて船に載せてくれた若い男にそっくりそのまま言われると実行する元気がなくなってしまうのは何故だろう。彼があまりにも簡単に言ってのけるからかもしれない。

ケイスの心は葛藤した。このまま船に乗っている必要はない。彼がシュガーローゼだと思っていた人物は別人、他人であったのだから、乗船中の船にもはや用はない。

しかし、ファーロに戻ったところで手がかりはもうないのかもしれない。最後の手がかりである、帝国に行った方が良いのではないか。

だが、帝国はシェーンやオスティオなどよりも国土がはるかに広い。たどり着く港もそれに比例して巨大だとは言い切れないが、そうなる可能性が高い。ミリヤールに着いてからでは、捜索がはるか

に難しくなるのではないか？
　逡巡している暇があるのなら、港に戻った方がいい。決めた途端に、ケイスの腕を掴むものがあった。
「お兄さんお兄さん、このまま乗るなら船長に挨拶していって。それから料金もちゃんと払ってね」
「いや、僕はやっぱり降り…」
「おいジュゼッペ、ちょっとこっち来い」
　若い男の腕の力が意外にも強いのと、彼が他の船乗りに呼ばれて何故かケイスまで連れて行こうとしたのに加え、船体がぐらりと揺れ動いたためにケイスはその全てに対応出来なかった。体をよろとさまよわせ、若い船乗りに掴まれた腕でそのまま支えられる。
「お兄さん大丈夫かい、船に乗るのははじめてで？」
「そういえばそうだ…」
　王都の貴族は湖に出かけていって船に乗ることを娯楽として楽しんでいるようだが、剣術一筋仕事一筋のケイスには関わりのない世界だった。
「いや、違う、僕は…！」
「もうこのくらい離れるとやめといた方がいいと思うなー。この辺、サメ出るよ」
「え…」
　海洋生物になじみのないケイスはサメというものがどこに生息するのか分かってはおらず、恐れるべき存在だとしか認識していないため、二の句が告げられなかった。ただアクウァエ海のちらちらと光る水面に目を細めるしかなかった。
　船は順調に港を離れ、蒼い水面に白い線を引きながら北へと進んでいた。順風、雲が空を半分近く覆っているが、日差しのある晴れた天気であった。

56　ペッシェカーネ号

強制乗船した後になってからやっと知ったその船の名前は「ペッシェカーネ号」。主な積荷は人間、つまりは旅人のための移動手段としての客船ではあるのだが、乗客が少ない場合にはいくらか都合して商売のための交易品を増やすというような船だ。今回は商船としての色合いが濃いというが、それでも大きな船だけあって、乗客も少なくはない。

海のないシェーン王国、更に内陸の王都育ちの騎士は早速船酔いに悩まされていた。残念なことに、ケイスが騎士として鍛えてきた肉体や体力はこの揺れる船体を前にして何の役にも立たなかった。あまりに揺れると吐きそうだ。傷口が開くというほどではないが、ごく最近に負った怪我の痛みもケイスの意識を曖昧にさせた。

まだペッシェカーネ号が港に係留されていた頃、ケイスをわずかの間だけだと船内に通した若い船乗りの男はジュゼッペと言い、船長のアルマンはジュゼッペの言い分を認めた。ケイスとしては船を降りたい気分でいっぱいだったが、さすがにサメと戦いながら泳いで帰る気概はない。何せ彼は海に不慣れ、もう泳いで港に戻るのは無理だと言われればそうなのだと思わされてしまうのだ。

ジュゼッペは簡単にケイスの乗船を頼み込んだが、船長のアルマンもそれをたやすく承諾した。こうして本人の望むところとは別にケイスはこのファーロ港発、ブリュム港着のミリヤール帝国行きの船ペッシェカーネ号に乗組員の一人として乗船することになってしまった。それも、不可抗力に近い乗船だというのにも関わらずきっかりと乗船運賃を徴収された。なんとか払う事が出来たケイスだが、有り金がかなり消えてしまった。元々彼の持っていた資金は仕事のためのもので、チェルヴォを出てくる際に誰かに返すわけにもいかずそのまま持っていたのだが、そう多くはなかったが、更に減ってしまった。騎士団の経費も入っていたから申し訳なく思いながら船

長へと手渡した。
　考えるべきことはたくさんあるのに、船がすっかり沖へ出た頃にはもう、ケイスはその病気を発病していた。船酔い――。それは思考も奪うほどの、頭痛、吐き気。
「船酔いの人見ると、なんか優越感」
　船乗りのジュゼッペはいささか失礼な発言をしながらも自身の仕事へと戻って行った。
　甲板に一人残されたケイスは船酔いという未知の病気と闘っていた。紳士たるべしと育てられてきたケイスは嘔吐するという行為を出来うる限りひかえたいと思っていたのだが、それはかなりの高確率で不可能なのではないかとまで思うに至った。
　船出には良い天気で、空はからりと晴れきっていた。ほとんどうずくまるようにしてケイスは甲板に転がっていたが、空を見上げるとあまりに広大な世界が広がっているためにしばしぼんやりと空を見上げた。王都育ちの青年は、少し空が窮屈な都会で育ってきた。オスティオに来るまでの間田舎の道をいくつも通ったとはいえ、遮るもののない空というのは壮観だった。
　大自然の真っ只中にいる自分。そしてはじめての海上。そんなものに意識を飛ばしても、しばらくするとまたもや胸のあたりのむかむかが強くなってきた。吐き気に同調するような傷の痛みもわずらわしい。もはや寝転がりたい気分でいっぱいだ。例によって育ちのよいケイスはそんな不躾な事は出来ないと自分を戒めていたが、誰かに突き飛ばされたらそのまま立ち上がれそうにもなかった。
「どーーん」
　その騎士の体は簡単に吹っ飛んだ。尻餅をつくようにして床に転がると、ケイスはびっくりした目で吐き気をこらえた。何が起こった。青年は今回ばかりは相手を恨むぞと、船酔いとの戦いに専念させてくれないどころか悪化させるような行為を犯した人物を探した。
「わあお兄さん、本気で顔色やばいねえ～大丈夫…じゃないか」
　ケイスを突き飛ばした両手をそのまま驚きのポーズに変えて、ジ

ュゼッペは悪びれもせずにケイスを覗き込んだ。
「まあ、いかにもひ弱そうで、そんな事なんじゃないかなあと思ってたんすよ」
日々鍛錬を欠かさない王国騎士団の一員であるはずのケイスはジュゼッペの一言にかなりの衝撃を受けていた。何て事だ、自分はそんなにも見た目が頼りない弱そうな容姿なのか――船酔いによる気分の悪さもあいまって、ケイスの気分は急下降した。サムソンにモヤシ小僧と言われたのも無理もない。そうか、自分は…貧相でモヤシなのか……などと気が病によりふさぎ込んだように落ち込んだケイスも知らず、若い船乗りは楽しげに言った。
「ほい。お兄さん、これはかなり船酔いに効くよ。それから、ここだと揺れが大きいからもっと操舵室の近くに行った方がいい」
差し出された手の平には、茶色い丸薬のようなものがちょこんと一粒載っていた。何かの薬なのだろう。船酔いに効くようなもののはずだ。ケイスは問いかけるようにしてジュゼッペを見上げるが、彼は手を突き出すだけで何も言わない。飲めという事なのであろう、ケイスはそれを受け取ると見分するように見つめた後飲み込んだ。
「あと、もしお腹すいてるようだったら、何か食べた方がいいよ」
「それって、戻してしまうんじゃ…」
船酔いの時には腹の中のものを吐いてしまうだろう事が容易に想像出来る。それなのに、飲食を勧めるというのは何事か。すると若者は訳知り顔で勝ち誇った。
「ま、そりゃそうだけど、何にも食べてないのに船酔いになると、ひどいよー。もう胃液しか出ないのに、そうじゃない時よりもすっげえ気持ち悪くなるの。なんか知らんけど、とにかくぼくみたいな経験者が言うんだから間違いない。空腹状態は意外にやばいのさ」
まるきり子ども騙しの怖い話を聞かせるようなジュゼッペの顔は、気弱になっているケイスに不安感を与えた。彼が不吉な予言をしているのがよく分かる。
そういえばケイスはファーロの町に着いてから、ほとんど何も食

べていない。ずっと捜索人を探して港を駆け回っていたために、空腹状態が現在継続中だ。思えば、腹部が頼りなげに感じられてきた。しかし船乗り初心者のケイスには何かを食べるというのはかなりの危険行為に思えて仕方がない。空腹とはいえそんな元気はない。

結局はジュゼッペに差し出されたパンと果物を少しいただいた。それは数時間後に吐き出す事になるのだが、軽食をした事が良い方へ転じたのかどうかはケイスには分からなかった。

57　急襲

ペッシェカーネ号がアクウァエ海に漕ぎ出でてから二日。航海は順調だった。天気の崩れも少なく、ケイスは五度吐くだけで済んでいた。船酔いにもそろそろ耐性がついてきた。もはや嵐にでも遭わない限り嘔吐する事はないだろうという自信がついた。

ケイスは自分だけの部屋を与えられはしなかったが、八人がそこを寝室として共有する空間を与えられていた。荷物は全てその部屋に置いて、夜は枕代わりにして眠っていた。チェルヴォを出る時に同僚であるカルロに渡された短剣だけは念のために上着の下に隠しながら携帯していた。

甲板に出て、その日の天気を確認するかのように青空を見上げていたらこの二日間で慣れ親しんだ声に呼ばれた。

「お兄さん、例の薬はもう要らなそう？」

「ジュゼッペ。ああ、大丈夫そうだよ」

ケイスは年が近いせいもあって、ジュゼッペとよく話をするようになっていた。というよりジュゼッペの方が彼に話かけてくる回数の方が多かったが、一人いきなり飛び込んだ船の話相手に、ジュゼッペは悪くない相手だった。おしゃべりという程には口が回らないが、彼は適度な距離を保ってケイスに接してくれる。ケイスが探している人物の事や事情などに配慮して余計な事は聞いてこない。体調を気遣ってくれるし、手が空いている時に無駄口を叩きに来るだけだ。

この二日、ケイスは船乗りに多くの事を学んだ。船について、積荷は何か、腕の立つ護衛もいるのだというような事。彼らの仕事がいかに大変かという事だけではなく、航海についての知識や帝国についても教わる機会があった。ジュゼッペはケイスよりはるかにオスティオやミリヤール、アクウァエ海についての事情に通じていた。

彼らの乗るペッシェカーネ号の目的地、ミリヤール帝国はシェー

ンに勝るとも劣らない大都会であるという。もとより国土が広いためか、驚く事はたくさんあるだろうとジュゼッペは言った。

「この航海では、一度港に寄るよ。食料補給と商売のためにね。小さな港だけど、帝国との間にある島に寄って休憩だ」

海洋は広い。とてもじゃないが長い間航行し続けることは出来ない。休息が船にも人にも必要だった。それが安全のためで、すべて無事な航海を遂げるために必要なことなのだ。

「トワールって島なんだけど、一応ミリヤール領なのさ。ま、元々土着の島民が住んでいた場所だから帝国らしさっていうと少ししかないけどね」

漁業や狩猟採集をして生活を営んできた民が居る島をミリヤール領にしただけらしく、いかにも都会なイメージの強い帝国の文化流入はあまり行われていないそうだ。だから帝国本土に着いたらなおの事驚くだろうよとジュゼッペは言うのだ。

「その島にはどれくらい留まる？」

「まあ、半日くらいかな。長くて一日だ。夜明けには出られるようにしていると思うよ」

ミリヤール帝国に詳しいジュゼッペに話を聞きながら彼の地に思いをはせた。どんな場所なのだろうかという事も気になるが、第一に探している少女が見つかるだろうかという問題点が立ちふさがっている。いささか心配だ。

地図で見るとトワール島は、東にウィディト大陸があり、そのうち北東にはミリヤール帝国が存在する。出港に使ったオスティオの港町ファーロから見れば北西だ。トワール島に寄ってから帝国に行くという事は、くの字を描くように北進している事になる。

その日の夜にはペッシェカーネ号がトワール島に着いたらしい。揺れがなくなって安眠しやすくなったケイスにはあまり関係のないような事だったが、とにかく次の朝にはそれを知る事になる。

「あれ？　短剣がない」

朝起きると、ケイスが寝る前に枕元に置いておいたはずの短剣がなくなっていた。よく探そうとしたところで、ジュゼッペが顔を見せてトワール島に着いたと教えてくれた。なくし物をしたと伝えると、今は忙しいから後で手伝うと請合ってくれた。ケイスも島の様子を見たかったので、危険などあるはずもないと見なしてその件は後回しにした。

この日の天気は曇りであったが、時たま太陽が顔を見せては眩しい光を投げかけていた。トワール島は、本当に小さな港町だった。町というのもはばかられるような規模で、船着場があるだけののどかな島といった程度。それでも、久方ぶりの揺れない地面にケイスは非常に満足していた。確かな地の感覚に、陸上は素晴らしいものだと知ったのだ。

トワール島には宿と小さな商店が一軒ずつあるのみで、娯楽はおろか時間をつぶせそうな場所は何もなかった。植物を愛でる趣味でもあれば島を一周したいと思うかもしれないが、ケイスにそういった趣味はなかった。

ペッシェカーネ号の船員たちは、忙しく積荷の入れ替えや仕事に取り組み、ケイスは手持ち無沙汰だった。ジュゼッペに仕事を手伝おうかと申し出ても「お兄さんあんま使えそうにないからいい」とにべもなく断られてしまった。確かに航海に関わる仕事は門外漢だが、荷物運び程度ならなんでもやるのにと言い募ったが、そう大変な仕事ではないからと結局は休んでいるようにと言われたので口を出すのはやめた。

船はその日の昼に出港した。小さな島でも、動くことのない陸から離れるという事実に、ケイスはわずか寂しさを覚えながらもトワ

ール島の遠ざかるを見つめていた。

ケイスがそれに気がついたのは、接近する船を見つけてからの事だった。何かがおかしいと、異変に気がついたのだ。何がどうとはいえない、抽象的な感覚で彼はそれが警戒すべきものかも分からなかったが、妙に肩の傷がうずいたのだ。

日差しに目を細めると、それは確かにこちらへと近づいてきているように思えた。それを受けてか、ペッシェカーネ号は船首をゆるやかに東へ動かした。このままだと前方に迫ってきた船に衝突してしまうからだ。寄港の場が近くにある、トワール島を出たばかりのこの時間であれば、なんら不思議のない光景だった。徐々に近づく船には違和感を覚えるべき存在が搭載されていた。気がついた時にペッシェカーネ号は大砲の射程距離内に居た。相手の船が取った行動は、素早かった。

大きな轟音と振動。目を見張ったケイスはしかしながら、すぐに異変に気がついた。甲板に居たからその一部始終をしっかりと見ていたのだ。信じられなかったが、ペッシェカーネ号は今、襲われているのだ。

悲鳴がペッシェカーネ号に巻き起こる。再び大砲が船にぶちこまれ、ケイスはたたらを踏んだ。女性の甲高い声、男でさえも恐れを声にせずにいられない。どうしたらいいのか、ケイスは頭を働かせた。これまでの経験で自分は緊急時にも何かを出来る、すべきであると思っていたがここは自分の職場ではない。不慣れな船の上、海上だ。海戦には知識が乏しい。ジュゼッペか誰か、船長にでも指示をあおぐか協力してこの場を切り抜けねばなるまい。常の癖で腰に手をやりながら、揺れる甲板を走り出した王都（シェーン）の騎士は、自分が無手であることに気づき、苦虫を噛んだ。カルロにもらった短剣はどこかへと消えてしまっていたのだった。

正気を保っているケイスが事情を知っていそうに見えたのか、誰にでもいいから状況を説明してほしかったのか、追いすがるように乗客が彼の前に立ちはだかった。

「なあ、何が起こってるんだ?!」

相手をなだめようとしたケイスの耳に、歓声のようなものが飛び込んできた。いつの間にかペッシェカーネ号の十数メートル近くにまで一隻の船が近づいている。相手の船には、男たちが剣を振り上げて鬨(とき)の声を上げていた。

「まさか――海賊!」

誰が言ったのかは分からないが、それは間違いないようだった。ケイスもやっとその可能性に気づき――というかほぼ間違いない――今度こそペッシェカーネ号に降り注ぐ不幸を思い知る。

(なんて事だ!)

女性の絹を裂くような悲鳴に、ケイスは首を回す。もう、ペッシェカーネ号に秩序はなかった。武器もないのに、海賊に襲われる女性のもとへ駆けると彼は弱いものを狙う男を殴りつけた。一度は油断したのだろうが、相手は二度もケイスの拳を受けるつもりがないようで邪魔者を始末せんと向き直ってくる。もちろんケイスも敵が腕を振るうのを黙って見ているつもりはない。今度はみぞおちに正確に拳を叩き込む。やっと眠った相手に一息つくが、休んでいる暇はないとケイスは辺りに武器になるものはないかと探す。女性がおろおろとしながらも颯爽と現われた救世主に礼を言う。

「あ、ありがとう……」

転がる酒瓶に、ケイスは飛びついた。ひとまずの武器にはなるだろう。そういえばカルロにもらった短剣はどうして消えたのだろうと、いぶかしむ余裕も戻ってきた。ふと倒した男の腰にある湾曲したカトラスに気がついてそちらを借りることにする。ついでなので酒瓶も左手に持ったまま、女性に声をかけた。

「せめて船室に」

「は、はい……あッ!　危ない!」

咄嗟に避けたため頬にかすり傷を作る程度で済んだが、ケイスは新たなる敵の襲来に備えて武器のどちらを振るうかと逡巡した。相手が左手側に居たため、反射的に酒瓶を振るうと鈍い手ごたえが振動となって腕に伝わってくるのが分かる。これではキリがない。

顔を歪めてケイスは甲板に視線をやる。そこは戦場さながらだった。誰もが叫び、海賊の剣が血しぶきを作り出す。ペッシェカーネ号の乗組員は皆、襲われていてケイスがあちらこちらへと素早く駆けたとしてもその全員は助けられない。そのことがまた、ケイスの傷をうずかせるが――海賊と思しき男を打ちのめす人間がいるのに気づく。積荷により少なくない額の金が動く客船兼商船だ、護衛がいるとはジュゼッペにも聞いていたが、彼らがそうなのか。そうでなくとも、目を凝らせば船乗りたちにも果敢に海賊に立ち向かい打ち倒す男が存在した。元々船乗りなどというのは腕力や体力がなければやってられない。まったくの絶望というわけではない光景に、ケイスは少なからず安堵していた。

海賊たちを戦闘不能にさせて回ることもケイスの出来る事になるだろうが、もっと何かが出来ないものかと、知っている顔を探す。ジュゼッペか、船長のアルマン。彼らを目で探しながらもケイスは自分のやるべき事をしっかりとこなしていた。敵は誰も彼もが軍人のように訓練された人間ではないようだ、息切れをしながらもケイスはあまり身の危険を感じてはいなかった。アドレナリンが出すぎて防衛本能が忘れ去られているだけかもしれないが。

「どけ！」

かなりの上背のある男に襲い掛かられ、ケイスはさっと凶刃を避けながら目の前の男に意識を集中させる。この体格差は少し危険だ。叩きつけた酒瓶に至っては強靭な筋肉を前に割れてしまった。これまでに何度か海賊たちの頭をかち割ってきた歴戦の酒瓶だから仕方がない。とはいえ何という打たれ強さか。武器にもなりそうな切っ先の尖った酒瓶だったがそれは捨て、ケイスはカトラスで身構えた。

その海賊はケイスが使える男だと分かったのだろう、にやりと笑

うと戦闘を楽しむかのように自身の剣を握り締めた。その、一瞬の気安い表情を消し去り強い力で繰り出されたのは突き。目を見開いたケイスはあと少し反応するのが遅かったら自分の左肩は傷口を開いていたところだと知る。かすったそれに、ケイスは自分の左肩が下がっていないか気になりはじめた。敵に自分の弱点を知られるわけにはいかない。つい最近出来た傷など、格好の餌食だ。

第一撃を避けるのに必死になりすぎたケイスは次の太刀をいただく事になる。油断はなかったが、今度は動くのが遅かった。深くはないが、確かに、しっかと刻まれたのは腹を真横に薙ぐ傷。飛びのくと額に脂汗が浮かぶのが分かる。

（くそ……！）

相手は強い。訓練ではなく実戦を経験したこともケイスにはある。その中ではかなりの使い手ではないかと自分の不利を悟る。訓練でなければケイスに本気を出しただろう相手も、ここまで強くはないのではないか、そう錯覚してしまうほどに。彼を鍛えたルブラン伯爵ですら、ここまでは――…。

途端に、男がケイスの体の一点を見た。服の上に血のにじむ、左の肩。海賊が急襲してからこの方、動き回っていたツケが早くも目に見えて現われだしたのだ。痛みはさほどひどくはないが、弱点を敵にさらすという事をやってのけた、ケイスの肩は。こうなると相手が狙うのは当然ケイスの古い傷だ。そこをえぐってしまえばいい。すると騎士は防戦に回ることになる。左肩を狙う刃を避ける事ばかりに気を取られ、敵を討つなどとても――。

「しま…っ！」

足が何かにぶつかった。木箱がそこには置いてあり、避ける事も出来たはずが目の前の海賊に気をとられるあまり周囲に気を配れずにいた。その結果、ケイスは体勢を崩し、それを直すのに時間を使えば海賊の刃が振り下ろされる――

はずだったのだが、鈍い音がしただけで、一太刀を覚悟したケイスに降りかかるものはなにもなかった。怪訝に思いながら立ち上が

ると、フライパンを手にした女性が肩で息をしながら自身で打ちのめした男を見下ろしていた。ケイスにその視線を移すと、困ったような、疲れたような瞳でわずかに目を細めた。先ほどケイスが真っ先に助けた女性だ。今度は恩返しとばかりに彼女が助けてくれたのだと分かると、ケイスは短く礼を言った。しかし何故甲板にフライパンが、と思いつつも勇敢な彼女の行為に命の助かった自分はとても幸運だと思う。

少し彼女と話でもしたいくらいの気分だったが、視界の端によぎった影にケイスは意識を奪われていた。ジュゼッペだ。彼は無事のようだと安堵するが、彼と話をした方がいい。そんな余裕はないだろうが、この船の元々の乗組員と行動を共にするのが当然の事のように思われた。

「ジュゼッペ！」

女性を残すのは心配だったが、今まで生き残っていてくれたし、彼女には武器――フライパンがあるから大丈夫だろうと言い訳をした。ケイスは駆けて行って、すぐさま壁にぶちあたる事になる。海賊だ。またジュゼッペの姿を見失ってしまった。彼にしては珍しく、舌打ちをしながら敵と対峙する。

そろそろ肩の傷が本格的に痛んできた。さっきの男による腹の傷も絶賛失血中だ。肌に流れる汗がどこかで流れ出る血と一緒になっていて、気持ちが悪い。ケイスはこんな時なのに船酔いしたらどうしようなんていう下らない考えが頭に居座るのに気づいていた。アドレナリン放出のしすぎで疲れてきたかもしれない。体力はまだあるはずが、これまでに受けた傷がケイスの動きの邪魔をする。今もさっきの男ほどの実力もない海賊をまだ倒せないでいる。

「…くそ…っ！」

瞬間、ぱきりと音を立ててケイスのカトラスの刀身が砕けた。剣は半分になってしまい、使い物になるかどうか分からない。何て事だ。また誰かの武器を拝借したいが、そんな暇はないかもしれない。

無理矢理に折れたカトラスで敵を殴ると、ふらついた相手はそれ

なりのダメージを受けたようで、内心ケイスは勝利を確信した。
その時だ。
目にしたものが信じられなくて、信じたくなくても信じるしかないのなら、その光景はもっと信じられないものだった。
くすんだ甲板の中、乱れながらも輝くピンクゴールドの光。甲板にうずくまるようなその横顔から全てを推し量ることは出来ないが、その横顔はまさしくケイスの探し人――シュガーローゼそのもの、彼女は今、振り上げられた海賊の剣の餌食になろうとしていた。
「ローゼッ！！」
ケイスのからからになった喉が勝手に叫んでいた。

58　密航者たち

背中には、まだ気を失っていない海賊が一人、ケイスを倒そうと怪しい足取りで追おうとしていたのだが、彼はそれに構わず敵に背を向けていた。苦楽を共にした酒瓶は壊れた時に捨てたが、これだけはそうしなくて良かった、そう意識したわけではないが、ケイスは刀身が半分のカトラスを遠くの敵に投擲していた。無意識のうちにやった事でも海賊の腕に命中し、敵は新たな獲物が近づいて来ているのだと知る事になる。顔をケイスに向けた海賊は、振り上げた剣を足元の少女に落とす事なく剣を投げてきた青年を睨みすえる。

シェーンの騎士の目にはツインテールの少女しか映っていなかった。明るいアクアマリンの瞳がこちらを向く。ああ、確かに彼女だ。そう確信する。驚いたような、戸惑ったような瞳には、平素彼女がケイスに見せている不機嫌そうな、厭わしそうな感情など見えない。純粋な驚きに見開かれた目は、透き通っていた。

彼女の元へと距離をつめたケイスは忘れかけていた存在に頭を殴られる。文字通り頭を揺さぶられ、目の端に星のようなものがちかちかと舞う。斬りつけられなかったのは意外だ、とだけ彼は思った。自分を守る術を失った騎士は武器を探して痛む頭を左右へ振る。ところが相手の弱点を見つけた海賊によってそれは阻まれる。中腰になっていたケイスの体を持ち上げるようにして左肩を掴むと、海賊は傷口をえぐった。

「ぐあ……っ！」

気を失うかと思うくらいの激痛。いや、瞬きの間気を失っていたのかもしれない。もう、敵のおもちゃを見つけたみたいなへらへらした笑いも見えない。最後にケイスが目にしたのは、感情をなくしたようなシュガーローゼの顔。驚きも、困惑も、怒りも、嫌悪感も、何も見せない少女。諦めたような顔にも見えないのに——彼女にはいつも諦観が見える。今もそうだ。ケイスが思い出したのは、いつ

か王都で彼女と会った時にもああいった顔をしていたという事。それは、レジスタンスと対峙した時のこと――。

だめだ。そんな事、彼女にさせられない。自由な右手が動き出す。本能的に動いたそれは、しかし敵を殴ることも触れることも出来ずに空を切る。途端にケイスは自由になった。地に落下する体を自分じゃ支えきれなくて、背中から床に打ち付けた。

「やめ…！」

誰の悲鳴か、分からない。立ち上がろうともがくケイスの頭上に振り下ろされようとしている剣も、彼は視認できていない。

「……え？」

間抜けな声に、やっとケイスは顔を上げる。何が起こった。瞬時には理解できなくて、ケイスは目眩のする頭を無理矢理に持ち上げる。カランという音と共に床に落ちたのは数秒前までケイスを襲う凶刃となるはずだった海賊の武器だ。わずか苦みばしった、驚いたようなシュガーローゼの瞳の先には少年が居た。伸びた焦げ茶の髪のせいで顔が口元しか見えず表情もうかがえない。彼の手の形に疑問を感じ、ケイスはその手の周りに何か彼が握っていたはずのものがないかと視線を彷徨わせる。あった。ケイスの脇へ前のめりに倒れてきた海賊の背に、短剣が刺さっていた。

ケイスはまた誰かに助けられたのだ。肩の激痛がうるさいが、よろめきながらも立ち上がろうと、足元に転がる海賊に足を取られながらも二本の膝を伸ばした。

その時の甲板は喧騒にまみれていたはずなのに、ケイスには静かになったように感じていた。

探していた相手、シュガーローゼと少年。レフという名前を思い出す。彼は、シュガーローゼと行動を共にしているはずのチェルヴォの少年、レフなのだろう。彼を一瞥すれば、長い前髪の隙間からケイスを窺うような琥珀の瞳にかち合う。睨まれているようだとも感じられる。しかし、今はそれよりも――。

「ローゼ」

どうしてこんなところに居るのだろう。まだオスティオ王国に居るか、他の船に乗っているかと思っていたのに。ケイスは全ての乗客の顔を確認したわけではないが、この航行で乗客の多くの顔を確認してきた。まさかと思って探した影は見つからず、ペッシェカーネ号には探し人がいないものだと思いこんできたのに。何故、この混乱の中この少女とめぐり会えたのだろう。

膝をついて眉を寄せる少女は、腕の中に子どもを抱いていた。声をかけられても、シュガーローゼは反応しない。しかし、幻ではないようだ。気の強そうな、拗ねたような、不満そうな瞳。頬は泥か何かに汚れているが、健康そうな肌。発散させる不機嫌エネルギーとその能力を思えば驚くほど幼い顔立ち。それなのに諦める事を知った大人のような眼差しをしてみせる少女。

ケイスは、彼女を探していた。ついに、シュガーローゼを見つけた。

† † †

これまでの事が、シュガーローゼの頭に高速で再生される。

潮のかおりがした。どころか、少し魚くさい。内陸であるシェーンで育った少女には少し不慣れなかおりだ。

ゆらゆらと何かが動いているような感覚がある。それは自分の体の下のことだった。床が、動いている？　それとも自分の体が動かされている？

世界がおぼろげな陽炎（かげろう）のようにはっきりとしない。しかしシュガーローゼは意識を覚醒させていた。重たい瞼を上げると世界のほとんどに違和感を感じていた。

その船の中で目を覚ますまで意識は取り戻していたのだが、何度か浅い眠りを繰り返すようにシュガーローゼは目を覚ましてはすぐに眠りについていた。だから移動させられているような気がしていたことが間違いではなかったと知るのにそう時間は要らなかった。それでも、状況を把握するにつれ疑問が内にたまっていくのが分かった。

ぐらつく足元、それはずっとさっきまで自分が眠り込んでいたからだけではない。空気がどこか湿っている。起動しはじめたばかりの脳みそは、視界に捉えた少年を見つけてどうすべきか考えることは出来なかった。彼女はいつの間にか衝動的に動いていた。寝起きの脳の代わりに考えたのは脊髄だろう。

素早く両手を伸ばす。少年の首に。殺すつもりではなかったが、ほとんどそれに近い気持ちでレフを押し倒した。正しくは首を絞めようとしていた。しかし力ではかなわないシュガーローゼが徐々にレフに押され始めると、今度は魔術を使う事にした。頭に血がのぼっていたので忘れていたが、最初からこうすればよかったのだ。

電気を生じさせ、レフを怯ませる。これでレフは手が痺れたはずだ。少年はぼさぼさの頭を振るようにして地面に転がって自分の手を押さえた。動かない自分の両手にどうしていいのか分からないようだ。

「お…っまえ、なに…！」

ケンカを売る時みたいな顔を心がけたつもりのレフだが、痛みに顔をしかめた程度のものになってしまった。よく考えなくともシュガーローゼにはレフを殺すくらいのつもりで殴りかかってもおかしくない理由があった。意識を失いしばらく体調の悪い少女を本人の許可なしに勝手にどこかへ連れ出したのだから、彼女が魔術を使ってレフを害そうとするのも道理というものだ。それも、確信に至るにはいかないがシュガーローゼはどうやら船の中にいるらしいと気がついていた。せめて馬車の中などならまだ話が分かる。彼女は不本意な場所に居るのだからその馬車を飛び降りれば問題はない。しかし飛び出す先が海しかないという船の中ではそれは無理というものだ。

「ころす」

冗談じゃなく本気の怒りが少女の水色の瞳の中に燃えていた。これまでレフが彼女に見てきた、諦めや困惑、恨みがましい感情ではない。少年は何故か本当にシュガーローゼに殺されるとは思わなかったが、彼女の炎のような苛烈な感情には気圧されそうになっていた。

具合が悪かったから意識がおぼつかない少女だったシュガーローゼを勝手に運び出してミリヤール帝国行きの船に乗せたのはレフだ。それは間違いない。

（やばい）

だからこそ問題なのだ。確かにレフは何かをしでかしてしまったのだ。それだけは確かだ。少年は自分よりも背が低い小柄な少女に一瞬でも身がすくんでしまったという事実に戸惑う事よりも、彼女の怒りをそのままにしてしまう事によるマイナス面を重視して謝罪するべきだと判断した。

「わ、悪い！　その、怪しまれたんだ、町の人に。それに意識のないお前を置いて行くわけにはいかないだろう？」

ほっといてくれればよかったのに、と苦々しげな返事がもらえるかと期待していたレフだったが、身を起こしたシュガーローゼはや

やうつむいてゆっくりと静かに息を吐き出しただけだった。まるで怒気を発散させるかのように発せられたそれは、しかし感情を爆発させるのをこらえるかのようにひそめられていた。

ほとんど誘拐犯のような少年の顔を見るのに疲れたシュガーローゼは自分の居る場所がどんなところで脱出ルートはどれだけ存在するのかを把握するのに取り掛かった。苛立ちは収まらないが、今必要なのは自分がどこに連れ込まれたか正確に認識する事だと知っていた。

狭い空間、木造、窓はひとつ、扉もひとつ。薄暗い。おそらくは船の一室で、倉庫として用いられているのだろう、ところ狭しと木箱や樽が詰め込まれている。足の踏み場は人が二・三人横になればなくなってしまうくらいに少ない。立ち上がると目眩がしたが、足元の不安定さが確かに感じられた。時々大きく揺れる床に、陸の上に居るのではないと確信する。

ドアを開けようとしたところで少年の手に阻まれた。

「止めといた方がいい」

シュガーローゼが彼女の人生でこれまでにないくらいに眉間にしわを集めて鋭すぎるくらいの眼光を諸悪の根源に放ったが、申し訳なさそうにしながらもレフはドアノブに伸ばした手をどかそうとはしなかった。魔術を扱える少女がさっと手を上げたのを見て少年は慌てて説明した。

「無賃乗船中なんだから、見つかったら問題だ」

「海に放り出されなきゃそれでいいわよ」

「よくないだろ。それにオレたちは追われてる身だぜ」

彼女の視線がまだ痺れている手に食らった電撃のように突き刺さるが、レフはシュガーローゼを自由にするわけにはいかなかった。まだ彼女には自分の傍にいてもらわなければ。復讐を終えるその時まで。だから彼はどんな手でも使うつもりだったのだが――。

「だから、あんたはわたしの魔術を忘れてない？　わたしは一度行った場所なら一瞬で移動出来る魔術が使えるの。扉一枚くらいじゃ

行く手を阻むことは出来ない――……」

言ってから、シュガーローゼは最悪の事態を知ることになる。彼女の使う空間転移魔術は、一度行ったところであればどこでも行けるというわけではない。正確な距離は測ったことがないので分からないが、あまりに遠い場所であればたとえ何度訪れた場所でも一気に飛んで行く事は難しい。何度か転移を繰り返さなければならない。面倒な事この上ないし、かなりの魔力を消費してしまう。もちろん、体力もだ。

この船がどこに向かっているかはシュガーローゼは知らないが、ついさっき港を発ったのではないことは分かる。ならば遠く離れた岸を目指して空間転移魔術を発動させても海の中に落ちるだけのことではないか。今レフに口にした事がただのはったりに変わってしまったことを知った少女だが、それを顔に出さないように努めるくらいの判断能力は備わっていた。とはいえ相手の勢いがしぼんでいったのを目の前で見ているレフは何かを感じ取っているとその琥珀の瞳で語っているが。持ち上げた眉の下、彼はシュガーローゼに何と言おうか皮肉のきいた台詞を考えていたが、どれも子どもっぽい、相手の神経を逆なでするようなものばかりだったので口を動かすのをやめることにした。

閉塞空間に、沈黙だけがいっぱいに満たされた。

レフはどうしたものかと視線をさまよわせた。彼がすべきことはたくさんあるのだろう。シュガーローゼに謝り倒すとか、この船に乗るまでの経緯（いきさつ）を語るとか、これから向かう先の帝国について教えてやるとか、やっぱり申し訳なさを前面に押し出した表情で今後の二人の会話を円滑にさせるための上手いジョークを披露してみせるとか。思いついた全てが難しそうに思えて、少年は早々に諦めた。

とりあえずは、シュガーローゼがすぐにこの狭い船室を出ることはなさそうだという事実が、レフにゆとりを与えていた。首を回して肩をほぐすように動かすと、背中を壁にあずけた。静かにシュガーローゼが腰を下ろすのを眺めながら。

小さな丸い窓からは外の様子が見えたが、暮れ始めた空の色が見えるだけで景色らしいものは何ひとつとして見当たらなかった。目を覚ましたばかりのシュガーローゼにはこの船がどこの海を航海中なのか見当もつかなかったが、レフにもアクウェア海を北上しているだろう事くらいしか分からない。外界からの情報が限られているこの船室では、どこか時間がゆるやかに流れているように思われた。この狭い室内で、レフに背を向けている少女も同じように時間の緩慢さを感じているのだろうか。気になるわけでもなくただなんとなく頭に浮かんでいたのはそれだった。どうでもいいけど、とレフは自分に言い聞かせる。

何も動くことなくただ時間だけが過ぎていくように思われたこの船室で、ふいに少女が口をきいた。

「……飲食とそれに関する問題についてはどう対処してたわけ、密航中の隠れ家で」

低く抑えた声で言った言葉は聞き取りにくく、レフは顔にしわを寄せた。「なんだって？」聞き返すと、それが忌々しいとでも言うようにシュガーローゼは短くうなるように歯の間から息を押し出した。

「飯と、便所はどうしてるって聞いてんだよ」

まるで下町の口の悪い男みたいな物言いに、少なからずレフは驚いていた。その内容よりも少女の口調に。シュガーローゼは言葉遣いの丁寧な方ではないが、口汚く罵るタイプではないと信じていたからだ。先ほど「ころす」と言われた例を思い出して、そうでもないかと少年は思いなおした。何よりシュガーローゼの問いかけに対応すべきだろう。確かに話し合うべき議題だ。

「飯は我慢する……といいたいところだけど、夜くすねてる。トイレは夜まで我慢だな」

シュガーローゼは全身で自身の感情を表現しようとしたのだが、やめた。気力がないし、もはやレフと会話を交わすのが嫌になっていたのだ。この船室を出るなと言っておきながら、結局は必要にか

られたらこの場を出るのではないかという点が一番口にしたい問題点だったのだが、それすらどうでもよかった。まだ彼女の体調は本調子ではない。というより、船酔いに近い気だるさに襲われていた。胸の辺りが先ほどからむかむかする。気分がのるはずがない。横になる元気もないが、立っているよりもまだ気分が楽だ。ということでシュガーローゼは床にうずくまるように座り込んだ。散々眠っていた時間を思えば眠れそうにはなかったし、気分の悪さが徐々に眠りにもつけないくらいに強くなってきた。眠ってしまいたいのに、そうはさせてくれないほどの胸の気持ち悪さ――シュガーローゼは船酔いという病気にかかっていた。

59　船上の戦場1

目を覚ましてからのシュガーローゼの生活は最悪と言っていいほど劣悪な環境に変わっていた。まず、場所が悪い。船酔いの原因である船の中に住んでいるのだから環境が良いはずがない。窓は少ししか開かないために空気はよどんでしまっているというのに、シュガーローゼの吐き出したそれで閉鎖的な空間は汚染されていた。実はレフも最初の頃は吐いていたものだから、彼女のかかった病気については茶化す事なく静かに「仕方ないさ」という目をしてやっていた。

諸々の問題は、夜に船員が眠りについた頃に済ますようにしていた。食料の調達と、排泄物の排泄と、吐瀉物の処理。基本的にシュガーローゼは動き回ることをしなかったので、レフがこっそりと夜の船内を徘徊した。見つかる危険はあっただろうが、さすがに夜の明かりがもったいないと資源の限られた海の上では夜更かしをするような人間は蛇輪を握る人間と見張り以外には存在しなかった。食料調達はあまり上手くいかなかった時もあったのだが、それ以外は船外に放ることで任務完了する事柄なのですぐに済んでいた。

何日かして、係留された船の中にいると感じた日のこと。

船が突如、大きな衝撃を受けた。ひどい揺れに頭までがシェイクされているような感覚を覚える。何が起こったのかと、考える暇もない。

何が起こったのかは分からないが、万が一この空間に閉じ込められる事になってしまっては問題だと最初に考えたのはシュガーローゼだったので唯一の脱出口であるドアに駆けた。

「待て」

また爆音のような音が振動と共にやってくる。たたらを踏みながらもシュガーローゼはレフを睨みつけた。

「ここに閉じ込められたいの？」

もし船に穴でも開いたのだとしたら、逃げ場がなくなってしまうかもしれないのだ。レフは怪我をして体のどこかが痛むみたいに顔をしかめたが、ならばせめて何が起こっていても対応出来るように便利な道具はないものかと狭い船室を見渡す。そう、例えば武器とか。レフはこの騒動が人為的なものではないかと感づいていたのだ。

ドアの向こうに勢いよく飛び出していったシュガーローゼを見送ることも出来ず、それらしい武器も見つけられずにレフは内心焦りながらも船内をもう一度見回して、シュガーローゼにならってその場を後にした。

そこには悲鳴と、怒号と、殺戮が繰り広げられていた。甲板に上がるまでもなく、船内にまで入り込んでいた男たちは何も言わずとも大騒ぎを引き起こした原因であると告げているようなものだった。手には鋭利な武器を、襲うは無手の乗客たちを。

「なに…これ」

彼らは襲撃者で、まるで海賊のように見えた。海の強盗。殺し、盗み、奪う。

シュガーローゼは気がつけば甲板に上がっていて、戦場のような光景を見せ付けられていた。何が起こっているのかは、辺りを見渡せばすぐに把握できた。彼女が乗っていた船の他に、もう一隻の船がある。そこから飛び出てきたのが海賊たち。その船からは大砲も思い出したようにたまに発射される。シュガーローゼとレフが密航していた船は海賊船に襲われているのだ！

「おいッ！」

怒号が飛んできて、はじめてシュガーローゼは目前に迫った剣とそれを振るう男に気づいた。あわやというところで避けるが、避けきれずに肩に剣がかすっていった。叫んだのはレフだったが、彼に気を配るような時間もなさそうだった。その時シュガーローゼは目の前の海賊を戦闘不能状態に陥らせる必要にかられていた。そうでなければ彼女が殺される。いつものように“死神のキス”を送ってあげたいところだが、相手は動きに隙がなく、戦闘のプロのようだ

った。これまでにシュガーローゼがキスをくれた相手には幸いなことにここまでの戦闘専門家はいなかった。経験不足を思えば不幸なことに。

と、シュガーローゼは自分自身の“死神のキス”を重んじるあまりにまた魔術が扱えることを忘れかけていた自分に気づく。そうだ。シュガーローゼは手をさっと上げると相手の動きを麻痺させる力のある魔術を発動させる。

「ぎゃあっ！」

海賊は目をかっと見開いて倒れた。これでシュガーローゼの身の安全は保障された、と安心したいところだが、もちろんそうはいかない。敵はまだ大勢存在する。それこそ数え切れないほど、とはいえないがかなりの量だ。船員たちが奮闘しているのも目に入るがそれも海賊の数と戦闘員として数えていいだろうこの船の乗員の数では押されているように見える。

シュガーローゼに、広域に電撃が落とせる魔術が使えたらよいのだが、人一人、せいぜい二人が限界であろう自分の能力の限界を知っている。いちいち敵を一人ずつ倒すのは手間だが、それしか道はない。また誰かに襲われないうちにとばかりにシュガーローゼはまた駆け出した。それを追うレフの気配には気がついていない。途中でレフは海賊に行く手を阻まれたからでもあったが、甲板は泣き声とどなり声でたくさんだったために誰かの忍び寄る気配になど気がつけないくらいだったからでもあった。そのために、シュガーローゼを襲う新たな敵の影にも気づけなかった。

「ほう、まだ子どもだが良い値で売れそうな顔をしている」

ぐいと髪の毛の束を掴まれてからシュガーローゼは自身のピンチを知る。引っぱられた左の髪がくっつく頭が痛い。「離せ！」叫んでも効果がないのは分かっていたが口にせずはいられないほど強く髪の毛を引っぱられていたのだ。あまりの痛みに全てを忘れかけたシュガーローゼだったが、男のむき出しの肌がすぐそこにある事を目にしてからは、苦みばしった表情に笑みにも似た歪みを浮かべて

いた。

死を。死神のように人に死を与えることの出来る唇が、自分にはあるではないか。

これもまた、一人一人倒していくしかない方法ではあるが、シュガーローゼは勝利を確信していた。“死神のキス”をひとつ、海賊の男に落とす。男はしばし自分の身に起こったことを知らずにいられたが、異変に気がついてからは自分の体が動かないと知るまでの短い間しか意識を保っていられなかった。

シュガーローゼのピンクゴールドの長い髪が自由になる。ほとんど空中に浮かせるように持ち上げられていた体が重力に従って地面に落ちる。もう、シュガーローゼを捕まえていた男は生きてはいない。先ほど魔術で攻撃した相手とは違い、確実に息の根を止めることが出来たはずだ。安堵すればいいのか、シュガーローゼには分からなかった。

まだこれを、繰り返さなければならないのだから。

頭を働かせてはいけないのだ。今は、身の危険が迫っている。自分自身の安全を守ることが第一の優先事項だ。

目眩がしそうだ。この状況にも、自分自身のエゴイズムにも。何もかもに。

辺りは混沌としている。誰もが自分が助かろうと叫び、邪魔者を排除するように切り伏せる。何もかもがめちゃくちゃだった。だからシュガーローゼも何も考えなくていいはずなのだ。何も。

こんな時なのに、彼女の人生の中でも二番目くらいに煩わしいと感じる人物の顔が脳裏をよぎった。それすら煩わしいのに、初めて会った時のことを、思い出していた。

『危ない』

あれは、今この時の状況のようだった。思い出に浸りたい気分でもなんでもなかったが、シュガーローゼを現実に引き戻したのは一本の腕だった。ぐいと手を引っぱられて、シュガーローゼは自分の手を掴む人間の顔を見上げた。レフだ。彼の存在も忘れかけていた。

少年は顔に飛び跳ねた血をはりつけていた。彼の血だろうか、ぼんやり思う。

「何ぼけっとしてんだよ！」

少年が叱るように叫んだ途端に、次の危機はやってきた。まるで口火を切るように、レフの身を二つに裂こうとする剣が振り上げられる。少年は自分の背に迫るものを知らない。というよりも反応できずにいる。シュガーローゼは反対に、その剣を振るう男と顔を向き合わせている。彼女の手が勝手にレフをつきとばしていた。

間一髪でレフは凶刃を避けられたが、彼に手を伸ばしたシュガーローゼは腕に血を噴出す傷を作っていた。眼前の海賊は、ほとんどが空振りに終わった剣をもう一度少女に突き出すのではなく、武器を手にしていない手でシュガーローゼの左腕を掴んだ。少女のか細い腕に痣を残そうとするかのごとく強烈な力がこもっており、シュガーローゼは顔をしかめた。男の値踏みするかのような顔が憎たらしくて、海賊がどうしようというのか確認したくもないシュガーローゼは男との距離を一気につめると、体の一部にキスをした。服の上からでも“死神のキス”は有効だ。ただ、相手はゆっくりと死に向かうだけ。案の定、男はしばらくするとシュガーローゼの腕に力をこめられなくなり、彼の腕がぶらりと力なく体の横に垂れ下がった。

「え……あ、れ……？」

自分の手を持ち上げようとしてそれが叶わない、不可思議な光景を見て絶望するよりも早く、男は膝をついた。彼の今後をゆっくりと見ている暇はない。シュガーローゼは自由になった身を一度すくませると、掴まれた左の腕をさするようにしてまた周囲に意識を配った。視界の端で驚いたような顔をするレフにぶつかったが無視をする。それから――……。

よろめいた足が踏み出した方向に、聞く者の眉をひそめさせるような悲惨で本能的な子どもの叫び声と、蹴飛ばされた子どもが一人。

「わ、悪い」

助けられたレフが安堵と申し訳なさの混じった顔で謝罪ともお礼とも取れる台詞を口にしていたが、今は非常に瑣末な事で、少女の意識には入ってこなかった。

刹那の間、打算的になっていたかもしれない。言い訳を考えられるくらいには、時間があった。どうせ皆倒すくらいの気概を持たねばならない。襲われる人間を助けるなら、何かと面倒な大人よりも子どもの方がまだましだ。

結局、レフを突き飛ばした時よりも理由が少ないにも関わらず、シュガーローゼはその身を投げ出していた。

――子どもが少しでも過去の自分に見えた？　そんなはずがない。

どかすのは無理だった。だから、海賊の一人が振るう刃の先から子どもを隠すつもりだった。避けることが出来ないのなら、傷を受けてでも相手に近づいて、“死神のキス”をくれてやろう。

世界が、ゆっくり動いていた。少なくとも彼女はそう感じていた。彼女の世界だけは緩慢になっていたのだ。

「生を止めてあげる」

誰に向かって言ったのでもない。シュガーローゼの唇がつむいだ言葉は誰の耳に入ることもなく、海賊がどんな顔をして剣を手にしているのか、少女にはよく見えていなかった。このまま死ぬのかもとは考えなかったが、そうなっても構わなかっただろう。

腕の中があたたかい気がしたのだが、シュガーローゼはその腕に何を抱きしめているのかも忘れていた。自分が何をしたくて、今の行動をとったのか、もはや彼女と関係ないものに変わっていた。混沌は彼女の脳まで侵していたのだろう。

目をむくレフも、かばわれた子どもの涙も、人を殺そうとする海賊も、シュガーローゼの身には何ひとつ関わりのない事だといわんばかりの表情で――少女はその時を待った。

「ローゼッ！！」

誰かの怒号が遮るまでは、世界はほとんど止まっていたというのに。

60　船上の戦場2

剣戟、悲鳴、略奪、陵辱、怒号、それらは彼の日常の延長線上にあった。

海賊家業を生業とする男、“抜き足のポール”は気配を消すのが上手いことで仲間うちでは有名だった。そんな彼は影が薄いともいえたかもしれないが、本人は気にする素振りを見せなかった。少しは気にしていたのだが、彼は物思いにふけるのが好きだという性質も併せ持っていた。また、広く浅く物事の情報を集めるのが好きで、あちこちに顔を出すことも得意だった。

その日の襲撃は、ミリヤール帝国に向かう船を襲うという、いつもの仕事のうちであった。だが、慣れた仕事だからこそポールはどこか倦怠にも似たものを感じており、金目のものを奪い邪魔者を消すという行為に励む気分になれないでいた。目がくらむほどの宝石も良いし、いい女を我が物にするのも魅力的ではあるが、何か物足りない——そんな風に感じていたポールは、混沌にまみれた争いの甲板上で剣を振るわずにぶらぶら歩き回っていた。

誰もが皆、自分たちの事で手一杯だ。ポールには海賊の仲間が返り討ちに遭うのも気にならなかった。何か面白いことはないのか。そんな思いでいたからだろう、淡い色の髪の少女を見つけて、目を止める気になったのは。小柄な少女で、何の変哲もない身なりと容姿をしている。顔はいいかもな、とポールが思った途端に彼の心の代弁者のような手が伸びた。仲間が少女のおさげ髪の片方を持ち上げた。ポールの立つ場所からは仲間が何を言っているのか聞こえはしないが、彼が考えているだろうことは分かる気がした。それもまた、何の変哲もない、海賊のポールの日常の延長だった。突然仲間が気絶するまでは。

少女は何もしていないようだったのに、彼女以外誰も仲間に触れていなかったはずなのに、ポールの仲間である海賊は崩れ落ちた。

（何だ、今の？）

そうすることで目の前の悲劇がひっくり返るとでもいうように、ポールは目を何度もしばたいた。何も変わることなく、仲間が再び起き上がることもなかったが。違和感を覚えながらもポールはまだ事態を飲み込めていなかった。それはそうだ、彼は“死神の娘”の噂は頭の隅に追いやってあったし、それと目前の光景をつなぎ合わせることは出来なかったのだから。

だが、ピンクゴールドのおさげ髪を翻す少女は間違いなくポールの興味を引いてしまった。退屈から抜け出せそうなものをポールは見つけたのだ。笑いにもならないような口角の上げ方をして、その海賊はそっと“抜き足”で少女の後を追った。さりげなく、気配を気取られないようにといつも以上に意識しながら。

そして抜き足ポールはもう一度不可解な事態に出くわすことになる。

少女が唇を寄せるまで健康体だった男が、突然倒れこむという不可思議。

何かがポールの頭の中に引っかかった。喉に刺さった魚の骨みたいに。名前が出てこないが知っている顔を思い出した時のように、もどかしい感覚。少女を凝視しても、何も答えは見えないが、ポールは確かに解答に必要なピースを集めているという自分を感じていた。

† † †

シュガーローゼの方でも、降ってわいたように現われた男の出所を知りたいという思いがあった。

エメラルドの瞳。シュガーローゼを助けたくせに、今度は自分が危局に立って、いつの間にかレフによってそれから救出された青年。

彼は、何をしているんだろう。この場にどうしているのか、という問いだけでなく、何を勝手な事ばかりしてくれているのだという疑問もある。シュガーローゼには、彼に助けられる覚えはないのに。余計な事を。そう言うつもりだった。だのに、彼は、泣きそうな顔をして笑ったのだ。まるでシュガーローゼがいつか見た外来種の犬みたいな瞳をして。濡れそぼったような黒い目は、無垢で、何かを超越しているような眼差しで、それでいてその造作からまるで悲しみを知っているかのように見えた。寄せられた眉の下で、尻尾を振ってみせる外来種の犬。野良犬だった。シュガーローゼはその犬を蹴り飛ばしたい気分になったけれど、何故か撫でてやりたくもなっていたのだ。そのどちらもしないですぐに分かれたあの犬は、のたれ死んだのだろうか――。

「つっ立ってる場合か！」

聞き飽きた声で、シュガーローゼは金縛りから解放された。ケイスも、はっとしたように辺りに視線を配る。そうだ、ここはにわかに作られた戦場。レフの一声で現実に帰る。それぞれが知らずのうちに、彼らは三人で背中を合わせるようにして固まっていた。陣形を作ったかのようではあるが、彼らの手に得物は少ない。ケイスは自分の隣りに倒れてきた海賊の剣を拾い上げた。シュガーローゼは自分の額に手をやるのみで、何も武器を手にしようとはしない。レフはいつか見た騎士が敵の剣を奪っているのを見て、自分もと思い辺りに刃物を探した。見つけたのは、戦闘の中で床に転がっている

のを拾い上げた、やはり借り物の武器であった、彼が倒した男に刺さっている短剣。死体か瀕死の人間かは分からないが、レフは目にしてしまったそれから目を離せなくなっていた。もう一度短剣を自分の下へと取り戻すには、男の体から剣を抜かなければならない。血が流れ出る原因となった短剣を引き抜くのだ、レフの喉が緊張にごくりと鳴った。震えそうになる手を意思で説き伏せるようにして、伸ばした手の先に短剣の柄が触れた瞬間、少年は恐怖を覚えていた。何に対する恐れなのかは判断出来ない。そんな事を考える前にそれを引き抜け、と頭の中でもう一人のレフが叫んだ。

「ローゼは、後ろにいて」

「うるさい」

背後の会話も聞こえないくらい、レフは自分のしでかしたことに意識を集中させていた。生きているかもしれない男から引き抜いた短剣を、その刃にしたたる赤い液体に思考を奪われていたからだ。

「あんたにかばわれる理由なんかない」

決別したような声に、少年はやっと顔を上げた。見上げた顔のどちらも戦場に居る兵士のように精悍で、死を覚悟していてもおかしくないような表情だった。しかし一方は一度だけ物言いたげに目を細めて少女を見た。まるで、切なげに。

「僕には、ある」

シュガーローゼが腹の底から苛立ったのが、レフにも分かった。とはいえ、彼らはそんな風にのんきな会話をしている場合だと思い知ったようだった。複数で固まって動く若者たちを、海賊たちは面倒事と見なしてあちらも群れてやって来たのだ。

「来たぞ」

誰かがびくりと全身を強ばらせるように身をすくませたのに気づき、レフは小さく眉を寄せた。この期に及んで武者震い以外の震えを起こすような人間はこの場に居ないはずだと思っていたからだ。だが、シュガーローゼに身をていして庇われながらも、存在を忘れられているような子どもがそこにはいたのだ。今認識しているのは

レフだけかもしれない。まだ六・七歳というくらいの男の子どもだ。彼は状況が飲み込めないだけでなく、彼を救ったはずの少女にも忘れ去られて困惑の極みにあるのだろう。気がついてしまったとはいえレフには何もする気はなく、ただ不運だなと思っただけだった。子どもは震えながらシュガーローゼにも寄り添えず、離れることも出来ず、さまようように立っていた。

もう、子どもに注目している場合ではなくなっていた。レフの狭い間合いの中にも敵は踏み込んできていたのだから。

何もかも、ぐちゃぐちゃだ。

少年も、この船上の混沌（カオス）を感じていた。

誰が誰を切りつけたのか、認識出来ないうちにレフは突き出された剣から逃れて姿勢を崩していた。それも、かすり傷にしては深い傷をその身に受けながら。転倒する事だけは避けたいと、レフが思っていた頃だ。

乾いた、しかし確かな手ごたえのある強く短い音が人々の鼓膜を突き抜けた。何かが弾けたかのような音だった。一瞬、甲板は音を失った。

「武器を下ろせ」

獣が吠えるみたいな声だった。それだけで相手に威圧感を与える、力強い声でもあった。

何が起こったのか？　わずかの間だけ、ペッシェカーネ号の乗組員たちは理解できずにいた。甲板に立つ人間の視線を集める者が何を手にして、どういう行動を取ったのかを知るまでは。

「もう、終いだ。お前らの負けだよ、船長（キャプテン）――、」

海賊が一人、ペッシェカーネ号の船長であるアルマンを引っ立てるようにして連れて来た。皆を黙らせた男が銃でアルマンの顎を持ち上げた。値踏みをしているのだろうか、銃を手にしたその男は猛禽のような瞳を光らせてアルマンの名前を問うていた。ペッシェカーネ号の船長は疲弊した様子で、怪我でもしているのだろうか口の端が切れて赤くなっている。彼は、この船と彼自身の不利を知って

いた。
「アルマンだ」
アルマンを脅す男は満足げに頷くと、先ほどの台詞の続きを始めた。「キャプテン・アルマン？」それから、アルマンをしっかりと人質にしてこめかみに銃口を向けて言い放った。
「キャプテン・アルマンの命が惜しくば武器を下ろせ。おれの配下以外は全員、だ」
甲板の上に立っている者は少なくとも剛の者、生き残りであるからには腕力には自信があるはずだ。だが、彼らは見慣れぬ武器にやや困惑していた。船長のアルマンを脅すのに使っているあの、金属製の光を放つ、細長い筒のようなあれは、何だ？　銃はまだ、ミリヤール帝国以外では普及率が非常に低い。帝国ですら、珍しいものであるというのに、オスティオかシェーン出身の人間たちがその武器の特性をよく知るはずがなかった。育ったのは帝国であるアルマンは実際に目にした事があったので銃という新しい武器の存在とその威力をよく知っていた。だからこそ、敵の言葉に逆らうことなく黙っているのだ。
ケイスも、レフも、銃によって何が引き起こされるのかを理解せず、手の中の得物を放るような行動をとれずにいた。シュガーローゼは元より徒手空拳、銃の事も知らないでいたが、彼女は何か不吉なものをあの小さな光る筒に感じていた。よくない事が起こるとしたら、それはあの武器からだ。両脇にいる男たちに忠告をした方がいいのだろうか、シュガーローゼが思案しかけた頃、しびれを切らした海賊が辺りに威嚇し始めた。
「皆、言うことを聞いてくれ」
船乗りたちが大怪我を負う前にアルマンが手を打った。ほとんどがアルマンの事を船長と認めている男たちばかりだ、訝しく思いながらも渋々と彼らペッシェカーネ号の守り手は敵を害する武器を手放した。ケイスとレフも、彼らにならった。
「お頭、遅かったですね」

善良な船乗りたちが身を守る術をなくしていく様を睥睨していた男に声をかける者があった。それはケイスには信じがたい人物であり――

「ジュゼッペ？」

名前を呼ばずにはいられないほどの不安感を覚えた。敵の、海賊の、ペッシェカーネ号を襲った集団のまとめ役らしき、銃でアルマンを脅かそうとする男を、慕うようにあおぐ若い男は、ケイスをペッシェカーネ号に乗せてくれた人物だった。船に乗ってからは船酔いの対処法を教えてくれたり、何かと目をかけてくれたジュゼッペ――。彼が何故、敵の頭領と思しき男と親しげに話しているのだ？

誰かこの間違いの最大の問題点を指摘してくれ、とばかりにケイスは視線をジュゼッペや敵の頭領、アルマンなどの間にさまよわせる。

「お陰で少し死なせ過ぎましたよ」

「そうか」

彼らは青年の疑問など無視して海賊の話を続ける。「何にせよ、もう終わった」海賊の頭領は顎で悲惨な結末を示して、転がる死体の数々をジュゼッペに見せるように言った。忠実な部下のようにジュゼッペは男の言葉に相槌を打った。

「なあ、ジュゼッペ…？　どういう、事だよ」

彼も、ペッシェカーネ号の守り手の一人のはずではなかったのか？　救いを求めるようにケイスはアルマンへと視線を移した。商船の船長はうなだれて、ただ首を振った。彼も知らなかったのだ。ジュゼッペが、海賊の仲間だったなどと――。

シュガーローゼはしわを集めた顔でケイスを一瞥した。彼は、シェーンの騎士は、怒っていいのか分からないように見えた。

「最初っから、海賊の仲間だったって？　どうなんだ、ジュゼッペ！」

否定してほしいように見えて、シュガーローゼは顔をうつむかせた。内部密通者くらい、珍しい事でもないだろうと内心つぶやきな

がら。
　ケイスはただ、彼自身に答えを聞かせてほしかった。憤りも、悲しみも、恨みも、ケイスの感情はどうでもいい。そう思いながらも、声をはりあげずにはいられなかった。
「ジュゼッペ！」
　人懐っこい顔を困惑と苦笑に歪めて、その海賊は笑った。「たまには仕事をやりやすくするためにね、潜入捜査をしとくんだ」ほほ笑みながらも、人を寄せ付けようとはしない奇妙な表情で、ジュゼッペは続けた。
「最初から、海賊だったさ。船内を襲うのにほどよい場所に変えたりするために、こうして武器を隠しておいたりもする」
　こうして、と言った時にジュゼッペは短剣をひとつ持ち上げて軽く振った。気のせいだとは思ったが、見覚えがあるその短剣の色と形に、ケイスは目を見張った。さして変哲のない短剣だが、他者から受け取って以来何度も目にしてきた、ケイスの短剣。元の持ち主の動揺を受けてか、ジュゼッペは勝ち誇ったように目を細めてケイスを見た。
「短剣だとしても、武術をやってる人に持たせておくのは危ないからね」
　ジュゼッペはケイスが騎士である事を見抜いていた。だからこそ、ケイスの短剣をこっそりと盗んでおいたのだ。そんな素振りは一度も見せていなかったはずだ。ジュゼッペはケイスをひ弱そうだとさえ見なしていたのではないのか。ジュゼッペは、襲撃を予定している船に潜入工作するにはもってこいの人材なのかもしれない。
　その時はじめて、ケイスはこの戦いの敗北を知った。ジュゼッペがペッシェカーネ号に乗組員の一人として乗船した時から、もうこの勝敗の結果は決まっていたのかもしれない。そう思うほどに、彼らの手際は鮮やかだった。
「という訳だ。お前らにはしばらく船倉で大人しくしていてもらおうか」

海賊の頭領はアルマンを仲間の元に突き飛ばして、辺りを牽制するように銃口をちらつかせた。呆然としたまま、何も言えないでいるペッシェカーネ号の一員は、海賊たちに追い立てられるように船内へと追いつめられていった。シュガーローゼたちもその例に漏れず、ただ黙って海賊たちに従うしか道はなかった。

「お頭、待ってください！」

その男に阻まれるまでは。

「なんだ、ポール」

頭領は面倒くさそうに、だが威厳ある素振りで配下の一人を見た。ポールは真剣な顔をしたらいいのか笑ったらいいのか決めかねているような顔で、頭領の顔色をうかがいながらも言葉をつむいだ。

「ちょっと気になる事があって、そこの娘っ子に」

さした指の先に居たのがシュガーローゼであったことに、本人よりも一番驚いていたのはケイスだった。ポールの人差し指が大きな斧（バトルアックス）でもあるかのように、少女の前に立ちはだかろうとして、近くに居た海賊の一人に腕をつかまれ動きを止められた。

「そこの娘、もしかしたら“死神の娘”かもしんねえんですよ」

「死神の娘ぇ？」

さすがに、顔色が悪くなったのはケイスだけではなかった。

61　捕虜

「“死神の娘”ってのは、どうやら唇だけで相手を殺せる力を持つらしいんです」

ポールの言葉に、シュガーローゼは顔色を変えないでいるので精一杯だった。普段から固い表情の彼女は、感情の変化に富んでいるわけではなかったが、今回ばかりは平然とした顔をしていなければならないという事がこんなにも大変なことだとは思ってもいなかった。

どうする。

最悪の想像が少女をよぎる。いつも通りの展開になったのだとしても、ここは海上。ややこしさに磨きがかかっている。いつも以上に厄介な事になってしまった。シュガーローゼは思った。自分に、全てを壊してしまえる力があればいいのに。彼女の魔術の力は、人並みかそれ以下の能力しかなく限界がすぐに分かってしまうようなものだった。“死神のキス”があるためかシュガーローゼは武器をあまり扱わない。というよりも使用方法を教える人間がいなかったためと、非力な腕力ではまともに扱えないという現実を知っていたからでもある。だからこそ武術よりもまともに扱える魔術の力が、もっと強ければ良いのにと思う――。

「ああ、それおれ聞いた事あるかも」

賛同する仲間が一人、ポールに視線をやった。噂というのは、意外にも現実離れしている方が伝わりやすいのかもしれない。こんなところにまで、とシュガーローゼは冷静さを保とうと努めた顔の下で苦虫を噛んだ。無理矢理連れて来られた先が、はじめての海で、その上海賊にまで襲われて捕まり、その上とどめはこれなのか、少女はいっそ全て振り払って海にでも落ちてしまいたかった。それはとても良い案に思われた。何故なら、全てを終わらせる事が出来るからだ。シュガーローゼに向かった疑いも、それが真実であるとい

う事も、“死神”であるという事が明るみに出た場合の未来も、うっかり海に落ちてしまえばなかった事になる。名案だった。

海賊の頭領が離れた場所からポールの指差した少女を見やる。まだ胡散臭い噂を聞く顔のままだが、確実に彼を筆頭に海賊一味はシュガーローゼに興味を示してしまっていた。

「つまりは何だ、ポール」

「見たんすよ、あの娘っ子がボドワンにキス一つで殺すのを」

ポールは、尾ひれのついた噂によってシュガーローゼの能力を正しく理解してはいなかったし、キスした瞬間もはっきりと見たわけではなかった。人を唇で殺せるという少女の噂と、目の前の少女が生み出した不可思議がつながった時に、瑣末な事は問題ではなくなったのだ。彼は噂が真実であれば、少女が自分の退屈をどこかへやってくれるのならば、そのきっかけなど何でもよかったのだ。だからポールは頭領には自分が見た事の曖昧さや、噂の不確かさを伝えるのではなく見たものが噂とつながるという事から、目の前の少女が“死神の娘”であると証明したかった。

仲間の具体的な名前を出した事で、頭領は視線のみでボドワンの姿を探したようだった。海賊の一味もペッシェカーネ号の抵抗により、少なくない被害をこうむった。中には負傷だけでなく死んだものがいる事は甲板の死体の数からして明白だ。頭領はその中にも立っている仲間の中にもボドワンの姿を見つけられず、目をすがめた。仲間の一人が死んでいるのは確かなようだ。生きているという望みも抱かず、頭領は話題の渦中の少女を見た。長年、人を目だけで脅かしてきた頭領の瞳には家禽類の鋭さが帯びていた。さすがに、それにはシュガーローゼも身がすくんだ。これから行なわれようとしている未来の事を思えば、走り出さなくて済んだというくらいに冷静だったといえよう。

「それが一人じゃねえんですよ、二人、いや、三人もあの娘っ子が触れるだけで、それだけで死んでいったんす！」

極めつけにこれだ、といった様子でポールが一度下ろした手をも

う一度持ち上げた。今度は手の平を広げて何度も示すようにして。
シュガーローゼは戸惑いを見破られぬように気をつけながら、数の不一致に疑念を抱く。彼女はこの船では二人にしか“死神のキス”をくれてはいない。物事を大げさに語るものは居る。事実をより大変な事に見せかけるために行われる嘘だ。それにしても、このまま黙ったままだったらシュガーローゼはこの甲板に倒れた海賊たち全てを殺した事にされるのではないだろうか。
やはり、自分で動いた方がいいのだろう。ケリをつけなくてはならない。周囲に止められる可能性は高いが、邪魔する者たちを振り払って逃げなければ。海中に飛び込む事になっても、もう、シュガーローゼはじっとしてはいられなかった。
息をゆっくりと吸おうとした瞬間、それを遮るように一本の腕が伸ばされた。
「この子が死神？　何をばかげたことを」
青年が笑った。彼にしてはとても――とても、嫌味な笑みで。シュガーローゼはぎょっとしてケイスを見上げた。
乱雑に少女の胸倉を掴むと、ケイスは口付けた。ぽかんとしたのは海賊たち、ペッシェカーネ号の乗組員たち。奇行に走った青年を見上げるレフの瞳も驚きに見開かれていたが、彼らは知らなかった。ケイスの特性を、死神のような能力を持つシュガーローゼの“死神のキス”がきかない人物の一人であるということを。
目前には瞳を閉じたケイスが、決して短くはない間にシュガーローゼの唇をふさいでいた。訳が分からない――。シュガーローゼの思考は混濁しかけて、押し付けられたぬるいそれが誰のもので何であるかを思い出すと、やっと相手を突き飛ばすことに成功した。
わずかによろけながらも、ケイスは自分の口元に手をあてて、この光景を見せ付けた人間たちに目をくれた。これで分かっただろう？　とでも言いたげに。
「私はこの子の唇に触れました。死ぬどころか、不調は何もない」
怪我をしてはいるが体に動かないところなど何もないというよう

に、両手をひらひらさせたケイスは内心の冷や汗を隠した。ケイスは言いながら、全身に怪我を負ってる姿で死にそうにないと口にするのは説得力がないように思ってしまった。だが、さっきシュガーローゼに触れる前から怪我はこうだったのだから、突然怪我が増えたわけでもよろけたわけでもないのは、周囲に証明出来たはずだ。それは、彼らの行動をただの椿事だとして見ている周りの反応から確かだ。彼らは、“死神少女”の噂を知らない者もいるのだろう、その点からして首を傾げてしまっている。文句があったのはポールの方だった。

「そ、そんな馬鹿な！」

じろり、と海賊の頭領に睨まれてポールは慌てた。ポールは確かに見たのだ。確かに両の目で、ピンクゴールドのおさげ髪の少女が唇を仲間に触れさせて、相手を昏倒させるのを。二度ではあるが、一度だけではなかったはずだ。二度は偶然、三度ならば――。そう思っていたのだが、これは一体何の騒ぎなのだ？　ポールは非常に焦った。折角、彼は退屈しのぎになるものを見つけられたと思ったのに。

「なんかの間違いだ、そうだ、おれは見たんだ！」

仲間に助けを求めるように視線をさまよわせたポールは、事情を知らぬ者にしてみればただのほら吹き男、道化のようにしか見えなかった。何をくだらないことを、とあきれ返った海賊でさえ、居る。ジュゼッペはまだケイスを凝視するように、探った目を変えないでいたが、他の者は頭領でさえもポールの言葉を信用しようとしていなかった。だが、一度仲間が口にした言葉が完全な作り話だというのはおかしいと、頭領はシュガーローゼを値踏みした。ただの子どもだ。髪の色が少し珍しく、顔の造作は悪くないようだが、これといって強く他人を引きつけるような力を持っては見えない。一歩踏み出すと、頭領は少女の小さな顎を掴んだ。顔を自分の方向へと向かせると、“死神の娘”だとか噂される子どもをよく見てみようとした。

「死神の娘、なあ……」

ケイスとキスをしても何故か死なない、それによってシュガーローゼが“死神”ではないと証明するための茶番だった。それくらいシュガーローゼにだった充分承知している、理解できる。しかし無理矢理に行なわれたそれに嫌悪感を抱かない彼女ではなかったのだ。頭領が掴んだ顔には、深淵のような暗く深い感情の闇に凝った表情が浮かんでいた。半眼にすがめられたシュガーローゼのアクアマリンの瞳は、その年にしては老いていた――。

それでも、海賊の頭領の気をひくほどではなかった。怒られた子どもでも見るような目で、彼は眉を持ち上げると少女の顎から手を離した。

「お頭あ……、おれ…」

懇願するように頭領に近寄るポールを、彼は嘆息まじりに肩を叩いてやる。しょうがないヤツだ、と言わんばかりに。彼らは完全にシュガーローゼから興味を失ったようだ。まだ油断は出来ないが、話題の渦中からシュガーローゼが外されたものと見なして良い。ケイスは音をたてないようにと息を吐き出した。

これで、シュガーローゼが“死神”だと知られる心配はなくなった。そう安心していい。そう思ったから、彼はちらと少女を見たのだが、彼女は視線が合う前に首を回して顔を背けた。

（……それは、そうだよね）

ケイスは悟った。彼にしては珍しく、他人の気持ちにすぐ気がつけた。怒らせた、というよりももっと悪いかもしれない。しかし、あの場を切り抜けるにはあれしかなかった。他にいい方法を思いつけなかった。ケイスならば、あの場を切り抜けることが出来た。以前に彼女は“死神のキス”がきかない相手がケイスを含めて三人居ると言ったが、その三人だけが他人にシュガーローゼが“死神”などではないと証明する事が出来る人間なのだ。そのうちの一人がそうと証明しただけではあるが、仮に彼女が“死神”ではないとしても、年頃の娘が一方的にキスをされるというのは相手が誰であれう

れしい事ではないだろうに――。青年は悄然とした。そんな暇はないとばかりに、蹴飛ばされて船室に連れられるまでは。

「おらおら、いいからお前らは積荷になってろ」

ペッシェカーネ号を動かしていた船乗りたち、ただ帝国に行きたかっただけの乗客の生き残り、密航者である少年少女を含めて、船倉に捕虜として閉じ込められることになるのだと、皆気がついていた。もはやどうしようもない事実ではあるが、ある者はうなだれ、ある者は敵を睨み、ある者は不安そうに天を仰いだ。

暗がりに押し込められていたケイスは、ふと気になっていた事を思い出す。シュガーローゼが“死神の娘”などではないと証明した後もジュゼッペが疑うようにケイスを見ていた事を。彼とケイスは短くない間、時間を共にした。ジュゼッペは少なくともケイスの性格を知っているだろう、他人にキスを強いる人物ではないと気がついていて、ケイスの行動を怪しんでいるのではないか――。普段と違う行動を取る時に、人は何かを隠そうとしているのだと、ジュゼッペは知っているのではないか？　思ってしまうと内心気が気ではなかったのだが、最後に見たジュゼッペの姿はこちらを見ようともせず、海賊の仲間と打ち解けあったような会話をする姿だった。ケイスの思い過ごしだといいのだが。

海賊の捕虜になっている身を思えば、あまり楽しい未来が描けず、ジュゼッペのいぶかしむような瞳が不安をあおって仕方がなく、ケイスの胸に黒い煙のようにくすぶり広がっていった。

† † †

ペッシェカーネ号は曳航されて、海賊船のあとに続いた。海賊の頭領は損傷がひどければペッシェカーネ号を捨て置くつもりだったのだが、存外被害は少なく、それならばともらいうける事にしたのだ。元より捕虜を閉じ込めておくには丁度いい。港に着いたらペッシェカーネ号は修理され、今後の海賊の仕事に使われることだろう。

甲板に転がっていた死体は海の中に放り、片付けられ、血のあとや損傷が残るもののペッシェカーネ号は見た目には疲弊した静かな船、という体を擁していた。その船内には、見張りをつけられて閉じ込められた捕虜たちが居るにも関わらず、見た目にはどこか平穏そうに見えた。

海賊たちがペッシェカーネ号をどこに連れて行こうとしているのか捕虜たちには分からない。だが、本来の目的地であるブリュム港には行かないだろう事は想像できる。ブリュムという名の港は軍港で、ミリヤール帝国の名だたる海軍の本拠地である。海賊が海軍の基地に行くはずがないのだ。

捕虜たちは三つの部屋に分けられて、拘留されていた。そのうちのひとつである、広くない船室は偶然にもケイスがペッシェカーネ号の船乗りたちと相部屋として使う事を許可された一室であった。その事に気がつくと、すぐに彼は部屋の中に自分の私物を探した。トワール島に着いた日にジュゼッペに奪われていたものの、短剣は常にその身に帯びていた。他の荷物は必要最低限のものを除き、ケイスに与えられた部屋に残しておいたのだ。それが今役に立つかどうかは分からないが、自分の手元に戻しておいても構わないだろう。それに、ケイスのものではない荷物も含まれているのだ。それをレフのものかどうか、確認しようとして彼を見つけたら、先に口を開

かれた。
「なあ、あんた……どうしてあいつのキスで死なないんだ？」
確かに、レフは見た。どうしてあんなものが見られたのか信じられなかった。だが、確かに見た。ケイスが“死神”にキスをされて生きているのが嘘のようだ。レフは、その少し前にも二人の海賊をシュガーローゼが“死神のキス”で殺すのを見ている。結果的には、シュガーローゼが警戒した海賊に殺されるとか、レフと引き離されるかされる最悪の未来は防げたから、ケイスが死んでいないのはレフにとっても幸いだったのだが。
怪我こそすれど、死にかけてもいない青年はゆるく目元を細めて眉を寄せた。納得いかない事だが信じるしかないと自分に言い聞かせて、無理矢理顔色を明るくさせるかのような表情だった。こらえきれない感情を押し殺そうとするかのように、小さくつぶやいた。
「……声を落として。あの事は、僕にもよく分からないんだ」
少年は顔をしかめた。ケイスは自分のやった事が分かっていないのだろうか、と思ったからだった。
「ただ、僕には効かない」
潜めた声は、周囲にあれが「ケイスだけにしか“死神のキス”が効かない」と聞かせないためだったのだと、レフが気づくのには少し時間がかかる。先ほどの自分が声を抑えてもいなかったのだと分かると、少し後ろめたく思う。ケイスにはもっと聞きたい事があったのだが、レフはそれらをするのはこの場ではふさわしくない、と思っているようなエメラルドの瞳と出会って、言葉にする事が出来なかった。
ケイスの方でも、この話をこのままで終わらせるつもりはなかったが、この状況下でシュガーローゼの真実についてやたらと口走るのは賢明ではないとよく分かっている。少年には悪いが、話題を先ほど自分がしたかったものに戻す事にした。
「そういえば、これはもしかして、ローゼと……レフくんのものかな？」

「レフでいいよ」
ケイスはチェルヴォの町を出る前に、カルロに多くの荷物を手渡されていた。牢屋に閉じ込められていた者の荷物だと言われて、ケイスが相手を追うのに手がかりになるだろうと渡されたものだ。先ほどから一言も口をきかないシュガーローゼはケイスを見もせずに自分の鞄をひったくった。残ったのは推測するにレフの荷物だと思われるもの。一冊の本だった。
「嘘だろ…」
まるで、大陸を横断した書籍を見るような目でレフはその“魔導の書”を見つめた。触れたら消えてしまうとでも思っているのか、なかなか手をのばさない。怪訝になってケイスは、改めてレフという名の少年を見やった。甲板で経験した戦闘のせいで、ケイス自身も髪は乱れていたが、普段からレフはぼさぼさの頭をしているのかもしれない、と思わせるような焦げ茶の髪。伸びるに任せて肩につくほどの長さだ。顔の半分まで覆う前髪も長すぎるといえるだろう。顔も体もあちこち傷だらけで、血のりまでくっつけているのはこの場の全員と同じ共通事項だ。
いささか思案に暮れたような瞳にぶつかって、ケイスは少年の瞳がきれいな琥珀色をしているのを知る。ただ、シュガーローゼと同じように子どもにしてはどこか鋭角的で年不相応な澱みが見え隠れするのを、彼は見逃さなかった。
「君のだろ?」
「あ、ああ……」
レフはやっとケイスがチェルヴォから持ってきた本を手にした。途端、想像よりも重い負荷がレフの手にかかる。まるで自分の存在を忘れるなとでも言うかのように——。
言い知れぬ感覚に、少年の心臓はざらりとしたヤスリで撫ぜられたような気持ちの悪さを感じたが、その出所が“魔導の書”からだと思いたくなくて、レフはすばやくそれを自分の腹に押し付けた。少し迷って、二度と手放す事のないようにと上着の下、背中のズボ

ンの中に隠すことにした。非常に違和感があるがぱっと見には上着に隠れて少年が書籍を隠しているとは気づかれまい。いつかズボンからずり落ちてしまいそうだが、レフは鞄のような便利な用具入れを持ってはいない。これしか方法はないのだ。

　礼を言うなどという考えがレフの頭からは抜け出ていたのだが、ケイスには何かを言わなければならないのだろうと、顔を上げたら思っていたよりも穏やかな顔をした青年がいた事に、少年は驚いた。そのまま口を開かなければ、ケイスの存在はレフにとって無害であったかもしれないのだが。

「それで、君たちはどうしてペッシェカーネ号に？」

　ほほ笑んでいるはずが、有無を言わせぬ口調だ。ケイスにはあまりない事だが相手を詰問するような言葉付き。厄介なことになるぞと、少年は苦虫を噛んだ。

「僕は君たちを追ってきたんだ。帝国行きの船を探しているようだと分かったから、この帝国行きの船に乗った。でも君たちは見つからなかった。海賊に襲撃されるまでは。そうだろう？」

　はじめてチェルヴォで会った時には、レフはケイスをただ正義感が強いだけの騎士だと思っていたが、どうやらそれだけではないようだ。二度目に会った時にも、レフが背中に隠した“魔導の書”から飛び出してきた魔物と果敢に戦ったのはケイスだ。そして海賊襲撃時にも、ケイスは確かな剣の腕を見せるかのように奮迅していたではないか？　少年は、この一見柔和で優男然とした男が、ひとつの事に拘ると手を抜かないような性質なのではないかと眉を寄せて見上げた。

　どう考えても、シュガーローゼを軽く誘拐未遂したレフは分が悪い。何を言っても言い訳にしかならず、それもシュガーローゼを気遣うような青年を相手にしては彼を怒らせる以外は出来ないような気がした。

（どうしろってんだ）

　レフは帝国行きの船を探した時に、金を払って船に乗るつもりは

なかった。海賊のように乗っ取るかしないかぎりは、無銭乗船は難しいだろう。残る道は密航だ。その方法は至って簡単、ペッシェカーネ号の積荷の中、木箱の中にその身を潜めて船乗りに船内へと運ばせるのだ。それが成功して、意識が怪しいままのシュガーローゼも共に密航者となったために、ペッシェカーネ号に乗ってミリヤール帝国を目指すことが出来ていたのだ。海賊船がやって来るまでは計画は順調に進んでいたのだが、とんだことになったと今更ながらにレフはため息をつく。

ケイスは自分がここまで他人に強く出れるとは思っていなかったが、元々柄じゃない。相手の疲労と、自分の疲労に気づくと彼も嘆息したくなっていた。レフの沈黙が続く限り、ケイスは答えを得ることが出来ないのだ。実力行使などするつもりはないし、こちらが一歩も譲らない素振りを見せれば少年は口を開いてくれるのではないかと思ったのだが、どうもそうはいかないようだ。

どうしてペッシェカーネ号に居るのか。それを問うには丁度良い相手がもう一人いるにはいたが、

「ローゼ。どうしてここに？」

声音を和らげても、何の意味もなく座り込む少女から返事がもたらされることはなかった。

船室にはペッシェカーネ号の乗組員たちが他にもいたが、そうして会話しているのは彼らだけだった。皆が疲れて、絶望して、うなだれている。また捕まったなと、レフはこれまでの牢屋生活を思った。

長い船旅になりそうだった。

62　長い余暇

嵐が来ていた。捕虜たちは一部、船上特有の病にかかっていた。船酔いだ。

残念ながらシュガーローゼたちの閉じ込められた部屋には窓がなく、時間の経過が分からないようになっていた。捕虜たちに食事は与えられず、排泄行為は部屋の隅でするしかなく、かなりの劣悪な環境におかれていた。ひたすらに空腹を我慢する毎日、何日たったのか分からないが、誰もがこの時間を非常に長いと感じており、ただ待たされる日々は一ヶ月も経過したのではないかと錯覚していた。

海が荒れたのは、せめて早く陸に着いてくれと願う只中、今後どうなるのか分からない身の上の捕虜たちは不安を煽られていた。

暗い部屋の中で、誰もが憔悴しきっていた。

少女の世界は、いつからかもうぼやけたものになっていた。自分とは関係ない事象をただ眺めるだけの存在になったような気でいて、しかし心だけは重かった。

シュガーローゼも海が荒れるのには慣れていない。床が暴れるようにして動く事には今後も慣れることはないだろう。精神的なものだけでなく、やはり彼女も船酔いで気分が悪くなっていた。

最悪なこと続きで、チェルヴォの少年には無理矢理引き回され、とどめは海賊の襲撃ときた。それから――。思い出したくもない事象がひとつ。まるで、あの時みたいだった。状況も細部にも違いはあれど、あの、闇を纏ったような男に出くわしてしまったあの日みたいに。あの時も、シュガーローゼの不用意な行動が元で“死神少女”だという事が知れてしまい、最初のキスがきかない相手にキスをされるはめになった。今回は、海賊たちにシュガーローゼが“死神少女”だという事が知られてしまいそうになって、二番目のキスがきかない相手にキスをされることになった。違うようで似ている状況下。

重要な相違点がひとつある。ケイスはシュガーローゼを助けようとした、ということ。理屈では分かる。彼女とて、それが最善の策であっただろうことは認めてもいい。だが、それが何だというのだろうか。関係あるのか。

（あいつ、死ねばいいのに）

ケイスは力があった。策もあって、“死神のキス”がきかない数少ない人間でもあった。その中でも誰もやってのけない事を、彼は簡単にしてみせる。まるでそれが当然と言わんばかりに。

キス。それはシュガーローゼの唇に宿った不可解な能力を思えば、これまでの体験からすれば、何てことのないものだと思えるのだろう。だから、ケイスはああして自分と口付けをした。だからこそ、腹がたつのだ。その事実に。何がどうとシュガーローゼは言えない。ただ、腹立たしかった。嫌だった。

彼の全てが、シュガーローゼに影響を及ぼすかのように思えてならない。そのことが、嫌だった。

まるであの大嘘付きのように――……考えてしまってから、少女はぎゅっと閉じた目を更に強く寄せた。

船酔いに、与えられた長いだけの時間。何かを考えてしまう時間。それは今シュガーローゼが欲しているものではなかった。陸とか、清潔な寝床とか、あたたかいご飯とか、そういったものは確かに必要だったが、そんなものは要らないのだ。

（死んじゃえたら、いいのに……）

ケイスよりも、大嘘付きよりも、誰よりも死を望むのは自分自身の死――。消えてしまいたかった。

船に打ち付ける波のように、一瞬で砕けて消えてしまえたらいい。何も必要ないのだ。安寧たる永眠以外は。

ぐるぐる、揺れるは世界、床ではなく、少女の世界。

消えたい。ただ、それだけ。

意識はいつも船酔いによって揺れている。眠っているようでも、意識がある時がある。起きていても、考えられない時もある。少女

の宇宙は消えては現われ霧のようにおぼろであやふやだった。
会話も途切れ、暇を明かすにも疲れた日々に、嵐はしかし更なる倦怠を与えただけだった。寝込むような少女の耳に切れ切れにひそめた声が届いてくる。うるさいと思いながらも、胸のむかつきが吐き気を誘発しそうなので、それを逸らすためならもう、シュガーローゼは何でも聞こうという気にもなっていた。
昔語りのようだと感じたそれは、違うようだった。レフの声が聞こえる。
「じゃあ、あいつら捕まったのか」
「多分……僕は当事者でもあったのに、アルたちを置いてきてしまった。彼らには申し訳ない事をしてしまった……」
「……あんた、お人好しって言われないか」
「そうかもしれない」
相手はケイスだ。なんとなく二人の男性が普通に会話をしているという事が奇妙なことのように思えてきて、少女はうっすらと瞼を上げた。退屈は、どんなことでも起こさせるのだろうか。ふいに彼らの会話が気になってくるなんて、シュガーローゼは思いもしなかった。それはきっと船酔いという病気のせいに違いない。頭がそれに侵食されているのだ。
「ぶっちゃけ、ちょっと度が過ぎてると思わないのか？　あんた、お節介に取り付かれてる」
何をこれまでに話してきたのか、シュガーローゼには推測するしか術はない。話の流れからしてケイスが何かお人好しアピールをしてしまい、呆れまじりにレフがあんな事を言うようになったのだろう。それはそれぞれに彼らしかった。ケイスらしく、レフらしい。そんな風に思った途端に、自分がこれまでに誰かの“その人らしさ”について思いをはせてこなかった人生に気づいた。おかしなものだ。苦々しく感じながらも、それを振り払うことは出来なかったが。
「お節介っていうか……」
少女の目の前には壁がある。部屋の端に陣取って、船室の全員に

背を向けて横になっているのだから当たり前の光景だ。だのに、声だけは小さくとも聞こえてくる。

ケイスは言葉を選んでいるのか、自分でも上手く表現出来ない感覚を口にするべきか迷っているのか、黙り込んでしまった。どうでもよさそうにするレフが、一度シュガーローゼを眺めていたのを、彼女は知らない。

「本当は、助けられなかった人を助けたいだけなんだと思う」

「え？」

あまり興味がなさそうに、レフは声を上げた。気にせずケイスは自分の中の感情を、一体どうやったら言葉に、そしてまともな文章に出来るのだろうかと思いあぐねていた。どうしたら、あれを表現できるのか。

レフと同じく他人の過去になど興味のないシュガーローゼは瞳を伏せた。波にゆられて、そのまま溶けてしまいたいと思いながら。雑音と化した男たちの会話は、ほとんど耳には入ってこなくて良いものになった。

「聖典の、羊飼いと迷子の羊の話を知っている？」

はじまりはそんな言の葉だった。ウィディト大陸において、東の未開の地を除いたほとんどの国や地域が一つの宗教を信じている。ただ一つの神を信じ、聖典の言葉を元に善き人生を送るという宗教を。その聖典の事を言っているのは分かる。だが唐突に話が変わってしまったと、レフは額にしわを作ったが、ひとまずは青年の問いに答えようと口を開いた。途端、ケイスが続けたのでレフはしばし開いたままでいた口を閉じることにした。

「あの時を思い出すと、いつもあの迷子の羊の話を思い出す」

悲しき羊の鳴き声が聞こえそうなくらいだ。

薄くて色の少ない青空の下、群れからはぐれた羊がさまよっている。レフまでそんな光景を思い浮かべて、それから倦怠から生まれる興味を知って、ケイスの話の次にあるものを待った。

船が一際大きく揺れる。嵐はまだ終わりそうにない。彼らの乗っ

たペッシェカーネ号が曳航されるのも、まだまだ続くようだ。夜か昼かも分からない中、いつしか彼は昔話をはじめていた。長い長い昔話を。

63　羊飼いと迷子の羊1

透明な空に、うめき声のようなものが響く。
イメージはいつも明瞭で単純。それでいて幻のように触れることは出来ないと知っている。
誰かが泣いている。鳴いている。
聖典には、一人の羊飼いの話がある。
自分の飼っている羊の群れを世話するただの羊飼いだ。彼は、たくさんの羊を愛していた。
ある日、たった一匹の羊が群れから姿を消した。どこかで迷子になったのだろう。羊飼いはその迷子の羊のさびしげな鳴き声が聞こえたように思ったのだろうか。
ただ一匹のために、羊飼いはあちこちをさまよった。
迷子の羊を探すために。
羊は見つかる。羊飼いによって、見つけてもらえるのだ。
でも、その結果を、聖典に書かれたそれを、知っていながらも思う。
本当に、迷子の羊は見つかったのだろうか――……？

†　†　†

母親が死んだ。九歳の息子と七歳の娘を残して。父親は既になく、母が死んだのは家族を守るために働きすぎたのだと幼心にも分かっていた。悲しみが襲ってきたというよりも、あまりに唐突すぎて呆然としていたように思える。あっという間に孤児になったからだろう。

母イルゼの遺骸はいつの間にか葬られていた。がらんとした我が家に、虚脱感が襲ってきた。

狭い二間の部屋。台所でもあり食卓でもあり居間でもある部屋。その奥に親子三人で窮屈になりながらも眠る寝室。家の入り口の扉を開けばすぐに全貌が明かされるようなとるに足らない小さな家だ。明り取りの窓には木戸が、そこから光が差し込んで埃っぽい空気を照らし出している。家具は少なく、二脚の椅子と机があるだけだった。台所には煤のかかったかまど、鍋、杓子。食材は玉ねぎが一つ地面に転がっていた。長櫃（ながびつ）が一つ横たわっており、物入れと物置と箪笥（たんす）と母親の椅子代わりになっていた。子どもたちは椅子に座らせて、それより一段低い長櫃の上に母はよく腰掛けていた。

寝室を隠す扉はなく、簡素な寝台ともう一つの長櫃が存在するだけの部屋が家の入り口からも見えていた。母親はよく仕事帰りに疲れているのに、内職をしに寝台から居間へと戻っていった。子どもたち二人を寝かしつけてから、彼女は一仕事をこなすのだった。それでもたまに三人一緒に布団に入った事もあった。イルゼは痩せていたが成人した大人の体型だったので小さな寝台に、子どもがいるとはいえ三人も入ると収まりきらないのだが、全員で笑いながらも体をあたためあって眠りについた。

それはもう、叶わないのだった。

あれらの光景はもう、見る事が出来ないものとなった。

時が止まったようだった。世界は止まって、しかし動いている。

何をしたらいいのか分からなかった。

「お兄ちゃん…」

妹の声で覚醒した。ああ、自分には彼女がいた。ルネ。ケイスの妹。何がなくとも、自分には残された家族が一人いたのだ。

か細い声の彼女は泣きはらした目をしていたが、もう泣いてはいなかった。彼女の方が現実に早くたち戻っていた。あんなに小さいのに、何をしたらいいのか分からず妹の存在も忘れかけたケイスとは異なり、しっかとこちらを見ていた。

ケイスより少し色の薄いゴールデンオリーブの巻き髪。母親ゆずりの灰色がかった蒼い瞳。ケイスより頭一つ分近く小さな、女の子ども。温厚で柔和な母に似て優しげな顔立ちが今は曇っている。ケイスの妹。

「ルネ……」

妹はこちらを見ていた。目の下が黒ずんでいて、血色の悪い肌。いつまでこうやって自分と妹を放っておいたのだろうか。それなのに、そんな兄を持ちながらルネはケイスを見上げていた。ひどい悲しみの中に小さな光をたたえて。そっと手を掴まれた。ゆっくりと伝わるのはぬくもりで、小さな自分の手よりも更に小さいルネの手がとても尊く儚いものに思えた。

「…どうしよっか…」

口にしながら、ほとんど一人言のようなものだった。兄である自分がどうにかしなくてはならないのだから、ケイスは妹の手を守り自分が盾になるつもりだった。だからそれは心の中にしまっておくべきものだったのだ。しかしそれを口にしてしまうほどにまだケイスは幼く、また強くもなかった。

小さなルネはうつろに瞳をさまよわせて、俯いた。くう、とかわいらしい音が妹の腹から聞こえた。

「おなかすいた…」

それは当たり前のことだったが、ケイスが忘れていた現象だった。人は空腹を覚えるものなのだ。そうだった。早く、妹に何かを食べさせてあげなければ。

「そうだね…」

残念ながら、彼は食事をどのようにして用意したらいいか知らなかった。日用の糧は常に母親が用意するもので、息子はそれをただ手伝えばいいだけだった。暮らしが裕福でないのは分かっていたので、ケイスも母親の内職の手伝いもしていたが、自分の力で食事を用意したことはなかった。

どうしたらいいのだろう。彼らには、いくらか懇意にしてくれる親の知人がいたはずだが、どうした事か今はその顔を思い出せないでいた。簡単な葬式を主催してくれた人物がいたはずだが、この場所にケイスとルネしか居ないという事で、頼ってはいけないような気がしていた。

誰もいなくなった家。子どもが二人残されているというのに、ケイスの家は、彼と家族の家は誰も住んでいないように思えた。狭いはずの部屋の中がひどく広い空間に感じられた。

どうしたら、いいのだろう。

最初は、両親をなくした哀れな孤児の兄妹をかわいそうに思ってくれる人がいた。しかし子ども等はただの他人でしかなく、いつしか金や食料を融通するにはふさわしくない相手、疎ましい存在になりはじめていた。薄々ながらケイスもそれを感じ取っていた。

大事にとっておいたはずのパンが、最後の食料となった。

もう、このままではいられない。状況は変わったのだ。愛情に変わらない同情はいつしか冷める。湯が水に戻るように当然の事だった。つまりはケイスたち兄妹を最後まで面倒見ようという人間はついに現れる事なく終わったのだ。彼らは彼らで忙しく、またそう裕

福ではないのだ。

生まれ育ったのは、シェーン王都の都会からは離れた小さな町で、町民のほとんどが農業で暮らしていたために、その年の農作物の取れ高が悪ければ人々は貧しくなるという単純な図式の元で生活していた。天候不順や災害をもってして天はバランスをとろうというのか、小麦がよく太る年とやせ細る年は交互にやってきたので、町民は常に蓄えを用意し、毎年贅沢の少ない質素な営みをしていた。食い扶持が増えるのは大変な事と言わずとも、簡単に引き受けられるほどに町民は富んではなかった。

ケイスは働かねばならなかった。それは珍しいことではない。背が伸びてこれば子どももすぐに大人のような扱いをされ、体力がついてこれば農作業を一から教え込まれる子どももいるほどだ。大人にとって、子どもは「小さな大人」なのだった。子どもは少しでも早く大きくなって仕事を手伝わせるべき存在だったのだ。家計を手助けすべき小さな大人なのだ。

とはいえケイスはまだ背も小さく、家の簡単な手伝いなら簡単であるが、見た目の頼りなさから大人に「うちで働いてくれるなら引き取ろう」と思わせる容姿をしていなかった。そんなわけで誰かの元で働きながら住まいを提供してくれないかとも考えたのだが、そういう話が彼の元に舞い込んでくることはなかったし、自分からもそう言えるほど度胸がなかった。

これからはそうはいかない。明日の食料ももう存在しないのだ。これ以上ルネにひもじい思いをさせたくはない。ケイスは働かなければならない。

その日の食事は、しばらく何も口にできないかもしれない未来が待っているためにケイスは食べるのを拒んだ。

「お兄ちゃんの分は？」

「さっき食べたんだ。ルネはちゃんと食べるんだよ」

毎日の食が以前にも増して細くなったので、ルネは少し痩せたかもしれない。まだ七歳なのに。きれいなはずの巻き毛が少しくすん

だ色になってきた。
　灰がかった蒼の瞳に見つめられて、ケイスはもう少しで何かを白状させられそうになった。たとえば本当は昨日から何も食べていない事とか。しかし子どもは目を逸らす事によって最悪の事態を回避した。うっかり口をすべらせなんかしたら、妹は自分の食べ物を兄に食べさせようとするだろう。彼女は心優しい妹なのだ。
「そっか」
　なんとかルネは納得してくれたようで、ケイスを見つめるのはやめてパンにかじりつく。育ち盛りなのだ、お腹がすいていただろうし食べる行為は嬉しいだろう。パンが妹の口の中にすっかり消えると、ケイスはほっと安堵したが、それは最後の食事だったという恐ろしい事実を突きつけられただけでもあった。
　明日からどうしたらいいのだろう。示唆してくれる大人はいない。傍に居ない事で、ケイスは大人に対する信用を失いかけてもいたから、誰に聞けばいいのか分からなかった。
　とにかく知り合いの顔を思い出して、なんとか働かせてもらえないかどうか頼むしかない。今までそれをしないでいたのがおかしいのだ。彼はお金を稼がねばならない。このままでは妹共々飢え死にが待っている。
　たった一人になった気がした。妹がすぐそこに居るのに、ケイスは世界に一人っきりにされてしまったように感じた。無味乾燥とした砂漠の上に、ぽつりとたたずむ自分がいて、ケイスはそれを空から見下ろしているのだった。

† † †

ケイスの住む町ゾンネは田舎に属するが、南に位置する王都とそう離れた距離ではない。それでも都の繁栄を享受するほどには近しい場所ではなく、行く手を阻むかのようなツヴィッシェン山脈が王都の前に立ちはだかっているので人の行き来は多くなかった。みなその山脈を迂回してしまうために知名度も低い町だろう。とはいえ閑散とした寂れた町というわけでもない。たまにはゾンネから見るツヴィッシェン山脈の連なりがどこよりも美しいと旅人が訪れる密かな穴場でもあるらしかった。

北の町から影響された養蚕が一部地域で行なわれているが後は農業がゾンネの基本的な産業だった。もちろん生活必需品を原材料から加工し販売するものも多いが、どの家でも自分で出来そうなことはほとんど自家製で作ってしまう。ゾンネがただの農村だった頃と生活形態にさほど変わりはなかった。

小麦を作る土地がなければ小作人として土地所有者の下で働き、賃金かそれに見合う麦をもらうのが普通であった。ケイスもそういった農作業を求めて町をさまよったが、色よい返事がもらえる事はなかった。彼はまだ幼すぎたのだ。農具を持たせるには小さな体躯、水汲みや家畜の世話程度なら自分たちの家の子どもで事足りる。

自分に出来る仕事はないのか。ケイスが半ば諦めかけた時に、ゾンネではあまり居ない職人の親方が弟子になれと言ってきた。赤ら顔の中年で、髭が顔を覆った男だった。彼は革製品を作り出す職人で、町には数少ない職人の親方だった。渡りに船とケイスはもちろんこれを受けた。弟子入りする形ならもしかしたら衣食住のどれか一つは世話してもらえるのではないかと、期待した。

兄が働くようになって、一人になったルネはやる事もなく手持ち無沙汰だった。以前のように町の子どもたちと遊ぶつもりになれなくとも、彼女には膨大な時間が与えられていた。兄のいない家に居る気分にはなれず、やはり自分と同じ年頃の子どもたちが居る場所へと足が動いていた。

その日もよく晴れた日だった。ゾンネは気候のよい地域に属し、旅人の褒めるツヴィッシェンの峰々を美しく照らし出すのだった。町に雲がかかっても、遠い山は明るいままで、ルネはそれが不思議なことのように思えた。自分のいる場所はうっすらとした影の下になっているのに、ツヴィッシェン山脈は明々と秋の色をした葉を日の光に反射させている。紅葉も終わりに近づいた、オレンジ色の山々がそびえたっていた。

「ルネ、今日はなんかちょうだいって言わないのかよ」

「びんぼーるねー」

子どもたちは、からかいの声でルネに近づく。そうだった。彼らとは昨日、手ひどい別れをしたのだった。それが一日たつともう忘れてしまったのか、それともただあの家に居たくないからこの場に来たのか。ルネはそれでも不満を顔にのせてみせた。

「ちょっと男子、やめなよー」

「お前んちにだって来るぜ、ルネと兄ちゃん。ご飯くれーってな」

かっと顔が赤くなったのがルネにも分かった。彼女だって、自分の家が今どういう状況で、いかに貧窮に直面させられているかよく理解している。貧しい自分を恥じてはいないが、兄の事を悪く言われるのだけは許せなかった。兄は確かに以前、あちらこちらの家に

少しの食料を分けてもらいに行った。その事を少年は言っているのだ。あれはそんな、揶揄の対象になる行為だったのだろうか？　兄は、ただ妹と自分を飢えさせないようにとしただけなのに。

「そんなことしないもん！」

ちっぽけな拳を振るうと、最初は目的の少年の体にぶつかったのにすぐに空振りしてしまった。ケイスをよく言わぬ少年を追いかけて首を振る。

「うわー、こいつあぶねえ、暴力ふるう」

「あーもう、知らなーい」

「あたしもー」

ルネが泣きべそをかいていたから、面倒な事になる前に退散しようと一部の子どもたちが消えていった。執拗に拳を振るうべき相手を探すルネに追われた一人だけは、最後まで残っていた。

「やめろよ、うざいな」

子どもというのはシンプルに出来ている。単純な分、昨日までは楽しく遊んでいた相手がうっとおしい存在に変わるのも案外あっけないものだ。真実心の底から嫌そうな顔をされて、ルネはひるんだ。いくら口では悪く言っても、そこまでは嫌われていないと思っていたから衝撃を受けた。その隙を見て、少年は自分より背の低いルネをつきとばした。ルネは尻餅をついて少年が去っていく背中をぼんやり見つめていた。新しい涙は出てこなかったが、いつまでも乾かないようだった。

遠いツヴィッシェン山脈がいつしか夕焼けの黄金（きん）に照らされて強くその存在を主張していた。眩しいほどに、強く。目が大量の光を受けたからだろうか、ルネはまた瞳が乾きを潤すように湿ってくるのが分かった。

あの少年の、顔。まるで靴にくっついてしまった犬の糞でも見るような目をしていた。思い出したくないはずが、頭から離れてくれなくてルネは堤防が決壊してしまうのが分かった。

「ルネ！　大丈夫？」

ぼやけた視界の向こうから、誰かが駆けてくるのを見つけた。兄だ。誰よりも頼りになるルネの大好きなケイスだった。本当は泣いていたと思われてはいけないはずだった。それが、兄が目の前に迫ってきた途端に思い共々決壊してしまった。

「どうしたの？　大丈夫？　立てる？」

おろおろした兄の様子が、涙でいっぱいになった世界でもよく感じとれた。ルネは差し出された手に従って立ち上がると、泣きながら兄を呼んだ。泣き止まなくてはと思っていたのに、すぐにはそう出来なくて大変だった。

「大丈夫だよ、お兄ちゃんがいるからね」

全然大丈夫ではなかった。ルネは兄がいるから泣いてしまったのだ。兄がいなかったから泣いてしまったのだ。

涙が出てこなくなってからも、ルネはしばらく兄にしがみついていた。日が暮れるまで、兄妹はずっとそうしていた。

63　羊飼いと迷子の羊1（後書き）

ケイスの過去編、はじまりました。

６４　羊飼いと迷子の羊２

革製品職人トーマスは斜視になりがちな目を持つ男だったが、出来の悪い弟子の作業にはよく目を通していた。ケイスは頻繁に親方に怒られ、時には殴られる事もあった。強く打ち据えるようなものではなく、小突く程度ではあったが、親方の弟子の扱いにしては少し粗雑なものだと感じていた。

ケイスの仕事はほとんどが雑用で、どうでもいいような内容ばかりが主だった。トーマスが面倒がる客人の対応などはまだしも、少しの距離はなれた場所にある物をとって来いという命令などがあった。部屋の掃除や、物置への行き来、単純作業の手伝いなどはある程度は予想できたし、ケイスも許容出来る範囲であったが、時には酒を器につげ、というものも仕事には含まれていた。もちろん酒を飲むのは親方のトーマスだ。彼はよく酒を飲んだ。食費というものを全部酒代につぎ込んでいるのではないかというほどの入れ込みっぷりで、トーマスが食事をしているのをケイスはあまり見た事がない。この酔っ払いを相手にするとケイスは殴られる事になるのだった。一日の半分近くは泥酔状態なので、まず安全な時間はないだろうと思われるかもしれないが、トーマスは仕事を飲酒しながら行なうので、ケイスばかりに構っているわけではなかった。それでよく作業が出来るものだなと最初の頃はケイスも思ったが、意外に彼の師匠は眠りこまないかぎり酔っ払っていても仕事が出来る男だった。

どこかちぐはぐな印象を覚えているケイスだったが、それでも師匠を軽蔑する事は出来なかった。ただ彼の望んでいた、衣食住のどれかの提供をトーマスはしてくれず、残念に思っていた。ケイスは毎日自分の家に帰っていた。ルネの待つ家に。

徒弟制度というものは、職人を目指す若者をその道のプロだと認められた親方が弟子として受け入れ、一人前の職人になるまで面倒を見るというのが普通だ。この徒弟制度が盛んに行なわれ職人が多

く居る町などでは、弟子は住み込みになるの場合が多いが、トーマスはケイスを仕事以外で受け入れようとはしなかった。時々食事をわけてくれる事があっても、それはトーマスの酒の肴の残りだったりで腹持ちの良いものであるとはいえないものばかりだった。

そしてケイスにとって一番重要な事項も満たされてはいなかった。賃金の問題だ。徒弟制度というものは親方が弟子を育てている、一人前の職人がわざわざ薫陶を授けているのだから、弟子に与えられる給料などはごくわずかだ。小遣い程度のものしかなく、それも一年に一度という親方もいる。ケイスは衣食住のどれも与えられずに、賃金も当面授けてもらえなさそうな雰囲気に最近勘付いてきた。

これは死活問題であった。日々刻々とやせ細っていく妹を見るたびにケイスの焦りは高まってゆく。雑用も弟子の仕事のうちだとしても、トーマスの下に来て半月、職人の弟子らしい仕事を一つとして教えられていなかった。これでは職人になれるのかどうかも分からない上に、その前に生きていけるかどうかも分からなかった。

「トーマスさん、お願いします。今お金がほしいんです」

「ああ？　なんだお前、仕事も終わってねえのに何を一丁前に口きいてやがる。そういうところだけは大人のような口ききやがってクソガキが」

自分の事はどう言われようと構わなかった。しかし、金は本当に今すぐ必要なのだ。おめおめと引き下がるわけにはいかない。

「でも、お金がないとご飯が買えません。これじゃあ生きていけません、ここにもこれなくなっちゃいます」

死んだら弟子に雑務をさせることも出来なくなるのだ。弟子がほしくてケイスを受け入れたのだろうに、飢え死にさせたら元も子もないだろう。

正論ではある子どもの言葉にトーマスは大きく舌打ちをした。彼が苛立っているのがケイスには分かった。子どもが大人の機嫌を損ねる事がどれだけ恐ろしく感じていることか。言わない方がよかっただろうが、そうはいかない。ケイスと妹の生活がかかっているの

だ。

考え込んでいるのか、ただ不機嫌になっただけか、親方が黙り込んだままなのでケイスは返事を待った。トーマスは酒瓶からそのまま酒を喉に流しこむと、一気に息を吐き出してげっぷをした後に言った。

「そうだな…。死んでもらっちゃあ困る。次の仕事で金が入ったら、少しお前にやろう」

弟子はぱっと顔を明るくさせた。なんとも分かりやすい反応だった。親方はそれに眉をひそめてから釘を刺した。

「だがお前、前借りだという事を忘れるなよ。今払った分は未来に払われなくなるというだけだ」

ぬか喜びをしたかのようにケイスの浮かされた熱はすぐに空中に霧散した。それはそうだろうけれど、貧困の子どもに差し伸べる手は師匠にはないのだろうか。少しだけ悲しく思った。

だがこれで、もう少ししたらルネにたらふくご飯を食べさせられる。少年はそう喜んだ。

いつものように言いつけられた仕事――掃除に、なくなった分の酒の買い足し、薪割り、など――をこなし、出かけたトーマスの帰りを待っていたケイスは突如大きな音が家の入り口から聞こえて驚きながらも怖々と駆けつけた。そこには体を傾がせて、壁にもたれかかる師匠の姿があった。どうにもいつも以上にひどい泥酔状態にあるようだ。頭から地面につっこもうとしたトーマスに、慌てて少年は支えようと手を伸ばすが、触れた瞬間に振り払われた。入り口を入ってすぐには冬のために備えた薪が積み上げてあったのだが、

それらを崩壊させるようにトーマスは倒れこんだ。薪が押し寄せる体で地面へと落ちていく音が部屋中に広がる。

「ど、どうしたんですか」

「…うるせえな…」

酔ったトーマスは行動と共に言葉づかいも乱暴になるのはいつもの事だったが、今日のように威勢のないのは珍しかった。せめて水をと思いケイスは井戸から甕(かめ)に汲んだ水の元へ走る。そこへよく酒を注ぐ器に水を満たすとトーマスの元へと戻った。

「トーマスさん、水です。飲んでください」

「なんで手前にそんなこと言われなきゃなんねえんだよ」

言葉こそ取り付く島のない内容だったが、トーマスの声に覇気はない。本当にどうしたのだろうか、結局トーマスは水を一口飲んだ後、手から器を落としてしまい、水を地面にぶちまけた。

「何かあったんですか…？」

ないはずがないだろう。自分でもそう思いながら、ケイスは相手のご機嫌伺いをするかのようにちらりと師匠を見た。彼は顔を俯けたままで、弟子を見ようともしない。何か嫌な事があったに違いないのだが、それがどの程度なのか、ケイスにも知る権利があったっていい。

「はっ。だめだとよ、おれの製品はよ……質が落ちた…だとよ」

今回の仕事は、小売業者の依頼だった。普段の町民から直接頼まれる仕事とは違い、トーマスから買った商品を別な場所で売りに出すために革製品をいくらか頼まれていたのだ。それがどうやら上手くいかなかったらしい。

ケイスはまだ職人の仕事を教えられていないし、今ひとつ物の売買について理解していなかったのだが、もしかしたら商談が上手くいかず、商品を買ってもらえなかったのかもしれない。そうでなければ、ここまでトーマスが正体をなくすまで飲む必要があるだろうか。

トーマスは「質が落ちた」と口にした。取り引き相手にそう言わ

れたというなら、真実そうなのかもしれない。相手がトーマスと仕事をするのが嫌になって嘘をついたのではないならば、本当なのだろう。それならば何故、トーマスの作った商品は質が落ちたのだろうか？　……彼の飲酒が原因なのではないだろうか。まだ子どもであるケイスにもそれが推測できた。トーマスはそれほどまでに派手な飲酒を続けている。お酒の効能について詳しくは知らないが、作業効率が必ずしも上がるわけではないとうのがケイスの認識だ。体質的に酒に弱いものなど、まともに思考できなくなると聞いた事もある。彼もそうなのではないか。

「トーマスさん、でも」

「うるせえ。ははっ、お前も災難だな。こんな男を師匠にもって」

「そんな、きっと大丈夫ですよ。これからよくなりますって」

母がよく言っていた台詞をそっくりそのままケイスは引用した。だって、他に何を言えばいい？

彼の師匠は飲んだくれで、仕事が減って、家でぼやいているような男だ。確かに良くはいえないところが多い人間だろう。だが、トーマスはケイスにとって救いの手を伸べてくれた人で、飲んだくれでも仕事をこなせばちゃんと出来るはずの人なのだ。やれば出来るってことを、その取り引き相手にも思い知らせてやればいい。どうもトーマスはそう思っていないようだが。

「手前に何が分かる。この…クソガキが…！」

男は太い腕を振るった。常時ならそれはケイスの顔なり体なりにあたっただろうが、あさっての方向へ向かって空を切るだけだった。彼は完全に酒に体のコントロールを明け渡してしまっている。ケイスは悲しくなった。お酒というものの力を思い知ったようでもあった。

「今は休んでください…」

言うまでもなく、トーマスは既に眠りこけていた。動かそうとしてもびくともしなかったが、何度かベッドのある場所へと移動させようとした。無駄な努力をしたケイスは結局布団を彼の上にかける

事にして、一息ついた。
　酒を飲んだからだろうか、どこか顔色が悪そうな師匠を見て、ケイスは小さく眉を寄せた。普通は顔を赤くするのが酒だろうに、飲みすぎるとああなるのかもしれない。この日はもう仕事にならなそうだと感じられた。ケイスはトーマスが泥酔したまま眠り込むと終業時間と見なして帰って行く事が多かったが、特にその事で咎められた事は一度もなかった。今日も、もう帰った方が良いだろう。
　次の仕事でケイスにもお給金が与えられるはずだったのだが、それ以上に入り口に横たわる師匠の姿が切なかった。彼は結果的に裏切りを受けたのだ。ああなっても仕方がない。そうは思うものの、どうしてもそこまで酒に酔う必要はなく思えてしまった。それでも、トーマスは溺れずにはいられないのだろう。どうしてもあがらえないのだ。その全てが分からなくとも、師匠が感じたであろうむなしさをケイスも心のどこかで受け取っていた。

†　†　†

　朝起きようとしたら、やけに冷え込んでいることに気づいた。そして体が上手く動かせないことにも。全身が重い。だるくて、簡単には腕を持ち上げることが出来なかった。

体調の悪さに気づいたのは、ケイスが寝台から上半身を起こしきった時だった。もう何日もまともに食事をしていないから、というだけでなく、腹に力が入らなかった。体動かすのがひどく億劫だ。寝台から出たくない。そうは言ってられないのだが、今日は本当に疲れた。まだ朝だというのに。冷え込みは冬が近いからだろうが、それにしたって……寒い。

「…おはよ、お兄ちゃん……」

子ども二人分のスペースはまだある寝台の上で、ケイスの傍らに眠っていた妹が目を覚ます。ケイスは挨拶を返そうとして声がまともに出てこないのに驚いた。しわがれた老人のような声はほとんど言語になってはくれなかった。

「どうしたの？　声すっごい変だよ」

「だいじょう…」

大丈夫、と言う前にケイスは咳き込んだ。寒いからだろう。やけに冷える朝だ。

さっと伸びてきた手にケイスは抵抗する気力を持たなかった。ルネの触れた額は平熱以上の高い体温を持っていた。

「お兄ちゃん、熱出てるよ…！」

うそ、と言おうとしてまたもや意味のある言葉にはならずに咳をするはめになる。ケイスは風邪をひき、なおかつ熱も上げてしまったのだ。やっと分かると、今度はそれが分かる前よりはっきりと背中にのしかかってきて重たかった。確かに、体はだるいし寒気に敏感になるわりには熱にうなされたように頭がはっきりしない。しかし何より今は空腹が気がかりだった。腹部はえぐれるんじゃないかというくらいに空腹を訴えてきており、妹が気を使うのは時間の問題だった。その前に風邪を引いているのだから、もう気を使わないわけにはいかないだろうが。

「どうしよう、大変…」

気にしなくていいというつもりで首を左右に振るが、ルネは殊更不安そうにしてみせた。ケイスも彼女があからさまな体調不良の時

にそうされたら不安を煽られるだろうと気づき、どうしたらいいかと首をひねる。

「どうしよう、どうしよう…」

妹の声がどんどん涙声になっていくのが分かっても、発熱と風邪に四肢を支配されている身では彼女をフォローする事は出来なかった。意識はだんだんと鈍いものになってゆく。

ゆっくりと首が落ちていき、最後にはケイスは眠りに落ちた。

65　羊飼いと迷子の羊3

扉をノックすると、誰かが出てきた。ケイスが何かを言おうとする前に、その戸は閉じられた。仕方がないので他をあたると、今度もまた戸は閉められる。音をたてて。悄然としながらも、ケイスは次の戸へと進んだ。また、扉を叩く。顔のパーツがない誰かが戸を開くが、何も言わずにすぐ閉めてしまう。どうしてなのだろう。

おいで。

今度は声がした。誘う声に従って、駆け出す。

おいで。

おいで。

こっちへ、おいで。

どこかで聞いたことがあるような声だった。どこでだったか思い出そうとすると、靄がかかった場所に居るみたいに世界が曇り出した。

それでも声のする方向へ行くのはやめない。すると唐突に目の前に一つのドアが現われた。それは立派な黒檀で出来ており、つやつやと輝いていた。ケイスが開けるべき扉はこれだったのだと確信する。ドアノブには真鍮のそれが光っており、手を伸ばすと音もなく扉は開いた。

広がったその先には何もなく、ただがらんとした狭い空間があるだけだった。

彼をここまで導いた声はもうしない。

何もなかった。

急に恐ろしさに襲われ、彼は泣きたくなった。どうしたらいいのか分からないが、どっとおしよせるそれにあがらう事は出来そうになかった。

†　†　†

ひんやりとした感覚が体のどこかに押し付けられた。それが心地よいという事は、全身が熱をもっているという事なのだろう。深呼吸をした後みたいに自分を落ち着かせると、ゆっくりと意識を持ち上げていった。

重い瞼が開くと光を眼球に差し込ませていく。世界がそこに広がった。

「あ、起きた」

見慣れた天井。見慣れた部屋。見慣れた――顔。淡いゴールデンオリーブの巻き毛の少女。ルネだ。今までどこに居たのだろう。そんな風に思ってケイスは妹に首を回した。

「大丈夫だよ。アンナおばさんがね、お粥とかいろいろしてくれたから」

意識があっても、思考が追いつかないケイスはルネの言葉に対応出来ないでいた。アンナおばさんとは、隣りの家のご夫人で、昔はよく世話になった家の人だ。最近はあまり、ケイスの方の問題と、あちらの抱えているだろう問題とに阻まれて、交流が激減していたのだが、どうやらまた世話になってしまったらしい。

「よかったね。アンナおばさん、優しくしてくれたよ」

困った時はお互い様って。続けたルネの笑顔こそが優しかったの

で、きっとアンナおばさんはとても親切にしてくれたに違いない。あの家の事情も分かっているから、頼りきりになる事は出来ないとケイスは思っていたのに、こんな時には構わないのだろうか。風邪で寝込んでいる程度といってしまえばそれまでだが、アンナおばさんの気遣いがどこか不思議に思われた。それでもされた親切というのは、その時の自分がみじめな状態であればあるほど身にしみるもので、ケイスは少しだけ涙が出そうになった。

「ほら、お粥。食べて」

燕麦を煮たものであるが、普段も食べないわけではないが消化に良いので病気の際にもちょうどいい代物だ。差し出されたその原材料が、そのお値段が、どこから出たのかと今や家の出納長になったケイスはお粥を凝視したが、突きつけられた匙で妹の無言の訴えを受け入れることにした。

少し冷めていたが、お粥はあたたかく、何日かぶりの食事だという事で非常に美味しく感じられた。この上ない幸せを感じるほどに、ケイスは何も食べていなかったのだ。

それを全て食べ終えると、どうやら病人看護の方法を教わったらしいルネが器を受け取るとすぐにケイスを眠るよう指示した。

「ほら、まだ休んでて」

いつもと立場が逆転したために苦笑しながらもケイスは布団の中に体を潜らせる。満足そうに兄を見ると、ルネははっと顔色を変える。

「そうだ、お薬！」

風邪薬程度ならそう高価でもない。これもまたアンナおばさんの好意なのだろう。今度こそケイスは素直に感謝した。医者にはなりきれない妹を見ながら、ケイスは薬を飲んでからまた布団の中へと帰った。じっと見守る妹に胸のあたりがくすぐったくなったが、いつしかうとうとと瞼が落ちてきた。

また、あの冷たい心地よさが落ちてきて、ケイスはそっと目を開ける。そこにはやはり、水にひたした布が額にかけられているのが

分かった。ルネが教わった看護を実践しているのだ。
「…いつか……」
「へ？」
いつか、これと同じ光景を見たことがある。それはケイスが高熱を出した時のことだ。
母親のイルゼが息子に取り付く高温を追い出そうと頻繁に額の布を取り替えてくれていた。あの光景はもう二度と見られないのだと思っていたが、そういうわけではないようだ。口角が上がるのが自分でも分かる。続きを待つ妹に応えてやる。
「お母さんもこうしてくれた…」
ルネがこの後どうしたかは知らない。ケイスはまたすぐに、快方へ向かうために眠りについていたからだ。

† † †

風邪から回復したケイスがまずした事は、アンナおばさんにお礼を言いに行く事だった。隣りの家なので当然近いが、久しぶりの場所なので少しだけ緊張した。それでも、アンナおばさんは戸を叩くと気軽に応じてくれた。
「ああケイス、元気になったのね、よかった」

見慣れた顔だ。母とも仲がよく、イルゼが存命の時にはもっとよくケイスも会っていた。なんだか、本当に久しぶりな気がしてきた。

「おばさん、ありがとうございました。いろいろお世話になって。ルネもぼくも」

アンナおばさんは一瞬、申し訳なさそうな顔をしたが取り繕うように明るく破顔した。

「やだねこの子は、かしこまっちゃって。子どもなんだから気にしなくていいのにさ」

手の動きが「おばさん叩き」を彷彿とさせたのでケイスはわずか身を引いた。母子家庭のためか、母親と同じくらいの年の女性と接する機会が少なくなかったケイスは、彼のいう「おばさん叩き」の威力をよく知る人物の一人であった。「おばさん叩き」はアンナおばさんくらいの年の女性がよくする動作で、相手を軽い気持ちで鼓舞したり、ちゃかしたり、照れ隠しにちょっと叩いてみたり、意味もなく手を振っただけだったり、と理由は様々でも意外に叩かれた方は痛い、という威力を持つ。

結局アンナおばさんは自分に嘘のつけない人だったようだ。彼女は先ほど見せた感情の一部をもう一度この場に引き戻した。

「ごめんね…ケイス。おばさん、最近あんまり何にもしてあげられなくて」

後悔したものの見せる表情だった。彼女は悔いていた。子どもを、親をなくした子どもを倒れるまで放っておいた自分を。

「そんな、でも、ぼくもう元気になったし」

「…そうね…。おばさんもうちょっと……」

悲しいのに笑おうとする、儚い笑みを浮かべてアンナおばさんは応えた。

「うん、ケイス、これ持っていきな！」

つまるところのアンナおばさんは、明るくさっぱりとした自分を思い出すことにした。これからはこの子どもたちを気にかけてやればいいのだ。毎日食料を押し付けるとか。今日は絞めたばかりのニ

ワトリだ。
「あ、あのおばさんぼく捌き方知らない…」
「いいって遠慮するな、持って行きなさい！」
「えんりょっていうか」
「いっぱい食べてもっとおっきくなりな！」
強引にケイスに食材を押し付けると、おばさんは「おばさん叩き」を加えた。

次にケイスが向かったところはトーマスのところだった。彼を一人残したまま、ケイスは熱を出してしまった。子どもじゃないのだから、トーマスの面倒を見てやる必要はないはずだが、最後に見た姿が仕事が上手くいかず、飲んでくだを巻いてそのまま眠り込んでしまった姿なのだから気にかかっても仕方がない。ケイスが顔を見せなかった間、一体彼はどうしていただろう。またお酒を浴びるように飲んでいるのでなければよいが。

ケイスの職場でもある、トーマスの革製品工房へ着くといつも以上に静けさを感じた。誰もいないからというだけではなさそうだ。先へ進むと、数日の間でも部屋の中が壊滅的に汚くなっているのが分かった。これではじめてケイスがこの場へ来た時と一緒だ。あの時はまずはじめに掃除を三日も続けることから弟子の仕事ははじまったのだ。以来毎日少しでも汚い部屋を快適にすごせるものに維持し続けようと言いつけられてもいないのに掃除を余分にしていたのだが、ケイスがそれをしないだけでここまで元に戻ってしまうとは。呆れてものも言えない。
「トーマスさん？　いないんですか？」

何か仕事か、酒場かに出てしまっているのかもしれないが念のために声をかけながら広くない建物の中を進む。案の定誰もいない。物だけが散乱しまくった部屋があるだけだ。

これは復帰してから初の仕事も大掃除だな、とケイスは息をついた。そうと決めるとすぐに取り掛かる必要がある。なにしろ、この家の中にはケイスが満足に座るスペースもないのだから。腕をまくるとケイスはホウキを手にとって気合いを入れてとりかかった。

夕方になってもトーマスは戻ってこなかった。少し、心配になった。大人を心配するなんて不遜な行為のように思えるが最後の別れ方が悪かった。ケイスは誰かにトーマスの行方か最近の具合を聞いた方がいいかもしれない、と思ったのだが、彼は師匠の知人をあまり知らなかった。お客には三度ほど対応したが、彼は人の顔を覚えるのが得意という方ではない。熱を出していたのを言い訳に使えるなら、あれでいろいろな情報が混ざり合って一部消去されたような気がしないでもない。

とにかく、掃除がひと段落ついて、ケイスは何か他の違う事がしたくなったのだ。町へ出れば、そう広い近所でもないから誰かしらトーマスの存在を知る者に出会えるだろうと見当づけて、工房を出た。

あまり歩かないうちに、町のざわめきがケイスの耳に入ってきた。何かがあったのだろうか。声の集まる方向へと近づくと、どうやら騒ぎの原因を説明している者がいるらしかった。気になったケイスは耳をかたむけた。

「…どうやら野盗に襲われたらしい」

「被害はひどいのかい、え？」
「いや…どうも剣で一突きされた程度みたいで…」
「怖いわねえ…」
「どうしてそんな事が」
「ですから、皆さんもどうか戸締りには充分に気をつけて」
説明役はゾンネの町長が受け持っていた。町の人間が野盗に襲われたらしい。死んでしまったのだろうか。ケイスは比較的最近に肉親を亡くしているために心臓がひどくざわついていた。
「あらケイスちゃん、聞いた？　野盗が町の入り口あたりで人を殺したって…」
「ばか、やめろ」
顔見知りの女性がケイスに説明の補足をしようとして、傍らの男性にとめられる。きっと彼はケイスが親をなくしたばかりだから人の死をそう簡単に少年にむかって口にするなと言いたかったのだろう。気にすることはない。ケイスはそう言おうとして顔を明るくさせたが、笑顔を作るのには失敗していた。
「ごめんなさい、ケイスちゃん…」
「ううん、それで、誰が亡くなったの？」
男女は顔を合わせて迷っていたが、ケイスが待っているのが分かるとおずおずと名前を出した。
「職人のトーマスよ。知ってるかしら」
彼女はケイスが彼に弟子入りしたのを知らなかったのだろう。呆然とした少年の表情にも理解を示さない。男性の方も事情を知らないのか、怪訝そうだが、これ以上余計な事は言わない方がいいと判断し「じゃあ、気をつけろよな」と女性を引き連れ去っていった。
トーマスが死んだ。
そういう事なのだろう。今度は母親の時より衝撃がもろにぶつかってきた。
愕然とした。

６６　羊飼いと迷子の羊４（前書き）

今回、いつもより長いです。

66　羊飼いと迷子の羊4

野盗の噂は、それから一週間は町を占拠した。
曰く、野盗は何十人もいる大きな集団だとか。
曰く、野盗は魔術師だとか。
曰く、野盗は本来子どもの人さらいをしていたとか。
曰く、東の未開の地から蛮族が攻めて来る予兆だとか。
曰く、野盗ではなく子鬼（ゴブリン）が犯人だとか。
曰く、トーマスは自分で悪魔を召喚したのだとか。
尾ひれの付いた眉唾もののそれに変わっていったが、ゾンネの町民は確かにそれを恐れていた。
ケイスは少なからずそれらの怪しい噂に心を痛めたが、どうしようも出来ないことであった。
町民によるトーマスの目撃証言を集めると、彼はやはり酔っ払った状態で町をふらふらしていたらしい。それが、昨日まで見られたのに今日は見つからない。怪訝に思った者がなんとなくトーマスの姿を探しながらも町を移動していた。町の入り口は遠くはない。あっと思い見つけた頃にはもう事切れていたそうだ。最近のトーマスは輪をかけて飲酒をしていた姿が多々確認されているから、酒の飲みすぎかとも思われたが、腹に刺し傷の痕があり、他殺死体だという事がすぐさま明らかになった。野盗の噂自体は元々既にゾンネにまで届いていた。隣町が被害に遭ったという情報があったからだ。自分たちの住む町に殺人犯が潜んでいると考えるよりは野盗の仕業とした方が気持ちも悪くないし、町の入り口にトーマスが横たわっていたという点からも、偵察に来た野盗がトーマスに見つかってしまい口封じに殺したという説明が出来る。十中八九野盗の仕業で間違いないと町長も公言した。
だがケイスは誰が殺そうと関係ないと感じた。
言ってしまえば、あまり良い師匠だったとはいえない。何度も殴

られて、軽傷とはいえいつ手が飛んでくるかと泥酔状態のトーマスにはひどく警戒していた。機嫌が良い時は酒を勧めてくるし、技術的な事は何一つとして教えてもらっていない。短い間しか師弟関係でいられなかったためでもあるが、毎日のように工房に通い詰めだったのだ。トーマスとは濃い時間を過ごした。

賃金だってまともにもらっていない。酒のおつまみとか、残った革で作ったベルトとか、そういったものを除けば何ももらっていない。雑用の範囲が広いし、弟子への扱いは荒っぽいものだった。

なのに、とても喪失感を覚えた。

ろくでもない親方と言い切ることも出来ただろう。だがそうは出来なかった。これから関係性が変わったかもしれない未来もあったのに。二度とそんな日は来ないのだ。二度と。

現実的な問題が戻ってきた。ケイスは新たな職場探しをしなければならない。今でさえ蓄えはないのだ。一刻も早く収入を得ないと、本気で生命の危機に直面する事になる。ルネを働かせるわけにはいかないのだから、ケイスは急ぐしかなかった。

「じゃ、行ってくるから」

「お兄ちゃん……」

「ん？」

ルネは一度俯くと、手を見つめてから顔を上げた。

「なんでもない……」

頷くとケイスは家を出た。残されたものの気持ちなど考えもせずに。

彼が今後、この時の妹が何を考え、何を思っていたかを知る機会

は与えられない。一生。

† † †

その冬を越せば、ケイスは十歳になる頃だった。

ケイスはなんとか新しい仕事を見つける事が出来た。それはゾンネの町にやってきたばかりの者が開いた飲食店だった。この農業従事者ばかりの町にただの飲食店は珍しく、他に一軒あるのみで、開店当初は話題にもなった。暗い噂ばかりの昨今、町民はすこしは明るい話題で盛り上がりたいようだった。

店主が一人でやってきて、ゾンネに店を開いた形になるが、この男はシェーン王都の出身だと言った。名前はラピナトーレ。彼が食事を作り、小さなウエイターであるケイスがそれを客の元へ運ぶ。

ラピナトーレは気前がよく、雇い主としてはトーマスよりもかなりの好待遇をもたらしてくれる存在だった。給料前借りにも簡単に応じ、残った食事を持って帰ってもいいと言ってくれる。町の事を知りたがり、ゾンネを愛そうとしてくれた。

文句のつけようのない男だった。ある日、ケイスが違和感を覚えるまでは。

その日は風の強い日で、雲がどんどんと西から東へ移動していた。

そのため翳ったり明るくなったりと忙しい天気で、曇りと呼べばいいのか晴れと呼べばいいのか分からないような天候だった。雨は降らないが、風がとても寒かった。

普段はきちんと留守番をしているルネがケイスの職場に顔を出した。妹が風が強いと怯える子だったと思い出したのは、少し後の事だ。ルネは雷は怖くないと気概のある事を言う娘だったが、強風の音に怖がる子どもだった。彼女がやって来た当初は驚き怪訝に思ったケイスだが、すぐに妹を歓迎する。雇い主であるラピナトーレはどう思っているのかと窺うように顔を向けると、彼はにこやかに対応してくれた。

「妹さんかい？」

ケイスは家族の話をラピナトーレにしていた。誰かに家族の話をしたくなるのは子どもとて同じだ。頷くと、ケイスは妹を雇い主の前に立たせた。

「やあ、君がルネちゃんだね。よろしく。私はラピナトーレ」

さっと手を伸ばしてきたラピナトーレは上半身をかがめて子どもの目線にあわせている。ルネはおずおずといった様子で兄の雇用主を見上げた。ルネはさほど人見知りをしない子どもだと思っていたケイスだったので、妹の様子がやや気になった。

「よろしく」

いささかルネの素振りが気になったものの、ケイスはまだ就業時間中である。片付けが途中だった机から食器を移動させる作業に戻り、またルネの近くへと向かう。客はいなかったので、ケイスは忙しく働く必要はなかった。

「そういえばルネ、どうしたの今日は」

妹は家族以外の第三者がいる事でいつも以上に無口になってしまっているようだった。窺うような瞳が言いにくい事を口ごもっているのだと語っている。安心させるように、ケイスは妹に微笑みかけてあげる。

ルネは、兄の背が今よりもっと高かったら、あの男の姿が見えな

くなるのに、と思いながらも兄を見上げた。そう身長差はないが、兄の方が背が高い。自分より早く生まれたのだから当たり前だろうが、今の兄の背の高さでも充分頼りになる。嫌がる気持ちを無理におさえて、ルネは口を開いた。

「風が、強くて」

ああ、と頷きそうになった兄に、ルネは言い訳をするように言葉を重ねる。「だから、お兄ちゃんをむかえに来たの」と。風を怖がっているのは自分ではないとルネは告げたいのだろう。だが、その強がろうとしている気持ちとは裏腹に、一際大きな風が吹く度に戸外がうるさく音をたてるのに、ルネは身をすくませていた。

そうだった。ケイスは自分が妹を一人、父も母もケイスもいないあの家に置いてきてしまっている事に気がついた。生きるために働き、仕方がない事とはいえ、妹のために働いているケイスが妹に怖い思いを我慢させるのは難しい事でもあった。だから、いっそ彼女がここまで来てくれたのはうれしい事だったかもしれない。ケイスは仕事場を簡単には離れられないし、ルネを一人にもしたくはない。ならば妹がこの場にこればよかったのだ。今更ながら、結果的に満足のいく展開になったとケイスは安堵した。

「じゃあ、終わるまで待ってる？」

「うん！」

言ってから、ケイスは雇い主の意向も考えずに決めてしまったと、慌ててラピナトーレを窺う。まるで、少年の気持ちなどお見通しだというように、ラピナトーレは言った。

「そうだな、今日は風も強い。あまりお客さんも来ないし、もう少しして誰も来ないようなら帰っても構わないよ」

ケイスは妹の職場見学を許可してもらうだけでよかったのだが、思ってもみなかった言葉がもらえた。これまでにも天候のあまりよくない日には常より早めの終業が伝えられる事があったが、まだ夕方になってもないのに、珍しい事だ。

「いいんですか？」

「ああ。風も強い中、君たちを遅くに帰すのも申し訳ない。それに、今日はそうお客さんも来ていなかったから、これ以上店を開けていても意味がないだろうし」
「ありがとうございます！」
気遣いを見せてくれたとはいえ、雇い主である相手にケイスこそ申し訳なく思うべきだったのだが、自分の服の裾を掴む少女を放っておくなと言われた気がして、少年はうれしかったのだ。
「それで、お嬢ちゃんは何歳かな」
ケイスが食器洗いにいそしむと、客がなくて料理を作る必要はなく手持ち無沙汰だったのだろう、ルネに声をかける。おずおずと返事をする妹と雇い主の会話を背景にして、ケイスは食器を洗った。ラピナトーレはケイスによくしてくれる。妹も、彼の事が気に入るといいのだけれど、そう思いながら。

帰る道でも、風は強く吹きつけるのをやめなかった。遥か上空では雲があふれ過ぎたのか晴れ間もなく、薄暗い空になっている。風が吹き飛ばす端から雲が飛んで来る。
兄妹は手をつなぎながら、家路を急いだ。いつもなら、二人は相手の顔を見ながら、その日の話をして道をゆく。だが、この日の強風は彼らの足を急がせ会話も減らしていた。ケイスは妹の様子がおかしいのにも気がつけず、会話が少ない事に首をかしげていた。風が強いのを嫌う子だから、それでだろうと見当づけて、家路を急ぐ。
「お兄ちゃん」
声を上げたのは、ルネだった。まるで吹き飛ばされないようにと相手の手をしっかと握る、兄妹のつなぐ手が、妹の方から強く握られた。
「あの人、きらい」
誰と聞く前にケイスには分かった。妹の様子がおかしかったのは、

ラピナトーレと接していた時だったからだ。それでも、人を嫌いと口にするのが珍しい妹に、兄は眉を寄せた。戸惑いもあった。自分の雇い主であるのだから、何もそう嫌わなくてもと思っていたのだ。

「どうして？」

咎めるようではないものの、ルネにも兄の聞きたい事が分かっていた。何故嫌うのか、そんな必要はないのだと、諭したいのだろう。だが、ルネにはあの男のまとう空気が好きにはなれないでいた。どうしてかは分からない。ただ、あのラピナトーレという男が自分を見る目が、とても嫌だった。

答えのない妹に、何度か会ってくれれば気も変わるだろうとケイスは決めた。きっと、平素はしない人見知りをしているだけなのだろうと思い込んで。

「きらい」

ルネの頑なな様子に、今度こそケイスは訝しくなった。やっと、ただの気まぐれで妹がラピナトーレを厭うているのではないと思いあたったのだ。自分の中では、とても優れた人、というほどではなくとも出来た人間だとラピナトーレを思っている。だが、それは雇い主と雇われ労働者である関係のある自分だから、そう思っているのかもしれない。そう思いたいだけかもしれない。蚊帳の外のルネから見れば、ラピナトーレの印象は異なるものなのだ。当たり前の事に思い至るまで時間がかかったが、ラピナトーレという男に対する一方方向から見るだけの考えが彼そのものではないと、気づいたのだ。ケイスは、これからはルネと雇い主を会わせない方がいいのだろうかと、黙考した。次に会った時には、ルネの嫌がるラピナトーレの目を見つめてみようと決めながら。

平和な日々が続いた。変わらずケイスは妹のため生活のためと働き、時にはアンナおばさんや近所の人に助けられながらも日々を暮らしていた。給金が増え食糧事情が変わったためだろうか、ケイスは少し背が伸びたようだった。骨ばかりの四肢にも気のせい程度には肉がついてきて、小さな子どもから少年へと成長しつつあった。夜盗の噂は消えなくて、何もかもが上手くいってるとは限らないが、この時のケイスはただ一つの不安を残して、穏やかで満足のいく生活が送れていた。ルネが、近頃元気がないのだ。何があったのかと聞いても、返事は「なんでもない」というものばかり。気にかかってしかたがないのだが、どうにも心配で、少し帰りを早くしようと思い仕事に出た。

「おはようございます」

トーマスの工房よりは時間が早い時間にラピナトーレの店へと向かうと、店内は静かなものだった。ラピナトーレは二階建ての家の二階に住み、一階を飲食店として開店している。寝坊でもしない限りケイスより遅く店に入る事はほとんどなかった。だが、まだ二階に居るのだろうとケイスは仕事を探した。前日やり残した仕事がないかと店内をうろつく。特にそれらしいものは見当たらず、トーマスの工房でもよくした掃除を始める事にする。

客がひっきりなしにくる店ではないから、混んでいてもそう騒がしい事のないラピナトーレの店だ。この日もまだ開店前で、ケイスの振る箒と床のこすれる音、靴の鳴らすかすかな移動の音だけが場を満たしていた。窓の木製のよろい戸を上げると、朝のゆるやかな光が差し込んでくる。町もいつもと変わらず、ツヴィッシェン山脈が青白くそびえ立つ。ケイスは、毎日をこうして過ごしていくのだろうと思っていた。日々の暮らしは楽しいばかりではないけれど、一日一日を丁寧に積み重ねていって、そうして年をとっていくのだ。もうすぐケイスは十歳だ。母を失い、孤児になった時はこの世の終わりと途方にくれたものだったけれど、今はこうして、仕事をして、

妹と一緒に暮らしている。暮らしていけてる。大変な事は多いけれど、なんとかなるものだ。人は両親がいなくとも生きていけるものなのだ。もちろん、ケイスは両親がどちらにも生きていてもらえたらうれしい。だが彼らはもうこの世界にはいないのだ。彼の信じる教えによれば、両親はいつかの審判の日までケイスの世界とは違う場所で、審判を待っているのだ。もちろんケイスとルネの事も待っているだろう。いつかその世界で会うまで、ケイスはルネを守っていかなければならない。

やはり、ルネの様子が気がかりだった。今日こそちゃんと問い詰めてやらねばと決める。もしかしたら、ルネは友人と上手くいっていないのかもしれない。孤児だからとケイス自身も周囲の目が変わった経験がある、その事で悩んでいるのかもしれない。ケイスの方は悲しいかな友人よりも家族、自分自身を助けるのに精一杯で、友人との事に悩んでいる暇はなかった。今は少し話しをする程度だが、それも気まずいものではなくなっている。妹には、なんとかしてやりたい。

そうしてしばらくしてから、ケイスはやっとラピナトーレがやって来ないのに気がついた。いつもはこんな日差しの強くなる時間になるまで起きてこないなどという事はなかった。おかしいと、やっと分かったのだ。トーマスの例があるから、ケイスは慌てた。彼は、ケイスの雇い主は病気にでもなってしまったのだろうか？　葬式で見たトーマスの白い顔が脳裏にちらつき、二階には来ないでくれと言われていたのも忘れ、ケイスは階段をかけ上がった。

「ラピナトーレさん！」

二階部分には二部屋しかなく、一つは物置になっていたので次の扉を開ける。そこには、カーテンが少ししか開かない薄暗い部屋が存在した。人の居た形跡があるものは、寝台と、小さな机、長櫃（ながびつ）くらいだった。その他少しは生活に要り様なものが置いてはあったのだが、簡素な部屋だった。そして、ケイスの探していたラピナトーレの姿はない。ケイスは昨日、ちゃんとラピナトーレが店内で見送

ってくれたのを覚えている。あれから二階へ上がって部屋で眠ったはずが、そうではなかったのだろうか。それとも、ケイスが来るより早く目覚めどこかへと行ってしまったのだろうか。こんな事は、これまでに一度だってなかった。

ケイスは店を出ると、町の中にラピナトーレの姿を求めて駆け回った。トーマスのように、何かあったのではと不安に背中を押されながら。町の人に聞いても色よい返事はもらえず、それどころかよそ者を嫌う人間には居ない方がいいとまで悪態をつかれた。

太陽が中天に上がっても、ラピナトーレの事を知る人物には出会えなかった。ケイスはゾンネ中を走るのはやめにして、一度店に戻る事にした。もしかしたら、ラピナトーレは店に戻っているかもしれないからだ。その頃には、ケイスも急を要する事情があってラピナトーレは店を空けたのではないかと思うにいたった。そうでなければ突然の失踪は納得がいかない。まだ失踪したと決まったわけでもないのに、ケイスはラピナトーレがもう戻ってこないのではないかという不安もぬぐえないでいた。

「ラピナトーレさん……どこに行ったんだろ」

店に戻っても、誰もいなかった。開店の表示を出していないから、客も来ない。ケイス以外はこの店に注意を払っていないように思えて、なんだか寂しくなった。念のためラピナトーレの生活空間である二階にもまた行ってみたが、人の姿は見つけられなかった。

どうしてラピナトーレはいなくなってしまったのだろうか。町長に頼んで、捜索をしてもらおうか。ゾンネの町には明確な自警団など存在しないが、何か問題があればすぐに集まってくれる町の男衆なら居る。彼らに手伝ってもらえないだろうか。思って、まだラピナトーレがいなくなってから半日しかたっていないだからと自分に言い聞かせる。もしラピナトーレが今日中にでも戻ってきたら捜索をお願いした町の者には手間をかけさせただけとなり迷惑になる。夕方になっても見つからなければ、それから話を蝶々にしてみようと少年は決意した。

少し休むと、夕暮れまでケイスは町をうろついた。店内には探せば仕事が見つかっただろうが、そうはせずに雇い主を探した。

それから

少年の

世

界

は

流

転

す

る

。

濃い朱色がゾンネを染めていた。ツヴィッシェン山脈も、上に行けばいくほど雪で白くなり、朱色を反射させていた。少年は見つからぬ雇用主を自分一人で探すのは諦め、町長の元へ向かおうとしていた。小さな影がのびきって、地面に黒い色を落としている。そこへ、もっと小さな影がやって来た。

「ケイスちゃんっ！」

声をかけてきたのは、ルネの友人でケイスも以前はよく仲間に混ざって遊んでやっていた少年少女たちだった。特に仲がよかっただろう少女の顔を思い出し、彼女が声をかけてきたのだと知る。どこか慌てたような顔で、ケイスは「どうしたの」と先を促す。

「ルネがいないの！　変だよ、ルネはケイスちゃんが帰る時間が近

くなるといつもおうちに帰るのに、おうちにもいないの！」
ケイスはぐっと眉を目に寄せた。
「なん……だって？」
一日に二度も不在の人間に関わる事になろうとは。それも、今度の相手はケイスの大事な妹だ。
「おかしいの、最近はルネも朝からあたしたちのところに来ないけど、お昼には顔を見せるのよ。でも今日は来なかったから、お手伝い抜け出してルネのおうちへ行ったの。そしたら、いなくて、探したんだけど……」
いなかった。ケイスの顔は青ざめる。よぎる、死んだ母の笑顔。ほとんど思い出せぬ父の顔。土に埋められる前のトーマスの死に顔。夜盗の嫌な噂。
親が狂いわめき出したのを見たかのように、突然ケイスは飛び出した。
自分の名前を呼ぶ妹の友人の声も耳に入ってこない。
それだけは、奪わないでほしかった。皆の信じる神が本当に人のためを思うのなら、どうかケイスから妹を奪わないでほしい。願った。自分の危惧がただの杞憂で終わる事を。彼女を、奪われたら、ケイスはどうしていいのか分からない。親もなく、二人で世界に放り出された時なんかよりも、ずっとずっと恐ろしい。あの時の欠落感よりも更に多くのものを失ったと感じるだろう。そんな未来なら、要らない。
「ルネッ！」
まず自分の家に行った。妹の友人たちが伝えてくれたように、そこにルネの姿はなかった。灰がかった蒼い瞳。ケイスに似た、少し薄いゴールデンオリーブの巻き毛。それらを持つ少女は見えない。見つからない、ルネ。すぐにケイスは自宅をも飛び出した。こんな殺風景でおそろしい家には居られない。
「ルネ！！」
母ゆずりの蒼の瞳は、優しくて、まだ子どもで、小さくて、愛し

い。笑うと小さなえくぼが出来て、ケイスはそのほっぺたがとても好きだった。仕事から帰ると、いつもその大好きな笑顔で迎えてくれる。この笑顔のために、がんばろうと思った。いつだって優しく迎えてくれる妹のために。母が死んでしまった時も、ケイスを正気に戻してくれたのも妹だ。ルネ。かわいいルネ。ただ一人のケイスの家族。たった一人、ケイスに残された希望。

町は狭くはない。人が一人で駆け回るには非常に骨が折れる。それでも、ケイスは足を止める事が出来なかった。そんな事は知らなかった。すぐにルネが見つかって、ただの笑い話で済めばいいと思いながらも、あふれ出す焦燥が止まらなかった。

どこに行ったんだ、ルネ。どこかで寝過ごしていてくれ、ルネ。何をそんなに慌てているのだと笑ってくれ、ルネ！

「ルネ！　ルネーー！」

叫びにも似たそれを、町の者が見捨てられるはずはなかった。ゾンネは比較的穏やかな人間ばかりだ。町中が仲良しとはいかなくとも、幼い子どもが困っているのを捨て置くような人間は少ない。ケイスに声をかけるものがいくらもあって、しかしそのどれもがケイスに届かないのを知ると、町民は町長の元へと相談に向かった。

「ケイス、ルネがいないのですね」

町長はもう町の異変を察知していた。これまでに町の者が何度もケイスに問いかけ捜索を手伝おうと言ってきたのだが、町長が暮れた空の下、さまよう少年の腕を捕まえてやっとケイスの耳に届いた。空の色はもう、西の端を除いて藍色へと変わっていた。町の人間は手に手に松明を持ち、既にルネの捜索をはじめていた。

「町長！　ルネが、ルネがいないんです！」

今度はケイスがすがるように、町長に懇願した。町のものが動き始めていたのにも、この頃気がつく。どうしてだろうと周囲に視線を這わせると、呆れたような町長に答えをもらえた。

「ルネの事は分かった。我々の方でも探してみるから、ケイス、君はちょっと休むんだ」

「そんな！　ありがたいですけど、でも」
「いいから、君には少し話を聞きたい」
捜索の手がかりになるかもしれない、という町長の言葉に渋々ながらもケイスは頷いた。
ゾンネには夜の明かりとなるものが少ないが、この日は松明があちらこちらにともされていて明るいほどだった。町の外にまで明かりがちらつく。すっかり空は、闇色をしていた。
町長に話を聞かれても、ケイスには語れる事など少ない。いつもと同じように出勤したらラピナトーレがおらず、彼を探している間にルネもいなくなってしまったのだ。ルネは、常に早起きというわけではなく、ケイスの方も毎日妹をきちんと起こす事はなかった。この日も少し寝ぼけた妹がいて、仕事の時間が迫っていたので扉まで見送りをする必要はないと言って家を出たのだ。ちゃんと、妹を見ておればよかった。ケイスの後悔は何の役にも立たなかったが、あのまま家に残っていればとすら思えた。
「そう悲観するな、ケイス。大丈夫だ、きっと見つかる」
町長の言葉も信じきれなかったが、気休め程度にはなった。この時話して始めて、ラピナトーレも行方不明になっているのだと町民は知った。彼らはラピナトーレの姿も求めて徘徊する事になる。ケイスもどうでもいいとは思っていなかったが、ルネの事があってからは雇い主の事を忘れていた自分を知り、彼も見つかるといいと念じた。
町長が引きとめられなくなると、ケイスも捜索に参加した。作戦本部は広場となり、冬の夜の寒さに身を震わせながら、夜食を捜索隊に与え、どこを探したか報告を待つ人間がそこに留まった。夜は更けて、だがルネの姿も、ラピナトーレすらも見つからなかった。大人はともかく、子どもがちょっと出かけていましたというには遅すぎる時間だ。そもそも、ゾンネに遅くまで子どもをうろつかせるような人間はいない。当然ケイスの落ち着きはなくなっていく一方だった。

「落ち着けケイス。まだ一日とたってない」

町長のなだめる声も、もう耳に入ってこなかった。空の闇がケイスの心にまで入り込んでくるようだった。もう明るい未来が思い描けない。走り続けて足が棒のようだが、希望が上手く描けないが、それでも足を動かした。ひとところに留まっているのは悪い事のように思えたのだ。何も出来ない自分に、歯噛みしながらも、松明がつきる度に広場へ向かい町のものに明かりをもらい、手元が明るくなるとまた駆け出した。

宵を徹しての捜索隊が、人数を減らし、朝になってからにしようとまで言い出す者がいても、ケイスは妹を探し続けた。まるでそれ以外の事を忘れてしまったみたいに。実際、他の事など頭にはなかったのだろう。ルネこそ心配であったが、町の者はケイスの焦燥ぶりも気がかりだった。

誰もがきっと見つかると口にして足を動かした。静かに、空が薄く透明になっていった。緩慢な速度で夜が明けようとしていた。

朝日がのぼろうとしている。徹夜明けの頭がぼんやりとしてくるのが分かる。ケイスはとぼとぼと歩いていた。おかしな事に、もうそろそろ松明も要らなくなる時間で、捜索はしやすくなろうというのに、どうしてかケイスはまた町の中心に、皆の待つ場所へと向かおうとしていた。これからが捜索の本格的にしやすい時間だというのに。手には松明の燃えさし。いつからか新しい松明を取りに行くのを忘れていた。体のあちこちは薄汚れている。睡眠時間が足りないせいか、一体何が起こったのだろうか、分からなくなる。鈍い頭を重たく感じながらも、人影の集まる広場へと歩き続ける。その、時。

「大変だよお！　ルネちゃんが、人さらいにあったって！」

広場は騒然とした。何故そんな事が分かるのか、人々が声を上げた人物に詰め寄ると、そこには中年の女性が居た。手には旦那を引っぱっている。彼女たちを取り囲んだ町の衆は、遅れてやってきたケイスが夫婦を一心に見つめながらふらふらと彼女らに向かうのを

見て道を空けた。
「どういうことですか」
「ほら、あんた、ちゃんと言うんだよ」
女性は夫をどつく。どうやら、旦那の方が事情を知っているようだった。ケイスは隈のくっきりとした瞳で男を見る。男は、頭に寝癖がついていて突然話の渦中にさせられた事に戸惑っているようだった。
「ああ、それが、その……おれあ、酔っ払ってたんだ」
何を言い出すのかと、町民の中の一人は口を開こうとし、隣りの女性の静かにと口を押さえられていた。
「だからよ、正直記憶があやふやで何時頃の事かも覚えてねえ。夜じゃなかったのは確かだ」
「何があったんですか」
「酔っ払ってたからよ、何が起こったかすぐには理解出来なかったし、夢だったんじゃないかと思ったんだ。それが、起きたらこの騒ぎだろ、おりゃ夢だと思ってたのに慌てたよ」
男はまだ話の核心に迫らない。じれてきたケイスが男に身を寄せる。男は、申し訳なさそうな顔をしていた。この先を言ったらもっと申し訳ないのが分かっているから、言いたくないのだといわんばかりに口をもごもごさせる。目の前の少年の目が、正気を失ったように尖っていたから、男はたじろぎながらも言葉にする。
「ルネちゃんが、さらわれてるのを見たんだよ。なんて言ったか、あの新しい店の店主に」
少年の息が、止まった。

67　王都の少年1

見ていたわけではない。時間も定かではない。だが、思い出す度に浮かぶのは、淡くて遠い水色の空の下、羊が鳴くみたいに泣く子どもの声が響く光景なのだ。寂しそうに、羊飼いを探すように、空に響かせようとするかのように、迷子の羊が鳴く。

めえ、めえ。

嘆きは、大声にはならない。草の野に、歩く人間が一人。肩には子どもを担いでいる。子どもは泣く。ちょっと友達に意地悪されて、誰かにかまってほしいだけみたいに。

えーんえん。

事態を思えば、なんて事のないように、ケイスの脳内では再生されてしまう。乾いた光景、あまり大変そうでない、さらわれる子どもの話。勝手に作り出したのに、平和からは程遠く、深刻にも近づけない、歪んで捏造された記憶。最初から、ルネがさらわれた記憶などはないのだ。ケイスはそれを見ていないのだから。

ケイスは彼女の行方を知らないのだから。

ケイスは彼女を助けられなかったのだから。

ケイスはルネを失ったのだから。

羊飼いは、自分の飼っている羊をたくさん世話していた。

ある日自分の羊たちの中で、たった一匹、いなくなっているのに気がつく。

一匹だけのために、あちらこちらへさまよい歩く。

羊飼いはそうして捜索を続けた末に、やっと迷子の羊を見つけられる事になる。
聖典はそう告げている。
だが、本当に、迷子の羊は見つけられたのだろうか？
結果が分かっていながらも疑ってしまう。
ただ聞いただけでは分からないではないか。
ケイスは、その光景を見ていないのだから。
ルネのさらわれるのを見ていないのだから。

†　†　†

ゾンネを飛び出した少年の姿は、隣り町にあった。ケイスの町からは北東にある、小さな街道沿いの町だ。王都へとつながる街道を持つだけの町で、ケイスがそこに行った理由は人さらいのラピナトーレの向かった町の出口が北東だったからというものだけだった。
妹を失い正気もなくしたケイスを、ゾンネの者は放ってはおかなかったが、まさか町民の目を盗んで町を飛び出すとまでは思っていなかった。一度はすぐにケイスを見つけられた町民も、厳重に注意をしたというのに、また飛び出して行った少年に当惑していた。それほどまでにとは同情するが、まさか隣町にまで行こうとは、誰も

思ってもいなかった。とりあえずで追いかけた町の男が二人、ケイスに付き添っていたが本人は少しも彼らの存在を知らなかった。気づいていないのだろう。二人は、あまりの憔悴ぶりにケイスにどう声をかけたらいいのか分からず、ただ見守るしかなかった。

北上したせいもあって、雪の降る地域に入りかけたゾンネの人間は、これまで以上に冬を感じ、町のいたるところに雪の塊を見つけては肩をそびやかしていた。

ケイスはただ、ルネの姿を探しておぼつかない足をふらふらさせるのみ、寒さなど気にもならないようだ。それがまた、男たち二人の心配をあおるのだが、それすら知らない。

無理もないのだ。ケイスは、両親を失ってから妹のためにひたすら働き、最初の雇い主を思わぬ形で失った。また人の死に出会って、しかしケイスは次の雇い主を見つける事が出来た。よそ者ではあるが悪くはなさそうな人間に雇ってもらい、ケイスの顔色も明るくなったとゾンネの者はよろこんでいたのだ。そこへ、あのラピナトーレの裏切りだ。どういう経緯でそうなったのかは分からないが、とにかくラピナトーレは聞くところの噂によると、元々人買いや人さらいをする人間だったのだという事。そのために、ゾンネではルネをさらうために、ゾンネの町にやってきたのだとされた。無理のない推理だった。出て行くから関係ないと思ったのか、ラピナトーレのいなくなった日とルネのいなくなった日は同じだ。一人の酔っ払いの証言とはいえ、目撃者もいる。

二重のダメージがケイスにはあっただろう。妹の喪失と、雇い主の裏切り。なにもかもがケイスを傷つける。なぐさめの言葉もいい加減にしろという怒りも、彼には届かない。十にもならない少年には衝撃が大きすぎた。いつかラピナトーレは捕まって、ルネが見つかるかもしれないが、その望みはなきに等しい。失ったものが、大きすぎる。

人にぶつかっても気がつけず謝る事もなく、ケイスはひたすらに足を動かすのだ。もう、それしか出来ないのかもしれない。妹を思

い、探すために歩むのではなく、足を前に出すしか出来ないのだ。
ゾンネの男たちは、疲れて眠りについたらケイスを急いでゾンネの町に戻そうと、少年を見守った。
そこへ、一つアクシデントが転がり込む。おぼつかない足取りでいた少年を突き飛ばすかのようにぶつかった男がいて、ケイスは膝から地面に転がった。離れた場所で様子を窺っていたゾンネの男たちは、あっと口を開けて駆け寄ろうとしたのだが、角を曲がった馬車がその場へ飛び込んできた。御者が地面に座り込んだ子どもに目を剥いて手綱を引く。馬のいななき、車輪のこすれる音。ケイスの知らないところで、馬車が少年を蹴り飛ばそうとしていた。
「ケイス！」
叫んだのは、ゾンネの男。馬車はケイスを避けきれず、馬の前足で彼を跳ね飛ばしていた。少し先に転がされて、ケイスは気を失ったかのように倒れた。突如行動を制止させられた馬は興奮し、御者はそれを制しながらもケイスの安否を窺った。
「おい、ケイス！　大丈夫か」
辺りは賑わってきた。馬車での事故は、この街道沿いの町でさほど珍しいわけでもないが、特に日常茶飯事というほどでもない。人が轢かれたのであれば人目を引く。それが子どもなら尚更だ。
身動ぎせぬケイスに、ゾンネの男は御者を睨む。睨まれた方は自分に火の粉が飛んでくるとは思っていなかったのだろうか、「ひいっ！　そ、そっちが悪いんだぞ、そんなところに座りこんで！」とケイスを非難する。ゾンネの男は御者の言い分に逆上する。
「てめえ、何言ってやがる…！」
彼は今にも御者に飛び掛っていこうとしていた。御者は初老にも近づいた年のとった男で、ゾンネの男はまだ三十代の働き盛りの男だった。御者の不利は目にも明らかだ。身を背後に寄せた御者に対してだろうか、低い声がかけられる。
「何をした」
「だ、旦那様！」

御者はこれまでにないくらいに青ざめた。雇用主に自分の失態がばれてしまう事は避けたいが、この場を見ればそうはいかないという事が分かっているから、口を開かないわけにはいかないが感情が言葉を引きとめてしまうのだ。御者の主はしびれを切らしたのか元よりそうするつもりだったのか、馬車の中から姿を現した。背の高い、がっしりとした体躯の五十ほどの男だ。全て後ろになでつけた髪は濃い灰、角ばった顔に蒼い瞳は、不正を許さぬ裁判官のように厳格だった。固定された眉間のしわには、いかめしさがある。分厚いコートを身にまとい、黒いズボンからは丈夫そうな靴がのぞく。立派な身分ある、貴族のように見えた。街道沿いの町とはいえ、この町民は貴族と触れ合う事をしてこなかったので驚きに目を見開く。もちろん、ゾンネの男二人もだ。

とはいえ、馬車に轢かれた子どもをかばう身としては、相手が貴族だとしても言うべき事は言わねばならない。その時にはケイスはもう、意識を取り戻しており、事の成り行きを見つめるように瞳を開いてはいたが、馬に蹴られたのは確かで、額を切ってしまっている。

「そこの子どもを轢いたのか」

首を回してケイスを見るその貴族の顔には、同情のようなものは微塵も読み取れなかった。怪我の具合を心配するようにも見えず、相手が血みどろで死体同然でもその顔を変えないのだろうと思われる。

「ひ、ひえ、旦那様、それはその」

「そうだ、あんたの乗った馬車がこの子どもを轢いたんだよ」

ゾンネの男は貴族の男性に立ち向かった。相手が貴族だからではなく、常人とは違う空気を持った人間だったからいささか気後れしたが、ケイスの流れる血を見た後ではそうせずにはいられない。

「それは申し訳のない事をした」

「申し訳ない？　そう思うんならこいつのために宿をとって医者を呼ぶくらいはしてほしいもんだ」

実際、それは望めないと分かっていてもゾンネの男は口にしてしまっていた。貴族なら金も充分あるだろうし、地位ある者が行動する時には常に責任も伴うはずだ。何よりケイスを蹴飛ばしたのは、この貴族の馬車なのだ。御者が悪くとも、ふらついてたケイスにも全くの罪がないとはいえど、ケイスは妹を失ったばかりなのだ。挙句にこれかと、ゾンネの男二人はケイスがかわいそうでならない。どうして彼を放っておいてやらないんだ。まだ子どもなんだと、ひどく悲しくなる。

「見せてみなさい」

その貴族はケイスに身を寄せた。慌ててゾンネの二人は彼を止めようとするが、貴族の体はびくともしない。何か武術でもやっているのだろうか、顔を見合わせるゾンネ組を後目に、貴族の男は少年の上半身を持ち上げた。

「そう深い傷でもない」

告げると、突然立ち上がった。ケイスを持ったままなので更にゾンネの男たちは狼狽する。

「何するんだ？」

「来なさい、休ませる場所が必要だ」

力強いがゆったりとした足取りでその貴族の男が歩き出して、距離が出来ケイスが遠ざかったのを知ると、ゾンネの二人は駆け足で貴族の男性を追った。

ケイスは、疲れきっていた。それでも一晩休むと体力は戻ってきたようで、朝には体を起こすほどにまでなる。

まだぼんやりとした表情の少年は、馬車に轢かれようが頭を打ち

つけようが妹を失った絶望を忘れられないでいる。いっそ忘れてしまえたらどんなにか楽だろうに。そう思っても、無理な話だとゾンネの二人は首を振っていたのだが。

この場所がどこかも問わずに、ケイスはただ濁った瞳で壁を見つめていた。同じ町の人間が語りかけても変わらずに。途方に暮れた男たちが、また眠ったらゾンネに連れ戻そうと決めていたところ、部屋の戸が叩かれた。現われ出たのは昨日の貴族。ケイスを轢いた馬車の男だ。御者はいない。

「目が覚めたか。それは良かった」

ゾンネの二人は気まずい思いだった。望み通りに、ケイスを宿に泊め、医者まで呼んでくれたこの男には感謝しているが、同時に加害者でもあるような男なのだ。それも、いかにも顔つきの厳しい、騎士かのような男が相手ではどうにも萎縮してしまう。

「そうだ、ケイス。この方が、宿に泊めてくださったんだぞ」

お前を轢いた馬車にも乗っていたがな、と加えるような気持ちはそのゾンネ男になかった。ただ一掴みの事実だけを教えると、ケイスは見知らぬ顔にだけは反応した。知らない人がいる、ただそれだけの思いであった。礼を言うという考えはどこかへ消え去り、見知らぬ人間の顔を確認するとすぐに視線を元に戻した。何も映さないエメラルドの瞳。生気などなくなってしまった哀れな子ども。

「ケイス」

名前を呼びかけても、ケイスはここには存在しないかのように振る舞った。実際、彼の中ではもうこの世に存在したくもないから自分を認識出来ないのかもしれない。

「すいません、この子はここ最近不幸な事続きで……」

ゾンネの男が見上げた先には、ケイスに視線を注ぐ貴族の姿があった。感情がにじまぬ顔の、鋼鉄のような男。彼が今、ケイスに興味を持っているようだった。これは、ただ轢いてしまった相手を気遣うだけのものではないなと、度外視された男二人も薄々と気がついていた。

ケイスは自分が見つめられているのも知らない。
場の空気は、ゾンネの二人には気まずいものとなった。誰も話そうとはしないので、口をきくのがためらわれる。しゃべったらまずい事になるような気さえして、互いに顔を見合わせる。ケイスも、貴族も、動きさえしない。
「不幸、とは？」
と、貴族の男性が口を開いた。男たちに視線を動かしている。何を問われているのかと首を傾げた二人組だが、一人がケイスに起こった不幸とはどんなものか聞いているのだろうと思いつく。
「はあ、それが……、ただ一人の家族だった妹をなくしたんです」
「ならば孤児か」
「そういう事にはなりますね」
今一度、九歳の子どもを見やる。汚れきった全身、淡い色のはずの髪もくすんでしまっている。額の傷は包帯に巻かれている。瞳に力はなく、突き飛ばされたらそのまま地面につっぷしていそうに見える。ただ一人の家族をなくし、全てを失った少年。
「子どもよ、ならば私の元へ来ないか」
目を白黒させたのはゾンネの二人だった。どういう意味かは分からないが、とんでもない事を言い出していると、貴族の男を凝視した。対する話の張本人であるケイスは半眼にした目を貴族へと向けようともしない。自分は話に関係ないと思っているどころか、話の中心である事も知らないのだろう。口を挟むべきと考えたのはケイスと同じ町の人間だ。
「ちょっと待ってくださいよ、急に何をおっしゃるんです？　この子を引き取ろうとでも言うんですか」
「そのつもりだ」
「何故！」
こんな事、考えもしなかった。ゾンネの二人は相手の意図がつかめずに、いきり立つ。何故、貴族のいい年をした大人がこんなみすぼらしい子どもの身を引き取ろうとするのか。ケイスは、まだ子ど

もだ。背の伸びた体格の良い青年ならまだしも、これでは何の役に立つのか、数年は下働きとしてもさほどの役に立たないだろう。貴族が雇い入れたいような容貌はしていないし、もっと幼い子ならまだしもケイスは九歳だ。そして、この貴族の男がケイスのような庶民の子を引き取って一体何をさせようというのか。ただ下働きがほしいのなら、何もこんな事をせずともよいだろうに。それとも、ケイスを跳ね飛ばした馬車に乗っていたという加害者としての意識の呵責に悩まされての結果なのだろうか。この貴族の男性は、とてもそういう慈善事業を好んでやるような人物には見えないのだが。今も待ってみても、返事もやってこない。

「そもそも、あんたは王都の人間なんだろう、ケイスを王都に連れて行くってのか」

貴族の男性は、素性を明らかにせずとも王都から来たとゾンネの二人に伝えてあった。

「ケイスは今、普通じゃないんだ。見ず知らずの他人に任せるわけにはいかない」

「王都……」

その声が誰のものか、すぐには分からなかった。ゾンネの二人は顔を見合わせ、ケイスに視線を注いだ。ケイスがしゃべったのだ。久しぶりの事で、何ヶ月も彼がしゃべっていなかったような気がする。ゾンネ組はケイスに詰め寄るようにして顔を前に出す。

「ケイス、大丈夫だ。何も問題はない」

「飯でも食うか、ケイス。腹減ってるだろ」

王都シェーン。一度も訪れた事のない場所だが、ケイスは噂にて聞いていた。都のような場所には人買いが子どもを売りに行く場所だと。あの人さらいは、ツヴィッシェン山脈を迂回して、王都に行くためゾンネから北東へと向かったのではないかという推測。王都、それは今のケイスに最終的に向かうべき場所だと思えて仕方がなかった。

「そうだ、王都だ」

その貴族は世界に自分とケイスしか入れていないようで、食事を持ってきた男にも構わず、ケイスにだけ声をかける。彼は、ただの道楽で子どもを引き受けようというのではなかった。子どもがあまりにも惨めで、哀れっぽくて仕方がなく、このままではまともに生きていけそうになかったから、気がかりだったのだ。彼は、この子どもを育てたいと思った。世界のどん底に居るみたいな子どもだからこそ、一から始められる。鍛えるには、ちっぽけな腕の方がやり甲斐あるというもの。死んだ目に映らない世界を、他の色に変えてしまいたくなる。

「大勢の人が行き交い、物で溢れかえっている。そこで、私がお前を鍛えてやろう」

ゾンネの一人が、「鍛える…？」と首を傾げていたのも知らず、ケイスはゆっくりと顔を上げた。王都、そこには人がたくさん居るらしい。もしかしたら、ラピナトーレも。いずれ行くつもりでいた。それならば、この機会を逃す手はないのではないか。その男には、ひどく峻厳なイメージを覚えた。

「あんた、どういう事だよ」

「轢いた侘びだ、とでも言えば満足するか？」

しないだろう、という口調の貴族にゾンネの男は怯む。どうもこの変わった貴族は、威圧感にあふれていて仕方がない。

「戦場（いくさば）では、時に荒療治が最良となる」

言うと、貴族の男性はケイスの肩を引き寄せ寝台から下りるよう促した。人形のように男性の手に従うケイスは、床に足をつける。まるでこのまますぐにでもケイスと貴族の男は王都に行こうとしているかのようだ。自分の子のように、とまではいかなくとも同じゾンネの町の子だ、そんな勝手な事はさせないとゾンネの男たちが立ちはだかる。

「ここは戦場じゃない」

「ケイスを返してもらおうか」

貴族の男は、ゾンネの男の一人よりは背が高くなかったのだが、

正面から向かい会うと身長差など瑣末な問題にしかならないのだと教えてくれた。何もしていなくとも凄みのある男だ。だが、ゾンネの二人としてはここを引き下がるわけにはいかない。

「ぼく、王都に行くよ」

ケイス本人がそんな事を言いださなければ、二人の男たちは腕力に訴えてでも貴族を止めるつもりだったのだが、目を丸くする。まるで誘拐された子どもが誘拐犯をかばっているかのようで、ゾンネの二人はどうしたらいいのか分からない。ケイスの心理をおもんぱかれば、もしかしたらルネを探しに行きたいのかもしれないと思えるが、それは果たしてケイスにとって本当に良い事なのだろうか？

とはいえ、ケイスは確かにもう身内の誰もいないたった一人の孤児になってしまった。誰かに引き取ってもらえるのは幸いで、その相手が貴族ならおそらくは食うものにも困らないだろう。それを本人が望んでいるのであれば、もはや止める手立てはないのではないか。

「いつか戻ってくるから」

決別するような声は、九歳の子どもにしては固いものだった。ケイスの成長をつぶさに、とはいかずともよく知る二人はそれでも町民たちでケイスの面倒を見てやるつもりだったのだ。やはり、納得いかない。貴族とケイス、合意の上でも。

「待てよ！」

ケイスの意外な反応に、二人の男の行動は遅れてしまい、貴族とケイスは部屋の戸を閉めて出ていくところだった。

宿の外に出ると雪を少し踏みながらも、貴族の男はしっかりとした足取りで歩いていた。もうケイスの体を支えてはいない。ケイスは自分自身の足で、意思で動いていた。通りにはケイスを轢いた馬車が待機しており、その事も思い出さないケイスは馬車にははじめて乗るな、とだけ思った。子どもの背よりは高い位置にある馬車の中に乗り込むには貴族の男の協力が必要だった。ケイスの後に、その男が乗り込むとゾンネの二人組が慌てて飛んできた。それを拒絶

するかのように、男はぴしゃりと戸を閉めた。
「ケイス！」
「待て、戻ってこい！」
車外の音は聞こえてこない。すぐに、御者が鞭を振るい馬車は動き出した。黙ったままの子どもに視線もくれず、しばらく黙り込んでいた貴族の男は、ふと首を少しだけ横に向けて、名を放った。
「まだ名のっていなかったな。私の名はベネディクト・カール・ルブラン」
ほんのわずか、一瞬の稲妻のようにベネディクトの蒼い瞳がいたわりに染まったように見えた。少年の目には入ってこなかったが。
「お前の親になる男だ」
馬車は短くない距離を、王都目指して駆けていた。それを追う二つの影など知らぬ素振りで、冬空の下を黙々とシェーンに進んだ。

68　王都の少年2

王都シェーンはシェーン王国の都であり、国の中心であった。ケイスの育ったゾンネとは異なる空気が流れている。どこか湿った、それでいて冷たい空気は冬のせいだけではないような気がしていた。この頃ケイスには窓の外を見やる気力くらいは戻っていた。都市を囲む長く背の高い壁を越えると、そこには尖塔の時計台が待っていた。巨大な時計台はシェーンの顔だ。その他にも、高くそびえ立つ尖った先の建築物がたくさんあるが、時計台と王城にはかなわない。王城もまた、シェーンの顔だ。白く巨大な体を王都の中心に根を張っている。

ゾンネの子どもは圧倒された。ゾンネではあまり見られない馬車も、今自分の乗っているようなもののやもっと派手できらびやかな装飾のあるものなど多くあちこちを闊歩している。人の数は小さな町の比ではなく、王都は活気に溢れて見えた。城下町を進むと、多くの人は生真面目そうに働き、あるいは自分のやるべき事に精一杯に振る舞っていた。

近づくにつれその威光を感じるシェーン王城を通り過ぎると、ベネディクトの馬車はデュッセル地区へと向かう。これまで城下町に広がっていた市庁舎などの公共施設や庶民の家などとは異なり、広大な土地を所有する貴族たちの集まり住まう場所だ。ベネディクトの家もそこにある。

一軒の屋敷の前に来ると馬車は動きを止めた。ベネディクトが御者の到着を待たずに自分で馬車の戸を開けると、地面に降り立った。主人の世話を出来なかった御者はうろたえながら、ベネディクトの下にはせ参じる。主が子どもを顎で示すので御者は顔をしかめながらも子どもの下車を手伝った。乗車時よりそう苦労しなかったがケイスは御者に手を借りて馬車を降りた。

「今日からここがお前の家だ」

とベネディクトが言うので、見上げたその先がケイスの第二の家となった。

† † †

それから、ケイスの生活は一変した。まずは貴族に拾い上げられたというからには、貴族の屋敷で働くのだろうと思っていたケイスの考えの根底からが覆された。伯爵の地位を持つと判明したベネディクトは、何もケイスを使用人として使うために引き取ったのではなかった。養子の話は、少し後になってからケイスに切り出されるが、ケイスを客人、いや家族かのように優遇したのだ。もちろん働けなどとは言われない。ベネディクトは口数の多い方ではなく、特に彼自身がああしろこうしろと口出しをしはしないが、ケイスの世話を任された執事によると、どうもケイスは破格の待遇を受けているらしいのだ。子ども心にもそれは気がついていた。

それから、名前も与えられた。これまでにケイスは自分の名前を名のる時は精々ただのケイスか、ゾンネのケイス、もしくはヨハンの子ケイスとでも口にしておけばよかったが、伯爵である貴族の下で生きるには新たな名前が必要だった。それが、養子になるという事を示していたとしても、その時のケイスは気がつけないでいたが。

新たな名前は、ケイス・ルブラン。

この時既にベネディクトに妻はなく後妻もめとっておらず、子もいなかった。そのためこの養子がルブラン家を継ぐだろう事は明白で、むしろ継嗣のない伯爵が貴賤を問わず養子を取っただけと周囲には思われた。貴族には、養子はよくある話だった。どこの子かも知れない庶民を引き取るなどというのは滅多にない事ではあったが、ベネディクトはそれでも構わないようだった。

まだケイスの調子は元のものとなってはいなかったが、抜け殻同然の様子はなりを潜めたので、伯爵は半月もするとケイスを王立フォルクマール学園へと行かせた。ゾンネでは読み書きを教えるような場所は教会にしかなく、それも簡単な勉学でしかなかった。両親をなくしてからのケイスは勉強という行為を忘れていた。

ケイスの通う学園では国語、歴史、数学の他、古語に体育などを教えている。フォルクマール学園は年齢で学年分けされており、下級学年では十三歳までの生徒たち、上級学年は十八歳までの生徒たちを集めている。それぞれが二クラスに分かれており、授業も自分のクラスでする事になっていた。下級学年は下が五歳からと年齢層に幅があったが、五歳から学園に居る生徒などは少なく、十歳前後の子どもが下級学年の半数を占めていた。下級学年では、在籍年数で上級学生になれるのではなく、十三歳になれば自動的に上級学生になれる。対して上級学年になれば五年の学業を積んだ後に受ける事が可能になる卒業試験に合格しなければ卒業は出来ない。卒業試験はただ受ければいいというようなものではなく、フォルクマールは出るより入るのが容易いといわれるように、かなり難しいものである。とはいえこの卒業試験に合格すれば卒業出来るだけでなく、貴族でなくとも就職するに有利な道が開けるという庶民にも優しいところがある。ゆえにこの学園に入る事は貴族でなくとも非常に名誉な事だった。

だが貴族が生徒の多くを占めた学園では、突然やってきたケイスを異質なものと見なした。入学してから一日で生徒たちの注目を集

める存在になった。精彩を欠いたエメラルドの瞳に、生徒たちは違和感を覚え、明らかに貴族の子どもではない身のこなしに胡散臭そうな顔をする。フォルクマール学園には庶民、ただの職人の息子もいるにはいたが、数がものを言う世界ではいないも同然だった。

ケイスは、名前ばかりは歴史ある貴族の息子だ。だが身なりを飾ってもその動きやしゃべり方には貴族のそれがない。貴族の息子たちの気に入らないのはその点だった。その上、ケイスは読み書きがほとんど出来ない。自分の通う学園にまともな読み書きの出来ない人間が居るというだけで識字者は不満になる。

「ようお馬さん」

ケイスの世界はどうにもまだ明瞭でなかった。妹がいなくなってからの苦しみは学園の生徒のいやがらせを認識出来なくさせていた。それが更にいじめっこたちの不快を煽る。いじめる相手には無視されず怯えてほしいのがいじめっこたちの心理で、それがかなわないとなると更にいじめが深まる。

「聞いてんのかあ、もらわれっ子」

「くせえ、どぶくせえぞ」

蹴り飛ばしても何も返事をしない相手は罵倒するに限る。とにかく彼らなりの汚い言葉でケイスを罵る。だがケイスは嫌がりもせず、行く手を阻む彼らをただ、どいて欲しそうにうつろな碧(みどり)の瞳で見るだけだ。いじめっ子のリーダーは、クラスでも大将を気取るルッツという少年だった。年は九歳のケイスよりも上だがこらえ性のない十三歳だった。ルッツは貴族としての地位が高く時勢に乗った公爵家の息子だった。アルブレヒツベルガー公爵の名前がこれまでに効き目のなかった日はないのだろう、ルッツ・アルブレヒツベルガーはケイスに悲鳴をあげさせるのに躍起になった。

足がつま先から順にケイスの腹にやってきた。率先して敵を排除するタイプのルッツは、自らの手を汚すことを嫌わなかった。そしてその取り巻きはルッツに従ってひ弱な子どもを殴りに向かう。手が痛くなって、ルッツを見やれば仕方がないな、とルッツはため息

をついて自らとどめを刺す。とはいえ、そのいじめは容赦こそなかったが、ルッツたちがすぐに飽きてしまうのでケイスはひどい顔になる前に解放されていた。いじめっ子たちはある意味では賢く、ケイスの顔を殴りつける事はしなかった。貴族が相手の時もそうしていたからだ。すぐにばれるようでは困る。

抵抗をしないのはケイスの魂がまだゾンネにあったからかもしれない。妹と暮らした生活の中に居るのだろう。

屋敷に帰ればケイスは侍女に世話される人間となる。放っておくと何もしないケイスを着替えさせるのも侍女の仕事だ。服を脱がせば、当然体のアザに気がついてしまう。善良な若いエルザは最初からそれがいじめだと分かっていた。

「坊ちゃま……」

その日のアザはいつもより大きな紫色をしていたのでとても目立ったので、エルザは息を飲んだ。これまでにも殴られた痕はあったが、ここまでひどいものはなかった。無理だと分かっていても、エルザはケイスに一言申さねばならなかった。

「これは、どうなさったのです」

「なんでもない」

ケイスはぱっと近くにあったシャツを掴むとそのアザを隠した。エルザは、侍女頭に相談をしていたが、彼女は使用人としての分をわきまえた人間だったので、ケイスが黙っていろと言う限り口をはさむなと言われ続けていた。だが、侍女頭など通さず主人に言うべきではないのか。

「何でもないはずがありません。わたし、旦那様に相談しますわ」

「やめて！」

その時ばかりは、ケイスが顔を上げた。目にはおそれがある。これまでに感情のないようなエメラルドの瞳を見てきたが、ケイスは

確かにこのアザの告げ口を恐れている。世話する相手の人間らしさが見えてエルザはこういう顔もするのだと思ったが、それが負の感情というのはなんとも悲しい事だった。

だが、エルザはこの子どもを見捨てられなかった。おそらくは通っている学園でいじめられているのだろうが、それはエルザにはどうする事も出来ない、大人の介入など子どもたちの世界を余計におかしなものへと変えるだけだ。せめて、エルザに出来る事はないのだろうか。

ある日突然、主人であるベネディクト伯爵が連れて来た庶民の子ども。他の者よりも若い分手があいていて、エルザはこの子どもの世話役を頼まれた。もう十歳くらいとの事、さほどの手間はかからないだろうと思っていたが、確かに手間のかかる子どもではなかったのだが、ケイスはほとんど何もしゃべらない。そして、一人にさせると窓の外を見てただぼんやりとしているだけなのだ。だから、エルザは彼に食事に呼び、着替えを手伝い、睡眠や起床を促してきた。口数の少ない子どもであるが、ケイスの事をあれこれと構ううちに心の傷にも気がついて、ただの使用人としての態度を忘れるようになった。

この子どもは、自分の悲鳴にも気づかずに一人世界から背を向けているのだ。屋敷の人間は誰もその事に気を払わない。ただケイスが健康でいればいいとでも思っているようで、屋敷の主であるベネディクトですら、彼をかわいがりには来ない。元よりベネディクトの人となりは他人に構い甘やかすようなものではないから納得がいくが、自分で拾ってきたのならもう少し気にかけてやってもいいはずだ。エルザはずっと、このかわいそうな子どもを気にする人物が少ないのに憤っていた。

「ほっといて」

「いいえ坊ちゃま、放ってはおけません。旦那様には言いませんから、何があったのか聞かせてくれませんか？」

言ってから、エルザは自分の言葉を今すぐ引っ込めたくなった。

そんな、子どもであっても男が誰かにいじめられているのだと公言するはずがない。だが、せめていじめが杞憂であってくれればエルザも安心出来るのだ。階段から落ちたとしてもおかしな場所にあるアザだったから望みは薄かったが。

少年はエルザの言葉に逡巡したようだった。伯爵に知られるのが余程嫌なのか、エルザをちらちらと見上げては、俯くのを繰り返す。まるでいたずらがばれてしまった子どもみたいで、エルザはくすりと笑ってしまった。なんだかこの少年がかわいらしく見えたのだ。

「冗談ですよ。旦那様にも言いませんし、無理には聞こうと思いません」

ケイスは顔を持ち上げて、喜びの混じった戸惑いの表情を浮かべた。

「でも、もし困ってる事があればいつでも言ってくださいね。わたしに出来る事ならなんでもしますから」

侍女の申し出はありがたかったが、ケイスには何の意味をなさないものであった。とりあえず、密告の危険はまぬがれた。着替えをすませると、エルザから逃れるように部屋を出て行った。

ベネディクトの誘いを受けて王都シェーンにやって来てから一月近くがたった。ケイスは、学園に行くのが終わると城下町へと飛び出して行く。妹のルネを探すためだ。それを知るベネディクトは密かにケイスの後を使用人に追わせていたが、もちろん少年はそんな事は知らなかった。城下はその日も賑わっていた。

時計台の高い場所で鐘が鳴る。更にそれより高い場所には曇り空が広がっており、透明な空を灰色に染めていた。雨雲というほどには白い色で、おそらく雨は来ないだろうと思われた。城下で最も広い敷地を持つデアデス広場は屋台の市場を仕舞う時間だった。少年に当てなどなかった。それも人に聞くつもりもなく、ただあてどなく歩くだけの行為を毎日可能な限り続けていた。

あの屋敷は息がつまる。人が多く収納出来るはずの場所には、隠れるかのようにすぐに姿を消す使用人たちがたまにうろつくだけの

空間になっている。どこへ行ってもケイスは上手く息が出来ないのだが、我が家となった場所が一番疲れるのだ。だから街へと飛び出す。行き交う人の中に紛れて、人混みという塊の一部になると、ほんの少しだけケイスは息をつく事が出来るのだ。小さな子どもを見つけると、妹かもしれないと振り返ってしまい、すぐに安らぎは失われてしまうのだが。

フォルクマール学園での事も、思い出したくないが黙って耐えていれば、いずれ相手はつまらなそうな顔をして去ってくれる。ケイスは彼らを誰だと認識もしていなかったが、自分の存在など忘れてくれて構わないのにと思っていた。あまり考えないようにはしているが、ひどく悲しかった。ケイスには自分が罵られたり殴られたりする理由が分からなかった。だからこそ不思議でならず、耐えるしかなかった。トーマスの工房でもわけも分からず殴られた事があったが、それでも彼は酔っ払っていて正体を失っていたからああなってしまっただけだ。あの学園の生徒たちは、一体どういうつもりでいるのだろう。少しも見当がつかなくて、少し恐ろしかった。未知のものには人は恐怖を抱く。ケイスはそれを押し隠すためにも、ルッツたちに口答えをしなかった。

ベネディクトはケイスを望む場所へと連れてきてくれたが、彼は忙しくしておりケイスに構わない。ほとんど空気のようなものだが、彼には学園での事を知られたくないと思った。彼は、ケイスの親になると言ったはずが、すっかり顔を見せない。彼の事も、何のために王都（シェーン）に呼んだのかも分からなくなるが、それでも自分の弱い姿をベネディクトに知られるのは嫌だった。彼はきっと、弱いものを許さないだろうから。ルブラン邸を追い出されたら、ケイスにはもう行くところがないのだから、あの事は隠し通さねばならないのだろう。

デアデス広場の屋台が減って行く中で、雲ばかりの空が静かに暮れようとしていた。城下町の地図を描こうとでもするかのように少年があちらこちらへとうろついている。それを素人なりに、本人に

気づかれないように尾行する人間も一人。そんな光景がほとんど毎日見つけられたが、場所も変え、時間も異なるその風景は広いシェーンでは重要でない小さなものの一つだった。

ケイスがルブラン伯爵邸にやってきてから、一ヶ月と少したった頃だ。シェーンの南部には空気のあたたかさがやって来ていた。毎日観察を続けていれば、木の芽が芽吹く様が見受けられるだろう。春の足音が少しずつ近づいていた、ある日の事だ。

ルッツはこの日も、自分の威厳を示すのに忙しかった。最近気になってきた、同じクラスのエーファに気に入られたくて、気取った事ばかりするのが楽しかった。その延長が、授業の最中でケイスをからかう事だった。彼は文字の読めない子どもで、授業中に教師に聞かれた事もまともに答えられない生徒だった。だから言ってやったのだ、その質問の答えはそこのケイスが知っているだろう、と。

「ヤン・バウハウスが著書で言っているのは、輸出に向ける財を増やし、他国の天然資源を利用して、輸出関税を減らし、需要変動の少ない財を輸出する事が大切である、という事です」

クラスの中は、水を打ったように静まりかえった。ケイスが、新参者の文字も読めない子どもが教師の問いにすらすらと答えたのだ、誰もが口を開けてケイスを見上げていた。その歴史教師ですら、そこまでちゃんとした答えをケイスが口に出来るとは思っていなかった。とはいえ、歴史教師のした質問は前回の授業できちんと教えておいた事だった。それは文字が読めなくとも、耳で聞いていて覚えていれば簡単に答えられる内容だったのだ。実際、ケイスはこの頃文字は既に読めるようになっていた。綴りは怪しくとも、自分の名

前もしっかと書ける。おそらくは簡単な質問であれば黒板に書く事も出来るだろう。

「素晴らしい、ルブラン君は先だっての授業で言った事をちゃんと覚えていたようですね、座ってよろしい」

それから、歴史教師はルッツが勉学を始めて間もない子どもにも分かる質問に答えられなかった愚かな生徒であるかのように、責めにも似た瞳を向けた。ルッツの意図はケイスを困らせる事にあったのだが、最終的には馬鹿でも答えられる質問をルッツが答えられなかったかのような結果になってしまった。彼がその事に気がついて顔を赤くしたのも無理はない。一瞬見たエーファの顔が、ケイスに好ましく思っているような表情に見えて、ルッツの機嫌は急下降した。いや、激怒したのであれば上昇したのかもしれないが。

授業が終了すると、ルッツがケイスを連れ出すのが自然な流れになっていた。それが、常よりもルッツの機嫌が悪かったので周囲の取り巻きも困惑するほどだった。

「お前のせいで恥かいたじゃねえかよ」

ルッツの顔は、赤さを通り越して赤黒いほどだった。逆上というにはあまりにも血が頭に集まり過ぎている。挨拶代わりの一発目の拳も、常より深くケイスの腹に沈みこんだ。ケイスは体を二つに折って、腹痛をこらえるように両手で押さえる。

「お前は何だ？　親の名前を言ってみろ、どうせ農民の息子だろ、あれくらいでおれに勝てたと思うなよ」

蹴りつける足は、丸まったケイスを何度も何度も打ち据えた。それでもルッツの苛立ちは収まらない。この生意気過ぎるガキの泣き声が、悲鳴が、悲しみが見たいのだ。それを見るまでルッツは痛めつけるのをやめるつもりはなかった。

「いい気になるなよ、平民が！」

くそ野郎と何度も罵りながら、ルッツは相手をいたぶり続ける。もう、取り巻きの少年たちも手を出せないほどだった。彼らは互いに顔を見合わせ、さすがにルッツの機嫌の悪さは尋常じゃないとう

ろたえている。
「……う……」
「ああ？　なんだ、なんとか言ってみたらどうなんだ、育ちの悪い異端者め！」
その場所は廊下の端で、階段の近い場所だった。ルッツの取り巻きたちはあまりにも階段に近づき過ぎている事を憂いていた。
「なあ、ルッツ、そろそろ止めた方が」
「うるせえ！」
手をはじかれて、取り巻きの一人は顔をしかめた。もう構ってられないと言い訳を探すように周囲に視線を走らせ、何も言わずにその場を去った。まだ二人の取り巻きがルッツの背後に待機していたが、いずれも今すぐ逃げ出したいような顔をしていたが、ルッツにそれを咎められるのが怖くて動けなかった。ルッツは名高いアルブレヒツベルガー公爵家の人間だ、同じ貴族社会で生きる人間には子どもだったとしても逆らえない相手だ。
「この出来損ない、同じくそみたいな出来損ないの親から生まれたんだろ！」
両親の事だけがケイスの耳に届いた。自分がけなされても、母と父の事だけは、罵りの対象にしてはならなかったのだ。刹那、エメラルド色の瞳がまるで宝石のように輝いた。
「だまれ！」
無抵抗だったケイスが立ち上がり、弱くない力でルッツの胸を押した。最初こそ、ルッツも取り巻きと似たような間抜けな顔で初めて抵抗を見せた少年を見ていた。が、ルッツはそれこそが見たかったのだと、抗（あらが）うものの頬を殴りたいと思っていたのだと気づく。にやりと笑うと、ルッツはそれを実行した。
あっと声を上げたのは、取り巻きの一人だった。子どもの体は簡単に宙に舞った。

フォルクマール学園の出入り口をばたばたと大きな足音を立てて駆ける少年たちの姿があった。一人は顔色を青くし、もう一人は便所掃除でも言いつけられたかのような苦い顔をしている。先陣を切る少年は、必死に感情を消し去ろうとしていた。

生徒たちが元気に走り回る姿は学園で珍しくもないものだったが、エーファとその友人は、風を起こして学園から去っていったクラスメイトをどこか放心した表情で見ていた。彼らがあんな風に必死に走るのは滅多にない事だったからだ。エーファは友人と顔を見合わせると、両の眉毛を持ち上げて、今のは何だったのだろうと首を傾げた。

68　王都の少年2（後書き）

実はこの話から、学園編のはじまりとなっております。
サブタイトルはあれですが、学園編という気分。

69　王都の少年3

ルブラン邸で働くエルザは、世話する相手の帰りが遅いのに気づいていた。ケイスは学園で友人らしい友人も居ないのか、授業が終わり次第帰ってくる日々を送っている。今日はエルザの知るケイス下校予定時刻を過ぎても少年の帰宅が伝わって来ない。何かあったのかもしれないと、異変を感じたのは夕方の鐘が鳴った時だ。決意を固めると、エルザは侍女頭の元ではなく屋敷の執事のところへと向かう。ベネディクトが屋敷を空けている今は、屋敷の全権はほぼ執事のフランツが握っている。また侍女頭のところで事をもみ消される前に、今の屋敷の最高権力者の下へと直談判に向かった方が話が早い。

全てが取り越し苦労であれば問題ないので、ケイスがいじめられている可能性については触れずにフランツにはただ「いつもの時間になってもお坊ちゃまが帰ってこない」とだけ伝えた。執事を勤めて長いフランツの対応は早かった。頷くとすぐに馬車を準備させ、エルザを伴ってフォルクマール学園まで急ぐように御者に伝えた。ちなみに、ケイスを跳ね飛ばした張本人である御者の男は解雇してある。ケイスが彼の顔を見ていい気はしないだろうというベネディクトの配慮であったが、そうでなくともベネディクトは人を簡単にはじき飛ばす人間が御者の台に収まっているのをいつまでも見ているつもりはなかったが。とにかく、新たに雇い入れた御者の男に鞭を振るわせケイスの通う学園に駆けた。

暮れた空の下、フォルクマール学園はちょっとした騒ぎになっていた。ほとんど下校した生徒ばかりだったが、具合の悪くなった生徒のための看護室には数人の生徒たちがたむろしていた。その中心

には意識を失った生徒。階段の下で昏倒しているのを一人の女子生徒エーファが見つけたのだ。

そこへ現れたるは、意識のない生徒の住む屋敷の人間。学園の教師たちは慌てた。中でも学園の長（トップ）である学園長が不在の現在副学園長にかかった重圧は少なくなかった。何故学園長は不在なのか、彼の多忙を恨んだ。

「こ、これは、ルブラン君のおうちの方ですか」

「はい。私（わたくし）はベネディクト・カール・ルブラン伯爵の執事、フランツ・シルトと申します」

副学園長が慌てたのは、ケイスが何故学園の中で倒れていたのか理由が全く分からないからという点にあった。もちろん貴族相手に事が大事になるのを恐れてでもあった。

「何があったのでしょうか？」

フランツはもちろん、エルザもまた当にケイスが寝台に横たわっているのを視界に入れていた。エルザはケイスの元へとはせ参じ、その様子を窺っている。ならばフランツのやるべき事は一つだろう。この事態の全貌を明らかにし、ケイスを連れて屋敷へ戻る。主人に伝えるべき事を知るために副学園長に詰め寄る。

「それが、こちらとしても気にはなっておるのですが、うちの生徒が見つけた時にはルブラン君は一人で倒れていた、という事しか知りませんで……」

ハンカチで汗を拭きながら、副学園長は自らの保身について思いを馳せる。きっと学園長がやってくるまで事を荒立てなければ大丈夫だろうと、上手い言い訳を考える。とはいえ副学園長も生徒の昏倒の原因が分からない、という事以外事態をよく把握してはいなかった。

「では、その第一発見者である生徒にお話を伺いたいと存じます」

フランツの、長年世の酸いも甘いも知り尽くしたような厳しい瞳を向けられて、副学園長は他の教師に責任転嫁をするように目を向けた。それを受け取った教師は、この看護室を体育の授業と兼任し

て任されている男性で、看護室に駆け込んできたのは誰だったかと室内を見回す。教師が声をかけるより早く、エーファが手を上げた。

「あたし」と申し出る生徒にフランツは顔を向ける。鼻の下と顎から伸びた髭の初老の男は、額にしわを寄せた表情でエーファを見ていたが、相手が子どもだと分かるといささかその厳しさをひそめた。さあ語ってくれと言わんばかりのフランツの視線を受けてエーファは口を開く。

「ケイスは階段の下で気を失っていたわ。一階から二階へ上がる、裏庭に近い方の階段よ。もしかしたら、階段から落ちたのかも」

ふむ、とフランツはその可能性が一番高い事を認めるように頷いた。エルザが心配した顔を向ける、眠り込んだ少年を見ると、ゴールデンオリーブの髪は乱れて顔も少し煤けているようだった。フランツが眉間のしわを深めると、副学園長は心中で悲鳴を上げた。学園側の監督不行き届きを責められるのではないかと危惧しているのだ。今学園の最高権力者は副学園長だ、つまりは責任の行き着くところは自分にあるという事だ。これは副学園長にとって好ましい事態ではない。

「坊ちゃま」

エルザが声をあげて、フランツを筆頭に看護室の人間は少年の眠る寝台に意識を集中させた。どうやらケイスは目を覚ましたようだ。うっすらと瞼を持ち上げる姿からは、今にも死にそうな様子ではないと分かり副学園長はほっと胸を撫で下ろす。

「坊ちゃま、分かりますか。ここはフォルクマール学園ですけど、迎えに来ました、エルザです」

ケイスの枕元には、エーファも彼を見守るように立っていた。室内全員の視線を集めて、意識を取り戻した少年は口を開いた。

「……ル……」

「“る”？　何か“ある”んですか？　“帰る”？　“居る”？」

問いを重ねるエルザにケイスは返事を一つもしないまま目を閉じてしまった。彼が何を言葉にしたかったのか誰も推し量れもしない

まま、ほとんど沈黙を守ったままにケイスはまた眠りについた。

「坊ちゃま、坊ちゃま？」

「エルザ」

フランツに軽く諫められると、でも、というように侍女は顔を上げた。ケイスはどうやらもうしばらくはこのままのようだ。それならば学園などにいないで、屋敷に連れて帰った方がよさそうだとフランツは判断した。まだ気がかりな事はたくさんあるが、まずはケイスの身柄を確保した方がいい。そう断ると副学園長に後日話を伺いにくるとも伝えた。

皆の視線を集めてエルザが健気にもケイスの体を持ち運ぼうとしたので、フランツは年寄りではあっても腰も曲がらず背もエルザよりは高い身だ、手馴れた手つきで侍女からケイスの身体を奪う。簡単に持ち上げられたケイスの体は横抱きにされ、旦那様より年上でもフランツも男の人なのだなあという感想をエルザに抱かせていた。

「ではまた後日」

まるで説教から逃れようとした子どもに釘をさすかのようなフランツの一言に、副学園長は心の内で身をすくませる。看護室を出てからすぐに、

「ケイスに、早くよくなってねって」

という声が聞こえエルザは首を後ろに回した。そこにはケイス第一発見者の女子生徒の姿があった。看護室から足を半分はみ出し、軽く手を上げる。侍女は使用人が客人にするように浅い礼をした。小さく微笑んで、自分の小さな主は少なくともあの少女には気にしてもらえているのだ。友人かどうかは分からないが、そうなれる可能性を秘めた相手がいるのだと思うと、自然と笑みがこぼれていた。

空には細く猫の爪のような三日月がかかっていた。すっかり夜になってしまった帰り道、馬車の中でなるべく衝撃を消そうと膝の上

に抱えたケイスを見ずに、フランツは正面を向いて問いかけた。
「旦那様の寵児は、特定の生徒に格別の感情を抱かれていらっしゃるのではないでしょうか？」
疑問形をとりながらも、フランツは確信しているかのような口調だった。このルブラン伯爵の執事は、ケイスの事を名前では呼ばずに“旦那様の寵児”あるいは“あのお子”などと言う。特に前者は、ベネディクトが家を空けがちでケイスの事をさも気にしていないような態度を見せている点からすれば、皮肉にも聞こえる。ゆえにエルザはその呼び方が好きではない。そして、フランツの持って回った表現も気に入らない。
「と、おっしゃいますと？」
質問に質問で返されて、初老の執事はやや機嫌を損ねたようだったが、噛んでふくめるように言いなおす。
「学園の生徒に不満に思われていらっしゃるのではないかと考えておるのです」
それすらエルザの眉をひそめさせていたが、フランツもケイスがいじめを受けている事に気づいていた。執事は屋敷の大小様々な事に目を通す必要がある。そのうちにケイスも含まれており、主（あるじ）に健康状態を聞かれた際に淀みなく答えられるようケイスにも注意を配っていたのだ。他の使用人たちは屋敷の新参者が同じ下働きなどではなく仕えるべき主のうちだと知って、なるたけ貴族の事情を探る素振りを見せないようにしようと決めていた。
しかしフランツはそうはいかない。あの子どもが何かしでかしたりしないか、突然いなくなったりしないかよく見張っていなければならなかった。ゆえに、ケイスの状態にもすぐに気がついた。服に隠れる場所ばかりを殴られていたわけではない少年は、しばらく見ていればすぐに異変を教えてくれる。本人が何も言わなくとも、ふとした瞬間に顔をしかめ体の一部を押さえたり、学園の制服を着替える前なら半ズボンからのぞくアザが見られる。
フランツの言葉選びに不服そうにしていたエルザだが、この初老

の執事も気がついていたのかと口を開く。
「坊ちゃまがいじめられている、という事ですね」
「本人同士の問題でございますれば、口を挟むつもりなどありません」
それでも知っていたのだと、エルザはその話がどこまで行ったのだろうかと思案する。彼女の考えが手にとるように分かる、とでも言うようにフランツは続けた。
「旦那様には何も申してはおりません」
自分の考えを言い当てられたような気がして、エルザは視線を落とした。そのまま眠り込むケイスのあどけない顔を見て、切なくなる。
「フランツさんに報告をするべきか迷っていました。侍女頭には黙っていなさいと言われていたので」
「マールの判断は正しいでしょう」
侍女頭が言う通りにするべきだと言われ、エルザは勢いよく顔を上げる。見て見ぬふりをしろと言うのだ、この執事は。
「ですが、こんな事がいつまでも続いていいはずがありません！今回の事だってきっと、いじめっ子が関わってるに違いないです！」
「憶測でものを口にしてはなりません。誤って足をすべらせただけかもしれないのですから」
「でも、おかしいです、坊ちゃまはこんなにアザを作っているんですよ？」
看護室の布団から引っ張り出した時から分かっていた事だ。ケイスの体は、軽傷であっても一目でそれと分かる殴打の痕がある。いくら子どもたちの間に大人が入り込む事が話をややこしくするとはいえ、彼らの問題であるとはいえ、昏倒するまで子どもを放っておくのは間違っている。少なくともエルザはそう思っているし、何かをせずにはいられない。せめて、学校を変えてもらうべきだ。いじめっ子の居るような場所は学びの場所としてはふさわしくない。いきり立つエルザに対して、フランツはどこまでも冷静だった。

「しばらくは療養させた方が賢明です」
それで、間を置く事で時間が解決してくれるとでも思っているのだろうか。
「それでは何も変わりません！　やはり旦那様に相談すべきです」
「貴女が決める事ではありませぬ」
「では、わたしが直接旦那様に言います」
半ば席から立ち上がりかけたエルザの意気込みが伝わったのだろう、さすがにフランツも頑なになりすぎたかと思いなおす。口の上の髭を撫ぜるように手をやると、気概のある若い娘を視界に入れる。
「……分かりました。であれば、私（わたくし）の方から旦那様に、それとなく――」
「言わないで」
途端、大人二人はつまみ食いがばれてしまった料理人見習いのような顔をして顔を見合わせた。ケイスはいつから会話を聞いていたのだろうか。うろたえるような執事ではないが、侍女の方はまずい事を聞かれたと、自分はケイスを庇っていたはずがフランツの心無い言葉が少年を傷つけたのではないかと不安になった。視線をやると、きれいな色をしているのに、くすんだように生気のないケイスの瞳は虚空を見上げていた。
「あの人には言わないで……まだここにいたいんだ」
少年はどこも見ていないようだったが、それでも王都（シェーン）に居たいと望んだ。声もはっきりとしていた。彼は、自分がいじめにあっている事をルブラン伯爵が知ったら、屋敷を追い出されると思っているのだ。ケイスが黙って耐えていれば、ルブランの家にいられると信じているのだ、だから誰にも言わずにこれからも過ごそうというのだろう。エルザは、目頭が熱くなった。まだ子どもなのに、いわれなき嫌がらせを受けているのに、大人に頼るべきなのに、ケイスは耐え続けようというのだ。
ベネディクトは、自分で拾い上げたものを自ら捨てる事はないだろう。いじめられているからとこの少年を追い出す事はないはずだ。

長年の経験からフランツはそう推し量る事が出来る。これにはフランツも、この子どもがあまりにも自分を大切にしなさ過ぎていると首を振りたくなった。旦那様はそんな事ではあなたを嫌いにはなりませんよと、教えてあげたかった。しかし、ケイスは言うだけ言うとまた瞼を閉店させてしまった。ひかえめなエルザのため息で、二人は再び顔を合わせた。

完全にこの子どもが寝静まったと確信すると、彼らは会話を再会させた。

「どう、します？」

「……今晩の経過を観察してから判断いたしましょう」

いずれベネディクトに話が行くとしても、ケイスの強い懇願を一晩だけは優先させよう。フランツはそう判断した。

翌日、ルブラン伯爵が屋敷に帰ってきた。昼前の事だ。ケイスは前日の夜から幾度か目を覚ましたが疲れているのかすぐに眠ってしまい、朝もまだ自室の寝台の中に居た。朝の食事を持って行ったエルザはまた眠ってしまったケイスを見て部屋を後にしたのだが、そう間を置かないうちに様子を見ようと思っていたところだ。屋敷の主が帰ってきたために屋敷は少しばかり賑わしくなった。旦那様の帰りを使用人の多くでお迎えしなくてはならない。先陣を切って執事のフランツが屋敷の入り口の戸を開いてベネディクトを招き入れる。

「おかえりなさいませ、旦那様」

エルザもまた伯爵の帰りに深い礼を取る。一瞬、フランツと目が合った気がしたが、初老の執事はすぐに自身の仕事に取り掛かる。

ベネディクト不在の間に屋敷に届いた書簡や知らせを伝えながら、主人が自分の書斎へと向かう後に続く。

ベネディクトが逐一屋敷の変化を問う事はない。何かあれば有能な執事が口にしてくれるからだ。ゆえに、この執事が黙っていればケイスの事も問う気にはならなかっただろう。書斎にて、書簡のたぐいを繰るベネディクトは、次の言葉で手を止めた。

「時に旦那様、あのお子についてですが」

フランツがわざわざ話題にするからにはケイスに何かがあったのだと伯爵は察する。「問題か」短く問う声には、責が使用人たちにあっては許さぬぞ、というような響きがあった。執事はどこまで主に伝えるべきかと逡巡するが、まず第一に告げなくてはならない厳然たる事実を舌に乗せる。

「お子は今、いささか体調を崩しておいでです。学業も暫し休みにした方がよろしいかと」

伯爵の、成層圏を思わせる蒼い瞳が偽りを認めぬ強さで光った。長年彼を主と仰ぎ仕えてきたフランツでも、背筋をぴんと伸ばさねば対応出来ないと思ってしまうほどの凄絶さが宿っていた。

「病か？」

これは選択を間違えば主人の機嫌を損ねるのではないか。フランツは正しい答えを選び取らねばならない。病気だというのは正解ではないが、ケイスが隠したがっていたものを隠せるだろう答えだ。だが、正直に言ってしまうのは、相手が子どもとはいえ無碍にするのはためらわれる。

それは時間にしてしまえばそう長い間ではなく、せいぜい数十秒のものだっただろうが、果断な執事の躊躇を読み取ったベネディクトは異変を感じ取り目をすがめた。言葉が濁るというのは、予想していなかった質問をもらった時か隠蔽したい事実がある時などがそれに相当する。すぐにそれを見破ったベネディクトは執事を相手にするより本人を訪ねた方が話が早いと見なした。考えを口にはせず実行に移した主人が書斎から出て行こうとするのをフランツは目を

軽く見開いて追いかけた。

丁度、ケイスは自身の寝台の中で目を覚ましたところだった。そこへ様子を見に来たエルザも傍らにおり、勢いよく扉を開けたベネディクトに彼女は目を丸くした。急ぎ椅子から立ち上がると礼をとる。伯爵は、静かに自らの引き取った子どもを見下ろした。

昨日（さくじつ）、ケイスの全身をルブラン邸の侍医に診せたところ、大きな怪我はしていなかったが、体のあちこちのアザについては眉をひそめられた。包帯を巻くほどの出血は過去の傷のどこにもなかったが、階段から落ちた際に出来た切り傷などにはガーゼが当てられている。頬にもそれが一つあり、ケイスが病気で伏せっているのではなく怪我ゆえに体を休めているのだと分かるようになっている。伯爵は顔色を変えたりはしなかった。が、大きな足取りで半身を起こしたケイスに近づくと、その少年の瞳の中をのぞきこんだ。

もしかしたら、ケイスはこのベネディクト伯爵の目をこの時やっとまともに見たのかもしれない。人が踏み込む事の出来ない深い深い海の底のような蒼。その色は、温度が違えどルネの瞳を思わせた。兄妹の母親にもらった灰色がかった蒼い瞳は、ケイスの妹、ルネのものに似ている。ルネとベネディクトは似ても似つかない。まったく反対の存在のように思えるのに瞳の色はケイスよりはるかに近いのだ。その事はベネディクトに出会った時にすぐに分かる事だったろうに、この時に初めて気がついたのだ。

「ケイス、剣術を習わないか」

耳に入った単語が現実のものとつながらなくて、ケイスはすぐにそれを理解出来なかった。剣術、それは何の事を指すのだろうか、そんな認識だった。驚いていたのは外野の方で、主人をぽかんと見つめていたがそれすらケイスは知らない。何しろ、伯爵の意図どころか言葉をきちんと受け取れていなかったのだから、彼が乗り出し

てきた身を引き、ケイスにも寝台から下りるように促してきたのもすぐには分からなかった。ベネディクトは子どもの具合が悪いだろうとか、そういった事は聞かなかった。「立ちなさい」命じると、ケイスはのろのろとそれに従った。

少年にしてみればこの王都（シェーン）に着いてから様々な「新しい事」をさせられてきたが、そのうち楽しい事は一つもなかった。学園でのいじめを除けば苦痛というほどのものこそなかったが、それでも伯爵の言う何かをやってみようなどと思う心にはなれなかった。外野の二人がケイスの反応を窺って、宝くじの結果発表を待つみたいな顔を少年に注いでいた。十歳の少年の答えを三人の大人が待っていた。

「けんじゅつって、なに……」

疑問符すらつけない質問を、質問にすらならないような気のない声で伯爵にぶつける。子どもはどこも見ていなかった。ベネディクトはわずか眉を目元に動かした。ケイスは嫌がる様子も見せないが、何かをしようという意欲すら見えない。

侍女がはらはらしながら見守る中、伯爵は常の厳かな表情をほとんど変えずに少年に背を向けた。足を進めながら、

「来なさい」

と言いつける。ケイスはどうするのだろうと二人の使用人たちが見つめると、その子どもはそうするのが当たり前だと思っているかのように足を動かして伯爵を追った。顔には何も見つけられなかったが、とにかくそうしてケイスは養い親の後をたどったのだった。

70　王都の少年4

ベネディクトがケイスを誘い出した先は、屋敷の裏に存在する伯爵と屋敷を守る護衛兵士たちの稽古の場だった。地面をほぼ長方形に切り取り、平らにならしただけの土地だが、草もなく剣術の稽古をするには充分な広さを持っている。伯爵が口にした単語を聞いていても、この場所に来てもケイスは何をする場所なのか判断出来ないでいた。

「これを持て」

木剣を放られて、ケイスは思わず両手でそれを受け止めた。軽くはない木剣が何の役に立つのか彼には分からない。体調は悪くはないが、ずっと前から頭がぼんやりしている。ベネディクト伯爵は自分に何をさせたいのだろうか。

「構えはこうだ」

伯爵も手に木剣を携えケイスに向けてくる。同じものを持っているというので、ケイスは彼の真似をした方がいいような気がして見よう見真似で木剣を構える。そうじゃない、とベネディクトは全く自分の望む姿が得られなかったが、それらしいものは見えたので口を挟むのをやめた。

予告なしに、ベネディクトは少年の小さな脳天をかち割ろうとするかのように木剣を振り下ろした。目を見張った少年は、それを避けきれないと知ってわずかたじろいだだけだった。ほとんどなんの反応も見せないケイスに、木剣は触れる寸前で動きを止めた。この、攻撃を前にして微動だにしない様子はただの防衛本能の欠如とベネディクトは見なした。これではだめだ。木剣を少年の目の前からどかすと、挑発するように少年の木剣を自分のそれで叩く。かん、と乾いた音が出てくるが、ケイスは自分の木剣に与えられた攻撃を受け止めきれず、腕を下ろしていた。

追い討ちをかけるように、伯爵は木剣をもってケイスの木剣の先

を地面にのめりこませようとする。それをそっくりそのまま受けて、少年は手の中から落ちそうになる木剣から手を放さないようにするので精一杯だった。ほとんど杖のように木剣をついて、やっとベネディクトを見上げる。何をするのだと、何も分かっていない顔の子どもに、ベネディクトは蒼い瞳を向けた。子どもに向けるには冷え切った目だ。だが、その奥底に眠るのはただの冷ややかな感情ではない。それを知る人間はないのだけれど。

「構えろ」

ただ唯々諾々とその声に従い、少年は切っ先は下げたまま腕を持ち上げる。稽古場に居るからには、剣術の稽古をつけるというつもりなのだろうが、エルザにはとてもそうは見えなかった。主人のベネディクト伯は一体どういうつもりなのか、彼女には合点がいかない。エルザはただならぬ様子の伯爵に、彼らの後を追う事にした。主を追うべきか自分の仕事に戻るべきか逡巡していた様子のフランツを連れて。

ケイスは何も分かっていない。剣術の何たるかを、の以前にベネディクトが稽古をつけようとしているのだという事すら理解出来ていないだろうに、それでも伯爵は木剣をもって彼に対峙する。何故なのだろう。エルザには伯爵の目指すところがさっぱり読めなかった。フランツあたりにそこのところを説明してもらいたかったけれど、この初老の執事は顎髭を撫でるだけで稽古ともいえぬそれをただ見つめていた。

かん、かん、と幾度か木剣がぶつかり合う音が広がったが、稽古は一方的なものだった。木剣とはいえその先端がケイスの体を傷つけるのではないかと気をもんでいたエルザは、一際大きな音をたててケイスの木剣が飛んでいったのを見て、大きく目を見開いた。試合なら一本とられた、というところになっただろうか。エルザが世話する少年を見るとぽかんと口を開けていた。

自分に起こった事が分からず、ただただ痺れる手がひどく現実的に思えて、ケイスは手の中を見つめた。何もなくて、先ほどまで収

まっていた木剣の事も思い出せないけれど、それでも手の震えだけはよく分かった。地面に足で立っている気がした。

「もう一度だ」

落とした木剣を拾えと言外に告げ、ベネディクトはまた構えた。さまよわせた視線が、地面に転がった木剣を捉えるとケイスは黙ってそこへ向かった。なんとなくそうした方がいいと思えて。それから拾ったそれをたどたどしい手つきで持ち上げる。

正面にベネディクト伯が立った時に、言い知れぬ、押さえつけられるような空気を肌に感じた。ほとんど恐怖にも近いそれを覚えた時、少年の背筋がわずか伸びた。静かに、鼓動が早くなる。痺れていた手が徐々にほぐれていくが、今度は木剣がずっと重く感じた。

伯爵がほんのわずか、目を細めたのだがそれは非常に僅差だったので本人すらそれに気づいていなかっただろう。子どもの両の目が自分を真正面から迎え撃とうとしているのが、どれほどのものを伯爵にもたらしたのか、彼自身も知らないのだから。

この時から、ケイスは養い親に剣術の稽古をつけてもらうようになった。

† † †

ケイスが王立フォルクマール学園にて引き起こした事件は、実は生徒たちの間ではひそかな噂になっていた。階段から転落した次の日、ケイスは学園を休んだ。それから、ルッツ・アルブレヒツベルガーとテオ・ダンケン、オスカー・ベルクマンの三名の生徒も同じくして欠席した。同じクラスの生徒たちはすぐに察した。いじめっ子といじめられっ子の間にお互い休んでしまうほどの何かがあったのだと、ただならぬ気配を感じたのだ。クラスメイトたちはずっとルッツのする事を見て見ぬ振りをしていたが、彼のいない間なら彼らは噂好きでガキ大将の嫌いな、普通の子どもらしくなった。家名を振りかざすアルブレヒツベルガーの息子がいなければ、少しは家名を気にしない振る舞いも出来るのだ。

話し手の中心となったのはエーファとその友人だ。彼女たちは一部の事情を知っており、ケイスが倒れていた事を話すと、よっぽどひどい怪我を負わせたのでばつが悪くてルッツたちいじめっ子は授業を休んだのだと簡単に推測出来た。これまでに貴族の名前を恐れてケイスを無視していた子どもたちも、さすがに彼に同情した。とはいえ、ケイスが登校してきたら優しく迎えてやろうというほどにはならなかったが。

そしてついに、両方の出席がかない、ケイスとルッツの対決が見られる、とクラス中が思った時、意外にもどちらも普段と変わらないように見えた。加害者であるルッツは悪びれもせずにクラスのリーダーを気取る。ケイスは相変わらず誰かと話そうとも関わりを持とうともしない。ただルッツが積極的にケイスに近づいていたこれまでを思えば、消極的になっていると見えた。驚いたのはエーファがケイスに挨拶をした事だ。彼女は事件の一端を知っていたが、貴族でもあるので彼女が平民の息子に声をかけるなんてクラス中の誰もが思っていなかった。ケイスのいじめがクラスメイトに素通りされたのも、貴族の子どもが平民に声をかけるなんて出来ないという心情の表れでもあったからだ。

「具合、大丈夫？」

「うん」
それだけだったが、クラスメイトたちはまるではじめてケイスがしゃべったのを見たみたいに、あんぐりと口を開けたのだ。エーファは気絶したケイスを見ている。さすがに心配だったのだ。本人の返事と元気に登校してきた様子に満足すると、これ以上自分に関係のある事はないとばかりに自分の席に戻ったが、それでもエーファの及ぼした効果は教室ないに大きく広がった。エーファを憎からず思っているルッツにいたっては、ケイスを取って捕まえようとするかのごとく形相を歪めたが、それでも彼は何もしなかった。いじめっ子逆上の様相をとった後、黙って引き下がる。これはかつてない大事件だ。クラスの生徒は隣りの生徒と顔を見合わせた。
だが、ルッツのケイス嫌いはなくなったわけではなかった。今までなら、ケイスにぶつかって「おっとごめんよ、存在してるのに気づかなくてな」などと嫌味をたっぷり言ってやるのが常だったが、意図的にケイスにぶつかっていき何も言わずに去るだけになったのだ。ケイスには寡黙に対応するだけになったかのようだ。
ケイス落下事件のほとぼとりが冷めたかのように思われた頃、ルッツは息を吹き返した。これまでのようにとりあえず罵って暴行を加えるのではなく、ケイスの持ち物を隠す事にしたのだ。ルッツが彼を困らせたいのは変わらない。教科書や運動靴をどこかへ持って行った。
「ルブラン、教科書はどうした」
数学の教師はなかなか手厳しい教育者だったので、すぐに生徒の不備に注意した。自分の椅子から立たされたケイスは答える。
「忘れました」
じろりと忘れ物をした生徒を睨む数学教師。まるでケイスが戦場において致命的なミスを犯したかのように咎める目だ。ルッツは内心ほくそ笑む。
あの日、ケイスを突き飛ばした瞬間にその先に壁がないのを知らなくて、ルッツは青ざめたものだ。ごろごろと転がり落ちていった

ケイスは見た目には瀕死の重傷を負ったかのように見えて、ルッツはすぐにその場から逃げ出した。翌日になっても学園に行くような気分になれず、ほとぼとりが冷めるまで身をひそめようと思った。自分がしでかした事はよく分かっている。罪悪感はあった。だが、久しぶりに学園に登校してみたら、どうだろう。平静を装ってはいたがルッツはケイスがいつ自分の非を咎めるかと気が気じゃなかった。学園には既にルッツがケイスを突き飛ばしたとの噂が飛び交っているのではないかと危惧していたが、それでも表面上にはそんな噂は存在しないように見えていた。だが、生徒たちはルッツが何かしでかしたのは分かっていて、責めはしないけれど常のようにアルブレヒツベルガーの息子に取り入ろうとはしなかった。かといって、挨拶を忘れるようなものではなかったけれど。これで、想像していたよりはマトモな学校生活が送れそうだと思ったルッツはかつての自信を取り戻した。

が、エーファの行動ときたら何だ？　ケイスの事を心配するような素振り。ケイスを無視しようと思いかけたルッツの怒りをあおったのはそれだ。だが、真正面からケイスをどうにかするつもりはなかった。直接的な手は避けたい。その結果打ち出した計画がケイスの私物を奪うというものだった。奪った物は焼却炉に捨てた。数学の教師は自他共に厳しい人間で、だからこそ数学の教科書は奪い甲斐があった。

ケイスの事情を知るルッツの取り巻きの二人が、不安そうにルッツとケイスを交互に見ていた。なんとはなしに、奇妙な空気が流れているのを生徒たちだけは感じていた。数学教師は授業の準備を怠った生徒を処罰すべしと判断した。

「そのまま立っていなさい」

聞くなり、ルッツの顔は愉悦に歪んだが、横目で見たケイスの顔が望むものとは異なり、苛立ちを覚えた。困った事など何もない、授業中ずっと立たされる事になってもそれはケイスとは何の関係もないのだ、といわんばかりの顔だ。ルッツはうろたえ困惑した、不

安そうな顔を見たいのに。

結局ケイスは余分な宿題も与えられたけれど、気にした様子はなかった。自分の教科書がなくなったのは忘れたからではないとよく分かっているはずなのに、平然として。

次の授業は体育で、運動靴のないケイスが校庭に履いてきた上品な革靴は運動には不似合いだ。体育の教師がそれを見咎める事はなかったのだが、動きにくい事この上ない。この日の体育は、丸いボールを線の向こうへと蹴り飛ばして点数を競う球技で、ケイスはルッツの敵チームになって彼の妨害を受けた。

立ちはだかる影に、ケイスはそれが誰かを認識していなかった。特に気にせず、球技を続けるつもりでいたが、明らかに反則と思われる手でケイスを突き飛ばす。尻餅をついたケイスは失笑を投げられた。他の男子生徒たちも、無様に転んだ姿が滑稽に見えて彼を小さく笑っていた。それがルッツにはよろこばしく、今回は上手く行ったと満足する。これで球技に紛れた嫌がらせにとどめを刺すような事はしたくない。直接手を下すほどにはなれないのだ。

立ち上がったケイスは膝小僧を叩くと首を回してボールを捜した。まるでルッツなど眼中にないかのように。これは、今までのケイスの対応とはやや異なったものだったのでルッツは彼を凝視した。これまでのケイスはルッツの前に立った時には自分を小さく見せようとする。存在しないように振る舞い、ルッツをやり過ごす事だけに意識を集中させているようだったのだが、今は違う。球技に集中している。ルッツなど居ないと思っているかのように、気にしていない。

駆けていったケイスを見るルッツは、戸惑いを隠せない表情をしていた。彼は、ルッツを気にしていないどころか、すがすがしい顔をしていなかったか？　まさかとは思うのだが、ほぼそれに近い顔をしていたのは脳裏から消せなくて、ルッツは顔の中心にぎゅっとしわを集めた。

ケイスが学園に復帰してから、伯爵に時間さえあれば木剣を渡された。屋敷には他にも剣を扱えるものがいたが、自分から剣術の稽古を望んでいるわけではないので、ケイスが彼らに教えを請うような事はなかった。最初こそ、ケイスはベネディクトの剣を避けるので精一杯、そもそも稽古を受けているという自覚すらなかった。

「脇をしめろ」

だが、この稽古を受けている間は、不思議と頭の中がすっきりとしていくのが分かった。たとえば、泥棒に荒らされた部屋の中、散乱する物品の数々、荒れ放題のその部屋が、引っ越す前の無人の何も置かれていない部屋のようになっていくのだ。すべてなくなるわけではないし、雑念が掠めないわけではない。ただ、ベネディクトの木剣を避け、彼の視線の先を読んで自分の行くべき場所を決定していると、全て遠くへ行ってくれる。これが少し、気持ちよかった。

更に、伯爵は子どもに対しても容赦のない人間だったが、こと剣術についてはそれが更に増すようだった。特に、自分のいない間に怠けていると食事を抜きにするなどの罰を与えたり、やる気がないのを見咎めると素振りを何千回と繰り返させたりした。食事抜きが特にこの子どもを苦しませたが、かつてゾンネでは毎日空腹の日々を送ってもいたから、耐えられないほどではなかった。時々、侍女のエルザが食事抜きを見かねて差し入れしてくれるのも何とか耐えられた原因の一つだろう。

ベネディクトは剣術の基本を教えているのだろうが、それを受けているという自覚はケイスにはなく、だがある日気づいた事に、この屋敷の主が誰で、ベネディクトが誰を引き取ったのか、分かるような気がした。振るったのは木剣でも、知ったのはそれ以外の何か

だった。蒼い瞳が自分を見ているのを知ると、ケイスは体の真ん中にある針金のようなものを意識するのだ。それを真っ直ぐに伸ばしていると、きちんと歩けるような気がする。立っていられる気がする。自分が二本の腕と二本の足、頭や目や鼻や口を持っている事を思い出せる。稽古を続けるうちに息が乱れ、自分の呼吸器の存在を知る。疲れた足が悲鳴を上げて、これまでそれで立っていた事を思い出す。いつしかケイスのエメラルドの瞳は、人を視界に入れる事が出来るようになっていた。

「足が動いていないぞ」

手の中ばかりに意識を集中させていて足元がおろそかになっていたようだ。ベネディクトの声でそちらに視線を移すと、狙い済ましたように伯爵の木剣がケイスのそれを打つ。手中から消えた木剣に、少年はぼんやりと飛んでいった、と思った。

「意識を散漫にさせない」

彼に注意された場所を直そうとしたのに、ケイスはベネディクトを見上げる。直せといわれた場所を直すべきではないのか、という瞳にも構わず、伯爵は顎でケイスの木剣を示した。

「もう一度だ」

ケイスがよっぽどの疲労を見せない限り、伯爵の稽古に休憩は存在しない。仕方がなしにケイスが稽古道具を取りに行くと、汗ひとつかいた様子のないベネディクトが静かに立っていた。背の高い人だな、と少年は思った。

† † †

春が来て、城下はすっかりうかれ模様だった。復活祭がやってきて、お祭りのムードは暖気のこもった風と共に王都を華やいだものにした。

ゾンネ町の少年が十歳になり、ベネディクト伯爵の家にやってきてから二月がたった。彼が屋敷にやってきたばかりの頃を思えば、ケイスはすっかり子どもらしく振る舞うようになっていた。それに侍女のエルザが気づいたのは彼が自分の誕生日を明らかにしてくれた時だ。自分の事を何も語らない少年が、ある日「今日で十歳になる」と教えてくれた。エルザは最初その変化にも気づかずめでたい事だと手を合わせたけれど、少年が頬を持ち上げて笑ったのを見て目を丸くした。

一日一日と、目を見張っていなければ気がつけなかっただろう些細な事で、少しずつ少年は生きる力を取り戻していった。それこそ花のほころぶのを見守るように、ちゃんと見ていなければ分からないだろう小さな変化ばかりだったが、復活祭の頃にはエルザの名前まで覚えていて、彼女は思わず目頭が熱くなったものだった。

元より几帳面なのか、根が真面目なのか、あちこち走り回って物を壊し悪戯をするというような子どもらしさはほとんど見られなかったが、我が子を失った母親のような悄然とした様子は見られなくなった。

「お坊ちゃま、今日はどちらへ？」

「うん、祭りの後を見に行くよ」

昨日で復活祭は終わった。エルザと祭りの中心であるデアデス広場に行ったばかりだが、まだ城下町に行きたいらしい。同じ場所に何度行っても飽きないのは子どもの特権だと思っているエルザは今

回は同行を遠慮した。そうして、ぱっと飛び出して行く姿を見れば本当に彼は十歳の子どもなのだと実感する。これまではそう思えないくらいだったので、エルザにとってはよろこばしい事だ。

あれから、階段転落の事件からケイスの学園での扱いはどうなったのかエルザは知らない。だが、まるで普通の子どもみたいに振る舞う様子からきっといじめはなくなったのではないかと思うのだ。エルザには自分の仕事があるから、剣術を習うケイスの様子を見に行く事などほとんどない。だが、その日の夕方、偶然に通りかかった窓の下に、稽古場が見えてエルザは足を止めた。ベネディクトとケイスが見える。ケイスが屋敷に来てしばらくの伯爵の様子からは、彼がケイスを養子にするつもりが本当にあるのかどうか疑わしく思ったものだが、どうやら今は違うらしい。

背後に人の気配を感じてエルザが振り返ると、そこには初老の執事が立っていた。ただの通りすがりだろうが、彼も窓の外に興味を持ったのか足取りがゆっくりとしたものになる。エルザは思わず声をかけていた。

「旦那様は、気がついておられたのでしょうか」

ケイスに対する学園でのいじめについてだ。それで、あの剣術の稽古だったのではないかとエルザは推理したのだが、返事はなかなか返ってこなかった。いじめっ子に復讐をさせようというのではないと分かるが、それに近い、我が身を守るために剣術を教えようとしたのではと彼女は感じている。フランツと話した、いじめについてベネディクトに伝えるという点も結局はなかった事になった。

これまでに執事のフランツとは気軽な会話をするような間柄ではなかった。年も親子ほど離れているし、共通の話題などなかった。ケイスの件がなければそのまま同じ職場でも関わりのあまりない執事と侍女として暮らしていただろう、ケイスの事で案じる必要のなくなった今、それを思い出せと言うのだろうか。エルザは少しだけ寂しく思った。ケイスを介して仲良くなったとは思わないが、フランツと少しでも交流を持てた事は悪くなかったと思っているのに。

「どうでしょうな。旦那様は元よりあのお子に剣術で鍛錬させる心積もりをお持ちのようでしたので」

侍女が返事を諦めかけた頃、執事は答えた。

「なれど、旦那様は聡(さと)いお方でいらっしゃいます。理解していたとておかしくないでしょう」

エルザが見上げたその先に、何か眩しいものを見るような目を細めたフランツがいて、まるで微笑を浮かべているようだと思った。すぐになくなってしまうほど一瞬の事ではあったが。だから、エルザには驚いている暇もなかったのだ。

71　王都の少年5

王都で三回目の春を向かえ、ケイスはフォルクマール学園上級学年に進級した。下級学年の頃のクラスメイトともお別れをし、ナナカマドの花が全て散る頃、新しい学年、新しいクラスでの学園生活がはじまった。秋から始まる新年度、進級式を受けた生徒たちはそれぞれ自分の新しい教室へと向かっていた。

ケイスは十三歳になった。ルブランの屋敷に来てからの生活は変わらない。学園にて勉学に励み、屋敷では剣術の稽古を受ける。ゾンネで貧しい生活をしていた頃と比べれば食生活も変わったし、育ち盛りの年頃だ、ケイスの背丈はなかなか順調に伸びていた。手足の伸びの他に、声のかすれが声変わりを教えていて、戸惑いながらも日々着実に身体の成長を実感している。

最近では、貴族の息子としての自覚も芽生えていた。というより貴族の息子としての教育を授けられているがゆえに、と言った方がいいかもしれない。家庭教師というものがやってきて、貴族社会で生きて行く術を見に着けさせられている。とはいえ完璧な紳士になるための作法をみっちりと叩き込まれるほどではなく、平民出であるケイスが貴族令息として遜色のないように振る舞う最低限のそれを教えられているだけだった。ルブラン伯爵家は代々、大半が武人として王家に仕えてきた騎士の家系だ、優先すべきは武術とベネディクトが考えているのは明らかだったが、しかし貴族としての当然の作法も知らねばならないと思っているようだ。

この頃でも、ケイスにベネディクト伯が自分の養い親だという認識はなかったが、貴族の息子として過ごす事の意味が分かるようになっていた。学園では年を重ねるごとに親の派閥争いに近い派を子どもたちも作り、親のおもねる相手の息子に付き従うようになった。それをケイスは最初こそは下らないものだと見なしていたが、それでも彼らの事情に波風立てるような事はするまいと思うようにはな

った。ベネディクトには特に貴族間の事情を告げられた事はないが、彼の迷惑になる事はしたくなかった。

そうして英才教育をほどこされてきたケイスだが、ベネディクトと同じように騎士になれと言われた事は一度もなく、剣術を教えたのはそのためだとなどは思えないくらいにケイスの将来に触れてはこない。ルブラン伯爵は、伯爵の地位を持ってはいるが、王宮での地位は低い、歴史があるだけの武人の家だ。それでも所有する土地はいくらかあり、働かなくて済むほどではないがケイスがどんな職業に就いても貧困にあえぐような事はない。学者を目指す貴族もいるし、王宮で高官を目指すものもいる。あえてこれとベネディクトは言わなかったが、どんな道も開けているとケイスには言ってあった。

進級をして、少しずつ将来について考えるようになったのだが、ケイスには未だに貴族の世界で生きて行く自信がなかった。まだ学園の中で暮らしているのと同じ、これから学園を出たら違う世界で生きていかねばならないだろうが、その時の自分を上手く思い描けない。ずっと学園に居られたら、と思うわけではないのだが、どうしても働く自分を想像出来ないでいた。というより、まだ身近な存在として認識出来ないのかもしれない。まだ上級学年は五年あるし、卒業試験にも励まねばならない。これからの五年間を大事にしなくてはならないのだが、先ほど進級式では学園長に進路について考えるべき時が来たと告げられ、ケイスはやっと考えるべき事を思い出していたのだ。

意識を他所に向けて歩いていたため廊下の角を曲がる直前に、ケイスの目の前に立ちふさがる影にすぐには気がつけなかった。

「悪い」

あちらも突然の事に対応しきれなかったのだろう、ぶつかった相手は先に謝ってきた。こちらこそ注意力散漫で、言おうとしたケイスは相手が続けた言葉に遮られた。

「ケイス・ルブランか」

相手はケイスと同じ年くらいの少年で、背はケイスより少し低い。櫛で梳けば頭に沿ったくらいの長さを持つケイスの髪とは違い、その少年の明るい茶色の髪は非常に短く刈り込んだようだった。顔つきは骨ばっていて精悍としている。目尻が少し持ち上がった、黒い瞳がケイスを観察するように見ているので、彼は何の噂を聞いてケイスの名前を知ったのか疑問になった。それに相手をじろじろと見るのは不躾なはずだ。名のりもせずに、彼だけはケイスの名前を知っている。

「何か用でも?」

「いや。噂の人物に会ったなあと思って」

「名だけ貴族とかっていう話なら、聞き飽きたよ」

常にケイスに向かってくる言葉は、名ばかりの貴族令息という嘲りに近いそれ。皮肉った物言いは好きではないが、ケイスは本当にその反応を見飽きていたのだ。やや顔をしかめたケイスに、相手は口の端を持ち上げて対応した。

「まさか、それだけで噂になってると思ってるのか、お前」

からかいを含んだ、しかしどこか距離を置くような笑みだ。ケイスは怪訝に眉を寄せる。編入以来ケイスがもらってきたのは、ルッツの嫌悪を筆頭に平民を馬鹿にする貴族の子どもたちの冷笑と無関心だ。庶民であっても、肩書きの怪しいケイスとは関わりを持たないようにと遠巻きにされていた。そういえば、ルッツという少年はいつの間にやらケイスに関心を払わないようになっていた。お互いに同じクラスに所属するだけの存在となっていたのだ。かといって、ケイスに特定の友人が出来た事はない。いじめはなくなったけれど、フォルクマール学園の中では扱いにくい人間と見なされ、交流を持ちたいと思われていないようなのだ。授業で二人組みやグループで行動しろと言われても嫌がる生徒はいないが、率先してケイスの元へとやってくるものはいない。そういえば、エーファという女子生徒ならごく稀に話しかけてはくるが、相手が異性なのと滅多に会話しないのとで、彼女の事を友人と見なせないでいた。

「有名人だぞ、お前」
対するこの刈り込んだ頭の少年の浮かべる表情や態度はこれまでのクラスメイトにはもらえなかった反応だ。必要最低限の会話しかしないクラスの面子を思い浮かべると、この少年のように相手への興味と、しかしどこか遠くからケイスを見ているような不思議な瞳を向けてきたものはいなかった。
「有名人？」
「自覚ないのか。っていうか、普通学園居ればなんか聞くだろ」
相手の言っている事の意味がちっとも分からない。答えを求めようとしたら、始業のベルが鳴った。少年はケイスを置いて答えも残さずに踵を返した。自分のクラスに授業を受けに行くのだろう。中途半端な形で会話が終わってしまった事は気になったが、ケイスも上級学年になってからはじめての授業を受けに行く事にした。
教室に入ると、先ほどの少年も同じクラスなのだという事実が判明する。ちらとケイスを見た後、眉を持ち上げた。相手の意図がいまいちはかりかねる表情の変化だった。黙って席に着く少年に、ケイスも自分の指定された席へと向かった。
授業はケイスの好きな歴史だった。好きだとはいえ、先ほどの少年の言葉が気になって授業には少し集中しにくかった。ややつりあがり気味の黒い目で、少年はケイスを有名人だと言った。あれはどういう事だろう。確かに、編入当初は奇妙な噂ばかりが飛び交い、ケイスが問われるままに養子だと答えると今度はその事が槍玉に上がった。いつもケイスに付属する名詞は「名ばかり貴族」「もらわれっ子」というような出生に関わるものばかりだった。そうでないなら一体何が、そして有名人とはどういう事だろう。下級学年の頃に階段から落ちて、一時は噂になったものだが、精々クラスの中でが主だ。前後の記憶が少しあやふやだが、ケイスは当然あの頃、ルッツに階段に突き落とされたのを覚えている。今となってはどうでもいい事だが、あれは故意ではなかっただろうしひどい怪我もしていないので気にはしてない。というより、あの頃のケイスは全てど

うでもよかった。そして、いつしか興味が他のもの――剣術や勉強に移っていくと、気にもならなくなったのだが、今思うといじめられていたのだ。それもひどく。全て過去のものとなった今はどうだってよいが、そう、あの頃は確かにひ弱な貴族の養子が噂になるのも無理はなかった。

今はどうだ、ケイスはいじめのターゲットにもされていないし、友人もいない、ごく平凡に生きているはずなのだ。貴族の子どもの世界はもっと派手で、奇抜な事が話題になる。ケイスなんて見向きもされない存在のはずだ。彼が日常的にやっている事といえば、時間通りの登校に、ごく真面目に授業を受ける事、課外活動はせずに帰宅して、一人で木剣を振るうか伯爵に稽古をつけてもらうかする、くらいなものだ。最近ではベネディクト伯も稽古に時間をさいてくれる時間が減ったが、一人でもする事はある。城下を歩く事も減ったが、たまに思い出したように飛び出していく。妹の事は忘れてはいない。諦めてもいないのだが、もう王都にはいないと分かっていた。だから時々、王都の端の壁まで行って塔に登ってしまう。王都を囲むのは高い壁で、外敵の侵入を阻むためのものだ。敵襲を見張るために塔が等間隔で存在する。その塔にのぼって見える風景は褐色の大地に黄色い草、緑の木々や遠くの山ばかり。それでもそうやって高いところにいるのはどこかしら落ち着ける。

そんな若干の不審者的な行動がむしろケイスを有名人たらしめているのかもと思っていたら、教師から指名がかかった。慌てて顔を上げると、歴史教師を含めクラスの大半がケイスに視線を向けていた。

「ルブラン君、答えなさい」

「えっと、すいません、質問をもう一度」

全く授業を聞いていなかったケイスは、何の話をしていたのか見当もつかなかった。初回の授業でさえなければ前回の授業がどこで終わったかで判断材料が増えていただろうがそうもいかない。呆れ顔の教師に、申し訳なく思っていると少し離れた場所から声がした。

「寡頭政治による権力集中を防ぐためです。二回に渡る投票によって元首を決めても二年の任期しか与えられず、また投票を行い多数決で票が集まれば罷免する事が出来ます」

声の主の元へ首を回すと、先ほどケイスを有名人扱いした少年が立っていた。指名されてもいないのにケイスの代わりに質問の答えを口にしているのだ。何故だろう。どこか挑発的な瞳は、それと受け取っていいのだろうか。

「よろしい、レーネヴァル君。友達をかばおうとする姿勢は素晴らしいですが、あなたには質問をしていませんよ」

結局、その教師は生徒を褒めているのかたしなめているのかよく分からなかった。というのに、今度こそ勝ち誇ったような少年の笑み、ケイスは眉を寄せた。彼が“友達をかばおうとする姿勢”をとったのではない事はよく分かる。ケイスとあの――レーネヴァルとかいう名の少年は今日が初対面だ。クラスが同じだという事も知らなかった。だから彼にケイスをかばうようないわれはない。だとしたらどういうつもりであしてケイスの代わりを勤めたのか。意味深な笑みを見れば、親切心からケイスを助けようとしたのではないと、いくらお人好しのケイスでも分かる。とはいえ、人のたくらみなどさっぱり分からないケイスは、やっぱり首を振るしかないのだった。分からない、というしかない。ただなんとなく、あんまりいい感じはしないな、とだけ思う。嫌なのではなく、居心地が悪いとでもいえばいいのか。レーネヴァル氏が気になりながらも、今度こそは授業に集中しようとケイスは真っ直ぐ黒板を向いた。

古語の授業は早速のグループワークだった。古語教師は初老になりかけの婦人で、はじまったばかりの上級学年のクラスメイトとの交流の場を作る意味も持たせていたのかもしれない。確かにグループワークは協力してするもので、相手の名前も自然と覚えるように

なる。図書室に集められた生徒はグループ分けをさせられた。そこでケイスは偶然にも、またあのレーネヴァル氏と同じグループになる事になった。グループは五人で、課題は一つの古語とそれについて関わる歴史上の人物についてまとめ、各自考察を述べるというものだった。

「俺、ハウスト」

唐突に単語。それが固有名詞だとはすぐには分からなくて、ケイスは刈った短い頭の少年を目をこらして見つめた。

「お前が聞きたがってると思って」

「お前お前って、ぼくにはケイスっていう名前があるんだけど」

さすがにむっとしてケイスは反論する。どうにもこのハウスト少年は馴れ馴れしい。ケイスは平民の出であるし、別段呼び捨てにされるのもお前と呼ばれるのも構わないが、名前を覚えられていないようで嫌だった。

「優等生、意外に言うな」

にっと笑ったハウストの歯は白く、ケイスよりも焼けた肌によく映える。この少年はケイスなんかよりも健康そうで、溌剌としていた。それから、発言の意図がよく分からない。

「優等生？」

「そうそう。有名人の理由の一つ。真面目で、勉強が好きな優等生。フォルクマール（うち）にはそうはいないぜ？」

フォルクマール学園は卒業試験の厳しい学校だ、勉強嫌いがずっと在籍していられるような場所ではない、とはいえ誰もが皆勉強好きにはなれないのだ。成績優秀者であっても勉強が好きなものはそうはいない。

「それから、もう一つの理由は某貴族を打ちのめしたってやつ」

それには心当たりがない。が、本人のあずかり知らぬところでケイスは精神的に某貴族――ルッツ・アルブレヒツベルガーを打ちのめした事があった。というより、この時点でケイスは疑問になっていたのだが古語の課題はしなくてよいのだろうか。図書室にわざわ

ざ来たのは、数多くある図書により調べ物をして課題を完遂させるのが目的のはず。いくらかの私語は許されても、話が課題に関係ない事であればあまりよい事だとは言えないのではないか。などと心配していてもハウストは構わず続ける。

「あとなんだ、わりと女子に人気だろ」

「はあ」

そんな話は聞いた事がない。女子に人気とは、一体どういう事か、いまいち理解しかねる。そんなケイスの生返事を呆れたようにして目をすがめるハウスト。途中から無意味な指折りをして数えていたが、他に何があったかと思い出そうとして、最後だったと口の端を持ち上げる。

「お前、剣術が仕えるんだって？」

確信したものの笑みだ。ケイスはふいを突かれて驚いた顔をすればいいのか、怒った素振りを見せればいいのか分からなくなった。別に怒る必要はないだろうが、なんとはなしに相手の訳知り顔には良い気がしない。

「だったら、どうなの」

「別に。本当だったら面白いな、と思って」

「面白い？　ぼくが剣術やってたって面白いことは特に何もないと思う」

本人は最近やっと剣術の楽しさを覚えた頃だったが、それは他人のハウストには関係のない事のはずだ。そもそもケイスの思いなど彼が知るはずもない。

「それが、あるんだな。上級学年になると、体育の授業で剣術もするんだぜ。どうせ貴族の坊ちゃんたちにはロクな使い手がいねえ」

「そうなの？」

「だから、お前は違ったらいいなと思ってさ」

自分も貴族の息子ではあるから、ケイスは使えない人間と思われているのか、と気づいた後の言葉だった。最初、ケイスは貴族令息に剣術の腕がない事の真偽について疑問に思い、「そうなの？」と

言ったものだが、次に自分が含まれているのなら、それは相手が侮辱したのではと思ったのだ。だがそうではないらしい。どういう事だろう。

「……つまり？」

まったくもって勘の鈍い少年に、ハウストはどこかうんざりしたように目を細めた。

「体育の授業が楽しみだなってことだよ」

やっぱりケイスには全然分からなかった。

71　王都の少年5（後書き）

やっとハウスト君の登場です。
最初の方に出て以来、過去話とはいえ久しぶりの登場で…
覚えてもらえていたでしょうか。
正直書いた人も忘れかけていました（笑）↑ひどい

72　王都の少年6

体育の授業はいきなりの剣術だった。体育の現場である校庭に集められてそれを知り、話が早い、ハウストはそう思った。ハウストは貴族の息子ではない。とはいえただの庶民、職人や下働きの子どもでもなくそこそこ実入りのいい商人の息子だった。地位はないので、やはり平民ではあったが金を持っている親の息子でもあったので進める道は多くあった。商人であるというのに父親はまるで農夫のような豪快さと腕力を持っていた。それゆえだろうか、ハウストもある意味奔放に育った。のぞめば大抵のものは手に入る環境に育っておきながら、驕る事なく、比較的真っ当に成長した。最近は身長が思うより伸びないので歯噛みしているが、身体的な事はともかく、若干ひねくれものの多い貴族たちのフォルクマール学園においては、性格的にはまだ悪くない方じゃないかと、自分でも思っていた。

そうやって、貴族令息令嬢たちを低くは見ずとも、どこか距離を置いて見ていたためだろうか、つきあいの浅い友人しか出来なかった。クラスが変われば交流も減るような、そんなつきあいしかしてこなかった。それはまあ、いい。ハウストは普段実家に出入りする大人たちに混じって育ってきたためか、人間関係に対しては少しシビアな目線で見る事が出来、ドライな関係というのにも理解を示せる人間だった。友人がいなくてうれしいわけではないが、まあ表面だけのつきあいならなくても変わりはないと思っているのだ。

上級学年になってからは、もう少し趣味のあう友人が欲しいと思っていた。たとえば剣術の使い手であるとか、そういった人間を。出来れば鳥類の観察が好きな友人もほしかったが、以前口にしたら「女みてえ」という感想がもらえたので今後は黙っておく事にした。そんな時に耳に入ってきた噂は、優等生の真面目くん、ケイス・ルブラン生徒が剣術を使うという話。これは、真実かどうか確かめる

価値があると思ったのだ。
　ケイスの第一印象は、とぼけた貴族の坊ちゃん。養子で、しかも元は平民である事は知っていたが思っていたよりもはっきりと物を言うが、どうにもとぼけた印象がぬぐえない。その後の図書室での会話でもそうだった。全体的に世の中の動きに鈍いような感じがした。成績はよくとも、人の噂に疎いタイプは、どこにでもいる。そういう一種の才能と、世間慣れの問題には因果関係がないようだ。
　とにかくハウストは早くケイスとの手合わせがしたいと思っていたのだが、体育の授業がはじまってすぐに、授業内容は剣術だと知れた。ハウストにとっては都合がよい。舌なめずりをしたいくらいだ。にやにやとしてしまうのを少し遠慮した方がいいだろう。そうしてハウストは二人一組になれと言われてすぐにケイスの元へと向かった。

　ケイスは当然のようにやってきたハウスト・レーネヴァルの様子に訝しくなった。彼は自分に何か恨みでもあるのだろうか。そういえば、昔ルッツ・アルブレヒツベルガーには体育の授業を装った嫌がらせをされた気がする。その類のものか、ケイスはいささか警戒する。
「はじめ！」
　とりあえず腕を動かして感覚だけ掴め、という体育教師の放任主義もいいところな命令に従った生徒たちは、普通であれば戸惑ったはずだ。だが、ケイスの元にやってきた少年の黒い瞳が鋭くなったのを見て、ケイスは疑念や不満を消し去った。ハウストの木剣の構え方は素人のものではない。ベネディクトの用意したものとは木材が異なるのだろう、普段の練習用の剣よりも軽い学園支給のおもちゃの剣は軽く、同じものをハウストも持っているはずなのに、ケイスはいつしか相手に緊張している自分を知った。もちろん、あの百

戦錬磨のベネディクトの比ではないが、そんじょそこらのチンピラよりは使えるはずだ。軽い気持ちで対応したら怪我をしかねない。

ケイスの左斜め上から切り下げてくる木剣を、木の刃で受ける。自分より背が低い相手だからと油断したが、ハウストは力が強い。堪えきれなくてはじき返すようにして一歩下がる。防御に転じるケイスに切りつけるハウストは容赦なく敵を追いつめようとする。ケイスの手には早くも汗がにじんできた。一太刀受けるごとに、相手の剣術が少しずつ分かるようになる。いつも比較対象はベネディクト伯爵だが、伯爵よりも太刀筋は荒い。伯爵のそれは、何千何万と繰り返された素振りの元に作り上げられたお手本のようなものだ。彼は戦場（いくさば）にも立った人間、元副騎士団長なのだから、十三の子どもと比べるのはご無体な事。とはいえケイスも同じ十三歳のただの子ども。ケイスとハウストだったらいい勝負なのだ。だが、相手がどれだけの人間と手合わせをし、師と仰いでいるかは知らないが、ケイスの師はあのベネディクト伯なのだ。彼の強さを思えば、こんな少年はわけもない。と、言えるほどにケイスに腕があればいいのだが、師匠の強さと弟子の腕はまた別の話。

普段使用する木剣より軽いそれにケイスは慣れないでいた。そういえば伸びた前髪をまだ切ってもらっていない。ゴールデンオリーブが視界の邪魔をする。

ごちゃごちゃ考えているうちに、わき腹に確かな感覚が押し付けられた。通りすがりの体育教師に敗北を宣言される。

「レーネヴァルが一本、だな」

ケイスの負け。ハウストが得意そうに教師を振り返る。

「剣術は、何年やってるんだ？」

「足かけ六年です」

ケイスはまだ四年だ。なんとなく負けた気がして、いや勝負には一度負けているのだけれど、圧倒的な力の差はなかったはずなのにと、ハウストに食ってかかる。

「もう一回！」

言うと、ハウストはにやりと笑って対応した。体育教師が子どもの成長を見守るような目で何度か首を縦に振ると、しばらく彼らの手合わせを見てから他の生徒のところへと去っていった。

今度は負けるつもりはなかった。ケイスは余計な考えを捨てた。ベネディクトに稽古をつけてもらった当初は、頭の中がすっきりするのが好きで稽古を続けていたではないか。煩悩は断ち切るに限る。ただひたすらにハウストの目線や手足の動きを追った。その他何でも彼の情報は見逃さないよう気をつける。汗は木剣の柄と馴染んで、むしろケイスはこの軽い剣の事が好きになれそうだった。

木剣の根元近くでハウストの太刀を受け、ぐいぐいと押されて行くのを感じる。最近は背も伸びたし、ケイス自身は腕力もついてきたと思っていたのだがそうではなかったらしい。とはいえ、今腕力をほしがっても仕方がない。わざと力を抜いて体を一度後退させると、ハウストの体の脇を目指して地を蹴った。緩んだ力にハウストは一瞬バランスを崩しかけ、たたらを踏む。敵の居どころを探そうとして、首筋に伸びてきたそれの存在を知る。

「ぼくの勝ちだね」

ハウストは肩をすくめた。木剣の切っ先を首の前に突きつけられては打つ手はない。負けを認めるしかなかった。この貴族の少年はなかなかやるようだ。しかも、意外にも負けず嫌い。相手がある程度の使い手であればそれでよかったが、これは授業が楽しくなりそうだ。

「ケイス、お前負けず嫌いだな」

言われて、虚を疲れたような顔をしたケイスだが、彼なりの勝ち誇ったような笑みで答える。

「そうかな。君こそそうなんじゃない、ハウスト」

「ははっ、違いねぇ」

そしてハウストはそれを証明するために、もう一度の手合わせを申し出た。いずれ授業が終わるまで、二人は幾度となく勝負を繰り返した。休み時間にはどちらの勝利が多かったかを口論するほどに、

何度も。

†　†　†

木々が衣を落として冬が来た。新しいクラス、新しい学年にも慣れてきた頃、ケイスはなんとなくハウストと一緒に居る事が多くなっていた。当初はそう頻繁でもなかったが、今では他に話す相手もいないしと、気がつけばいつもハウストと行動している。彼は、枯れ木とは対照的に初めて会った時よりも髪を長く伸ばしていた。といっても初対面の際があまりに髪が短すぎたというのだろうか。その話をすると、次のような返事が返ってきた。

「親父に刈られたんだよ。進級するなら心機一転しろとか言われて。元からそんなに短くねえから俺の髪」

というわけだ。今は、長すぎない程度に切りそろえられているケイスよりは短い程度の明るい茶髪がハウストだ。彼の髪は硬く、どうもケイスのように重力に従うような構造にはなっていないのが悩みだとか。ケイスは自分の髪のあまりの寝癖の立たなさ具合には常々疑問に思っていたのだが、特に気にした事はなく、人は髪の毛の質で悩んだりするのかと新たな発見をしていたりもした。

そんな他愛ない会話をしていると、ケイスを名指しするものに気

づく。何事かと首を回すと、どうやら教室の入り口にケイスを呼ぶ人間が他にいるらしいと伝えられる。その男子生徒には礼を言うと、ハウストを置いてケイスは教室入り口に向かう。そこに、見覚えはあるが隣りのクラスの女子生徒を見つける。下級学年の時にクラスメイトだったエーファだ。

「エーファ？」

あなたが呼んだのか、と問うように呼ぶと、エーファは上目遣いに彼を見た。昔は同じくらいの身長だったエーファも、育ち盛りのケイスは抜いてしまった。彼女は自分に用があるのではないかと返事を待つ。

「国語の教科書を忘れてしまったの、貸してくれない？」

「いいよ」

すぐに自分の机に戻ると教科書を手にとる。今日はケイスのクラスでは国語はない。ハウストがにまにましているのも知らずにケイスがエーファの元に戻ると、彼女は自分の巻き毛を指に巻きつけているところだった。退屈にさせてしまうほど待たせたかとケイスが慌てて口を開く。

「はい、これ。返すのはいつでもいいから」

「ありがとう」

言ってから、自分のクラスで国語がある時には必要だから、いつでもいいわけではないと思ったのだが、今更訂正は出来ない。エーファは、教科書を受け取るとすぐにはその場を離れなかった。まだ何か用があるのだろうかと気になったけど、ケイスもなんとなくそれを切り出せないでいた。エーファは、上級学年になってからこうして時々、ケイスに物を借りに来る。下級学年の頃に友人はいなかったと思っていたが、こうしてエーファが訪ねてくれると、ただ忘れ物を借りに来ただけだとは分かっていながらもうれしい気がしていた。異性間で友情が成立するのか、そもそも友情のなんたるかも知っているかあやしいケイスには理解しかねたけど、それでもクラスが違ってもつながりが切れないのは素直によろこばしい。だから、

エーファが用事だけ済ますと取って返すように帰ろうとしないのが、嫌ではなかった。

エーファが長いまつげの下で、何か言いたげにこちらを見ているので、ケイスは何かを言った方がいいように思うのだが、会話の糸口など見つけられない。どうしたらいいのか、悩んでいるうちに授業開始のベルが鳴る。ちょっと眉をしかめたエーファは、それでも「じゃあまたね」とだけ言い残し去って行った。なんとなく、惜しい事をしたような気分になるのは何故だろうか。ケイスも自分の席に戻る。次の授業は上級学年になってからはじまった天文学の授業だ。席につくと、斜め後ろの椅子に座るハウストが彼の肩をつつく。

「なあ、あの子って最近よくお前に物借りに来る子だよな」

「エーファのこと？　そうだよ」

「ふーん、それはそれは」

「……なにか、言いたいことがあるのかな」

ハウストの笑顔が全体的に怪しかった。まだ短い付き合いではあるが、こういう顔をハウストがしている時は、心の中でケイスが考えもしない事を企んでいるのだ。そして、今の笑みもなんとなく気に入らない。

「下級学年の時は一緒のクラスだっけ？」

「うん」

「ほっほー。それはそれは」

また、「それはそれは」を繰り返したハウスト、真意が相手に全く伝わらない言葉だと知らないのだろうか。ケイスの顔は不満に染まる。「何が言いたいんだ？」と。しばらくにやにや笑いが止まらなかったハウストだが、ふとある一つの可能性に気づいて、顔を真剣そうなものにする。

「ケイス、お前そのエーファって子がなんでそんなにいっぱい忘れ物するか、考えた事あるか？」

「エーファが？　そういえば、下級学年の頃はそうは見えなかったかも」

といっても、エーファに常に注意を払っていたわけではないから一概にはそう言えない。そこのところに悩みはじめるケイスを、ハウストは非常に残念そうにため息をつく。まるで誕生日に自分の好物の料理がテーブルに広がってなかった子どもみたいな顔だ。

「いいか、ケイス、よーく考えてみろ。あの子はやけに忘れ物をするじゃないか？　教科書ってそんなに忘れやすいものか？」

真剣、というより呆れた様子のハウストに、ケイスは首をかしげる。よく考えた方がいいのだろう。エーファが真面目な生徒だというのは分かる。だが、確かに少なくない数の忘れ物をしているのは彼女にしてはおかしいのかもしれない。とはいえケイスは何もエーファのスペシャリストではない。今ではクラスも違うし、何か事情が変わってしまったのかもしれない。もしかしたら、かつてのケイスのように教科書を隠されるという嫌がらせを受けているのではないか？　それはないか、エーファは女子の中でも人気がある方だし――もちろん友人が多い方だ、という意味で――ケイスと違って真っ当な貴族令嬢だ。性格が悪いようにも見えない、いじめの可能性はないだろう。だとしたら、エーファが忘れっぽくなってしまった理由は何だ？

ケイスが全くもって見当違いの思考を展開させているのが、ハウストには全て分かったわけではなかったが、どうも彼の望んだ答えから遠ざかっているようだというのは分かった。呆れてものも言えないが、一言申さねばならない事はある。おいお前、話逸れてるだろ、と。ところがそこへ天文学の老教師が遅ればせながらやってきたので、ケイスへの抗議はそこで打ち切りとなった。後でゆっくり言い聞かせなければならないなと思いつつも、ハウストはケイスの鈍さにはつける薬がないのではとも思いはじめていた。

73　騎士見習いと迷子の羊1

王立フォルクマール学園上級学年三年目の頃だったろうか。進路について友人と話した時に、彼は商人の息子だけど、出来るなら騎士になりたいと言っていた。ケイスの養い親も元は王国騎士団員だ。騎士としての自分は思い描けなくとも、可能性の一つとしては有り得ない話ではなかった。だがこれまでに気にしてこなかった将来像だ。

屋敷の人間は誰も何も言わないけれど、ケイスは騎士の道を継ぐべきなのだろうか。ベネディクト伯爵は普段から多くを語らないから、きっと何か思う事があっても口にはしないだろうし、ケイスには聞かせないだろう。最近は、伯爵との間には微妙な空気を感じる。それは目に見えない壁と言っていいのかもしれない。ケイスの中では葛藤があった。

実は、以前から手紙だけは届いていたかつての故郷ゾンネ町からの大量の手紙を、ベネディクトが隠していたのだという事を知った。何がきっかけでそうなったのかはとにかく、それを問い詰めてから、彼らの関係はこれまで以上に良好とはいえそうになくなってしまったのだ。ケイスはこの頃になるまでたった二通の手紙しか自分に宛ての故郷の手紙はないと思っていたが、違った。ベネディクトはゾンネからの手紙を幾たびもケイスには黙って隠していたのだ。その理由はケイスには分からない。故郷に帰りたいと思われては困るからだろうか、それとも故郷との縁をさっぱり切らせるつもりだったのか。ケイスの方でも、十一歳くらいの頃からゾンネに手紙を出していた。それはどうやら届いていたらしいのだが、その返事らしいものが返ってこないので変には思っていたのだ。確かにケイスはこれまでに故郷（ゾンネ）に帰りたいとも帰ろうとする素振りも見せてこなかったけれど、全くその気がないわけではなかったのだ。いつか帰るところがあるのならゾンネだと思っていた。

そうして、伯爵に答えを要求すると、彼は驚くべき事実を口にした。なんと、ゾンネにはケイスを黙って連れて行った侘びと称して少なくない金額の金を渡していたのだ。そして隠蔽されたゾンネからの手紙。更に一度、伯爵は屋敷に来たばかりのケイスを訪ねるゾンネの男たちを追い出した事まであるというのだ。それをケイスはこの時まで知る事が出来ないでいた。まるっきり、ケイスの故郷には手切れ金を渡して後の関わりを絶とうとしたようにしか思えない。ケイスは謝罪こそ求めなかったものの、それに近いものを願っていた。だがベネディクトは言い訳すらしなかった。ただ真実を述べて、これまでにたまっていたゾンネからの手紙を養い子に渡しただけ。

ケイスの知りたかったのは真実だけではない。ベネディクトの考えも、だった。それが得られなくて、養父の事がどこか信用出来なくなってしまったのかもしれない。いつだって何も語ろうとしない養父に苛立ちを覚えたのかもしれない。

ゆえに、可能性としてあった騎士の道を考えないようにしていた。騎士というとベネディクトを思い出すからだ。しかし、ハウストの口から語られる騎士像は、ベネディクトもルブラン家も関係のないもののように思えて、ケイスの考えていたそれとはまったくの別物のように感じられた。

このところルブランの屋敷には養父と養子の微妙な緊張状態以外にも、変化が生じていた。屋敷に来て以来ケイスを世話していた若い侍女のエルザがルブラン邸務めを辞めたのだ。彼女は嫁入りが決まり、寿退職する事になった。別れが来ていた。意外にもあっさりとエルザが自分の辞職を口にするので、彼女が去る当日までケイスは実感がわいてこなかった。

屋敷の玄関に、ベネディクトが最後だからと呼んだ流しの馬車が止まっている。それに乗ってエルザは王都（シェーン）の東門に行き、実家のある町まで短くない旅をして、故郷で結婚式を挙げるのだ。ケイスは玄関まで彼女を見送った。

「では、坊ちゃま、どうかお元気で」

「坊ちゃまってやめてって……」

ケイスはいつからか“坊ちゃま”という呼び方を好まないようになっていて、エルザが呼ぶたびに口癖のようにそう返していたのだが、最後の最後までこれを言う事になるとは。別れの場にはふさわしくないかなと思った時、エルザは笑って訂正した。

「では、ケイスさま」

呼ばれて、ほしかったのはそれじゃないと知る。他人行儀でエルザが遠かった。口の中がほんの少し苦くなったような気がして、ケイスは彼女の顔を正視出来なくなった。

「ケイスさま、お体には充分お気をつけくださいませ。剣術のお稽古もほどほどに」

エルザの言葉遣いはいつもと同じ、優しくて丁寧でも気安いものだったけれど、最後に聞くのがよそよそしい名前なんかじゃない方がケイスはよかった。くしゃりと頭を撫でられて、まだもう少しエルザには届かない身長が恨めしかった。

「本当に、お元気で」

やわらかい手が離れていって、エルザが行ってしまうと知った。もう、エルザは屋敷にはいなくなってしまうのだ。優しいエルザ。ケイスがこの家に来た時から彼女はそこにいた。よく覚えていないけれど、いじめの事も真っ先に気づいてくれて、何かとケイスを気にしてくれた。一緒に行った祭りは数え切れないほど、稽古に疲れたケイスに夕食前の間食を調達してくれた事もある。自分の仕事しかしない他の使用人たちとは違って、エルザだけはケイスの声によろこんで振り返ってくれた。

まるで母親のように思っていた。年若く、エルザは母にしてはまだ年齢が足りないかもしれないけれど、ケイスは王都ではじめて安心出来る存在が彼女だったと思っているのだ。きっと自分の知らないところでもっと助けに、支えになってくれた女(ひと)。

「エルザ、ありがとう……！」

ずっと彼女の笑顔が見ていたかった。故郷で夫となる人が、彼女

の笑顔を守る人間であってほしい。そうでなくては困る。ケイスは繰り返した。

「ありがとう！」

自分の目に湿り気を感じたからだろうか、振り返って微笑んだエルザの瞳も光っているように見えたのは。彼女は一度顔を伏せた後、再び笑顔を見せてくれた。やっぱり目の端が赤いように見えたけれど、手を振ってくれたからそれでもう充分だった。

ケイスはエルザの幸せを願ってやまない。王都ではじめての大切な人は、去ってしまったけれど、彼女に神のご加護がありますように。

†　†　†

きっかけは、城下町で迷子を見つけた時の事だった。ケイスが城下町へ行く事は減っていた。学園は住まいのあるデュッセル地区の隣りの区であるし、用事がなければ城下へと足へ運ぶ必要はない。家と学校を往復するだけの日々を送れば、自然城下には行かなくなる。だが、久しぶりにやってきたのは、上級学年最後の年を間近に迎えた晩春の頃だった。

シェーンの大きな時計台が天辺までくっきりと見えるよく晴れた

日の事。いささか汗ばむ陽気の中、ケイスは友人のハウストと町へ繰り出した。そして、市の立つ時間だったためにハウストの姿を一時的に見失った。要は十五歳の迷子。あまり認めたくないそれを考えないようにして、ケイスは人混みの中に友人の姿を探す。市場は繁盛しており、青果が鮮やかな色合いを太陽の下反射させている。そろそろ夏至の祭りも近い、人々の顔は明るく活気に満ちていた。市場の店主たちの呼ぶ声も遠くによく響く。城下は平和そのものだ。

「なあ坊や、買ってかないかい？」

少し離れた場所からの声に、自分宛てのものだろうかとやや眉を寄せつつ振り替えると、ケイスの後ろには子どもがいる。飴細工売りに飴を差し出されているのが分かる。ハウストと競うようにして背を伸ばしている自分に、さすがに坊やと呼ぶものはないかと安心しながらもケイスはその子どもの様子が気になった。甘いにおいを撒き散らす飴細工売りには見向きもせず、ただ地面をじっと見つめているだけ。普通、あんな風に目の前にお菓子を差し出されたら空腹でなかった子でもつい目をやってしまうのではないか。

「お金がないのかい。母ちゃんはどうした」

子どもは精々五歳くらい、まだお金は持たされないだろう年頃を相手によくやる、と飴細工売りに苦笑しそうになった頃、ケイスは迷子の可能性に気づく。

「ねえ君、お母さんはどうしたの？」

飴細工売りとほとんど似たような言葉をかけたにも関わらず、ケイスが体を曲げて子どもの元にやってきたからだろうか、その子どもは顔を上げた。中年の飴細工売りよりは年が近い分ケイスにいささか安心したのかもしれない。

「はぐれちゃったかな」

継いで問いかけるケイスに、子どもはこくんと頷いた。やっぱりそうかと、膝を折る。

「それじゃ、探しに行こうか」

自分も迷子――というより同行者とはぐれただけではあるが――

であったのだが、ケイスは少年の手をとった。

迷子の子どもはやはり、母親と一緒に市に来ていたのだが、賑わうデアデス広場に来た途端にはぐれてしまったようだ。ケイスは母親の特徴を尋ねてそれらしき人物を見かけるとかけよったが、なかなか見つからなかった。目に見えて日が傾いてきて、市場の喧騒も減ってきたが、まだ迷子の母はやってこない。子どもも少し疲れたようだ。ケイスもちょっと困ってきた。ハウストも見つからないし、そもそも彼は自分を捜してくれるだろうか疑問だ。彼らの目的地は金物屋で、ハウスト御用達だった場所のため案内してもらうつもりでいた。ケイスはその店の場所を知らない、目的地で再会を願うのは難しい。

「ちょっと休憩しようか」

「うん」

子どもを噴水のあるところまで連れていくと、噴水の縁(へり)に腰掛けた。改めて、都の広さを感じ取る。あちらこちらと見さかいなく歩けば迷子にもなる。大通りだけでも広いし、デアデス広場も人で埋めてしまえば迷宮のようだ。小道に入ると更に道は複雑に分かれ、迷子になろうと思えば簡単なような気がしてきた。これまでにケイスは幾度となく城下町をうろついたが、いつものコースというものを作っていて、それからそう逸脱する事はなかった。もっと幼い頃には地図でも作る勢いで歩きまわったが今ではそのいつものコースの中のみを徘徊しており、今日もそこから少し離れると見覚えのある場所に戻るのがやや難しかった。

そうやってぼんやりして、何の気はなしに回した首の向いた先にあったものが見た事のある顔と気づいてケイスは立ち上がった。ハウストだ。数メートル離れた場所に友人の横顔を見つけた。こっちは迷子から脱出だと、駆けようとしてもう一人の迷子の事を思い出

す。
「ちょっと、待ってて！」
子どもは急な事に不安そうにしていたが、俯くような頷きをしてケイスを見送った。
「ハウスト！」
それからケイスはすぐに友人の少年と再会した。声をかけられた方は一瞬、虚を突かれたような表情をしたがすぐに知己を見た顔になる。「やっと現れたな、迷子の子どもめ」と頬を持ち上げる。
「ごめん、ちょっと他にも迷子の子を見つけて」
さりげなく自分が迷子であったと認めながらも無自覚で、ケイスは友人に申し出た。ハウストの方では何事もなかったようで、他の迷子は誰かと問うてくる。ケイスは彼にも母親捜索を手伝ってもらおうと、噴水の元へと戻る。顔を向けたその先には誰もいなくて、ケイスの笑顔が固まる。
「あれ、ここに居たんだけどな」
「お前探しに行っちまったんじゃねえか」
「そんな、どうしよう」
ケイスの同行していた迷子の子どもは、彼の前から姿を消してしまった。慌てたのはケイスで、視線をあちらこちらにさまよわせる友人を横目で見ながらハウストは眉を持ち上げた。
「迷子なら、巡回（パトロール）してる警備隊のところに行けばいいよ」
「そっか、そうだっけ。忘れてた。でも、ほんとにさっきまでここに居たんだ」
「分かったから、おら、探すぞ」
うろたえながらも口ごもるのは今すべき事ではないとケイスを叩き、ハウストは歩き出した。それに倣ってケイス、迷子の子どもの特徴を述べる。
「子どもってのは迷子じゃなくてもすぐどっか行くからな」
「そうかな」
「そうだろ。うちの弟どもも、迷子になるのが趣味かってくらいす

ぐどっか消えるわ」

　ハウストの兄弟が多いというのはよく聞いているし会った事もある。ハウストは上から二番目の子どもで、下の兄弟がとても多い。ケイスはハウストの住まいにお邪魔した事がある。裕福な商人の息子である彼は、大きな家に住んでいた。両親には出会えなかったが、それでも兄弟たちに迎えられた。ハウストの家族は明るく、あたたかい者ばかりだった。まだまだ無邪気な子どもの年頃というのもあったが、ケイスが誰でどんな出生を持つかなど気にもしていないようだった。それは、ケイスには有り難くもあったが、彼ら家族の明るさは時に胸の奥底をうずかせた。

　下の兄弟。ケイスにも存在した。かつて、妹がいた。今はいないとは思わないが、だが、口にするのはやめた。触れてほしくはなかった。ハウストにすら仔細を話していない。彼女の名前すら言えなかった。だから、ハウストの家に誘われるのはうれしいけれど、ほんの少しだけ、息がつまる。弟たちはまだしも、ハウストはケイスの事情をいささか存じている。やたらに気を使ってくるわけではないが、ハウストの方でもケイスの前で妹に関する微妙な話題を避けようとしてくれるのが、どうしてか歯がゆい。止めろと言いたくて、口を開くのだが息しか出てこないためケイスはまた口を閉じる。ハウストの家に行くといつも帰り道に妹の事を思い出さないようにと首を振るから、あまり行きたくはないのだ。そして、今みたいにハウストの黒い瞳に一瞬、この話題は大丈夫だったかな、なんていう色が見えるのがとても嫌だ。

「早く、見つけないと」

「だな」

　自分によぎらせたそれをすっかりなくして、ハウストは頷く。時々ひどく居心地が悪くなるけれど、ケイスはやはりこの友人を悪く思う事は出来なかった。出会った当初こそ変なやつだと思っていたが、今ではすっかり隣りにいるのが当たり前になってしまっている。ケイスの事情に深く踏み込み過ぎず、かといって放置するでもない

友人というのは、非常に有り難かった。
「……あ、騎士団」
どこか意外なものを見つけたような声でハウストが顔を向けた方角をケイスも見た。確かにそこには王国騎士団の制服を身にまとった二人の騎士の姿が見つけられた。城下町は城下町警備隊の住処だ、騎士の姿は珍しい。行動範囲の中には騎士団のいない場所が多いケイスには、ベネディクト以外なら久しぶりに見る騎士団員だ。
「あ、あの子だよ、ハウスト、迷子の子！」
そんな騎士の片方の腕の中に、ケイスが共にいたはずの迷子の子が収まっていた。
「すいません、その子、迷子で……」
突然顔を出した十代の少年に、騎士の二人はわずか見張った目で視線を注いだ。ケイスの方は、その子どもの家族でもなんでもない、ただ一緒に親を探そうとしただけの他人であるためにその後になんと続けたらいいか分からず大人の視線をその身に浴びる事に気まずさを感じていた。
「やあ、マニの兄さんかい？」
ケイスはその子どもの名前も知らなかったのに、この騎士はどうやら名前を聞きだしていたようだった。ただマニの兄ではない事を表わすために首を横に振った。迷子のマニは、やはり疲れていたのだろう、騎士の腕にしがみついて泣きべそをかく一歩手前の顔をしてケイスを見た。彼を一人、置いてきてしまったからより一層不安になって、さまよって歩いているうちに騎士団員に見つけてもらったのだろう。
「こいつ、その子の親を一緒になって探してたんです」
横から口を挟んだのはハウストだ。言い訳をさせてもらえばケイスは騎士団員の高い背や隙のない身のこなしに少し圧倒され、迷子を一人放置した後ろめたさに内心で打ちひしがれていたのだ。
「そうだったか。では、後は我々に任せてもらおうか」
「はあ、でも」

「何、王城に引きこもっているのが我々の仕事ではない。困った人があればそれが子どもでも手を差し伸べるのが騎士の仕事さ」
「むしろ、守るべきは幼子だ、これが僕らの仕事でもある」
渦中のマニを見ると、どうやら眠ってしまったようだ。ケイスは何度か子どもと騎士の間に視線を移動させたが、自分に出来る事は少ないと思い知った。ケイスは、迷子の子どもの名前も聞かず、安心させてやる事も出来なかった。迷子を受け持つのは城下町警備隊の仕事かと思っていたが、王国騎士団もそれをやるらしい。ならば、任せてもいいのだろう。
「では、よろしくお願いします」
「ああ、ではな」
言うと、早速マニの親を求めて騎士の二人は歩いて行った。なんだかあっという間で、ケイスは彼らをただ見送るしか出来なかったようだった。あの迷子の子どもは、小さいだけあって妹に似ていたのに。何も出来なかったのだ。思うと、自分がぎゅっと縮まってしまったように感じた。注射器の中に押し込められたスポンジが、穴をふさがれて圧力をかけられた時に小さく縮んでしまうように。思い出してはいけないのだ、妹の事は。周りの酸素が薄くなったように感じた時、ケイスの肩に人の指の感覚。
「よかったな、大人の方が視線が高いからすぐ見つかるだろうよ」
「……ああ……そうだね」
明るい未来を口にする事で友人を元気づけようとするハウストが分かった。彼は、基本的には自分のやりたいようにやるし、大雑把でざっくばらんだが、この人当たりの良さが隅に置けない。またしても心の内を見抜かれたかもしれないと思い、ケイスは顔を他のものに変える。
「そうだ、ハウスト。今日の予定していたところには行けるかな」
空の色はまだまだ昼のもの、夕暮れにはほど遠いが、一日をいくらか予定より余分に消費してしまっていた。まだ自分たちに残された時間はあるのだろうかと問う。するとハウストは首を縦にした。

これから彼の御用達の店には行けるようだ。二人連れ立つと、日ごろ気になっていた下らない事や、どうだっていい事を会話にした。

ケイスは、ベネディクトから騎士団の仕事内容について聞いた事がない。問いかけた事すらない。それは興味がないからではなくて、騎士の仕事など王家を守る事のみと思い込んでいたからだ。最近であれば、ゾンネについての事で距離を感じているしベネディクトには会話も難しいだろうが、聞いてみたくなった。とはいえどうにも上手く表現出来ないが、ケイスは自分からも伯爵に近寄りにくくなっていた。ハウストの家に行った時などがそうだ。何かがケイスを阻んでいる。それが何かは分からないが、結局はベネディクトには質問になど行けないのだろう。彼は今、最近まで勤めていた王国騎士団顧問役の任を退いて、屋敷に居る事が増えたというのに、食事の時しか顔を合わせない。

伯の事はともかく、ケイスは珍しく城下で出会った騎士たちの事が気になっていた。知らなかった王都の新たな顔を知った気がした。

７４　騎士見習いと迷子の羊２（前書き）

今回の話で少しですが災害についての記述があります。
今の時期ですから、不快に思われる方がいらっしゃるかもしれません。
そうなったら申し訳ありません。消しますので言ってください。
ですが、決して今回の地震を軽んじる気持ちではないという事をご理解いただけたらと思います。

７４　騎士見習いと迷子の羊２

決定打はシェーン王国北部の崖崩れだったのだろう。ケイスが学園に居られる最後の年に、それは起こった。小さくないものだった。話に聞くだけでは、規模のすごさが分からないのだがどうやらひどいものだったらしい。シェーン王国の北部には、王国で最も力を持つ貴族のホルバイン家が存在する。そのホルバイン家の領地が崖崩れの被害に見舞われた。領地では崖崩れにより道が断絶し、孤立した村もあったそうだ。ホルバイン家は強固な力ある私兵を持っているが、国王に支援を求めた。それに応じて行なわれたのが王国騎士団の派遣だ。正確には城下町警備隊との混成部隊だったが、王家の威信を示すため、王家の盾である騎士団が派遣されたとお触れが出た。

騎士の仕事は戦時に王城と王家を守り、王のために死力を尽くして闘う事だと思っていたのだが、どうも違うようだ。それは確かに国王の懐の広さを示すため、有力貴族との関係を円滑に保つため、あるいは力を持ちすぎるホルバインに恩を着せる事も狙いにあっただろう。それでも騎士団は災害支援に向かうという事、それはケイスの胸を打った。

その時、本当はケイスも何かをしたかった。北部の崖崩れの被害については連絡が入るのも遅く、情報も少なかった。だが帰ってきた騎士の話によると想像以上にひどかったらしい。彼らは危険を承知で危ない場所にも行き、王都（シェーン）から持って行った食料や毛布などを配布し、身動きのとれなくなった人々を運んだという。ケイスがしたくても出来なかった事をしてきた彼らは大変であっても、ケイスの目には尊く見えた。

ただ戦うだけが彼らの仕事ではない。力がある分、その腕を振るう場所が増えるのだと知った時、ケイスは決めた。

†　†　†

上級学年は意外にも加速度的にあっという間に過ぎていった。何より、卒業試験を受ける年にはひたすら勉強をしなければならず、それが大変でもあり楽しくもあったのだから、ケイスにとってはいろいろと大変な年だった。実に様々な事があったはずが、卒業試験前後のあまりの慌しさに、全てそれは忘れ去られてしまったかのように思われた。

卒業試験は国語や数学などの筆記と、口頭試問が行なわれた。筆記はともかく、口頭試問では手厳しい教師陣がこれまでに学園で学んできた事を教えなさいという顔で待機していたので生徒たちはかなりの緊張を強いられた。

ケイスはこれまでにも何度も定期試験を経験しているため筆記試験にはそう不安を抱いていなかったが、口頭試問がどんなものかさっぱり分かっていなかったために始まる前から非常に緊張をしていた。口頭試問は総勢五名の試験官であるフォルクマール学園の教師たちが生徒をそれぞれの視点から審査していた。問われる事は似たようなものがあるとはいえ生徒によって様々で、先に終わった生徒から質問を参考にして聞いていても、思わぬ内容を問われる事も多々あった。とはいえ、学園での生活をただ無為に過ごしたのでなけ

れば、誰もが自分の軌跡を思い出して語ればいいようなものではあった。成績などは卒業試験によって測る事が出来るが、学園での日々を如何様に過ごしたかを生徒に語らせ、それが社会に出してやるに足りるものであれば、口頭試問は合格となる。

ケイスの口頭試問はまずこうはじまった。

「君は、ルブラン伯の養子だね」

その反応を知ろうとするかのような、切り出し方だった。慣れているとはいえまさかこのような場所で、まず一番に問われるべき問題なのだろうか疑問に感じた。後になって思えば、社会に出ればこの事はもっと多く取りざたされるだろうという事を教師陣は知っており、気丈に振舞えるのでなければ問題だと考えていたのだろう。とにかくケイスは返事をする事にした。

「はい。まだ爵位を継ぐとは正式に決まっておりませんが、私はベネディクト・カール・ルブランの養子であり、息子であります」

こう答えるのに苦はなかったかというと嘘になる。まだケイスと伯爵との間には不可視の壁がそびえ立っていたからだ。ベネディクトの気持ちが分からぬ以上、爵位を継ぐうんぬんの話は出来ない。それでも彼はケイスを養子だと言っていた、それだけは確かだ。息子だとは思っているのかいないのか、とにかく一度は「お前の親になる」と言ったのを頼りにしていればいいだろう。

気丈に見えたかどうかは分からないが、ケイスはとりあえず教師たちの値踏みするような瞳に耐える事が出来た。以来、話は学園生活で何を学び取ったかについてに変わり、それ以上家庭の事情に踏み込まれる事はなかった。

「学園生活でやり残した事はないかね」

フォルクマール学園では一切私情を挟まないようにしているとでもいうように、自他共に厳しく言い訳を許さない数学教師が口を開いた。ケイスは彼によって授業中に立たされた事が何度かある。蛇のように何を考えているか分からない、どこか無機質な瞳に睨まれると萎縮しそうになる。こんな場であれば尚更だ。しかも、その内

容は後悔した事はないかという問い、一歩間違えればこれまでの失敗をただ披露するだけの終わりになる。ケイスがフォルクマールでやり残した事は、何だろう。考えこむ時間が長くても問題だと、とりあえず唇を湿らす。

「そう……ですね。私は、学園生活で勉強や剣術などには積極性を持ってきましたが、人の輪に入るという事に対しては消極的でした。知人もあまり増えず……もっと積極的になるべきでした」

それは真実心の内よりの言葉だった。もっと他にいろいろあるだろうと思ったが、それは本心だったのだから仕方がない。

「ふん、人のつながりは大切だ。今後はそれをよく思い知る事になるだろうよ」

数学教師は言い捨てるようにして、手元の資料に目線を落とした。それで周囲を遮断したかのようで、周りの教師たちは彼の意見が終わったのだと承知した。

「では、最後に、学園卒業後の進路については何をお考えかな？」

初夏に行なわれている卒業試験、この頃既に進路が決まっているものは多い。だがこの時点で進路が決まっていないというのもそう珍しい事ではない。試験のためにその後についてなど考えてもいられないくらい余裕のないものもいると分かっているのだ。学園側も、そういう生徒を卒業まで支援し、卒業してからもまだ進路を見出せないものについてもサポートする体勢だ。

「はい、卒業後には王国騎士団に入団を希望するつもりです」

「ほう……騎士になるつもりかね。容易ではないぞ」

「はい。ですが、私は騎士になって誰かを助けたいのです。人の力になれるよう日々の努力をたゆまぬつもりでいます」

最後の質問をした初老で眼鏡の教師はふんふんと首を振ると、何かを手元の書類に書きとめた。先ほどから何かをケイスが答えるたびに彼らの手は動いたが、質問をされる時よりもその間室内が無言になり、ペンの立てる音だけを聞いていなければならないのが心臓を脅かしていた。

「よろしい、これで口頭試問は終了する。ケイス・ルブラン君、退室して結構」

会釈をして、部屋を辞すると、ドアが閉まった瞬間にケイスは息を吐き出した。これまでにずっと呼吸をまともにするのを我慢していたみたいだ。いかに自分が緊張していたか分かる。が、いつまでもそこでそうしてはいられない。待合室代わりになっている教室に向かって、しばらく待機してなければならない。教師陣が次に控えている生徒のための準備をせねばならないのと、ケイスの判定を下さなければならないので少し時間がかかる。合否についてはまだ公開されないし、確認を学園の教師全員で行なうので一日で合否をどうにかは出来ないのだが、とりあえずは待合室に向かわねばならない。

待合の教室に戻ると、同じクラスの生徒が数人いて、知った顔を目が合うと微笑みをかけられた。こんな時、生徒の敵は教師だ。普段はそう団結力などなくとも、同じ苦痛を味合わされる者同士、目配せもしたくなるものだ。ケイスも苦笑に近い笑みを返し、空いている席に座った。なんとなく教室を見回すと、かつて同じクラスだったエーファの姿を見つける。エーファは相変わらず忘れ物をケイスに借りてくるような女子生徒だったが、ここ最近の卒業試験に向けての忙しさでそれもいつの間にかなくなっていた。彼女がどうしているか気にしてはいたが、クラスが違うので試験勉強に励んでいれば交流もなくなる。今更ながらにそれを思い出し、声をかけたくなった。

「エーファ・ベスター、試問教室に向かいなさい」

「はい」

ところがエーファの口頭試問がこれからのようで、ケイスの思惑は叶わない。口を開いたままだったので、なんとなく名残惜しく思ってエーファを見つめていたら、視線を感じたのだろうか彼女は振り返った。久しぶりに見るエーファは少しだけ変わったように見えた。どこがどうとは言えないが、試験で疲れているだろうに溌剌と

しているようだ。目元を優しく細めると、エーファは小さく手を振った。ケイスも机に載せていた手をひらひらとさせると、彼女を見送った。

しばし手持ち無沙汰を味わうと、ケイスの次に試問が行なわれるクラスメイトの名前が呼ばれ、ケイスは解放されるに至った。

騎士になりたいと言った時、伯爵は反対した。そこではいくつかの口論が生じた。ケイスはもう思い出したくない妹の話まで持ち出した。彼女のような存在を増やしたくないとまで言った。口にするのは容易くとも、実行するのは大きく異なると反論された。

そうして交渉決裂した商人のように、お互いが黙り込んでしまうと、ベネディクトは唐突に一つの言葉を発した。

「騎士には、二年の見習い期間がある。それを乗り越えられるようでなければ元より望みなどなかったのだと思え」

それが了承の答えだと知るには、ケイスはしばらく時間をいただかなくてはならなかった。

その年、ケイスはフォルクマール学園を卒業した。

† † †

いつの間にか秋が来て、ケイスはいつの間にか騎士見習いになっていた。ごくわずかの間経験した徒弟の時代にも思わされたが、下積み時代というのは厳しいものだ。王城の一部、寄宿舎から騎士団の職場へと向かう。ケイスは住まいのあるデュッセル地区から職場に通えない距離ではなかったが、友人のハウストもいる事だし、伯爵とは相変わらずぎくしゃくしたままだしという事で寄宿舎住まいにする事にした。

この頃ケイスはすっかり背も伸び、成長期ももう終わっただろう頃だった。十八歳になっていて、体つきは成人男性のものと変わりはない。ゴールデンオリーブの髪は相変わらず寝癖一つなく、エメラルドの瞳には生真面目さと真摯な様子が窺える。同じく騎士見習いのハウストが、またしても入団前に親に髪を刈られて短髪にされていたが、ケイスと初めて会った時よりはまだ長い。ケイスも首の後ろに伸びていた髪を切り、さっぱりとさせていたがさほどの変化はない。

見習いの仕事は、ケイスが本来騎士の仕事だと思い、これまでに聞いてきたものとは違う内容ばかりだった。徒弟時代もそうだったが、上から言いつけられる事務仕事や雑用などが多い。その合間に稽古と称して正式な先輩騎士たちから真剣なのだか片手間のつもりなのか分からない、訓練を受けさせられてはいた。ただ、先輩騎士の中にもきちんと稽古をつけてやろうという者もいて、それは良い経験になってもいた。

この騎士見習いの仕事のいいところは、苦労を分かち合う仲間がいるという事で、たった一人の革製品職人の弟子でいるのとは違い愚痴を言い合う事が出来た。同期で同じ学園の友人という事でやは

りハウストがその最たる者だったが、それでもいくらか軽口を叩ける相手が出来た。学園（フォルクマール）での口頭試問で告げたように、人間関係に積極的になろうとしたのも原因だったかもしれない。数学教師が言っていたように、本当に社会に出てからは人と人とのつながりというものが大事で、ケイスが相手の名前を覚えていない事がちょっとした問題になりそうになった事もあった。それだけではなく、やはり人は人との間で暮らしているからやっていけるのだと、愚痴を言える相手がいる事も有り難いのだと思い知った。ハウストとはやはり相変わらずだ、彼となら競うように仕事が出来る。

「そういえば、身長は勝てたな」

何の話が発端だったか、学生時代からハウストとは何かとライバル意識を飛ばしてきたなという内容だっただろう。ケイスが頭をあげると、自分より幾分目線が上の友人がいた。そこには、初めて会ったばかりの頃のなごりである短い髪と、当時はまだケイスより背が低かったはずのハウストがいた。学園にいた頃は、何度か互いに身長を追い抜きあってきたが、そろそろ二人の成長期にも終わりが来た。どちらに勝利がもたらされたかはすぐに分かるだろう。

「そう言われると、そうだな」

「勉強ではいつも負けてたし……俺も勉強はそう嫌いじゃないんだが数学がなあ」

かつて強いられた苦痛を思い出すかのようなハウストは、国語や歴史は好きでもどうしても数学などの数字に弱かった。ケイスも上手く伝えられないが宿題の手伝いをした事もある。あれは、そう昔の事ではないのにとても前の出来事のようであった。

「ま、剣なら俺かな」

「そんな事ない」

剣術の腕ならばお互いの実力は伯仲だろうか。

取り留めのない会話をして、休憩時間を浪費していたところに先輩騎士が慌てた様子でやってくるのが視界に入った。何か起きたのかと思ったら、ケイスと視線が合った。

「おい新人。西門の倉庫に荷物持っていけって言われたか」
「はい。クリューガーさんに朝頼まれて……」
「ああくそ。お前、西門に近い方の倉庫に入れたな？　あれはな、おれたち騎士団の倉庫じゃねえ、貴族のもんだ」
ケイスがまだ何をしでかしてしまったのか自覚のないまま、うろたえていると横からハウストが首を出した。「何か問題ですか」
「いいから来い、荷物を運ぶぞ」
貴族ばかりの騎士団でも、彼らが行なうのは肉体労働ばかりだ。一部には、貴族である事をかなり周囲に誇張する人間もいるのだが、普段の騎士はあまり自分たちが人の上に立つべき存在だと誇示したりはしない。その点では、体を動かさない貴族たちとはある程度の隔たりがあるといえよう。そのために、騎士団と普通の貴族の間では一種の壁のようなものがあり、貴族たちは騎士団を軽く見ているところさえあった。そんな貴族との間では、小さな事でも問題が立ち上がり、諍いが起きる。今回も大方いわゆる“貴族連中”が自分たちの領域を侵犯されたと怒っているのだろう。
「ちょうど折り悪くボイムラー公が倉庫に来てな、文句をつけてきた。自分たちの倉庫は武器など置かない、ほとんど宝物庫のようなものなのだからなんだとか、ったく、厄介な事になっちまった」
おそらくは縄張り争いの一つなのだろう、いざとなればどんな泥の中でも進む決意のある騎士とは違い、普通の貴族たちはあくせく働く騎士たちが目障りらしい。何かにつけてけちをつけてくる。きっかけは何でもいいのだろうが、わざわざ面倒事を作るようなつもりは騎士団にはない。余計な縄張り争いの種を作ってしまったと気がつくとケイスは慌てて、足早になった。

結局、事態は大変な事にはならず荷物を運び出しさえすればそれでよしとなったが、あわや衝突というところまで口論が進めば、騎

士団の面目が立たず決闘騒ぎにもなりかねなかった。過去に何度かそういう事件が起こっているらしいと聞いて、ケイスは青ざめた。

「確認してくれりゃあよかったんだよ。手がかからなくなったと思えばすぐこれだ」

「今度から気をつけろよ、些細な事でも決闘沙汰にもなるって事もあるんだ」

騎士たちに言い含められてケイスは肩を落とした。確かに問題にはならなかったが、一歩間違えば決闘にでもなっていた、というのなら話は別だ。危ないところだったともいえるかもしれない。仕事一つ一つには慣れていないものの、王国騎士団の中で働くという行為をするには慣れていたところの失敗、ケイスは自分の未熟さにあきれ返って言葉も出ない。

「なんだ、もう、元気出せ。別に大した事なかったんだし、大した失敗じゃねえよ」

頷いて、ケイスはふとこの話も養父に行くのかと不安になった。彼は人の失敗にはあまり優しくない人だから、今度ルブラン邸に戻った時に何か言われるかもしれない。説教をされるわけではないので怒られるのが嫌だとかそういう事ではない。不甲斐ない息子(ようし)だと思われるのが歯がゆいのだ。大した事ではないとはいえ、今後のケイスのうっかりを予想させるような小さな事件で、なんとなく気が重かった。

「あーもうお前、仕事に戻るぞ。そんで後で久しぶりに一試合しようぜ」

ここ最近のハウストとケイスは騎士団として働くあまりに訓練では組になれなかったり忙しかったりで、二人で剣を持って対峙してこなかった。二人がまともな会話をしたのもフォルクマール学園の体育の
剣術の授業がきっかけだ。なんとなく彼らの間で気晴らしというと、木剣でもなんでも剣を持って振り回す事が一番なのだった。

小さな事にくよくよと悩む自分に気づいて、ケイスは苦笑して首

を縦にした。

†　†　†

その頃は、上京したてでまだ王都に慣れていない騎士見習いもいたので、城下町には他に守り手がいたけれど、案内のため城下に繰り出したものだった。ケイスも先輩騎士の案内で普段足を踏み入れた事のない場所にまで行った。そのうちの一つが色町だ。まだ昼ではあるので活気はあまりないが、どうにも露出度の高い女性や、誘うような目つきに男たちは気にせずにはおれない。内心はどうあれ平常心を顔にはりつけているものもいれば、初恋にも気がつけない青少年の顔色はすぐに赤くなってしまう。

「ルブラン、もしかしてこういうところははじめてか」

「アスムス先輩、笑える話を一つしましょう。ケイスは、初恋の相手に告白されて、自分の気持ちに全く気づかずに相手に逆ギレされた前科をお持ちなんですよ」

残念な事にその城下案内には学生時代からの友人が含まれていたので、話はおかしな方向へ行く。この案内役をつとめる先輩騎士は、年もそう離れていないせいか気さくに新米たちに接してくる。当然ハウスとの言い出したおかしな話を楽しげに聞いてくれる。それは

もう、人の失敗を笑おうとする一歩手前の男の顔で。
「ほうほう、何故に逆ギレされたんだね？　話を聞く限り相思相愛かのようじゃないか」
「それが、やつは自分の身分やら若い男女がつきあうっていうのはとかその他下らぬ事を申しましてね、そこで、その女子になんと言われたと思います？」
「ハウスト」
「『頭固すぎるんじゃぼけーーー！』ですよ」
　ハウストの物真似が上手かったのかよっぽどその内容が面白かったのか、騎士と見習いたちはどっと笑った。ケイスの制止もなんのその、真実とはいえ一部勝手な推測まじりの話をされて当の本人は楽しくなかった。エーファの事は、今でも正直よく分からないところがある。たしかに、彼女の事は他の女子生徒よりは気になっていたし、好意は抱いていた。だがエーファには自分が不釣合いだと思ったからそう伝えたのに、何故か捨て台詞を吐かれて脱兎のごとく去られた。それでハウストに相談したらいろいろな推測をされて様々な事を言われて、後々よく考えてみたら、好きだったのかもしれないなあという思いに至ったが、それにしたって淡い想い過ぎてまだケイスの中では上手く表現できないものだったのだ。エーファはかわいい。話も長くは続かないけれど一緒にいると心臓がうるさくなったし、本当のところエーファが忘れ物を借りにくる相手が自分であるのをうれしく思ってもいた。たまには他の用でも話しかけてくれて、ケイスはもっと彼女に自分からも声をかければよかったとも感じている。
　だがどちらにせよケイスは学園を出てから、これまでとは待遇の違う世界で生きる事になる。貴族が多くて優遇されやすいとはいえ王国騎士団は実力重視の組織だ。まだまだ下積みのケイスが、彼女にしてやれる事は少ないだろうし、噂ではエーファは卒業後にはどこかの貴族に嫁ぐという。フォルクマール学園には女子生徒もいるにはいたが、相対的に男子生徒の方が数が多く、また女性の就職先

もごく少なく限られてくるので、貴族令嬢たちは婚約するか結婚するというのが彼らの間では一般的だそうだ。在学中に既に婚約者がいるものも、稀に嫁に行くので学校を辞めるものまでいるらしいと聞く。誰かと、それも貴族の娘とケイスがそういう恋愛関係になる事はないだろう。所詮は養子の庶民、ベネディクトがケイスの未来をどう考えているかは分からないが仮にも貴族の息子である以上、家長のベネディクトが婚約者を連れてくるに違いないのだ。まともな恋愛などケイスには出来ないだろう。

　場が和んだ一行、一人でぼんやりと自分だけの思いにひたるケイスに気がついたハウストは、少しやり過ぎたかなと思っている。もう同期の仲間たちには話してあって、周知の事実ではあったのだが先輩騎士に話をしたのははじめてだ。ケイスは、時々たまにああやって一人の世界に入る事がある。ただ自分の考えだけに没頭したいというのではなく、どこか過去に囚われたような瞳をする事だってある。そんな時には何かを言ってやりたくなるが、人当たりもよくおせっかいでお人よしのケイスに、その時だけは近寄りがたいものを感じてしまう。ハウストは一瞬自分の友人が知らない人間のように見えて少しだけさびしくなる。口が裂けてもそんな事、誰かに言う事はないだろうが。

「悪かったよ、ケイス。他にもお前の失敗談はたくさんあるから一つずつ紹介していこう」

「え、何。僕の失敗談の話だったわけ、それ。ていうかそんなに失敗談ないし」

　さりげなく漫才のような会話をした旧知の二人の息が合っていたからだろうか、騎士たちはまた笑った。

「あれはケイスが体育祭で……」

「やめろ」

　どこか天然ボケの素質があるはずのケイスがツッコミ役をするのがツボにはまったのだろう、声をあげて笑う騎士たちは様々にくだらぬ内容を談笑しながらも、色町を後にした。冬もそう遠くない季

節、風が一瞬吹き上げて、一行は寒さに身をすくめながら。くしゅん、という小さなくしゃみに意味もなく振り返ってケイスは、翻る黒い長髪を見た。女性が一人、騎士たちと反対方向に向かって歩いていただけだ。特になんの変哲もない光景。意味もなく振り返った自分に気づき、そのまま視線を緩慢に空へと移す。うっすらと煙る灰色の空だった。青空が見たかったような気がして、今日は朝から曇りだったのに何を、と自分の考えを振り落とすように首を振る。曇りの日は特に気がめいるわけではないが、今はどうしてか雲のない空を見たかった。わずかに目を細めたケイスの表情は明るいものではなかった。

７４　騎士見習いと迷子の羊２（後書き）

そういえばこの話の真ん中あたりで学園卒業、
学園編も終了です。学園、意外に楽しかったです。
サブタイトルあれですし、学園卒業で切らなかったのであれですが。
（どれだって；

災害についての部分は本当は消そうかと思いました。
ですが、私は今回の事で何かの力になりたいと切に願いました。
そんな中で、災害支援に行く自衛隊に胸をうたれました。

自衛隊は軍隊のように思われているけれども、人々を助けるために
いるのではと思い、私もそういう風になれたらと思いました。
力は誰かを助けるためにあるのだとも感じました。
上手くいえないんですが、大変な時に何か誰かの力になれたら、と
いう気持ちが表現したくて、やっぱり消さない事にしました。
もっといっぱい考えて伝えたい事はあるのですが、やっぱり上手く
言えないです…；

ですが、やはり時期が時期なので、少しとはいえ問題に思われた方
はいつでもおっしゃってください。
言う価値もないと思われるほどでなければよいのですが。

亡くなられた方のご冥福と、被災地のよりよい復興を祈って。

75　騎士見習いと迷子の羊3

下っ端騎士見習いをはじめてもうすぐ一年がたつ。ケイスはシェーン王都の城下町を駆けていた。騎士団の本拠地を離れて、今日は届け物を王都の入り口であるいくつもの門に届ける仕事をいいつかっていた。それは確かに下っ端にふさわしい仕事だった。

一つの角を曲がったところで、けたたましく大きな音がしてケイスは肩を跳ね上げた。ガラスの割れるような音で、更には固い何かが叩きつけられるような音までする。酔っ払いが引き起こした騒ぎにしてはうるさすぎるし、夕方が近いとはいえまだ夜にもなっていない。何事かと自然足が動いてしまうのは、それほどまでに大きな音だったから仕方がないだろうと言い訳してしまえた。ほとんどは城下町警備隊に譲っているものの、騎士団の仕事として喧嘩の仲裁も存在する。大事になりそうだったら間に入らないといけないという考えもまたケイスの中にはあった。

入り口は広くない店がその騒ぎの原因だったようだ。中では誰かが言い争うような様子が窺える。だが、騎士見習いの制服姿のケイスがやってくるなり、店内にいた男たちはにわかに静かになった。

「やばい、騎士団だぜ」

「なんでこんなところに」

「いいからずらかるぞ」

脛（すね）に疵（きず）を持つ男たちなのだろうか、血相を変えるほどではないものの慌てて店の裏口へと向かった。ケイスは何も彼らを糾弾しようというつもりはないし、全くといっていいほど事情を知らないのでいささか困惑しつつも彼らを追おうとした。店内はやはりさほどの広さもない飲食店のようだった。転がった椅子やひっくり返った机に、窓ガラスが割れている。喧嘩の後にしては少し暴れすぎだろうが、悲惨というほどではない。見ると、壁に寄りかかる女性が一人うなだれるようにして座り込んでいる。店内には彼女しかおらず、

ケイスは話しかける事にした。
「大丈夫ですか？　一体何があったんですか？」
黒髪の女性は首を折って俯いたままだ。喧嘩の仲裁にでも入って飛んできた拳にぶつかったのだろうか。ケイスはしゃがみこむと、その女性の肩を叩こうとした。まるで避けるようにして女性は身をよじった。自分の手で片方の腕を押さえると、ゆっくりと顔を起こした。気だるそうに、あるいは何かの恨みをぶつけるかのように眉を寄せていた女性は、ケイスと目が合うとかっと目を見開いた。その瞳に浮かんだ感情が何なのかをケイスが窺おうとする前に、女性は顔を背けた。
ケイスは、この女性の顔を見た時にまず目の周りのアザが気になった。というより、どんな美人でもそんなに目立つアザがあってはまずそこに目が行くだろうというくらいの青いアザだった。そしてよくよくは見る事が出来なかったが、彼女が思っていたよりも若いという事が分かった。というよりももしかしたらケイスと近い年頃かもしれない。二十代か、それよりももっと若いか。長い黒髪は、毛先で丸まっており彼女が動くたびに揺れた。
「……騎士？」
どこか震えるような声に、ケイスは眉を寄せる。嫌な目にでも遭わされたのだろうか、騎士団の保護を求めている？　ここで見習いですが、などと言ったら相手を安心させられないかもしれない。見習いとはいえケイスはシェーン王国騎士団の一員ではある。
「ええ。もう大丈夫ですよ」
女性の体は一度大きく震え、あまりしっかりしているとは言えない動作で立ち上がろうとした。ケイスはその補助をしようとして手を伸ばすが、すげなく振り払われた。壁に手をついて、彼女は顔を上げないままに店内を歩こうとする。
「待っ……」
「おい、そこのお前動くな！」
「げ、騎士団じゃねえか。こんなところで何してる？」

次の瞬間店に飛び込んで来たのは城下町警備隊の男たちで、既に剣を抜いているものまでいた。驚いてケイスは自分が騎士である事を証明しようと口を開くが、背後に流れる空気の動きに気づき眼球を動かす。

「あ……君、待って！」

「そこをどけ、くそ騎士」

はからずもケイスが立ちはだかる形になり、黒髪の女性を追おうとするかの警備隊の進路をふさいでしまったが、ケイスは警備隊の表情にあっさりとどく事が出来なくなってしまった。騎士団と警備隊の仲の悪さは貴族と騎士団の不和よりもひどく、見習いであろうと騎士であるケイスに対して敵意が向けられるのは仕方がないとはいえ、彼らはどうにも黒髪の女性にまでかなりの恨みを向けている。無辜（むこ）の女性を前にしてそれはないだろうと言いたくなる形相で、大声がとどろくまではケイスはつっ立ったままでいた。

「どけつってるだろうが！」

実力行使でケイスをどかすと、警備隊員は店の奥へと進んだ。慌ててそれを追ったケイスの視界には、もうとっくに黒髪の女性はいなくなっていた。上手く逃げれたらしいと喜ぶべきなのか、事情を知る人を取り逃したとくやしがるべきなのか。だが、ケイスは彼女の殴られた痕が気にかかっていた。あれは相当な強さでなければああはならないだろう。もっとよく見ていたら、ケイスは唇が切れていたのも見る事が出来たはずだ。

店の裏口を出ていくらもしないうちに、警備隊の一人につかまった。ケイスはどうやら彼らの反感をかってしまったようだ。

「おいおい騎士さんよう、てめえ何してくれとんじゃ」

「いえ、私にも何が何やら……」

肩にかかった力はあまりにも強く、ケイスは顔をしかめなくてはならなかった。それが更に警備隊の苛立ちをあおる。

「いいから王城へ帰れっ、邪魔しやがって」

見れば、当然のように黒髪の女性はいなくなっている。先ほどか

ら視界から消えているのだからもうとっくに遠くへ逃げてしまっているのだろう。彼女には聞きたい事がまだあったのに。だが、そう考えるのはケイスだけではなく、むしろ警備隊だけの仕事だと思っているものばかりがそこにはいた。

「あの、この店には何かあるんですか？」

「うるせえ、目障りなんだよ、早く消えな！」

ケイスは先ほど警備隊員たちが黒髪の女性に向けた視線の強さを思い、この店では過去にも何か問題が起こっているのではないかと推測したのだが、それには返事すらもらえないようだった。彼らはただこの場に騎士がいるのがうっとおしいのか、ただ退室ばかりを促している。

「あの」

「うるせえっつってんだろ！　いい加減にしねえと刺すぞ！」

表現がストレートすぎて逆に冗談かと思うような言い方だったが、どうやら相手は本気のようでケイスに向けて抜き身の剣を差し出してくるのでひとまずは店を出た。外では騒ぎを聞きつけた野次馬たちが店内を窺うようにして集まっていた。心配そうな顔の者、顔をしかめた者、よく行く店か知り合いのいる店なのか、訳知り顔までいるのでケイスは一人の男性の下へと駆け寄った。

「あの、何かご存知ですか？」

「し、知らねえよ」

「何か少しでもいいんです、知っている事があればどうかご意見を」

その男性は、ケイスが店内で警備隊員としていた会話をも聞いていたのだろう、呆れたように青年を見やった。青年のエメラルドの瞳には物事をまっすぐに見つめようとする決意のようなものが光っていた。警備隊員を前にして剣を抜かれるまで今と同じ顔をしていた人間だ。

「あんた、頑固だな……」

先ほど見たものもあって男性は折れるよりないと思ったので、困ったように眉を寄せると一つ息を吐いた。

「おれも詳しくは知らないよ。だがあの店には……いや、店に出入りするやつにはよくない噂があってな……」

男性は声をひそめ、何かに怯えるように周囲に視線を這わせた。騎士の制服であるためケイスの姿はいささか目立つが、今はそう人目をひいてはいない。まして城下に一人はいそうな格好をしている男性もこの人混みの中では誰も注目しない。というのに、彼はケイスに手招きをすると首をすくめるようにしてから、言った。

「“ハンプ”を扱う人間が出入りしてるってよ……」

一つの国の都ともなれば、繁栄の影には濃い闇も存在する。ハンプ、それは服薬を続けると人の精神あるいは生命までもを削る毒性の高い薬の事を言う。危険ではあるのだが、服薬すれば高揚感を得られ、一時的に身体能力も向上させる。麻薬（ハンプ）についてはそこまで驚きを与えるものではないはずだが、ケイスに身近に迫ってきたのははじめてで目を見張った。教えてくれた男性もハンプの名が示す危険性を遠ざけるべきものと知っているのだろう、真っ当な人生を歩みたいがゆえに声を小さくしたようだ。

「ハンプ……」

探そうと思えば王都でもその毒性と依存性の高い薬物は捜し出す事が出来る。だがハンプを隠そうとするものは当然いるわけで、だから今回のように店内に居た男たちは逃げ去ったのだ。警備隊は、ハンプ（それ）を知っていてやって来たのだろうか。あんなにも血相を変えて黒髪の女性に詰め寄ろうとしたのはそのせいで、店に居た男たちが落ち着きを失って去っていったのも、ハンプのためか。

「おい、見世物じゃねえぞお前ら、ただのケンカだ、とっとと解散しな」

言葉荒く、警備隊が店内から出てくるなり野次馬を追い払おうとする。一部は大した事なかったのかとすぐに引き上げ、それでも尚その場に居残ろうとしたものは警備隊員に睨まれて踵を返した。そうしてほとんどの野次馬たちが消えると何事もなかったかのように、城下は普段の様子を取り戻したかのように見えた。

薄らいだ日差しが、いつの間にかオレンジ色になっていた。暮れ行く空色に引き込まれたように見上げていたケイスだが、自分の使命を思い出す。彼は、まだ仕事中なのだった。荷物を他所に届ける仕事があったのに、騒ぎで忘れてしまっていた。物事のほとんどに対して真面目一辺倒のケイスにとっては、事情があるとはいえ由々しき事態だ。これまでに作った遅れを取り戻そうと、騎士見習いは渋い顔をして城下を駆けた。

† † †

あの日から、黒髪の女性の事が気になって仕方がない。ハンプが関わっているというのもまた、ケイスの頭を悩ませていた。結局、あの日には遅くなってやってきたケイスは職場の人間に怒られはしたものの、城下町での騒ぎがあったためにそうお咎めはなかった。彼らもいくらか城下で起こった事を知っていたのだ。だが、皆が先輩にあたる職場の面々にはハンプについて問う事は出来なかった。こういう時にはやはり、ハウストがいいだろう。

ハンプというのは、ずっと前から人々の生活の裏側に存在する。ハウストも、その目で見た事はなくとも、過去に中毒者を見た事がある。ハウストの父によるとひどい方ではないという事だったが、

それでもハウストの目には異様に映った。正直、目を背けたくなってしまった。なんとか出来ないものかとは思うものの、ハンプはお金に換わる。自分に火の粉が降りかかりさえしなければ見て見ぬフリもする父を持つハウストは、何も出来ない自分をしるといつの間にか父を真似るようになっていた。何とか出来たらしたいものだが、現実的に考えればまだ騎士見習いの彼に何が出来るだろうか。ハウストは、ハンプを商う人間たちは財力を持ち、城下町の裏社会ではかなりの力を持つと知っている。一人の青年が彼らの元へと飛び込んで行って出来る事といえば、死なない程度に逃げ帰る事くらいだ。

　ケイスに対して、ハウストの所見をほとんど伝えると、彼もそれは分かっているようだった。もちろん単身ハンプ駆除に行くつもりはケイスにもない。知りたいのは危ない薬物に関わった人間の行く先だ。

「そりゃ、捕まるだろ。ま、いろいろ問題がつきものだから最悪でも死ぬまで牢の中、だろうな」

「なら……ハンプの具体的な症状は？」

「やっぱ幻覚見るとか、ハイになるとか……。まあ、薬が切れるまでは真っ当でいられる事が多いらしいが、それも長く服用するとまともな期間も短くなる……とかじゃねえかな」

「何とか、中毒症状から抜け出す事は？」

「さあなあ。一般的には無理だろうと思われているがな」

「……例えば、魔術では何とかならないか」

　ハウストは頬をかくと、考え込むように眉を寄せた。

「それも知らんなあ。俺は魔術には疎いから。……ていうかお前、やけに気にするな。ほんと、あの日何かあった？」

　ハウストは、ケイスがただ城下で小さな騒ぎに関わっただけではないと推測していた。ケイスは、ハウストに全てを話していなかったから、気になる黒髪の彼女についてもハウストは知らないままだ。

「いや、別に。何もない。ただやっぱり人の命を削るものだから気になっただけだ」

「……ふうん？」

かれこれケイスとハウストの付き合いは、六年近くになるが、これだけ長いと相手の考えまでは読めなくとも、方向性くらいなら読めてくる。ハウストはいつか学園の同窓エーファが借り物に来た時に見せた顔をしている。

「何を勘違いしているかは知らないけれど、たぶんそれ違うから」

「うんうん、俺は経過報告を待つよ」

「だから何を勘違いしているのかは――」

「ケイス、ルブラン伯爵が国王陛下の行幸（みゆき）に随行するって？」

割り込まれて助かったので、ケイスは同期の仲間にすぐに向き直る。逃げたな、と目をすがめたハウストだが、逸らされた話題の方も気になった。その同期はロルフ・ドローネーといって実はフォルクマール学園卒業生だった。ケイスは覚えていないのだが、ロルフはケイスと下級学年の時に同じクラスだったらしく、時々こうして気さくに話しかけてくる。

「ああ、そうみたいだ」

「ルブラン伯爵っていったら、かつての副長だもんなー。今回のは軍部視察も入ってるっていうし、引退してもすげえなあ」

ケイスは住まいをルブラン伯爵邸から騎士団宿舎に移してから、養父であるベネディクトとの交流が上手くいっていない。国王への随行も、職場で噂が飛び交っているのを聞いた後に伯爵邸からの報せを受けた。ロルフは同窓であるというのもあるが、ケイスはルブラン姓のために職場ではいくらか有名だった。養父（ちち）はかつての騎士団ナンバー2なのだから仕方がない。とはいえ、ケイスはベネディクトの血筋を受け継いでいない。そのためか、すぐにケイスへの注目は消えていった。いくらか家名や出自が重要であるとはいえ、王国騎士団の世界はやはり実力が全てで、血縁関係や家名はないものと見なすべき、とも考えられているのだ。

それにしても、当たり前といえば当たり前だがこうして全て決まった後にケイスに知らされるというのは、どこか無力感を思わせる。

伯爵を遠ざけてきたのはむしろケイスの方なのに、当然のようにベネディクトは自分一人でどこかへと消えてしまうのだ。相手は大人で、五十も後半で、まして血はつながっていないとはいえケイスの親だ。気にする必要はないのだが、いつか、自分のいないところで全てが終わってしまったあの日の事を思い出す。

「……じゃあ、ルブラン邸に遊びに行こうかな」

「なんで」

「今が狙い目かと」

鬼のいぬ間（ベネディクト）に、というようなハウストにケイスは苦笑する。また彼は何か気遣ってくれたのかもしれない。黙り込んだケイスを現実に戻すのはいつも彼だ。下手をすると空気が読めていない勢いでケイスは黙する時があるので、ハウストのサポートにはいつも助けられている。なんとなくおかしなものだった空気をロルフも察していたのだろう。明るい声にして会話を広げる。

「いいな、おれも行ってみてえわルブラン邸」

「鉄壁執事が居るんだよな」

「ああそうか、フランツが居るから分からないな」

ルブラン邸の老執事は、主が不在の場合にその采配を振るう。かつての住まいであった場所にケイスが行くのには何の問題もないが、友人が一緒ならどうだろう。断固拒否なんて事にはならないだろうが、なんとはなしにすんなりいくようには思えないのはケイスがルブラン邸を心の底から帰るべき家と考えていないからだろうか。ルブラン邸で一番親しくしていた侍女のエルザはいなくなってしまったし、帰りたい場所ではないが、まさかそこまでとは。また沈みかけた思考に、ケイスは今度こそ自分で顔を上げた。

「ならせめて、城下にでも行こうか。何か食べに」

平素そういう提案をする事がほとんどないケイスに、ハウストは少なからず目を丸くした。ロルフは目を輝かせて応じる。

「おごりか！」

ケイスはそれに、どう対応したらいいか判断できず、苦笑だけ浮

かべた。

城下は今日もほどよい喧騒に賑わいでいた。もうほとんど夕暮れの最中、人々は岐路につくか夕飯の買い物や買い忘れを買いに行っていた。デアデス広場を通り過ぎ、大通りからも逸れる。

ケイスとハウストの二人、あるいは十人近くの仕事仲間との食事はよくするが、少人数でロルフがいるというのは彼らには珍しい事だった。ロルフとは同じ騎士見習いであるというのに、これまでにこんなにも会話を続けた事がなかったが、三人は割合馬が合うようだった。特にハウストとは会話が弾む。ロルフはいわゆる成り上がり貴族——爵位を金で買った家柄で、基本的にはあまり平民と変わらない思想を持っているようだった。ケイスも生まれは家名などないに等しい家だが、成長するにつれ貴族らしさを求められてきたし、育ちは少なくとも貴族の家だ。そのためか、彼ら二人の方がより似通う境遇があるらしかった。会話を聞いている分にも楽しいし、同じ仕事仲間と話が出来るだけでケイスは落ち着けた。

黒い影を見つけてからは、ケイスの意識はそれだけに集中された。あの時、ハンプが関わるらしい店の中に居た女性。

「ちょっとごめん！」

最後まで言い終わらないうちにケイスは飛び出していた。いぶかしむ友人二人を残して。

鍛錬によって強靭になっている足腰は簡単に女性のところへと向かう事が出来た。相手はまだ気づいていない、距離がかなり狭まった頃。突然振り返った女性は目を大きく見開いて、黒髪を翻した。ケイスに後をつけられたと知って駆け出す。

「待ってください！」

意外にも簡単に、彼女は捕まった。踵の高い靴を履いていたから速く走るのは難しかったのだろう。いくらも走らないうちに足を止

め、肩で息をする。その疲労のためか顔は伏せて、毛先がくるりと丸まった黒い髪が左右に動く。顔が持ち上げられると、ケイスは会って二度目でやっとその女性の容姿を堪能出来るようになる。今度は左目に応急処置程度の白い眼帯が巻かれていた。それは確かに気になるが、今は顔立ちの方がよく見たかった。蒼い瞳は目尻が少しすぼまっているためか柔和な印象を覚えるのに、ケイスを睨む眉がしわを寄せているため気丈そうにも見える。いつか見た目元のアザは消えている。少し小ぶりな鼻、顔の輪郭。ケイスは彼女が誰かに似ているように思えていた。

「急にすいません。私はこの間の騎士……です。覚えておいでですか？」

やはり見習いだという事は黙っておいた。今日は仕事の後に城下に来たから、制服は着ていない。余計に騎士に見えないだろうかと心配になった。女性は――いや、もしかしたら少女といっていいほどの年齢かもしれない――またうつむいてしまった。顔を忘れられてしまったのだろうか、そうでなくとも彼女の表情からしてケイスに対する印象は悪そうだ。色よい返事などもらえないのだろうかと思ったが、彼女は口を開いた。

「名前は」

この間聞いたよりはしっかりとした声音だが、彼女は暗い声をしていた。

「ケイスです。ケイス・ルブラン。あなたは…？」

どうしてか一層深く頭を下げると、黒髪の娘は名のった。

「……リイナ」

感情を消そうとするかのような表情に、声色も硬い。リイナの長い黒髪は腰まであって、他の部分はほとんど緩いだけのウェーブがかかっているのに、毛先は円を作るかのように丸くなっているのが印象的だった。

76　騎士見習いと迷子の羊4

ひとまず名前を知れたからとケイスは何かに安堵していた。だが、リイナの方はそうではないようで、用は済んだとばかりに立ち去ろうとしたので青年は慌てた。

「あの！　話が聞きたいんです。詮索するつもりはないけれど、ただ少し気になって」

風が吹いて、リイナの長い髪は彼女の顔を覆った。どんどん暗くなっていく時間に、彼女の顔色は見えなくなってしまった。

「何が気になるっていうの？」

少し低い声。彼女は怒っているのだろうか、ケイスはふいに落ち着かなくなる。

「いかにも前科持っていそうな女が？　怪しい店が？　それともこの怪我？」

そう、確かにケイスはリイナの怪我は気になっていた。初めて会った時にも――あれはあの時の騒ぎの側杖を食らっただけかもしれないが――怪我をしていた。まさか彼女がひどく運動神経のない人で、転んだり誤って階段から転落したのだろうなどとは思わない。あまり考えたくない事だが、リイナは――……。

夜になってきているからだろうか、風が出てきたからか、どこかこの場所の温度が下がったように思えてきた。ケイスは言葉選びを間違えたのだろうか。焦るあまりに頭の中は混雑してきた。何を言ったらいいのやら。

「あ、えっとその、実は僕、まだ見習いなんだ。騎士見習い」

仕事の時や年上の人間には敬語を使い自分を「私」と言うケイスだが、ほとんど素のままの言葉づかいに戻ってしまっていた。リイナがすぐに去ってしまうんではという焦燥から、とりあえず口から飛び出したのはそんな言葉。何の暴露をしているのかと我ながら呆れるが、それは後でいいだろう。

「だから、別に、何も気にしなくていいと、思い……ます。ただの下っ端だし。今日だって制服じゃないから、騎士なんかに見えない……でしょう？」

言いながらその通りな自分がいる気がして嫌になるが、リイナの警戒を解けるのならば何でも言おう。まだ言葉を重ねるべきだと考えるケイスの耳に、鼻から息を出したような、小さな笑い声が届く。顔にかかる黒い髪をいくらか手で押さえ、リイナは片方だけの蒼い瞳をこちらに向けていた。ほんのわずか、たわむように弧を描いた瞳で。

「……見えない」

「そっか、良かった」

何がいいのか、後に思い出したらそうツッコミを入れていただろう。とにかくケイスはリイナの警戒心をいくらか解けたと気分を上昇させていた。彼女の声も、幾分明るく聞こえたのは気のせいではないと思いたい。

「怪我の事、聞かない方がいいですか」

「うん」

即答だった。少々面食らいつつもケイスはこのまま会話を途切らせたらリイナは消えてしまうだろうと感じて無理矢理に口を動かしていた。

「……あの、何ていうか……いろいろあるとは思いますが、その……」

ケイスは自分より頭一つ分小さな――瞳に宿るのはまだ年若いそれだと思ったので――少女を改めて眺める。長くてつややかな黒髪。これだけの濃い黒は、染めたのでなければこの辺りでは少し珍しい。そのためだろうか、どこか異邦人のようにも見えるのに、それに反する懐かしいような感覚も覚える。もしかして、彼女と過去に出会った事があるのだろうか？　黒髪が珍しい通り、これまでに会っていたら覚えているはずなのだが。

「そうだ、何か困った事があったら言ってください。いつでも伺い

ますから」
　いつかエルザに言われた言葉だった。そっくりそのまま。何のオリジナリティもない。だがエルザがそれを口にした時の気持ちが分かるような気がした。そう思うとシチュエーションもどこか似ている。それとも人間というのはアザを持つ者には「困ったら言って」と言いたくなるようなものなのだろうか。
　リイナはまた顔を下に向けてしまった。つられてケイスも地面を見つめる。自分の靴を見たところで、彼女と同じ考えは抱けないと分かっているのに。
「……“いつでも”？」
　すぐに誰の声かは分からなくて顔を上げたケイスは、リイナに決まっているだろうにと自分を叱咤する。言葉をつむいでくれているのは、今度はリイナの方なのだ。「もちろん」と言おうとしてケイスは少女の目が切なげに、何かに耐えるように細められたので言葉を失った。彼女が顔を上げていたのは一瞬の事で、すぐにつむじがこちらを向く。
「無理だと思う。いつでもなんて。どうせ住まいはお屋敷なんでしょ？　抜け出したら大変よ」
「いえ、騎士団の宿舎に住んでいるので……こっちも抜け出すのは大変ですけど」
　かつてケイスはハウストに付き合わされて夜中の宿舎から脱出した事がある。ケイスの方には用はなかったのだが、どうやらハウストは真面目すぎる友人の肩の力を抜かせてやろうと思ったのか単に個人的な用があったのか――とにかく、彼のせいで二人で翌朝大目玉を食らった事がある。宿舎にも規則があり、騎士というのは規則を守って一人前になれるのだとか何とか小言をたくさんもらった。それを思えば抜け出すのはそう難しくなくとも、戻った時が面倒だというのはもう身をもって分かっている。
「じゃあやっぱり無理ね。どんな時にもやってこれるなんてはずがない」

寄せては返す波のように、リイナの声はまた低く落ちてゆく。そんな事はないと否定したいが、ケイスにはその材料がない。

「どんなに時間がかかっても、行くから」

行きますから、と言いなおしてケイスはリイナの顔が見たくてずっと視線を落としていた。

ほう、とため息のような音が聞こえてケイスは焦った。またやらかしてしまったのかと、ばつの悪そうな顔になるのを、リイナが髪の毛の隙間から覗いているのを、彼は知らない。

夜の空の下、お互いの顔くらいしかよく見えなくなってきた。視線は合わないまま、お互いを見つめる――。静寂が二人を包み込んで、広い空の下に居るというのにどこか狭い場所にいるように思えていた。

「ケイス」

よく知る声に、呼ばれた名前の主は眉を持ち上げる。首を回して、彼を呼んだ声の持ち主を探すと、十数メートルもいったところにハウストがロルフと立っていた。何をしているのかという怪訝な顔を見せて手招きする友人に、ケイスは一体どちらを優先すればよいかと逡巡する。やはりリイナに一言断ってからハウストに待ってもらうよう頼み、またリイナに向かおうと決める。首を元に戻した先には、もう背中しか残っていなかった。リイナはケイスの目の前から去ろうとしている。

「あ、待っ――」

初対面の時と同じだ。ケイスが追おうとして、それがかなわないあの日と。だが今度のリイナは駆けてもおらず、踵の高い靴の音を鳴らして優雅に去ろうとしている。左手を持ち上げて、ひらひらとさせると振り返りもせずに闇に溶け込んでいく。手を振ってくれたのだろうか。さよならの合図を？　本当は追わなければならないと衝動的に感じていたのだが、その合図が急に愛おしく思えて、再会を願うものだと思えてしまい、ケイスは足を動かせないでいた。どちらにとっても友好的で楽しい会話だったとはいえないだろうが、

リイナはケイスに少しは気を許してくれたのだと解釈してもいいのだろうか？

肯定的に考えると、ケイスの口の端は両方とも持ちあがってしまうのだった。それでもどこか、物悲しいような、不思議な感覚。胸が落ち着かないが、満たされる思い。

彼女とは、絶対にもう一度会いたい。それだけは確かだった。

「んで、さっきの誰だったんだ？　いい加減教えろよ」

夕食をケイスとハウスト、ロルフの三人でとって、一息ついた頃だ。その店は騎士団の仲間と何度か行った場所で他の騎士もよく行くために店主は彼らの事も覚えていて快く向かえてくれた。食後のひとときをゆっくり過ごそうとする騎士見習いたちを、店主はほほ笑ましく思い目を細める。

「だな！　けっこう美人そうな感じだったよな。遠くてよくは見えなかったけど」

「ロルフ、俺より目ぇいいんだな。顔なんて暗かったし全然見えなかった」

「ああ、鳥目もあるんじゃね？　おれ結構暗いところでも視界悪くなんないけどね！」

自分が口を挟まなくとも話を円滑に進める彼らに会話は任せ、ケイスは空になった皿に視線を落とす。リイナの事は、きっと上手く説明出来ない。勉強は好きだし出来る方だったケイスだが、何かの説明をするのは不得手だ。その上、今回の相手は何かケイスの予想の範囲を超えるような存在の気がして、全て言葉にしづらいのだ。

「って聞いてんのかお前！　お前の話だって」

肩をゆさぶられ、ケイスは首をがくがくと左右に動かすはめになる。

「上手く説明出来ない」

そうでなくとも、リイナは麻薬（ハンプ）と関わりがあるはずなのだ。問題にでもなれば事だ。自分の気持ちをそのまま口にすると、友人たちは納得がいかないというように口をへの字にした。ハウストは、すぐにそれを悪戯っぽい笑顔に変える。騎士団宿舎を抜け出そうと言った時と同じ顔だ。

「酒だな。よし、ロルフ、プロシットを持て」

「プロシット三杯はいりまーす！」

アルコール飲料の名前を口にし始めた友人たちにケイスは目をむく。「酒入っても出ないよ？」と注文を取りやめようとするも、相手が二人がかりなので無理な話だった。店主はすぐに若者たちに酒を用意した。気前良く酒の肴（さかな）もつけて。あまりアルコールに強くないケイスはそういう気分にはなれなかったが、結局はプロシットを口にした。

最終的にはリイナについては話す事はなかったが、アルコールによって混濁する意識の中で、ハウストの訳知り顔だけは読み取れたような気がする。

†　†　†

液体が、液体のたまった場所に雫として落ちた。その音でリイナ

は我に返った。小さな音だったが、彼女を現実に引き戻した音はあまりにもリアルだった。現実になんて帰って来たくもなかった。現実なんて、彼女の世界なんて――なんてロクでもない世界。いっそあのままどこかへ行っていられたらよかったのに。

　足元には人が転がっていた。二十代後半の男性。リイナは彼の正確な年齢を知らない。短くはない間一緒に居たはずなのに。彼は、もうこれ以上年は取らないのだろう。年齢を重ねる事が出来なくなってしまったのだから。また一つ、雫が落ちる。赤い血だまりの中に、同じ色のそれが。手の中の硬い感覚にリイナは指の強ばりを緩める。自分は一体何を持っていたのか。からんと乾いた音がして、地に落ちたそれを見る。小さな短剣だ。まるで血だまりの中に漬けたみたいに赤くなった刃渡り。

　悪夢のようだ。これではまるで、現実が夢のようになっている。今まで見ていた夢の方が、幸せな世界だった。いや、これは本当に悪夢、夢なのかもしれない。だって、人がまともに生きるのにはまともな世界が必要なはずだ。だがリイナの世界はまともなんかではない。狂っている。夢の世界の方が上手く息が出来る。

「……マルク……」

　あなたが悪いのよ。言いたくても、舌が凍ったように動かなかった。彼は、リイナを殴った。ひどく暴行を加えた。マルクは上背があって体格もかなりよかったから、殴り飛ばされると壁まで体が飛んでいった事もある。抵抗出来ないリイナに、彼は何度も何度も拳を振るった。それで、ある時にふと手を止めてひどく後悔をする。まるで別人のようになって、今度はリイナをしいたげたその手で優しく撫でるのだ。何度も何度も、いたわるように、いつくしむように。「ごめん」と謝りながら、誠意のこもった声でリイナを慰める。彼女をいたぶったのは他の者だとでもいうように、「こんなひどい事を」と口にして「ごめんな」とやはり謝る。本当にそう思っているのか怪しいものだが、彼はその時その時にちゃんと心からの言葉をくれる。「愛しているよ」だから許してくれ。「ごめんな」だか

ら許してくれ。「リイナ」許してくれ。

リイナは許してあげた。一度目は、今度されたら出て行こうと決意した。二度目は、今度こそこれが最後だと思った。三度目は、痛みに上手く頭が回らなかった。四度目は、泣いて懇願した。五度目は、喉がひどく痛んで、声も出なかった。

許して。リイナこそマルクに願った。お願いだからあたしを解放して。許して。助けて。誰か、ここから抜け出す術を教えて。

リイナはマルクを愛していたけれど、それは彼が豹変するまでの話だ。人格が変わってしまう間のマルクは愛せない。きっと薬（ハンプ）が悪いのだろうけれど、今のように頻繁に服用する前からマルクは気分屋で、意見の変わりやすい人間だった。それが顕著になったのはハンプのせいなのだ。機嫌のいい時にはリイナに何でもする。ものだって買ってくれるし、食事の用意だって手伝い、壊れ物に触れるみたいにリイナに手を伸ばす。だが、ひとたび機嫌が悪くなれば、ものは投げるしひっくり返す、ちょっとの頼みも黙れと両断、岩石でも打つみたいにリイナを殴打する。

何故、こうなってしまったのか――。

初めて会った時のマルクもひどいものだったけれど、ハンプを手にするまではもっと、きっと、まともだったはずだ。手につけた職も、やってきた事も、とてもまともとはいえない、ひどいものだったけれど、リイナには誠実であろうとしてくれていたのに。ハンプは、人を壊す。現に、リイナだって――。

とにかく、彼をどうにかしなければ。かつてマルクであった人間を。すっかり冷たくなってしまった、死体を。

77　騎士見習いと迷子の羊5

ベネディクト・カール・ルブラン伯爵は、国王陛下にご随員する直前に、息子に会いに来たらしい。折り悪くケイスは出かけていたので直接会う事はかなわなかったが、先輩騎士にそれを教えられた。よろこべばいいのか、分からない。結局は会えずじまいで、養父がやって来たという自覚がないままだったが、なんとはなしに奇妙な感覚が胸でうずいていた。

そうか、彼は会いに来たのか。

少しだけ、いつもより仕事をがんばらねばと思えた。気持ちは上向きになっていた。

その翌日。ケイスは至急足を運んでくれと城下町警備隊の人間に声をかけられる事になる。

朝の出勤後、いくらか仕事をして、ひと段落ついた頃だった。珍しい顔――というより知らない顔を見て、騎士たちはそれが警備隊のものだと知ると顔をしかめた。だが相手には何か使命があるようで、喧嘩を買おうともせずに探し人を目指した。

「ケイス・ルブランさんはいますか？」

その問いに答えて、ケイスは城下町にまで出かけて行った。突然の事、仕事中でもあったので上司にお伺いを立てたら案外あっさりと許可をもらえたのは何故なのだろうか。考えながら警備隊員について行くと、どうやら建物の中に入るようだった。彼は、この場所がどんな場所なのかを教えてくれた。王都シェーンには犯罪者を収容する場所は大きなものが二つあるが、最終的にそこに行き着く場合でもそうでなくとも、輸送するまで一旦犯罪者を軟禁する場所が必要になる。そのうちの一つがここで、一つの簡易留置所のようなものらしい。要は牢屋だ。ケイスはまだ犯罪者に知り合いはいないはずだが、何故ここに呼び出されたのだろう。看守がケイスに用があるのか、それとも人ではなく場所が重要なのか。

薄暗い空間に案内されて、明かりが燭台の上のロウソクしかないという場所へ来た。鉄の柵が下りていて、その向こうには犯罪者か容疑者がいるという部屋にまで来たのだ。ケイスは案内人を振り返った。

「一体、どういうわけですか……？」

「今朝捕まえた殺人犯だ。お前の名前を呼ぶのでな。それ以外は口にしない。犯行についてしゃべるのは、ケイスという人間がここに来てからだとぬかす」

顎をしゃくって案内人は鉄の格子の向こうを指した。そこには、長く黒い髪の少女がたたずんでいた。石畳の上に置かれた華奢な椅子に腰掛けて、くるりとした毛先は揺らさず、うつむいていた。

なんでこんな事になったのか。ケイスにはさっぱり分からない。殺人犯と、さっきの男は言ったのか。彼女は、リイナは、人を殺してこの牢の中に居るのか？　何故ケイスを呼び出したのか？　黙秘をつらぬいてまでどうして、人を呼びたかったのなら会ったばかりのケイスをここに？

「……リイナ…？」

彼女は顔を上げなかった。格子越しに手を伸ばそうとして、ケイスはそれ以上自分の手が動かないのを知った。何故かは分からない。ただ、誰だって牢の中に居るのを見るのは嫌だが、彼女の姿が鉄格子の向こうにあるという事実が受け入れがたく、見たくもない光景を見せられて戸惑ってもいた。震えそうになる手を叱責し、ケイスはとりあえずは言葉をつむごうと口を開くのだが、それ以上は動かない。

ただ、ずっとこうしているわけにもいかないという思いと、彼女に対して何でもいいから言葉をかけてあげなければならないという思いがケイスの舌を動かした。

「僕を、呼んだの……？」
かさついた声は老人のようだった。まるでケイスの方が牢の中に居るみたいな覇気のなさではないか。相手がどう思っているかは今はどうでもよかった。どうしてこんな事になってしまったのか、ケイスにはいくらか推測出来る。リイナはハンプが出入りする店に居たから、どこかでその足がついて捕まってしまったのだろう。いや、違った。先ほどの男はリイナが殺人犯だと言った。殺人の容疑で捕まえられたというのだから、その現場に運悪く居合わせでもしてしまっただけなのだろう。麻薬（ハンプ）の事はともかく、人を殺す疑いをかけられるリイナというのを想像出来なかった。実際そうされてここに居るのだろうが、殺人という行為と目の前の少女が結びつかない。
「話しておきたい事があるの」
顔をこちらに向けないまま、リイナは昔語りでもするように思いを口にした。ケイスは、その一言ももらさないようにと五感を総動員させて彼女を見つめた。
「この国は、変よ。王城に、シェーンの転落を願うものがいるはず」
唐突な内容だった。ハンプと殺人の関わる少女が口にするには、あまりにも規模が大きく壮大な話。何の事を指すのか、もしかしたら何かの比喩なのかという疑いも抱けない。ケイスはただその言葉の意味をそっくりそのまま受け取るのなら、シェーン王国の情勢に問題が生じ、そこにつけいれようとする国賊がいるという告発になるのではないか？
「それが誰だかは分からない。でも、あたしたちにハンプを売りつけて商売をさせるようになったのは、そいつよ」
リイナの言う国賊は、麻薬を売りつける事もするらしい。それは、国を内部から腐らせようと意図しての行為だろうか？　そもそも、そんな事がありうるのか疑問だが、ハンプの方も勝手に沸いてくるのでなければ、当然売りつける者もいるだろう。だが、ハウストの話だとハンプが王都に出回るようになったのは何も最近の事ではないという。最近になっての商売を、その国賊が行なっているという

のなら、代替わりしただけとも取れるが。
　それにしても、リイナの言葉は一体どこまで信用していいのだろうか。疑いを向けたいのではない、ケイスはリイナの事をあまりに知らなすぎた。裏の社会を、知らずに育った。彼のエメラルドの瞳が曇るのを、リイナは黒髪の隙間から見上げていた。
「……だから、」
　気をつけて。まるで相手を気遣うみたいな台詞は、どうしてか言えなかった。リイナは、どうしてハンプの売人について語っているのか自分自身が分からなかった。本当は、言いたい事は他にあった。たくさんあった。それが今ではなかったもののように、霧散して手の中には何も残っていなかった。言葉を失ったのはケイスだけではなかった。リイナはかろうじて、言っておいてもいい言葉を思いついたので口にしたまでだ。
　それにしても、あの売人についてはリイナも分からない事が多すぎる。どうやら裏社会とは関わりのない生活を送っているらしいケイスには、気をつけていれば特に問題のない事象なのかもしれない。だが、どうにもハンプの売人が気にかかるのだ。恋人のマルクと居た時に二度だけ会った事があるが、薬の売人でなくたって、あの独特の雰囲気は周囲に違和感を与えていただろう。彼が何かしでかすのは時間の問題、そう思わせるような人間だった。
　国家転覆についても、リイナの予想だった。そうでなければいいとは思うが、思い過ごしかもしれないし、気のせいかもしれない。だが、マルクとの会話を思い出すと、国の中枢に関わる人物であり、近い将来王政に対して考えている計画がある、と取れる内容を話していたのだ。想像力が乏しい人間ならば、全て彼一流の冗談だと切り捨てる事が出来ただろうが、リイナはそうは出来なかった。
　言うべき事は全て言ったとは思わなかったが、それ以上の言葉が出てこなくて、リイナは唇を噛んだ。なんで、こんな重要な時に言語を操る事が出来なくなるのだろう。もしかすると、ケイスと会うのはこれが最後になってしまうかもしれないのに。まるで最後（それ）を知

るみたいにケイスが告げた言葉が、リイナにはひどく寂しく感じた。
「それを、言うために、僕を？」
これで終わりなら、帰るよ。なんていう思いの裏返しのように思えて、リイナは辛かった。もちろん引き止めるなんて出来ないから、ケイスが去ってしまっても、彼女に止める手立てなんて一つもないのだが、顔さえ上げられなかった。
「そう」
「……本当、に…？」
ケイスが違うと言ってほしそうな声をしているのが分かった。彼も、自分にもっと他の言葉をつむいでほしいと思ってくれているのだろうか。もっとずっと、いつまでも語らいたいと。そんなはずはない。今の自分が彼にどう映っているかは知らないが、彼と自分は元々住む世界が違うのだ。生きる場所が違う。今回の事がなければ、最後だと思わなければリイナはケイスをこんなところに呼び出しはしなかった。つまり、やっぱりこれで最後なのだ。
思いっきり顔を上げて、ケイスの顔がどんなものか見てみたい。でも、縮こまる心臓は弱くて、リイナにそんな事をさせまいとする。いつからこんなに弱くなってしまったのだろう。かつてのリイナはもっとまともな、勇気とか気概とか、何かに対する立ち向かう心を持っていたはずなのに。それはいつ、どうして失われてしまったのだろう。消えてしまったものを思えば、泣きそうになる。
涙なんて見せてはだめだ。ここで泣けばケイスはずっとそれを引きずるだろう。自分が泣かせてしまったと思うかもしれない。彼のせいではないのに。いや、直接ではなくとも彼のせいなのかもしれない。結局、自分を泣かせるのはいつも彼なのだ。
「リイナ……」
どうして、ケイスはここまで、牢の前まで来てしまったのだろう。呼び出したのはリイナだ。だが、こんなものを見たくはなかった。
ああ、やるせない。リイナは、どうしても、絶対に掴み取る事が出来ないと分かっているものを見せ付けられて、それでも手を伸ば

さずにはいられないみたいに、ひどく歯がゆかった。顔中に集まったしわはいつまでたっても取れないし、もう震える手はおさえきれない。

（どうして、どうして、どうして――……）

この間会った時、ケイスは言っていた。あーあ。来ちゃった。彼が目の前に現れた時思ったものだ。牢屋の中まで、来てしまった。

「“いつでも”……信じてなかったんだけどな」

それきり、リイナはものを言わなくなった。

彼女の語るものは、かなりの補足を必要とするもので、更なる説明を求めたかった。だが、ケイスはただそれ以上語らない少女を無理矢理にしゃべらせる術を知らず、そうしていいのかも分からず、黙って立っていた。

いつまでそうしていただろうか。リイナはもはや、自分の世界の中に閉じこもってしまった。椅子の上に両膝を立てて、そこに頭をうずめるようにして。黒い髪だけを見せて。つむじのところがほんのわずか明るくなっているように見えた。薄暗いから分からないが、以前見たよりも、リイナの黒髪にくすみが生まれたように感じた。

本来の居場所ではないために、もう話が終わったのだと知れると、ケイスは案内してきた警備隊員につれられて、牢の外に出る事になる。

† † †

事件は起きた。脱獄犯の誕生と、それを手引きした謎の人物が登場する事件だ。ケイスがそれを知ったのは、終わりそうとはいえ仕事中の、夕暮れ間近の事だった。小さな事件ではあったが、殺人犯が牢を抜け出したのだと聞いてケイスはまさかと思ったのだ。その内容までは詳しく語られず、違う人物であってくれればよいがと思ったのだが、「その脱獄したやつは、女らしいぜ。よくやるよな」なんていう文句を聞いて、目を見張ったのだった。

正確にはリイナだと分かっていなかったが、それでも仕事をおざなりに済ませるとケイスはすぐに終業させた。実直な彼には珍しく、慌てて職場を飛び出して行ったので同僚たちはいぶかしがったが、ほとんど帰宅しかけていたのでケイスの事を気にかけるようなものはいなかった。丁度、友人でもあるハウストも休みでおらず、彼は一体どうしたのかとからかう者もなかった。

夕日は鈍く赤黒い色に輝いていた。城下町に赤い影を落として夜の訪れを告げようとしている。雲は朱色と褐色に奇妙なコントラストを生み出して、もくもくと空に張り付いていた。変な空の色だった。そのせいか、ケイスは感じなくていい必要以上の胸騒ぎを感じていた。リイナが脱獄したかもしれないというそれは、まだ可能性の域を出ず、そもそも本当かどうかは疑わしいのだ。しかしこの不安は何だろう？

あの時、もう何日も前になるが、リイナの入っている牢の前に行った時にもっと何かを、何でもいいから語るべきだったのだ。そう思ってしまうほどにケイスは焦っていた。

たどり着いた先は、先日通された一つの牢がある建物の前だ。脱

獄者が出たのが何時頃かは知らないが、それでも今日起こった事だと証明するかのように警備隊がちらほら見える。その中心はやはり、リイナが捕まっていた牢。せめて、この場所が慌しくなっていなければ、望みはあったのに。

「何があったんですか」

何があったかなど、もう分かっている。だがケイスは問わずにはいられなかったのだ。案の定、騎士の制服姿のケイスを見て警備隊はひどく分かりやすく嫌悪に顔を歪めた。予想の範囲内だったが、それでも警備隊はあまりに必死の形相であるケイスの顔に人間味を見せてくれる。

「脱獄だよ。女の……殺人犯だったかな。とにかくまだ捕まってない、捜索中だ」

「名前は！　名前は何て？」

「ああ？　そこまで知らねえよ。自分で調べな」

ここまでが警備隊員の優しさの限界のようだった。ケイスは自分の仕事に戻った警備隊員に視線をやったまま思案した。彼は本当に脱獄した人間の名前を知らないのだろう。であれば、もっと責任ある地位に居る人間を問いただした方が早い。問題は、ケイスがそんな人物と知り合いではないのと、見ただけでそうだと判断出来るような鑑識眼を持っていないという事だ。一人一人に聞いていたら時間がかかる。警備隊の彼が言うように、自分の力で探し出した方がいくらか早いのではないか？　だが、逃亡犯である人間がケイスに見つけてもらうのをおちおち待っているだろうか？　そんなはずがない。たとえそれが、ケイスの顔を知っているリイナだったとしても。

結局考えている時間が惜しくなり、警備隊はそう協力してくれないだろうと判断したケイスは走り出した。リイナが――いや、リイナかもしれない逃亡犯がどこに逃げ込むのかなど、想像も出来ない。シェーン王都は狭い町ではない。それこそ、逃げ出した先に隠れられるような場所はいくらでもあるだろう。

どこに、どこに行けばいいのだろう。

こうして飛び出してから思うのは、ケイスは脱獄した逃亡犯をほとんどリイナと見なしているという事だ。そうでなければ、どうしてここまで必死になるだろうか。そもそも、何故ここまでして彼女を追おうとしているのだろうか。

（分からない――）

分からないからこそ、ケイスはそれを知るために走っているのかもしれない。もう天辺しか見せなくなった夕日を背に、城下を駆ける。

夕日、探し人。フラッシュバックする、忘れられない嫌な記憶。まるで、かつての繰り返しだった。人は歴史を繰り返すなどというが、個人にもそれは適応されるのか？　嫌な予感が消えないどころか増していくようだった。既に何かがケイスの中から失われていくような感覚に、恐怖を覚えた。杞憂であってくれ。勘違いであってくれ。なんでもなかったと言ってくれ。願うたびに、望みは遥か彼方へ消えていきそうで怯えた。

リイナの事が気になるのは、ルネの事があるからかもしれない。リイナはもしかしたら、家族か近しい人に暴力を受けているのかもしれない。家庭内で行なわれる暴力については、ケイスは耳に挟んでいた。ケイス自身、師匠であった人物にいわれのない暴力をふるわれていた。だから、リイナが気になるのだ。そんな風に傷つけられて、人殺しの疑いまでかけられている。ハンプという犯罪につながる薬を近くに置いているのも、ケイスを心配させる原因だった。

だけど何より、リイナの蒼い瞳はケイスの体を勝手に動かすのだ。理由なんて思いつかない。妹や伯爵に似た色だなんていうのは、後付けだ、この国には青い瞳なら何万といるだろう。色よりも形よりも、もっと奥の方でリイナを見つめていた。

会って何回目だろうか、それでもケイスは彼女の瞳がかげるのを見ていたくはない。出来れば笑ってほしい。獄中なんて似合わない。どんな人間だって似合ってほしくないけれど、ケイスは、リイナと

いう女性が日の光の下で微笑んでいる姿が見たいのだ――……！

「……リイナ…！」

脱獄犯が彼女だと見つめるようで、いささか気が咎めたけれど、彼女は一体、どこにいるのだ。もしかするとケイスよりも年下の、細い腕の、いつもどこかに怪我をした、か弱い少女。まるで羊飼いと迷子の羊。なんて事だ、ケイスはまた羊を探している。

ただ闇雲に走っているだけと気づく前に、どこかから悲鳴が上がった。声は少し低めの女性のものだったから、リイナのものではないと分かっていたのに、体は知らずのうちに動いていた。リイナが、そこにいるかもしれない！

「リイナ?！」

どこに、どこに、どこに。

いくつもの角を曲がった。たくさんの地面を、蹴った。酸素が足りなくなって、息切れした。手足は伸びた。筋力もついた。少しは知識も得た。あの時とは違うはずだ。大切な人を永遠に失った時より、ケイスは強くなったはずだ。今度は、大丈夫なはずだ。そんなにおそれる事はないのだ。ここは天下のシェーンの都。ゾンネの小さな町ではない。何かあったら、医者だってたくさんいるし、危ない事に慣れた騎士だっている。だから何かあったって――……心配、ない……。

背は壁に、地面に投げ出された細い足。

『あの人、きらい』

折れた首、丸い毛先が地についた、黒い髪。

『ほら、あんた、ちゃんと言うんだよ』

露出の多い服の真ん中に、赤くなった部分がある。

『お兄ちゃん……』

両手で押さえても、もう留める事は出来ない、血。

なんで、こんな時に封印したはずの過去がよみがえるのか。彼の中で最悪の記憶と、今現在繰り広げられる最悪の状態が交点を見つけたとでもいうのか。

かすかに動く、リイナの体。地面に広がる、真紅の液体。

「あ……ああ……」

リイナは、死に向かおうとしている。かしいだ体が、震える手が、抜けない短剣が、全てが彼女の死が迫っていると訴えている。わずかに身動ぎしても、リイナの体は少ししか動いていない。かけ寄る事も出来なくて、ケイスはただ目の前の真実を消そうとした。目を閉じる事は不可能だったが、ずっとそうしてそこに立っていれば、リイナは元気になって起き上がるとでも思っているかのように、でくのぼうみたいに傍観していた。

「……あ……おに……」

リイナが大きく身をよじったので、ケイスは苦しみを少しでもやわらげようと手を伸ばす。やっと膝がつけて、彼女の元へとやってこれた。緊張の糸が解けたみたいに、ケイスは舌をフル活動させる。

「なんで、どうしてこんな事に！　リイナ！　あまり動いちゃだめだ。ああ……出血が多い……リイナ…！」

「……ケイ……」

「大丈夫、きっと大丈夫だから。心配しないで。すぐに医者が来るよ、大丈夫」

全て自分に言い聞かせた言葉だった。ケイスは自分自身を安心させたかった。大丈夫、心配ない、リイナは死なない。そんなはずが、ないのに。だがこの手をとらずに、どうしたらいいだろう？　上手く息が出来ないのだ。

「リイナ、リイナ！　大丈夫だから…！」

汗だか涙だか分からないものがリイナの服の上に落ちた。そんなものはケイスの目には映らないが、リイナはしっかりとそれを見つけていた。

「……ほんとう……、ここ一番には弱いよねえ……」

いつだったか、母が死んでしまった時も、彼はこうだった。自分では気づいていないみたいだったが、彼の妹よりもずっとたくさん泣いて、先に立ち直ったのは妹が先だった。その後は彼も涙を見せ

ずに気丈にしていたが。
「……お兄ちゃんさあ……時々すごく……泣き虫」
これまでに何度も、言葉を失い、思考を忘れた出来事に出会ってきたけれど、この時ほどのものはなかった。ケイスは、腕の中の存在を見つめた。
『大丈夫ですか？』
腰までの髪は、紛う事なきつややかな黒髪。
『……騎士？』
伸びたる四肢は、か細くともほとんど成人に近い女性のもの。
『私はこの間の騎士……です。覚えておいでですか？』
娼婦ばかりが着るような、面積の少ない服。
『名前は？』
目元に残る、うっすらとしたアザ。
『ケイスです。ケイス・ルブラン。あなたは…？』
顔の輪郭は、幾分骨ばっているものの、成熟した大人のもの。
『……見えない』
遠くを見つめる、くすんだ色の――灰色がかったきれいな蒼い瞳。
――あなたは？
――……リイナ
リイナ。ケイスが王都で暮らして、騎士見習いとして働き、城下町で会った少女。リイナという名の、薬（ハンブ）が関わる小さな騒ぎで初めて出会った、いつも怪我をした少女。眼帯をしていた時もあって、困っている事があるのではと心配した。殺人容疑で牢屋に入れられたと聞いた時には驚き、その場所へと連れてこられて疲弊した彼女に胸を痛めた。ケイスが、会って間もないリイナに出来る事があればと思っていた。脱獄したなんて聞いた時には――……。
「ああ……っ…」
馬鹿ね、今頃気づいたの。少女の灰がかった蒼の瞳はゆるい弧にたわむ。
『お兄ちゃん…』

生え際は、明るいゴールデンオリーブの色をしていた。
「……ル……ネ……」
時を止められるのなら、遡れるのなら、何でもしよう。
腕の中のぬくもりが、このままであるのなら。
「……ほんと、お兄ちゃんて……」
ルネは、ケイスの腕の中で笑った。

78　騎士見習いと迷子の羊6

全てを受け入れるつもりだった。受け入れているつもりだった。死刑になろうとも、牢にぶちこまれようとも、こうなるより前に、もっとずっと全て、仕方がないものだと思うのに成功していた。リイナは、リイナと名のるようになってからのルネは、もう希望は抱かないと決めていたのに――……。

幼い頃に、家族と無理矢理に引き離された。たった一人の家族になってから、それまで以上に大切に思っていた、頼れる兄と。

人さらいに連れられ、やって来たのは知らない町。どこへつれていかれたのか今でもよく分からない。ただ、その町に行っても人さらいは――あの、兄の雇い主であったいけ好かない男は――ルネを手放そうとはしなかった。一度など、その筋の人間らしき歯欠けの男に「いくらだ?」と問われていたにも関わらず、ルネを誰かに引き渡さなかった。今思えば、あの人さらいはルネになんらかの感情を抱いていたのではないか――普段しているような人を買うのだかさらうのだかという、人にするのではない行為を平然とするのではなく、ルネを他のために連れていったのではないかと思われたのだ。

とにかく、それが何だか判明するより先に、人さらいは野盗に襲われる事になる。もちろん同行させられていたルネも一緒だ。最初はルネも、人さらいの男と同じく殺されるのだと思った。それが彼女の運命なのだと感じた。それを受け入れるつもりだった。兄から遠く引き離され、もう望みはないのだと。だが、天はルネを助けた。容姿がいいとかそういう内容だったように思われる。野盗の一人に特に気に入られ、彼らと暮らすようになった。野盗とはいっても、彼らには住む家があり、帰ってこれば家族もあるのだった。不思議なものだった。この頃の生活が、唯一ルネの平穏な時代だったのだろう、兄の庇護下にいた時を除けば。

ある日野盗は王国騎士団によって討伐にあった。ルネが十三歳に

成長した頃だ。なんと長い間野盗の元にいた事だろうか。彼らは粗野で荒っぽく、上品などではなかったが、長い間にルネにもいくらかの情が生まれていた。盗賊行為を強いられる事もなく、ルネは男たちの帰りを待つ女たちの間で育った。騎士団は彼らの家まで焼いた。女たちは殺されはせずとも抵抗すれば怪我をさせられた。ルネはただ怖くて家の中に隠れていたが、燃え出した家に慌てて飛び出した。辺りは混乱に包まれて、一体どこに行ったらいいのかまったく分からなくなってしまった。そこへ生き残った野盗の男が一人やってきて、逃げようと言った。もちろん、殺戮も行なわれたこの場所に長くいたいと思うはずがなくそれに従った。

男が向かった先は王都だった。まさか、騎士団のお膝元にわざわざ行くものはいないだろうという考えの裏をかくつもりらしい。その願いはかなったのかもしれないが、男は道中で出血の多さに気を失った。ルネは彼を助けたいと思い、一人たどり着いた王都の門を叩いた。人が一人死にかけているから助けてくれと訴えても、みすぼらしい身なりをした少女に構うものは一人もいなかった。そもそも、王都に入るには通行手形が要る。それを持っていないのであれば身分が怪しいものとして疑われる事になるのだと告げられる。死にかけた男の下に戻って何と言おうと悩んだルネだったが、そんな必要はなかったのだと知る。男は、もう事切れていた。

どんな場所にも抜け道というものはあるもので、ルネはいつしか王都の塀の中に入り込んでいた。そこで出会ったのがマルクだ。きれいではない事に手を染める、表だって歩けないような人間だった。ルネにリイナという名前を寄こしたのもマルクだった。彼は、新しい自分に生まれかわりたくねえか？　と言ってルネに名前をつけた。

彼はルネの容姿を気に入って、よくいえば恋人に、悪くいえば情婦にしてくれた。日々の生活の安定は約束されたが、それでもルネの世界は苦しみのはじまりだった。マルクは、会ったばかりの少女に無理矢理関係を強いて、それでもまだ優しさを見せるような男ではなかった。しかし何度か体を重ねるうちに情がわいてきたのか、

もとから顔だけは好みのようだったので、次第にルネを心から愛するようになった。どんなきっかけで、どんな事をされようとも、ルネには逃げる場所もないし、彼を受け入れるしかなかった。だからだろうか、ルネもいつしかマルクを許せるように、愛していると錯覚できるようになったのは。

だが、あれもいつからだろう？　マルクが元来の性格以上に人格ががらりと変わってしまう事が増えてしまったのは。ハンプのせいだと分かるのは、少し時間がたってからだが、マルクの事が怖くなったのはその頃からだ。彼はひどくルネを殴りつけるようになった。苦しみは増した。心の痛みなどに比べれば、顔のどこかがへこむくらいなんて事なかったのだけれど、マルクはすっかり変わってしまった。兄とまさかの再会を果たした日にも、彼に殴られたばかりだった。

そう、兄だ。兄が王都にいるなんて、知らなかった。一体いつから王都にいたのか。何年会っていなかっただろうか、最後にケイスを見たのは何百年も昔のような気がしていたのだが、背が伸びても変わっていない兄にすぐ気がついた。ゴールデンオリーブの寝癖一つない髪に、父に似たらしいエメラルドの瞳。いつだって優しく輝き、相手を思いやる気持ちを知った目だ。顔の造作も大きくなったらこうなっているのだろうなという想像のまま。目つきなんて悪くなっていないし、凛々しさを増しても幼い頃の面影を失っていない。ケイスだ。兄がそこにいる。息が止まった。目を疑った。人違いだと思った。兄はルネには気がつかない。やはり、他人の空似なのだろうか。ルネがあまりに兄の姿を求めるあまり男はみなケイスに見えてしまうのではないかといぶかった。それも、相手は騎士になっていた。立派な身なり。相手が兄でなくても、今のルネには遠い世界の住人。だから逃げた。彼から。兄かもしれない人物から。

後になって、ルネの姿は兄と別れた時の姿とはすっかり様変わりしていたのだと思い出す。髪の色はマルクがしろというので染めた黒だ。再会した時には顔にアザを作っていたし、背だって伸びた。

化粧もしていたし、子供の頃にはした事のなかったひどく露出の多い格好でいた。ほとんど娼婦のようだっただろう。マルクに拾われなかったら、そうなっていたかもしれない格好をしてマルクと暮らしていたのだから、別人のように映っても仕方がない。

仕方がない。

そう、受け入れてきたのだ。店から逃げ出した時にすぐに息が切れた自分に気づき、ルネは思い出していた。ハンプが見せる幻覚作用を。マルクはルネにもハンプの服用を強制した。だから、ルネは幻を見たにすぎないのだ。会いたかった兄に会えるという、残酷でひどく優しい夢のような幻想を。ハンプを吸った後は、感情の触れ幅がひどく大きくなる事がある。だから泣いてしまうのはそのせいなのだ。服薬した薬のせい。

騎士になったというなら、ケイスが王都に来たのはつい最近の話じゃないはずだ。少なくとも、一年以上はこの都にいたのではないか？　一年前、ルネはシェーン（ここ）で何をしていた？　ハンプはまだ吸っていなかっただろうか。もう覚えていない。

確かあの日は、いつまでたっても泣き止まないルネをマルクが優しくなだめてくれたのだ。最初はそれがうれしくて、甘えるような事を言ったかもしれない。だが、どうしても止まらない涙がマルクには次第にうっとおしく思えたようだ。腕ずくでルネを黙らせると、左目の上から血が止まらなくなったのでマルクはやっと我に返った。また「許してくれ」のはじまりだった。そうしたくなかったけれど、ルネは彼を許した。だから、しばらくしてからマルクがハンプを運んでくれというのにも従った。その帰りだった。またケイスに出会ってしまったのは。

同じ王都に暮らしているらしいから、再会はそう遠くないとは思っていたのだが、ルネが心底それを望んでいるかは疑問だった。むしろ、兄らしき人物から遠ざかりたくてマルクに王都を出ようと言ったのだが、受け入れられはしなかった。

まずはその騎士の名前を確かめる事にした。見れば見るほど、騎

士の制服など着ていない方が、ルネの兄に見えて仕方がなかった。
話をするうちに分かった。彼は、ケイスは、姓こそ違えどルネの兄に間違いないという事が。声こそ変わってしまって、身長だって伸びすぎだというくらいに伸びた。根っ子の方は変わらない植物みたいに、人を気遣うあまり間抜けな事を言ったり、お節介を垣間見せたり。

『そうだ、何か困った事があったら言ってください。いつでも伺いますから』

ケイスは真っ直ぐに育ったのだ。ルネとは違い、まっとうな世界で。騎士にも――まだ見習いらしいけれど――なれて、約束された未来がある。そんな人間が、ルネのような下層の人間に手を差し伸べようというのか？　“いつでも”？

あの時は、どんなに叫んだって、来てくれなかったくせに？

ルネがどれだけ泣いても、殴られても、無理矢理に犯されても、姿だって見せられなかったくせに？

王都で妹の事なんか忘れて、幸せに暮らしてきたくせに？

一目見て兄かもしれないと思ったルネを、妹かもと思ってもいないくせに？

あなたに何が出来るというの？

たった一人の妹すら助けられなかった人間が、他人（リイナ）を助けられるとでも言うつもりなのか？

あんなにも会いたかった兄が、焦がれた相手が、ひどく滑稽に映った。リイナが誰だか知らないくせに、何がいえるのか。ルネの中では絶対で、英雄ですらあった兄がちっぽけに、下らない存在に見えた。自分だけは、自由と幸福を勝ち得ているくせに！

『どんなに時間がかかっても、行くから』

憎悪の炎さえ燃やしかけたルネに、兄は言った。まるで、かつて見つけ出す事の出来なかった彼の妹を、まだ探しているのだといわんばかりに。

嫌いきれない。

どんなに変わっても、兄は兄だ。自分が変わっても、きっと、兄がこんな風に立派に育ってなくても、ルネはケイスを嫌う事なんて出来ないのだ。

時には人をしばる家族という絆。時に厭わしい、家族という鎖。家族だからこそ憎める、しかし家族だからこそ愛せる。

ああ、兄は変わっていなかった――……。あの日のまま、ゾンネで暮らした生活が、そっくりそのままよみがえってきそうだった。名前を呼んでしまいそうになって、こらえた涙が落ちそうになって、ルネは深く俯いたのだ。だから、ケイスの友人らしき者が彼を引き止めてくれたのは助かった。すぐに立ち去ったルネを、まだ呼び止めるおかしな兄。友人との楽しそうな掛け合いが聞こえて、ルネはほんの少しだけ笑ったのだ。

もう会わない方がいいと、心の一方では分かっていたが、ケイスの到来にルネの心は浮き立っていた。まるで、闇だらけの世界に光が差したみたいに思えていた。これからは、もっと未来がよくなって、全てが快方に向かうのだ。そう思えた。眼帯も外れて、次にケイスに会えるのはいつだろうなどと思っていた矢先。

ルネはマルクの死体を見つけた。第一発見者だったのだろう。刺さったままの短剣が、痛そうだったので引き抜いた。しばらくは信じられなかった。マルクが死んだなんて。だが、ひどく冷静な頭の端では、これで解放されたと、安堵した。全くなんて人間なのだろう、ルネは。死体をそのままにしておくわけにはいかない。隠すにしろ埋めるにしろ、埋葬に近い形で彼をどうにかしなければいけない。マルクはもう、この世界の住人ではないのだから。

もたもたしている間にルネは仲間に見つかった。彼はとにかくここで待っていろと言って、ルネはそれを受け入れたのだが、次にやって来たのは警備隊だった。おそらくは生贄（スケープゴート）に使われたのだろう。マルクとその仲間は、ハンプに関する事で随分と裏の世界では名が通ってしまっていた。それに介入しようとする警備隊の中でも無名とはいえない。いつの間にか、ルネは獄中に居た。

本当は、それすらも受け入れるつもりだったのだ。マルクを殺してはいないけれど、ルネはもう疲れてしまった。否定する気力もなかった。だから、ずっと黙ったままで最後の時をも迎えるつもりだったのだ。あまりにだんまりを続けるので警備隊が交換条件を出してくるまでは。出来る事ならなんでも叶えてやる、なんて馬鹿げた事を言うまではケイスの事なんて忘れていたというのに。

「それならば、ケイス・ルブランを――騎士見習いのケイスを連れてきてください」

ルネも馬鹿げた事を言わなくてすんだのに。こんな姿を兄に見せる必要はなかったのに。何故あんな事を言ってしまったのか。やはり、最後に彼に会いたかったのかもしれない。どんな形であれ。

殺人犯に会いに来たケイスに、わけの分からない事を口走った気がする。偽りではなかったが、全て彼女の想像にすぎなかった事をしゃべっていた。本当は、さよならを言うつもりだったのに。あなたの妹だと、言うつもりだったのに。それを口にしないようこらえるつもりだったのに。

それでも、ああ――……。兄は、ケイスは、ルネの優しい兄は、こんな場所まで来てくれた。

『行くから』

決意を秘めた声。

――大丈夫だよ、お兄ちゃんがいるからね

結局、自分を泣かせるのはいつも兄なのだ。兄がいないから寂しくて、兄がいるから安心して。

大丈夫じゃない。ルネは、リイナは今、殺人容疑をかけられて牢の中にいるのだ。外にいたって、ろくでもない人生だ。全然大丈夫なんかじゃない。ケイスがいなかったから、こんなところにまで落ちてしまったのに！

それなのに、それなのにケイスはまた、ルネを安心させてしまうのだ。泣いてしまうから、どうかどこかへ行って。それでもまた悲しいから、このままずっとここに居て。もう兄の事なんて信じてな

かったのに。信じちゃいけなかったのに。来てしまったのだ、こんなところまで。

これはきっと、最後の思い出になるだろう。最後で、最高の。

諦めた、つもりだった。受け入れたつもりで、全部仕方がないと思い込んで。

それなのに、ケイスが現れてしまった。遅すぎる、遅れてやってきた英雄（ヒーロー）みたいに。なんて長い間かかったのだろうか。ルネは、やっと兄を見つける事が出来た。兄は、やっと妹に追いついたのだ。だけれど自分は獄中にいる身。望みはただ、兄が幸せにくらしてくれる事だけ。それなのに。

『ここから出してやろうか？　会いたい人が、いるだろう』

脱獄を手引きしてくれたのは、誰だったか。マルクの仲間の一人だったのか、覚えていない。ハンプは人の記憶力も奪うらしいから、そのためかもしれない。もう服用期間から離れて、禁断症状も見えていた、そのせいもあっただろう。疲れていた。ハンプをほしがるのにも、それがかなわず堪えるのにも。だから、彼の誘いにのった。会いたい人、いるに決まっている。ケイス。立派な兄、頼れる兄、愛する兄が外には居る。だから、手を取った。

望めるはずのない、兄との生活をもう一度望んでしまった。

（お兄ちゃん）

思い出すのは、昔の兄の姿だった。十歳にもならないくらいの、記憶の中だけの兄。ルネだけのケイス。ずっと二人で暮らせたら――

『お前はここで、逃亡生活の限界を知ったんだ。逃げ場なんてないと気づいた』

誰の声かは知らないけれど、ルネは疑う事も出来ずにその身に短剣を受け入れていた――……。

†　†　†

もう死ぬんだと分かった時に、会いたくて仕方がなかった人に会えた。ケイス。あたしのお兄ちゃんだ。

うれしいな。これが夢でも、最後に見るのが彼でよかった。

もう怒ってないよ。子供の時、助けに来てくれなかった事。もういいよ。最初から、怒ってなんかいなかったけど。

だってずっと、会いたいだけだったから。だから、もういいんだ。

ほんとは、もっとしたい事があった。言いたい事も数え切れないくらいたくさんあった。でも、お兄ちゃんはこうしてまた、いつもみたいにあたしのところに来てくれた。

優しくて、しっかりしていて、真面目で、がんばりやで、人の事を思いやってばっかりで。

それでいて、どこかうっかりしていて、時々、ものすごく泣き虫。

ルネだけのお兄ちゃん。

どこに行ってたの？　ずっと探していたんだよ。ずっと。

いつかお兄ちゃんが言っていた、聖典の羊飼いみたいに、ルネはずっと探していたんだよ。

寂しかったよ、お兄ちゃんがいなくて。ルネの周りには、いつも

誰かがいたけれど、それはお兄ちゃんじゃない誰かだった。ほんとはずっと、お兄ちゃんの傍にいたかった。

城下で知らんぷりされた時は悲しかったし、ひどいって思ったけど、来てくれたね。

覚えてもないパパが死んだ時、体に穴があいたみたいに辛かったママが死んだ時、いつも一緒にいてくれた。ルネがゾンネから消えた時も、ママの時みたいに泣いたのかな？

ルネが死んだら、悲しいって思ってくれるかな？

ねえ、できればそうしてほしいな。ルネが生きていたって、わかる気がするから。

だけど、ママの時みたいにいつか泣き止んで。ルネはもう気がついてって、お兄ちゃんの服を引っぱってあげられないから。誰かそれをしてあげて。してあげられないのがほんとうはずっと悲しいんだ。

どうしようもないって、わかってね。

悲しい時いつも、お兄ちゃんのこと思い出してた。お兄ちゃんもそうだったのならいいな。

でも、先に死んじゃうから、もっと悲しくなるかもしれない。それだったら、思い出さないでほしいな。お兄ちゃんを悲しませるのは、たとえルネでも許せない。

だから笑って。

ルネのこと、違う人だと思ってたのだって、別にいいよ。面白かったよ、ルネに気づいてないお兄ちゃん、ちっちゃい時みたいで。ほんとはもっと前に気づいてほしかったけど、今こうしてルネの名前を呼んでくれてるからいいよ。

だから笑って。

置いていかれるからって、こっちだって悲しいんだからね。でも、ルネたちの間には思い出がなかったわけではないでしょ？

覚えてるよ、お兄ちゃんが残り少ないパンをルネのためにとっといてくれて、自分の分は諦めてルネにだけ食べさせてくれたこと。

ほんとはありがとうっていいたかったんだ。
だからわらって。
なかないでおにいちゃん。あたしはもうなみだをふいてあげられないから。
さいごにみるのはえがおがいいから。
わらって。

†　†　†

ケイスの顔は、頬が盛り上がって、目が細くなっていた。山のように曲がるエメラルドの瞳。口は開いて奇妙に歪んでいる。まるで、笑顔づくりに失敗した道化のような――
「ルネ」
「ルネ……！」
「ルネえええええぇぇぇぇっっ！！」
雫がたくさん落ちた。
「あああああ……あああああああ

79　騎士見習いと迷子の羊7

ハウストがその事件の顛末を知ったのは、職場に出てきてからの事、ケイスが妹を失ってから次の日の事だった。全て終わった後だった。ケイスは妹のなきがらを手放さず、友人であるハウストがかりだされて、やっと葬る事が出来た。殺人者だと見なされていたために、城下町の共同墓地には入れられなかった。ケイスはそれをどう受け止めたのか、ハウストは知らない。ただハウストが提案した、ルブラン邸の庭に埋めるというのを受け入れた。

ルブラン邸の主、ベネディクト伯爵は出かけていていなかったので、執事のフランツが死人の埋葬を拒んだのだが、ケイスは構わずにそれを埋めた。ほとんど蚊帳の外、全てが人づてに聞いた事ばかりでしかないハウストは友人になんて声をかけたらいいのか分からなかった。ケイスが大切に抱きしめている相手が誰なのかもすぐには知れないでいたのだ。大切な女(ひと)だというのは分かりすぎるほど分かった。ケイスが埋葬の寸前まで、彼女を放そうとはしなかったからだ。魂を失って、肉体だけになったはずなのに、この国の宗教は死後に待っているのは苦痛だけではないと教えているのに、ケイスはそれを抱きしめたままだった。

あまりに痛ましい――正直ハウストは泣きそうになった。こんな友人の姿、見た事がなかった。見れないままでいられたら、どんなにか良かった事か――……。相手が誰であれ、ケイスは彼の人生の多くを占める人間を失ったのだ。彼の気持ちが伝染したように、ハウストもしばし倦怠と陰鬱に沈んだ。だがそれも、職場にやってこない友人を二日待つ間だけの事だった。ケイスの大切な人が死んでから、四日。もういいだろうとは思わない。だが、ルブラン伯爵はまだ出先から帰ってこないというし、ケイスは騎士団の宿舎にも職場にも姿を見せない。ハウストは、ケイスが放っておかれているのを知った。

ハウストはまだ近しい人間の死に立ち会った事はない。精々縁遠かった父方の祖父や親戚の葬式に出たくらいで、生活を共にする家族は幸い健康、体の弱い妹ですらまだぴんぴんしている。だから、こんな時に友人にどう声をかけてやればよいのか、思いつくものなど一つもなかった。しかし今はどんな言葉もケイスに届かない気がして、それならば何をしてやればよいのかどうかを考えた。

まずはルブラン邸に行った。予約（アポ）など取っていなかったが、鉄壁執事フランツもなんのその、ハウストはケイスが居るはずの屋敷の中に突き進んだ。フランツが何かをわめいていたが全て無視をし、ハウストは自分の知りたい事だけを聞きだそうとした。

「ケイスはどこだ？」

言葉が荒っぽくなっていたのも、彼も余裕がなくなっていたためだ。平素のハウストならば、友人の家にいる使用人だとてもう少し丁寧な言葉づかいをしたはずだ。年期の入ったしわだけでなく、不機嫌のあらわれであるそれも刻みながら、フランツは答えた。

「……例の、墓所においでです」

やっぱりか、そうだろうな、ハウストの予想はそっくりそのまま当たった。埋葬する前の遺体ですらあれだけ固執していたのだ、墓（そこ）には誰もいないと知りながらも離れられないのだろう。自分も埋葬に同伴した身だ、ハウストは勝手知ったる他人の家を更に進んだ。フランツを筆頭に使用人たちは主不在の家を招かれざる客人にうろうろしてほしくはなかったのだが、家主の養子があれでは仕方がないというもの。

ルブラン伯爵邸の敷地の中でも、屋敷から一番離れた場所で他家の領地との境ぎりぎりにある、ケイスの妹の墓石。二日前にハウストが別れた時に見た場所とほとんど同じところに居るではないか。苦い顔をしながらもハウストはケイスに呆れた。まさか、二日間ずっとこのままで？

「一度は屋敷の男衆の手で屋敷に入ってもらったのですが、少し目を離したらまたここに」

ハウストの疑問を問う前から解消してくれたのは、ルブラン邸の執事だった。ケイスの意識は今、この墓、その下に眠るものにしかないのだろう。

「執事さんよ、旦那様はいったいいつお帰りになるんだ？」

「――予定では、本日よりあと五日は後になるかと」

「ちっ、使えねえ……」

ほとんど口の内で言った台詞を、フランツは耳にしたかのように目を見張ったが、何も聞かなかった事にした。

この様子だと、ルブラン邸にフランツ以上に彼を思いやってやれるような人間は存在しないらしい。ハウストが来たからには何とかしてやるつもりだが、どんな人間がいたとしても相手に聞く気がないのでは話にならない。だが、せめて養父であるベネディクト伯が戻ってこればと思ったが、それもまだ時間がかかるようだった。いつかケイスが言っていた、世話になった侍女はどうだろう。聞くところによると、若い侍女でケイスをよく気にかけてくれたそうではないか。フランツも含め他の使用人たちではケイスに視認させるのも難しいだろう。だがその侍女の名前は何だったか――……。ハウストは自分の曖昧な記憶力に恨めしくなった。

「ケイスを世話していた侍女っていうのは、今はどこに？」

若い侍女はケイスをかわいがっていたというが、結婚を機会に辞めてしまったというのは聞いている。さすがに嫁ぎ先の住所までは知らない。そういった事は全て執事のフランツが任されていそうだから問うた。

「……エルザの事ですかな」

「ああ、たぶんそれだ。その侍女、今どこにいる？　連絡は取れるだろうな」

居丈高のハウストに、フランツは顔を渋くしてみせたが、相手は呼んでいなくとも客人、留守を任された執事らしく紳士に対応する。

「記録には北東の……ツェーン地方、と記しましたな。屋敷を辞めた人間には連絡を取る事はほとんどないのですが、ケイス様はお手

紙のやり取りを」

貴族の執事は、瑣末な事にはとらわれないように暮らしているらしい。ならば、ケイスの送った手紙でも見つけた方が話が早いだろう。ハウストは訪れたのはこれで二回目の屋敷をずかずかと進み出した。やはり後方で執事がうるさいので聞こえない振りをしようとしたが、「ケイス様のお部屋だった場所は三階です」などと道案内をしてくれるので、耳がふさがった振りをしてその通りに進んだ。

一つのドアの前に出て、ハウストは本人不在の部屋に入るというささか気の咎める行為に緊張したが、相手はケイスで今は緊急事態だと勢いよく手を伸ばした。そこは、かつての人の住まいの名残があるものの、半分近くは倉庫のような物置状態になっていた。思っていたよりも家具など物が多く、この家捜しは骨が折れそうだと眉を寄せた。とりあえずは机から、引き出しを引っ張り出すと空の引き出しにまずお目見えして肩を落とした。かと思うと今度は箱が詰まっており、その中にはおもちゃなのか雑貨なのかよく分からないものが詰め込まれてもいたりした。

作業を開始してからしばらくして、ハウストは自分の他にもケイスの自室を荒らすものがいるのに気がついた。老年の執事、フランツだ。何をしてるんだと思ったが、またもフランツはハウストの望む答えを先に教えてくれた。

「私がここに居なければ貴方は盗っ人同然。私は早く自分の仕事に戻りたいんですがね」

何を手を止めているのだといわんばかりの声だ。肩をすくめるとハウストはそれそうだと作業に戻った。なんだ、ケイスはこの屋敷で思っていたより一人じゃなかったんだな。

問題の侍女エルザとの手紙が見つかったのは、いささか時間がかかったが部屋ごとひっくり返すほどではなかった。それを見つけたのがハウストではなく執事のフランツだというのが、なんとなく気に食わないのだが。他人の手紙を開くのは悪い気がするし、内容よりもエルザの住まいが問題なのだと封筒に注目する。さて、ここに

手紙を書いて何日かかるのだろうか？　それまでにケイスは生きていられるのだろうか。冗談にならない事を考えて、ハウストは下らぬ考えを打ち捨てた。

「王都でも手紙を届けるのに半日かかる。ツェーン地方っていったら、どんだけ離れてるかは知らないが、とりあえずはツヴィッシェン山脈の向こうだろ……いや待て、本気で何日かかるんだ」

青ざめかけたハウストをとどめたのはやはり歴戦の執事フランツだった。

「一つよい方法があります。ただ、ひどく御足（おあし）がかかります」

フランツの提案したのは、シェーンには少ない魔術師の手を借りるという事だった。手紙を書いて、それを魔術で届けてもらおうというのだ。ハウストは出来ればその侍女に屋敷まで来てほしかったが、それが無理でも返事がもらえたらと思っていた。フランツの案は確かに名案で、資金の方はハウストで用意するつもりだったが、

「当家の問題は当家で処理いたしますゆえ」とかなんとか言われてフランツに資金の支度と魔術師への依頼も任せてしまった。フランツは、その魔術師の元へと行ってしまったし、休みを取ってやってきたハウストはまだルブラン邸に残っていた。行くところはケイスのところしかない。さっき来た時と微塵も変わらぬ場所に座り込んでいる。

日々生真面目に働き、世の中に学ぶべき事はたくさんあるとばかりに見開かれているエメラルドの目は、半分しか開いておらず、その先は一つの石しかなかった。墓の下に眠る少女が息を引き取ってから四日たつが、淡い色の髪は乱れ、身なりもひどいものだった。服に染みこませた人の血はかなりの部分に広がり、黒に近い赤が服を侵食している。外見よりも何よりも、一番ひどいのはケイスの内側だろうに。ハウストは彼を見つめ続ける事が出来なくて顔を背け

てしまった。問題は、今のケイスを受け入れるのではなく、少しでも以前に近い状態に戻すようにする事が大事なのだ。

ハウストは、ここに来る前に使用人に言って持ってこさせたパンとワイン――アルコールは時に気付け薬に使われるから、無理だとは思いながらもその効果を狙って――といくらかの加工肉に視線を落とす。まずは、食事だ。富豪商人の息子だといえ、地位なき平民の資本は常に健康な体だ。そのために必要なのは充分な睡眠と食事だと、ハウストはよく分かっている。

「おい、ケイス、食え」

そんな気分――というよりそんなものを認識出来るような状態じゃないと知っているが、無理矢理にでも食べさせなければ、ケイスは倒れてしまう。かつてハウストは五食抜いても大丈夫だったが、それは精神が健康だった時の話だ。それに平和にすごしたかつてとは違い、ケイスには一大事が起こっているのだ。案の定顔のまん前に差し出したパンの塊をケイスはないものと見なした。実際彼の目には墓しか映ってないに違いない。何度かそのパンを振ってみたハウストだが、反応がないと見ると今度はちぎってケイスの口の中に詰め込んだ。当然咀嚼するような素振りは見えない。ぽろりと落ちるパンくず。別段短気というわけでもないが、そこまで気の長い方ではないハウストは苛立ってきた。彼の気持ちは分かる、だが、飯くらい食えっつうの！　だ。

「食え、ケイス。おい、聞いてんのか？　俺は口移しなんて嫌だからな気持ち悪い」

ぐいぐいとパンの塊の方を押し付けるが、嫌がりもせずにいるケイスに、ハウストはなんだか岩を前にして会話しているような気がしてきた。堅物と名高いベネディクト伯だとて、ここまで無反応ではないだろうに。いない人物の事をあれこれ考えても仕方がない。とにかくハウストはこの地味で疲れる、効果のない作業を続け、少しでもまともなものをケイスの口の奥へと入れるしかないのだ。

「ああくそ、だれか筒状のものでも持ってこい、流しこんでやる」

なんだかんだといいながら、液体ならば少しはまともに口に入るのではとワインを水差しからケイスの口に注ぎ込んだ。本人の意思ではない事をした弊害か、ケイスはむせ返って大きな咳を何度も繰り返した。やっと人間らしい反応が得られたと歓喜したハウストだが、体をかしがせたケイスはそのまま地面に倒れこんでしまった。ぎょっとしたが、ケイスはこの場所でずっと眠っていなかったに違いない。意思よりも体の方が先に限界がきて、今の無理強いが作用して意識が途切れてしまったのだろう。ある意味都合は良いわけだ。ハウストは鍛えた腕を伸ばすと自分よりは背の低い男を持ち上げた。軽々と、というほどではないのはハウストがケイスの身体がこんなにも重いとは思っていなかったからだ。だが騎士見習いの名は伊達ではない。屋敷に引き返すと一度も取りこぼす事なくケイスを寝室まで連れていった。

次の日は仕事帰りにケイスの家に向かった。昨日、ハウストはケイスを寝室につれて寝かすままにしておいたが、帰るまでケイスは目覚めなかった。あれからどうしているかなど、考えなくとも予想がつく。まだ伯爵は戻っていない屋敷など、おそるるに足らず。すっかり馴染みの顔をしてフランツを呼び出した。相変わらずの自分本位な態度にフランツは不満げだったが、一つの報せを伝えてくれた。昨日、ハウストが帰ってからエルザからの返事が来たらしいのだ。

「魔術師殿は、思っていたより優秀でした。遠く離れた場所と交信する術を持っていたのです」

どうやら素晴らしい魔術に長けた魔術師は、手紙をいちいち届け

て返事を貰うなどという事をせずに、フランツが直接エルザと交信したらよいではないかと提案したようなのだ。それは鏡を通しての通信で、まるで鏡の向こうにエルザが居るかのような光景が見られたそうだ。そこでエルザは、突然の事に驚いていたが事情を聞いて顔色を変えた。

「残念ではありますが、今は家を出られそうにはないと……ケイス様の事はひどく心配しておられましたが」

「家を出られないってなんだよ」

「臨月だそうで」

「……ああ、そら無理か。いや待て、なんならその魔術師になんかこう、ぱっとすぐに移動出来る魔術でもってエルザって侍女を呼び出せば…」

「魔術師殿は用心深く、シェーンではあまり魔術が好まれないゆえ、依頼を受けるたびに引っ越す事にしているとか」

ハウストは顔を一気にご立腹のものにした。ならば一体どうしたらいいのか。エルザならケイスを元気づけられると思ったのだが無理で、頼みの綱の伯爵は家を空けている。頭をかきむしり不満をぶちまけるハウストに、フランツは呆れた目を向けた。

「貴方様自身は何もなさらないのですか」

「……してるじゃないですか、こうして誰か力になってくれないか万策尽きてるけど」

「貴方がケイス様の近くにいるべきなのではないですか」

ハウストは黙り込んだ。確かに、食事をさようとした時や寝かしつけてからしばらくの後はまだしも、他に手があると思い込んだハウストはケイスの傍にはいなかった。しかし、ハウストが何の力になれるというのか？　なんとかしてやりたいが、埋葬を手伝った時でさえ認識されていなかったというのに。

「旦那様とて、当初はケイス様の視界に入っていなかったと聞きましたよ」

執事の言葉に、ハウストはケイスが以前は王都ではないところで

暮らし、伯爵に拾われたのだと語っていた事を思い出した。その時の事について、フランツは言及しているのだろうか。確か、何かケイスの側に不幸があって自失していたという話だった。であれば、フランツは何を言いたいのか？　はじめは誰もそんなものだと？認識されないからと遠ざかるのは間違いだと思っているのか。不思議な事に、ハウストは長年友人と過ごしてきてこの時はじめて、ケイスの親友だと認められたような気がした。

ハウストは何度もケイスに語りかけた。無駄だと知りながらも続ける努力はむなしかったが、それでもケイスが岩ではなく人間なのだからと自分を鼓舞して、なんとか彼に世界を認識させようとした。大事な人の墓の前で、座る青年を。

それは伯爵が帰ってくる前日の事だった。予定より一日遅れての到着がなされたので、予定では伯爵が帰ってくるはずの日だった。毎日のように続けていた、本日の職場風景を話し終えて、ハウストは暇になっていた。食事などしないケイスの口にものをつめこむのもそろそろ慣れてきた。

「知らなかったんだ」

急に、ケイスがしゃべりだした。ハウストは人形がしゃべったのを見るみたいに目を丸くした。実に九日ぶりの行為だったから、ひどく声がしわがれて、何年も喉を使っていなかったみたいに響いた。

「僕は、リイナがルネだなんて思ってもなかった」

彼はしゃべっているのではないのかもしれない。心の内が、せき止めていた堤防が決壊したら水があふれるみたいに体内にたまっていたものがこぼれ落ちたのかもしれない。それでも瞳は、まだ曇っ

たままで。何かに怯えるようなくすみを見せていた。
「気がつけなかったんだ……！」
何のについて話しているのか、この時のハウストには見当もつかない。ただ、自分はここにいるんだと教えてやりたくて、手を握った。ケイスの意識が地上に返ってくる事を望んだ。
「僕は、もっと……っ」
ルネ、ルネ、とたった一つの名前だけを繰り返し、ケイスはほとんど地面にうつぶせるかのようにうつむいた。涙こそ流さないものの、血の涙が見えそうなくらいに、目は血走っていた。どうして。後悔の悲鳴が聞こえて、ハウストはただ彼の肩を引き寄せて、なぐさめるしか出来なかった。なぐさめにすらなっていなかったかもしれない。それでも、地上の世界を思い出してほしくてそうしていた。

† † †

結局一体誰が功労者か、ハウストは知らない。ルブラン邸に主が戻ってからはハウストはそう簡単にケイスに会わせてもらえなかった。隙あらばルブラン邸に入ろうとしたのが、引退したかつての騎士はそれを簡単に許しはしなかった。後々、フランツに簡略化した話を聞いたところ、幼い頃にケイスが今と似た状態になった時にも

ある意味正気に戻したのはベネディクト・カール・ルブランだった、というのだから、また彼がケイスに喝を入れたのかもしれない。

伯爵到来二日後に、ケイスは仕事場に顔を出した。短くない無断欠勤をわびれるくらいには元気になったかのように見えた。だがそうではなかった。仕事中のミスはかなり多く、人間としてもまともな会話が出来ないくらいだった。むしろ、職場に居ては困るくらいの人間になってしまっていた。秘密裏に、ケイスをあと一月くらい休ませようという計画が持ち上がったのだが、未だに騎士団とつながりを持つベネディクト伯によって阻止されたらしい。交渉を繰り返し、ケイスは半月の間、一日丸ごとではなく半日の仕事だけで帰ってよい、という事になった。普通の働く人間からしてみれば、身内の死くらいで何をと反感を買ったかもしれないが、ケイスの人柄の良さと、あまりの変貌に同情票が集まりやむなしとなった。

ゆっくりとはいえないが、少しは休める事になって、ハウストはいくらか安心していた。ずっと休ませるにはやぶさかではないが、それにしたって職場で廃人のようなケイスが徘徊するのを見るのはそれはそれで辛かったのだ。無理をしてやってくる友人に、手を貸す事は出来ない。彼が、どうにか自分の力で立ち上がれるように周りはいくらかの助力と、見守るしか他はないのだ。

あれからエルザは手紙を何枚も続けて書いてきたそうだ。ケイスが後に、エルザとは辞職直後こそは頻繁に手紙のやり取りをしていたが、フォルクマール学園卒業年頃を境に手紙も減ってきたらしかった。子どもが生まれたからというのがきっかけで、フランツが魔術で交信をした時には既に三人目の子どもだったそうだが、それはともかく。長い目で見れば、ケイスはエルザとのやり取りが復活出来たとその事には後々よろこんだそうだ。

それから、後はみんな時間が解決させてくれたように、見えた。長い一年だった。見習い騎士から、正式な騎士になれた年、やっとハウストは事の顛末をごく簡略にケイス本人に教えてもらえる運びとなった。

「ルネは、僕の妹だった。王都で再会した時は、どうしてかリイナと名のっていたけれど」

それを語る時のエメラルドの瞳はひどく老いていた。

「ルネは、子どもの時に一度失ったと思っていたんだけれど、違ったんだ。生きて、王都にたどり着いていた。皮肉だよね、僕はルネがもしかしたら王都に来ているかもしれないと思って養父について行ったというのに、彼女に会うまでその事を忘れていたなんて」

話は断片的で、ハウストは他のところから入ってきた情報とケイスの言葉とを補足しあって考えながら聞いていた。全部言え、などとても言えないからだ。

「それで、妹は――もしかしたら、あまり平坦ではない道を歩んできたのかもしれない」

ケイスは力をこめるように組んだ両手の指に、更に力を入れた。

そうでもしないと耐えられないとでもいうように。

「僕は、彼女が妹だと気づくのがもっと早かったら、二度も失う事はなかったんじゃないかって――……」

こうしていれば、ああやっておけば、なんて意味のない空論。時間は元に戻らない。たとえ魔術師でもそれは不可能だという。ならば、ケイスは一体どうしたらいいのか。

分からない。友人にだって答えは出せない。

滔々と流れる時間なんて、傷を癒しはしないのだ。いつまでもこびりつき、染みこんで、離れない。だからせめて、日々の暮らしに没頭するようにした。騎士としての生活を、鍛錬する毎日を。そうして、忘れて、いつかきっと、少しずつ思い出して、涙して、それでも絶対に忘れる事は出来ないのだから、月を見て君を思い出そう。何を見たってルネを思い出すけれど、今はまだ、少しだけ忘れさせてくれ。こんなにも不甲斐ない自分を、忘れさせてくれ。

許されない事をしたと思っている。ケイスはそれでも、一年たってやっと、妹の死をそれだと認識出来るようになった。いや、認めたわけではないのかもしれない。いつか、不思議な魔術でルネがよ

みがえりはしないかと願っている。ただ、今、彼女は、ルネは、リイナは、ケイスの妹は、ただ一人の肉親は、もうこの世界にはいないのだと思うようになったのだ。感情は追いつかなくとも、現実は追いついてきてしまった。ルネの全く存在しない世界で一年も呼吸を続けてしまった。

ケイスはふたたび、野に放り出されてしまったのだ。

羊を探す、羊飼いか、あるいは迷子の羊そのものか――。

† † †

羊飼いは、多くの羊を飼っていた。その中で、一匹が群れから離れて迷子になってしまった。

その羊飼いは、どの羊も愛していたから、ただの一匹でも探し続けた。

羊飼いは最後に迷子の羊を一匹見つけ出せた。

神の愛はかくも深く、広いのだ。

……“いつでも”？

いつでも、どんなに時間がかかっても、行くから。

あーあ。来ちゃった。

笑って。ねえ、わらって。

ねえ、お兄ちゃん。

79　騎士見習いと迷子の羊7（後書き）

これにてケイス過去編は終了します。
次回より現代（？）に戻ります。

80　船旅の終わり

妹は、ケイスの中で二度死んだ。

彼女は探していたケイスの迷子の羊で、もしかしたら、ケイスもまた――……。

「……だから、僕はいつも迷子の羊を探しているだけなのかもしれない」

ケイスの長い話は終わった。ところどころ省略したところもあるし、ルネが死んでからは尚更手短にすました。長い間、十年もの彼の半生を語るには時間が多く必要だったが、幸いにしてこの曳航されて捕虜になってからの船旅は長かった。彼が語り終えてもペッシェカーネ号は岸に着いた気配一つ見せない。

全てを語り終えた青年は、両手を組んでいたのを見つめると、それを解きほぐす事にした。

「自己満足かもしれないし、君の言う通りお節介に取り付かれているのかもしれないけれど」

ケイスは過去の日を見つめた。貧しくとも妹と暮らしてきた日々を思っているのか、それにしてはやけに湿っぽい目で。色あせてしまった瞳で。

「もう、そういう風に出来ているんだ」

誰かの悲鳴に耐え切れない。自分に出来る事なんかなくても体が勝手に動いてしまう。それが、子どもで更に女の子だったりすると尚更だ。きっと自分は過去に囚われている。ケイス自身もそう感じているし、お節介が時に他人の迷惑になる事もある。目の前の少女だって、迷惑というよりも実害ありとすら思っていそうではないか。自分のお節介を美徳とは思わない。ただ、どうしても止められないそれはどうしようもなくケイスの一部分を作っているのだ。今更取り除く事など出来ない。

今だって妹の話を口にして、心臓がぎゅっと縮んでいくのが分か

る。それを止めるのが出来ないのと同じ事だ。忘れる事が出来ないうちは、お節介も止まらない。ルネを忘れるのは無理だから、お節介もまた然り。

もしかしたら、自分はまだ野をさまよっているのかもしれない。透明な空の下、ふらふらと。何かを探すかのように。

† † †

結局、シュガーローゼは身代わりなのではないか。ケイスが助けたかったという、妹のルネの代わりに。要はシュガーローゼでなくともいいのだ。何でもいいから誰でもいいから人助けがしたいだけなのだろう、ケイスという男は。下らない話だ。耳に入ってくるのも厭わしかったが、眠りにつく事も出来ずにシュガーローゼは全て聞いてしまった。胸糞悪くなる話だ。聞くべきではなかった。聞かなければよかった。起きていたと知られるのが嫌で身動ぎ一つも我慢していたが、耳でもふさいでしまえばよかったのだ。

しょせん、そんなものなのだ。世界は自分に世の下らなさを教えてくれる。だから何なのだ。自分には関係ない。シュガーローゼには、何もない方がいいのだ。

結局、全部は妹のためじゃないか。何もかもケイスが自分のため

にしている事じゃないか。かつて救えなかった妹と他人を重ね、それを助ける事で過去の贖(あがな)いをしているつもりなのだろうか。それであの世の妹がよろこぶとでも思っているのか。死んだら何もなくなる、ただそれだけなのに。

気持ちが悪い。気道の辺りがただれるようだ。船酔いもあったかもしれぬ。何しろ捕虜になってからは食べ物を一切口にしていない。ひどい空腹感は時に吐き気までもよおす。

何もかも、気持ちが悪かった。触れた先から自分の手が腐るとでも思っているかのように、シュガーローゼは身を丸めた。吸い込むべき空気すら今は胸焼けがするくらいだ。だからだろう、ほんの少し眦(まなじり)が湿ったのは、船酔いと気分の悪さのせいなのだ。

この船が沈めばいいのに。本当にそう思った。そうしたら全部楽になる。

羊飼いと迷子の羊。迷子の羊はいつまでも鳴き続けている気がして競りあがる吐き気と眩暈をシュガーローゼはこらえた。

† † †

レフは、よく知りもしない相手の過去の話を大雑把であるとはいえ語られて、正直何を思ったらいいのか分からなかった。ケイスの

事は名前や身分、その他いささかの事しか知らない。ただ、なんとなく感じるのは人が良くて、普通にしていれば柔和な優男、だが芯のありそうな男だという事。

話を聞いて、これまでにケイスに抱いていた印象とは違うものにはなった。ただ何の苦労もない人生を歩んできたのではないのだ、彼は。騎士というからにはそれは一般人よりは危険な目には遭っただろうとは睨んでいたが、それでも自分で推測するより詳しく語られた内容は生やさしいものではなかった。彼は傷一つない勇者などではない。それが分かった。

ただ、レフが気に入らないのは、彼が――ケイスが、平凡とはいえない人生を歩んできてなお、瞳の輝きを失っていないという事。普通、幼いうちから孤児になり、妹がさらわれ、学園でいじめられ、再び妹を失うなどという出来事が起これば人はもっと曲がってしまうものだ。レフならばそんな事が続けば何かの犯罪に走ってしまうだろう。貴族ならば生まれが違うとも言い訳に使えるが、ケイスは元はただの平民だ。生まれならレフとだってそう変わらない。

自分だったら。考えるだけ無駄だと気づいた。レフはどうしようもないほどレフだったし、一人の男を殺すために犯罪ばかりを犯してきた。人さえ刺した。考えても、これらの事は変わらない。レフは元来、人の過去を知ればそれがそう幸せではない時など特に、相手への考えが同情的になるものだったが、ケイスにはその気持ちと同時に、嫌悪感も抱いた。

彼と同じ場所に居るのもそう長い間ではないだろうが、レフはケイスとは上手くやっていける自信がなかった。それらの事については、あまり考えたくなかったのですぐに目をそらした。自分から言っておいて、ケイスのお節介の理由が分かっても、うれしくもなんともなかった。

† † †

いつの間にか、嵐は止んでいた。それとも暴風域を出たのだろうか。とにかく捕虜たちには何かを知らされたりはしない。

また平穏な波間をゆく船の腹を何かが撫でるような音と、波がフ船に打ち付ける音だけが捕虜たちに与えられた物音だった。

このままどうなるのだろうという、何度も繰り返した不安が使い古した雑巾のようになっても頭から離れていかない。そんな不安を抱えながらも、捕虜たちは黙りこくって審判の日を待った。いずれ来る最悪の未来に備えた。

突然、大きな音を立てて船は動くのをやめた。しばらくはそれにも気づけないでいた捕虜たちだが、どうにもこれまで聞こえてきたような、波を切るような音が聞こえてこない。小さくなった波の打ちつける音に、彼らは察した。どこかの港へと着いたのだ。

８０　船旅の終わり（後書き）

これにてこの話の第一部は完結いたします。
微妙なところで切ってしまいすいません。

第一部とか、そう大した意味もないのですが、一区切りついたのを機会にしばらく小説の推敲期間をもうけさせていただく手前、更新もしばし止まると思います。
その間、幕間を少し用意してありますのでそちらをご覧いただければ、と思います。

第二部からは、ついにミリヤール帝国に入ります。
登場人物ももっと増えて、そもそも出番の少なかったキャラもちゃんと出て、少しネタバレすると王宮ぽいとこ行って華やかになると思います。
今後も楽しんでいただけたら幸いです。

ではでは、ここまで読んでくださった方に、この上ない感謝と愛を。
第二部でお会いしましょう。

81　幕間1・推理する少年たち

薄暗い空間で彼らは同じ牢にぶちこまれた事で退屈を感じずに済んだ事には感謝していた。一人だけだったら自分の言葉に返事をしていたところだろう。もしくは存在しない部屋の隅の誰かと。六人の少年たちが入るには狭い牢だが足を伸ばすには充分な広さを持っている。

どれだけ時間がたったのか。当初は口を開くのも億劫ではなかったが、あまりに時間がたち過ぎたために各々が自分の行為に没頭するようになっていた。またすぐ人と話したくなるにしても、長い間牢の中にいすぎたのだ。実際にはさほどの時間がたっていなくとも、ただ一箇所に留まり続けなければならない彼らは非常に長い時を感じていた。

アルはポケットの中に手をつっこんだ。意味のない行動だった。ただ手をあたためようとしただけかもしれない。指先に硬質な感覚が触れ、訝しく思ってそれをまさぐる。ポケットから手を引き抜くと、右手が連れてきたのは小さな指輪だった。

「何だこれ」

両手を頭の裏に回し壁に半身をもたれかけていたキオスクは、そのままの姿勢で首だけアルに向けた。一人言のようなものをもらしたアルに、どうしたとも問わず動向をただ見守る。

アルは指輪に少しでも多く光を当てようと体を動かして、透かすように頭上に掲げた。寸法から見て女性用の指輪だろう。装飾はないが丈夫な様子から値打ちものだと推測出来る。アルはこの指輪をどこで手に入れたか思い出そうとした。彼には落ちているものをすぐ拾うくせがあり、いつも周囲の地面に気を配っているために簡単には思い出せなかった。

「ああ、地下水路か…」

レフを探しに行った場所でいつものように地に視線をやり、なん

の気はなしに拾ったものだった。
　手の中に指輪を握り、開く。暗闇の中ほんのわずかに光を反射する小さな女物の指輪。一体、誰のものだろう。何故あんな地下水路にあったのだろうか。
「何見てんの」
　キオスクとヨブがすぐ隣りにいて、アルは自分の手の平を彼らに突き出してみせた。
「指輪……？」
　二人は交互に手に取ると、その感触を確かめるようにして眺めた。薄闇の中で、ヨブが指輪の細かい文字を読み取った。
「SからDへ……？」
「そんな事、書いてあった？」
　一番最初に手にしたアルは気がつかなかったが、どうやら指輪の内側には文字が書かれていたようだ。アル自身も確認すると、確かに「SからDへ」と文字が刻まれていた。おそらくそれは人の名前だろう。二人の名前のイニシャルのはずだ。
「SからD……か。贈り物、かな」
「となるとやっぱり、婚約指輪のたぐいかな」
　ヨブの推測はありえそうな話だった。
　ベンは眠ってしまっているし、マッテオはジョルジュの枕になっているため動く気はないようだ。三人は、彼らだけでこの指輪について話し合うつもりになった。他にやる事はない。昼夜を問わず暗い場所では娯楽になるようなものは他に何もなかった。
「じゃあ、Sは男か。Dがもらった女の方だ」
　キオスクはのってきた。生まれてすぐに町のキオスク（街角の小さな売店）に放り出されたためについたあだ名がキオスク。彼はこの五人の中で一番、チェルヴォの人間を知る人物かもしれなかった。彼は町の人の名前と顔をよく知っている。Sをキーワードに脳内の人物名リストをめくる。
「Sかー、Sなー。サム、サイラス、サルヴァトーレ、セバスティ

アン、ステファーノ…」
アルやヨブも彼の出した名前や、自分自身の知る限りのSのイニシャルを持つ人間を脳裏に描いた。嫌な人間も、優しくしてくれた人間も頭に出てくる。
「スコッレッジャもいたな」
「それはあだ名だろ」
呆れのにじむ笑みで、アルは返した。とはいえこみ上げる笑いをおさえる事は難しかった。三人共にやにやが止まらない。キオスクがSの持ち主候補として上げたあだ名の意味は「おなら」だったからだ。彼の人となりは朗らかで良いものなのだが、いかんせんおならを暴発させてしまうという彼自身にも止められない体質を持つ。
「そんな事言ったら、スポルコもいるぜ」
ヨブはやはり笑いながら提案した。こちらもあだ名で、本名ではなかった。
「ソッタチェート、スコイアットロ」
汚い、ピクルス、リス……。Sのイニシャルを持つあだ名は意外にもたくさんあった。孤児であったり家族に恵まれない彼らが助けられた相手も中には含まれている。汚いというあだ名を持つスポルコは、時に空の下で眠る彼らの大先輩のような存在だった。彼は今どうしているだろうか。三人がわずかでも同じ思いに囚われたのは口にしなくとも分かっていた。
「いくらなんでも、あだ名で贈り物はないだろう」
アルは不毛な推測をやめるように言った。普段から話を面白おかしくするのが好きなキオスクとヨブが相手ではこうなる事は分かりきっていた。楽しくはあるがこれではなかなか話が進まない。
「じゃあDは誰だろうな」
「ダニエラ」
「デボラ」
「ドロテア」
三人が一人ずつ女性の名前を言った後、沈黙が場を支配した。

「あとは……あんまり知らないな」
彼らはあまり女性の名前は知らなかった。不良少年でもあり浮浪少年でもある彼らは、時に女子供には遠巻きにされる。嫌われてはないだろうが関わりたくないと思われている節がある。そもそも女はむやみやたらにあちこちを行き来しない。少年たちがよく利用する市場や店の店員も男ばかり。
「でもイニシャルなんかきりがないよな」
いってしまえばたくさんいるのだ。候補者が多すぎる。キオスクは切り捨てるように言った。頷いて、アルが提案する。
「じゃあ視点を変えよう。この指輪は高価かな」
「見たところ……これは高級品てほどじゃないけど、ぼくらには手が出せないものだ」
「そりゃそうだ」
「やっぱり、稼ぎが安定してて、少しは社会的地位がある人、とかかな」
推測だけど。とヨブはつけ加える。
「いいね。じゃあ裕福な商人か貴族とかだ」
ただの推測、推理とはいえ想像に過ぎない。しかし彼らは楽しかった。今の状況を忘れさせてくれるには手軽でもってこいな遊び。誰もやめようとはしなかった。
「うーん……ちょっと年期が入ってるね。汚れ以前に、何年か指にはめて過ごしてたのかも」
「持ち主は女か……。しばらくつけて過ごしたなら……二十代くらいかな」
男性とは違い、女性が結婚する年齢は早いと十代後半、二十歳を過ぎれば立派な結婚適齢期だ。
「いき遅れてたのかもよ」
「いや、もしかしたら、旦那からじゃなくて浮気相手からかもしれないぞ」
貴族の浮気は男女問わず当たり前の時代だ。そもそもが彼らは政

略結婚をするのであって、恋愛は結婚した後に他の愛人とするものなのだ。そういった理由を明確には知らなくとも、アルたち少年にだって大人の事情は感付ける。

「それで、旦那が謎の指輪を見つけて……このアバズレが！　こんなもの捨ててやる！」

キオスクにかかると些細な話題もいつの間にか劇の一幕に変わる。声を上げて笑いながらヨブが相手役を演じる。少年たちの中で彼ら二人は特に、こういった冗談が好きでよく笑いを皆に提供している。

「やめて！　ああ、ひどいお方……あなたはいつも家を空けて帰ってこないじゃない……出来心だったのよ！」

「うるさい、黙れ！　離縁されたくないならもう二度と家に人を呼ぶな！」

キオスクとヨブの小劇場を楽しみつつも、アルはもうこれ以上は指輪の持ち主について語り合う事は出来ないだろうと感じていた。イニシャルだけでは情報量が少な過ぎる。推理にも限界があった。彼らが早々に諦めるのも無理からぬ事だ。

しかしアルは手の平の指輪をもう一度確認して反対の指で弾くようにつつく。

今は無理でも、いつか本当の持ち主に返してやりたいと思う。何故かは分からないが、アルはこの指輪が持ち主にとって非常に大切なものなのではないかと思わされていた。

チェルヴォの中に持ち主がいるなら、片っ端から聞いて回るまでだ。水路にあったのは不思議だが、うっかり落としたかしてしまい紛失したのだろう。

SからDへ。

誰かが誰かに贈った大切な指輪。

贈り主にとっても、贈られた方にとっても大事なもの。

きっとそうなのだろう。

アルはそれを手の中にしまうと、なくさないようにと固く握りしめた。いつか指輪の持ち主に会う事を願って。

なくしたものが戻ってきたら、きっとうれしいだろうから。

81　幕間1・推理する少年たち（後書き）

幕間1、です。
漫画のコミックスの次の話との間にある空白ページでつなぎの漫画もしくは絵がある、ああいうイメージで書きました。
本編には直接的に関係がなくとも地味に関わりのある、息抜きページみたいな感じです。

無駄に例の指輪の行方が気になっていました。
Sはもちろん……。
この話は続くのかもしれないです。指輪がちゃんと元の持ち主に渡るかどうかを書きたいかなあなんて思います。

82　幕間2・帰宅

フランベが解放されたのは、シュガーローゼの捜索を申し出てから七日目、拘束されてからは五日目だった。

彼女はただ、面倒を見ていた少女が突然姿を消したのでチェルヴォの町の警備隊に捜索願いを申し出た。当初、家出少女の捜索はお役所仕事にありがちな緩慢さではじめられたが、確かに彼らはフランベの探し人に対して人員をさくと約束した。しかしその成果は見られず、その上なんとフランベの予想だにしない展開により捜索人は容疑者と成り代わり、逮捕されてしまった。ショックのあまり何も考えられず、二の足を踏んでいたフランベは、更なる衝撃を与えられる事になる。

「あなたの身柄を拘束します。あなたの探していた人物はレジスタンスの容疑で逮捕され、脱獄しました。あなたには逃亡者の仲間の疑いがかけられます」

あっという間の事で、ただの一般人であるフランベに出来る事はなかった。何より自分だけでなく、世話をかけたシュガーローゼが捕まった事による衝撃と逃亡犯となった事が彼女を呆然とさせた。

すべてがあまりに突然過ぎた。

カイネ村に帰ろうとした矢先、少しシュガーローゼから離れたフランベに振りかかったのは少女の失踪だけでなく、以上の事であったのだ。何も彼女の預かり知らぬところで、すべて動いていた。どうする術も彼女にはなかった。

フランベはそれでも、身元がはっきりしていたし、逃亡犯のシュガーローゼと肉親ではないと言ってあったために、レジスタンスの容疑がかけられそうにはなったが、ただ役所の狭い一室に閉じ込められただけで済んだ。そこは修道士に与えられた質素な一室のような部屋だった。拘束されたとはいっても、身体を縛られるような事はなく手足は自由だった。簡素な食事も用意された。ただその狭い

部屋を出る事は叶わず、日に何度かシュガーローゼの行方を尋ねられたりフランベの身上を尋ねられたりした。
「叔母さん……大丈夫かい…？」
若くはないフランベは精神的な疲れも影響し、解放された時には疲弊していた。
カイネ村からのむかえが来て、今度こそしっかりとフランベの身の上が潔白であると証明されたので、彼女は自由になれたのだ。
むかえにはフランベの甥っ子のエリオがやってきた。
「エリオ……ありがとうね、むかえに来てくれて」
「そんなの……。叔母さん、大丈夫だった？　乱暴されてない？」
眉をひそめ心配するエリオを他所に、警備隊員は居丈高に言いつけた。
「逃亡犯は遠方へと逃げたかもしれませんが、もしかするとまだ近くにいるかもしれません。もし見かけたらすぐ当方にご連絡を」
「……はい」
こうしてあっけなくフランベは解放された。それは、短くはない拘束時間とシュガーローゼの安否に対する思いを引き合いに出せばあっけなさすぎるくらいに簡単に行われた。身元引き受け人であるエリオが書類に署名する間、フランベは眠たげに目を伏せていた。気だるいのも無理はない。慣れない環境で緊張を強いられ、夜も浅い眠りばかりを繰り返しあまりよく眠れなかったのだ。何よりシュガーローゼの失踪がフランベに大きな不安を与えていた。
この拘束時間、フランベがシュガーローゼについて得た情報は何もなかった。警備隊はフランベから何もかも全てを聞き出そうとしたが、シュガーローゼについて少しも手がかりが得られてないのか捜索に進展があったかどうかも知らされなかった。
「さあ、叔母さん、行こう」
甥の声にうっすらと瞼を上げると、繰り返したまばたきの向こうにはまるでフランベが病に付した老人に見えてるかのようなエリオが身をかがめていた。肩を抱かれ、本当に老人になったような気が

してフランベは苦笑した。何がおかしいのかとエリオが困惑したようにうかがいの目を向けると、フランベの方こそ困ったようにして笑って、立ち上がった。

「困ったわね。まだ若いと思っていたのに、そうじゃないみたい」

人は少しずつ一日一日を重ねて、老いてゆく。当たり前の事だが実感した。もう若者の仲間には入れてもらえない自分をフランベはもちろん知っている。しかし年寄りとは呼ばせないくらいには体は自由に動くし、若者に負けないようにと生活に張りを求めたりもする。だがこれまでに積み重ねてきた時間は決して短くはない。体に強いてきた酷使は少なくない。日頃健康に過ごしていれば忘れがちになる事を思い出したのだ。人は生まれた瞬間から老いていく。

ふいに、長い長い一本道を歩く商隊の仲間から引き離され、遥か眼前の遠くを進む商隊に目をやる商人のような気持ちになった。世界においてけぼりにされる、年寄りの虚しさを知った気がしたのだ。

人は老いる。人はそれを忘れて生きていく。だがある日自分も年をとる人間だと知るのだ。死は、老いは、自分にはふりかからないものだと思い込んできたこれまでを悟る事になる。自覚させられた、老い。

フランベは今回のアクシデントで想像以上に疲労した自身の体と精神に驚きながらも寂しく認める事にしたのだ。

「早く村に戻りたいわ」

少し、休みたい。叔母の言葉にエリオは優しげな眉宇を険しくひそめた。弱音にも近いそれを叔母が口にするのは少しばかり珍しい事柄だったからだ。不当な拘束だったと憤りを覚えるエリオとは異なり、ただ疲れたとこぼす叔母は、エリオを不安にさせるには充分過ぎるほどだった。ひどい事はされていないと言っていたが、エリオは少しでも早くカイネ村にフランベを帰してやりたかった。

「そうだね。ゆっくり休んだ方がいいよ。そうだ、ロベルトさんも来てくれてたんだ。町の入り口に止めた馬車で待ってる」

それから、家では母さんも食事を用意して待機中だし、と続ける

エリオはカイネ村で馴染みの人間の名を口にする事で叔母を励まそうとしてるかのようだった。フランベは両親には先立たれ、夫には戦争で死なれている。義理の両親のうち生きているのは義母だけで彼女ももう若くはない。親類縁者のうち特に親しくしているのは妹夫婦の家族だけだ。フランベの妹レッタは姉の身元引き受け人になりたがったが、役所や書類が関わる事柄には男がすべしというものが多い。はっきりとそう申す者こそいないが成人男性でなければ人間ではないという時代なのだ。それでロベルトもチェルヴォまで来てくれたのだろう。身内ではないがエリオよりも年長で、フランベと親しい男性だ。

家族や村の者というのは、確かにフランベの支えになってくれそうだった。心配症だが気の強い妹の顔を思い浮かべればフランベの表情も和らぐ。

厳めしい顔で入り口に立つ警備隊員の横を通り抜けた時にエリオは、叔母が閉じ込められていたその建物を恨めしそうな瞳で見上げ、叔母と連れだってその場所を後にした。フランベは一度も振り返らずに町の出入りにたどり着いた。

年上ではあるが、幼なじみのような存在のロベルトが石を蹴りながらフランベたちを待っていた。カイネ村で一番背の高いロベルトの首の上にはいつもの無愛想な顔。幼い頃から変わらない眉間のしわと年を経て増えた目元のしわ。年をとっても変わるものと変わらないものがあるのだと思わされる。ロベルトは昔からどこか不満げな無愛想面で、感情の変化を表に出さない人間だった。それでもフランベを迎える瞳には相手を気づかう優しさが灯っていた。

フランベは微笑むと荷馬車に乗って、男二人が目配せをして通信しあうのも知らずに荷台に腰をおろした。彼女はロベルトがため息をつくという珍しい光景にも気づかずにいた。エリオが隣りに座り、馭者であるロベルトが安全を確認してから馬に鞭を振るうと馬車はゆっくりと動き出した。

カイネ村には常と変わらぬ時間が流れていた。フランベを心配する村人たちがいなければ、平穏そのもの。ついこの間まで滞在していたはずのシュガーローゼの存在が薄れそうになるぐらいに普段通りだった。

「しばらくは何もしちゃダメよ」

フランベの妹はとかく彼女に派手な動きを禁じた。何もそこまで、と思ったがどうやらレッタは姉との同居を今回の件で実行に移すつもりらしかった。フランベはこれまで嫁いだ先の家で暮らしていた。夫をなくし、義理の母親も老いてから長男夫婦の家に引き取られ、フランベは一人暮らしをしていた。何も不自由はなかったがレッタは一人の姉を心配していたのだ。

フランベは家族や村人の心づかいをうれしく有り難く思う反面、どこか気後れしていた。拘留されたとはいえ無体な事は何一つされていない。それでも狭く平和な村の事、一大事件にもなっていた。大げさにする事でもないのだが小さな村では話題にならないはずがない。

その上、村の衆が助けた少女の事は腫れ物に触るみたいに口にしていた。彼女は扱いが難しい魔術器具のように見なされ、村人の困惑や疑惑の的になっていた。シュガーローゼは身元不明だった事もあり様々に噂されたが、元々フランベが一人で面倒を見ていたようなものなのでその具体性を知る者は少なく、悪し様に言うほどではなかったが。

フランベはただ心配だった。

妹の家で一日至れり尽くせりの歓迎を受けた後、病人ではないのだからとフランベは翌日に自宅に戻った。

十数日空けただけでわずか久しぶりに感じられる我が家も、三歩進むとすぐ肌になじんだ。家具の配置も、部屋の明るさも、その家独特のにおいも先日家を出た時と寸分違わず違いはない。

長年見てきた風景は人の心に安らぎをもたらす。そのはずが、彼女は見つけてしまった。自室の寝台にたたまれた小さな服を。ふくよかな体型の自分は決して着れない衣服、たたんだのは妹のレッタだろう。あれは、面倒を見ていた少女のためにと用意していたものだ。シュガーローゼに着せていた服は人に借りてもいたけれど、箪笥の奥から見つけたのはフランベ自身の幼い頃着ていた服だった。

何かがぷつりと途切れてしまったように感じた。いつもより少しだけ薄暗い自分の部屋。

「フラン」

聞き慣れないそれにフランベははっと目を見張った。幼い頃の愛称だ。それを呼ぶのはもう、妹すら止めてしまった。名前をめったに呼んではくれないロベルトを除いて。

首を動かすと開け放った戸の前に長身の幼なじみがいて、平素の無愛想な顔をこちらに向けている。彼がフランベの名前を呼ぶのはかなり稀有な事象である。ロベルトが「大丈夫か」と言いたいような顔をしている。それでも何も語ろうとはしないのがロベルトだ。口数も少なく、顔色も変えない幼なじみの声が聞こえたような気がしてフランベは「何かあった?」とだけ言った。

「……お前の妹に夕飯を誘われてな。お前も来いと」

「そう」

「丁度、畑に行くつもりだったからついでにと思ってな」

冬なのに? と問いかけるのはやめておいた。確かにロベルトの畑はフランベの家を通り過ぎてたどり着く場所だ。畑仕事は冬に全くしないわけではないが言い訳にしては夏に使うよりふさわしくない。そんなに自分は悄然として見えたのだろうか。ロベルトにまで気を使わせるくらいに。

それなら、笑わなくては。安心してもらうために。

「それじゃ、私も何か用意して行こうかしらね」
微笑は弱々しくなかったのに、ロベルトには彼女のまとう空気がそのように見えた。冬の風がぴしゃりと彼を打ち付けて、畑に行く気を遠ざけていた。
フランベはふいに逸らした視線の先に、毎年変わらぬ曇る冬の空を見つけて緩慢に目を細めた。
灰色の空は眠っているように動かなかった。

82　幕間2・帰宅（後書き）

一体誰の需要があるのかという幕間でした（笑）
でも、私としては彼女が一体どうしていたのか気になっていたもので。

それでもこっそりとフランベさんの幼なじみロベルト氏が気に入っていたりします。
きっと若い頃はいろいろあったんだろうなあという想像をふくらませられるような二人に見えたらうれしいです。

83　幕間3・失われたもの

一度失われたものは二度と戻ってこないと知っていた。戦場で、しつこいくらいにそれを味あわされて、手に入らないものばかりを思った。死んだのは戦友（なかま）だけではない。自分の心もだ。

今、また一つ失った。ヴェーネン公爵家とのつながりだ。確定にいたるまでではないが、ほぼ確実にヴェーネン家はルブランとの関わりを持とうとしなくなるだろう。突然任地から行方不明になった相手を婚約者にしたままでいようと考えないはずだ。オスティオで行なわれた事の仔細までは分からないが、生死も不明な相手を待つという行為を娘にさせるほどヴェーネン公は暇ではないはずだから、次の婚約者を見つけるのだろう。

戦でもないのに失われた婚約者、なんという惨めな響きだろう。これから円滑になると予想されたヴェーネンとルブラン両家の交友は、むしろ一歩後ろに下がってしまったようだ。間違いはない、あの娘はどう感じていようと父親の方はルブランの裏切りと考えていてもおかしくないのだ。

失われたものは、戻ってはこないのだ。いずれ自分の下からは居なくなる、既にルブラン邸で生活をしていないのだからもう自分の保護下にはないと気づいてはいたが、今度こそベネディクトの目の届くところから失われてしまった。

書斎から差し込む光は眩しく、冬にしてはあたたかいほどだ。だが、伯爵としてのベネディクトは冷え切っていた。家名に泥を塗るほどではなくとも、失態を演じて消えてしまった養子について思考する。

あれを最初に見つけた時には、下らぬちっぽけな存在だと思ったものだ。だが、一度失われてしまったものに結び付けてしまい、自身の間違いに気がついた時にはもう口にしていた。「私の元へ来ないか」などと、誰であっても言葉にしていいはずがない。人の命は、

他人がやり取りするようには出来ていない。どれだけの金と時間をかけて子どもを育てても、所詮はベネディクトは他人。たとえ立派な大人になろうと、堕落した人間に育とうと、ベネディクトのしようとしている事は誤りである。

まるで、失われたものがもう一度、自分の目の前に現れてくれたのだと勘違いをしてしまったのだ。ベネディクトが本来であればその腕に抱くはずだった子ども。失われた二つの命の一つが、彼のために再びのチャンスを与えてくれたのだと。間違いであったのに。

「……アーデルハイト」

いつまでたっても色褪せる事のない名前。失われたものの最たる存在。ベネディクトが二度と、絶対に手にする事のないもの。

女々しくも毎年数えていた。もし、望む未来が実現していたのなら、今頃――。

近しい年だったのだ。あの時ケイスは九歳で、失われたあの子は十一歳だったはずだ。日の目を見る事もなく、こうしてベネディクトが数えさえしなければ、年も、その存在も確かなものにはならなかった子ども。死んだベネディクトの子ども。重ねずにはいられなかった。ほんの一瞬だ。そのわずかな時間が命取りになると戦場でも思い知っていた。ただ一度、ケイスを我が子と重ねただけで王都まで連れて来てしまった。愚かな事をしたものだ。ベネディクトは父親になった事などはない。夫としても優良だったとはいえないだろう。一人の人間としても。

だが、連れてきてしまったものは仕方がない。思ったのだ。あまりに惨めで、哀れでみっともなく、生きてもいない少年を、自分の手で一人の人間へ作り上げる事が出来たならと。全て自分の思い通りにしようとまでは感じない。ただケイスはあまりに人形のように不自由で、生気がなくどうしようもなかった。長年生きてきた上で、自分を振り返った時にまともとはいえず、生きてきたと胸をはれない自分と似通うところがあるとでも、思ってしまったのかもしれない。

今だって実際、ケイスにしてあげられた事など何一つとしてないと思っている。失われたものはそのままで、一つとして戻らないと思い知らされたような気がしていた。ケイスはどこかへと消えてしまったそうだ。そう連絡が入ってきた騎士団に、伝えられた。現団長の方には何か考えるところがあるようだったが、ベネディクトには言う事はなかった。

ずっと書斎の机の前に座っていたが、体を動かしたくなった。じっとしているというのは案外疲れる。ベネディクトは折っていた腰を伸ばすと、理由もなく書斎の中を見回す。戦場で覚えた安全確認作業の延長のようなものだ。何もあるはずがなく、普段と同じ書架と置物といくらかの勲章や贈り物が置いてあるだけの部屋。敵などどこにも潜む場所がない。足を動かすと書斎のドアに向かい、一拍間を置いてからベネディクトは書斎を出た。

ルブラン伯爵邸には、彼が子どもの頃から現在まで住み続けている。彼の養子のように騎士になったからと寄宿舎に住まうような事はしてこなかった。あれは、どういうつもりで宿舎住まいを決めたのだろうか、ベネディクトには未だにもって理解出来ない。原因はあり過ぎるほどだからだ。決定打は、ケイスの故郷からの書簡を隠蔽し続けた事だろう。珍しく怒りをあらわにしていた。故郷に帰りたいとも口にせず、そういう素振りも何一つ見せなかった子どもだったが、ゾンネとのつながりを絶つつもりはなかったらしい。ベネディクトにしてみれば、一度持ち直した子どもが故郷を思い出す事で身内の不幸をも思い出すのではないかという采配だったのだ。

戦場（いくさば）では荒療治が最良となると言ったのにも、結果が伴わなかった訳ではない。王都に来て、ケイスは故郷を忘れられるようになったらしかったのだ。人は不幸を一度忘れるべきだ。何よりも大きな不幸なら、あんな人形みたいな状態になるほどの衝撃を与えられたのなら尚更だ。戦場での酷い記憶は今でも消えない。ベネディクトは忘れたくても忘れられないものを持っている。ゆえに一度はそれを捨てさせるように子どもに仕向けたのだ。故郷からの手紙など渡

せるはずがない。
　まだ他にも問題はあるだろう。あれはもう寄宿舎から通いになってからの事だが、ルブラン邸には用事がなければやって来ない子どもに、もう一度それが訪れた。まるでベネディクトが覚えたものと同じようであったらしい。失われたはずの妹が再びケイスの元へと帰ってきた。そうと知れたのは妹が死ぬ直前になってからだったそうだ。養子に最悪ともいえる事態が襲い掛かったその前後、ベネディクトは王都には居なかった。あちらが避けるから、追う必要もないと放っておいたのはベネディクトも同じだが、あまりにもめぐり合わせが悪すぎた。艱難が自分に降りかかった際に、常と同じ態度を取る人間が一人くらい必要だと知っていたベネディクトはとりわけケイスを激励するような事はしなかった。ただ一人にさせるのは止めにした。商人の息子という騎士仲間が訪れるのを黙認した。もっとも、あちらは遅れてやってきたベネディクトの方を責めているような目をしていたが。
　肉親を失った苦しみはベネディクトも経験をした事がある。だが彼は立ち直れてなどいなかった。ゆえにケイスに声をかけるなど出来なかった。何一つ。失われたものは戻ってくる事は決してないと知っていたから。そんな事を子どもに言ってなんになろう？　子どもの中の生存本能が蘇ればいいと、一度だけ昔のように剣の稽古をつけてやったが、効果などなかった。結局はあの友人とその他の人間がなんとかしてしまったようだ。もちろんケイスは、ベネディクトと同じように傍目には立ち直ったように見せかけるのに成功していただけだったが。彼自身がそうなのでよく分かる。
　それでも、若い男はそれだけで力を持つようで、いつしかケイスは本当に妹の死から立ち直ったように見えていた。
　騎士としてもまともになってきたようだし、政略結婚とはいえ婚約者を与えようと思ったのは、そのためでもあった。自分の力で立てるようになったのなら、それもいいと。
　先の武道大会でもよくやっていた。子どもは本当に成長が早い。

ベネディクトが衰える一方であるのに、もう一人前などとっくになってしまっていたと見せつけられた。自分の時間は止まったままでも、子どもはいつしか大人になり、前へと進んでいく。いつまでも失われたものを思う自分には出来ない事柄だ。

もう、ケイスは一人でどこまでも行けるのかもしれない。そう感じた矢先だった。

シェーン王国でしか暮らした事のない子どもに異動の辞令が出たのは。仕事だからと挨拶に来た時も平然としていたが、まさか行方をくらますとは、ベネディクトも予想すらしていなかった。思うと、意外にケイスは問題児なのかもしれなかった。

足が動くのに任せていたら、廊下の突き当たりにぶつかった。ベネディクトは考えもせずにまた来た道を引き返す。屋敷には生まれてからずっと住み着いている。見取り図などは頭の中に入って離れない。

最近少し体が重くなった。体重が増えたというのではないだろう。わずかな老いの兆し――。

こんなになるまで生きなくともよかったのかもしれん。

『わたしの私兵が戻ってくる事になりましてね』

現騎士団長は唐突に告げた。何の事かと促すように相手を見ると、キース・ベンダーは目が悪い者が遠くを見つめでもするように目を細めた。

『貴方のご子息が同行していなかったのです』

この男は、遠まわしな言葉を好まないと記憶していたのだが、違ったようだ。最終的に何を言おうというのか、そこを冒頭に持ってくるべきだったのだ。

『仔細は知らないと言うのですが、ご子息はオスティオ王国のチェルヴォという町で消息を絶ったと――』

ああ、そうか。もう一度失われたのだな。ベネディクトは理解した。もう一度帰ってくるという望みは抱いてはいなかった。抱いてはいけなかった。好機は一度で充分。

一つの部屋の前で扉を開けると、埃っぽい室内にはカーテンが覆われていて薄暗いのが分かった。ベネディクトは歩を進め、カーテンを開いて窓を開放した。冬の風が吹き込んでくる。ただ、もうすぐ春が近づいてくると教えるような刺すような冷たさはない風だった。いっそもっと冷え切った風であればよかったのだ。ベネディクトはしばらくそこでそうして立っていた。

失われたものは、戻ってこない。二度と。

普段人が立ち入る事のない場所から、物音がしてその侍女は同僚に声をかけた。同じく侍女であるその女性は、二人で連れ立って見に行こうと提案した。モップを持ったままの二人の侍女は、なんとはなしに足音を潜め、そろそろと歩き出す。ほんのわずか、泥棒かもなどという想像をしながら。

たどり着いたのは主不在のケイスの自室だった。今では騎士団宿舎住まいの、ルブラン伯爵の養子（むすこ）の部屋だ。彼は帰ってきていないどころか、どうやら何か問題があったらしいと使用人にまで知られているので、侍女たちは訝しく思った。顔を見合わせた後、部屋の中を覗き込むと、背の高い人物が立っていた。

何故だか見てはいけないものを見てしまったような気がして、侍女たちは顔を見合わせてからドアから離れた。少しだけケイスの自室から距離を取ると、声を潜めて語り出した。

「旦那様も、ケイス様の不在が気にかかるのかしら……」

「オスティオも遠いものね、何かあったみたいだし、心配なのかしら」

「あの旦那様がねえ」

意図的に出した咳払いのような音に、侍女たちは目を丸くした。飛び上がりそうなくらい驚いたが、予想通り首を向けた先には執事のフランツが立っていた。公正な裁判をしようと臨む裁判官のように厳然たる様相は、職務をまっとうせぬ侍女たちを叱ろうとしているように見えた。

慌てて二人は自分たちの仕事へと戻る。ケイスの部屋とは微塵も関係ない、階段と廊下の清掃へとだ。

その様子をフランツは横目で見届けながらも、声はかけるべきではないだろうなと眉をわずか持ち上げる。侍女たちにではない、自分の主に対してだ。主の背中は身長の高さに比例して広く、やせ細ってきたフランツなどとは違い見上げるほどだ。それなのに、今のベネディクトにはどこか、押せば倒れるような風情が漂っていた。などと、不躾な考えはよそう。フランツは全てを見なかった事にして、自分も職務に戻る事にした。

“あの頃”はまだ、少しはルブラン邸には覇気があって、明るさにも似たものがあったものだが。

今ではもう、失われてしまった。

戻ればいいと思うのだが、無理な話なのだろう。

どこからか吹き込んできた風が首筋を撫ぜ、フランツは肩をすくめた。

83　幕間3・失われたもの（後書き）

またしても誰の需要があるんですかという伯爵の話。
私の需要があるからよいのです。（え

少し前にケイスの過去編をやったので、伯爵がどう思っていたかを書きたかったというのもあります。
それでも、もっと掘り下げて書きたかったのですがきっとかなり暗く重くなるのでやめました。
こっそり執事のフランツをまた出せたのが楽しかったです。

これで第一部の幕間は終わります。
次からは第二部がはじまる予定です、よろしくお願いします。

８４　その始まり（前書き）

第二部が、はじまります。

84　その始まり

†　†　†

寒い寒い夜だった。空がとても遠い夜。
天空は冷え切って、それでいて澄み切って、その上気が遠くなるくらいに暗い色をしていた。

一人の子どもが、夜中に眠れなくて目を覚ました。普段あまりしない行為だったが、その日はどうしてか急に目が覚めてしまい、すぐに寝つけもしなくて時間をもてあましていた。どうしてかは分からないが、子どもは靴を履いて家の外に出てみる事にした。
月の明るい夜だったため、星は主役の座を彼に明け渡し、月光の届かぬ場所でささやかな光を放っている。
空気は冬の冷たさで満ちていた。寒気にぶるりと身を震わせると、子どもは自分の馬鹿な考えに首を振った。月明かりがきれいだといっても、こんな夜中に外に出るなどと間違っていた。踵を返そうとしたところ、ごうっという音がした。
子どもが顔を持ち上げると、天に月が二つに変わっていた。
空が明るかった。
一つは、月などではなかった。光はそう長い間地上を照らしていたわけでもなかった。
だが、目が眩むほどの輝き。明滅するように尾を引く、それ。
子どもは息をするのも忘れて空を見上げ続けていた。それがなくなって、空に平穏とただ一つの月と、彼を避ける星たちの優しい光だけが闇を照らす、普段と同じ夜に戻るまで、ずっと。

その夜、天から星が落ちた。
ウィディト大陸東の、未開の地に落ちたそれを知るものは少ない。
流れる光の筋を見たものはいくらか居た。
中には過去にそれに似たものを見た事がある人間もいて、そこまで不思議な事ではないと、いつしか記憶の彼方に追いやられてしまった。誰も、常の生活の中においては思い出す事などなくなっていく。その程度のものだった。
未開の地で、墜落したそれを見たものがいたとしても、それがどうなるか知るものはない。
ゆっくりと、確実に、胎動した“それ”を。

† † †

85　画家見習いとその友人

時は、一人の少女がカイネ村をはなれた頃にまで、さかのぼる。

木製の覆いがしてあるだけの窓の部屋、少し薄暗いその中で若者はカンバスに向かいあっていた。雑然とした部屋の中はひと部屋で玄関であり台所でもあり居間でも寝室でもあった。生活用品の細々としたものや画材道具が散らかっている中に、一匹の黒いオウムが身動ぎもせずに止まり木に鎮座していた。

まだチューブの絵の具など開発されていないこの時代、絵の具をはじめとする画材のどれもが安くはなく、カンバスも枠木に麻布をはって、トルネが作り出したものだ。

あまり売れない画家見習いであるトルネは、象牙色のカンバスの表面をそのままにして考えこんでいた。

インスピレーションはある。描きたいものは、天使と悪魔の出てくる聖典の一部分だ。天上におわすという天使が、地獄から飛び出してきた悪魔を打ちのめす逸話。そっくりそのまま善悪の対比にするつもりはトルネにはない。対立構造を描くつもりはないのだが、それならばどうしようかといざ自分に問うと、はっきりとした答えにはならないのだ。

イメージはたくさんある。いつか見た過去の巨匠の同じ主題の絵画を見た時に受けた印象や、自分だったらどう描くかなど考えていた事はたくさんあったはずだ。だが、何も形にはならない。もどかしい。

若者はカンバスに向かうのをやめた。机に転がっている紙とペンを手に、まずは断片的でもイメージを少しずつ実現可能なものにしていく事にする。油彩完成のための習作作り。

天使はまず、どんな姿をさせようか。甲冑を着せるか、優美な白い衣を翻した姿にするか。武器はもちろん持っている。剣や槍、輝く天上の力とばかりに神々しいものにするべきか。先に剣が思いつく。この間店で見た剣のデザインに影響されている。断片からはじめると、意外に上手くいく。このまま進めていければいいが。

『レンラグダ！　レンラクダ！』

トルネの集中を途切れさせる甲高い声が響いた。驚きにいくらか肩を跳ね上げた後、たった一つの可能性に気づき、やっと気分がのってきたところだったのにとトルネはため息をつく。苛立ったかのように小刻みにペンを振るうと、オウムを振り返った。

「ああもう、誰だい？」

まったく動かずにいた黒いオウムが、クチバシを開いてわめいている。彼はトルネの友人であるが、ただのオウムではない。つややかな黒い羽、立派な尾羽が輝かしいだけではなく、とある力の影響下にあるために自分以外の意思でしゃべる事が出来る。

『レンラクダ！　テンヲアオギミルカラレンラクダ！』

「カルツか……何かあったな」

トルネの友人は、連絡をせねばならない状況に陥ったのでなければ、連絡をよこす事はない。つまり、緊急事態だから助けを呼んでいるという事もなきにしもあらずというわけだ。

オウムは、そんな友人との連絡手段の一つであったのだ。要はオウムを介してトルネはここにはいない人間と話をする事が出来る。

「いいよ。ククロ」

鳥の声を上げていたオウムは、ぱくぱくとクチバシを開け閉めした後、なめらかな人間の言葉でしゃべり出した。鳥の高い声などではなく、低い男の声になって。トルネのよく知る人間の声だ。

『……トルネ、おれだ。ちょっと面倒な事になった』

「どこのおれさんですかね。カルツみたいな人が他に居たら困るけど。まったく、面倒な事にならないと連絡一つよこさないなんて、君からの連絡が怖くなるじゃないか」

『……悪かったな』
本当に悪いと思っているのかはなはだ疑問に感じられる声音だが、いつもの事だとトルネは知っている。無意識の内に、トルネは手にしたペンをくるくると指で回してそれを見つめる。
「で、何があった。その様子じゃあ死ぬほど危ない状況にはなっていないみたいだけど」
『死にかけたかもしれないが、生きている』
トルネは一気に顔をしかめた。死にかけた、なんてそう軽々しく口にしていいはずの言葉ではないはずだ。だがカルツは毎日同じ文言を読まねばならない役人のように平坦な声でそれを言葉にする。慣れたものだと思ってきたが、まさかそんな危ない状況になっていてもなお、感情に乏しい声音でいられるとは。いっそトルネは友人を褒め称えでもすればよいのか、という自棄(やけ)にも近い気持ちになった。
「本当に、君からの連絡は心臓に悪いね。大丈夫なの」
『体調は問題ない。ただ、目的地から大きく離れてしまった事と、厄介な場所に居るというだけだ』
「はいはい、そうですよね。そうじゃなきゃ連絡よこさないんだから。で？　どうする？」
しばし、鳥は黙りこんだ。という事はカルツが黙考しているという事で間違いない。彼らは、同じ故郷の出だ。しばらくは行動を共にしていたのだが、カルツだけが放浪をする身になっていたのだ。また、合流するという事も可能性としてないわけではない。
なかなか、返事はやってこなかった。オウムのククロに罪はないのに、彼がカルツからの通信を妨害しているような錯覚におちいる。睨みつけても剥製のようにじっとしていて動かない。
「一度、戻って来なよ」
『今、どこにいる？』
「まだヴァンクールだ」
またカルツは黙りこんだようだ。大抵の場合、トルネはカルツの

考えが推測出来るのだが、こう距離もあって表情も読めない――顔を合わせても、表情の変化はほんのごく僅かであるが――のでは、推理も難しい。

ふいにトルネは閃いた。カルツに、思い出してほしい人物がいる事を彼に告げるべきだと、頼まれていたのだ。手にしたペンを、びしりとオウムにつきつけて、まるでカルツに指を指しているみたいに振舞う。

「アルテアが心配してたぞ。大丈夫だとは思ってるみたいだけど、やっぱりなあ」

今度はカルツがどう答えるか。さすがに、よく知る仲間を無碍には出来ないだろうと思ったのだが、あちらの方で問題があったようだ。

『時間切れだ』

カルツ以外の人間の声がわずか聞こえてきた。唐突にオウムがクチバシを閉じる。どうやら、“時間切れ”のようだ。トルネは眉を持ち上げてあちら側の風景を想像する。死にかけたと言っていたからには、カルツは大怪我でもしたのだろう。そのため他人の世話になる事態になり、カルツが怪しげな“術”を使って遠方との通信を行っている場所にその人間が現われ、突如通信をやめざるを得なかったのだ。ただでさえ、カルツは嫌われた種族。

ミファク族は、大陸の人間が一般的に扱う“魔術”とは異なる“力”を持っている。他にも様々な要因があったとはいえ、ミファクの者ならほとんど誰でも“力”を扱えるために恐れられているのだ。まさか、それを見られるわけにはいかない。トルネにも、カルツが通信を強制終了させる理由は充分すぎるほど分かる。彼もまたミファク族だったからだ。

トルネ本来の容姿は、藍色の髪とやや朱色を帯びたオレンジの瞳。典型的なミファク族のそれ。だが今は、ミファクを迫害追放したミリヤール帝国のお膝元に居るために、染め粉で髪をキャラメル色に染めている。外出の際にはややくすんだレンズの眼鏡をかけて活動

しているので、一目で彼がミファクの人間だと理解するものはいないだろう。

「さて……彼は素直に戻ってきてくれるかねえ……？」

普段は忠実なトルネの友人であるククロは、カルツとの通信の媒体となる時以外でも、黙り込んでいる事が多い。それでもトルネは人間の友人にするように話しかけていた。返事はない。まったく、彼の周りのものは無口なものが多い。だが、先ほど話題にのせた彼女だけはそうではない。むしろ、彼女の性質はきっとカルツとは正反対のものだろう。あの楽しいおしゃべり娘の事を思い出せば、自然トルネの口はほころんでしまう。

これから、どうなるのか。若者は白いままのカンバスを見つめて眉を持ち上げた。まずは妹に連絡をしてやろうと決め、ペンを机に置いた。

85　画家見習いとその友人（後書き）

カルツ、おれおれ詐欺中。（違う

86　港湾都市ジュレ・ブランシュ

ミリヤール帝国は、皇帝を国の元首と仰ぐ、巨大な版図と多くの臣民を抱える国家である。帝都はもちろんの事、非常に栄えた都市がいくらもある。そのうちの一つが、広い港を擁護する湾岸都市ジュレ・ブランシュだ。リヴァージュ湾の内側に存在するジュレ・ブランシュ。港だけで栄えているのではなく、少し離れた場所にはなるが、大きな学園の存在も都市の繁栄、名声を高めている。

帝国の都からは距離があるが、統治者の力もあってか帝国の各地で現在見られるような反乱の兆しや、貧しさ、不満そうな国民の顔は見られる事がなかった。ミリヤールの現状を思えば、ジュレ・ブランシュは帝国の手中にしっかと収まっているように見える。少なくとも、表面上は帝国の支配が行き届いているようなのであった。

ジュレ・ブランシュは大きく港の区と学園の区とで分かれている。その二つの区はそれぞれ港、学園を中心にして建築物を固めている。空飛ぶ鳥と同じ目線で見れば、横にした瓢箪（ひょうたん）の形に似て見えるだろう。その瓢箪を横切るのは帝都につながるイブー街道。ジュレ・ブランシュにて活動をするのなら、港と学園とイブー街道と無関係ではいられない。このイブー街道だけは歴史が古く、帝国がまだいち都市国家に過ぎなかった頃から存在する。遥か昔の石が嵌め込まれたその街道は、摩擦により照って、輝いていた。石畳のイブー街道を旅人がよく使うような外套（マント）を羽織って西進する二人組がいた。

「港に行くのか」

これは事実の確認ではない。尋ねた相手が港の区へと行こうとしているのは明白だからだ。彼が問いたいのは、何故港へ行く必要があるのか、という点において質問――ではなく、詰問したいのだ。更に言えば、そんな必要はないのだと伝えたいのだったが、相手はそれをそっくりそのまま受け取るような人間ではなかった。それどころか、返事すらしない。一歩後ろで追いかける彼には相手の顔す

ら見えない。
「聞いているのか、アストリュク」
いつも以上に自分のペースで物事を進める相手に、ヴィードルはしびれを切らした。腕を掴んで、それ以上は進ませまいと強く力をこめる。相手は立ち止まったが、自分の意思を貫き通す闇色の瞳で睨み返した。
「海が私を呼んでいる」
呼んでねえよぼけっ。よっぽど言おうと思った罵倒も、その時ばかりはあまりに頭に来すぎて、口にする事もままならなかった。そんなヴィードルの動揺を利用して、相手はするりと腕から抜け出した。そしてまた、歩き出す。
あれを放っておくわけにはいかないが、そうしてしまいたかった。何故ならヴィードルが本来の目的地でもない都市にやってきたのも、あの男のせいで、なおかつあの男がいなければこうも簡単には帝国の版図へたどり着けなかっただろうという、一種の借りのようなものがある。
あれは、数日前の事だった。

† † †

シェーン王国にて、自室に帰ったヴィードルは相変わらず自分の家に住み着く友人を、どうしてしまえばいいのか頭を悩ませた。

その日、城下町警備隊の隊長ヴィードル・フォーフ・アイネムに下された使命は「帝都ヴァンクールへ向かえ」というものだった。自分の仕えるべき相手であるヨハネス二世国王陛下に、そう告げられた。これまでに権力者に突然の命令を下される事はヴィードルにもいくらか経験のある事だったが、シェーンの都とミリヤール帝国の都は、近いなどとはとても言えないはずの場所にある。それを、まるですぐそこの庭で魚を釣ってこいとでもいうような気軽さでもって、ヨハネス二世は言ってのけたのだ。さすがのヴィードルも言葉を失った。自分が、微妙な地位にいて今の国王に気に入られていないのは知っていたが、まさか左遷のような事をされるとは。

正式には下った密命は「シェーン国王の臣下とは知られずにミリヤール帝国の都に赴き、レジスタンスの動きと帝国の政情をじかに触れて情報を多く手に入れろ」というようなものであった。だが、そのためにもうけられた期間は約半年。なんとも猶予のある話だろうか。

おそらくは、ヨハネス二世はさすがに帝国事態の問題と、シェーンと帝国との緊張関係が悪化するのを恐れて、手を下す必要があると見なした。だが、あまりにも危機感がなさすぎた。むしろ、先にヴィードルという扱い辛い存在をどかしてしまおうという目論みがあったから、ついでに帝国の視察に向かわせたのではないか、と思わせるものだった。そもそも国王の守り手は王国騎士団、王家直属軍のようなものなのだから騎士団長なり騎士なりに視察に向かわせるべきが、警備隊に話を持っていく事からして事態を軽んじていると言っていい。

今のままではシェーンはいずれ、頂点に立つもののせいで危機を迎えるだろう。ヴィードルは命じられた事に従う旨を告げながら、そう判断していた。

だからこそ、帝国に行ってもっと新しい考えを国王に吹き込んで

やるのも、かつては騎士団の一員だった自分の役目なのではないか。そうとも考え、ヴィードルは帰宅した。

ミリヤール帝国の都、ヴァンクールまでは徒歩では半月ほどかかるという。さすがに馬車か馬で進めばもっと早くに帝都に着ける。早く旅支度をはじめなければならなかった。その中には、同居人の処分もあった。彼になんと言い訳して、出て行ってもらおうか。しかしあの男を世に放ってしまえば、問題が必ず起こるに違いない。とはいえヴィードルの任務について来させるわけにはいかない。いっそあの男を牢屋にでもぶち込んでしまえば楽なのだが。半ば本気で思いはじめたところで、家に着いた。

ヴィードルの迷惑な友人、アストリュクは今日もどこからか――本屋か最悪な事に王立図書館――持ってきた書物でヴィードルの部屋を狭い場所へと作り変えていた。乱立する書物の塔、その間に挟まるようにアストリュクは本を覗き込んでいた。一見このまま放っておいても問題がなさそうに見えてくる光景だ。そんなはずはなかったが。

「どうした。ワステカジシの捕食でも見たような顔をして」

なんだか頭痛がしてきたが、気のせいだと思う事にして友人の方は見ずにヴィードルは自室へと進んだ。ひどく狭くなってしまったその部屋を。

「どんな顔だ。それより、お前この本はなんとかならんのか」

これを片付けてから旅に出なければならない。なんと時間のかかる旅支度だろう。今から全てが億劫になってきた。

「どれがどこのものかは覚えているから、お前返してきても良いぞ」

「誰がするか。それより――」

さて、何と切り出そう。どう言ったとしても、ヴィードルが王都を離れ他国へ赴かねばならないのは明白だ。しかしその間のアストリュクの行動がどうなるかを決めるのは、少しくらい自分の言動に左右されてしまうのではないか。ならば、もっとも世界に被害が起こらないように真実を告げるにはどうしたらよいのだろうか。

「帝都にでも行くのか」
「げ、なんでそれを」
「勘だ。そして楽がしたいのなら私が案内をしてやろう」
一時、アストリュクの言う言葉を脳内に行き渡らせるに時間が必要だった。そもそも、何故ヴィードルの帝国行きが分かってしまったのか。そうとにおわせるような発言は一切していないはずだ。更に、「私が案内をしてやろう」とはどういうつもりだ。まさか、本当にヴィードルについて来ようというのか？　とても、嫌な予感がする。
「待て、お前どういうつもりだ？」
「どうもこうもない。帝国に行くなら時間と体力と費用が必要だ。だが、それを軽減させてやろうという私の崇高な精神がお前を幇助すべきだと告げているので、申し出たまでだ」
「手助けはありがたいがな、お前まさか自分もついて来ると言いたいのか」
「不思議だな。まるでお前がこの帝国旅行の主役だとでも言うような物言いではないか」
「当たり前だろう。俺が陛下直々に下命されたんだ、共は少人数に抑えろとのお達しだが、それでも俺がリーダーだ」
「ほほう、お山の大将になれて鼻高々か」
「ガキのような下らん事を言うな。俺は、お前の同行なんざ認めないぞ」
白けたようなアストリュクは、片手を顎にそえて、思案するような素振りをとってみせる。
「ふむ、私はここに来て帝国遠征の相伴に正当な所以を提示しなければならないようだな」
ヴィードルはさっきからずっと感じている嫌な予感を更に深めた。それは、長年の間他人を欺き続けていた犯罪者が、まんまと自分の罪を世に知られる事なく役人から逃れられた時に浮かべるような、人を食ったような笑みだった。アストリュクはいつだってまともな

人間のように笑ったためしがないが、この時ばかりは嫌悪がヴィードルにも浮かんだ。
「お前に下った密命は、元をたどれば私のお陰だ。先達（せんだつ）ての上級犯罪者牢の自白を覚えているか？」
当然だ、ヴィードルは目の前の男と同じくその場に居た当事者なのだから。覚えていないはずがない。そのため何も言葉にする事なく、相手の次の台詞を待った。
「あれはミリヤールの手の者だ、ミリヤールに人材を派遣せよという意味合いを含めて兵士に記憶を与えたのは、私だ。加えて私はお前の長旅を省略してやる力を持つ。遠距離を、瞬きより早く移動出来る魔術をな、つい最近覚えたのだ」
「つい最近？」
顔をしかめたのは、最後の点に対してだった。言いたい事など、ヴィードルにはたくさんあった。この男、アストリュクを前にすると誠実な大人の仮面がはがれてしまう自分を知っている警備隊の隊長は、しかし昔からのつきあいの友人に、昔からの対応をしてしまうのは仕方がないと思っていた。そもそも相手の精神年齢もどこか子どもじみているのだ。それが一番悪い。問題は全てアストリュクにあるのだ。全てこの男が悪い。
「そんな生兵法が信用出来るものか。お前は黙ってどこかに隠遁してなさい」
「……ほう……そんな口を利いていいのかな。お前が、毎週、遅い時間に帰宅する日がある事を、私は知っているのだが？　その理由を、全て推測とはいえ一から十まで秩序立てて説明出来るのだが、それを聞きたいのか？」
なんという脅しか。それはヴィードルにしか分からないだろう理由。そんな些細な事、知られているとは思わなかった。もしかして、恋人になりそうな相手がいると友人に告げなかったのを、恨まれているのだろうか。そしてその存在が知れれば、警備隊では少なからず騒ぎになろう。何しろ隊員全体が馴れ馴れしく野次馬根性丸出し

の単純な男たちばかり集う場所。隊長の恋人、なんていう存在が彼らに知られてしまえば彼女にも迷惑がかかるくらいに事を大きくするに違いない。何にせよ、アストリュクにまでその女の素性を知られたくはない。いい予感は全然しないのだから、これまで隠してきたのに間違いはない。だがこうして脅迫の材料にされるくらいだったら黙っておくのではなかった。

いや、そもそもいくら相手がアストリュクだからといって、恋人未満の相手を紹介するのにためらうべき存在だろうか？　いくらなんでも相手は人間だ。人間のはずの人物だ。恋人もどきの存在が知られたからどうだというのだ。いや、問題は問題だが、今ここでアストリュクが口にしたって、会いたいと抜かすとは限らない。その場しのぎのためには頷く事も重要なのではないか？

外交史の本でも読んでおくのだった。見当はずれに近い思想を抱くヴィードルに、アストリュクは結局他の案を出す事にした。

「帝都までは、上手くいけば一日か二日でたどり着けるはずだ。私が用事があるのは帝都だ。そこに着けたならば別行動をする。それで良いではないか」

いや、それはそれで問題な気が――。ヴィードルは気が遠くなりかけた。

とはいえ、この男が一度言い出したら聞くはずがないのは自明の理。そして、それを最小限にとどめる手など、もはや存在しないのだ。せめて馬の手綱を握る御者よろしくヴィードルが監視の目をゆるめないでいるべきだ。従うしかないのだろう。それに、魔術で移動が楽になるのは、正直助かる。警備隊の隊長になってからというもの、事務仕事が増えて体を動かす機会が減った。今回の旅は体力をつけるにはふさわしいものかもしれなかったが、そうゆっくりしていいはずがなく、国王陛下の目を覚まさせるには行動は早い方がいい。

「お前は帝都に何しに行くつもりだ、アスト」

また彼はにや、と笑った。ああ帝都の民よすまない、こんな男が

たどり着いたら何かが壊されてしまうに違いない――帝都の平和とか。などと考えるヴィードルも知らずに、なんて事なさそうに答えた。

「例のレジスタンスどもの様子と、政情不安を眺めに」

アストリュクの魔術で、普通は半日かかるところを一秒で行く事が出来る。そう説明されても、いまいちヴィードルは理解出来なかった。だが、実際に目にしてからは違った。数日で旅装を済ませた後に、アストリュクにつれて行かれた場所は、たった少しの短い間では到底たどり着けない場所ばかりであった。

一日で、王都からは離れ、シェーン王国を飛び出してしまった。理屈はこうらしい。術者であるアストリュクが持つ体力と魔力が持つかぎり、一定の距離を一瞬で進む事が出来る。たとえ過去に訪れた場所でなくとも、それは可能だ。だがさすがに王都から帝都（シェーン ヴァンクール）までひとっ飛び、というわけにはいかず、十数回に分けて空間転移の魔術を行なわなければならなかった。

そうして、順調に進んだ旅路だが、一つ問題が起こった。

目的地の帝都を通り過ぎてしまったのだ。計算違いだった。しかしアストリュクが小休止を所望したので、近くにあった町に寄る事にした。それが港湾都市ジュレ・ブランシュだった。

一晩休んで、翌日にはまた帝都を目指そうと彼らは決めたはずが、これまでに通った町より規模の大きなジュレ・ブランシュを前にアストリュクは知的好奇心にかられてしまったらしい。

そしてヴィードルは人混みの中に友人の姿を見失ってしまった――そういうわけだ。

87　邂逅

港は、新しく着いた船とその乗組員とで賑わいに磨きをかけていた。この港は、帝国の目が行き届いているはずがどうにもおかしな空気が流れている。アストリュクは目には見えないそれを肌で感じていた。何がどうとはいえないが、何かがおかしい。そういう感覚だ。

広い市場も立っており、呼び声がかかる中をその“きな臭さ”を探して歩きまわる。

明るい声ばかりの道を逸れると、どこか人通りが多いにも関わらずいくらかの緊張感のようなものが流れるその場所にたどり着いた。多くの人間が塊を作るような中に飛び込む。

「どれもたった今着いた商品ばかりでございます」

声を高らかに、一人の男が申す言葉がアストリュクは気にかかった。足を止めると、同行者がいつの間にかいなくなっているのを知る。どうでもいい事ではあったが、周囲の人間がそろって向ける視線の方向を見定めようとアストリュクは眼球を動かした。目的はすぐに達成された。

「その前に、服があまりに汚れておる、大丈夫なのか」

「健康なのは確かです。服は換えればすむ事です」

「そうだな、目に力もある」

人だかりの中では、何が行われているのか判然とせず、その会話もすべてを拾う事は出来ないでいた。魔術を使って聞き取る音を選ぼうかとも考えた時、騒がしい声がした。何かをわめく男がいるらしく、それを阻止する者がいるのかくぐもったものに声が変わる。口論のようではあったが、もめている時間はそう長くもなかった。ゆっくりとうるささは減ってゆき、大声はなくなった。後は周囲の人間の撒き散らす隣りの人間や少し距離のある相手にしか聞こえぬおしゃべりが広がるだけ。

「さあ、次です。珍しい色の商品が入りましたよ」
その場はにわかに声のボリュームをあげるものばかりになった。
“珍しい”という単語には学術的興味の方向に対して働くアストリュクは、一体何を稀有と呼ぶのかどうか好奇心がわいた。前に進んで商品とやらを見定めようと決める。
「五万」
「いや、おれは十万出すね」
それが競りのようなものだと気づいたアストリュクは、商品が見られるくらいに先へと進んで――彼には珍しい事だが――わずか目を見開いた。「……金か」アストリュクはしばし顎に手を当てて、眉間を寄せる。本物を金を用意せずとも、相手の見たいものを見せる魔術という便利なものがあった。一定時間しか効果はない上に相手が魔術師であればすぐに見抜かれてしまうものではあったが、魔術師らしい人間はこの場にはいない。魔術師ではないが魔術をかなり研究している人間だ、彼にさぐれない魔術師の気配はない、というわけではないが相手がかなり高位の魔術師ではない限り魔術師が近くに居れば感知出来る。だが今この場には魔術師らしき者はない。
「百万だ」
大声を張り上げたわけでもないのに、アストリュクの低い声は大勢の耳によく通った。その場の人間たちは一気にアストリュクの顔を振り返る。「百万だと？」「おいおい」「いくらなんでもどうかしてるぜ」周りからもれる声があまりにも驚いたものだったので、アストリュクはこういう場所の相場はいくらなのか知らない自分が問題なのだろうかと目をすがめる。凄まれたと勘違いした周囲の男たちは、アストリュクからわずか身を引く。アストリュクからは得体の知れない異質な空気がもれ出ていたからだ。
「えー……、はい、百万出ました。他は？」
その男がこの売買を取り仕切っているようだった。この場、この場で行われる事に特に問題点は見当たらなかったが、アストリュクはその男に何かをしてやりたくなった。たとえばそう、魔術で何か

を。アストリュクは気に入らない相手には恥をかかせたくなるがそうでもない相手にも何かしてやりたくなる人間なのだ。何がいいか、考えているうちにその競りは終わった。

「では、そちらの百万の方、こちらへどうぞ」

仕方がなしにとりあえずは目当てのものの前へと行く事にする。漆黒の髪の男が持つ独特の雰囲気から、人混みをかきわけさせる必要もないため、アストリュクは簡単に人間の塊から離れる事が出来た。たどり着いたその先にあったものの様子がおかしかったので、内心からもれる愉悦をつい顔に出してしまった。

「あ、んた……」

呆然としながらもわずかにじむ恐怖を隠せない、そんな表情の少女。まるで今から一時間後に地球が滅びるとでも言われたみたいな顔をしている。そういう顔をされるのには慣れているが、アストリュクも今回のような出来事ははじめてだ。獲物の方からやって来てくれるなどという都合の良い事は。

「お先に、お金の方をよろしくお願いします」

その男――競売人（オークショニア）は営業用の笑みを張り付かせて、背後のものを隠すかのようにしてアストリュクの前に立ちはだかった。それは、アストリュクの不満をかった。ぐっと彼の眉間が寄る。だがここで騒ぎを起こす気はないので相手の言葉に従うしかない。たとえ魔術を使ったとしても表面上は正式な取り引きが行われていたと錯覚させる必要がある。アストリュクはポケットの中に手をつっこんで、誰にも聞こえないように小さなつぶやきをもらしてからその手を引っこ抜いた。ミリヤール帝国での高額紙幣を思い出す。

「これでいいか」

簡単に出された札束を、競売人はぽかんとした顔で見つめた。相手の身なりはそう良いとも言えず、まさかこんな風にひょいと大金を用意出来る人間だとは思ってもいなかったのだ。だが、金さえ手に入ればそれが盗んだものでも拾ったものでも構いはしない。競売人はあふれんばかりの笑みを浮かべてその札束を受け取った。

「まいどあり」
競売人を冷えた目で見た後、アストリュクは渡された縄とその先に視線を移した。
「おい、待てよコラ！　何やってんだよてめえ、そいつはオレのだ！」
何か大声が聞こえたが、しばらくすると「どうせならオレも買ってけ！」という言葉を最後に鈍い音がし、静かになった。そのどれにも意識を配っていなかったアストリュクは目の前の獲物をどう捌いてやろうかという瞳を光らせていた。人間などというくだらない存在を売り買いするという点では、アストリュクは人身売買は愚かしいと考えていた。もっとましなものを売るべきだと。だが、この時ばかりは悪いものではないなとさえ感じた。まさかこの港で人の売り買いが行われているとは思わなかったが、よくある話だ。この場のような競売（オークション）形式は少し珍しいが。とにかく、自分の都合に良い事が降って沸いて、笑いが止まらなかった。
いつか見た時より少し髪が伸びたようだったが、二つに結んだピンクゴールドは埃やゴミが付着してかなり汚れている。その汚れは何も髪だけにとどまらなかった。細い手足が生える衣服も、あちこちに赤黒い染みが出来ている。そのせいか悪臭に近いものすら漂う。あまりにみすぼらしい身なり。ただ、戦闘意欲を思い出したかのようなアクアマリンの瞳だけはひどく明るい色をしていた。焦りや、戸惑いや苛立ち、怒りなども読み取れるアクアマリン。
「世間は狭いな」
まるで殺人鬼がお気に入りの殺し方で人を殺した時のような笑顔をして、アストリュクは少女に向かって声をかけた。とはいえそれはほとんど一人言のようなものに近く、返事など期待していなかった。もちろんシュガーローゼはそれを理解していたわけではないが、口を開く事はなかった。ただ腹のうちに燃える炎のようなものをどうしたら相手にぶつけられるかそれだけを考えていた。
人の負の感情を見つめるのが好きなアストリュクはいつまでもそ

れを見ていたかったが、そうもしていられない。この競売（オークション）で大金を出して人目を集めてしまったアストリュクは、どうにもこの場では目立つようだ。そしてその高い値段をつけられた商品――シュガーローゼも。

踵を返しひとまずは港の区を離れようとするが、手にした縄がぴんと張り思うようには足が進まなかった。体力や体格的にもアストリュクに分があるが、ただこのまま縄を引っ張り相手を引きずり回すのは面白みがない。どうしたものかと思案していたところ、離れた場所からアストリュクを見つけた人間が声をあげる。

「……アストリュク？　何をしているんですか」

声をかけられた本人は、友人がこれまでにしてこなかった新しい表情をしているなとだけ思った。それは笑みにしてはいかにも凶悪で、その下に潜んでいるものが必ず負の感情であると裏付けるような表情（かお）。面白いなというアストリュクの感想が友人に知られたら、頭部の殴打くらいは覚悟せねばならないと、彼は知らない。

88　下船の後に

海賊船に曳航されたペッシェカーネ号がたどり着いたのは、どこかの港だった。活気ある海の男の声がして、やっと船旅は終わると捕虜たちはその事だけに安堵した。もちろん下船の後に行われるだろう得体の知れない何かに対する恐怖をかき消せるようなものではなく、おびえを隠せないまま捕虜たちはその時を迎えた。

一人ずつに分けられて海賊たちに部屋を出るよう言われた捕虜たちは、それぞれにその身体に怪我がないかどうかを調べられた。驚くべき事に、怪我人に対しては魔術による治療が行われた。誰もが海賊の行為に目を丸くしていたが、次に起こる事を思えば納得してしまう治療行為だった。

シュガーローゼもわけが分からないままに、顔を知っている二人とは離されて、部屋を出た。彼女の怪我は船上で負ったものはひどいものはなく、そもそもが彼女は自然治癒能力が通常の人間より高いという事もあって、小さな傷を治されただけだった。だが、頬の小さな傷まで消してしまうとは、海賊の男たちには一体何のメリットがあるというのだろうか。

怪我治療の後には、両手を縄できつく締められた。長く伸びるその先を引っ張られたらシュガーローゼはその方向へと両手を突き出す形になる。まるで犯罪者だ。

「前へ進め」

縄を引っ張られ、シュガーローゼはただ足を前にした。一瞬、傷だらけの青年が視界をよぎったが認識はしない事にする。自分よりもっとぼろぼろのケイス。勝手な善意ばかりを他人に押し付ける目障りな存在。彼はもう、この世に存在しないと思えばいい。

「ローゼ！」

耳には入ってくるけれど、記憶にはとどめなければいい。ただシュガーローゼは海賊に命じられるままに船を歩き、下船した。

久しぶりの天井のない空間は、本当に圧巻で一気に視界が開けた事がシュガーローゼの目を大きく広げさせていた。魚くさい潮風はそれでも確実に閉め切られた船室内よりも新しい空気を常に送ってくれる。日差しまで穏やかに思える。そして、まぶしい。

その港町は広いようだ。とにかく、一端が見えただけでも広いのに、更に遠くにもまだ建物が広がっており、更に続く町並みを思わせた。視界に入ってくる情報は、この港のある場所がかつて居たシェーン王国ではないと教えてくれる。

他と比べてみなければ気がつかなかったが、建築物の外壁や屋根に与えられた色は、シェーンのものよりも明るい。淡い黄色の壁などがよく見つけられる。そして、王都のものよりも一軒一軒が大きい建物ばかりだ。人々の着るものはどちらかというと華美で、はなやかであった。

人の集まるところはどこの国も変わらない喧騒にまみれていた。時折どこかの男が大声で何かを主張するがそれもただの日常の一部だった。

呆気にとられたシェーンの少女を、こづくようにして前へ進ませるものがあった。それは彼女の乗船していた船を襲った海賊の男。シュガーローゼはこの海賊たちに行く末を握られているのだったと思い出した。逃げようと思えば逃げられるだろうが、そう距離はかせげまいし見知らぬ土地での逃亡はかなりの苦労を伴うだろう。従うしかないのだ。

「呼ばれるまでここで待っていろ。逃げようとなど思うなよ」

一つの仮設テントのような場所に連れられて、海賊はシュガーローゼをせっつくのを止めた。テントの外にはうるさいというより、どこかくぐもった声に似た騒がしさがあふれていた。テントにはシュガーローゼのように両手を拘束されて連れてこられた捕虜たちが居る。そのすべてがという訳ではないが、シュガーローゼの乗っていたペッシェカーネ号から来たものが多い。周囲に注意をむけていると、この狭いテントの中で何故人でいっぱいになってパンクしな

いのかが分かるようになった。今シュガーローゼがやって来たように入るものもあれば、出て行くものもあるのだ。今もまたテントの出口らしき場所へと進むよう命じられたものが、テント内から消えた。ここは捕虜たちを一時的に収容しておくだけの場所のようだ。それも、一時的というのは本当に短い間のみ。あの先には何があるのだろうか。

「おい、そこ詰めろ。さっさと入れ」

海賊の野太い注意がテント内に飛ぶ。狭いその場を人々は足を動かし身を縮める。押し込まれるようにしてやってきたのはシュガーローゼも知る顔の一人だった。青年は困惑がちの瞳にシュガーローゼを捉えると、口を開いた。シュガーローゼは一気に顔を背けた。彼が言葉をつむぐのも、その表情が動くのも、この場に居るのも気に食わなかった。

「おい、そこのお前来い」

首を向けた方向には見知らぬ背の高い男がいて、シュガーローゼはその男が誰かに呼ばれて行くのを見た。男は言われるままにテントから出る。するとその空きを補うかのようにまた誰か拘束された人間が入ってくる。どんどんと出口に近づくにつれ、シュガーローゼは外の音を聞き取れるようになった。

「……商品も…」

「……万は出すぞ」

「あんな……ならおれは……」

「お買い得……」

聞こえてくる声に違和感を覚えた。何かの熱に浮かされているような、それでいて持つべき温度を失ったような奇妙なものだ。シュガーローゼが聞き耳をたてている間に、レフもまたテントの中にやってきていたが彼の存在もまた少女の脳内にもなくなっていた。

「おいガキ、お前次だ」

「待て待て。こいつはもっと後だ」

テントの中を取り仕切る男たちが何かを話し合うと、シュガーロ

ーゼはその場にとどめられる事となった。死までの秒読みが伸びただけだと思えばうれしくもなんともないが、シュガーローゼの横目が捉えたのはよく知った顔だった。

「ローゼ……！」

彼は自分に起ころうとしている事を悟ってしまったのかもしれない。それは、シュガーローゼにも降りかかるものなのだと。ケイス自身よりも目の前の少女を救ってくれというような懇願するエメラルドの瞳がひどくうっとおしくて、シュガーローゼは目を伏せた。

「離せ！」

暴れるので押さえつけられながらも外へと行ったケイスの声はまだ聞こえてきた。

「売られるんだろ、オレたち」

突然そこにレフがいるのだと感づいてもシュガーローゼは瞼を持ち上げたりはしなかった。こうしていると楽なものだ。目障りなものは何一つとして視界に入ってこない。だが視覚を遮断させてもまだ五感は残っている。

「奴隷市を見た事がある。オレたちの怪我を治したのもそういう事だろ」

今にも死にそうな奴隷を買おうと思うものはない。生きがよければよいほど長い間こき使える。そういう顧客に売られるのがシュガーローゼのような捕らえられた人間たち。彼女にもそれは分かっていた。海賊たちがあれだけ人を「売れそうだ」と言っていたのも、こういう事が待っているからだったのだ。

「お前、あの場所を移動する魔術使って逃げようぜ」

うるさい。苛立ちこそしないものの、シュガーローゼは瞼の下の暗闇を追うのを邪魔されて不満に思った。それに、魔術は封じられてしまった。海賊の中には他人の魔術を一時的にしろ永続的にしろ使用不能にする魔術を使える人間がいたので、怪我を治療されていた間に封じられてしまったようなのだ。

「こんなところで売られるつもりはないんだろ。オレは奴隷なんて

ごめんだ」
「次、お前だ。そっちのお前もこっちで待機していろ」
誰にも届かない主張を続けていたレフだが、シュガーローゼと共に腕を引かれてテントの中から引きずり出される。少し高い台の上に上らされて、その光景を見せられるはめになる。ほとんどが男ばかりの、人の顔ばかり。一箇所に集めて内緒話でも聞こうとするかのような様相だ。だがその実、見世物と代わりのない商品を求めてやってきた人間が自分だけ利益を得ようとひしめいているだけなのだ。その商品とは人間で、粗雑に扱っていいような人間を求めてとの事という内容を思えば下らぬ集いだ。好奇と利己心を隠さぬ顔ばかり。
シュガーローゼが飛び出してきてから、何度も男たちは数字を口にする。それが少女についた値段なのだろう。安いと思えばいいのか高いと判じればいいのかシュガーローゼには分からなかった。ただ、生きた人間を売り買いするという集まりの中に“死神”である自分が入っているのはいかにも滑稽な事だった。シュガーローゼが“死神”だと知れたら売買の値段はつりあがるのか下がるのか、それだけが気になった。本音を言えば人身売買は愚かしいと思えるのだが、彼女にとってはこの世のすべてがいずれ劣らぬ愚かな存在だ。今さら黒の中に黒が混じっているといっても、目立つほどのものではない。
その声が聞こえるまでは、少女の世界はある意味波風立たない平穏そのものだったというのに、音と共にそれはやってきた。
「百万だ」
存在に気がつくより早く、奇妙な寒気がシュガーローゼの背筋をはい上がる。おそらくは、並々ならぬ力を持つ人間がこの場のどこかに居るのだ。それを心のどこかで感じ取った男たちもざわめき始める。
「では、そちらの百万の方、こちらへどうぞ」
仮にもシュガーローゼも魔術を使う人間だ、何か魔術に関する事

象が働いているのではないかという感覚を覚える。空気がおかしい。息をするための空気ではなく、もっと形容し難い曖昧ではっきりとしたそれ。ただ目に見えたら濃い黒をしているのではないかと思わされる。

一瞬、空が翳ったような気がしてシュガーローゼは顔を上げた。

「あ、んた……」

確かにどこかで感じたような気だったとは薄々勘づいていた。だが、目の前にいるはずのない人間が立っているというのは、目や脳を疑うしか他にやる事がないのだろうか。まるで死んだ人間でも見るような気持ちだった。もしかしたらそうであってもおかしくないかもしれない。その男が死神の少女から必ず死ぬはずの“死神のキス”を受けている点だけを思えば。だが彼には“死神のキス”が効かないのだ。それもまた信じられないものだったが、だが今のシュガーローゼには全く関係のない事象。シェーンで一瞬の出会いをして分かれ、二度と会う事のないはずの相手。

一言で説明するなら、黒。深い深淵の闇が人の形をとっているだけのような存在。カラスの羽の色のような真っ黒な髪に夜の空のような闇色の瞳をしているという見た目だけの話ではない。目鼻立ちの整った顔であり、そう見せようと思えば凛々しくも見えるのかもしれないが彼の性質（なかみ）がそうはさせない。

彼は、異質で、侮蔑の見える笑みを浮かべ、個人の利益にも興味のなさそうな瞳を閃かせていた。三日月のように口に切れ目を作ると、その男はシュガーローゼから意識を逸らした。

シェーンのとある町で、シュガーローゼはこの男と出会った。他の人間たちに“死神のキス”で死を与えているのを見られてしまった後に、彼は自分を実験台とするかのようにしてシュガーローゼに唇を寄せてきたのだ。おそらくはその目で見た事の真偽を確かめるために。しかし、どうしてかシュガーローゼのキスは彼には効かなかった。それが最初の、一人目の“死神のキス”が効かない相手だとは思ってもいなかったが、それでもあり得ない事だった。当然、

彼にいい思い出はない。なんとか逃げ出せたのも一瞬の隙をついたからで、あの時はシュガーローゼが魔術を使えるなどと気づいていなかったのかもしれないから、手の内の知れた今では目前の男から逃げ出すのは難しいだろう。

どこかで誰かが叫ぶような声がしたが、突然現れた“一人目”にシュガーローゼはまともな考えを奪われていた。ここはおそらくはミリヤール帝国だ、それも奴隷市のような人を売り買いする場所。そこに、どうして闇の目を持つ男が存在するのだ？

「世間は狭いな」

ただそれだけで済ますには、あまりに簡単すぎる一言。むしろそれに憤りたかった。シュガーローゼはこの男と対峙する事を決めた。正面から迎え撃つにはあまりにも相手が悪すぎるが、彼が何をしようとしているにせよ、シュガーローゼはただ立っているだけのつもりはなかった。敵は“死神のキス”が効かないというシュガーローゼにとって致命的でもある強みを持っているが、この苛立ちはぶつけていいだろう。これまでにたまってきた、様々な嫌悪や怒りをこめて敵を迎え撃つ。ゆるやかに闇色の瞳が波打ったようだった。

と、男は背を向けると歩き出した。自分につけられた手枷の存在も忘れ、シュガーローゼは腹にこめた力を霧散させるつもりはないと地に足を突っ張らせた。縄の先が引っ張るので腕が持ち上がる。この時はじめてシュガーローゼは両手の拘束を思い出し、今度は抵抗するように自分の腕を強く体に押さえつけた。相手が成人男性で、力の差は歴然というのにシュガーローゼは縄にこめられた力に従うつもりはなかった。男はシュガーローゼがその場から動こうとしないのに、振り向きもせずに立ち止まる。体に強く腕を押し付けなくとも相手が止まってくれたのは良いが、相手が相手なだけにシュガーローゼは言い知れぬ不安を感じた。何をしようとしているのか、知りたいけれど知りたくもない。

時間だけがたったように感じた。実際には一分もそこに立ち尽くしてはいなかっただろう。もしかしたらその第三者が現れなかった

らまだそのままそこに居たのかもしれない。
「……アストリュク？　何をしているんですか」
誰が誰だかは知らないが、シュガーローゼとそれを引っ張る男の元へとやってきたのは、三十ほどの男。栗毛の髪を頭の後ろへとなでつけられ、眉間に固定された渓谷と薄い灰色の瞳はどこか彼の威厳と堅苦しさを思わせる。表情は何か含んだような笑みに変わるが、情の薄さを表すかのような薄い色の灰の瞳は笑っていなかった。その瞳が向けられたのはシュガーローゼの両手につながる縄を持つ“一人目”の男。彼の知り合いなのだろう。少女はとりあえず新しい顔にうんざりとした。
「ジュレ・ブランシュ観光」
「黙れこの犯罪者。その少女をどうした、返答によってはお前を突き出すべき場所の位置を知らねばならん」
意外にも、やってきたばかりの男性は事情を知らないにも関わらずシュガーローゼの前に立って、彼女をかばうようにした。返事をしようとした男を遮って、シュガーローゼを拘束する縄を指差す。
「とにかくこれを解いてやれ」
ちらと闇色の瞳が少女の両手に存在する拘束具を見たが、興味がなさそうに手を離した。それを拾うともう一人の方がシュガーローゼの手首を解放させた。
「何があったかは知らんが、私は君を脅かすような存在ではない。あいつとは違ってな」
シュガーローゼは自分をお買い上げした男を、鼻で笑う人間がいるのを知った。相手も特に本気にしていたようではなくむしろ笑っているようにも見えたが。ヴィードルと呼ばれた男を信用するわけではなかったが、ひとまずは両腕が自由になった事に安堵した。
「……宿でもとるか。ここでは人の目が多い」
ヴィードルもやましい事があるわけではなかったが、他人の目にさらされ続けるつもりはなかった。どこかへと連れようとする相手に、シュガーローゼは従う相手が変わっただけではないかと眉間に

しわを作る。右手で反対側の手首を刺すときっぱりと言い放つ。
「これ、ありがと。でももう構わないで」
「そうはいかない。こいつが立派な犯罪者になるには証人が必要だ」
本当は、疲弊した身なりの汚れた少女に必要なのは手厚い保護だと思っていたが、ヴィードルはわざと言葉を摩り替えた。そうは言っても、少女にはこちらの手助けを受けたくないという拒絶がはっきり読み取れたが。ヴィードルは少女の事も、友人であるアストリュクが何をしでかしたのかもきちんと決着をつけたかったが、この場では無理だと知っていた。どちらかを放ってくとどちらかが消えてしまうか何か取り返しのつかない事をやってしまいそうなのだ。だから、仕方がなしに一度謝ってから少女の腕を無理矢理に引っ張って歩き出した。少女はそのうちに抵抗をやめ、ただ足を引きずるかのようにヴィードルに従った。

89　短い休息

一つの宿に入ると、人が言いにくい事をそのままずばりという男が「お前、くさいな。におわなくなるまで体洗ってろ」というのでシュガーローゼは湯浴みをする事になった。水の張った大きな盥（たらい）のある部屋に閉じ込められただけともいう。ペッシェカーネ号での密航暮らしをはじめた時から衛生的な場所にいるとは思っていなかったが、捕虜となった時からひどくなった。体が臭うのも無理はない。シュガーローゼもこれを落とせるのならそうしたかった。これまでは都合が悪いといえず、ただ体洗いに専念した。

体に染み付いているのは一日では消えそうにない悪臭。船で捕虜をしていた時に蓄えた垢や吐瀉物や排泄物の一部や何やらだ。なんとか拭い取ろうと布でこする。

怪我を治されたおかげで体洗いは順調だったが、頭の端に重度の怪我をした青年を思い浮かべてしまい、下唇を噛んだ。最後に見たのは競売にかけられる前。あの場に居たという事はきっと魔術で怪我を回復させてもらったのだろう。だから命の心配はないはずで、シュガーローゼが安否を気遣う必要はどこにもない。いや、気にかけてなどいない。ただ自分の怪我の具合とひどい重症の人間を思い浮かべた時に勝手に脳が比較対象を持ち出したのがいけないのだ。他にももっと重症の怪我人を思い浮かべようとして失敗してしまった。とはいえ、ケイスはすぐにシュガーローゼの頭の中から出て行った。今は彼女の近くのどこにもいないのだ。シュガーローゼよりも先にどこかの人間の下へと売られて行ってしまったのだから、今度こそもう会う事はないだろう。

思えばケイスとは二度の再会を果たしている。一度目はシェーン王国を離れたオスティオ王国の町で、二度目はなんと海上だ。二度ある事はなんとやらというが、シュガーローゼは今度こそついに今生の別れとなる事を願った。自分は思いもよらぬ相手に買われ、ケ

イスも誰だか知らない相手に連れて行かれた。二度と、会うはずがないだろう。

そういえばレフともあの競売場で別れたっきりだ。彼がこれまでしてきた事はひどいものだったけどもうどうでもいい。二度と会いたくないと願うほどではないが、絶対に関わりたくない人間のうちの一人だ、レフもまたどこかの誰かに買われて行ったのだろう。やはりもう会う機会はないはず。これで、もうシュガーローゼが一人になれたのだと思うとこの上なく清々するのだが、そうはいかない。なにしろ、相手はとんでもない事をしでかしそうな男で、更にもう一人居る。

誰もシュガーローゼを一人にしてくれないようだ。であれば、これまでのようにお節介でうっとおしい青年と、自分の復讐の事しか考えてない少年と行動を共にするのと、今の二人と一緒に居るのとでどちらが苛立つだろうか。どちらにせよ事態は唾棄すべきものなのに変わりはない。

そしてこの場所も問題だ。ミリヤール帝国。名前や噂ばかりは聞くが一度も足を踏み入れた事のない国。シェーンと友好的でかつての属州であったオスティオとは異なり、ミリヤールにはシェーンとの隔たりがいくつも見られる。様々な相違が目に見える形となってやってくるのだろう。

背筋に寒気が上ってきた。長く体洗いをしすぎたらしい。裸でいる時間が長いと風邪を引く。シュガーローゼはこすりすぎた肌をもう意味のないものとみなして、最後に全身に水を浴びせた。

シュガーローゼを買い取った男はアストリュク。その友人らしき

男はヴィードルという。宿までの道すがら教えてもらった名前だがシュガーローゼがそれを使う事はないだろう。ただ、竹馬の友のような二人の男ではあるが、ヴィードルの方が年が上のようだった。それは見た目からくるものもあったが、ヴィードルには落ち着いた大人の品格のようなものがかいま見える。他人を気遣う様からもそれが伺える。

体を拭いて、用意された服を着て、湯浴みをした部屋から出たシュガーローゼは逃亡も考えた。だが見張ってでもいたかのようにドアの外にはアストリュクが立っていた。唇に“死神のキス”を宿す少女から死を引き出せない一人目の人間。はじめて見たくもない光景を見せ付けられた相手で、それでも尚シュガーローゼを何かに利用しようとした男。全身からただ者ではないという気を発する、ある種物騒な男。体格もよく引き締まった体は、剣術でもたしなんでいそうだがそれよりももっと恐ろしい切り札を持っているのだと思わせる、その身にまとう空気が厄介なのだ。

まさか待機されているとは思わず、たじろいだシュガーローゼに顎で行き先を示すとアストリュクはそちらへと進んだ。逃げ場はないというわけだ。まだアストリュクの手持ちのカードがどんなものか、シュガーローゼは知らないが簡単には逃げられない未来が思い描ける。濡れた髪が肌にはりついて気持ち悪かったが、いつまでもそこに立っているわけにはいかないのでシュガーローゼは歩き出した。

ヴィードルがとった宿の一室に入ると、彼は軽い会釈のようなものを見せた。窓際に立っているヴィードルとは対照的に、アストリュクは寝台に腰掛けていた。何故このような空間に入らなければいけないのか、シュガーローゼは頭を抱えたくなった。

「椅子に掛けるといい」

親切心からの台詞のようで、ヴィードルは有無を言わせぬ瞳を少女に向けていた。彼にそこまでしてシュガーローゼをこの場にとどまらせる理由があるのだろうか、容易には分からないが力ある人間

二人を前にしては、従うより他はない。
ため息が出そうになった。出来ればシュガーローゼはため息のように目に見えぬ空気になって消えてしまいたかった。そうなれれば本望だったのに。ほとんど強制的に椅子に座らされ、シュガーローゼは自分たちが部屋の中で三角形を作っていると気づく。瑣末な事ではあったが、それぞれが権力を持ち互いに牽制しあっている三つの国かのように見えた。
「改めて自己紹介をさせてもらいたい。私はヴィードル・アイネム。今はちょっとした仕事に帝国に来ているシェーン王都の人間だ」
そう自己紹介されてもシュガーローゼの方にはそれを覚えるつもりはなく、ただ耳の中から外へと流れて出て行くだけだった。ヴィードルには手助けをしてもらったが、それでも警戒すべき相手なのには変わりなく、ただアストリュクよりは警戒レベルを上げなくていいという程度のものだった。
「それからアストリュクも同じシェーンの人間だ。さて、早速今回の問題について論議しようではないか」
まるで一つの組織のトップに立つ人間のように、ヴィードルはそれを開始させた。参加者の二人がやる気を見せない話し合いだ。アストリュクはずっとシュガーローゼを見ているだけだし、シュガーローゼはいつになったら彼らから解放されるのかと既に脳内が疲弊している。いや、この時はもう眠ってしまいたいくらいだった。やっと下船が叶い、揺れない床の上で休める時が来たかと思えば競売によって売りに出され、よく知らない相手を二人も目前に控えている。そろそろ休まねばならないという気がしてきた。何より彼らを避けるのに良い言い訳なのではないか？
思考も、上手く働かなくなってきた。頭の一部が石にでもなってしまったかのように、休息を取るという敵前――あるいは敵が間近にいる場所――での行為としては一番やってはいけない事が、まるで最上の策のように輝いて見えたのだ。身体的な疲労はそう多くないが、それでも長い拘束船旅生活が限界に達していた。何を説明す

べきかなんてしたくない、そんな事すら脳裏にやってこれなかった。ただ疲れた。それだけがシュガーローゼの全身に満ちていた。

「君が競売にかけられていたというのは聞いた。それからアストリュクが愚かにも君の身柄を引き受けたというのも。まさか、何かされてはいないな……？」

「実験ならこれからだ。今してもいいならするがな」

「お前は黙ってろ生きる問題製造機」

頭が重かった。シュガーローゼは軽口の延長のようなものが繰り広げられるのも目に入らなくなっていた。目を閉じると眼球が楽だと言っている。空腹をいつまでも訴える腹部は寝れば気がまぎれるように感じられる。うとうととし始めた少女を見て、ヴィードルは眉を寄せた。

「具合でも悪いのか」

「睡眠時間が足りないだけだろう、寝かせておけ」

アストリュクが思いがけない言葉を吐くと、その後に「寝てる間に腹でもかっ捌く」と口にするよりも雄弁な瞳を光らせた。絶対にここでは寝ない、とシュガーローゼは心がけた。

「そうか……それはすまない事をした。話は休んでからにしよう。だが君は一つ約束してほしい、先ほど何があったのかを残らず話すと」

何もヴィードルはシュガーローゼに話が聞きたいだけではなく、訳ありの子どもを放っておかない方がいいと判断したのだ。自国の人間のようだし、何か問題があったら自国の問題になりかねん。そうでなくとも、生きる問題製造機であるアストリュクに目をつけられたという事は、彼の興味を引く何かを持ってしまっているという事だ。それは絶対に何かよくない事が起こる未来を約束されているのと同じ事。アストリュクのような問題児（トラブルメーカー）を帝国に連れてきてしまったヴィードルとしては、予想される被害を少しでも軽減すべく予防策をとらざるを得ないのだ。既に問題の火種を被っていそうな少女を、事情も聞かずに手放すわけにはいかない。

一方シュガーローゼは約束が出来るはずもなく、だが完全に正常な思考能力が欠落しているので黙ったままでいた。椅子から立つと、とりあえずこの場を去る意思を見せる事にする。シュガーローゼのためにもう一部屋とってあるというので、このポンコツ脳を休ませるのに使わせてもらう。

阻む男さえいなければ、シュガーローゼは簡単にこの場から離脱出来た。と、部屋の空気が一気に下がったように錯覚する。

「逃げられると思っているのなら、考えを改めた方がいい。その方が長く生き延びられるぞ」

喉に固形物を詰まらせたような感覚が少女を襲う。その男の闇色の瞳は、どこかからかいを含んだ楽しそうな色味を帯びていたが、それでも言葉を本物にする力を持っているのだと、相手を黙らせる光も伴っていた。手をひねらずとも、指を鳴らすだけでシュガーローゼを殺す事が出来るのだと、アストリュクは言っているような気がした。一番近い言葉で言えば、殺気のようなものであったのかもしれない。勝てない、逃げられない。負けを認める頭がうっとおしくて、シュガーローゼは奥歯をかみ締めた。

「アストリュク？　黙りましょうね」

ヴィードルの制止のような声も、アストリュクには効き目がなかったが、彼はただシュガーローゼから顔を背けた。やっと自由になれた気がして、少女は貴重に思える酸素を吸い込んだ。

「不審に思うのも無理はない、だが目が覚めたらまたここへ来てほしい。お望みとあらばこの男には席を外してもらおう」

ほとんどがシュガーローゼの耳に入っていなかったが、ヴィードルには言葉をかけようとだけは思った。

「休みます」

まるで報告のようなそれは、自分が発しているものだとも思えずにシュガーローゼは部屋を出た。

自覚するだけで重くなった全身を引きずって、あてがわれた部屋の中に入るとすぐに寝台へ飛び込んだ。倒れこんだといった方が正

しいのかもしれない。いつでもろくな未来が描けないが、今回も同じようだ。だが今は全て考える必要がなく、彼女はただ惰眠をむさぼれば良いだけだった。もしかしたら眠りは、死と同じく万人を現し世から解き放つものなのではないかと少女は思っていた。

90　アストリュク

目が覚めて、これほどまでに絶望的な気分になった事はこれまでにあっただろうか。答えは是だ。生まれついてのではないが“死神”である少女が迎えた朝が幸せだった事など一度もない。疲れがとれきっていないためでもあるのか、眠りのなんと甘美な事か。まだまどろんでいたかったが、この後に控える事を思えばそうのん気な事は言ってられない。脱出計画を練るのだ。しかし布団の中はあたたかく、眠りの中へと引き戻そうとしてくる。シュガーローゼは葛藤した。眠るべきか起きるべきか。

極めつけは腹部の鳴き声――。

せめて何か食べてからどこかへ行きたい。食事を楽しむのを忘れたシュガーローゼでも、この果てしのない空腹感はもう耐えられない。いや、やはりこの空腹を糧に宿を脱出する力にしてしまおうか。何かを食べるには、宿を出なければならないと考えてみるのだ。そちらの方が楽かもしれない。

「起きろ」

ぬくもりも決意も奪い取る声と手が伸びた。布団が奪われたと知るのに時間は要らない。シュガーローゼはまず消えた布団の行方を探して視線をめぐらせたが、そこには整った顔を不機嫌そうに歪めた男がいた。

「……あんた、」

何様？　とか、淑女（レディ）の寝室に何をしに？　とか、何か言うべき事はあっただろうが、シュガーローゼはこの男を前にした途端に言葉を忘れてしまった。というより、逃げ出す前に見つかってしまったという事実が彼女を動かせなくしていた。

「飯を食え」

まさに餌をぶら下げるように、男は言った。

一気に顔をしかめる少女を、アストリュクはやや不満そうな顔色

を変えずに持ち上げた。ぎょっとしたのはもちろんシュガーローゼで、自分以外の意思で体を動かされる事になって目を剥いた。

「放せ！」

「うるさい、黙れ。研究対象は健常体の状態から観察を開始したいんだ」

などと意味不明の言葉を唱えられ、シュガーローゼは思わず二の句がつげられなくなる。今日も今日とてこの男は意味不明に理不尽だ。

そうして途中からは半分引きずられるようにしてシュガーローゼは食事の場へと連れていかれた。彼らが泊まった宿では、一階の部分が食堂のような酒場のような場所になっており、宿泊客もこの食堂を使用できるし、泊まらなくとも食事だけ食べに来られる。食堂は繁忙期を過ぎたのか、いくらか閑散としているが人の話す声や活動する音でにぎわっていた。そこには、シュガーローゼたちを待ちかねていたかのような男が一人存在した。

「アストリュク？」

「何だ」

「その手を放してやれ。犯罪にしか見えない図式はやめろ」

「犯罪者に仕立て上げるには丁度いいんじゃないのか」

「そのつもりだから安心しろ、だから私の言う事を聞きなさい」

「とりあえず拒否する」

なんだかんだと言いながら、自分の事であるのにシュガーローゼを放っておいて続けられるアストリュクとヴィードルの会話を、少女はぼんやりとした頭で聞き流していた。空腹のあまり頭の中まで空っぽになってしまったような気がする。何しろ逃亡せよという指令を出せないほどに、何もかもが足りない。いっそまた眠りについてしまいたいくらいだ。あたたかい寝床が恋しい。

「あの、何か頼まねえんですかい？　それにケンカなら他所でやってくださいよ」

カウンター越しに、店員がぼやくように声をかける。どうやら口

論するかのような二人組に、不穏な空気を感じとったようだ。だが、アストリュクとヴィードルの舌戦などは日常的なもので、お互い明らかに一歩も引かずに打ち負かそうという気迫が見られるにも関わらず、何かの拍子に終わってしまい何もなかったかのように過ごしはじめるのも常だ。この度は店員の一声がきっかけだった。

自分を掴む手がなくなったのを知り、シュガーローゼははっと自分を取り戻した。意識がどこかへと飛びかけていたのだ。舌戦はぱたりと止み、アストリュクは椅子に座りだした。

「そうだな、ひとまずはここの肉料理で何か一つお願いする」

ヴィードルにとっては異国であるために、料理の名前は分からない。だが彼は望みのものを抽象的に口にすると、更に続けた。

「それから大きめのパンを五つと、サラダを。スープを三つ。君は何か食べたいものがあるか」

視線を向けられて、それでも自分に声をかけられているのだと気づけないシュガーローゼに、ちらりと一瞥をくれたアストリュクはすぐに何も見なかったかのようにして、目を閉じる。それすら少女は目に入らなくて、黙ったままだった。眉を持ち上げてヴィードルは、口数の少ない少女が望みを口にする可能性は低いと察し、勝手に料理を頼む事に決めた。

「何か、果物でも。それから白パンはあるだろうか？　チーズあたりも頼む」

とても大雑把な注文を取り付けると、ヴィードルは自分も席に座った。店員は亡羊とした注文にいささか不満を抱いたようだったが、それでも頷くと厨房の方へと声をかけに向かう。

しばし、彼らの間を沈黙が漂う。それが、ふいにシュガーローゼに人がぶつかってきた事で破られる。通り過ぎていった男は何も言わずに去ったが、それを見て今気づいたとでもいうようにヴィードルは「座るといい」と促す。つい最近やったばかりのやり取りだったが、今度のシュガーローゼは意識せずにヴィードルの言葉に従っていた。ほとんど惰性で動いているようなものだった。

「仔細は分からないが、いくらか話はこの男から聞いた」
話の中心がシュガーローゼだとしても、今の彼女には何も聞こえてこなかった。聞く気がないだけかもしれないが、そんな気力もないのだった。しかし、ヴィードルの言う「話」とは何の事だろうか。容易に想像出来る。シュガーローゼという人間がいたら、そこに付随するのは“死神”という肩書きだけだ。“化け物”とも“悪魔”とも“魔女”ともあだ名されるが、死を司るかのような存在である事は間違いなく、一番“死神”という表現がしっくりくるのだろう。
だが、シュガーローゼにそれらが一体何の関係があろう？　もちろん彼女の、彼女自身の事だ。というのに、今は全てが遠くてどうでもよいものだった。かつては飛び出して逃げるべきとか、絶対に口を割らずに拒絶をしようとか考えていただろうが、そうするべき理由が今は見つからない。疲れたのだ。眠りをとっても消えない疲労が、シュガーローゼを蝕んでいた。
「そんな事はどうでもいい」
すっぱりと切り捨てるようなアストリュク、彼は何か長広舌に入ったヴィードルの話を切り上げようとしたらしいのだが、シュガーローゼはヴィードルが口を開いていたのを知らなかった。
「それで、お前みたいな固体は他にもいるのか」
「アースト」
ほとんどシュガーローゼの知らないところで行なわれる行事のようなものだった。どうでもいい。本当に、どうでもよかった。何だって、ここがどこでもいいし、彼らが何者でも関係ない。これまでだって彼女はそう思ってきただろうが、今はとりわけ心底自分と無関係に思えた。厭わしい世界だが、今は真っ白に見える。関係がないのだ、彼女には。
「お待ちどうさん。肉料理はもう少し待ってくれ」
いつの間にか、彼らの座るテーブルの上には大量の料理が並べられていた。ヴィードルはパンを五つも頼みこんでいたので、人の顔よりも大きな半球のパンが場所をとった。何故かシュガーローゼの

目の前には果物の盛り合わせが存在する。「さて食べるか」と誰かが言ったような気がするが、シュガーローゼは眼前の果実をどうしたらいいのか分からないでいた。

ヴィードルは仮にも警備隊の隊長であるためか、横幅が広いわけでもないのに大食漢のようで、所作は雑ではないものの次々に料理を口に入れる。対照的にまるで少食を主張するかのようなアストリュクはひたすら野菜のサラダを食べていた。

店員が言っていた通りに、少し遅れて肉料理がやってきた。香ばしい香りのたつ、焼いた鶏肉だった。それを少女はぼんやりと見ていた。何もそれが食べたいというのではない、意外にも大きな肉だったからだ。

食べろ、と言われた気はしないのだが、どうやら誰かがそうしてほしそうだったので、緩慢な動作でシュガーローゼはリンゴを一切れ手に取った。お腹がすいていたためだろう、ほとんど本能的にそれを口にすると、後は自然と食事をするという行為を続ける事が出来た。

彼らの食事は、静かなものであった。途中アストリュクとヴィードルが何かを話していたのだが、参加する意識が全くといっていいほど見られないシュガーローゼに、会話に入れというものは誰もいなかった。

静かなる食事は終わった。結局、果物の盛り合わせはシュガーローゼのために用意されたのか、彼女しか口をつけず、また一般的なパンよりもいくらか高価な白いパンも彼女しか手にしなかった。

何故、こんなところで見知らぬ男たちと食事を共にしているのだろう。普段なら気にかかっただろう事も、今は思いつけない。そして、腹が満たされるとどうにも瞼が重くなるのが人間の摂理。今度は眠気に襲われる形でシュガーローゼの意識はぼやけてきた。

「……のか？」

「おいやめろ、その皿をテーブルに戻せ」

「ちっ。耐用構造が強化されているかどうかを判断するいい機会だ

ったのに」
「お前、本当黙れ」
本気で苛立った様子のヴィードルに、気を惹かれたわけではないがシュガーローゼは顔を上げた。彼らは何故ここに存在しているのか、なんとはなしに気にかかった。
やっとシュガーローゼが話を聞く体勢になったのだと分かり、ヴィードルは顔を引き締める。
「君が何者であろうとも、私は身の安全を保障してやりたいと考える。ゆえに希望を言葉にしてくれると助かるのだが」
彼は、どこまで知っているのだろう。不本意ながらヴィードルよりも面識があるアストリュクでさえ、シュガーローゼをきちんとどこまで理解しているのか疑わしい。何故なら、アストリュクはシュガーローゼの“死神のキス”が通用しない一番はじめの人間だからだ。ちゃんとシュガーローゼを“死神”だと認識できているのだろうか。友人らしきヴィードルも、それを理解しているのだろうか。
「希望……？」
「ああ。帰る家があるだろう。戻るべき場所が」
徐々に、シュガーローゼの脳内にその言葉の意味が行き渡って行く。帰る家？　戻るべき場所？
そんなものは、ない。
思わず、失笑がもれる。事情を知らないというのは、残酷なものなのだ。ただ知らないという、それだけで。
帰りたい場所ならある。誰もシュガーローゼを認識しない場所。咎めも、責めも、殴りも、利用しようとも、しない場所。誰一人として人間の存在しない場所。そう、あの世であっても構わない。むしろ、そう、いっそ死んで土に還ってしまえばいいのだ――。
故郷なんて存在しないも同じだし、彼女が傍にいたいと思うような人間はいない。ない、何もない。希望なんて、文字通りの明るい見通しも、彼女のしたいと思う事も、存在しない。
出来るのならば、せめて。人里離れた場所でゆっくり死を迎えた

い。眠るように息絶えたい。気を失うように死に到達したい。

希望？　それならば――……。

「そんなものがあろうとなかろうと、関係ない。買い手に従うのが道理だ」

何を言われているのか理解しきれてないシュガーローゼを傍目に、ヴィードルは頭を抱えた。

「アストリュク……？　本当に獄中生活を楽しんでもらいますよ？」

「形式上だけであっても、この娘を買い取ったのは私だ。主は私だろう」

「だから、俺は」

「奴隷に対する法なんてあってないようなものだ。お前が同じ値段で買い取るならば話は別だがな」

ヴィードルの顔がしかめられた。一人の人間を、金で売り買いする。本来ならば許されぬ事。だがこのウィディト大陸では少し前まで普通に行なわれてきた事でもある。だが、聖都の頂点におわす法皇が次の法皇へと交代した際に新しい法皇が打ち出したのは、奴隷制度の撤廃だった。完全には叶わず、大陸中に行き渡るとは言いがたいものだったから、形だけの奴隷撤廃だったのだが、それでも幾分奴隷の売り買いは減っていた。

現実は法に追いつかず、結局は人身売買がまだまだ行なわれている時代。確かに、アストリュクは魔術を使ったものの、表面的には人を買い、その命を自由にする権利があるように思われいる。憎むというほどではなくとも、ヴィードルは人身売買を認めていないため、アストリュクの理屈は自分には適応しないと考えているのだが、アストリュクの方でもヴィードルの考えは通用しないのだった。

一方はシュガーローゼを助けたいと言い、一方は自分に従えと言う。一種相反する主張。これと似たような光景をどこかで、見たような気がする。シェーン王都のどこかで。きりりとシュガーローゼの胸が引きつれた。それは思い出してはいけない事だったのだ。連鎖反応を起こして思い出す人物が、今は脳内に入れたくない。瞼を

閉じて、意識を他へと集中させる。考えるな。
　ほんのわずか。思い出してはいけない青年の顔が見たいような錯覚に陥る。そんな、ばかな――……。
「百万?!　お前、そんな金持ってなかったはずだろう」
「拾った」
「嘘をつけ、また何かイカサマでもしただろう」
「そんな事より。急ぐ旅であるのはお前の方ではなかったのか、ヴィードル」
　ここに来てヴィードルの形成は旗色が悪くなる。友人の言う通り、ヴィードルにはいたいけな少女の面倒を一から見ているほど時間があるわけではなかった。本来ならば、こんなジュレ・ブランシュという町に来ている場合でもなく、今頃は帝都に着いていなければならなかった。
「……それは……そうだが、しかし」
「お前の一件が片付いたらこの娘の面倒を見てやればいい。それまでは私がその役目を承ろう、というわけだ。有り難く思え」
　もちろん、アストリュクが真っ当な意味でシュガーローゼの面倒を見るはずがない。そんな未来はその辺の子どもでも描ける、とでも思っているのかヴィードルは頬を引きつらせた。だが、ヴィードルが終始シュガーローゼに張り付いて、面倒を見てやるわけにはいかないのも真実だった。元よりそんなに他人に面倒見のいい方ではないヴィードルだ。出会いがあれで、人身売買の憂き目に遭った少女だからと目にかけてきたが、アストリュクという災難に出会っていなかったらここまで関わろうとは思わなかっただろう。ヴィードルが全責任を持ってシュガーローゼに接する事が出来ないのは、事実であった。
「……つまりお前は、この娘を我々に同行させると?」
　アストリュクは、当たり前の事だと信じていたのでわざわざ頷く事もしなかった。友人の確信どころか自信に満ちた闇色の瞳を見て、ヴィードルはうなだれた。認めたくはないが、もしかするとアスト

リュクには今回勝てないかもしれない。
「せめて彼女にもう少し話を聞いてから……」
「その必要はない。この死神娘にとっても有用な情報が帝都でも得られるはずだ、同行をわざわざ拒否する理由などどこにも見当たらない」
そうだろう？　とでもいうように、アストリュクは少女に視線を投げた。人を黙らせるのに慣れた瞳だ。傲慢で、不遜で、実力があるものの浮かべる表情。いくらかの威圧的な空気。それに気圧されたわけではないが、シュガーローゼはつい眉を寄せてしまう。
この男は何を言っているんだ？　“死神”である自分が、帝都に行く事が何かの益になるとでもいうのだろうか。そんなもの、あるはずがない。笑ってしまう。本当に、笑ってしまう。死神の利益？
シュガーローゼの利益？
望みは、捨てた。
まるで壊れた人間のように表情を歪めた少女に、静かにヴィードルは眉間を寄せていた。どこか哀れみを併せ持つ表情であるのに、他の二人は頓着しない。
「“死神”の謎を知りたくないか」
彼にしては真摯な顔だった。まるで、国王と拝謁に預かった臣民のような真剣さ。だが、闇色の瞳の奥ににじむのは、研究者としての、たちの悪い知的好奇心の光。底知れぬ闇の中に、更にもっと悪いもので出来ている昏い輝き。
アストリュクはしようと思えば人たらしになれるだろう男だった。彼には力があり、相手を納得させるに足りる手札を多く用意出来るような人材。あまりに有能すぎるがゆえに忌避されるような、よくも悪くも影響力を持つ存在。
一瞬、シュガーローゼも彼に呑みこまれそうになる。
死神の、謎。つまり、シュガーローゼがこうなってしまった原因が分かるかもしれない、というのか？　まるで、その次には謎が分かれば解く事が出来るとでも言いたげだ。有り得ない事を口走る男、

彼は“死神のキス”が効かない相手。それゆえ、だからこそ警戒しなければならないのに、アストリュクの瞳には力があった。引力のような、相手を頷かせる力が。

まるで見つめ合う恋人たちのように、シュガーローゼとアストリュクは対峙して身動きしなかった。少女の方は出来なかったというべきか。有り得ないと思いつつも、逃れる事は出来なかった。目の前の男が口にした、途方もない“謎”の答えを知りたいという欲求から、離れられない。

有り得ない、有り得ない、ありえない！

シュガーローゼは必死に自分に言い聞かせなければならなかった。何故なら望みを持つという行為は非常に危険なものだからだ。間違っても、他人は信用してはいけないのだ。まして、怪しい人間の言葉など、鵜呑みにしては人生は誤った方向へと向かってしまう。

誤った方向なら、既に歩んでいるではないか。愚かな考えが頭をよぎる。

もう、終わってしまっている人生を、どん底である“死神”の生活を、これ以上低くする事など可能なのだろうか？　奴隷として扱われるような未来もきっと、悪化したといえるだろうが、それでも、今以上にシュガーローゼの間違った人生が正しくなるような事は絶対にない。それこそ、有り得ないのだろう。

だから、これ以上に悪くなりようがないのなら、良くもならなくてもいいから――真実を追うべきなのではないか……？

喉が渇いて、少女は唾を飲み込んだ。自分の考えがいかに浅はかでばかげているか、もう一度思い出すといい。

なきに等しい、可能性。

愚かな望み。

答えなどない。

謎なんて、はじめからない。

シュガーローゼは死神で、一生死ぬまでこのまま。

このままで、罪人として、生を終える。

終わるまで、死ぬその時まで。
――本当に、それでいいのだろうか？
シュガーローゼの動揺を読み取ったかのように、アストリュクは言葉を重ねた。
「ウィディト大陸で一番情報が集まる場所は帝都だ。死神の謎を解くのなら、他にないと思わないか」
同意を求めるかのような口ぶりではあるが、彼はほとんど確信しているかのようだった。まるで、死神の謎とやらも解く手立てがあるといわんばかり。うっかり信じてしまいそうになる、勝利の笑み。
シュガーローゼの心臓は、いつしか小刻みに震えていた。相反する思いが少女の中でせめぎあう。どちらでもないものを、白だ黒だと主張しあう彼女の体内。口を開けば、その迷いが飛び出してしまいそうだった。しかも、どちらかというとアストリュクに従うような傾向にあるものを。気づくと、自分の考えを否定したくてシュガーローゼは舌を動かしていた。
「……謎なんて、解けるはずがない」
そう、はっきりと分からない事象ではあるが、ただシュガーローゼが人殺しであるという事実は変わらない。変わるはずがない。探しても無駄なのだ。
「望みなんて捨てたんだよ。だから、謎解いても意味ないし」
「シェーンやオスティオ以外に行った事が？」
アストリュクの問いは、シュガーローゼに向けられたものだと分かっていたのだが、何の関係があるのか理解できず、答える事は出来なかった。彼は否定しないというので肯定と受け取り、話を続ける。
「このミリヤール帝国には魔術師が数多存在する。これは、今までお前が居た環境とは異なる因子だ」
「わたしの、あれが……魔術師に関わっているとでも？」
「そこまでは判断出来ん。だが、環境が変われば物事の結果も変わる。ところ変われば謎も変わる。世界中を旅した訳ではないのなら、

不可能は存在しない」
　彼が何を言いたいのか、根本的なところで理解する事が出来なくて、シュガーローゼは一際大きくしわを眉に寄せる。まさか、場所が変わればシュガーローゼは死神でなくなる可能性があるとでもいいたいのだろうか。
「歩き回って調べたのか、世界中を」
　侮るような物言い。違うだろうと分かっていて、わざわざ問うのだ。とても嫌味な笑み。彼は、本当に何者なのだろう。また呑まれそうになる自分を引き上げるように、少女は声を大きくする。
「無駄だから、しない。意味のない事だから」
「私は実証主義者だ。証拠もないものを認める訳にはいかない」
　シュガーローゼは苛立ってきた。この男の言い分が正確に理解出来ないだけでなく、自分の負けが近い事にも無意識に気づいてきたからだ。
「いいよ、わたしがどうしようもなく“死神”っていう事を証明してあげる」
　誰かが犠牲になるのは忍びないが、この時はそんな瑣末な事にまで少女は思い当たる事が出来なかった。本当に誰か何か生きたものを持ってきて、殺してしまえばアストリュクは黙ってくれるだろうと思っていたのだ。
「頼むから、もうやめてくれ二人共」
　一緒くたにされてむっとなったシュガーローゼは、ヴィードルに顔を向ける。彼は額に手をやって、素手で地中深くに穴を掘れとでも命じられたかのようにひどく険しく途方に暮れた顔をしていた。
　シュガーローゼとアストリュクの会話に入り込めなかったわけではない。ヴィードルは、この言い合いがどこか不毛なものに思えてきて、また少女がかわいそうにも言いくるめられそうになっているのを察して、思わず止めていたのだ。目元を揉むように指で押さえ、なんとか丸く収める方法を探した。
「……こうしよう。アストと私、こちら側の意見は異なる。だから

こそ、私が君たち二人の間に立とう」
面倒くさそうな様子を微塵も隠さずに、アストリュクは友人を睨んだ。面倒なのはこっちだ、とヴィードルは内心でぼやく。
「だから申し訳ないが、我々との同行を許してくれないか……？」
大人二人の意見は、根底は違えど一致してしまったようだ。災難は常にシュガーローゼに降りかかる。嫌だと叫んでも回避出来ないそれは、どうしようもなく彼女にばかりやってくるのだ。
もう、諦めた方がいいのだろうか？　希望は抱くまいと、断念した事など多々ある。人との関わりを避け、出来うる限りの平穏を望んだ。それでもまだ、諦めは足りなかったというのか。
逃げ出す事は出来る。試してみる価値はある。アストリュクは、本当に得体が知れないけれど、まさかシュガーローゼみたいに“死神”であるはずがないのだから、すぐに死ぬ事にはならないだろう。いっそ、その即死を願ってもよいのだが。
諦めてしまえ。
この場から逃げてしまえ。
反対の考えが少女を裂く。
嫌だ。選択肢がないのは嫌だ。誰かに従うのは絶対に嫌だ。成り行きで仕方なく一緒に居たレフとは違う、まるで自分の意思でついてこいとでも言われているように――実際は強制であっても――問いかけられているという事実。
唇を噛む。“死神のキス”の持ち主である唇を。こんなものさえなければ、あんな男に注目もされずに済んだのに。
目眩がするかと思った。シュガーローゼは、いっそ気を失ってしまいたかった。全て投げ打って、逃げ出してしまいたかった。
だが絶対に、言葉にはするまい。自分の意思で行なったのではないと、言外に主張したい。
この世界を恨んでやる。
真っ黒な感情が彼女を支配する。どいつもこいつも、くそくらえだ。皆、死んでしまえ。全部なくなってしまうがいい。どうしよう

もないこの世界。胸焼けがする、掃き溜めのようなこの世。
いつも、早く死んでしまいたかった。この時だって、誰よりも早く息を引き取りたかった。呼吸も自分の意思では行なえないのではないかと錯覚するくらいに強く、シュガーローゼを他人の意思が支配した。
少女は震えるような息を吐いた。
これが、降参のしるしだと知ったものは、本人も含めてどこにもいなかった。

91　帝都への道行き

結局はシュガーローゼの意思は必要なかった。ただ、一人の人間の我が通っただけ。

――いつもの、事だ。そう言い聞かせるしかなかった。

翌日、シュガーローゼはやけに食事の時間をいっぱい与えられ、旅の支度を終えた二人の男と宿を後にする事になる。

「一つ教えておいてやろう。私はお前に披露されるまで、空間を転移する魔術を使用する考えを持たなかった。だが今は、ほぼ自在に扱える」

何を言っているのだろう、この存在自体からして怪しげな男は、という思いがいくらかあったので諦観の域に達していた少女でも、さすがにアストリュクを見上げた。

「嘘をつけ、何度も失敗してこんなジュレ・ブランシュくんだりまで来たくせに」

ツッコミを入れるのはヴィードルだった。

空間転移の魔術とは、シュガーローゼが扱える数少ない魔術の中でも頻繁に使うものだ。

魔術というのは、誰しもが使えるものではない。その呪文、それにこめられた意味をきちんと把握し、その上で何度も訓練を重ねて魔術として実現させるのが、その力だ。人にはそれぞれ天性の向き不向きがあって、魔術を扱うものと、扱えないものと分けられる。その中の魔術師であっても、すべての魔術が仕えるというわけではない。ここでもまたそれぞれの向き不向きが存在する。

魔術には、魔力と体力が必要になる。体力は基本的なもので、これがなければというほどではないが、特に病弱になった時や怪我をした時には、体の方から魔術を扱えないと訴えるかのように、体力が低下していると魔術も扱えなくなる。対する魔力とは、一人の魔術師の中に存在する、魔術の体力のようなものだ。それは、底まで

尽きると当然、体力の尽きた人間が倒れるのと同じように、魔術が使えなくなる。つまりは、生命力がなくなれば人は死ぬように、魔力がなくなれば人は魔術を使えなくなるのだ。魔力を魔術師がどれだけ多く持っているかは、個人差がある。だがいくらかの方法で魔力の増長をはかる事も出来るし、魔力は休んだり様々な方法で回復する事が出来る。本当に、体力のようなものに近いのだ。

そうして、シュガーローゼという人間は、魔術を扱う素質はあるのだが、魔術師としての素質はないようで、ごく簡単な魔術しか使えない。

だが、アストリュクは違う。少女と比べれば桁違いの魔力と、魔術師的才能を持ち合わせている。だから見た事のなかった魔術を我が物にしようと、いくらかの訓練を積んだだけで、自由に扱えるようになってもおかしくないのであった。とはいえ、長距離と連続した空間転移の魔術はアストリュクでも万全に機能させるのが難しく、帝都を目指したつもりが通り過ぎてしまったのだ。

ひたすら急ぐ旅ではないが、ヴィードルはあっという間に移動出来た分、少しのミスがあっても問題ないとは考えていた。だが、彼に下された密命はそのままアストリュクの魔術を受け取り続けるわけにはいかないという理由になっていた。

「一つ、いいか、俺はもうお前の魔術で移動したくはないんだが」

「何故だ」

「言い忘れていたがな、俺は帝都だけの視察をしてこいと言われたわけではない。他の町も帝都同様に栄えているのか、そうではないのか、しかと見て来いという命令だ」

「ちっ、あの豚野郎、面倒な事を言いやがって」

心底うっとおしそうに、一国の主を悪しざまに言うのはヨハネス二世の政敵を除けばこの男ぐらいだろう。

「つまりは徒歩か」

「そういう事だ。いいだろう、別にそこまで急ぐ旅じゃない」

文句がありそうな顔をしていたアストリュクだが、彼が体得した

空間転移の魔術は、まだ改良の余地があると考えていたので、しばらくは使用しなくてもよいのかもしれないと判断した。その上、これまではアストリュクとヴィードルの二人に魔術をかけていたが、三人となるとまた話が違ってくるのだろう。まだまだ試行錯誤を重ねる必要があった。実験をしたい気分でもあるが、足腰がなまるのも問題だ。それに、今のアストリュクには興味深い研究対象がある。道すがら観察していればいいだろう。

それなら分かった、そう了承の意を伝えようとしたところ、アストリュクは一つの波動を受け取った。顔を上げると、何かの力が放出されているのを感じ取り、その方向に顔と足を向けた。そのまま歩き出そうとしたが、怪訝そう――というより人を殺したいような顔――に眉をひそめたヴィードルが居たので、とりあえず言葉を添えた。

「……私は行くところが出来た」

唐突なアストリュクの発言で、ヴィードルは頭を抱えた。またこの問題製造機が何か言い出したぞ、という疲れたような眼差しが印象的だった。

「どういう事だ、アスト。念のため言っておくが、日が出てるうちに長距離を移動したいという俺の望みは達成されないのか？」

「長距離など、魔術があればあってないようなものだろうが」

ヴィードルは、それをしたくないと言ってあったはずだが。

「それより、そんなに歩きたいのなら先に行くがいい。私は他に用事がある」

言うが早いか、アストリュクは踵を返して立ち去ってしまった。ヴィードルは彼を追うべきか逡巡して、旅の間は面倒を見ると決めた少女を残して行くわけにはいかないと思い直した。シュガーローゼを連れてアストリュクを追う考えもあったが、彼がどこへ行くか分からない以上、あちこちへと少女をつきあわせるわけにはいかなかった。

仕方がなしに、ヴィードルは自分勝手であまりに奔放な友人を後

から合流するものだと決め、自分にやれる事をしようと決めた。
見下ろすと、無表情を決め込む少女が一人。責任を持つとは決めたものの、どこをつついても地雷ばかりが埋まっていそうな少女相手では、なんとはなしに不安を抱いてしまうというもの。とはいえ、ヴィードルはいい年をした成人だ。気まずい思いはあれど、今は関係ない。
「連れがあんなですまないね」
見上げてこられ、ヴィードルはまるでよくあんなのとつきあっているな、と言われたような気がして苦笑した。
しかし、アストリュクがいなくなって、魔術で移動出来ない、する必要がなくなったためにこれでヴィードルは他の町の事も視察に行ける。であれば、早く次の町を目指すのみだ。
「……行こうか」
言い出したのは自分、引き受けると宣言したのもヴィードルだったが、どうにもこの奇妙な取り合わせの二人、という絵面に早くも過去の自分にもう一度問いかけたい気分になっていた。後悔というのではないが、どういう表情をしていいのか分からなかった。

湾岸都市を出た二人が降り立ったイブー街道は、帝都ヴァンクールまで続く道だ。大きな石の敷き詰められた道で、歴史を感じさせる磨耗の跡を光らせている。それを見下ろしながら、シュガーローゼは歩いた。
今なら、逃げ出せるのではないかと思いながら。なんだかんだとほざきながらシュガーローゼの身柄を買い上げたと主張する男は、今この場にはいない。シュガーローゼは、アストリュクに言いよう

のない不穏で、圧迫感を感じていたから、動けないでいた。彼がいないのなら、あるいは。そう考えていてもおかしくなかった。とはいえ、このヴィードルという男もまた、ただの男ではないようだ。身のこなしには、どこか騎士のようなものを思わせる。きちっとしていれば、そうと見えなくもない、生真面目で間抜けな某青年騎士に似た、一本の芯が通ったような動きを見せるのだ。別段ヴィードルはシュガーローゼの逃亡を力ずくで阻止しようとは思わないかもしれないが、しかし可能性としてはないわけではない。

どう動いたらいいのか。シュガーローゼははかりかねていた。この男も、自分の行動も。

気分は当然、落ち着かない。いっそ、いつか会った男のように「興味ない」を何度も口にしてくれればよいのだが、ヴィードルは他者に一般的な興味ぐらい抱ける人間のようで、どう話を切り出そうか考えているかのような顔をしている。彼はどうにも読めない。ただの善人には思えないが、アストリュクほどの異質さも感じられない。どこまで“死神のシュガーローゼ”の事情を知っているかは知らないが、何かの責任感にかられて面倒を見てやろうと思うくらいだ、もっと何か訳を話してくれないか、と言い出してもおかしくない。

で、あれば。シュガーローゼから先に相手の泣き所を打って、ずっと黙らせてしまえばいい。そう思いついても、彼女はヴィードルの口をつぐませるような弱味を知らないし、たとえ分かったとしても、どう考えても切り出しにくかった。というより、彼女はヴィードルに話しかけたりしたくなかった。

「……あれだな。まあ、とにかく……疲れたら、すぐに言ってもらって構わないから」

どれだ。脳内だけでシュガーローゼは反応を見せる。どうやら、気まずいのはあちらも一緒のようだ。だからといって、なんだか緊張しますね、いや俺もだよ、なんていう苦笑まじりの会話なんてしたくもない。気まずいけれど続ける会話、なんてものを繰り広げな

ければならないというなら、黙り続けていた方がましだ。ヴィードルの方はそうは思っていないみたいだが。

「足の歩幅も、違うし、こちらの歩くのが早かったら、言ってくれ」

それから、何のかんのとヴィードルは非常に他愛のない、意味のない、オチのない、面白味もないいくつかのセンテンスを口にした。なんとなく思いついたから、という非常に微妙な頻度で。どうも、相手はシュガーローゼに気を使ってはいるが、そう気まずいからこうすべきだと考えて行動しているわけでもないらしい。途中から、ほとんど一人言のようになっていた事からもそれが窺える。

それにしても、この男もまた、どうしてシュガーローゼなんかを同行させようと思ったのだろうか。いくら友人がしでかした事でも、大人だから他人の後始末なんてつける必要はないだろうに。

ため息がつきたい気分だった。それでも、シュガーローゼにしては殊勝で珍しく、なんとか飲み込む事にした。きっと意味のない事だし、相手に無駄な気を使わせるだけだ。無神経な人間も嫌いだが、人に気づかいを見せまくる人間も嫌いだった。どうしていいか、分からなくなる。

だから、途中でヴィードルが黙ればいいのに、と思った少女は唯一聞かれたら困るのかもしれない、それを問いかけた。

「あなた、シェーンで何をしてるの」

職業は何か。そう聞いたも同然だった。自己紹介の際に自ら言おうとはしなかった事だ、いくらか隠しておきたい事柄なのだろうと判断した。それは正解であったようで、少女を向くと意外そうにしながらも小さく眉を寄せて、ヴィードルは口をつぐんだ。

「……別に、言いふらす事でもないが、隠すべき事でもないな。王都の警備隊だ」

ただの警備隊員にしては、どこか一味違うものを持っているような気がするのは、シュガーローゼの気のせいだろうか。シェーン王都の警備隊というのは、ほとんど誰でもなれるようなところがあり、人数も多いので相対的に町のチンピラと変わりない人間も出てくる。

言ってしまえば、柄の悪さなら騎士団よりも上で、素行も悪そうなのだ。対して、ヴィードルはあまりチンピラにも見えない。あえて言うならば、その親玉というところか。

「……まあ、その、トップではあるが。大した事ではないか」

まるでシュガーローゼが気にしていたのはその事だろう、という具合にヴィードルは続けた。ただ、なんとはなしにつけ加えたくなっただけかもしれないが。鼻にかけるようでもないので、自慢したいわけでもないだろう。

いささか時間がたちすぎたかもしれないが、シュガーローゼはなんとなく口が動くのにまかせた。気まずい、というのもあったが、それを解消させたい気持ちもなかった。

「そんな偉い人が、少人数で旅行って」

変。そう続けるには、シュガーローゼには常識が身につきすぎていた。だから、どう続けていいのか分からない。このまま終了させてしまいたい。いっそ、口なんて開かなければよかったのだ。

「ま、そうだろうな。なんというか、そこそこ秘密裏に行動中、ってわけだ。分かってくれ」

そうですか。どうでもいいけど。それも、口の中にしまっておいた。

ヴィードルは人の疑問を顔から読み取るのが得意なのか、単に自分の思うままにしゃべりたいだけなのか、説明を加えてきた。

「その筋とのつながりがあってな。俺は以前、騎士団に居たから」

少しだけ、シュガーローゼは彼を見上げた。やはり、誰かに言い聞かせるというよりも、前方を向いて気の向くまま口を開いているだけのような顔つきをしている。

「そう、ですか」

「あいつのせいか、こうして確認しないと忘れそうになるけどな」

それでか、とシュガーローゼはむしろ安堵した。誰かが、自分に向かって話をするのが嫌なのだ。何か、困る。会話など成り立たないのだから、ならば最初から、一人言をしていてもらった方がいい。

楽だというのも違うが、何か言わなければ、という焦燥にかられるくらいならこちらの方がましだ。

ただ、ヴィードルはむやみやたらにおしゃべりな人間ではなく、次第に口数も減って、もう必要最低限の事しか口にしなくなった。

誰かと歩く、という事に気がついて、それこそが気まずいと思い知ると、シュガーローゼは我が儘な事に誰か、ヴィードルと話をするか彼がまた口を動かしてくれればいいのに。なんて思った。

92　魔物

夕暮れも間近の事だった。少し冷たい風が吹いて、沈黙にシュガーローゼが倦怠を覚えた頃だ。これまでずっと静かな生活に慣れてきたのに、何を今更退屈に思う必要があるのだろうと、考えを改めた。

ふいに、奇妙な感覚が少女に訪れた。虫の知らせというのか、何かがある、これから起こると感じさせた。果たしてそれはその通りになった。何もない空間が、一瞬波紋を起こした水面のように揺れ動いたかと思うと、二つの影が現れたのだ。そこには、ヴィードルとシュガーローゼが置いていったはずの人物が居た。つまり、彼が魔術を使ってジュレ・ブランシュから飛んできた、というのだろう。

とはいえ、追いついてきたアストリュクが突然あらわれたのにはシュガーローゼもいささか驚いた。妙な気配を感じていたとはいえ、唐突すぎたのだから。

そして、何故かその手には人間がぶら下がっていたのだから、尚更だ。呆気にとられたのは、何もその少年の顔をよく知るシュガーローゼだけではない。責任ある大人として、警備隊の隊長として犯罪を見逃すわけにはいかないヴィードルは、目を剥いた。

「アストリュク……聞きたかないが、聞かせてもらおう。お前を投獄するためにな」

彼の眉間によったしわに限界があるのなら、もうそれを突破してしまっているのだろう。とても耐え切れないといった様子で声を絞り出す。

「その子どもをどうした」

「拾った」

ヴィードルはここ（どこ？）は捨て子養育院じゃない！　と叫び出したいのを堪えた。何故なら、事情あり、わけありの少女にはどう見ても親がいるようには見えないし、その点を刺激するようなふ

ざけた発言は控えた方がいいに決まっている。冗談にもならないどころか、またしても両親が健在か疑わしい少年があらわれたのだから。

「放せッ！」

暴れる少年――レフは、しかし首根っこを自分より高身長の男につかまれたままだった。

「おい、お前なんでこんなところにいるんだ、こいつら何だ」

レフは、シュガーローゼに向かって話をしているらしいが、そんな事、シュガーローゼの方が聞きたかった。何故、アストリュクはシュガーローゼを知る少年を携えやってきたのか？　ただの偶然だろうか、それにしたって、出来すぎている。確かにレフとはジュレ・ブランシュの競売で別れたばかり、もっと先で再会するよりかは可能性は低くない。

「この子ども、面白いものを持っていた」

言うなり、アストリュクは唐突にレフから手を放した。当然、支えを失ったレフは地面に追突する事になる。痛みにわめく少年を構うものはこの場になかった。

「アストっお前いい加減にしろ！」

「おい、お前。あれを見せてみろ」

激昂するヴィードルにも動じず、アストリュクは不満をたれる子どもを呼び寄せるように手を動かした。まだ座り込んでいたレフは、それを受けていい顔をするはずがなかった。むしろ、尚更顔をしかめてみせる。生まれてから一度も櫛を入れてないのではと思わせるひどい髪の毛の、あまりの長さに顔すべては見られず、表情は判然としなかったが。

「あれは、そう簡単に解放していい存在じゃない！」

ついていけないのは、事情を知らないシュガーローゼとヴィードルだった。ただシュガーローゼの方が顔見知りの人間が何について語ろうとも、興味を持てないので何でもよかったが。

だが、まさかレフが次のように語るとは思いもよらなかった。

「それからついでに、こいつはオレのだ」
ぐいと持ち上げられたのは、シュガーローゼの手。一瞬、レフが誰で何語をしゃべっているのか分からなくなる。シュガーローゼに向けられた言葉は、一体何だ？
徐々に思い出されるのは、レフの復讐発言だ。彼にはどうやら、復讐をしたい相手がいて、その道具の一つとしてシュガーローゼを見なしていると、そういうやり取りが過去にあったではないか。その事に思い至ると、まことに勝手な言い分を口にする少年を、殴り飛ばしてやりたくなる。とりあえず、自分の腕は取り返そうと、レフを睨むが、
「いいや、それは私のだ。私が金を払って手に入れたものだ。最適な研究対象としての機能も兼ね備えている将来有望な実験動物だ」
反対側の腕をアストリュクに掴まれる始末。シュガーローゼは我が目をうたがった。左右で別の方向に引っぱられている。この状況は何だ。
「は、はなせ……」
睨み合う男たちに、シュガーローゼはうんざりした気分でうなだれた。何故、こんな事に……。

†　†　†

アストリュクは、強い力を放出するものに反応する道具を持っていた。それは、一般的に“魔法”だと思われている魔術を筆頭に、ミファク族が持つ不思議な力――残念ながらアストリュクはまだミファクについては知識が少ない――や、その他にもいくらか、大きなエネルギーが生じた際にコンパスのような円形の容器の中に入った石の色が変わるというもの。

ヴィードルたちの元を離れたのは、そのコンパスが反応したからだった。何か面白い事が起こるだろうと見当づけてアストリュクは個人行動を取る事にした。

そして、見つけたのは一軒の家の破壊された壁。人的要因で壊れたのではないと一目で分からせるような穴だ。アストリュクは、それはそれは楽しそうにうっそりと目を細めた。何しろ、先ほどから人の叫び声だかうめき声だか、騒ぎが起こっていると主張する声が聞こえてきているのだから。

「助けてくれえええぇ！」

「ぎゃあああ」

悲鳴ほど、アストリュクを楽しませてくれるものはない。微笑みながら、アストリュクはその家の中に入っていった。使用人がいる点といえの大きさからして、それなりに金のある家のようだ。

悲鳴と壁の穴以外に、何の変哲もなさそうな家。ここに何があるのだろうか。

「寄るな化け物！」

飛んできた物体を軽く避け、アストリュクはその光景を見る事になる。怒号と悲鳴を撒き散らして、うずくまる者や逃げ出す者。その騒ぎの中心には人間ではないものが存在する。天井に頭を突きつける、怪物の姿。褐色で、毛皮に覆われた奇妙な人間もどきは上半身がどこかイノシシのようなものに似ていた。人ともイノシシとも言いがたい、いびつな存在。誰もがあれを恐れて逃げ惑い、叫んでいる。

うっすらと目を見開いたアストリュクは、口笛を吹いた。これは、楽しくなりそうだ。一体、どこから出てきたのだろう。この地で自生しているわけはないだろうから、どこかからやって来たか、誰かが呼び出したかだ。

周囲に目をやると、人々が逃げ惑う中にたった一人、無謀な試みをしようとする人影を見つけた。逃げ出しはしないが、上手く攻撃を加えているとはいえないような、小さな動きをしているだけの人物。背丈からしてまだ子どもだ。ただの勇者ぶった馬鹿か、それともこの騒ぎの当事者なのか、アストリュクにははかりかねた。

考えている間に、怪物は暴れまわるついでにアストリュクにまでものを投げてきた。というより、とばっちりをアストリュクが食らったというべきか。それを、一瞬反応が遅れたアストリュクが顔面に木っ端を受ける事になる。大きなものではないために、額が少し切れるだけで済んだが、これではあの生き物の観察もゆっくり出来ない。頬を片方歪めると、この男は動き出した。

魔術、それを発動させるための呪文を唱え始める。ふいに少年が一人、彼を振り返ったのだが集中していたためと周囲の瑣末な事に興味を持たないアストリュクは気がつかなかった。最後の呪文を終わらせ、魔術を放出する。

「動くな」

長い足を前に出して、漆黒の髪と闇色の瞳を持つ男は表情も黒く変えて嗤った。

化け物は、動けなくなってしまった。アストリュクの魔術によって。よく見ると背中には棒状のものが生えている。この騒ぎの中、怪物に立ち向かった者が居たというわけか。

「……ふん、実に興味深い」

「あ、あんた誰だよッ？！」

動揺をむき出しにする少年の声に、アストリュクは構わなかった。何よりこの異常な事態を作り出した怪物にばかり注目がいく。

「ていうか、そいつをどうするつもりだよ？　オレのだぞ！」

指を指して、少年は主張した。手におえていたようには見えないのだが、それでもこの子どもは怪物が自分のものだと言い張るつもりらしい。どういう事かは分からない。しかし人は分相応不相応という、身の丈にあった望みを持つべきだろう。ほとんど、一緒になって襲われかけていた少年にそれを主張出来るような力があるとは思えない。それとも、今は動かない怪物の背に刺さった棒があの少年の手によるものなのだというのか。

「小僧、これがお前のものだと？」

少年には、アストリュクの瞳が冗談だろう、と馬鹿にしたような色合いを帯びていると判断できた。確かに、明らかに扱いかねていた先ほどの光景を見られていたのなら仕方がない。羞恥に顔が赤くなりかけるが、そのまま引き下がるわけにはいかない。少年は、レフは、これを一つの道具として本懐を遂げるつもりなのだから。奪われてはたまらない。

「ああそうだ」

レフの手には“魔導の書”があった。これでまた怪物を本の中に閉じ込められるはずだった。上手く近づけなくて、苦戦してはいたがこれさえあればまたレフの支配下におかれるはずなのだ。だから、いくら助けてもらうような形になったとはいえ、目の前の男に礼を言うつもりも、“魔導の書”ごと奪われるつもりもなかった。が、あっさりと少年は長い手に書物を奪われてしまう。

「あっ、てめ、待て返せ！」

血相を変えて少年はアストリュクに飛び掛るのだが、身長の差がある上に男が手を高く伸ばしてしまったので、“魔導の書”を奪い返す事が出来ない。その上、彼らの近くにまだつっ立っている化け物が身動ぎしたように見えて、まだ窮地を脱しきったわけではないと思い知る。焦れたレフは自分が有利になるような武器を持っていないかと視線をさまよわせる。ここに来るまでに武器はとうに取り上げられ、必死に守った“魔導の書”だけしか彼は持つ事が出来なかった。

レフは、ジュレ・ブランシュという港のある町へ連れてこられ、競売にかけられ売り出された。その際自分を買い取ったのは金持ちの商人で、連れてこられた先で使用人として働かされるはずだった、らしい。らしいというのは、使用人になる前にレフは身体検査をされてしまい、挙句に“魔導の書”を奪われそうになったために一悶着起こしてしまった。その結果、本を開いたら出てきてしまう、化け物があらわれ出でたというわけだ。以前のようにまた書物の中に追い返そうとなんとか対峙していたところに、謎の男が現われてレフは混乱していた。男は魔術師のようではあるが、“魔導の書”を取り上げるなり人の言い分を無視するという、嫌な相手だった。

「……古代イートゥル文字か」

「返せよ、オレのだ！」

「お前にはまだ早い」

その言葉に、少年は感情を大きく爆発させる。全身が怒りで熱くなった。

「黙れ！　うるせえ、誰がなんと言おうとそれはオレので、あいつを殺す！！」

背伸びをしないと届かない相手の胸倉を掴むと、レフは飛び上がった。男の持つ、“魔導の書”めがけて。

「ぐがああァァァ！！」

怪物はまるでレフの怒りに呼応するように叫び出した。「術が切れるか」アストリュクのつぶやきも、化け物の雄たけびも今はレフにとって些細なもの。もう“魔導の書”しか見えていなかった。油断したのではないだろう、男はそう抵抗もせずにレフに本を取り返させた。無理矢理の行動だったため、レフは“魔導の書”を手にして地面に転がった。すぐには起き上がれなくて、自分を見下ろす男の存在も忘れてしまった。

奇妙な化け物が、また一つ吠えた。アストリュクは、この子どもと怪物、そして曰くありげな本のつながりを見出せないでいた。だが、本に固執を見せる少年の様子からいくらかは情報が読み取れる。

あの本が何らかの形で目前の魔物と関わりを持っているのは、間違いない。だが、この魔物は一体何だ？

先ほどアストリュクが流し見たところによると、古の言語（いにしえ）が刻まれた書物を少年は手にしている。そう身なりもよくない子どもが持つには不似合いで、あの本の価値をきちんと理解しているようには思えない。はるか昔、古代の時代には魔術が今よりももっとさかんに使われていたという話がある。それであの書物、あの文字、この化け物なのだろうか。やはり、あの本になんらかの魔物を封じる力があると見てもいいのではないか。

「名前だ」

「は？」

アストリュクは魔導に関する研究者でもある。本来はもっと別な事に意識を傾けているのだが、分野を問わず知的探究心の深い男であるために、彼の仮定が正しければ完全にあの魔物を封じる事が出来るかもしれない。それどころか、使役をする事だって可能となるかもしれないのだ。

魔物はとても魅力的ではあったが、どうも攻撃を加えるくらいしか能がなく、自分の専門分野とはあまり関わりあいがなさそうだ。それに、使役はあまり性に合わない。それならばこの少年にくれてやってもいいだろう。自分に益となりそうだったら、その時はその時で奪えばいいだけの事。

「この魔物の名前がその書物には書いてあるはずだ」

言われて、少年は呆気にとられたような、途方に暮れたような顔をした。まるでアストリュクが未知の言語をしゃべっているとでも思っているかのように。

唐突に時間切れは来た。茶褐色の醜い化け物が動き出したのだ。また同じ魔術で動きを止める事は出来るが、それでは根本的な解決にはならないだろう。攻撃を加えるか、アストリュクは考える。そもそもがあの魔物の持つ性能はどんなものか、知っておいても良いかもしれない。また呪文を唱えはじめたアストリュクに、少年は慌

てた。
「ちょ、殺すな！　名前があったら何だって言うんだよ？！」
　レフの制止にも構わず、その男は“魔導の書”から飛び出した怪物に攻撃魔術を与えた。炎が刃のように形づくり化け物に刺さった。怪物はひどく聞き苦しい悲鳴を上げた。倒されてしまう！　レフは男の言いたい事の全てを理解していなかったものの、“魔導の書”から怪物の名前を探す事に決めた。しかし、読めない。元々レフは文字の読み書きを簡単なものしか出来ない身だ。古代の文字など読めるはずがなかった。
　もたつく子どもを、男はどう判断したのだろう。魔物からは目を離さないで手を差し出してきた。
「寄こせ」
「嫌だ！」
「お前ごときが持っていては死ぬぞ」
“魔導の書”も、化け物も、扱えない。そんなレフが手にしていては意味がないどころか死んでしまう。男の言い分はもっともだった。今まさに、レフはこの魔術師の男がいなければ魔物に襲われて死んでしまっているはずだからだ。
　だが、それでも、死ぬと分かっていても“魔導の書”を手放すわけにはいかなかった。これはもはや意地だった。無意味なもの。生きていなければ、復讐も出来ないというのに。自分の行為が愚かしいと分かっていた。
「何も持ってなきゃ死ぬ可能性だって生まれねえだろ」
「死にたいのか？」
「目的を達成出来ないまま平和に暮らすくらいなら、自ら危険に飛び込んだ方がましだ」
　言い捨て、レフは書物のページを繰った。探すのは、魔物の名前。そんなもの存在するのか、そして自分に読めるのか。そんな疑念は捨てた。
「グラディウス」

はっとアストリュクが顔を上げた。わずかながらに目を見張って、困惑に近い色へと闇色の瞳をゆるがせた。

化け物の動きがはっきりと、明確に止まった。それはおかしなくらいに、ぴたりとした停止だった。まるで悪戯をした子どもが母親に名前を呼ばれたかのように、身動ぎしない。

まさかと思った。アストリュクは、彼自身全て読めはしない古代イートゥル文字をこの子どもが読めるとは思ってもいなかった。その上あの化け物の名前が本当に“グラディウス”だとでもいうのか？

「……“魔導の書”に戻れ」

持ち主自身、自分のしている事が信じられなかった。

――オレは何をしている？

これは本当に、レフがしている事なのだろうか。だが、目の前の光景はもっとおかしかった。振り向くかのようにして、化け物――グラディウスが動いたかと思うと、煙のように形を変えるとレフの手にした書物の中に吸い込まれるようにして飛び込んでいった。手にした書物が、いつの間にか浮かび上がって、魔物が収まってしまうと勝手に閉じてしまった。

「――掌握したか」

「しょう、あく」

自分の口がまるで他人のもののようだった。レフは、今までに眼前に立っていた巨躯の魔物が消えてしまった事も、自分の本の中に消えてしまった事も、何もかもが理解出来なかった。

「既にお前は選ばれていたようだな」

「……はあ？」

「名が分かるという事はそういう事だろう」

アストリュクが指を指した先には“魔導の書”、その中には魔物グラディウス。

くく、と男は笑った。

魔物に選ばれたというのに顔をしかめ、レフは嫌悪感をあらわにした。手にしたいと、支配下にしたいと願っていたはずの“魔導の

書”。だが、いざこうして手にしてみると心臓がおかしなぐらいに重くなり、不安が高まる。この手に掴んだ重みは、これまでの“魔導の書”よりもひどく重くなったのではないか。

これが、力を得るという事。

恐ろしくもあった。そう、体の内側であの魔物が暴れまわっているみたいに、胸騒ぎが止まない。

――だがこれで、あの男を殺せる。

確実かどうかは、分からない。何しろ魔物グラディウスは今もケイスに刺されたパイプをそのままに受けている。その上、まだレフが名前を知らなかった頃でさえ“魔導の書”を押しつけたら本の中に戻ってしまった。完璧な道具とはいえない。だが、これでまた一つ復讐に近づいた。

琥珀の瞳が、負の色に染まった。

93　四人旅1

騒動の中心である魔物を片付ける事が出来た。立っている人間は二人しかいない。この時レフが考えていたのは当然、奴隷のように売り払われた自分の身を救うための行動だ。この場を逃げる。

が、それを阻むものが一人いたのだ。レフには思いもよらぬ、だが他に可能性がある人間はいない。

「手ぇ放せよ」

「面白そうだ、お前」

レフのものよりは短いが、いくらか長い髪の下、アストリュクは楽しげになる。

「……あんた、なんなんだ？」

「いち研究者だ」

そして、レフは掴まった。暴れようと決めた瞬間、少年は魔術によって場所を移動させられていた――。

これまでに起こった事をレフには話すつもりもなかった。何しろすべて突然で、自分自身心の整理がついていなかったのだ。何をどう説明しろというのだ。

が、ここで常識ある大人で事態を明確にしたいヴィードルが動き出した。

「で？　君はこの娘と知り合いなのか、名前は？」

「――レフだ。あんたは？」

ヴィードルは自分の名前と、アストリュクを紹介した。身分をは

っきりとは口にしなかったが。シュガーローゼはどちらの身の上も知らない。そもそも、この場にそろった四人のメンバーの、奇妙な事。

首をしめられたアストリュクがいくらか事情を説明すると、ヴィードルは理解したようだったが理解したくもないというような顔で声を荒げた。

「お前はこの少年をどうするつもりなんだ？　こんな事は言いたくないが、こっちの娘には同行させる言い訳を作ったようだが、今度はどうなんだ」

「……ああ、この子どもな、危険物所持の容疑で収容すべきだと判断出来たんだ。私が連行すべきだと」

「ではそれは私が受け継ごうかな」

「いや、遠慮しておこう」

「黙れそれ以上しゃべるな。そもそもお前にそんな権限はないはずだ」

「力があるものには責任が伴う。そして私にはいち市民として危険を最小限にとどめる義務がある」

「ねえよ黙れ帰れ死ね」

成人男性組が子どものような言い合いをしはじめたので、ついに手持ち無沙汰な二人の少年少女は顔を合わせるにまでいたってしまった。そんな事はしたくなかったのに、お互いに。だから気まずげにすぐ顔をそむけた。二人共。

シュガーローゼはこれっきり、もう生き別れになるはずだった相手に、会いたくもなかった相手に思わぬ再会を、それもこんなにも早く実現させるとは思わなかった。

レフは、散々な目に遭わせた相手と、だが手にしたかった完璧な復讐の道具を前に、どんな顔をしていいのか分からなかった。特にレフは、重くなった“魔導の書”よりも胸が重くなるのが分かる。何故だろうか、また会いたいとは――自己の利益のために利用したいがため――思っていたはずなのに、一つ目的を達成したからだろ

うか、真っ直ぐに彼女を希求する事が出来なくなっていた。そう、本当に必要だと思っていたのに。シュガーローゼの事はレフには必要なはずなのだが……。

（それにしても、コイツなんでこんなに大人しくしてるんだ？）

つんけんして、触ると刺す勢いはどこにいったのだろう。慣れない船旅や、他人との団体行動で疲れてでもいるのだろうか。それにしても、普段より幾分多くの疲労や諦観が見える。自分の事となると、まるで厭わしいとでもいわんばかりに顔をしかめる事があったはずが、シュガーローゼは今は他者はもとより自身の事ですら興味がないように見える。まるで頼りない子どものように、ただの少女のように見える。

目が合って、レフはすぐさまそれをそらす。シュガーローゼとは元々気まずい仲ではあったが、何故か今は直視がし辛かった。少年はただひたすらに“魔導の書”を強く握り締める。次はあれだと思っていたのに、何かがやめろと言っている気がする。せめて一番最初に手に入れたものだけは手放すまいと、すがるように強く。

「……ひとまずでいいから私の頭に平穏を与えてください。事態をもう一度整理したい。もう少しで小さな町があるはずです。そこで一息入れましょう」

どうやら、大人たちの間では停戦条約が結ばれたようだ。やや不満そうに瞳を向けたアストリュクも、しかし反論はしなかった。

イブー街道沿いの町は、本当に小さな町でただ少しの宿と飲食店、その他いくらか日常生活や旅路に必要なものを売る店があるくらいで、民家はほぼ存在しなかった。旅人のための町というのか、旅人が通らなければ見向きもされないだろう町だった。

そこで一向は食事をする事になる。一番よろこんだのはずっとまともなものを食べてこられなかったレフだっただろう。四人と人数

が増えた事で出納長はさすがに好き放題に料理を頼みまくる事はなかったが、それぞれに充分な量の食事が与えられた。下船してからこれまで何も食べていなかったレフは、それはもうむさぼるように食べた。

「……こんだけ食っておいて何ですけど、いんですかおごってもらって」

それは確かに、レフは無一文の脱走奴隷状態で、お金を誰かに払ってもらってでしか飲食は出来ない。いや、窃盗をすればあるいは。だがこれだけ他人の目がある前ではさすがにレフでも軽犯罪をためらってしまう。ヴィードルの好意に甘えればいいだけなのだが、初対面の人間相手にそこまでしてもらってよいものだろうか。

「一人旅ではない以上、子どもが二人になろうが三人になろうがある程度の出費は必要だろう」

彼の言い分には、アストリュクすら子ども扱いになっていたりしたがそれに気づいた本人も気づかなかった少年少女も口をはさむような事はしなかった。

「じゃ、ごちそうになります」

いささか申し訳ない思いはあったものの、そう悪びれもせずに言ってのけるレフ。

「でもオレはずっと世話になるわけにはいかないです。コイツと帝都に行かなくちゃならないから」

「なんでわたしが」

行かないし、という気分でレフを睨みつけるとシュガーローゼは少年が指した指を叩き落した。

「それならば問題ない。我々も目指すところは帝都だ。子どもだけの道行きは危ない。君たちにとっても我々の同行は悪い話じゃないと思うが」

シュガーローゼは自分がレフと行動を共にすべきと考えられているのが納得いかなかった。これまでには、ヴィードルはまるで彼がシュガーローゼの保護者になるべきだとでも思っているかのような

台詞を吐いていたではないか。それを、これまでにずっとレフと行動を共にしていたと決め付けられた気分になって、腹が立った。何にしろ、シュガーローゼにはまともな選択肢を与えずにここまで連れて来たのはヴィードルとその友人だというのに。

ヴィードルにしてみれば、面倒な話であったので仔細は構わずにただアストリュクの暴挙の被害を最小限にとどめるために少年にもいっそ同行してもらえばいいのではないかと思っただけであった。そもそもアストリュクが少年の事を連れて来たという事は、これからも彼につきまとわれてしまうのだろうと予想出来る。だったら、同じ被害者同士、シュガーローゼもレフもアストリュクが居るとはいえヴィードルが面倒を見ればいいのだろうと判断をした。

「……ぶっちゃけ、オレはあんたもその男も信用できない」

どうでもよさそうに、シュガーローゼは他所を向いていた。ここでも自分の意思は必要ないようなのだから。勝手にすればいいのだ。そして少し脂身の多い豚肉を食べたせいで腹の中が若干気持ちが悪かった。

椅子の深く腰掛けたアストリュクは、腕を組んで黙り込んでいる。瞼を伏せて、起きているのか眠っているのか分からないくらいだ。それを横目で見ながらヴィードルは、この場で話し合いらしきものに参加してくれそうな人間の少ない事に気づいていた。

レフの言い分はもっともだ。何しろはじめて顔を会わせたものばかり。シュガーローゼとレフは顔見知りのようではあるが、他は何も知らないのだろう。信用しろというのが無理な話。

「仮にも少しは責任ある地位についているため、軽々しく口にすべきではないと判断していたからな……、俺は、シェーン王都の警備隊を束ねる役どころをおおせつかっている。だから、というのでは納得してもらえないのかな」

少年は眼を細めた。彼が言いたい事はなにか。警備隊の隊長。そういう事か。しかしだったら何だというのだ。何の理由になろうか。あの、シェーン王都の騎士みたいにお節介な人間にヴィードルは見

えない。相手の困惑が分かったのだろう、ヴィードルは考え込むようにしながら更に続けた。

「本来なら、隊長だからと他者に手を伸べる事はなかっただろうな。俺はお人好しなんかではない。だが今回は問題児が関わっている。こんな阿呆を野に放ってしまったのは俺の責任だ。少しは何かしなきゃと思うくらいは、しなきゃならんだろう」

「はあ……」

問題児とはつまり、アストリュクの事だろうか。確かにレフは同行を申し出てくれるヴィードルよりもアストリュクの方に迷惑をかけられている。だからといって、それを他人が介入すべき事柄なのだろうか。それにしても、そんなに危険人物なのか、レフを連れまわした男は。アストリュクは意識すれば他人に怯えを与える事が出来る、それはレフも薄々と感じている。だが今のように険をひそめている様からすれば、そう危ない人物には見えない。大の大人が、他人にかばわれるような事をして、それでいいのだろうか。

いや、論点はそこにあるのではないだろう。ヴィードルはレフに、彼とアストリュクとシュガーローゼの四人で行動を共にし、同じ目的地である帝都を目指そうと提案している。それは一見魅力的ではあった。さすがに、これまでの疲れからすれば一人ないしシュガーローゼと二人の旅は、きついものとなるだろう。それを大人が加わるのなら、いくら初対面でも改善される点が出てくるだろう。その上、どうやらシュガーローゼは特異な体質からアストリュクに目をつけられており、彼はシュガーローゼを手放すつもりはないと主張していた。レフがシュガーローゼを必要とするならば、彼も彼女の元を離れるわけにはいかない。

結局は、ヴィードルの提案を受けるしかないのだろう。

「一つ聞いても、いいかな」

頷くヴィードルに、レフはちらりとアストリュクを見上げた。相変わらず話を聞いているのかいないのか、闇色の目は伏せられたままだ。

「あんたが隊長なのは分かった。じゃあこの人は何なんだ」
どう考えても、堅気じゃない。魔術が扱えるから魔術師と考えるのが普通だろうが、それ以上の脅威を持っているようにしか思えない。
ヴィードルは、眉を持ち上げて傍らの友人を見た。面倒な男だ。肩書きを名乗るのならばそれはもう、ヴィードルが勝手に名づけたあだ名から公的な肩書き、かつての呼び名などたくさんある。しかし今の彼をあらわすに一番ふさわしいものは何だろう？
「今は研究者だ」
本人の言葉が一番うさんくさい。そう思わせる人間が口を開いた。嘘つけ。そうツッコむものはなかったので、全て信じるとはいかなくともレフはそれもアストリュクを表わす一部なのだと思う事にした。しかし、何の研究をしているのだろう。魔術が使えるので魔術に関わる事だろうが、どうにもその他にもいかにも危ない事に手を突っ込んでいそうで嫌だ。
「……ま、この男の事は俺がなんとかしよう。安心してくれ、いざとなったら牢にぶちこんでおくから」
いかにもそうしたい、という顔をしてヴィードルが口角を上げた。ただの友人には見えないが、険悪ともいえない二人。おかしな大人たちだとレフは思った。

94　四人旅2

空間転移の魔術を使える人間がおりながら、彼らが皆徒歩で移動するのはいささかおかしな事に思われたが、それでもシュガーローゼはもう誰かと共に空間転移をする気にはなれなかったし、アストリュクは何も個人行動がしたいわけではなかったので、四人は歩く事にした。

乗り合い馬車を使う手も考えたが、今回の旅で唯一お金を持っているヴィードルは、どう考えても四人を乗せて遠くへ運んでくれる馬車に乗る資金を持ち合わせているとは思えなかった。旅はまだ始まったばかりだ。すぐに資金をなくしてしまうわけにはいかなかった。

結局、何か問題が起こったらその時は近くの町に魔術で飛んでいき、そうならなければ徒歩で移動、という話に至った。ミリヤール帝国の広い版図の内、彼らが歩こうという場所はもうすぐ終わるとはいえ冬である中、雪の降らない地域であったので、徒歩での旅が可能だったともいえる。

「帝国には魔女がいる」

唐突にアストリュクは口火を切った。誰もが聞き流しかけていたのだが、彼は続けた。

「生き字引と言われる、百を超える長寿だとか。魔女とは言われているものの、男か女かすらも知れては居ない。というより、どちらでもおかしくないという話」

「お前の目的はそれか」

相手をしたのは最初から彼の同行者であったはずのヴィードルだ

った。確か、アストリュクはヴィードルが帝国に行く事になった時にはそんな話はしていなかったはずだ。レジスタンスの様子を見に、帝国のほころびを見に行きたいなどぬかしてヴィードルの仕事について来ると言い張ったのだ。その他もっともらしい理由も口にしていたとは思うが、魔女の話は初耳だ。

「得体の知れない存在だ。魔女なら、死神の謎を知っているかもしれん」

向かう先にはシュガーローゼだった。少女は、それが自分に向けての言葉だとは分からなかった。視界の端にいるレフが何故か自分を見つめているので、顔を上げたのだ。そこにはアストリュクの横顔があって、年端もいかぬ子どもでも見るようにしている。

「生命の法を知るとか。真偽のほどは定かではないがな」

一瞬、その男の目が怪しくきらめいた。今すぐにでもその魔女に会って彼の知りたい事すべてを吐き出させたい、とでもいうかのごとく。

「せいめいのほう……」

何故かシュガーローゼは反復していた。それは“死神”にいかにも関わってきそうな内容ではあった。だが、遠く離れた帝国とはいえそんな魔女の話、彼女はこれまでに聞いた事もない。アストリュクという存在自体が疑わしいのだが、彼の言葉も、魔女の存在も、信じられるはずがなかった。アストリュクが言っていた、帝都に行けば謎が解けるというのは、その魔女に物を請えというわけだったのだろうか。

そんなもの、より尚更疑わしい。絶対に、無理だ。信用など、これまで他人に抱いてはこなかったものであるが、今こそそれを行なってはならないものだ。こんな、全身からうさん臭さがあふれ出る人間の言葉など信じたら馬鹿を見るのは自分だけだ。ふっと、失笑がもれる。シュガーローゼはもう大丈夫だ。この男の言葉は無意味なものだと見なせる。

今はまず、帝都だ。帝都に行けばなんとかなる。何が彼女にそう

思わせているのかは分からない。だが、帝都に行けばそれぞれに目的があって、広く人の多い場所に行けば、シュガーローゼが一人消えたって気がつかれないだろう。その時に、彼らを離れて、どこか遠くに行こう。今度こそ人里離れた場所で暮らすのだ。そうでなければどこかで死んでもいい。

死んでしまえばいい。それが一番手っ取り早い方法。消えてなくなれたら、いつも思っていた。

そっぽを向いて、空を見上げる。

「魔女……」

レフも何かをつぶやいていたが、彼には魔女の姿を想像する事が出来なくて、怪訝な顔になっていた。

「生命の法、ね」

感情を表に出さないように努めていたのはヴィードルだった。彼は、特にアストリュクの事情には詳しい。彼が思っている事、未だに過去に囚われている事を推測するのは難しい事ではなかった。それで、か。納得してしまえる。だが、それでいいはずがなかった。なんとか友人を止めてやりたかったが、そう出来るならばかつて起こった事件は未遂ですんだし、それにこんなところまでアストリュクをついてこさせたりはしない。全て知っていても、止める事が出来ない事もあるのだ。

「さ、そんな事は帝都に着いてからでいいだろう」

この話はお終いだ。ヴィードルの言外の台詞が分かり、四人はそれぞれに自分の考えに没頭する形で、会話を途切れさせ、また旅を再開させた。

†　†　†

次第に、口数は減っていくものの元からの知り合い同士という事で自然と会話をする人間は、アストリュクとヴィードル、そしてシュガーローゼとレフ、という二組に分かれるようになっていく。後者はほとんど口も聞かなかったが、それでも年と旧知という共通点が彼らの間にグループ分けを作っていた。

シュガーローゼにはなくとも、レフには彼女に聞きたい事がたくさんあった。少しは話を聞いているものの、港に着いてからのこれまでを彼女の口から聞いてみたかった。レフの方でも、自分にふりかかった出来事を話したいという気持ちがある。人は、時折無償に誰かと話をしたくなるものだ。ずっと消えない炎を持ち続けるには、時に馴れ合いが不必要だと感じるレフなのだが、それでも今は人間と話をしたかった。アストリュクはあまりお近づきになりたくないし、ヴィードルもまだ少し信用しきれていない。シュガーローゼだって、きっとレフにはいい感情を抱いていないだろうし、ひどい事もしてきた相手だ。あちらにしてみればレフには近づいてほしくないだろう。だが、消去法でレフは一番口をききやすい相手がシュガーローゼしか居ないのだった。そう、それだけだ。何もどうしても、何がなんでも彼女と楽しいおしゃべりがしたいというのではない。

自分の話を聞いてほしい。どんなくだらない事であれ。ずっと口をきかなかったわけではない。でも、自分を知る誰かと、話がしたい。

レフの頭によぎったのは、オスティオに居るはずのかつての友人たち。アルにマッテオ、ベンとヨブとキオスク。彼らも、友人と呼

べるようなものだったのかもしれない。しかしレフは彼らを裏切り、置いて逃げた。もうそうは思ってもらえないだろうし、レフにはいつも、彼らとの間に距離感を、疎外感を抱いていた。常に忘れる事の出来ない、忘れてはいけない記憶。それは誰にも言えないものだった。孤児だったり、家族に恵まれない子どもであるアルたちは、それでもレフのような目に遭った事はないに違いない。彼らは、それでも明るく、強く前を向いて歩いて、生きていこうとしていた。

言えるはずがなかった。レフの感情なんて。彼らに知られるわけにはいかなかった。そんな事をすればレフは遠ざけられてしまうだろうし、何よりレフ自身が望んでいなかった。

復讐心は、内にためてしまっておくのが良い。言葉にすれば、薄れてしまう。そんな気がしていた。だからずっと、傷をかばって歩くみたいに行動していたからだろう。あちらの方でも、レフには何かがあると知れてしまったのは。だからだろう。あの時、シュガーローゼを無理矢理に連れて来た時、アルが激昂したのは。レフのたくらみに、その内容は知れなくとも気づいてしまった。レフを信用できなくなってしまったのだろう。人は、隠し事を嫌う。それを知ったアルやマッテオは、レフという人間が信用するに値しないと感じたのだ。それより前から、お互いに違和感を感じていたのだから当然だ。

本当は、まるで親友のように思っていた彼らに全てを打ち明けてしまいたかった。素行が悪くとも人の好い彼らは同情してくれただろう。もしかしたら手助けを申し出てくれたかもしれない。だが、もしそれを知ってレフが安堵を覚えてしまったら？　それ以前に、殺人衝動を他人に告げられて、受け入れられるはずがない。

だからずっと、レフは自分に友人はいないと思う事にしていた。信じてはだめなのだ。

そう、だから……ずっと、誰とも話しをしていないと同じだったのだ。故郷がなくなってから、ずっと。人間となんか向き合っていない。そもそもレフはあの日、真っ当な人である事を捨てた。人間

ではなくなってしまったのは、レフが先だった。人でないなら、誰とも話さずに生きていける。そう思っていたのだが。時々、ひどく馬鹿な事をしてしまいたくなる。全部話してしまうのだ。故郷の事も、復讐の事も、彼が感じている全てを、体の中から追い出してしまいたくなる。それはレフ自身のためでもあるが、時折自分のしたい事を忘れてかけてしまうからでもあった。

ゆらぐのだ、復讐心が。それを、他人に言って聞かせる事で本当にあるものだと確認したい。自分が必要としているものが何なのか、音にする事で証明した。形あるものにしたい。たとえ文字にもならず、ただ空気中に散ってしまうものでも、他者を介して認識してもらいたくなるのだ。

おかしな話だ。内に溜め込んだままでいた方が、復讐心が燃え続けられると思っていたはずなのに、全く反対の事を思うなんて。

でももう、あまりにも黙っていすぎたのかもしれない。何かを、口にしたくて。

遂げたい事についてでなくとも。

レフ自身を。

（……馬鹿な考えだ）

人間である事を捨てたのなら、自分のためなど、確認作業など、必要ないはずなのに。

歩幅が近いためか近くになる少女を一瞥する。

これまでにしてきた全て、それを忘れて、レフはシュガーローゼに話を聞いてほしくなる。別に他愛のない、捻りもないお話でもいい。ただ、話をさせてくれ。存在の認識をさせてくれ。そう叫びたくなる。全く、愚かしい事だ――……。

「どうでもいいけど」

ぽつり、こぼされたのはひとり言のようなそれ。すぐには信じられなくて、レフはぼんやりと前方を向いたままだった。

「面白いものって、チェルヴォで見たあれだったりするの」

それには主語も修飾語も、そもそも目的語らしき重要な単語も抜

け落ちていたのだが、レフは理解した。アストリュクが口にしたレフが持つ面白いものというのは、シュガーローゼもチェルヴォで見て戦った、あの化け物なのかと、問うているのだ。あれをまだ持っているのか、そう聞きたいのだろう。

それには答えやすかった。何しろレフは、もうあの“グラディウス”を支配下に置いているのだから。得意になっているところもあった。ゆえに少年の舌は滑りよく動いた。

「そ、そう！　あの魔物、オレが名前を唱えたら大人しくなりやがった。もうオレのものだな」

やや勝ち誇った顔の少年に、シュガーローゼは興味どころか感情も見えない瞳を向けた。「……どうでもいいけど」などと加えると、すぐにレフからは視線を外す。なんだか、レフにしてみればそれだけで終わってしまって納得がいかない。

「つうか、お前、どうしてたんだよ。売られたはずだろ、オレみたいに」

返事はない。シュガーローゼはどうでもいいと言っていたように、もう物事の全てに注意を払っているように見えなかった。いくらか焦れながらも、レフは会話を続けようとする。

「オレはどっかの商人に買われたんだ。そこで、“魔導の書”を奪われそうになって――、覚えてるだろ、あの本」

応えはない。

「あれは普通の人間の手には余る。危険だから、オレはそれを開かせるわけにはいかなかった」

少年は、相手が聞いていないという事実を知っておきながらも口をしめておく事が出来なかった。まるで堤防の決壊した堤から押し寄せる大量の水を、無力な人間が押し留める事が出来ないかのように。

黙っておけばいい事を、アストリュクに対する警戒心や未だに“魔導の書”については分からない事だらけだと、そういう事も含めてレフはだらだらとしゃべり続けた。

「それから、あの人の事もオレ、気になってはいるんだよな。オレたちは一応、まあ……真っ当かどうか怪しいけど、一見してそこまでは問題なさそうな人間に引き取られたわけだけど、ケイスはどうしてんだろうな」

その固有名詞を口にした途端、少女はわずかに首を上げようとしたかのようだった。レフは見逃さなかった。別段、彼女から何がしかの反応を引き出そうなどとは思ってもいなかったのだが、相手の動きがあまりにもなさすぎるので、まるで観察するように眺めていたのだ。

「やばい怪我してたしな、でもやっぱオレたちみたいに、魔術で治してもらったんかな」

シュガーローゼから言葉をつむがせようとするかのように、レフはケイスの話題を止めなかった。それでも少女の反応は、もうやってこなかった。

「あの海賊たち、なんであんな事したんだってあん時は思ったんだけど、売るのに怪我人は必要ないって事だよな。それじゃ、死にかけて魔術でも治せないくらいのひどい怪我なら放っておかれたのかな」

つらつら、下らない事ばかりとレフは思いながらも、本当にもうシュガーローゼからなんの返事も得られない事に苛立ちを覚えていた。不満だった。もう一度、ケイスの名でもって何かスパイから情報を引き出そうとするかのように、相手にゆさぶりでもかけようかと思ったが、それをするのもなんだか癪だった。何にも反応しないはずのシュガーローゼが、ただ一人の名前にだけは返事をする？想像しただけで眉間が寄る。

なんで、そんな事を思っているのだろうか。レフには考えるべき時間がたくさんあったのに、それを見ない事にした。

それより、これからの事を考えるべきだ。

レフは、今の状況を全く最悪の事態とは思ってなかったが、それでも目的の異なる相手と同行するという奇妙な感覚に、不満を覚え

てもいた。

確かに、目的地は一緒だ。だが、相手は大人で、信用できるかも怪しく、その上一人はレフを何かの道具かのように見なしている。居心地がいいなどはいえないだろう。しかし、問題はレフにはお金がなく、盗みをしないのであれば他人の世話になるしか生きる道がないという事だ。

彼らと――正確にはアストリュクとヴィードル――別れて行動をした方がいいのではないか。それは、同行する前から考えていた事だ。だが、シュガーローゼの意思が個人行動に傾いておらず、短くない異国での旅を無事に終わらせるには、彼らのような人間を利用するのも一つの手だ。

結局、考えても仕方がない事なのだ。彼らの事は。四人で行動を共にする事は。ただ、レフはずっとこのままでいるつもりはない。シュガーローゼを連れて歩けさえすれば、帝都に着く前に大人二人から離れたっていい。むしろ、そうするつもりだった。

そう、だから、邪魔なのはあの男たちだけだ。そのうちに別れる事になる相手を、ぼんやりと見るが、もし彼らが実力行使に出たら自分はひとたまりもないだろうな、などと思う自身に少年は、情けなく思いながら歩いた。

† † †

一つの宿場町に泊まる事になった。ずっとレフはシュガーローゼと会話せずにやってきた。むなしい気もしたが、自分のした事とやろうとしている事と、この変なメンバーを思えば自然な流れだった。

泊まる宿の食堂で、食事をする事になったのだ。別に、四人同時にそれをする必要などはない。その証拠にアストリュクは一人どこかで個人行動に出かけていた。しかし、この旅の財布を握る人間がいないのであれば、少年と少女はまともに食事も出来ないので、三人で夕食を食べた。

さすがに、ヴィードルは以前のように贅沢な量の料理を店員に要求したりはしなかった。ただ安さとそれが許す最低限の中でも量の多いメニューを頼んだ。子どもたちには、あまり贅沢はさせられないがと釘を刺し、やんわりと威圧感のある眼差しで説明した。それでも、ほとんど浮浪児のような生活ばかりしていたシュガーローゼとレフは、毎日一定量の食事が出来るという、普通の人間のような食生活を楽しめるにまでいたっていた。それは何の変哲もない事だったとしても、彼らには馴染みのないもので、しかし腹がくちくなる事は不快ではなかったので甘んじて受け取った。

が、少年はいつまでもこのままでいるつもりはなかった。小さな宿場町でも、人の集まるところに来れたのは幸いだった。

「オレ、この間からの食事代、払います」

彼にしては丁寧に、行儀よくした顔でヴィードルに告げた。ヴィードルは口こそあけないもののぽかんとしていた。

「……君、お金持ってたのか」

「いいえ。ただ、ここで少し働いて返します。だからいくらくらいだったか言ってもらえれば」

「いや、そんな事構わなくてよろしい。こちらが勝手にやっている事だから」

ヴィードルも、慈善事業をしたいわけじゃないから、少年に何も

ここまでしなくていいとは思っていたりするのだが、それでも自分は阿呆を放置してしまったという責任がある。アストリュクが連れて来たとはいえ、同行させたのはヴィードルだったようなもの。金銭的問題は、そう簡単に見ていいものではないとはいえ、子どもに心配されるような事柄ではない。

「じゃあオレも勝手に払うんで」

「君は意外に義理堅いね」

「貸し借りなしにしたいだけっす」

呆れたようにヴィードルは頬を持ち上げた。それを了承と取っていいのだろう。最初から、ヴィードルに何と言われようとも、レフはこの宿なりどこか別のところなりで金を稼ぐつもりだった。どうせ二度と訪れないからと、盗みに走ってもよかったのだが、実はレフはそうスリが上手いわけでもない。初めてシュガーローゼと会った時も、うっかり見つかってしまい逃げ出したところだったのだから。しかも、チェルヴォと違い地の利がないレフには、逃亡の際の危険も伴い、もし誰かに見つかってしまい最終的にはヴィードルのところに話が持ってこられるという可能性も少なくない。時間もそうないのだから、安全策に走る必要はないのかもしれないが、レフは片っ端から犯罪に手を染めたいわけではないのだ。

ふいに、視線を感じる。少年がその出所を探すとすぐに見つかった。シュガーローゼだ。アクアマリンの瞳に感情ものせず、ただじっとこちらを見ている。こんな事今までになかったので、レフは戸惑った。自分は、何かおかしな事を言っただろうか。顔にソースでもついているのか。

「な、なんだよ？」

さっとシュガーローゼは顔をそむけた。まるでそうしてしまった自分を恥じているみたいに。「別に……」なんでもなさそうに、しかし内心では違う事を思っていそうな声だった。

気になりはしたが、レフはヴィードルに宣言したようにどこかで小金を稼いでこなければならない。宿場町にだって滞在する時間は

短いだろう。のんびりしている暇はない。
　少女の事は後にして、ひとまずは借金返済のために働かねば。少年は、食堂で皿洗いでもさせてもらえないかと問うために店員を探した。

95　四人旅3

驚いた。シュガーローゼはそれを耳にした時に、心底驚いたのだ。

レフは、ヴィードルに作った借りをまっとうな方法で返す、と言ったのだ。まるでそれが当然の事であるかのように。いや、普通の事なのだろう。きちんと整った人生を歩いてきたものにとっては。

しかし、レフはいくら肯定的に見ても、そうは見えなかった。どこかで盗んできた金を実は持ってましたと言って差し出してもおかしくない、シュガーローゼはそう思っていた。レフは、どこか自分と似た道を歩み、ほんの少しだけ自分に似たところがあると思っていたのだから。それが、あの宣言。

シュガーローゼは考えもしなかったそれだ。衝撃を受けた。誰もそうは言ってないが、シュガーローゼも同じく、自分の手で稼いだ金でヴィードルに返金をせねばならないはず、そう突きつけられた気がした。これまでずっと一人で生きてきたから、お金の問題など、ほとんど彼女の中には存在しなかった。だからだろうか、ヴィードルに食事を与えられて、その財源がシュガーローゼなんかにはないという事を、知らないでいた。まるで無知な子どものように、親の保護下にいるのが当然という顔をしていたのだ。

自分を、恥じるべきなのだ。

ここでは自分は“死神”ではないものとして扱われているようなところがある。それはまるで人のように思われているという事。それは、あまりにも楽観視しているとはいえ、ほとんど真実に近い。アストリュクはともかく、いや、レフも問題があるが、四人の中で一番真っ当でリーダーらしい行動を取れるのヴィードルは、少なくともシュガーローゼを人と見なしている。

であれば、人として当然、その好意に報いるべきなのだ。何もかも諦めて、人である自分を信じられなくなったシュガーローゼ。それでも、向けられたものが敵意でないからと相手を信用する事は出

来ない。それが彼女なのだ。

ただし、残り少ない“人間らしさ”は告げている。自分も、レフのようにするべきだと。お金は、きちんと自分の手で働いて稼いだ金で返済しなければならないのだと。それが、人のする事だと。

ひどく難しい事だ。相手を信用したと宣言すると同じ。だが、どうしても胸のつかえは取れなかった。むしろ、そんな自分に恥ずかしく思うと同時に、むなしくなったのだ。その上に、ひどく叫び出したい気分。小さくなって、消えてしまいたい。ずっと、普段から思っていた事でもあるのに、今は違った。この世界から消えてしまいたいのではない。ヴィードルという人間の前から消えてしまいたかった。彼の手をわずらわせてしまった事を謝りたかった。他人の金で食事をしてしまった事を、後悔すべきだった。

自分は、なんて、なんて恩知らずなんだろう。

たった一人で生きてきたはずが、こんな他人の世話になって。そう思えど、それでも。

シュガーローゼの頭の中はごちゃごちゃとしてきた。

今更、何だ。

何を人間ぶろうとしている？　無理に決まっているじゃないか。働く？　そんな事。雇い主をそうと認める事すら彼女には出来まい。他人と接するのなど、嫌悪感を覚えずにはいられないし、接客業じゃなくたって、どうしたって「働かせてください」という相手には対応しなければならない。こちらから話をきちんと筋立てて説明しなければならない。そんな事をするのは嫌だった。気持ちが悪い。自分から他人に話しかける、などと。

無理なのだ。シュガーローゼはもう、世界を拒絶するように出来てしまっている。もう、あの三人は拒絶しても入り込んでこようとするのだから、諦めてはいるが、自分から新しい場所へ飛び込むなどと、彼女には出来ない。どこかの輪の中に居る自分なんて想像出来ないし、したくもない。吐き気がする。そんな事をするくらいなら、ヴィードルの義務感からくる優しさに甘えた方がましだ。

――本当に、それでいいの？

また誰かがささやく。いいに決まっている。出来ない事は出来ないのだ。そもそも、レフが口にするまではそんな事、考えもしなかった。レフが同行しなければ、きっとシュガーローゼは今みたいな気持ちに襲われる事もなかっただろう。だから、聞かなかった事にすればいいのだ。

そう、何も。いつものように。耳をふさいで。自分はこの世に存在しないものだと見なす。

見なければいい。ずっとしてきた事。ただずっと、ひどく重い胸と自分を恥じる気持ちとつきあわねばならないだけ。

このままでよいはずがないのに、考えたくないのだから。仕方がない。ただ、いつかは何とかしなくちゃならない。そう、いつか、それだけは覚えておけばいい。

シュガーローゼは全てを考えないようにと努力した。それは無駄な事だったが、一度棚上げすると、意外にも気分は落ち着いた。大した落ち着きでもなく、むなしい思いは消える事なくまとわりついたままだったが。

† † †

翌日、昼前に一行はその宿場町を後にした。本来ならば朝のうちに旅に出たかったのだが、レフが町で働いていたために出立の時刻は延期された。

そしてその日は野宿をする事になる。季節は春に近づいていて、ひどい冷え込みはもう身をひそめていた。ここ数日は、昼もなかなかによい天気が続いていたので、雪も降らない地域では、春先でもなんとか外で過ごせそうだった。

野宿、シュガーローゼもシェーン王国を放浪してきた身だ。経験済みの事ではある。しかし、宿をとった時とは違い一人部屋が与えられるわけでもない。

何しろ、野宿とあれば固まって眠った方がよいのだから、シュガーローゼは三人もの他人と寝室を共にするのと同じ事。おののく行為だった。男女がうんぬんというのではない、相手が女三人であったとしても、シュガーローゼは嫌がっただろう。

四人は、焚き火を中心に丸くなるようにして座っていた。イブー街道が帝都まで続いているとはいえ、そこにすべて宿や小屋を建てるわけにはいかない。そして、背後には森の広がる場所で、しかし街道からはそう距離をとってない場所で、彼らは野宿をする事にしたのだ。

これは、余計な事をして行程を遅らせたレフに責がある。ほとんど無意識のうちにシュガーローゼは諸悪の根源を睨み据えた。相手は、何故自分がそのような態度をとられなければいけないのか理解していないようだった。

「こちらで火の番はするから、朝まで眠っているといい」

その晩の食事は、携帯可能なパンとチーズだったのだが、それでもやはり、ちゃんとした食生活が続けられていた。また、シュガーローゼの罪悪感は広まる。チーズだけ口にして、パンはしまっておく事にした。食欲がないだけでなく、いつかのためにとっておこうと決めたのだ。

「オレも起きてますよ」

自分が有能な人材だと主張するかのように、レフは提案したが却下された。「この旅はまだ続く。休める時に休んでおいてもらわないとこちらが困る」などとヴィードルに告げられて。納得などいってない顔でレフは反論をいくつかしたが、結局は引き下がった。

そういえば、レフの魔獣に対して何か対策を講じなくてはいけないのでは、と気がついた。レフは、あの魔獣を全て従えるようになどはなっていない。レフはどこか広い場所に行きたかったが、夜も更けたとヴィードルが睡眠を促すので渋々ながら横になった。

シュガーローゼは火の元とはかなり離れた場所に横たわっていた。自分以外の人間がいる場所での睡眠。久しくしてない事だと思い、しかしごく最近船上で捕虜となってからもあった事だと思い直した。あれは、誰かと寝室を共有したというものではなく、牢屋に近いものだった上、状況が状況だったので、他者と同じ空間で眠っているという自覚などなかった。そもそも船酔いで周囲に気を配る余裕もなかった。

だから、あれは勘定に入れないとすれば、やはり久しぶりの事だった。

なんでこんな事になったのだろう。帝都を目指して何になる。流されているだけじゃだめだと思った。シュガーローゼは、諦めるのに慣れすぎていた。だからこそ、なんとかやってこれた事もあるのだけれど、もうそれにも疲れた。抵抗する事こそ力と意欲のいる作業だが、このままではいられないという思いはあったのだ。

帝都に行く。それは、百歩譲ってまだいいだろう。だが、その先はシュガーローゼで決めさせてもらおう。もしかしたら、本当に帝都には何か、彼女にとって都合のよいものがあるのかもしれない。ないかもしれない。それでも、自分で決めようと思った。それしか出来ないから。

96　寄り道

翌日は久しぶりの野宿で皆がなんとなく疲れの取れない顔をしていた。いささかゆっくりした動きで支度をして、火を消すと、誰が言うでもなく歩き出した。たぶん、朝の冷え込みがこたえたのだろう。そうでなくとも、やはりまだ寒い季節だ。誰もが無意識に、早くに体を動かして、熱を作り出そうとしていた。

とりあえず、無事に夜を明かせたのでよしとしようと、リーダーじみた行為を強いられるヴィードルは見なした。

道中、アストリュクが一人何か言い出すのはもう決まった事で、慣れていたもののヴィードルは突然の発言に目を見張った。

「この西に、村があるようだ」

道しるべがあったのだが、それをそっくりそのまま読んだだけの彼ではないはずだ。当然、次に出るのは、行ってみなければいけないというような内容。イブー街道はまっすぐにしか伸びておらず、西に逸れるとその街道の名前はもう、帝都にまで続いている街道の名前ではなくなる。要は、たどっても帝都には着けない道が存在する、分かれ道にさしかかったのだ。当然、彼らの目指すところはミリヤール帝国の都ヴァンクール、そんな分かれ道は瑣末なもの、分かれ道だと見なすほどもない存在のはずだった。

「何かあるな」

「村だろ。村があるっていう標識があるんだからなかったら標識が間違いって事になる。ちなみに気づいてないかもしれないが、帝都は東だぞ」

「村ではない。何か……力が行使された名残が見えるような気がする」

憶測でものをいうな。ヴィードルはアストリュクの語尾が気に入らなかったが、その内容は問題視すべきだと知った。

「力ってなんだ」

「おそらくは、魔術の類（たぐい）」
黙考したヴィードルは、自分に下された密命について、この男の発言と重なるところがあるのではないかと照らし合わせていたのだ。シェーン国王は帝国の魔術の扱われ方にも興味を持っていたようだ。それに、どうやら帝国の大小様々な場所に立ち寄ってみてくれ、と言いたかったらしい。行きは大分省略して移動してしまったから、ヴィードルはここでもっとよく他所を見ておくべきかと判断した。しかしあまりにも遠いのであれば、考え直す必要がある。地図を広げた。
「……意外に近いな」
「お前は来なくてもいいぞ」
軽くあしらうようなアストリュクの様子がヴィードルには苛立たしい。
「君たち二人には、無理強いはしないが？」
業腹な友人もどき――最近はアストリュクを友人だと思いたくなくなってきた――を無視して、ヴィードルは同行の残る二人に声をかける。突然でもないのに、レフはびっくりしたような顔をしたが、それでもすぐに落ち着いた顔になると答えた。
「オレも行く」
「じゃあ、申し訳ないが、全員で動くしかないな」
シュガーローゼにはあえて君も来てほしい、とか行くか？　とも言わなかった。彼女一人を残していくのは危険だろうから、そんな可能性はないのだ。はあ、と分かりやすくため息をついた少女に、男たちのうち二人はびくりと反応を見せた。これまでにずっと唯々諾々と追随してきたシュガーローゼが見せる、はじめての反応だったからだ。とはいえ嘆息してもおかしくないだろうし、どうしてこれまでしてこなかったのか、不思議なくらいだ。だが、こうしてはっきりと自分の感情を表にしてしまえというくらいに、シュガーローゼは疲れているかうんざりしているのだろう。ヴィードルは情けないような、苦笑したような、困ったような、苛立ったような微妙

で奇妙な顔を浮かべた。
「……とっとと、進むか」
ならばせめて手早く済ませるまで。そう決めるとヴィードルは既に歩きはじめている友人もどきを追いかけた。

その村の全貌が見えるよりも早く、その片鱗は見えていた。景色の奥が黒かった。どんどんと近づくにつれ、それが何かを判断出来たが、かつて何であったかは、分からなかった。
四人は、かつては村だったであろう場所にたどり着いた。徒歩で一時間とかからなかっただろう。それでも、イブー街道を少し逸れた場所に、そんな光景が広がっているなんて誰も予想しなかった。何と表現したらよいのか。そこで人が営みを続けていたなどと信じられないような、炭の塊が転がるだけの空間だった。
「……何があったんだ」
家の形をした炭があった。可燃性のものは全て黒い炭に、そうでなくとも焦げた跡、石造りの井戸でさえ煤けて真っ黒だった。屋根は落ち、壁も崩れた家屋の中はむき出していたが、その中にはまともに残ったものはなく、ほとんど燃えカスと化していた。家々に火を着け、全て村を火事にさせた。そんな跡があった。
一人歩き回るアストリュクは別として、三人は呆然としてそれ以上村だった場所にたち入れないでいた。あまりにもひどすぎたのだ。
「なんだよこれ」
少年の脳裏に広がるは、過去の思い出したくもない記憶。忘れたい、しかし忘れてはいけない復讐のための大事な記憶。それは、まるで自分の村にされたものとそっくりだった。
「なんなんだよ、これ……！」
一家郎党皆殺し。そんな名残だった。村は、あきらかに人の手によって壊滅させられ、炭へと変えられていた。燃えさしの煤けたよ

うなにおいが彼らの周りにただよった。
まさか。まさか、レフの殺すべき相手が、他の村にもこれを？
これは、あの男のせいなのではないか？　体の真ん中が、熱くなる。背中にしまった“魔導の書”までもが熱を帯びたかのように感じた。
「……疫病かもしれない。火で清めるんだ。病が、広まらぬように」
ぼそぼそとヴィードルは自分の中の知識をたどって口にしたが、それにしてもひどすぎた。
「近年ではすっかり成りを潜めたが、猛威を振るう疫病に、どうしようもなくて村を捨てるんだ」
そう、村人たちは仕方がなしに、我が身を守るために他の場所へと移動して、村を焼き捨てる。そういう事もあったのだ。可能性としては充分有り得る。でなければ、かつてここにあった村は誰か絶対的な軍事力を持った人間によって、焼き払われたのだ。敵国に攻め込むかのように。
「でも、おかしいよ」
何がどうとは言えなかったが、シュガーローゼは思わずこぼしていた。こんな事、たとえ病が蔓延していたのだとしても、奇妙だった。
「そうだ、どんな理由があったって……ていうか、理由なんか関係ない」
どうせ分かりはしないのだ。こんなむごい事がまかり通るなんて。レフは、自分の故郷とこの村を重ねていた。とてもじゃないが、まっとうな理由なんて考えられないし、あったとしてそんなものは理由でもなんでもない、意味のないものだ。
「知りたくないのか？　こうなった所以（ゆえん）を」
少年は顔をしかめた。アストリュクにはいつだって、目の前の人間の顔をしかめさせる独特の雰囲気があったが、この時ばかりは顔色一つ変えずに焼け残った村を見る男が厭わしかった。
「まあ……理由は必要ないかもしれん。だが、知っていて物事を見るのと知らずに見るのとでは大分違うぞ？」

「当たり前だろ」
「では、何故真実を軽んじる？　知りたいとは思わないのか、人間にここまでさせる謂れを」
　たとえ、知ったとして何になるだろう。レフも、シュガーローゼも同じ事を思った。
　村が焼かれて消えた。もしかしたら、そのうち地図にも書かれなくなるかもしれない。それは、変わらない事実だ。理由を知ったとして、変わる事もない。それに、知識があって物事を見るのとそうでないのは異なる、なんて当たり前すぎるし、今は関係がないように思われた。
「何も知らなくても生きていける。それも道理だ。一匹の犬が死んだとしよう。その原因が、何であるかを知っていると知ってないのでは大違い。何故なら、その犬は一人の男によって幾度となく殴打の末に嬲り殺されたからだ。この理由を知らなければ、犬はただ死んだだけに見えるだろう。しかし、きちんと理由を知っていれば、次は犬じゃなくて人間を撲殺しようとしているかもしれない、犯罪者予備軍が存在すると理解し、自分の身を守る必要性を覚える。これが、大きな違いだ。お前たちの言う、理由を知るというのはどうでもいい事なのか？　明日はその男に殺されるかもしれないというのに？」
　分かるような、分からないような話だった。確かにアストリュクの言う通りだとすれば、無知のままでいいと判断したゆえに死ぬ可能性だってある、という事なのだろうが、それと今の話がどうつながるのか。シュガーローゼたちは、一つの村が焼けてなくなったのは何故かと議論し、原因を徹底的に突き詰めなければならないとでも言うのだろうか。
「じゃあ、真実を……こうなった理由を探し出せばいい、って言いたいんですか」
　思い出したから付け加えたみたいなレフの敬語。それでも、長い前髪の隙間から見える目は鋭かった。彼は、今この場所が粛清され

た自分の村のように感じていたのだ。
　理由なんて、こうなる原因なんて考えて探し出して、一体何になるというのか。事実は変わる事などないのだ、それこそ意味がない。結果が変わるような理由であれば探そう。そうでないなら、一体、何の意味があるのだ。次を防ぐために？　それこそ、意味のない事だ。レフの“次”など存在しないのだから。それこそ、たとえば時間を過去に遡って、これこれこういう理由があってレフの村は消えてなくなってしまうから、よく注意しろと教えにでもいかない限り、無意味に終わる。
「出来るならそうすべきだ」
「なんで。結果は変わらないし、無意味だ」
　少年は自分の中にただよういくつかの言葉をぶつけた。それはもっともらしい一つの真実だった。たとえどんな謂れがあろうとも、変わる事のない結果というものは、確かに存在する。
「だが、知りたいという心に歯止めはきかせられまい？　見て見ぬ振りをした方が楽だから、人は往々にしてそうする傾向にあるがな」
　シュガーローゼだって、自分がどうして死神みたいな力を得てしまったのか、分からないままでいるけれど、“死神のキス”は変わらず人の命を奪い続ける事が出来る。
　きっと意味なんかないのだと思おうとした。たとえば体はほぼ人間のものであるはず、という事も事実だけれど。きっとシュガーローゼは人ではないのだ。それだけが一つの結果で、変わる事のない真実。
　だけれども。もし、理由が分かったなら。変わらなくても、物事の始めに何があったのかを知る事が出来たら。たとえシュガーローゼの唇は死神のもののままでも、もしかしたら、何か変わるのかもしれない。見方が少しは違うものとなるのかもしれない。それはある種の希望のようなもので、抱くまいと決めた少女には、自分の事でも望めないようになっていた。だから、見ないようにしてきた。
この帝都までの旅の最初に提案された、アストリュクの言葉に惹か

れたのも、つい振り返ってしまったからなのだ。
そうだ。シュガーローゼは、ずっと見えない、聞こえない、何も出来ないふりをしてきたけれど、出来る事なら、きっと。
「……知りたい」
この村の事だって、どうしてこんな事になったのか。自分の事、だって。
本当は、ずっとずっと、知りたかった。それは望みにも似たから、封印していた。彼女は忘れるのには成功していたはずだったのに。
きっと好奇心は、他の何よりも押さえがたいものなのかもしれない。世に野次馬の多い事が、それを証明している。
知りたい。
思ってしまえば、抑えるのは難しい。まるで何かに恋焦がれるように、胸がしめつけられて切なさにも似た思いにかられる。届かないものを臨むというよりも、手を伸ばしたくて仕方がない。無理だとかじゃない、そうしたい。知りたい。
自分に起きた事が、自分の事がもっとちゃんと、きちんと知りたい。たとえたどり着く事が出来なくても、きっと、前よりもっと、近づけるなら。
口にしてしまったからか、シュガーローゼを見つめる六つの目があるのに気づいた。はっとなった少女は、恥ずかしくなって顔をそむけた。変な事を言うんじゃなかった。消してしまいたいそれではあったが、真実だった。
ヴィードルは、さほど彼女を気にしていなかったが、アストリュクはうっそりと笑み、レフは不満そうに顔をしかめた。
いつの間にか、夕方が迫っていた。日が沈むのも随分と遅くなってきた、ゆっくりと訪れる暖色の空。影が濃くなる中で、彼らは再びイブー街道に戻る事にした。

97　帝国御家事情

思った途端に、あの物知りを鼻にかけている男に聞きたい事が増えてしまった。彼は、どうやら魔術に詳しいし、魔術師のように見えるのだから、そういう世の中の普通というものを飛び越えた事象にも詳しそうなのだ。

だが、そんな事出来るはずもなかった。人にものを聞くのが、シュガーローゼは苦手だった。何しろ、自分の中でも整理がついていない言葉を、更に自分の事を知らない相手に提示して、きちんと理解してもらわねばならないのだ。まず、その自分の中の感情や情報を整理するのに非常な時間がかかる。むしろ、それに終始してしまう事だってある。そして、やっと音に出来たと思えば、相手は全く自分の言葉を理解していない、むしろ聞こえていないという事が多々ある。もう一度、と試みるけれど、相手の、自分の事を表現出来ない者を見る目が威圧的に、軽蔑的に見えてしまい、言葉が尻すぼみになってしまうのだ。きちんと発音して、繰り返したとしても伝えなければならないというのに、尻込みする。

普通の人間に対してだってやりにくい事を、あのいかにも一筋縄じゃいきませんと顔に書いてある男なら、尚更やりにくい。

だから、いずれしてみたいけれど今しばらくは無理な事のリストの中に書き加えるだけとなってしまった。

いいのだ。どうせ、上手く伝えられない上に相手があれなのだ。シュガーローゼは、帝都に行ったら自分の力で真実を探そうと決めた。誰にも頼れないのなら、やりたくないけれど自分でやるしかない。きっと、帝都には図書館があるだろうから、そこに行けばいいのだ。ただ、シュガーローゼは読み書きがいくらか出来るものの、読みはあまり得意ではなかった。あの大嘘付きの言う事も、たまには聞いておけばよかった。

――書物だけ、というのは感心しないがね。本は、人を豊かにさせ

てくれる
　意味なんか全く分からないけれど、シュガーローゼはふいに思い出した。あれは、本を読んでおけば、知識が豊かになるというだけではないのだろう。そこは分かるが、それだけだった。
　嫌な人間の事を思い出して、シュガーローゼは胸が重くなった。苛立ちもした。それでも、最近はこれまでと比べるとかつてないほど大勢の人間と関わりを持ってしまっている。そのせいだろうか、あの大嘘付きが少し遠くなったのは。
　また、ため息が出そうだった。あの嘘付きは死んだ。それだけは確かだ。きっと、人の死が彼女をそうさせるのだろう。ため息なんて。死ぬから、悪い、あんな人間。

「帝都は今、どうなっているんだろうな」
「あと一日か二日で着く。自分の目で確かめろ」
　ただの会話の糸口だったというのに、アストリュクは切り捨てるようにばっさりいった。
　一行は、日が沈んでからしばし時間をかけて、一つの旅人用の小屋を見つけた。そこで彼らは休む事にして、携帯食で簡単な夕食を済ませた。
「お前に情緒は存在しないな。まあ期待しちゃいないが……そういう話じゃねえよ」
　別段、ヴィードルだって情緒的な返事を求めていたわけではないが、話が別な気がするのだ。ただ、帝都はどんな具合か、気になるといいたいだけなのだ。それから、ヴィードルは帝都に少なくとも一週間は滞在しなければならない。なんとか皇帝にも一方的にお目

にかかりたいというところ。それから、都の様子も知っておかねばならない。旅に出る前に調べてはあったが、アストリュクの方が帝都をよく知っている気がする。ものを問うなら一番アストリュクを避けたいところだが、口にしてはないがアストリュクは帝都に訪れた事があるのかもしれないのだ。

いい加減に会話のネタ切れなのだ。だから面倒ではあったが、ヴィードルはとりあえずの提案をしてみたのだ。

「なんだ、帝都の事情は込み入ってるんだったか？」

「今更王位継承権争いの話か」

それはヴィードルも知っていたが、続けさせる事にした。自分の見方だけでなく、他人の視点からも情報を耳にした方が視界も開ける。

「そうだな。あれは、いつの事だったか。まだ去年のはじめくらいだったな、皇太子マビューズを擁する――皇太子派とでも呼ぶべき一派が動き出したのは。今の皇太子は前皇帝の息子。順当に行けば、本来ならば皇太子マビューズが皇帝になるはずだった。だが、このマビューズは非常に病弱で床に張り付けになっていたから、とても皇帝にはなれないと見なされていたのだ」

「今の皇帝レオポルドは、皇太子マビューズの従兄弟にあたるか」

理解していた知識であったが、レフが気にした様子で彼らを見ていたので、ヴィードルはいくらか付け加えてやる。ただ、レフだってそれぐらいは知っていた。この場でミリヤール帝国の皇帝の名を知らないのは、シュガーローゼくらいだろう。

「皇帝レオポルドも特に継承者として問題はない身分であるはずなんだが、本来の母親の身分が低い人間だったという流言飛語が持ちあがった。それは、元よりあの宮殿に多くある下らぬ噂のうちの一つだったが、マビューズの容態が変化してから、真実味を増すようになった。マビューズは、到底二十まで生きられないと医者に宣告されながらも、生きながらえたどころか病状を回復させた。もしかしたら、とマビューズ派は欲を出したんだな」

その話は、レフにとってもいささか複雑だった。顔をしかめたところ、丁度瞼を閉じたばかりのシュガーローゼが目に入る。もしかして、あの少女は既にこの話題から離脱しようと決めたのだろうか。こっそりと、ほくそ笑むのは優越感からだろうか。それでもレフはいまいち大人たちの会話についていけてはいない。

どうやら皇帝と、皇太子がいて、皇太子を擁する宮殿の人間たちが、玉座の簒奪者になろうとしている、という事らしい。つまりは、今の皇帝はその椅子から蹴り落とされようとしているというのだろう。

「いつ死ぬかも分からない、皇太子マビューズ。それが生きていけると分かったら、政治にも世情にも疎い操りやすい人形と見なす事が出来るようになったのだ。便利だろう？　ずっと死にかけていた傀儡は、大臣たちが我が手では難しい為政を叶えさせる道具に変わった。やつらが色めきだつのも無理はない。何しろ、現皇帝レオポルドは政治家としては優等生じゃないからな、目障りだと決め付けるのに力を貸す。敵が多いんだ、レオポルドは」

「元々現皇帝は、敵が多い。そして皇太子は大臣連中にとって都合のよい傀儡になれる。それで、二つの勢力がお家騒動、か」

ミリヤール皇帝レオポルドが皇位についたのは、もう六年も前の話だ。本当に、今更ではあるが、とにかく、人の上に立つものはいつだって誰かを蹴落とそうとするものなのだろう。

「それが原因で、上層部は二つに割れている。きれいに真っ二つ、というわけにはいかないがな。帝国のほころびも、そこから生まれたものだろう」

「帝国も大変だな。まあ、うちに攻めてこなければ何でもいいが」

ヴィードルがこっそり自国の利益ばかりを優先する発言をする。シェーンもシェーンで問題はある。今の国王はあまり有能ではない。早くもっと優秀な人物が王位につけばいいのに。そうヴィードルは思っている。

「問題なんて、つつけばそれこそ山のように出てくるぞ。レジスタ

ンス≪ザッハヒカリテ≫も、最近ではシェーンに逃げたミリヤールの反乱軍だと言うぞ」

「……そうなのか？」

「まあ、まだ眉唾の域を出ないがな。聞いたか、ミリヤールの北方では民衆が武装蜂起したという。それが沈められた後、町の人気が明らかに減ったと。まるでレジスタンス集めのようではないか？」

顔の中心にしわを集めて、嘔吐した人間でも見る目でヴィードルは顔をしかめた。

この帝国はもしかするとこれから、争いやそれに近いものにまみれてしまうのではないか？　まるで何かを集めようとするかのごとく、争いの種が帝国へやってきているような気がする。気のせいであっても、一つだけ真実があるのなら、アストリュクという災厄を喜ぶ男が帝国に居るというのは、あまり喜ばしくない。

これまで、≪ザッハヒカリテ≫を名のるレジスタンスはシェーンのものだと思ってきたが、それは帝国から逃げてきただけだというのか。確かに、ミリヤールにも反乱分子の存在が見受けられるというのは知っていたが、なんともきな臭い話だ。

「そんな中でミリヤールの剣と呼ばれる男がいるのをご存知かな」

アストリュクの人を見下したような笑みは非常に楽しそうだった。まるで自身の無知を知らない子どもにそのままでいろとでも言いたげだ。鼻白みながらもヴィードルは友人に対応してやる。

「イジドール・エティエンヌ・ド・ヴォークセル。軍のトップだろ。仮にも似たような職業就いてた身だ。それぐらい知ってないでどうする」

「そう、その男だ。将軍であるイジドールはどうも武力行使が好きらしくてな、運がよければレジスタンスと帝国軍の抗争が見られるんじゃないか」

そんな運ならいらない。なんだかんだと事なかれ主義者でもあるヴィードルは、面倒くさそうに友人から顔をそむけた。

「将軍……」

少年のつぶやきはとても小さく、他人には聞き取れないものだったために、三人は黙殺した。

「ま、そんなもんだろう、基本情報は。まだあるがな、お前程度の頭なら記憶するよりも先に忘却に追われるだろう」

言いながらアストリュクも、友人が何をしたかったのかをきちんと把握していた。ヴィードルは、これから入る帝都ヴァンクールについて、少年少女二人に聞かせたかったのだ。だから人を使ってまで、弁舌たれたのだろう。アストリュクとしては脳にある膨大な量の情報から簡単に引き出せるそれを、ひょいと取り出しただけの単純な作業だったから構わないが、人使いの荒い男だと感じた。

「そんなわけで帝都では、気をつけろよ」

たとえ帝都で別れる事になろうとも、注意を怠るな。そう言いたげな様子だった。ヴィードルの口にしなかったそれが分かり、シュガーローゼでさえ彼を見上げた。レフが気がつくずっと前から、彼女はもう瞼を上げていたのだ。

この旅は、帝都に着いた瞬間に終わる。もしまた四人がそれぞれの動機で結集したとしても、その可能性は低いとしかいいようがない。だからきっと、ヴァンクールに着いたらこの四人はバラバラになるのだろう。元より、ヴィードルが言い出さなければ集まらなかった四人だ。

なんとはなしに、この四人の間にもうすぐ旅が終わるという共通認識が生まれていた。短くはない帝都への道行きの中で、四人がただ一度だけ同じ事を思った瞬間があった。

春が来る。そして、帝都にたどり着く。

それは、どちらも同じようなものだった。いつの間にかやってくる、季節の巡りと同じように。もうすぐ、そろそろとミリヤールの都がやってくるのだ。

それぞれ、彼らは帝都への思いをはせた。いずれ来る春に、いずれ来る帝都に。

９８　帝都ヴァンクール１（前書き）

帝国編、本格開始です！！

98　帝都ヴァンクール1

ミリヤール帝国の都ヴァンクールは、実のところ不便なところにあった。地面が陥没したところに、街があるといえばよいのか。しかし、皇帝とその忠実な臣下たちが住まうのは、くぼ地の中でも隆起した土地の上だ。淵の高さにまで地面に埋めたバケツの中に、円柱状の塊があるとでも思えばいい。その円柱の頂点に皇帝の住まい――ビジュー宮殿が立ち、眼下に迫る民草を見下ろしているというわけだ。

その城下町とでも呼ぶべき一般市民たちの街に行くには地面の下へとくだり、宮殿に行くには街からのぼらねばならない。もちろん、直接宮殿に向かう手立てはあるが、普通、一般人の宮殿の出入りは簡単には出来ない事もあってそちらはあまり利用されていない。

とにかく街は下、宮殿は上にあると思っていればいいのだが、ではその地面より下にある街へと行くにはどうしたらいいかというと、現地点と目的地の間に縄を通し、箱のような乗り場を使った、“シエルコルド”という乗り物を使うのだった。シエルコルドは、空中に縄をしいてそれを魔術で補強した索道のようなものだった。索道と違う点はただ一つ。魔術による介入のせいか、空中に張ったロープは箱状の運搬器とつながっていないように見える、というものだ。そもそもが空中にあるはずのロープは魔術による補強のため、ほとんど見えにくい半透明をしている。それからぶら下がっている運搬器とロープをつなげる媒体にいたっては、魔術を介してでなければ、まったく見えない。

まずヴァンクールに入る前から、帝国の魔術大国っぷりを見せつけられるような乗り物があるのだ。こんなものは、他の国のどこにもない。このシエルコルドはどこにでも行けるというわけではないが、大型小型の区別があり、たいていの名所にはこのシエルコルドでたどり着ける。ただしくぼ地の上ではもっと別な移動手段が活用

され、シエルコルドの主な利用者は帝都を出入りするものか、宮殿を行き来するものばかりである。ヴァンクールは既に言及したように、ほとんどバケツのような形をしているといっていいので、上空から見れば円形に近い。そのため、放射状にシエルコルドのロープは広がっている。

地面に埋まったバケツの中をのぞきこむ。たとえとしては分かりやすいが、それでも眼下に広がった世界は、とてつもなく大きい巨人のためのバケツのようで、たとえには充分ではないように思われた。

半透明のシエルコルドのロープがプリズムのように様々な色の透き通った光を乱反射させている。それだけでも、美しいと感じられるが、帝都というのは町並みから、宮殿からして美しいものだった。街はきれいにではないが、いくらか区画整理されており、一部の家屋が魔術による干渉から、いくらか輝きを放っている。通りを動くのは、見も知らぬ四角い箱。遠くてまだよく見えないが、人々の服装のきらびやかな事。

何にも増して素晴らしいのが、国の頂点におわす人間の住む、ビジュー宮殿だ。宝石（ビジュー）の名にふさわしく、円蓋は光を反射させる素材でルビー色に光っている。外壁は淡い黄色だが、どこか黄金を思わせる。この宮殿でも、どこかから魔術による淡い光がちらちらとゆらめいているのが見受けられる。

「このシエルコルドはどんな人間であっても使用は無料（タダ）だ。よかったな万年金欠男」

「別に金欠じゃねえ」

舌打ちでもしたいようなヴィードルに、シュガーローゼは気がついた事があった。

帝都に着くのは想像していたよりも早く、彼女がいつかヴィードルに借りた形になったお金を返さなければならないという事を忘れかけていた。それを、もうすぐ別行動をとりそうな雰囲気のある男に、どう切り出したらよいのだ？　所持金などないのに、シュガー

ローゼは帝都で働こうとは思っていたが、それを実際に行動にうつすかどうかも分からないのだ。踏み入れる前の帝都には魅了され、圧倒させられたが、それでも人の間に入って生きるのは難しい。少女の顔は常にも増して曇った。

「ひとまず、街におりるか」

一応ヴィードルは一声かける。それから、シエルコルドを安全に運行する係りの人間の元へと向かう。

行ってしまったと、唯一の機会のように思えた瞬間をシュガーローゼは完全に逃してしまった。うつむきながらいると、少年の足が意外にも近くにある事を知った。顔も上げないでいると、あちらの方から用件を言ってきた。

「お前、帝都でどうすんの」

どうするか、ではない。どうしたいかは決まっている。だが、きっとあのアストリュクという男がまた余計な口を挟んでくるに違いないのだ。その時に、またシュガーローゼの意思は関係なくなるのだろう。逃げ出してしまいたいが、それは可能なのだろうか。だが、港湾都市に降り立った時よりも強く、他人からは遠ざかりたいと願うようになった。帝都は、確かに人が多くてシュガーローゼには恐ろしい場所かもしれない。簡単に人を殺せる身には、危険過ぎる場所だ。だが、一種、新天地の作り出す新しい生活の魅力というものがある。もしかすると、シュガーローゼはやり直せるのかもしれない。その中で、“死神”である事についての文献を探すのだ。無理な、儚い願いだと知りながらも、つい思い描いてしまった。

「どうせ行くとこないんなら、オレとどっか同じところで働かないか？」

レフは、シュガーローゼを復讐の道具と見なしていた。彼女につきまとうのは、当然の成り行きなのだろう。しかめた顔を向けると、相手は何かを弁明するかのように両手を振った。

「あー、違う。別にオレの事情はさて置きだな、なんつーかその、お前、一文無しなの気にしてたんじゃないのか」

言い当てられた事がひどく嫌で、自分はそんなにも分かりやすい顔をしていたのだろうかとシュガーローゼは気に病みはじめた。というより、レフなんかに脳内を透視されるくらいだったら世の中全てお見通しの勢いのアストリュクに言い当てられた方がまだましだ。そんな少女の脳内が分かったのではないだろうが、レフは慌てて付け加えた。

「違うんならいいけど、オレがそうだったから、ヴィードルさんに悪いとか思ってんのかな、って」

しばし少女は言葉を捜した。だが用意したどれも使わずに顔をそむけた。

「あっそ。たとえそうだとしても、あんたと同じ職場なんて死んでもごめん」

頬を引きつらせた少年が、何を言われたのか知らないヴィードルは「準備が出来たそうだ」とそれぞれにたむろする三人を呼び寄せた。

土に埋まったバケツの中、その街と宮殿こそがヴァンクールではあるが、領地としては彼らが今立っている、シエルコルド乗り場もまたヴァンクール内であった。とはいえ人々は、バケツの中こそが都だとよく知っている。

「ヴァンクールを、楽しんでこいよ」

いらっしゃいとはまだ歓迎しないのだ。帝国へようこそ、とは言ったものの、シエルコルド運営員はそう言って旅人を送り出した。

シエルコルドの移動速度は、シュガーローゼが想像していたよりもずっと速かった。そのロープがほぼ見えない事を思えば、驚くほどだった。言葉もないレフは、周囲に自分が高所恐怖症だと判明した事を必死になって隠そうとしていた。アストリュクは慣れたもので、平然としているのだから、ヴィードルはなんとなくそれが気に

入らないために眉根を寄せていた。

ぐんぐんと、近づく町並み。帝国の中心地。都、宝石の宮殿。それらがぐっと視界に迫ってきて、やっとシュガーローゼは異国の都に居るのだと実感した。わけもなく胸がどきどきする。それは、不安や焦燥にも似た心臓の動揺でもあったが、確かに、新しい何かに触れる事の楽しさを思い出すかのような鼓動だった。ずっと楽しい事なんて思わないできたのに。問題は山積みなのに。この時だけは、シュガーローゼは全てを忘れた。

上を向けば春先の青い空は遠くなり、バケツの淵のような地面が遠ざかっていくのが分かる。あの場所に立っていたなんて信じられないくらいに遠く。半分空色に染まったような透明なロープが白っぽい光を跳ね返す。

真昼の月が猫の爪のような形をして空に浮かんでいるのを見て、シュガーローゼは息をのんだ。真っ白で、それでいて透き通っていて、太陽よりもまぶしくないはずなのに、輝いて見える。シュガーローゼは知らなかった。昼の月が、あんなにもきれいだなんて。新しくきれいなものに囲まれて、月まできれいに見えただけなのだろうか。それでも、今まで気にかけた事のなかった昼の白い月を、確かに彼女は感じていた。あんな素敵なものが、昼の空にはあったのかと。

呆けている間に、シエルコルドは都の人にとっての“地上”にたどり着いた。くぼ地の底、底辺だ。それでもそこが地下にほど近い場所だというのに、素晴らしい場所だと告げるのには充分すぎる光景が広がっていた。

カンカン、と高い音を発しながら方形の物体が動いている。それは、横に長い箱を縦にして、車輪もないのにまるでそれが存在するかのように移動しているのだ。その箱の中には人が数人おり、そうする事が当然という顔で物憂げに外の景色を眺めている。馬と車輪のない馬車のようだと、シュガーローゼは思った。よく目をこらせば、こちらもまたシエルコルドのように半透明のロープが空に渡さ

れ、それに沿うように移動しているのが分かるだろう。シュガーローゼがこれをパクレットという名の乗り物と知るには、少し時間がかかる。パクレットは遠ざかるにつれ警告のような音を小さくしていった。

あれも、魔術で動いているのだろうか。見た事もない乗り物が視界に迫ってきたせいだろう、シュガーローゼの心臓はばくばくと、緊張したかのように稼動した。

ミリヤールの都は、活気に満ちているというよりも人が多い。そして、シェーン王都よりも建物が高く広場も、広い。これだけ広い場所があるのだからといわんばかりに、人々はあちこちへと徘徊しているのだ。とはいえ遊んでいるというのではないだろう、何かに追われるように足早に移動するものもいる。また、軽食をたしなんでいるのだろう、飲食店のテラス席でのんびりと腰掛けるものもいる。

人の声に、また違うパクレットの近づく音、日常のにぎやかな音に加えて、どこかから時折大きな騒音がするのを耳にし、シュガーローゼは首を回した。彼女の目には、あまりにも高くそびえ立つ険しい崖と、それに追いつこうかとするかのごとき巨大な建築物が飛び込んできた。前者は、まだ遠く離れているから全貌がつかめないものの、おそらくは昇った先にはビジュー宮があるのだろうと、街の中心だと推測される。そして後者は多く足場が組み立てられているのを見るかぎり、現在建築中の建物だろう。あまりにも大きく背の高い様から、大聖堂だと考えられる。今ですら他の建築物をしのぐ高さだというのに、まだ伸ばそうというのか。それとも、ヴァンクールという名の都はシュガーローゼの考えるそれとは規模が違うというだけなのだろうか。

当初は、人の行き来するシエルコルドの昇降場所にいただけだったが、シュガーローゼはいつの間にかもっと違う場所へと来ていた。帝都の顔ともいうべき、エシェック広場とエシェック聖堂のある場所だ。どれだけの素晴らしい宮殿が建とうとも、そこへ行き来する

人間以外にとっての街の中心はいつだって広場と礼拝堂だ。
そこを東に進むと、商店がずらりとならぶ商店通りが続く。反対に西へと進むと、シェーンにもあったような、貴族たちの住む地区へとつながっている。帝都は広く、道が複雑に入り組んでいる。そのためにヴァンクールに住む人間でも迷子になる事が多々ある。それほどまでに人と土地が多いのだ。
全てが目新しい、というわけではないがシュガーローゼはあちこちに目を移すうちに気づいた。不本意ながらの同行者の姿を見失った。そして、シエルコルドで降り立った場所から随分と離れてしまい、地理も知らない帝都の中で、自分の現在地が全く分からなくなってしまった。一言で片付けるとすれば——迷子だった。

99　帝都ヴァンクール2

音が多いのだ。人も多い。目になじまぬ色彩と、服装。それから、ミリヤールなまりのある言葉。いや、この場ではシュガーローゼの方がシェーンなまりがあると思われるのだろう。

全く見知らぬ、彼女の理屈が通らぬ世界に連れてこられたのではない。だが、ミリヤール帝国にまで来たのは、彼女の本意ではなかった。誰の目にもさらされない、今。シュガーローゼは自由になれたといっていいはずだった。

（そっか。もう、帝都に着いたんだ）

レフはともかくとして、ヴィードルなどは帝都につくまでは行動を共にしてそれ以降は別々に行動しよう、とでも考えているようなところがあった。だからというのも変ではあるが、当然の結果なのだろう。

むしろ、これはシュガーローゼにとって幸運であると考えるべきなのだ。ミリヤール帝国に着いて、奴隷として売られた時、アストリュクに買われるという形で拘束された時、少なからず面倒を見るから同行してくれと告げられた時とは、違うのだ。誰も彼女に目を配っていない。追いかけてもこない。きっと、シュガーローゼがいなくなった事にも気づいてないだろう。ヴァンクールの人間は、異邦人など慣れきったようで見向きもしない。いても、いなくても、同じ存在。それがシュガーローゼ。死神の能力が知れる前の彼女は、いつもそんなだった。いつも通りに戻ったのだ。

あまりにも呆気なく、“彼女の日常”が戻ってきた。かえって拍子抜けし、不安なくらいだ。こんなにも簡単に、他人とのかかわりがなくなるなんて。

だが、これでよかったのだ。どうするというあてなどないが、シュガーローゼは、自分が思った事まで忘れるつもりはなかった。たきつけられたような気がしないでもないが、シュガーローゼは、自

身の唇に宿る不思議な力の理由を知りたい。その謎を、解きたい。無理だと分かっていてするのは、あまりにもおかしな事。それでも、一度思ってしまえば目がそらせなくなってしまったのだ。遠くてきっと届かないだろうが、まずは、一歩を踏み出すのだと。

シュガーローゼは、いくらか読み書きが出来る。誰かに教わる事はない。であれば、本がたくさん集められているという図書館、に行くべきなのだろう。しかし、彼女はその場所を知らない。だがこのヴァンクールの都にはこれだけ人が集まっているのだ、きっと立派な図書館があるのだろう。一度も訪れた事のない、知識としてだけ知っている場所。それは、この広すぎる都のどこに存在するのだろうか。

図書館の仕組みなど知らない。帝都の内部構造など、もっと知らない。だがシュガーローゼは、まるで足を一秒として同じ場所に置いたままにしてはならない、とでも命じられたかのように歩き出した。

帝都の日が暮れる。昼間見た月が、うっすらと輝き出したのが見える。シュガーローゼは、かつての同行者にも見つけられる事なく歩き回っていた。目指す図書館は、見つからないまま。

さすがに、歩き続けていた疲れが両肩にのしかかってきた。ヴァンクールに来るまでに、徒歩で移動して日の出ている間はほとんど歩いていたというのに、シュガーローゼは疲れていた。あれでも、いくらか休憩をしたし、大人たちは歩幅の狭い少年少女に合わせてくれていた。そして、携帯食ではあるが食事もきちんと摂った。今、シュガーローゼはそれらを持たない。ただひたすら足を動かし、広

大な帝都をさまよい続けた。その結果が、疲れた足、空腹を手に入れた。

シュガーローゼは食欲というものを持たない、そして食事をして美味しいとも思わなくなっていたのに加え、空腹感に慣れきってしまっていた。というのに、ここ最近のヴィードルの積極的な配給によって、すぐに空腹を覚えるようになってしまったらしい。忌々しい腹だ、と思いながらも身体は正直なもので、無意識のうちにシュガーローゼは一軒の飲食店の前に来てしまっていた。お金なんて、持っていないというのに。

それは甘美な誘惑だった。ガーリックの香ばしいかおり、そして肉の焼けるにおい。空っぽの胃にはあまりにも意地悪な空気だった。シュガーローゼは葛藤した。意味のない、葛藤を。何故なら胃を満たしたいという願望があれど、それは叶わぬ願いだからだ。そう、無一文の娘に食べさせるものなどない。盗みでもしない限り。

ものを盗む、それはやってこなかった行為ではない。彼女も、どうしようもなくて、自分が生きるために他人のものをかすめとった事がある。そうせざるを得ない状況だったからだ。しかし今はそうではない。おそらく、あと一日二日耐えられる。人はもっと食事をしなくとも生きていけるだろうが、今のシュガーローゼはそれくらいが限界だった。だからこそ、もう飲食店には見切りをつけて、離れるべきなのだ。これは、無意味にいいにおいを嗅ぎ続けるためにこの場に残るか、さっさと空腹をこらえて丸くなるための場所を探しに引き返すか、そういった内容の葛藤だった。

空腹を気のせいだと思うのには、慣れている。

晩御飯の時間帯だ、人々はシュガーローゼの立つ前の店に押し寄せてきた。背中を押される形で、シュガーローゼはまた一歩、その飲食店に近づいてしまった。危険な行為だ。後ずさると、それでも離れられない自分に気づく。

賑わってきた店内が見える。その店は、男女二人組――おそらくだが夫婦のように見える――によって切り盛りされているようだ。

店の繁盛具合からすれば、どうやら人手不足かのよう。怒号に近い声まで響き渡る。客にも注文したものが来ないと焦れるものがいる。大変そうだ。

シュガーローゼは、それを見ながら自分に入る余地はない、とぼんやりしていた。そうだ、だから、早くこの足を反対方向へと向けるのだ、言い聞かせている自分に聞く気がないのは充分分かっていた。唐突に、ヴィードルが恨めしくなった。シュガーローゼは、もっと少食で、一日一食でも多い方だったのに、あの男が規則正しい食生活を身につけさせようとするかのごとく食事をさせたのが、悪いのだと。

「いい加減にしろよ」

「すいませんが、もう少しだけお待ちください！」

店の者も苛立っていた。大変そうだ。うっかりシュガーローゼに気がついて、うっかり残り物をくれる暇などなさそうだ。馬鹿な考えに、我ながらあんまりだとシュガーローゼは頭を振った。空腹でちょっとおかしくなっているのかもしれない。この程度のすきっ腹など、かつて何度も経験してきたはずなのに。

やはり、逃げないといけないな。シュガーローゼは自分の脳みそが阿呆になりつつあるのを自覚し、すべてをこの目に毒な店の前に居る事が悪いと帰結させる事にした。意識的に、大きく息を吐き出すと、上手くいきそうだった。足が心なしか軽くなったような気さえする。こうばしい食事のかおりの誘惑にも打ち勝てそうだ。

「待て、動くな！」

びくり、とシュガーローゼは身をこわばらせた。まるで、彼女の心の内を見透かしたかのような一声。確かにシュガーローゼは素敵なにおいをさせる飲食店の目の前から逃げようとしていた。

だが、お腹をすかせたいたいけな少女に呼びかけたのではなかった。シュガーローゼにぶつかって、男が一人駆けていった。

「待ちなって言ってるだろう、この食い逃げ野郎が！」

勇ましい怒号だった。それは走る男を見つめるシュガーローゼの

背後から聞こえた。そして、ふいに声は近づいてきてシュガーローゼに何かを手渡した。

「悪い、ちょっと持ってて」

自分の腕に押し付けられたものの正体に気づき、愕然とするシュガーローゼが見たものは、あまりにも勇ましすぎる女性の姿だった。

「このアタシから逃げようだなんて千年早いんだよッ！」

エプロン姿の女性は、唐突に何かを振りかぶると、距離のあった食い逃げ男に向かってそれを投げた。もう夕暮れの過ぎた薄い暗がりの中、何が投擲されたのかと判断する前に、食い逃げ男はそれに当たってぶっ倒れた。口を開けてぽかんとしたのは、シュガーローゼだけだった。それを見ていた店内の客はみな、いつもの事だといわんばかりに、むしろ女性の勇姿を褒めるかのように頷いてみせた。そして、それを気にする風でもなく女性は自分が投げたもので気絶させた男の元へと向かう。どうやら、食い逃げ男はレンガを一つ投げられて、頭に命中させられたようだ。それは、きっと気絶せずにはいられないだろうというもの。

女性が食い逃げ男を引き連れて歩くのを見ていたシュガーローゼだが、急に自分の腕の中でけたたましい音をたてるものに気がついた。赤ん坊が泣いているのだ。それはもう、全身全霊力いっぱい、ちいさな体の全てをかけて。シュガーローゼに押し付けられたのは、なんと人間の赤ん坊だったのだ。取り扱いなど知るはずない彼女でも、取り落としたりなんかすれば、命に関わるかもしれないというのは分かっていた。だから、彼女はどうしたらいいのか分からなかった。泣き叫ぶ、赤ん坊。こんなもの、シュガーローゼがこれまでに押し付けられたものの中にはなかった。自分が、命の象徴のような新生児と対局の位置にいるという事を世界は知らずのうちに理解していたのだから。

「ごめんごめん、もうちょっとあずかっててくれるかな」

おそらくはこの新生児の母親であろう、食い逃げ犯撃退女子は、朗らかに笑っていた。シュガーローゼはもはやどういう反応をすれ

ばいいのか分からなかった。女性のひきずるは、食い逃げ男。店の中まで引っぱっていき、それを椅子に放った。

「この男、食い逃げする店を間違えたな。ジネット」

「違えねえ、運が悪かったとしか言いようがない」

ははは、と常連客たちは豪快にはやしたてる。自然な様子でそれを見過ごし、ジネットと呼ばれたエプロンの女性は食い逃げ男の目を覚まさせるようにして頬をはたいた。

「ジネット」

「ああ、悪いね。フーちゃんもらってきてくれるかな」

「はいよ」

ジネットに命じられ、一人の男がシュガーローゼの元へとやって来た。泣きわめかれて辟易しているはずのシュガーローゼだが、つい身構えるにあたって、かかえた赤子をかばうように抱きしめてしまった。というより、自分が何をかかえているのかを忘れてしまったのだ。

相手は、肩幅が広く大柄な髭の男だった。こちらもエプロンをかけている。顎を覆う髭は、彼の印象を厳つくもごつい、いかにも肉体労働従事者、といった見た目だったのだ。圧倒されてしまうのも無理はない。だが、シュガーローゼが身構えたのは最初だけだった。

「ほらーフルールちゃーん泣かないのー」

それは大の大男が出すには、あまりにも猫なで声に聞こえない猫なで声だった。子をあやす親、それはきっと正しい姿なのだろうが、ここまで低い声で怪しい猫なで声を出さずとも、この男性に赤ん坊という組み合わせは似合わない。その上、破顔したそれは彼にとっても不釣合い。シュガーローゼが頬をひきつらせたのも、無理からぬ事だった。とはいえ、赤ん坊の父親らしき男性は周囲の反応など気にした様子もない。

「もう大丈夫だよー」

赤子に接近する男性に、思わずシュガーローゼが身を引いたところで、やっと彼は自分の子どもを抱えているのが誰かを気にする事

にしたようだ。顔を少し、普段のいかつくごつく強面に戻して、言った。

「妻がすまんな。うちの子をあずかってくれて、礼を言う」

不思議な事に、シュガーローゼはこの男性が顔に似合った表情をしてくれた方が安心するらしかった。彼女も、いささか表情を和らげて、やっとこの腕の中の怪獣から解放される事を喜んだ。父親にそれを押し付けようとして、意外に重たい子どもが自分の事を強く掴んでいる事に気づく。まるで怖がるように泣き叫び続けているのに、シュガーローゼを親だとでも思っているかのようなしがみつき具合だ。なかなか離れない子どもに、少女は顔をしかめた。

「フルールは抱きつき癖があってな、悪いが折角だから寝台に寝かせてほしい」

言うなり、父親は我が子とシュガーローゼに背を向けた。ついて来いという意思表示なのだろうが、納得のいかないシュガーローゼは一時反応をあらわせずにいた。その間泣き続ける怪獣のような赤ん坊を、重たく感じながら。仕方がなしに怪獣の父の後を追う事にした。何しろ、この子どもは自分にしがみついてはなれないのだから。

飲食店の中に入る。そこは賑わっており、テーブルと椅子が、食事を楽しむお客でいっぱいになっていた。そして、奥に進むと厨房がある。ひょいと顔を見せたのは一人の子どもだった。

「あ、パパ」

「サージュ、店の手伝いを続けなさい」

シュガーローゼが追う男性のところへ、顔色を明るくしてやってきたのは五歳くらいの小さな子どもだ。可愛らしい容姿をした、彼の子らしい。小さいながらも少し利発そうな瞳からは、父親に言いつけられた手伝いはきちんとこなせる子どものようだった。「はーい」と返事したその子どもは、父親の向こうに立つ人物にも目をつけた。駆け寄りこそしないが、じっと見つめる目には好奇心とわずかな戸惑いが見えた。きっと、シュガーローゼの腕で泣く赤ん坊が

黙らないから、自分もシュガーローゼを警戒した方がいいのだろうかと悩んでいるのだろう。少なくとも、シュガーローゼにはそう思えた。子どもや母親は、時々すごく外部からの人間に敏感になる事がある。シュガーローゼはそれを知っていたから、この女の子のいぶかしむような瞳も無理はない、そう感じていた。

「髪の毛、きれい」

そっと持ち上げた両端で、サージュと呼ばれた子どもはシュガーローゼを通り過ぎて行った。背後から、「注文うけまーす」という元気なソプラノが聞こえる。

シュガーローゼは、今度こそどういう反応をしたらいいのか分からなかった。いや、それよりもさっきのあれが自分に向けられたものだと考える事自体が間違いなのだと、思う事にした。それで彼女の精神の平定は守られた。

二児の父親に手招きをされ、厨房の端へとシュガーローゼは身を寄せる。ちなみに、この間でもまだまだ赤ん坊は泣き止まないのだ。そろそろシュガーローゼの両腕が涙だか涎だか鼻水だか分からないものでびしょびしょに濡れてきていた。やんわりと冷たい感覚に、シュガーローゼは気が遠くなりそうだ。

よっと、一声気合いのようなものを発すると、父親は他人に張り付く我が子を無理矢理引き剥がした。衣服を持ってかれると思ったシュガーローゼだったが、意外にも赤ん坊は手を放した。それを、父親はゆっくり持ち上げてから、小さな幼児用寝台へと寝かせた。

当然、泣き止まないままの赤ん坊はすぐに寝付くような事はなかったが、父親が液体だらけの顔を拭いてやるといくらか安心したのか、徐々に声を小さくしていった。小さな毛布で、体を包んでやると、赤ん坊は大人しくなって、眠ってしまった。

慣れてしまいそうになっていたが、赤ん坊が泣き止んだ事で騒音は止み、静かになったかのように思えた。とはいえ、客がまだいる店の中ではまだ音が存在したのだが。とにかく、シュガーローゼは重りをなくし、静けさを手に入れたのだと、安堵に肩を下ろした。

「さっきのがサージュ。一番目の子だ。こいつがフルール」
紹介されても、何ともうれしくないのだが、ついシュガーローゼは先ほどまで自分が抱きしめていたものの寝顔を見つめてしまっていた。重たかったのだ。あんなに小さいというのに、しっかり中身のつまった体をしていた。そして、指などシュガーローゼの爪ほどもないのに、強い力でしがみついてきた。生あたたかい、それ。押し付けられた体。どんどんと重たくなっていく赤ん坊なのに、シュガーローゼはどうしてか、奇妙な感覚に突き動かされていたのだ。全身で泣いていて、うるさい事この上ないのに、涙だか涎だかが汚いというのに、いやだとつっぱねる事が出来なかった。手放す事が出来なかった。赤ん坊なんて、手にした事がない。シュガーローゼは、かつてない感覚を手にしていた。不思議だった。しがみついているのはあちらの方なのに、まるで、そう、まるで反対のような感覚を――……。
「おれはトマ。さっきの女房がジネットだ。丁度、女房がフルールをあやしてる最中の食い逃げでな、フルールを抱えたままで店先に出たんだが――まあ、あとはあんたも見た通りだ」
前半は確かに、シュガーローゼも知らなかった事だが、どうやら余計な事に巻き込まれてしまったようだ。あの場所に立っていたのがシュガーローゼでなくとも、ジネットは我が子を他人に押し付けたのだろうし、そうでなくとも食い逃げ犯を捕まえる事が出来そうな勇猛果敢な女性だった。災難に見舞われたというよりも、シュガーローゼはお芝居に借り出された端役のような気分だった。
「侘びといっちゃあなんだが、飯を食ってってくれ」
その申し出を、丁寧にお断りしようとしたところ。まるでタイミングを見計らったかのように、シュガーローゼの腹部はうなった。いつかどこかでした経験があるような――あの時とは違う意味で、シュガーローゼは気が遠くなった。それは、以前のように頑なに拒否出来ないほどに、自分が何かを是非食べたいと考えているのが、分かっていたからだった。これは、もう、返事をしたのと同じでは

ないか。自分の体なのにままならないそれを、後悔しながらもシュガーローゼはトマに連れられるままに食事をご馳走になる事にした。

１００　シュポール食堂１

その飲食店の名前は、シュポール食堂。朝から昼過ぎまで、夕方から夜までの間、飲食を提供している、いたって普通の飲食店だ。内容は、パンや肉料理などの食事から、ぶどう酒や麦酒などの酒類も出している。夜は居酒屋の機能も果たす、夫婦二人で切り盛りする食堂だ。店内は二十人もの人が集まればぎゅうぎゅう詰めの狭苦しい空間になるだろうという広さだが、手入れの行き届いた空間である。

シュガーローゼは、捕り物帖を繰り広げたわき役の一人として認識されていたようで、いくらかの常連客に声をかけられていた。

「災難だったな嬢ちゃん、ジネットのとばっちり受けて」

「今回がたまたまなんて、思わない方がいいぞ。あのじゃじゃ馬、いっつもこうなんだ」

「ま、飯だけは美味いから食うだけ食っときな」

ほかほかと湯気のあがるスープや肉料理を目の前にされ、騒がれる。シュガーローゼの好かない光景だったが、男たちはともかく料理だけはありがたかった。ずっと食事に視線を落としていても、周りの男たちの一部は、まるで返事を待つかのようにしてシュガーローゼを見つめているらしく、視線を肌に感じていた。これは気まずく思うべきで、あら皆さんごきげんいかがとでも返事をすべきなのだろう。だが、あまりこの場に居たくないと思う少女はいっそ早くご飯をいただいて早急にこの店を去るべきなのだとしか考えられなかった。

せめて食事に手をのばそうとすると、まるで一挙手一投足を見守られているかのようか錯覚に陥り、動きが遅くなってしまう。気のせいだと思いたいが、店の客たちはシュガーローゼに何かを望んでいるのだろうか？　社交的な行動を？　好意的な態度を？　真っ当な人間らしいお返事を？　そんなものは、くそくらえだった。黙れ、

寄るな、よっぽどそう言ってしまおうかと思った。
「いい加減にしなアンタたち！　誰がじゃじゃ馬だって？　飯だけは美味いだって？　飯は当たり前だろ！　アタシが作ったんだからね！」
「げっ、ジネット」
ハエでも追い払うかのように腕を振るうと、ジネットは大事なお客様を蹴散らした。うるさそうな顔をしながらも、誰も彼女に反論をして怒るものなどはなかった。
店の料理人でもあるジネットはまた一つシュガーローゼの前の机に料理を載せると、気安そうに微笑んだ。巻き毛の黒髪を一つに束ねて背中に流してある。ジネットは女性にしてはやや背が高く、そして肩幅も広かった。だが男性的であるとは言えない。鋭利な刃物を思わせる眼差しと、凛々しい眉。しかし微笑むと母親のように穏やかでいたわりのあるあたたかい女性だとよく分かる。改めて見たジネットは、シュガーローゼから見ても芯のしっかりとした凛とした女性だった。
「悪いね、うちに来るのはバカばっかりで。気にしないで」
シュガーローゼはどちらかというと、さっさとこの店を出て行きたいのだが、店主と同義の女性がやって来た事で、それは叶わぬ願いになってしまったのだと気がついた。
「あの子も預かってくれてありがとうね、丁度いいところに居たもんだから」
あ、はいそれよりもご飯食べてもいいですか。さすがに少女はそれを飲み込んだ。
「ジネットはいつだってこうさ。嬢ちゃんじゃなくて皇帝陛下が立っていたって子どもを任せたに違いない」
「そりゃ面白い。簡単にそれが思い描けるな。陛下ご機嫌麗しゅう、うちの子あずかっててください、ってな！」
「アンタたちね……」
話題の渦中の人物を前にしての男たちの軽口は、しかしジネット

の怒りを買ったようだ。彼女の方も本気で怒っているわけではないが、本気でなくとも彼女は得意の鉄拳を食らわす事になどためらいはない。それをよく知っている彼らはすぐに口をつぐんだ。だが笑いだけはかみ殺せない。にやにやとした男たちをジネットはどうしてやろうかと思案した。

「おいそこの坊主、その男捕まえておいてくれ！」

途端、鋭い声が飛んだ。半分忘れ去られていた食い逃げ男がふらふらと立ち上がったのを、トマは見逃さなかったのだ。ちょうど、店に入ってきた人物が捕縛するにはいい場所にいたので、シュガーローゼにしたのと同じ要領で声をかける。ジネットが素早く反応して食い逃げ犯の元に駆ける。もっとちゃんと警戒しておくか、早くに役人にでも突き出せばいいものを、シュガーローゼもつい振り返ると、そこには焦げ茶色の長い前髪の少年の姿があった。少年が言われた通りに食い逃げ男の腕を捕まえていたところにジネットがやってきて、引き渡す形になる。

「懲りない男だね！　鉄拳喰らいたいのかい？」

その時のジネットの拳が通常よりも巨大化し、炎を帯びて見えたとか見えないとか――。

それはさておき、またしてもお早い再会にシュガーローゼは顔をしかめ、人影に隠れてレフ少年をやりすごそうとしたのだが、ジネットが蹴散らした常連客は近くにおらず、また先ほどまではちょうどよい障害物となっていたジネットもいないので、顔をそむけるぐらいしか出来なかった。当然、障壁のない空間ではピンクゴールドの二つ結びはよく見える。

レフは、ジネットが食い逃げ犯を引き受けたので自由となり、目当てのものを見つける事が出来た。背後にしのび寄ると、その腕を食い逃げ犯にしたのよりも強い力で捕まえる。

「すげえ探したんだからな。何してんだよお前」

この広い帝都で、何という確率でやってきたのだ。別れたのは――正確にはシュガーローゼが迷子になっただけ、かもしれないが――

―そう昔の事ではないのだから、いつぞやアストリュクがレフを拾ってきた時よりかは、まだおかしな事ではないのかもしれないが。そういえばアストリュクとヴィードルはまだ同行しているのだろうかと、レフを無視したい気持ちを抑えてシュガーローゼは店の入り口を見た。探した顔はなく、どうやらレフ一人のようだった。相変わらず長い前髪のうっとおしい少年。その下で静かに怒りをたたえた琥珀の瞳を閃かせているように見えた。しかし、シュガーローゼが自由にして、一体彼に何の関係があるというのだ。仔細は知らぬがレフの主張はよく聞いているというのに、本当にうんざりしていた。

「おい、坊主。ナンパか？　やめときな」

ずいとシュガーローゼの前に出てきたのは、かなり上背のある髭面の男がレフを見下ろして威嚇する。シュポール食堂の店主トマは、少なからず恩のある少女が見知らぬ少年によからぬ誘いを受けている、と判断したようだ。髭のごつい顔で太い眉と牙を向くような尖った眼光を向けられては、レフもたじろぐしかなかった。それほどトマの顔は他者を睨む顔つきが似合っていた。後ろめたいところなど――あるにはあるが――ないはずのレフも背筋に汗をし、すいませんでしたと謝りたくなるような恐ろしさなのだ。

「え、ナンパじゃなくって――」

「ああん？　なんでえ坊や、アンタもこのすっとこどっこいと一緒に役人に突き出されたいかい？」

ジネットに包丁を突き出されて凄まれ、彼女も旦那に負けない鋭い眼光で推定ナンパ少年を威圧した。何故か、奥さんの方がいささか柄が悪い。レフは何と説明したらよいか迷い、シュガーローゼ自身に誤解だと証明してもらおうと彼女を横目で見るが、少女はふいと首を回してしまった。

「よし、じゃあ“臭い飯”食べに行こうか」

虫けらを見る目でジネット、無実の少年の肩を叩く。言うまでもないが、臭い飯とは彼女の店の料理ではなく牢屋の食事を指す。

「いやいやいや！　誤解っすよ。ちょっと、お前も黙ってないで何とか言えよ！」

はたと少女の頭にこのうっとおしくもしつこい、死神を自己の利益のために利用しようとする少年を永遠に遠ざける方法が思いついた。黙っていよう、絶対に。

「おいこら！」

「ジネットよ、トマもだが……誰彼かまわず牙をむくのはやめな。もしかしたら、その坊主たんに嬢ちゃんに恋してるだけかもしれねえだろ」

「はは、いいね。青春だね」

叫ぶレフに観客（ギャラリー）が増え始めていた。その上余計な茶々を入れる始末。

目を剥いたのはレフ坊主。何を言い出すんだと周囲を威嚇する。いささか顔が赤い彼は動揺を隠そうとして声を荒げる。

「んなっ、違え！　誰がこんな愛想のないブス！」

しん、とシュポール食堂は静寂に満ちた。指を指された少女は、白けた顔で眉を持ち上げていたが、さほど気にした様子はない。当然、内心は苛立ちと罵倒でいっぱいだったが、レフがまともな対応が出来るとは期待していないので、そんなものだろうと思っていたのだ。悪態は本当に腹が立つが、レフのそれはあまりにも子どもっぽいために、かえって軽口の延長のように思えていたせいもある。ブスって、五歳児か。

後で蹴るくらいは思っていたものの、当事者のシュガーローゼが平然としているのに比べれば、周りの反応こそが過激だった。まずは、かつて女たらしで名を上げた染物屋のドミニクが立ち上がった。

「かわいいお嬢ちゃん捕まえて、聞き捨てならない台詞だなあ……？」

「ナンパの上に最悪だね」

「坊主、表に出るかい？」

食堂はレフを敵と見なした。やばいと思った頃にはもう遅く、レ

フは大勢の男たちに睨まれる事になる。視界の端のシュガーローゼが「ばかめ」みたいな勝ち誇った顔をしているのが、また憎たらしい。何故こんな事にと叫びたい少年は、しかし肩を強くジネットに押さえつけられているのでそれが不可能だった。それどころかジネットはいじめっ子みたいな顔で少年を連行しようとしている。

「だから、今のはその、ちが、オレあいつと知り合いだし……！」

そんな事は関係ないと、レフの失言を許さぬ人間たちにどんどんと追いつめられて壁までやってきた少年。先ほどよりも事態は悪化している。少年は、ふと気がついた一つの可能性にかける事にした。シュガーローゼを一瞥して、口を二・三度開け閉めするとロクでもない事を言い出す。

「あいつの名前も知ってる、シュガーローゼ。それに、あいつは死神――」

がたん、と物音がした。レフはにんまりと口で弧を描く。のってきた。

「それ以上言ってみな――」

吹雪さえ従えていそうな少女の変貌に、いささか周囲はたじろいだ。だがレフは黙った。シュガーローゼはそのまま、少年のところへと少し足を伸ばす。

「言ったらなんだって？」

一触即発という雰囲気の二人の少年少女、観客は彼らの間で首を左右させる。シュガーローゼの弱点を握った気になっているレフは、長い前髪の下で挑発するような顔をしてみせた。

「こ――」

「なんだ、痴話喧嘩か」

水をさしたのは、かつての女たらしのドミニク。齢（よわい）五十にもなるこの男は、男女のいざこざに居合わせてきた経験が豊富だ。そういう勘違いをしてもおかしくないほどの回数を彼は、結局は痴話喧嘩で終わる恋人たちの矢面に立たされてきた。かといってその経験が生きるほど勘が鋭いというわけではないようだが。

「「違う！」」

案の定、好意を抱いている者同士のたあいもない喧嘩をしていたのではない二人に睨まれたドミニクであった。

１００　シュポール食堂１（後書き）

いつもご覧いただき、ありがとうございます！
今回の更新でこのお話は百話目達成となりました！
記念すべき百話！
特に何も特典は用意してございませんが、ここまで更新をがんばってこれたのも、ご覧くださっている読者様のおかげです、ありがとうございます！

百話目がそれなりにほのぼのと（？）した回で、何かこう……むしろよかったです。
まだまだこの話は折り返し地点にもいけてませんが、今後もがんばっていこうと、気を引き締めてかかる所存であります。
更新は遅くなりつつありますが、
今後もがんばっていきますので、よろしくお願いします！＾＾

１０１　シュポール食堂２

結局のところシュガーローゼの意図からは外れ、いつの間にかレフナンパ男疑惑は忘れ去られた。あえて知らない相手の振りをするのも面倒になり、食事をしたいシュガーローゼはそれを実行に移す事にした。

「美味いかい？」

ジネットは自信満々なので、シュガーローゼは頷いた。シュガーローゼは味の分からぬ少女だったが、それでもまずいとは思わなかったので嘘ではない。いつからだろう、少女の舌はまともに味を拾う事がなくなったのだ。しょっぱいとか甘いとか、そういうものは感じるには感じるが、味に深みなどなかった。舌に見えない布でも敷かれているかのような、味覚に距離を置かれたような感覚があるのみだ。それでも、彼女はきっと美味しいのだろうと思えていた。

あたたかいスープは冷めたものより美味しいだろうし、他の料理だって出来たてだ。帝国に来るまでの間口にした携帯食などのぼそぼそとした乾燥した様子と比べれば、まともすぎる食事だ。礼を言うべきなのはシュガーローゼだろう。言い出したのはあちらだが、それでも。

「あの……」

シュポール食堂の女将は身の内側からあふれるような魅力を持っていた。それはシュガーローゼには到底持てないようなものだった。羨望にも似た気持ちが少女の中で小さく胎動する。しかし、憧れは、希求する思いは、届かなければ拒絶したくなる、反対の気持ちも引き起こす。シュガーローゼにはない、普通の日常、あたたかな家族、常連客、美味しい食事、それから彼女自身の満ち足りた様子。

遠い。ジネットが遠いのだ。

知り合ったばかりなのに、ジネットはシュガーローゼより遠ざかっていくのが分かった。少女は口を動かし続ける事が出来なくなっ

てしまった。何を思えばいいのだろうか。むなしさだろうか。ただひとつ言えるのは、シュガーローゼが彼女に強くかかわってしまったら、がっかりするのはシュガーローゼだろうという事。自分自身に幻滅させられるのだ。

「おかわりかい？」

なかなか続きを言おうとしないシュガーローゼにもジネットは優しく応じてくれた。それも、まるでシュガーローゼを満腹にさせる事がジネットの至上の使命だとでも思っているような笑顔で。

ああこの人は、やはり違う――。

ずしりと落ちる、シュガーローゼの中の重り。当たり前だ、誰だって同じ人間などいない。しかしそうではない。ジネットはどうしても光の中が似合う存在で、自分は――。

その時、やや間の抜けたような声がシュガーローゼの耳に入ってきた。

「は？　うちで働きたい？」

「あつかましいお願いとは分かってます。でも、食い逃げ犯を捕まえやすくするには、もっと人手の多い方がいいかと思いまして」

なんて事を言い出すのはレフという少年だった。またあの――アストリュクとは違った意味での――問題児は何をと、視界の端の少年をシュガーローゼも見やった。トマと話す彼は、どうやら仕事の場を探して、シュポール食堂に求めたようだった。

トマは妻にと視線をあげた。彼らは夫婦共同で食堂を経営している。お互いにちゃんと納得のいくまで話し合うというのが彼らの間の取り決めだった。

「オレ、何でもしますよ。一応体力もあるつもりなんで、力仕事も全然構わないっす」

自分の売りをアピールし、レフは自信たっぷりに口角を上げてみせた。それから、さりげない調子でくるりと首を回し一人の少女へと話を放る。

「そういえばこいつも働きたがってましたよ」

少年の琥珀の瞳は、いっそ優しそうに見えた。余計な優しさは時には優しさにすらなれないというのに。

「はああ？！」

またお前か！　とシュガーローゼは頭を抱えたくなった。いつもレフは、シュガーローゼの意思など関係なしに事を運ぼうとする。自分勝手な事ばかりを口にする。大方、自分の目的のためにシュガーローゼが近くにいた方が都合がよいから、自分がここで働くならついでに彼女もと思っての事だろう。いくらなんでも勝手すぎる。

それでもシュガーローゼとて、そろそろこの帝国では何かの職に就くべきではないかと思いかけていた頃なのだ。それがどれだけ嫌かどうかは別として。

新しいコミュニティに入るのは、常に面倒事が山盛りになる。自分は相手の事を知らなくて、相手も自分の事を知らない。そんな人間がたくさんいるのだ。自分は相手の事なんて知りたくもないし、きっと相手だってお義理でしか自分に興味を示さないだろう。それなのに、まるでそうしなくてはならないと法律で決められているかのように、はじめまして、私の名前はこれこれこういうもので、年はいくつ、どこどこに住んでいました、なんて自己紹介をしなくてはならないのだ。はじめまして、わたしは死神です。なんていう紹介をしなければならない、そんな自分に何が言える？　そもそも、そんな自分がコミュニティに加わるべきではないのだ。

生きていくには必ずお金が必要で、そうすべきなのはよく分かっている。それが嫌なら死にでもすればいいのにしないなら、やはり稼ぐ必要がある。そこには絶対に戻ってくるしかないのだ。ならば少しでも円滑に物事を進めるのが人間というもの。

だが、シュガーローゼに人間らしさなど必要なのか？　人じゃないのではないか。

お金を稼ぐ必要性はある。だが、深入りなどは決してしない。それでいいではないか。自分でもそう思うのだが、どうしてもシュガーローゼは人の間に入り込むのが嫌だった。仕方がないから、否定

はしない。だが同意をするのはひどく難しく、簡単に「働きたい」などと言えるレフがいっその事うらめしかった。

「それは助かるわ。正直、人手が足りないと思っていたところなんだよ」

にこにこと、ジネットはうれしそうにした。

「今、うちは子どもが二人いるでしょう、それをかまってやれないのに、嬉しい悲鳴だけど、最近けっこう客入りが多くて。どちらも上手くやれる自信がなかったんだよ」

もうレフだけでなくシュガーローゼまでこの食堂で働く意思があると思い込んでいるような口ぶりで、ジネットは続けた。

シュガーローゼは彼女の顔を直視する事が出来なかった。何故なら、果たすべき義務をここにきてまだ拒もうとする自分と、しかし彼女一人ではきっときちんと働き口を探す事が出来ないと知っているからだった。ジネットを、シュポール家を受け入れきれない自分でありながらも、確かに必要なものを拒もうとする自分がとても愚かしく思え、また、他人（レフ）の力を借りなければ——それもあちらに気を使われている——何も出来ないかのような自分を恥じた。こんな自分は嫌だった。いつも諦める、変わりたいという思い。それは久しぶりにやってきた。訪れてしまった。真っ当な人間たちの間に居すぎたせいだろうか？　まるで、自分が“死神”なんかじゃなく、気持ちの持ちようで違う人間に変われるかのように思えてしまうのは。そんな事は、シュガーローゼが“死神”でなくなるのと同じくらい、無理だと分かっているのに。

穴があったら入りたい。そういう慣用句がぴったりの気分でシュガーローゼは、今すぐ自己嫌悪を虚空の彼方へやってしまわなければならなかった。そうしなければ、うっかり自分の事を殺したいくらいに情けなく思っている事を、顔の上にあらわにしてしまいそうだった。

泣いてしまいそうだった。簡単に手をさしのべてくれる存在が、いつか裏切ると分かっていても、まるで幸福の象徴のように思えて

しまい、シュガーローゼはまた信じてしまいたくなる。いつだって、「優しい人」は居るのだ。存在する、確かに。それでも、その好意の対象になるのがシュガーローゼであったなら、いつかそれは好意でなくなる。そういう未来が約束されているのが“死神のキス”を唇に宿す少女の約束事なのだ。

きっと変わってしまうんだ。彼らが優しいのは、最初のうちだけだ。シュガーローゼには人に好意を向けられるような存在ではないのだ。

でも、変わりたい。何にも出来ない自分、“死神”である以前に、人としてすべき事も成せない自分から、脱却してしまいたい。逃げるのではなく、今の状態から、変わるのだ。

相反する心は、どちらも正直なシュガーローゼの気持ちだった。

変わりたいのに、“死神のキス”だけじゃなく、自分の弱い部分が全身で拒否をする。いや、そもそもシュガーローゼの中に、強い部分なんか、あった事があるのだろうか？　そんなもの存在しないからこそ、彼女は全て遠ざけてきたのだ。

言葉をつむぐ事さえ難しいのに、今の気持ちときたら全くのぐちゃぐちゃだった。それでも、ジネットやシュポール家の面々はシュガーローゼの返事を待っているかのように彼女を見ていた。

今すぐ、ここを逃げ出したい。誰も、自分にかまってくれなくていいのに――。視界に入れないでほしい。存在を、認識してもらっては困る。まるで、わたしを真っ当な人間と見なしているかのような瞳をひらめかすのはやめてほしい――。

「わ、わたし……」

声が震えた。頷いてしまえ。逃げ出してしまえ。誰もかまわないでくれ。誰か、助けて。

「やるよな？」

あまりに簡単に少年が目を向けてくるものだから、全て放り出して逃げ出したいとまで思ったシュガーローゼは、「あ、うん」と答えてしまっていた。それは自分の口から出たにしては、なめらかで

ためらいなどなさそうだったが、シュガーローゼは反射的に口を開いていたのだと、よく分かっていた。だからこそ自分の口が他人のもののようだとは感じなかったのに、それでもまるで自分以外の者の意思で動かされているようだとも感じていた。ただ、レフが少女の迷いなどまるで存在しないかのように振舞ったので、彼女もそれを信じてしまいたくなっただけかもしれない。あまりに呆気ないはじまりだった。

「そりゃいい！　助かるよ。ただ、給金はたんまりってわけにはいかないだろうけど、それでもいいのかい？」

実質的な店の主はジネットである、とでも言うかのように彼女は手を叩いて話を先に進めた。

「オレ、別に大金を稼ぎたいわけじゃないからいいんです」

帝都でこんなにも簡単に仕事が見つかるとは、レフは思ってもなかった。チェルヴォでは住所不定の年若い子どもを雇ってくれる場所といえば少なく、あったとしても日雇いぐらいしかなかったのだ。

「それに、えっと、いいんすか、オレたちみたいな他国の人間を」

言ってから、しまったとレフは慌てた。余計な一言だった。それは自分の心の中にしまっておくべき事で、それはそうだ怪しいから雇うのはやめておこうとでも切り返されでもすれば、折角の話が水の泡だ。

「赤ん坊の面倒を見てくれたり、食い逃げ野郎を捕まえておいてくれた」

それを口にしたのは、真の食堂の主であるトマだった。確かに、それらは異国の二人がやってのけた事ではあるが、そんな簡単な事で他人を信用してもいいのだろうか？　シュガーローゼだけではなく、レフも相手方の様子に呆れそうになった。

「それに、ちゃんと信用するのはあんたたちが働きはじめてからだよ。根性がないならやめてもらうし、何か悪さするつもりならすぐに番所に突き出すからね」

シュガーローゼは明らかに鈍器になるレンガを、ためらいもなく

食い逃げ犯に投げつけたジネットの姿を思い出していた。彼女なら、予告なしにやってのけるだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9799n/

死神少女

2011年11月4日01時09分発行